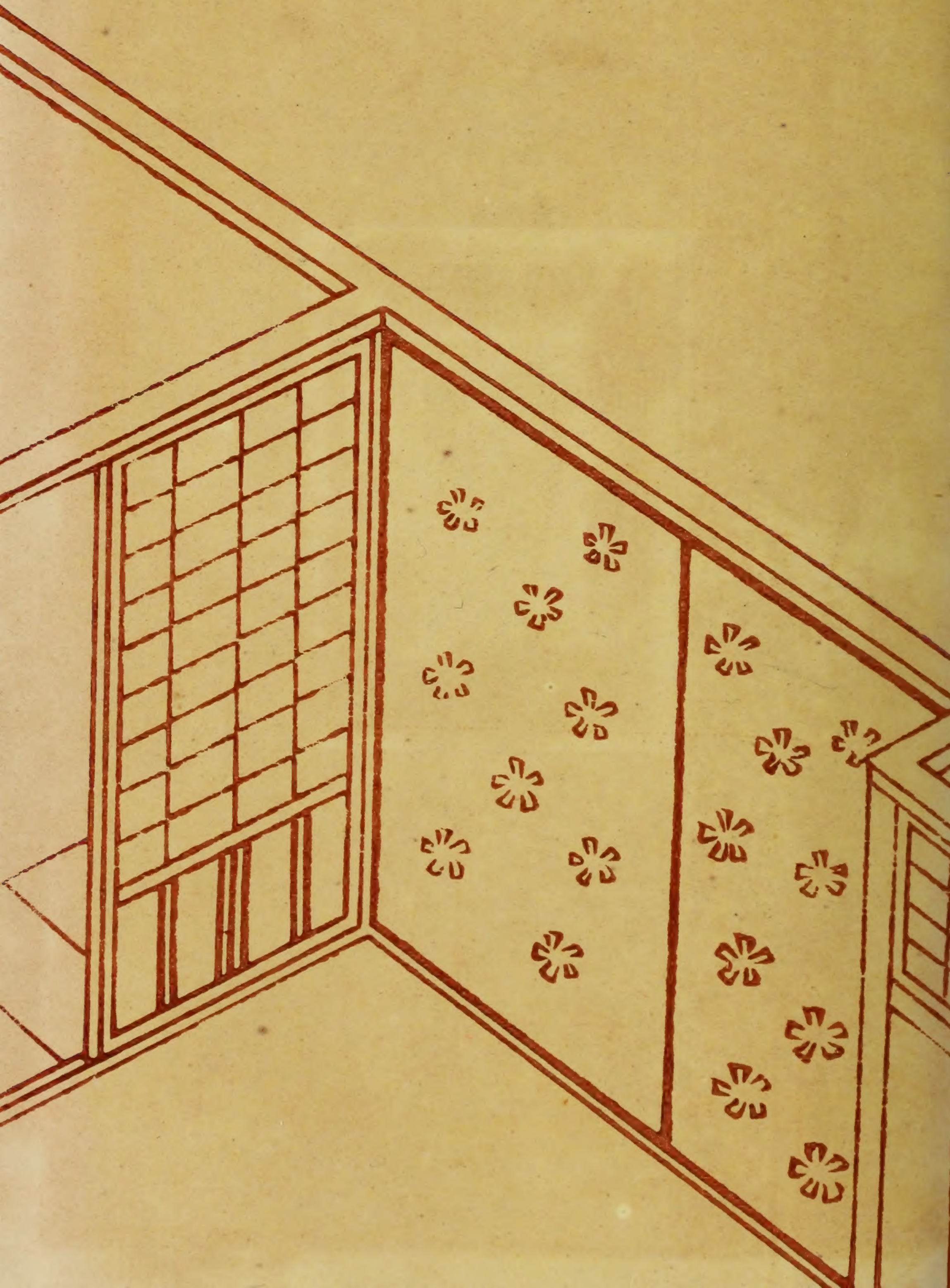




大南北全集

第八巻

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

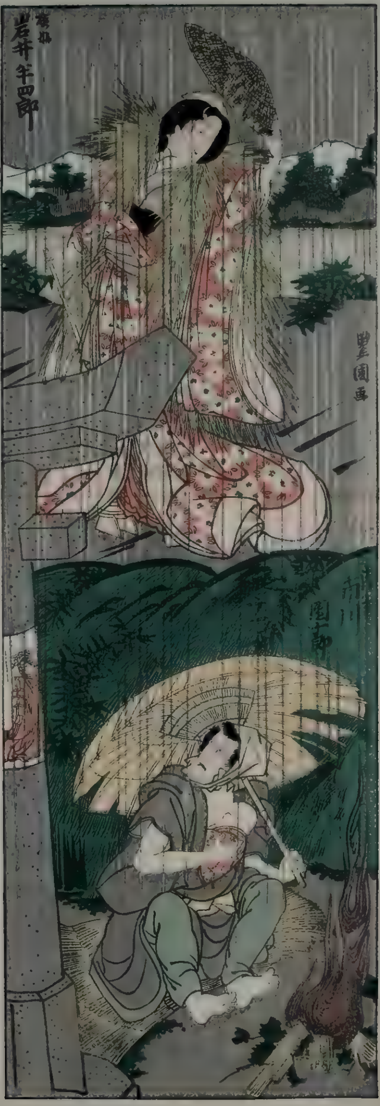
大南北全集 第八巻

東京 春陽堂刊行

大南北全集　第八巻目次

挿繪目次

挿繪目次


岩井半四郎
豊国画
市川團十郎



解說及年表

櫻姬東文章

「櫻姬東文章」は文化十四年三月、河原崎座に書きおろされた彌生狂言で、清玄櫻姬を書替へたものである。櫻姬を、類型的のお姬樣でなく、普通の女性、といふよりも、寧ろ淫婦的に取扱かつたのも變つてゐるし、釣鐘の權助といふ敵役を創造し、これに可なり深刻な性格を與へて、狂言廻しにさせたのも面白い。割合に淸玄だけは、在來の役と似てゐるが、それでも櫻姬の手にかゝつて死ぬなぞといふ結末は、南北獨得の手法に繰られてゐる譯である。この脚本は、南北の作の中でも、傑作の部に數へていゝ。

權助は全く作者が案出した役であるが、公卿の娘が小塚ッ原の女郞になるといふ、奇拔過ぎる櫻姬、この役にはモデルがあつたのである。それは初演の時よりも十年前、文化四年に事件を起した女で、小塚ッ原ではなく、品川であつた。品川の、屋號は判然しないが、安右衞門といふ主人の女郞屋に、おこととといふ女郞がゐた。これが、自分は京都の日野中納言の娘だと云ひ立てゝ、世間を騷がした事件があつた。文化四年四月十八日に申し渡された奉行所の判決文が、蜀山人の「玉川砂利」に載つてゐるから、

その全文を爰へ掲載しよう。

淺草源空寺門前
久藏店善兵衞養女に成
人別に不相加候

こ　と

右のもの儀、京都表糺之上、日野家息女に無之段相分候上は、日野家息女と申分難立、善兵衞養女に相成、後人別にも不加身分にて、同人を若狹と改め、家來體に仕成、和歌を認候節は、正二位又は右衞門と書記、殊に捕方御役人へ、日野家息女之由申聞、最初御奉行所へ罷出候節は、冠下之由にて髮を下け、しゆかいと唱候由にて、紫縮緬を以鉢卷いたし、日野家息女にて正二位左衞門式部內侍局と成由申立、其後吟味之節に所々相違之儀申立、又は品川宿旅籠屋安右衞門抱飯賣女に成候節は、五郎兵衞娘之由申僞、奉公中一旦家出致、始末不屆に附重追放被仰付候

善　兵　衞

右之者儀、品川宿旅籠屋安右衞門抱、飯賣女ことを得と身元も不相糺、養女に貰請人別にも不加、殊に同人は日野家息女の由にて、善兵衞儀若狹と改名致候樣、任申改名いたし、且こと儀日野家

息女と乍心得、可訴出心體も無之、家來體に成附添歩行、又は最初吟味之節、ことと申口を合せ
　一旦相違之儀申立候始末不埒に附、手鎖被仰附候

品川の女郎が、公卿の娘と稱して、官女のやうな服裝をしたり、客に官位を記して和歌を書いてやつたりしたのだから、隨分珍らしい。奇拔きはまるこの事件は、珍らし物好きな、退屈で困つてゐる江戸の人達を、どれ程驚かしたか、想像にあまりある。芝居には持つて來いの材料、南北なぞも脚色したかつたらうが、時事問題や三面記事を種とする事は、表向き堅く禁じられてゐた事であるし、裏を潜つて暗示的に脚色してさへ、南北自身も一二度、その筋の注意を受けて、失敗してゐた位であるから、餘りに有名過ぎたこの事件には、ちよつと手が下せなかつたのであらう。當時の芝居にも小說にも、一向仕組まれたらしい形跡はない。

流石に十年も經てば、その筋でも睨みはしない。南北は、目千兩の五代目半四郎を活躍させねばならぬこの機會を得て、清玄櫻姫の世界を借り、取つて置きの右の材料を仕組んだのである。この時の河原崎座は、俳優に人なく、七世團十郎と、五世半四郎の二人が、大働きに働かねばならなかつた。無人芝居の方が作者にとつては却つて都合がよい。南北は、座頭の團十郎に、清玄と權助の二役を與へて、思ふ存分に活躍させた。半四郎の櫻姫は、元より切つてはめた役、俳優に豐富なこの時代と雖も、姫君か

ら女郎に變るといふ、難役を演じおほせる女形は、この半四郎ばかりであつた。

この通し狂言を演じた上、二番目には、五節句の所作事を五段返しの大仕掛けで出し、矢張り團十郎と半四郎が踊りぬいた。一、二番目とも利いて、無人ながら芝居は、興行成績大成功であつた。この時代は、堺町葺屋町に中村座市村座が並び、河原崎座は森田座の扣へ櫓で、これだけ飛び離れた木挽町にあつたのだから、地理的關係の不利から、兎角に不利が續いたのであつたが、それを無人の一座で大入りを續けたといふのは、普通にいふ成功以上の成功だつたのである。

この狂言の三幕目は、ちよつと挿話といふ格で、筋の關係はあるが、稍別物の觀がある。院本からでも轉化したやうに思へるが、不明である。それにしても、短かい幕ながら一種變つた味がある。

本卷に收めた臺帳の定本は、河竹繁俊氏の藏書で、默阿彌自身がその一部を手寫した寫本であつた。震災前、わたしが借用して、寫して置いたのが役に立ち、原本は燒失したが、兎に角世に出す事が出來た。その原本に、默阿彌自筆の、簡單な手紙が挾んであつた。それは、この三幕目を、一幕物に脚色し直したら面白い狂言が出來るかも知れない、どうであらう、といふ意味で座元へ伺ひを立てた手紙であつた。さういふ狂言は興行されてゐないし、手紙がそのまゝ挾んであつた所から見ても、それは默阿彌

の腹案だけで、座元へは相談せずに終つたのかとも思ふが、兎に角默阿彌が目を附けた位の一幕なのである。それは、いつ頃の事か判然しないが、郡治兵衞の役を女に直して團藏にさせ、半兵衞を成駒屋、半十郎を若太夫に振つたらどうかといふ、役割の腹案まで附いてゐた、その顏觸れから想像して見ると、文久元年の事らしい。

この狂言で、權助の役は立敵である。また、淸玄の庵室は、本所の岩淵といふ事になつてゐる。第三卷に收容した「勝相撲浮名花觸」にも、足駄の齒入れ岩淵の權助といふ敵役が出てくる。南北は、深川に住んでゐたから、川向うの地理には詳しかつた爲であらうか、兎角に場所を本所深川に取つた。「四谷怪談」にも砂村の隱亡堀や、深川の三角屋敷が出てくるやうにである。それにしても、權助といふ役名も好きだつたと見えて、この二狂言以外にも、權助といふ役を度々使つてゐる。選りに選つて、權助といふ名が好きだといふのも、南北らしくて面白い。

葛飾のお十といふ年增役を勤めたのは、五世瀨川菊之丞であつた。菊之丞は、半四郎に引立てられて名女形に成り得た人であるが、この時には僅か十六歲だつたのだ。十六歲で、あゝいつた傳法な年增役

を演じたといふのは、いかに先輩の引立てがあつたとはいへ、破格な事である。それを演じこなした菊之丞も、この時代から凡手ではなかつたと見える。また、白菊丸と半十郎の二役を勤めてゐる岩井松之助は、半四郎の實子で、後に七世岩井半四郎を繼いだ人であるが、この時が十四歳である。半四郎は四十二歳である。さうして、座頭の團十郎は、まだ二十七歳の若者であつた。

役割は左の通りであつた。

建長寺の自休後ニ新清水の清玄法師。中間、釣鐘權助實ハ信夫の惣太。稲野谷半兵衛（三ヤク市川團十郎）吉田息女櫻姫後ニ千代倉の風鈴お姫（岩井半四郎）稚兒、白菊丸。稲野谷半十郎（ニヤク岩井松之助）郡治兵衛娘、小雛。葛飾のお十（ニヤク瀬川菊之丞）粟津七郎俊次後ニ有明の仙太郎（荻野仙花）山田郡治兵衛（荻野伊三郎）入間惡五郎（大谷鬼次、淸水寺一萠、殘月（大谷馬十）局、長浦（惣領甚六）吉田松若丸（市川茂々太郎）松井源吾貞景（坂東又十郎）吉田下郎、軍助 淺尾勇次郎）軍助女房、おしげ（岩井かほよ）

この狂言は再演されなかつた。

四天王産湯玉川（してんわううぶゆのたまがは）

文政元年十一月、玉川座に上演された顏見世狂言である。葺屋町の市村座は、借財のため經營困難となり、一二年は都座の名儀で興行してゐたが、それも行きつまつて、この顏見世からは玉川喜十郞の座元と替り、座名も玉川座と改まつた。その初興行がこの狂言である。初興行なるがゆゑに、狂言名題にまで座名を讀みこんである。

趣向は、例に依つて例の如き顏見世式ではあるが、隨處に南北獨得の奇智が閃いてゐる。一番目は大體、平凡な手法で、蜘蛛の淨瑠璃までは、型の通りといつてもいゝ。尤も、だんまりを火葬場にして、良門の死骸が衣類に火の燃えついたまゝ、一卷の德で蘇生するといふ趣向は、大まかな斯種の演技に、妙な實感味を加へたもので、聊かそぐはぬ感もあるが、これとて南北が飽くまで新奇を案じる苦心の結晶で、絕對に火を忌むこの社會に、火を使つて喝采を得ようとした南北の遣り方が實行に及ぶまでにはかなり面倒な經緯があつたらうと想像される。

五建目からは、いよ〳〵南北らしい舞臺が現出してくる。土手の上の蒲鉾小屋に、非人姿の大勢が集まつて、襤褸の上へ裝束をまとひ、位定めの儀式を行ふといふ趣向は、南北式を遺憾なく發揮したものである。こゝへ鐵門鬼兵衛が出て、今まで笏を構へてゐた良門に、いきなり雪駄直しをさせるといふのも

奇拔な幕切れであるし、第一この良門が、實は純友の娘桔梗の前であるといふ筋も、面白いと只いふより、役者の特質を知りぬいた南北の書き方に、敬服するより外はない。桔梗の前を演じた五世岩井半四郎は、美貌の女形のみでなく、實に朗々とした美しい調子の持ち主であつた。その調子を利用して、女形に立役をやらせ、一番目の大詰で、眞の良門へ名乘る所で「相馬の良門……とモシ、お名乘りなされて下さりませ」と男から突然に碎ける變り目は、實に鮮やかなものであつたといふ。男から女に變つてもをかしくないやうに、千代姬の小袖を利用するところなぞは、南北にとつては何でもなからうが、小憎らしいほど至れり盡せりの技巧である。

この大詰も、南北一流の舞臺である。酒呑童子がいつも現はれる大江山を、思ひ切つた切り見世にして、しかも洞窟の面影をとどめ、世話と時代を一場の中で、巧みに色分けにしてゆく手際なぞは、南北物に見馴れた人には、奇想天外といふ程感じもせぬが、初めて見た人は、煙に卷かれてしまふであらう。渡邊の綱を、鉢卷で金棒を曳いて、上使に寄越すなぞも、外の作者には出來ない藝である。綱と鬼兵衞とが向ひ合つて、世話から時代の臺詞に移り、また世話に碎ける件なぞは、さぞかし見物を唸らせた事だらうと思ふ。元來、顏見世狂言の一番目大詰は、金襖の御殿ときまつてゐるのであるが、「暫」を二番

目に出すほど、この狂言は格を破つてゐるのであるから、一番目も次手に前例にない大詰を附けたのであらう。

さて二番目である。この狂言の二番目こそ、全く南北でなければ書くことの出來ない一幕である。

まづ何より、俳優の私的生活を舞臺に取つたのが面白い。それも當時の、しかもその座に出てゐる俳優の家庭を見せたのが面白い。七世市川團十郎が七世市川團十郎に、五世松本幸四郎が五世松本幸四郎に扮するのだから面白い、勿論多少誇張した、美化した點もあるであらうが、當時の七世團十郎の家內は、あれに似たものであつたに違ひない。顏見世の前夜の混雜、俳優の出入り、茶屋の賑はひ、大部分は慥かに當時をその儘の描寫である。そこに非常な興味があると共に、一種の風俗志料ともなる。しかも、顏見世狂言の規則によつて、世話から時代へ戻るといふ形式は破つてゐない。團十郎の內へ手打ちに來た男は、いつの間にか伊賀壽太郎成信となり、弟子の俳優から茶屋の女中までが、それ〴〵一番目の世界に通じる本名を持つてゐる。主人公の團十郎も、碓氷貞光の名で「暫」に現はれるが、團十郎だけは、本名が碓氷貞光なのかさうでないのか、曖昧としてゐるところが却つて面白い。

「暫」を芝居茶屋の二階で演じるといふ趣向は、當時の觀客の腹を抉つた南北の思ひつきであつた。毎年々々吉例とあつて、顏見世毎に「暫」は出てゐるが、いはゞ形式だけであつて、化政度の人達は、荒事なぞに感激するほどの幼稚ではない。たゞ因習に引摺られて、演じもするし、觀もしてゐた。南北が立作者になつて以來、「暫」には種々な趣向を加へて、兎に角その思ひつきで客を繋いでは來たが、「暫」を一番目三建目に演じるといふ規則だけは破り得なかつた。それを、この狂言ではぶち毀して、二番目へ持つて來た。しかも劇中劇といつた奇拔な遣り方で、團十郎が唐人へ馳走に「暫」を見せるといふ筋にして、後に舞臺でその扮裝を解き、素顏になつて見せた時には、俳優本位の當時の觀客は、どんなに狂喜した事だらう。またウケを菊之丞の女唐人にして、それが實は奥女中の假裝といふのも面白いし、幸四郎を繪坊主に使つたことも皮肉である。繪坊主に扮させるために髭に擬する胡弓や、厚綿の羽織を早くから用意して置くなぞは、南北にしては朝飯前の技巧である。茶屋の舞臺面なぞ、ト書に詳しい事は出てゐないが、定めし凝つた道具であつたらうと想像される。奥女中が脫いだ唐衣裳を、伊賀壽太郎が再び着て、世話から時代に變つてしまふなぞは、何でもない事のやうであるが、周到な段取である。

「暫」を世話でゆきたいといふのが、第一の思ひつきで、それに當年は市川白猿こと五代目團十郎、卽ち七代目團十郎の祖父の十三回忌に當るので、その口上も述べたいといふ私的事情も手傳つて、遂に

二番目の筋が生れたのであらう。内の場で團十郎菊之丞幸四郎が集まり、來年の春狂言まで暗示するのも至れり盡せりである。この臺詞の中に「龜井戸の親仁は性急だから」と、南北自身の事まで云はせてゐる。

「暫」のツラネは、自作といふ規則になつてゐるので、脚本には出てゐないが、實際、七代目團十郎が舞臺で述べた臺詞は、左の通りであつた。

東夷南蠻北狄西戎、四夷八荒、天地乾坤のその間に、有るべき人の知らざらんや、三千餘里も遠からず、ものに怖ぢざる荒若衆、近づきなりに出て見れば、うツつい姐えが胴取りとは、四百餘州の春遊び、七言五言歌がるた、鼻の先なる虎狩や、威をかり狐の毛唐人、海老が夜食のかたまり孫、ひげ人參との疑ひに、分らぬ腹をたつか弓、和らぐ國は神の末、卑劣な事は云ひませぬ、嘘ぢやござらぬ正直の、日本風俗三升が、當年積つて十八歳、誠の年は二十八、成田の不動がほんそう子、清和源氏の嫡孫源の頼光が、股肱耳目と呼ばれたる、碓氷の荒太郎貞光、五年ぶりでの揚幕から、一聲かけつけ三杯上戸、差も押へもあらばこそ、相手が殖えれば龍に水、丑滿頃や一つ目の、光りかゞやくろくろ首、百鬼夜行があやまつて、一味などとは事おかしや、うぶめもござれ雪女、集まりよれる黑髪に、つながりよつた大象めら、這ひつくばつたきり〲す、ほんに當の身を焦す、惚れたら抱いてねぢり首、性根の尻尾は井の頭、金性水のあら玉川、八千餘町御存

じの、疳癪の飛切り江戸ッ子の交りなし、正札つき雪花の顔見世、譲りの面の筋をひき、下手を外さぬ十露盤の、大玉小玉パチ〳〵と、戀しき時は待乳山、これ鏡臺に向島、祖父が十三ねんごろな、いづれも樣へお目見得の、妨げひろぐ奴ばらは、日本橋の眞中から、富士の御八嶺へ抛り込むとホヽ、敬つて曰す。

役割は左の通りであつた。

卜部季武。鐵門鬼兵衞實ハ相馬六郎公連。足柄山の分身山姥。高麗屋錦升。中間、栗の木又治實ハ伊賀壽太郎成信（五ヤク松本幸四郎）傾城、胡蝶實ハ葛城山の女郎蜘蛛。鏡山の住替へ、百足のお百實ハ秀郷娘千晴。濱村屋路考。奥女中。袖崎實ハ壽太郎娘玉琴（四ヤク瀬川菊之丞）御厨三郎正頼。長井長助實ハ二の瀬の源吾。音羽屋薪水（三ヤク坂東彦三郎）物部平太有風。山伏、黑川の見珍（二ヤク市川宗三郎）禿、とこよ（市村龜之助）奴、伊勢海老あかん平（市川高麗藏）橋立三郎成春。紀伊國屋曙山（二ヤク澤村源之助）坊主、意覺。あなごの庄司娘、）千代姫（二ヤク惣領甚六）因幡の局實ハ熊手のお爪（松本小次郎）源頼信（市川茂々太郎）堤彌惣俊次（津打門三郎）藤原仲光（市川門三郎）加藤豊後次郎忠正（松本五郎市）保昌娘、小式部（松本よね三）平常陸の助正盛。大通辭藤馬實ハ大宅太郎光遠（二ヤク大谷馬十）滿仲一子、美女丸後ニ市川玉柏（山科甚吉）隱亡、斑の巳藏。猪熊坊主の熊（二ヤク坂東善次）野伏り、菰垂れの安實ハ純友娘、桔梗の前。大和屋杜若（二ヤク岩井半四郎）坂田金時。渡邊源次綱。猿島歌游實ハ將軍太郎良門。成田屋三升假名碓氷貞光。（四ヤク市川團十郎）

蝶鵯山崎踊

文政二年七月、玉川座の舞臺にかけられた通し狂言で、「双蝶々」の書替へである。書替へ狂言に就いては、前に詳說したから繰返さぬ。

この年の三月、玉川座は前の「四天王産湯玉川」の顏觸れで打ちつゞけ、三月には座頭の團十郎が、お家狂言の「助六所緣江戸櫻」を出した。十年ぶりなので、江戸の見物は非常に肩を入れ、例に依つて當りを取つたが、その時中村座へは、前年地方へ行つてゐた三世尾上菊五郎が歸京して臨時に加入し、「助六曲輪菊」を出した。初代菊五郎も演じた事があるからといふので、上場したのであらう。名題は違ふが、內容は殆んど同じものである。これも相當に評判となつた。江戸では團十郎菊五郎で助六の競爭が演じられたのである。双方に贔屓々々が力を入れた結果は、自然に兩優が反目の姿となり、遂には本當の喧嘩となつてしまつた。中へ入る者があつて、兩優和解となつた。その和解狂言がこの「蝶鵯山崎踊」なのである。

元々、斯ういふ私的關係から出發したのである。そこへ、興行師の宣傳も交つて、團菊顏合せといふ事件を、いやが上にも煽り立てた。結局、狂言の內容は、すべてが喧嘩と和解とで成り立つてゐる。和

解の新狂言を命じられた南北が、「双蝶々」の世界を選擇したのは、長吉長五郎といふ對立には持つて來いの役名があるからの事である。名題からして「蝶の比翼」と附けて、兩優の顔合せを利かしてゐる。內容は勿論である。まづ二人が初めて見物へ顔を見せる場は、清水の花盛りにして、二人を美しい若衆に出でたゝせ、爭ひの後、相討ちとなる筋などは、南北が兩方へ花を持たせようとして、苦心したところであらう。これを夢にして、二人をイナセな世話の姿に變へさせる。女形には夂折よく、半四郎に菊之丞の兩優があつた。これを團菊に配し、後見格の幸四郎が眞中へ入つた五人のだんまりは、定めて觀客を湧かせた事と思はれる。その後の幕は、わざ〳〵長吉と長五郎を喧嘩させ、觀客を焦立たせながら大詰まで引摺つて行つて、遂にめでたく和解となり、觀客を安心させて打出しとなる。その間、團菊双方へ少しもケチを附けない。どちらの顔も立てながら、喧嘩を續けさせてゆくには、南北も嘸苦勞した事だらう。

別に、「花屋敷の場」で、前の「四天王產湯玉川」と同じく、この五人を舞臺へ素顔で出させ、わざわざ團十郎菊五郎に仲直りの杯をさせてゐる。これらは興行師の註文であつたらうが、昔の狂言には度々あることで、また斯ういふ幕が喜ばれたものである。

本卷に收錄したのは、勿論南北の原作であるが、上演に際しては、大分にカットされたらしい。第一脚本を讀んで見ると、どうも一幕欠けてゐる樣子である。「水神の森の場」の次に、「箱根在三作内の場」があつたらうと想像される。それでないと、野手の三作や下駄の市助といふ、肝心の團十郎菊五郎が演じる主要な役が立消えになつてしまふ。恐らくこの幕では、野手の三作が古主山崎家のために罪を引受けて刑に行はれ、山崎家の系圖は與五郎の手に渡り、市助は惡黨ぶりを發揮した揚句に殺されるといふ筋であつたらうと思ふ。それでないと「品川新丸本」の場へ連絡しない。

併し、この幕は、まだ原本が出來上がらぬ内から否決されたものらしい。兎に角、喧嘩した俳優が和解後の顏合せ狂言といへば、双方が理屈を云つて、顏をよくしようとする關係上、いつも狂言作者は非常に惱まされる。恐らくこの一幕は、團十郎菊五郎どちらかに不利な幕であつたので、早くも蹴られてしまつたのであらう。勿論舞臺には上らない。

初演の折の番附を挿入して置いたから、御覽になると解るが、番附に據ると（繪本番附は正確なものである）脚本より人物が減り、順序も變更されてゐる。二幕目である「花屋敷」が序幕になつて、しかも五人の俳優が素顏を見せる趣向なぞは全然削除されてゐる。これも何かむづかしい問題が起つて、折角南北が書いたものを抜いてしまつたのであらう。下駄の市助なぞといふ役は全然ない。第一おかしいの

は、主要な役の山崎娘お關が番附には全然出てゐないことである。これも多分一番見せ場である、一幕が拔かれたので、半四郎が役を嫌つた結果、全然無くなつてしまつたのだと見える。半四郎も團十郎菊五郎の喧嘩には、深い關係を持つてゐたといふから、相應にぐづつたらしい。

斯して、折角の和解狂言も、かなりにいぢられた所爲か、興行成績はあまり上乘とはゆかなかつたといふ。團十郎菊五郎は和解狂言中に再び喧嘩をして、顏合せも一度ぎり、以後四五年間は一座をしなかつた

役割を擧げて置く。上演の際に削られた役でも、脚本に配役されたものは加へてある。

倉岡丈左衛門。高麗屋錦升。幻し竹右衛門後ニ駕籠屋甚兵衛（三ヤク松本幸四郎）橋本娘お照後ニ新丸本のみやこ。濱村屋路考（二ヤク瀨川菊之丞）三宅順藏（坂東彥三郎）三原有右衛門。新丸木の仁右衛門（二ヤク市川宗三郎）中間、下駄市助。音羽屋梅幸。南與兵衛悴、濡髮長五郎（二ヤク尾上菊五郎）家主、彥助（坂東善次）盜人、佐渡七（惣領甚六）五百崎淨閑。三作母、妙貞尼（二ヤク市川門三郎）判人、權九郎（松本小次郎）平方左源次（市川茂々太郎）中間、鳫助（市川小團次）えびざこの十（市川高麗藏）奥女中、關屋（吾妻藤藏）藝者、お松（松本よね三）菊池多門之助（尾上松助）山崎與次兵衛。三原丹平（二ヤク大谷馬十）竹右衛門娘、お早。山崎娘、お關。大和屋杜若（三ヤク岩井半四郎）山崎與五郎。百姓、野手の三作。成田屋三升。十次兵衛悴、放駒長吉（四ヤク市川團十郎）

この狂言は、安政六年三月に至つて、守田座に再演された。名題は「頼三升曾我神垣（たのみますそがのかみがき）」といふので、役名は全然變つてゐるが、大體は前の脚本そのまゝを使つてゐた。當年の團十郎菊五郎に比すべき、當時の對立した人氣俳優は、中村福助と市川市藏とであつた。兩優の顏が合つたので、政策上、この狂言を採用したのである。俳優の人氣で、狂言も評判になつた。その時の役割を、原作と役名を對照して左に記して置く、

笹野權三後ニ木やりの權三（長吉）……中村　福助
遠山甚三後ニ金簪の甚三（長五郎）……市川　市藏
出來星の三吉（市助）……市川　市藏
五郎兵衛娘、おます（お早）……市川　新車
左門娘、おみれ（お關）……市川　新車
桝本の宗九郎（仁右衛門）……嵐　冠五郎
主水娘、おそで（お照）……坂東玉三郎
刀鍛冶、新作（三作）……坂東玉三郎

筒井重三郎（順藏）……嵐　雛助
若黨、左源太（左源次）……嵐　雛助
劍澤彈正左衛門（丈左衛門）……市川　團藏
梅澤の五郎兵衛（甚兵衛）……市川　團藏
小柴彦惣（與五郎）……市川　九藏
山名奥右衛門（有右衛門）……中村　歌雀
千葉右門之助（左門之助）……坂東三津五郎
小柴左門（與次兵衛）……森田　勘彌

挿繪解說

■本卷には、挿入する錦繪が中々見當らず、僅かしか收めることが出來なかつたのは、甚だ殘念である。

■卷頭を飾つた二頁大の木版は、「櫻姬東文章」のうち、四幕目の、三圍稻荷鳥居先の場である。戀ひ慕ふ櫻姬の名を呼びながら、幼な子を抱いて雨中をさまよふ淸玄法師、たま〳〵その人に逢ひながら、闇はあやなし、そのまゝに別れるといふ、哀れな一場である。縱に二枚續きなのが、ちよつと變つと面白い。初世豐國の筆で、晩年の割にしてはよく出來てゐる。

■「四天王產湯玉川」に挿入した三枚續きの錦繪は、「市原野地藏堂」だんまりの一場である。業病に死んで火屋で燃されるまでになつた良門が、一卷の威德で蘇生する。着物にはまだ火が燃えついてゐる。そこへ牛の皮をかむつた桔梗の前と、僧形の六郎公連が現はれて、吉例の顏見世だんまりとなる。場景といひ人物の取合せといひ、實に纏まつた、凄味のある畫面の模樣だ。これも豐國である。

■「蝶鵆山崎踊」の中へ見通しに入れたのは、「境木地藏堂の場」である。久しぶりで顏を合せた三世菊五郎と七世團十郞、それに五世半四郞と五世菊之丞とが搦んで世話だんまりの畫面である。實をいふと眞中に幸四郞の竹右衞門が居るのであるが、それが缺けてゐて殘念である。

■一頁大のは、菊五郞の濡髮長五郞で、花道を出てくる姿である。兩者とも同じく國貞の筆である。

櫻姫東文章

さくらひめあづまぶんしやう

櫻姫東文章

發端

江の島兒ヶ淵の場

役名――長谷寺の自休。稚兒、白菊丸。寺侍ひ。同宿等。

幕の外へ役觸れあつて、直に時の鐘、禪のツトメになり、花道より寺侍ひ、同宿、下男、大勢、思ひ思ひの拵へにて、弓張り提灯、六尺棒を持ち

同宿 迷子やアい。

皆々 白菊やアい。

ト呼びながら出て來る。東の花道より同じく寺侍ひ、同宿、下男大勢、弓張り提灯、六尺棒を持ち

同宿 お所化やアい。

皆々 自休坊やアい。

ト呼びながら出て來て、双方本舞臺にて行合ひ

寺侍 ヤア、待て〳〵。自休坊とは長谷寺のお所化。ハヽア、さては家出をなされたかな。

同宿　左樣でござる。お手前方も白菊丸と尋ねさつしやるは、相承院の稚兒、白菊どのゝ儀でござるか。

寺侍　如何にも左樣。して、自休御坊の行くへの知れぬは、何時頃からの儀でござる。

同宿　イヤ、今朝よりかいくれに。寺法は暮六つ限りゆゑ、所々方々と尋ねますれど、今に在家が知れませぬ。

同　此方とても同じ事、殊に年端も行かぬ稚兒、最早夜中も餘程過ぎて、追つけ八ツでもござらうな。

皆々　ちつとも早く尋ねませうか。

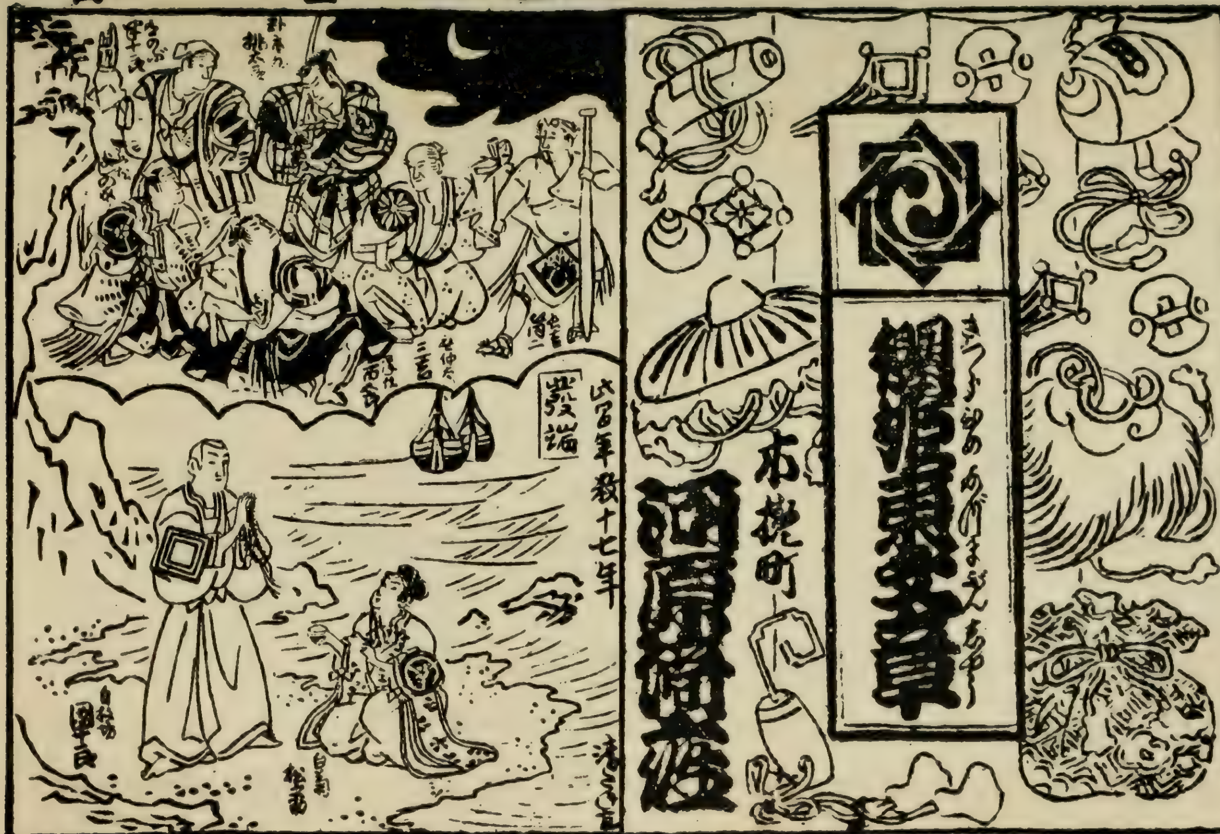
□　白菊やアい。

○　自休坊やアい。

ト禪のツトメになり、幕の引つけと花道へ入る。

本舞臺、正面三間の間、山續き、一面の岩組。うしろ黒幕、花道より掛けて自然登りの坂道。舞臺先浪板、よき所に岩の出先。下座の方へかけて荒海の模樣。一體物凄く誂へあり。破風の前薄霞下げ、後に月を引出す仕掛け。坂口に榜示杭、これに岩屋道と書き、すべて江の島兒ヶ淵の景色にて、時の鐘、浪の音にて幕明く。

ト直に唄淨瑠璃になる。


本挽町
河原崎座
發端

唄浄〽まかなくに何を種とて戀草の、思ひに茂る色見えて、うつろはぬ間を吹く風の

ト矢張り時の鐘、合ひ方になり、花道より長谷寺の自休、青坊主、着流し、所化の形にて、振り袖、

刺貫、稚兒髷の白菊丸の手を引いて出て來り、花道にとまる。

唄浄〽花は散りても根に返る、御法の悟り幻しに、昨日は夢か色卽是空、迷ふ色香も浮世の常と、情の道の隔てなき、思ひ入り江の島影に、人目しのぶの里育ち、今は御寺に墨衣、かたしき結ぶ白菊の、姿散り行く跡や先

ト兩人よろしく本舞臺へ來て

自休 コレ、白菊どの、アヽ、思へばよしない輪廻に迷ひ染め、今では世上の口の端に、寺門の譏り何やかや、思ひ廻せば生きて居られぬ。わし一人死ねばよい事を、蕾の花のこなたまで、憂目を見する身の果敢なさ。必ず叱つて下さるなや。

白菊 エヽ、何をマア勿體ない。出家堅固のお身ながら、數ならぬ身をお情の、御不便あつた嬉しさに、甘えて今の身の願ひ。三世の結びのお師匠樣、お目を掠めし身のいたづら、どうで死なねばなりませぬ。お前と一緒に未來まで、どうぞ女子に生れ來て、女夫になりたう思ひまする。

自休 サア、その樣に云うて下さるな。心根が猶いとしや。コレ、わしはの、今更云ふにはあらねども、生

れは奥州信夫の里、伊達次郎親衡どのに仕へし身。清水宿直之助清玄とて、一度仕官なしたれども、年端も行かぬ實の弟、その名も信夫の惣太といふ、心善からぬその生立、成人の後を思ひやられ弟ながらも緣切つて、見限り果て丶家を出で、三年跡に思ひ切り、鎌倉へ來て長谷寺に、白休といへる新參坊主。どうした前世の因緣やら、こなたをふッと思ひ染めてより、勤行念佛も身にしまず、明暮れ焦れてやう〳〵と、逢ふ瀨嬉しきこなたの情け。人目を忍ぶ兼言も、今で思へばァ、よしなや、こなたの爲めには大惡緣、因果づくぢやと諦めて、コレ、堪忍して下されや。

白菊　モシ、そりやお前今更に、覺悟極めた白菊へ、心にもない身の悔み。一旦斯うと云ひ交し、未來永々變らじと、願ふ心は、コレ爰に

　　ト懷より誂への香箱の蓋を出す。

白休　オヽ、そりやわしも同じ事。肌身離さぬこの香箱。

　　ト同じく香箱の身の片しを取出し

斯うした仲の誓ひには、或ひは指切り入れ黑子。互ひに佛へ仕へし身の、せめては親の生みつけし、肌に疵はつけまじと、忍ぶ草と名けしこの香箱。

白菊　お前の實名清玄と、この蓋に書いた入れ黑子。

白休　また身の方へは白菊と、其方が書いた筆の跡、變らぬ印は未來まで。

白菊　ソレ、これ程の仲ぢやもの。

ト　ぢつと寄添ふ。又唄になり

唄淨〽女子ばかりが世の中の、妹脊とやらぢやありやしよまい、梅が兄なら女郎花、秋咲く花も在原や、井筒の昔振り分髪の、影もよしなや後の名も、兒ヶ淵とぞ殘すらん。

ト　文句一杯に兩人宜しく坂道を登り、岩石の上より白菊香箱の蓋の方を左の手に握り、浪間を見て

白菊　渦巻く淵が二人の最期場。サ、自休樣。

白休　白菊丸。

白菊　南無阿彌陀佛。

ト　思ひ入れあつて浪間へ身を投げる。自休ハッとうろたへ

白休　コレ、早まつた白菊、わしももろとも。

ト　岩組より下を覗く。浪の音。寒氣立ちし思ひ入れ。

ようマァ思ひ切つて飛び込んだ事ではあるぞ。命はさら〳〵惜しまねど、何十丈のこの岩壁、なう恐ろしや。（ト氣おくれの思ひ入れ）。エヽ〳〵、期の延びる程死なれぬ命。

トこの時奥にて微かに

大勢　白菊やアい。

ト呼ぶ。自休思ひ入れあつて

自休　ヤヽ。殊には近づく追手の聲。死遲れたるわしももろとも、未來は一つ。南無阿彌陀佛々々々

々々々。

ト同じく觀念して飛び入る。誤まつて衣裳の袖、磯馴れ松へ引かゝる。この時チヨンと月出る。自休心づき

こりや、氣おくれして松ヶ枝に。エヽ、情ない。死にたいわい〳〵。

トいろ〳〵思ひ入れあつて

身は投げずとも、この儘こゝで

ト咽喉を抓つたり、胸を叩いたり、いろ〳〵思ひ入れあつて、下の方へコロ〳〵と落ちて、思ひ入れあつて

どうでも死なれぬ事かいやい。（ト時の鐘、浪の音）。オヽ、さうぢや。爰でこの儘白菊一人、不心中とも思はうが、コリヤ、共に死なうと思へばこそ、身を投げたれど因果にや、松の梢に支へられ

命を搦む蔦かづら、死ぬに死なれぬ淺ましい、まだ命數の盡きぬ因果。コレ、白菊、跡の回向は營む程に、必ず〱心變りと未來から、恨んで下さるなよ。南無阿彌陀佛々々々々。

ト浪間を見下し回向する。薄ドロ〱にて海中より心火燃上る。自休悔りして手を合せる。木の頭。

南無阿彌陀佛々々々々々。

ト早口に、目を閉ぢて合掌する。キザミにてよろしく。

幕

幕の外、薄ドロ〱、自休思ひ入れあつてツイと向うへ入る。

ト幕の内より頭取、上下にて出て、口上あつて

頭取　さて、分けて申し上げまするは、只今仕りましたるは江の島兒ケ淵の場・當狂言の發端にござりまして、この間十七ケ年相立ちましたる狂言にござりまする。自休坊白菊の因緣物語を、淸玄櫻姫にとり結び、この所新淸水の場、十七年立ちますると申す口上、分けまして左樣。

トロ上濟む。直に双盤のツナギにて、引返し。

新清水の場
櫻谷草庵の場

序幕

役名――清水寺清玄、實ハ自休。中間、釣鐘の權助、實ハ信夫の惣太。吉田の息女、櫻姫。吉田松若丸、入間惡五郎。下郎、軍助。粟津七郎兼次。松井源吾。梅津甚太夫。牛田兵內。役僧、殘月。僧、知光。同、入山。同、榮昌。同、玄海。同、久盛。局、長浦。腰元、五百崎。同、待乳。同、綾瀨。同、淺茅。同、宮戶。小姓、升次。

發端切れ、頭取口上濟むと、直に行列三重になり、好き程に向うより

兵內　エヽ、また喰ひ醉つたのか。サア／＼、きり／＼歩め／＼。

ト兵內、押へ侍ひの形にて、權助の手を取つて引立て出る。權助、紺看板中間の拵へ宜しく、風呂敷を背負ひ、生醉のこなしにて、兵內に引立てられ、ひよろ／＼しながら出て來る。

權助　これサ／＼。どうする／＼。

兵內　白痴者め。もう皆清水へ、お出での時分だ。サア／＼、急げ／＼。

權助　ハテ、急がば廻ると、さうされちやァ眼が廻つてなりませぬ。マア／＼、お前、先へ行きなさい。わ

しやア跡から、そろ〳〵と、エヽイ。

兵内 エヽ、臭い。樽拔と連れになつたやうだ。

ト思ひ入れ。幕の内にて

大勢 敷物を持て〳〵。（ト聲々に云ふ）。

兵内 アレ〳〵、敷物と云ふワ。サア〳〵、來い〳〵。（ト引立てる）。

權助 イエサ、わしやア勝手に行きますよ。

兵内 エヽ、飛んだのたまくだ。

トまた内にて

大勢 敷物を持たぬか〳〵。

トこれにて兵内氣をいらち

兵内 サア、歩め〳〵。どうしたものだ。

ト叱りながら、行列三重にて、兵内、無理に權助を引摺り、捨ぜりふにて幕の引附より内へ入るト、知らせにつき双盤になる。

本舞臺、少し下へ寄せて淸水の舞臺、高欄附き、内は唐戸、上げ蔀、惣朱塗り極彩色、鍍金金物、いろ

いろの繪馬、傘の額など掛けてあり。上の方より横に石段、それに續いて小高き山。ズッと上より斜に石垣。白糸の瀧。所々に櫻の立ち樹。日覆より枝垂れ櫻の吊り枝、好き所に「長谷寺新清水」と書いたる榜示杭。すべて鎌倉海光山の體。爰に吉田の松若、上の方に挾み箱にかゝり、此方に粟津七郎兼次、松井源吾貞景、お家、上下衣裳にて、兩人膝を突かけ詰合ひ居る見得。後ろに黒羽織の徒士、紺看板の足輕大勢並び、ずッと下の方に軍助、奴の形にて草履を持ち扣へ居る。これにて幕明く。

ト掠めて双盤、七郎思ひ入れあつて

七郎　ヤア、過言なり源吾貞景、兄粟津の俊兼はじめ、この兼次をも表裏とは、何ゆゑあつて申すのだ。返答次第松若君の、御前といはず、座は立たせぬぞ。

源吾　イヤ、お云やるな七郎兼次。主君少將惟貞卿、去春如月參内の歸るさ、何者の所爲にや殺害せられ、都鳥の一巻まで、紛失なせしを押隱し、病死と披露し禁庭へ、繼目の願ひは筋違ひ。官職許しは禁裏の儘、家督の事は鎌倉の、武將の命に任すとあるゆゑ、卽ち當寺の淸玄阿闍梨、將軍の歸依僧とて、これに便つて繼目の願ひ。一旦事は納まれども、後日に顯はれお咎めあらば、取つて返らぬお家の破滅、それより比企の判官へ、内證打明け家督の事、なぜ頼んではお見やらぬ。

七郎　イヤ、そりや云ふまでもない事ながら、惟貞卿を殺害の、その曲者も何奴と、知れぬ大事を粗忽に

も、言上なして、繼目の願ひ、叶ふべきと思はうか。それゆゑにこそ我れ〳〵兄弟、樣々千辛萬苦して、何卒無事に長久をと、計らふ身共を表裏とは、これまで數代連綿たる、吉田のお家へ不忠の貞景。

源吾 ヤア、忠義一圖の某を、不忠なぞとは慮外千萬、一言と申さば赦さぬぞ。

七郎 赦さぬとて某に、不忠の刃金が立たうと思ふか。

源吾 そこを身共が、立てゝ見せうワ。

二人 なにを。

ト兩人刀の柄へ手をかけて思ひ入れ。軍助見兼ねて

軍助 ヤレ、御兩所樣、こりや何事。おせきなさるゝ所でない。まづ〳〵お控へ遊ばしませい。

ト下の方へ手を突いて思ひ入れ。松若思ひ入れあつて

松若 始終をこれにて見聞きのところ、道理を立てゝ二人が爭ひ。何はともあれ吉田の跡目、猶豫の首尾、淸玄阿闍梨へ賴まん爲めに、今日の登山、只管兩人心を添へ、家の大事を賴むぞよ。

二人 ハツ。（トこれにて納まる）。

軍助 眞に過ぎつる騷動より、山田郡治兵衞どのには御浪人。稻野谷半兵衞樣とても、越度に依つて御

流浪遊ばし、今ではお家に粟津、松井、その大事のあなた方、互ひの議論に確執となつては、第一に松若君のお爲も如何。そこを存じて憚りも、慮外も恐れず奴めが、お留め申した出過ぎの段、眞平御免下さりませう。

七郎　ハテ、下郎に似合はぬ健氣な奴、殊更仰せも恐れある、松若君の御意といひ

源吾　この場で事を果すも如何。然らば互ひに異論なく

二人　兎角は申し談ずるでござらう。

軍助　これでお家も安泰に、納めた思案のお二人樣。

松若　暫時は胸を痛めしに、先づは重疊。イザ、寶前へ參詣なし、阿闍梨の許へ赴かん。（ト立上がる）。

七郎　何樣、お早う。

源吾　皆御同勢は供待へ。

大勢　ハヽア。

　ト一同下座へ入る。軍助殘る。トこの時向うにて轡の音する。

七郎　ヤ、あの物音は

　ト向う揚幕にて

惡五　松若待ちやれ。内意の旨あり、暫くそれに。

トこれにて皆々思ひ入れ。早めの双盤になり、入間惡五郎、ぶつつり、前髪、馬乘り袴にて、鞭を持ち、馬より下りし思ひ入れにて出て來り、直に舞臺へ來る。

松若　ヤ、どなたかと存せしに、入間惡五郎照門どの。

七郎　見受けますれば御馬上にて

源五　何か火急な儀と相見えまするが

松若　して御内意とは

三人　如何樣な

ト氣づかふこなし。軍助も思ひ入れ。惡五郎汗を拭つて

惡五　さればサ。今比企の判官どのより、入間吉田は一家の因み、それゆゑ内意と云ひ越されたるその趣は、別儀でござらぬ。姉櫻姫共々に、松若鎌倉の旅館に下り、淸玄阿奢梨を以て家督の願ひ。然るにまこと吉田の少將、病死といふは僞りにて、曲者の爲めに殺害せられ、家の重寶都鳥の一卷を奪はれ、その行くへを求めんと、梅若直に東にさまよひ、隅田川の堤にて、これも横死をよしなに奏し、則ち梅若山王と、當今より勸請も、全く天機をたばかりしと巷の風聞。さあれば

松若都鳥、所持なすならばこれ虚說。無きに於ては朝廷はじめ、武將を欺むく烏滸の者、屹度詮議あらん由、照門内々吟味せよと、賴員樣の內意に依つて、一鞭當てゝ罷り越してござる。

トこれを聞いて皆々ハッと思ひ入れ。

松若　ナニ、すりや父惟貞、梅若にも、橫死のみか、大切な、都鳥の一卷まで、紛失なせしといふ事を

七郎　アモシ、たとへ世上に風聞あり、上のお聞に達するとも、苦しからざるそりや虛說。父君惟貞卿はもとより、梅若君にも東國の、名所を尋ねお下りの、その折柄の御逝去に、相違なければお尋ねに、あづかるとても、ナニ聊か

惡五　ムウ。然らば都鳥所持なし居るに相違ないなら、今こゝで拜見しようか。

ト松若思ひ入れ。

七郎　アイヤ、申さば神祇官の祕書。七座の祓いたさせし後、御內見に入るゝでござらう。

惡五　すりや、今といつては

七郎　明朝までの御宥免。

トこの內源吾思ひ入れあつて

源吾　イカサマ。一旦櫻姬樣と御緣談は御破談なれど、少しは誼みの惡五郎樣、何卒內見明朝まで、な

ト思ひ入れ。

惡五　忠臣無二の源吾が願ひ。手の開かない不具と聞く、櫻姫は變替へしたなれど、松若が家來の云ふ事。よいワ、明日まで內見、宥免いたしてくれうワ。

松若　左樣ござらば照門どの。

惡五　明朝屹度一卷を

七郞　御念に及ばぬ、御內見。

軍助　さはいへ、どうして明朝まで（ト氣遣ふ。）

七郞　コリヤ。松若君にはまづ寶前へ、イザ、御參詣遊ばしませい。

ト唄になり、松若、惡五郞へ目禮して、七郞、軍助附添ひ、石段より奧へ入る。惡五郞、源吾殘り、思ひ入れあつて

源五　惡五郞樣、全く無いを有り顏に、受合つた粟津が胸中。

惡五　しかも去年の二月半、人知れず少將を、殺害させて懷中の、都鳥の一卷を、現在奪ひ取らせたる、我れへ對してその一卷、明朝內見させせんといふ、兼次が心に一物。

源吾　如何なる手段あるかは知らず。それにつけても拙者まで、又ぞろ信夫の惣太より

ト懐より手紙を出し、惡五郎へ渡す。惡五郎取つて開き

惡五「先達て申上候ふ通り、お頼みにつき吉田の少將殺害なし、奪ひ取り候ふ都鳥の一巻、今以て我等所持致し候が、早く入間惡五郎樣へ御催促被下、金子二千兩とお引替可被下候ふ、松井源吾樣信夫の惣太。」アノ、褒美として二千兩（ト思ひ入れ）。

源吾 中々慾の深い奴。併しその金遣はさねば、貴方のお手へ一巻は

ト この時向うにて

大勢 片寄りませい〳〵。

ト 惡五郎手紙を懐中して

惡五 まだ談ずる仔細もあれば、瀧の坊まで

源吾 然らばお供、イザ、お入りあられませう。

ト三味線音樂になり、兩人下座へ入ると、直に向うより上下、股立の侍ひ兩人居並び、跡より入山、久盛、玄海、榮昌何れも青坊主、黑衣袈裟の形にて珠數を持ち、その次に淸玄阿闍梨、結構なる袈裟衣、少し老けたる拵へにて、柄香爐を持ち、靜々出る。あとより上下の侍ひ、朱の長柄を差かける。續いて殘月、知光、役僧の拵へ、色衣袈裟、中啓を持ち、このあとに羽織袴の侍ひ三人、草履取り一人

附いて出る。ト石段より小姓升次、定家文庫を持ち、櫻姫、廣振り袖、襠裲衣裳、姫の拵へ、珠數を持ち、腰元五百崎、鼻紙臺を持ち、長浦、局の拵へ、待乳、淺茅、綾瀬、關屋、宮戸、腰元の形、あとより甚太夫、白髪親仁、袴羽織、摑み股立にて、附添ひ出て來り、双方よろしく本舞臺へ來り、櫻姫、清玄を見て會釋する。長浦思ひ入れあつて

長浦　アヽ申し、清玄樣、お待ちなされて下さりませい。

ト清玄思ひ入れあつて

清玄　五蘊假に形を成して紅粉を彩る。梢の花と思ひ見れば、いとやごとなき上臈の、我れをとゞめて用ばしありや。〔して〕して、まづ御身は。

殘月　卽ち先つ頃よりして、この櫻谷の草庵に遁れ

知光　受戒の事を我れ〳〵まで、度々お願ひの

坊皆　吉田の御息女

清玄　ムウ。櫻姫にて在するや。（ト思ひ入れ）。

櫻姫　サア、罪業深き自らが、これまでお願ひ申せし事、どうぞ叶へてほしさの儘、今も今とて御坊へと、辿る折しも幸ひと、お見上げ申すも佛緣の、導くところとそれゆゑに。

長浦　すりや、どうあつても姫君には。それも御無理と思はれぬ。このお美しい御容貌で、玉に疵とてお生れつき、左のお手の開かぬゆゑ、入間樣との御緣談、御變替へより、只管に、お身を悔んで御剃髮。

五百　思し立あるその內に、御家督願ひと弟君、松若樣と諸共に、この鎌倉の御旅館へ、お下りあるより法の道、尊き聞えの淸玄樣、御歸依遊ばし、師弟の結び。

待乳　まだお許しはあらねども、押して當寺の櫻谷、その山影にお住ひも、浮世を厭ふお心にや、花にもお目の留らねば

淺茅　せめて少しはお氣ほうじと、彌生の空の麗かさ、今日はお勸め申し上げ、七里ヶ濱に打寄せし、眞砂の貝の數々を

綾瀨　ちと、お徒步も遠からぬ、道の若草踏みしたき、浮立つ春の長き日を、少しはお慰め申さうと

關屋　思ふに效も何のその、裾にわやくな汐風が、吹誘ふ間もあらばこそ、いかな景色を御覽もなう

宮戶　誰より早くお歸りを、急がせらるゝお心は、矢ッ張り花のお姿を

長浦　法の菩提の山風に、果敢なく散らすお心で

女皆　ございましたかいなァ。

甚太　この梅津甚太夫なぞも、お少さいからお附き申し、早う立派な聟がねをと、思ふに違ふ情けない姫君の思し召し。ハテ、たとへ左のお手ぐらゐ、開かぬと申したとて、女は彼のソレ。何やらさへござりますれば、何れへなりと御縁組は相成まする。必ず〳〵御剃髪は、御無用に遊ばしませい。

殘月　イカサマ、こりや御老體の、お詞尤も至極。それ佛體といへば、五戒十戒を保ち、無爲の境界に入らざれば、中々菩提に入る事難し。ましてや見るから可愛らしい、その美しさで、どうして〳〵、堅固に出家遂げられう。

入山　旣に佛の戒め給ふ、五戒は卽ち殺生戒、婀娜な目附で男を殺す、これ第一の禁戒なり。

久盛　又偸盗とは仕廻をつけ、我が物顔のうつそり客、その目を拔いて餘の客に、逢ふを盗みと戒めたり。

立海　邪婬といふは外ならず、夫の鼻毛讀み置いて、間男結ぶをいふぞかし。

榮昌　扨も妄語は噓八百、嫌な人にもなるやうに、仕掛けて無性に引みんたん、誠の無いを申すなり。

知光　飮酒戒とて又佛家に、酒を戒め恐るゝも、人これを飮み性根を亂し、あらぬ惡事を引出す。聖語に酒を狂藥と、說き置れしも心は一つ。斯く難行の勤めなくては、沙門の徒とは申されず。況んや若き女性の儀、破戒あつては勿體なし。

殘月　この儀は是非〳〵

坊皆　おとゞまりなされい。

櫻姫　いやとよ。それも心に思ふ事、あつての上の剃髮なら、誤つ事もあるべきが、菩提の門に入りたしと思ふより外何一つ、浮世の望み無い自ら、どうぞ受戒を清玄樣、お許しなされて下されませ

清玄　今衆僧こぞつてとゞむる如く、申しても行ひ難く、勤めても入り難きは、佛道の深淵。花ならばまだ莟の身、佛心決定危ふい〳〵。一旦出家得道なし、一恒の罪を犯す時は、却つて地獄の因となる。それよりは剃髮止めて、緣ある方へ婚姻し、子孫の榮へ計られよ。

櫻姫　そのお示しは有り難けれど、申すも辛き身の罪業。

長浦　姫君樣にはお生れつき、いかな事にや、左のお手が開きませぬわいなァ。

清玄　すりや姫には、生れながらに左の五指。

櫻姫　開かぬ不具は前の世の、報いか、因果か、それゆゑに

女皆　お云ひ號けも御變替へ。

櫻姫　恥かしい目を見る事も、人並ならぬこの身ゆゑ。せめては世を捨て御佛に、お仕へ申す者あれば少しは罪も消え失せん。また父上や梅若の、菩提も弔はんその爲に、押してのお願ひ、聞入れあつて

ト清玄思ひ入れあつて

清玄　イカサマ、聞けば理ある櫻姫が出家の願ひ。經にも五體不具にして、佛になれずと說かれたり。何とせん不便の至り。不才不能の清玄たりとも、年ごろ賴み奉る、唱名の功空しからずば、女身の業因忽ち滅し、具足成就の本體となさん。して、年齢は幾つぞ。

長浦　ハイ、お十七でござりまする。

清玄　皆同音に、念佛修行いたされよ。

皆々　ハア。

ト清玄珠數を持ち、櫻姫に向ふ。皆々思ひ入れ。

清玄　南無阿彌。

皆々　南無阿彌。

清玄　南無阿彌。

ト十念を授くる。よき程に薄ドロ〳〵にて、櫻姫の左の手自づと開き、中より毀れたる小さき香箱の蓋落ちる。升次これを見て

升次　申し、あなたのお手の中から

ト櫻姫心づき

櫻姫 ヤヽ。これ〱、この手は、いつの間に

ト驚く。皆々驚き

女皆 ほんに左のお手が開きましたは

坊皆 すりや、今の十念で

升次 何ぢやと思へばこの樣な

ト香箱を出す。櫻姫見て

櫻姫 ナニ、自らが手よりその

五百 ても、可愛らしい香箱の、そして蒔繪は忍の模樣、裏にしつかり清玄と

ト思ひ入れ。清玄目を閉ぢ居てこれを開き、思ひ入れあつて目を開き、櫻姫の香箱を一目見て

清玄 ヤ。こりやこれ正に。ムウ、薤上の朝露何ぞ引き易き。露は引きぬれども明朝更に又落つ。人死し一たび去つて何の時か歸るとは、古語にもいへど、これは又、一念この土に止まつて、輪廻離れず、生を引きしか。(ト思ひ入れあつて)南無阿彌陀佛々々々々々。

ト回向のこなし。櫻姫心づかずに

櫻姫　ほんにこれまで夢にだも、露知らざりし香箱の

五百　この手の中にどうしてマア。モシ、清玄樣。

皆々　この樣な。(ト合點の行かぬ思ひ入れ)。

長浦　ハテ、マア〱、こんな事は捨てゝお置き遊ばせ。ほんにこれまで開かぬお手の開きましたは、お十念のお庇でがなござりませう。ほんにわたしもどうぞして、ま一度娘にならるゝ事なら、お十念が受けたいわいな。

殘月　イヤ〱、長浦どのは娘より、矢ッ張りその儘、はつち婆か糊賣婆、花賣婆がようお似合ひでござるて。

長浦　これは殘月どの、お見立にあづかり、有り難うござります。覺えてござんせ。

五百　成る程、こりやお腹も立ちませうが、マア御堪忍なされませ。姫君樣にもこれからは、何憚らぬお身の上。

待乳　世界の男を選り取りに、お目づき次第聟がね樣。

淺茅　お心強う精出して、お氣に叶うた殿御をば

長浦　したが、お鼻の高いのを、お見立て遊ばしませ。

櫻姫 いや、なう、かゝる有り難い、奇瑞を受けてなんのマア、兎ても角ても自らは、尼になりたい望みぢやわいなう。

ト殘月思ひ入れあつて

殘月 これは姫君、惡い御合點、今まで不具の身でさへぢやに、何のお一つ云ひ分なき、お身となられて尼なぞとは

甚太 左樣々々。あつたら無鹽の蛤を、彼の雛段で腐らす同前。最早御出家なさるゝ事は

知光 それ〳〵。この上は疾く人倫の道にお入りあるが、御先祖への御孝養。

坊皆 剃髮染衣は只管に

ト清玄思ひ入れあつて

清玄 イヤ、方々、さに非ず。既に十念の功空しからずして、不思議にも利益を受け、この儘なれば佛恩の、いかで報ずる事あらんや。只これよりは釋尊の御弟子となり、愛慾の道を絕ち切り、只一筋に念佛修行怠慢なく、前世の業を滅せしめて後、西方の彌陀の御國へ到られよ。その香箱の片しこそ、御身が爲めの善知識。

櫻姫 エヽ、そんなら願ひをお叶へあつて

長浦　アノ、姫君樣には

皆々　御剃髪とや。

清玄　五逆消滅無他方便、南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、この内松若、軍助、石段よりツカ／＼と下りて來り

松若　すりや姉上樣には、どうあつても、そのお姿を變へられて

軍助　御出家得道遊ばすとや。

櫻姫　松若どの、日頃の望みが叶うたわいなう。

清玄　受戒の事は清玄が、今日志す精靈の、追福作善果てゝ後、姫が住家の草庵たる、櫻谷にて、剃髪させん。

櫻姫　これも偏へに願うたる、觀音菩薩の御導き。

清玄　イザ衆僧達、御堂にて

坊皆　疾く／＼御法會あられませう。

櫻姫　左樣なれば、師の坊樣。

ト清玄思ひ入れあつて

清玄　姫も今年十七歳、過行く月日も十七年、その慈明忌のしかも今日、深くも思ひ入り江の島、愛着
　　爰に香箱の

櫻姫　エ。

　　ト思ひ入れ。清玄ヅッとして

清玄　ハテ、生死流轉の、境界ぢやなア。

　　ト思ひ入れ。音樂になり、清玄に附きし人數、皆々初めの如く並びよく、石段より奥へ入る。櫻姫に
　　隨ひし人數は殘る。

櫻姫　サア、自らも佛前へ、お禮申して岩山づたひ。

長浦　そんなら直に裏道から

皆々　御下向でござりまするか。

松若　御殊勝なとは思へども、そのお姿も今日限り

軍助　盛りの花をよくもマア、櫻ン坊とはあんまりな、相成りませう事なれば、今暫しの内御剃髮を、
　　お延しあつて吉田のお家。

松若　明日と迫りし大事の前。

兩人　共々お心添へられて

櫻姫　イヤ〳〵、迚も菩提に入るべきこの身、出家に家無し、その事は身內の者と、好きやうに。

甚太　ハテ、是非もなき。若君様。（ト松若へ思ひ入れ、）

櫻姫　イザ用意せん。皆もおぢや。

松若　アモシ。（ト取附くを）

櫻姫　假の浮世に、なに惜しからん。

ト袖を振り切つて思ひ入れ。唄になり、櫻姫先に皆々石段より奥へ入る。

松若　テモお心強い、姉上様の御發心。

軍助　あの御氣色では中々以て。さるにてもお家の重寶、行くへ知れざる都鳥、明朝までに如何して。

松若　內見濟まざるその折は、吉田の家も今日限り。

軍助　明日とはいへど若君の、御身の落着とつくりと、七郎様にも御思案が、在所尋ねて一巻を、取得るまでの、お上の首尾、如何いたしてよからうやら、姉上様とも今一應。

松若　如何にもお目にかゝりし上、あの兼次とも、無事の計らひ。

軍助　兎角は若君。

トこの時バタ〳〵。

長浦　イザ、お出で遊ばしませい。

　　　ト双盤になり、兩人足早に奥へ入ると、上にて

長浦　マア〳〵、ちよつとござんせいな。

　　　ト音樂になり、石段より長浦、殘月を引ッ張つて出て來る。

殘月　これサ〳〵、長浦どの、今法會の眞最中、何となさる〳〵。

長浦　何とするとは殘月さん、ようマアわたしを糊賣婆、はつち婆と云はしやつたの。

殘月　アヽ、これ〳〵、それはどうしたもの。思ひ內にある時は、色外に現はると、釋迦如來もお說きなされた。互ひに變るな變らじと、云ひ交した二人が仲、人にそれぞと悟られまい、手段の爲めのあの惡口。

長浦　そんなら醒まして食ふ心で、わざと惡う云はしやんしたか。

殘月　ハテ知れた事。そもじを何の

長浦　さうとは知らず、わたしやモウ、ちと坊さんには差合ひぢやが、結ぶの神を誓ひにかけ、書いた起證を破らうと（ト出す。）

殘月　ヤレ勿體ない。こりや愚僧が。（ト取つて懷中する）。
長浦　ほんにわたしはお前より、年は少つと上ぢやが、いつマア一緒になられうと。
殘月　サア、師匠坊主の清玄が、越度を拵へ傘一本、この清水をほいまくつて、我れらが跡へ押直れば、その時こそはそもじは梵妻。
長浦　エヽ、こちや辨天の氣で居るもの。
殘月　辨天といへば美しい、あの櫻姬のぼつとり者、生物の味も知らずに、比丘尼になるとは、ほんにマア
長浦　アヽコレ、その生物は、ナ。（ト囁く）。
殘月　ヤア。たつた一度でアノ子を生んだ。ハテ、太い奴があるものだ。
長浦　ムウ。お前はそれを聞かしやんして、腹を立つのは姬君に
殘月　なにサ、どうしておぬしを退けて
長浦　そりや眞實かえ。
殘月　知れた事。……時にかねての三兩は
長浦　オツト云ふまい。衣の金。（ト箱せこより金を出して遣る）。

殘月　エヽ、心中者め。
長浦　殘月さん。（ト寄添ふ）。
殘月　女房ども。（ト思ひ入れ）。
長浦　オヽ嬉し。

ト寄添ふ。この時石段の上にて

甚太　長浦どの〳〵。（ト呼ぶ）。
殘月　アレ〳〵、誰やら。（ト突放す）。
長浦　エヽ、善い事には寸善尺魔。ちよこ〳〵物に
殘月　ハテ、せわしない。

ト振り切つて逃げろ。長浦おはへろ。双盤になり、下座より惡五郎、源吾出て來り、長浦取違へて惡五郎に寄添ふ。惡五郎恟りして突放す。この間に殘月、石段へ入る。長浦、源吾を見て驚き

長浦　オヤ、源吾樣。
源吾　長浦どの。
惡五　すりや、其方は姫の老女な。

源吾　如何にも左樣。

惡五　オヽ、幸ひな折であつた。身は櫻姫と云ひ號け致せし入間惡五郎と申す者。然るに姫は片手開かぬ不具と聞いて、變替へを致したが、只今聞けばその手が開いたとある事。こりや又改めて緣談が取結んで欲しい。されども一應姫が心を慰むる爲めに、認め參つたこの艷書、取次してはくれまいか。

長浦　イヽエ、なりませぬ。疵物なりやこそあのやうな、姫君樣と云ひ號け、初手から無疵であつたなら、あなたの口へどうしてマア。それを今更あつかましい。誰がお文を、オホヽヽヽ。

惡五　イヤ、舌長なる女めが。取次せずばせぬまでを、この照門へ、うぬ慮外な

ト源吾を引退けてかゝる。源吾これを支へて

源吾　サヽ、御尤も〳〵。…コレサ、長浦どの、あなたへ對して何の事。畏つたとこのお文、姫君樣へとく〳〵と

長浦　なんのお屆け申したとて、破れ鼓も同じ事、ならぬは知れたそのお文。

惡五　うぬ、その口を（ト立ちかゝる）。

長浦　それにごさんせ。

ト音樂にて、長浦逃げて石段より奥へ入る。

惡五　ヤア、源吾、放せ〳〵。あの女め。

源吾　これはしたり。彼奴を殺さばなほ姫が、貴方を恐れてお心に

惡五　イカサマ、そこも一理ある。然らば艶書を何者にか

ト思ひ入れ。この内下座より權助出て來り、この樣子を聞き、思ひ入れあつて

權助　そのお文のお使ひには、わしが參りませう。（ト出る）。

惡五　ナニ、其方が

源吾　卽ち御前の手紙の主。

惡五　ムウ。すりやアノ信夫の

權助　アモシ、その名は滅多に仰しやりまするな。何は格別、今後ろで聞けば、手紙の一本や二本、櫻姫へ屆けるに、手間も隙もいつた事か。さうして庭も同前な、爰から近い櫻谷、ツイ行つて參りませうが、駄賃は下地の二千兩に、そつくり添へて右から左。それ御承知なら

惡五　そりや櫻姫が返事次第で

源吾　直に金子は貞景が請合ふ。氣遣ひせずと、少しも早う

權助　其あなたの受合ひは、わしやアすつきり呑み込めない。何處の國にか去年の二月、コレ見なさい。（ト左の小指を出し）指を一本棒に振つて、してやつた仕事の方も、それなり今に圓通寺、なんぼ代物は此方に有つても、金がなけりやア可笑しくごんせぬ。

惡五　成る程、それも尤も至極。併し近々小判の山。

權助　又ずらされると知りながら、そんなら次手にその文を

源吾　首尾よく屆けて好い便りを、照門樣へ。

ト文を取次ぎ權助へ渡す。權助文を見て、思ひ入れあつて行かうとする。

惡五　コリヤ………して、大切な都鳥は

權助　その都鳥はこの通りにして、金と引替へ。

ト守りのやうにして襟にかけたる一卷を見せる。この時石段より甚太夫、何氣なく出て、思はずこれを聞いて

甚太　ナニ、それがお家の重寶とや。

ト云ひながら手をかける。

權助　エヽ、箆棒親仁め、放しやがれ。（ト振り拂ふ）。

甚太　イヤ、大切なるその一卷、ちよつと身共が

　　ト又手をかけるを

權助　置きやァがれ。

　　ト權助甚太夫を手拭にて締殺す。惡五郎、源吾、あたりへ心遣ひの思ひ入。甚太夫苦しみその儘落入る。

　　要らざる事を

二人　して、その死骸は

權助　花見の醉どれ。そこまで送つて進ぜませう。（ト肩へ引つ掛ける。）

二人　こりや出來た。

權助　なにサお前。………山寺のや。

　　ト謠を謠ひながら、甚太夫を生醉にして下座へ入る。双盤の鳴り物。

惡五　中々不敵な、惣太とやら。

源吾　彼の都鳥の一卷も、その期に及んであなたのお手から、尋ね出せしと差上げなば、吉田の家國一つにして、照門樣には榮華の花嫁。

惡五　あの櫻姫を今の艶書で、得心させて宿の妻。その折からは源吾貞景、望み次第の立身出世。

トこの内下座より兵内出で來り

兵内　そのお話へ貞景樣、拙者もお加へ下さりませう。

源吾　ヤ、其方は牛田兵內。

兵內　思はずこれへ參りかけて、好い談合を聽く端か、昨夜は部屋の行燈へ、丁字頭もこんな吉左右。何ぞそれぞれ御用もあらば、仰せつけられ一足飛びの、お取立てを偏へによろしう

源吾　ムウ。兼ねて心を知つたる其方、願ひとあれば、照門樣。

惡五　御身が取持ち、聞き屆けた。

兵內　すりやアノ、拙者を

惡五　奉公始めは櫻姫、艶書で靡けばその通り。否と申さば身も共々、隙を窺ひ

兵內　引ッ擔げて

源吾　コリヤ。

ト思ひ入れ。双盤になり、三人下座へ入る。ト石段より、バタ〳〵にて松若走り出る。軍助追つて出て來り、松若を引留め

軍助　コリヤ、松若樣、あなたはどれへ

松若　サア、何を云うても都鳥、今更何と申し譯、相立ち難き吉田の家名、明日をも待たず松若が、科をこの身に如何やうとも、負うたる後にて一卷を、尋ね求めて姉上を、お勸め申して家再興。よしなに頼む。(ト振り切つて行かうとする。)

軍助　イヽヤ、滅多にあなたをば(トよろしく引留め)モシ、世の盛衰とはいひながら、兎ても角ても一卷の、紛失なせし上からは、とてもお家は一度退轉。さすればあなたのお命を、捨てゝ詮ない寶の行くへ。詮議なすまでそのお身を

松若　なんと。

軍助　モシ、七郎樣より(ト囁き)この奴めが

松若　ナニ、すりや我れを密かに落し、まつその如く申し上げ、その内一卷詮議して

軍助　めでたう吉田のお家再興。それゆゑ、これより武藏の國に住居ある、山田郡治兵衛樣方へ、あなたをお供いたせよと、兼次樣の仰せつけ。

松若　ムウ。さういふ事なら暫しの内、山田が方に身をひそめ、時の到るを相待たん。

軍助　然らば直樣、若君樣。

松若　軍助參れ。

ト両人行かうとする。この時源吾、ツカ〳〵と出て松若を引戻し

源吾　イヤ、松若どの、待たつしやい。ア、、聞えた。内意を受けた照門どのへ、申し譯無さの駈落ちなら、滅多にやる事罷りならぬ。

松若　誰かと思へば臣下たる、松井の源吾貞景ならずや。

軍助　主人の御歸館遊ばす先、道を支へてこりやあなたには、麁相のお詞、何とも以て

源吾　ヤア、下素奴め。おのれを引敷き、何もかも

ト松若へかゝるを、軍助支へて

軍助　主人を手籠めに。こりや不敵な

ト引退ける。立廻りに松若、石段より舞臺へ逃げ行く。源吾追ひ行くを軍助追ひ駈け、立廻りに松若、額につけたる傘をさして舞臺より飛ぶ。源吾續いて行きかけるを、軍助留めて

爰構はずと、あなたには

松若　さうぢや。

ト双盤にて松若一散に向うへ入る。

源吾　松若丸を逃がしたおのれ。

ト抜いて切りかゝる。軍助立廻りながら

軍助　天命知らずの不忠のこなた。

源吾　何を小癪な。

ト切つてかゝる。立廻りに軍助、源吾を當てる。源吾「ウン」と悶絶する。

軍助　お跡を慕うて。

ト舞臺より飛ぶ。チョンと木の頭。源吾心づき、「ムウ」と思ひ入れ。この途端宜しく、拍子　幕

ト軍助向うへ入る。双盤のツナギにて直にこの幕を引返す。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて三間の屋體。丸柱竹緣附き、伊豫簾を掛け、下の方に掛樋を仕掛け、蜘手に水桶、屋體の左右柴垣、山吹の盛り。いつもの所に竹簀戸。後ろは小高き山の張り物。所々に櫻の立ち樹。日覆よりも枝櫻の吊り枝、すべて新清水長谷寺櫻谷草庵の體。爰に長浦、待乳、淺茅、綾瀨、關屋、宮戸、いづれも折本の觀音經を持ち、銘々稽古して居る見得。時の鐘のだら、琴唄にて幕明く。

皆々　爾時無盡意菩薩卽從座起偏袒右肩。

長浦　なんと皆さん。今までよう見た、あの組繪の觀音經とはこりや違うて、唐人の寢言聽くやうに、辛氣

なものぢやござんせぬか。

待乳　サア、長浦様の仰しやる通り、讀む事は讀むけれど、何の事やらスツキリと
淺芽　こりや坊さんに問うたなら、その譯が解るでござんせうわいな。
綾瀨　なんの、この新淸水の淸玄様を退けて、その外の坊さん達に
闇屋　それいな。お經の事をよう知つたは、一人も無い顔附ぢやぞえ。
宮戸　その癖、豐後や潮来は、よう覺えてゞござんせう。
待乳　大方みんなあの衆が
皆々　生臭坊主であらうわいな。
長浦　これ〳〵、お前方。その様に惡う云はしやんすな。あれでも一老の殘月様は、大抵尊い坊さんぢやないぞえ。さうして姫君様には、道成寺の唄にある、煩惱菩提の道とやらにお入りゆゑ、附々のわたしらも、せめて觀音經なと覺えて、後生をお助け申すのぢやに、それにお經は讀みもせず、坊さんを惡う云はしやんして
淺芽　それでも初め唐人の、寢言とあなたが
長浦　そりや、いつえ。

皆々　只今。

長浦　ア、嘘ばつかり。

皆々　アレ、白々しい顔わいな。

ト思ひ入れ。笙の入りし合ひ方になり、向うより知光、殘月、入山、久盛、玄海、榮昌出で來り、直に舞臺へ來り

殘月　師の仰せに依り、先立つて、我れ〳〵參上

坊皆　それへ罷り通りまする。

ト内へ入る。女形皆々下手へ來り

長浦　これは〳〵殘月さん。ようマアほんに

女皆　すりや、もう御剃髪の

殘月　イヤ〳〵。剃髪の儀は、放參の鐘を合圖、師の坊參られ授戒の後。

知光　我れ〳〵が香水を以て、大濁の垢を去り、煩惱の穢れを除き

入山　衆僧一度に經を讀誦し

久盛　彌陀稱名の聲を勵まし

玄海　凡身を以て忽ちに
榮昌　淸淨佛種の發心を勸む。
殘月　そのためにこそ只今入來。この旨急ぎ姬君へ
坊皆　申し上げられ下されい。

ト簾の中にて

櫻姬「今日のみと見るに淚の十寸鏡、馴れにし影を人に語るな。」

ト琴唄になり、簾上がると、內に櫻姬、白の廣袖にて、結構なる鏡臺に向ひ、五百崎に髮を取上げさせながら、經文を持つて讀み居る見得。衣桁に小袖、その外種々の調度飾りあり。升次控へる。

長浦　姬君樣。
女皆　お聞き遊ばしましたか。

ト櫻姬思ひ入れあつて

櫻姬　身の憂き事に姿をば、變へたき願ひもやう／＼に、今日といふ今日淸玄樣の、聞濟みあつて、剃髮染衣。
五百　ほんにこれまで日々に、上げ參らせし黑髮を、今日はお卸し遊ばすゆゑ、せめて名殘のお髮をと、

お願ひ申し取上げる、櫛笥の露も涙にて、手先ももつれいとゞ猶、不調法なは幾重にも、御免なされて下さりませい。

櫻姫　いや／＼。その心遣ひに及ばぬ事。ナニ長浦、これに有合ふ小袖、調度、尼になる身に無用の品、形見と思ひ、それ／＼に、計らうて取らせてたも。

長浦　エヽ、有り難うござります。

櫻姫　それで心もさつぱりと。ソレ、皆の者、用意の品を

女皆　畏りました。

ト合ひ方になり、皆々奥へ入つて、白木の机に香爐、花立、樒の花、蠟燭など立て、白木の盥手桶を持つて來り、櫻姫が前へ並べ立てる。殘月思ひ入れあつて

殘月　なんと姫君、今が性根の定明。一度御出家なされてから、髮を生すは如何なもの。よし又その氣がござらずとも、その美しさで人が捨てゝは。それよりは愚僧が申す事を辨へてナ、決して／＼、御剃髮は

トいろ／＼思ひ入れあつて留めるこなし。長浦思ひ入れ。

櫻姫　これまで思ひ定めた事、なんの今更止まらうぞ。片時も早う剃髮を

殘月　ヤレ、苦々しい。

　ト女形皆々櫻姬を見て

女皆　おいとしう存じまする。

　ト櫻姬、小さき袱紗包みの以前の香箱を出し

櫻姬　この香箱の片しこそ、自らが身の善知識。エヽ、有り難い……サ、衆僧達、とく／＼香水。

坊皆　承知いたしてござる。（ト皆々二重へ上り、各々合掌して）佛說是普門品示衆中八萬四千衆生。

　ト經文にかゝる。皆々思ひ入れよろしく、誂への鳴り物になり、向うより權助、捨ぜりふを云ひながら、ツカ／＼と出て來り

權助　エヽ、煙管を落して尋ねるので、素敵に手間を取つた。（トこんな事を云ひながら舞臺へ來り）モシ、お賴み申します／＼。

綾瀨　誰ぢや／＼。

權助　イエ、お使ひに參つた者でござりまする。御免なされませ／＼。（ト云ひながらズツと內へ入り）こりやアなんだ／＼。アヽ、聞えた。お姬樣が御出家なさるので。モシ／＼／＼あなた方、ちつと待つて下さいまし／＼。

ト皆々何事とためらふ。女形皆々見兼ねて

五百　コレ〳〵。下樣の分際で、姬君樣の御前へ立ちはだかり

女皆　早うこの場を下がらぬか。

權助　ハイ。ハイ。

長浦　ほんにさうして、爰へは何しに來やつたぞ。

權助　ハイ、私しはお姬樣へお使ひに參りました。モシ、お姬樣、これをちよつと御覽じて

ト懷より以前受取りし文を出して、櫻姬が前の机の上に置く。

長浦　コレ、執次はなぜ賴まぬ。慮外者め、早うこの場を下がらぬか。アノ爰な、慮外者め。（ト屹度云ふ）

權助　ハイ〳〵、下がります〳〵。

ト此方へ來る。櫻姬は始終觀念のこなしにて俯向き居て、この時フト今の手紙の上書を見て

櫻姬　「櫻の君へ入間より。」（トその儘讀む。）

長浦　ムウ。すりや最前わたしへも賴まれた、あの入間惡五郎樣の

權助　左樣サ。お文の使ひに參りました。

ト櫻姬これを聞き、思ひ入れあつて

櫻姬　今清淨無爲の道に入らんとする折から、愛慾輪廻の文玉章、目に觸るゝさへ忌はしい。ちやつと外面へ捨てゝたも。

權助　アヽもし〳〵。そんならどうでも御出家なさる御身だに依つて、こんな物は穢らはしいとかえ。

櫻姬　煩惱の罪深き、その水莖は、早う取退きや。

女皆　畏りました。(ト皆々立たうとする。)

權助　オツと待つて下さりませ。モシ、ならないは色事の習ひ。惡五郎樣も一旦云ひ號けのあつたのを、御變替へなされて今となり、斯うして文を遣るのは、よく〳〵の事なりやァ。それをなんぼ御出家をなさればとて、封も切らず、手も附けずに、捨てゝしまふとはお情ない。マア、開いて中を御覽じて、何となりと御返事を

知光　アヽ、こりや〳〵男子。目に觸れ耳に聞くさへも、佛道にては五逆罪にも等しき艶書。手に觸れる事勿體なし。

殘月　放逸邪慳も事に依る。聞いて居れば野方途も無い無法者。その文を見せてモシひよつと、どういふ事にかなつて見ろ、この一老が念掛けた、イヤ念佛……行者となるべき姬君に、そんな物は、ならぬ〳〵。

坊皆　歸り居らぬか。

權助　そりやハヤ、御尤もではござりまするが、何もあなた方にお目にかけろと云ふぢやァなし。モシ、お姫樣、ちよつとマァ御覽じて、何なりとも

長浦　エヽ、アタしつこい。下がらぬか。

櫻姫　一旦緣も切れ果てし、殿御の筆に心動かし、いなや云はんも罪障ならん。

權助　そんならどうでも御返事は

ト承知せぬを喜ぶ思ひ入れ。この內五百崎思ひ入れあつて

五百　憚りながら姫君樣、よう思し召かへて御覽遊ばせ。爰から見えぬ後の世を、お心にお掛け遊ばして、浮世をおいとひなされうより、御繁昌にてお出での內は、人並々のお樂み。幸ひ入間樣よりして、お文をお送り遊ばしたは、お身にとつての良いお吉事。

待乳　ほんにお前の仰しやる通り、春の胡蝶や秋の鹿。

淺茅　女夫々々があればこそ、菜種に狂ひ、紅葉に寄り

綾瀨　面白さうに見ゆるのも、戀といふ字のあればこそ

關屋　妻戀ふ猫の樂みも、生ある者の習ひなりや

宮戸　皆それ〴〵の夫定め。

長浦　云はしやんすればそんなもの、高いも低いも世の中に、女は男を持たいでは、生れた甲斐はござりませぬ。ほんに殿御と妹と脊が、この世からなる極樂淨土。それぢやに依つて御剃髮を、お止まり遊ばして

女皆　御婚禮を遊ばしませい。

ト權助腹の立つ思ひ入れ。櫻姫始終珠數を爪繰り居て、この時思ひ入れあつて

櫻姫　又してもその樣な、よく〳〵善緣なればこそ、有り難き御法を聞き、遂に蓮に到らんこの身。色慾の紲にひかれ、長く惡趣に入られうか。重ねて云うてたもんなや。

權助　モシ、〳〵お姫樣、そりやァあんまりお心強いといふものだ。人には思ひといふがござります。モシ、皆さんお聞きなさい。この頃雪の下のさる內へ、幽靈が出ますとサ。

女皆　そりやマァ、どんな事ぢやえ。

權助　サァ、どうだと聞けば半四郎に、生寫しな娘があつて、近所の二才が張りかける。その內にも取分けてのろい男が、つけつ廻しつ口說いても諾かないゆゑ、それからぶら〳〵戀煩ひ、とう〳〵其奴が死ぬとその儘、幽靈になつて娘の所へ、晝日中に出かけるさうサ。サァ親達は亂騷ぎ、娘

は癪を起すやら、それから毎日出かけるゆゑ、加持祈禱はいふに及ばず、いろ〳〵やつてもせう事無く、千法盡きたその所へ、江戸の勇みが行きかゝつて、ナニ幽靈、面白い、この頃久しく出會はない。會つて一番話を聞かうと、直に娘の所へ行つて、今か〳〵と莨を吹いて待つうちに、青い火がぱつと出ると、後から色の眞蒼な、瘦せた男がひよろ〳〵と出る所を、飛かゝつて毆り倒し

ト話に乘つて片肌脫ぐと、鐘に櫻の刺青ある。皆々この話の中に宜しくあるべし。

グツと片肌脫いで、斯う取捕まへて、ヤイ、間拔幽靈め、うぬは夜こそ出るものだに、なぜ晝中に出やァがつた、飛んだ氣紛れ幽靈だと、拳をくらつて幽靈も、哀れな聲で云ふ事にやァ

皆々　何と云うたや。

權助　夜出るのは怖いと申しました。

皆々　ハヽヽヽヽ。

ト笑ふ。櫻姫フト權助が腕の刺青を見つけ

櫻姫　ヤヽ、その刺青は

ト權助これを聞いて

權助　ホイ、これはしたり。御免なすつて下さいまし。

序幕　　序幕



ト肌を入れる。櫻姫、權助が顏をつく〴〵見て

櫻姫　ムウ。そんならアノ

ト思ひ入れあつて、思はず珠數を取落す。誂への合ひ方になる。

知光　思はぬ障りに法施の遲滯、イザ、各〻

坊皆　心得ました。

ト皆々立ちかゝる。この内櫻姫思ひ入れあつて

櫻姫　アヽ待つて

坊皆　何でござるな。

櫻姫　さアノ。それ〳〵、空言にもせよ、執念を止めし今の話を聞き、耳を穢して何とやら。迚もの事に淸玄樣、お出での折から今一度、お十念を受けての後、香水を以て五濁とやらの垢を落さん。

マアそれまでは次へ行て、休息したがよいわいの。

坊皆　すりや我れらには

殘月　コリヤ〳〵、何も申されな。姫のお望み、次にて休息。

長浦　殘月樣には、まだお聞き申したい事もあれば、わたしと一緒に次の間へ

知殘　然らば姫君。

長浦　斯うござんせ。

ト合ひ方になり、長浦先に、皆〳〵附添うて下座へ入る。櫻姫思ひ入れ。

櫻姫　ほんに、長浦がいひつけし形見の品、それ〴〵持つて、次へ立ちや。

女皆　有い難うござります。(ト立ちかゝる)。

櫻姫　コレ〳〵、自らは御經讀誦し、暫し心意を濟ますうち、爰へは必ず

女皆　畏りました。

ト合ひ方になり、女形皆々合點の行かぬ思ひ入れにて奥へ入る。この内權助、莨のみ居て

權助　ヤレ〳〵、坐つて居たら眠氣がきざした。ドレ、迚も居たところが、惡五郎樣の事は埒は明くま

い。お文を持つて歸りませう。

櫻姫　イヽヤ、其方は去なされぬ。マア待ちや。

ト權助思ひ入れ。

權助　ハイ、御用でもござりますか。

櫻姫　サア、用がある程に、ちやつと爰へ。

權助　ハイ。（ト怖々緣側の所へ來り）參りましたが、何の御用で

櫻姬　苦しうない。爰へおぢや。

權助　ハイ。でも、それへはあんまり

櫻姬　ハテ、大事ないわいの。

權助　へイ、左樣なら御免なされまし。（ト屋體の上へ上がつて）參りましてござりまする。

櫻姬　何をマアその樣に。サア、どうぞ云うて聞かしてたも。（ト側へ寄る）。

權助　そりやァ何を私しが

櫻姬　隱してたもんな。其方の身の上。

權助　エ。（ト思ひ入れ）。

櫻姬　これを見てたも。

ト左の袖を捲ると、權助の通りに、鐘に櫻の刺青して居る。誂への合ひ方。權助これを見て

權助　ヤ。この刺青は

櫻姬　其方の腕に

權助　ムウ。そんならこれをあの折に　（ト我が腕へ思ひ入れ。櫻姬取つき）

櫻姫　これ。それから跡で段々と、一日二日と經つにつけ、次第に床しさ懐かしさ。忘れもやらぬ去年の春、まだ如月の稍寒き、夜半の枕にこつそりと、忍ぶ男の顏さへも、頭巾眞深に見え分ず、怖うてぞつと慄ふ手を

權助　否應無しに引寄せて、まだ初物の七十五日、生き延るとは延喜の好い、無理な仕事に思はずも、手間を取るのも思案の外、鷄のなく音に驚いて、その儘ズッと出で行くを

櫻姫　心づかねば引とむる、はずみに腕の入れ墨に、鐘に櫻も有明の、灯に一目見たばかり、どんな顏やら殿御やら、知らず別れたその跡で

權助　泥棒騷ぎに驚いて、そんならあれがと嘸悔り。然し此方は可愛さが、まして年端も十六七、どうぞも一度あんな目に

櫻姫　あうて心に恥かしい、又その中にどうぞして、逢ひたい事も折に觸れ、たとへ良からぬ營みを、する人とても姫御前は、一度なりとも肌觸れて

權助　外に男は持つまいと、思つたところが名所も、知れまいとつて夜盜の仕業。

櫻姫　もしその内にひよつとして、めぐり逢ふべき印にと、我れと我が手へ此やうに

權助　わつちと同じ入れ黒子。さうとは知らずどんな氣で、居るやらすびいて見ようぞと

櫻姬　それゆゑ先刻の玉章も

權助　我れと望んで入間の使ひ。

櫻姬　廻り逢瀬も

權助　けふ鎌倉。

櫻姬　不思議な緣も

權助　あるものだなア。

　　　ト互ひに思ひ入れ。誂への音樂になる。

櫻姬　まだ云ひたいはその折に、因果な胤を身に宿し、さがなき人の口の端も、如何と思ひ煩ふうち、この鎌倉へ家督の願ひ。好き折柄と松若に、添うて下りしその日より、佛門歸依と云ひ立てゝ、爰に遁れて腰元にも、隱し包んでやう／＼と、長浦一人の計ひにて、やす／＼みどり子生み落し

權助　ナニ懷妊になつた。アノたつた一度で。飛んだ話だ。さうしてその餓鬼は

櫻姬　サア、守り育てんも憚るこの身。藁の上よりこれもあの、長浦が知るべとやら、賤の手しほにある事を、附々とても誰あつて、知らぬ男へ心を盡し、緣組いとふばつかりに、勿體ながら佛を僞り、剃髮授戒の際となり、逢うたも盡きぬ二人が仲。

權助　そんなら坊主になる事は
櫻姬　なんの斷うして逢ふからは
權助　そんなら矢ッ張りお姬樣か。
櫻姬　アレまだそんな
權助　さうして何だえ。

　　ト云ひながら櫻姬へしなだれる。櫻姬顏を隱す。

　コレサ、何だよ。
櫻姬　其方の女房とやら。

　　トやう／＼云ふ。權助思ひ入れ。

權助　でも、おれが身は知る通り。
櫻姬　アコレ。自らさへ云はぬなら
權助　マアそりやアそんなものサ。
櫻姬　そんならこれから
權助　女房だぞえ。

櫻姫　ハテ、なんの僞り。

權助　併し折助にお姫樣。飛んだ夫婦だ。（ト云ひながらあたりを見て）久し振りだの。

ト思ひ入れ。獨吟になり、これより權助、櫻姫色合ひ。いろ〳〵あり、簾下りる。これまでに唄一ぱい。直に音樂になり、下座より殘月出で來り

殘月　エヽ、いま〳〵しいあの婆アめ。金になるばつかりで、附合つては居るものゝ、小胸の惡い。これこれ、マアこの起證の書きやうわえ。（ト以前の起證を出し）アヽ、氣持がわるい。エヽイ。

ト胸の惡きこなし。合ひ方になり、手水鉢にて含嗽をするとこ、簾の側へ寄り、如何にせしか、俄に慄へ出し、緣側より轉げ落ち悶絶する。ト、變つた合ひ方になり、向うより惡五郎先に、兵内附いて、出で來り、花道にて

惡五　あの權助めが音信を、相待つ内に、もしひよつと、姫が剃髮する時は、悔んで返らぬ詮ない事と、其方を同道したが、權助めは何をして居る事だやら。

兵内　何の〳〵照門樣、否やの返事聞くまでなく、手短かに引ぱらつて、お背負ひなさるがいつち近道。

惡五　マア、何はともあれ内の樣子を。兵内參れ。（ト矢張り合ひ方にて舞臺へ來り、戸口より内を窺ひ）誰も居らぬか。幸ひ〳〵。

ト內へ入る。この時寺鐘になり、バタ〳〵にて向うより粟津七郎、狼狽しく走り出て來り、惡五郎を見つけ

七郎　照門樣にはこれにお出で。お跡を慕ひ、やう〳〵これまで。

惡五　何者かと存じたら、粟津の七郎。仰々しい、こりや何事。

七郎　サア、これまで參るは餘の儀に非ず。松若君の御供なし、內見用意と心急き、大倉ヶ谷を通る折柄、六本杉のあたりより、俄に魔風吹立つて、松若君を引包み、あはやと見る間に忽ちに、お行くへ知れぬはコレ必定、天狗の業と手分けなし、尋ね申せどかいくれに、家の重寶都鳥、一卷もろとも行くへ知れず。それゆゑあなたへ早速言上。どこをお尋ね申さんも、天狗の所爲のせん方なく、拳を握る口惜しさ。照門樣、御推量下されい。(トわざと無念のこなし)。

兵內　ハア、そんならアノ松若樣には、大方天狗の若衆にでも

ト惡五郎嘲笑つて

惡五　ハヽア、巧んだり、拵へたり。少將横死の砌より、紛失なせし都鳥、明日內見と事極まり、仕方が無さに天狗の業。その手に乘るべき惡五郎でない。アノ妄な僞り者め。

七郎　イヽヤ、此方とても家の大事、何しに虛言。但し又あなたの方に、一卷を、御所持なされて虛

言との　　ト惡五郎つかへて

惡五　サア、さうぢやァなけれど

七郎　如何でござるな。

　　ト屹度思ひ入れ。この時簾の中にて

櫻姫　必ず二世も女夫ぢやぞえ。

惡五　ヤア、あの聲は櫻姫。

兵内　正しくこれなる簾の内。

　　トこの時殘月息づく。

惡五　ソレ、詮議しろ。

　　ト兵内行かうとするを

七郎　イヤさうは

　　ト立廻り。この内殘月、簾の中へ駈込む時、懐より起證を落す。七郎取上げる。三人屹度とまるト

　　簾の中にて

殘月　寺院を穢した櫻姫。

トばた／＼、七郎思ひ入れ。サッと簾上がると、殘月、しどけなき體の櫻姫を捕へ、片手に袱紗包みの香箱を持ち出る。七郎驚き

七郎　ヤヽ、すりや姫君には

殘月　不義いたづら。

兵內　イヤ、飛んだ茶番だ。

殘月　動かつしやるな。

ト引据ゑる。惡五郎自團太踏んで

惡五　エヽ、腹の立つ／＼。

ト思ひ入れ。この時下座より、長浦はじめ女形殘らず出で來り

長浦　ナニ姫君がいたづらとや。

女皆　ほんにあられぬこのお姿。

櫻姫　皆の手前も、恥かしいわいなう。（ト思ひ入れ）。

惡五　アレ恥かしい。エヽ。して／＼殘月、相手めは

殘月　サア、素早く逃げて岨づたひ。なれども跡に殘つた證據。

惡五　ドレその證據を

殘月　この中に(ト渡す)。

七郎　ナニその中に(ト取らうとするを殘月隔てる)。

三人　エヽ、寄らつしやるな。

清玄　ヤレ仰々しい。鎭まられよ。

ト音樂になり、正面の襖の内より清玄出て來る。ト知光その他の坊主、殘らず附添ひ出る。

七郎　ヤ、あなたは清玄阿奢梨樣。

長浦　ほんにどうして

女皆　この所へ。

ト清玄思ひ入れあつて

清玄　最前剃髮染衣の事、放參の鐘を合圖と、申し遣はし置きぬれども、水に喩へし女の性、得道如何と裏道より、庭へ來つて窺ふに、期に臨んで事を誤つ。これ未た佛因の至らぬところ。さあれば受戒なさゞるうちは、未だ凡身の櫻姫。不義とてさのみ、咎むるには及ばぬ。

惡五　イヽヤ、さうでない。受戒せぬゆゑまだ俗なら、吉田の娘櫻姫。
兵內　殊に佛地を穢した科、この儘には置かれますまい。何は兎もあれ包みの中。
惡五　ドレ。

ト袱紗包みを開かうとする。七郎留めて

七郎　ハテ、相手立てねば不義にもならず。そこへ證據を引出して、詮索あるは照門樣、ちつと大家の器には、お似合ひなさらぬ。先づその儀は。
知光　いかさま、清玄樣もあの如く、宥めござれば、お見捨て置かれこの儘に
惡五　そこが出家は出家の料簡。武家に於ては
兵內　早く證據を

ト惡五郎手早く袱紗を開き

惡五　ヤ。こりや香箱の、蒔繪は表に忍の模樣、裏に書いたは清玄。ムウ。この清玄といふは。ハヽア讀めた。清玄の文字を音にて讀めば清玄。すりや、不義の相手といふは、清玄、おのれだな。

ト引捕へろ。皆々思ひ入れ。

清玄　こりや、照門どのには愚僧を捕へ

坊皆　如何召さるゝ。

惡五　オヽ、不義の相手の淸玄阿奢梨。

皆々　ヤアヽ。

七郎　こは物に狂はれてか。道德高き淸僧を

五百　不義の相手と仰しやるは

殘月　それ〳〵、何ぞしつかりと

惡五　證據は卽ち香箱の、裏にしつかり淸玄と。

殘月　ヤア〳〵〳〵。そんなら愚僧が渡したその。ホヽホイ。

ト思ひ入れ。七郎合點の行かぬこなし。櫻姬この內思ひ入れ。

櫻姬　アコレ。その香箱は自らが

女皆　ほんに最前（ト思ひ入れ。

要五　何を〳〵。サア淸玄、櫻姬が臥つたる傍ら、落ちてあつたるこの香箱。不義の證據であるまいか。

櫻姬　どうしてあなたが其やうな。みだらな事を。勿體ない。

淸玄　まことや男女の愛情は、倶に臭骸を抱くとやら。悟りきつたる古への、大道心にも情けの道、踏

み迷うたる例はあれど、我れに於てはなどてこの、櫻姫に戀慕せん。殊に證據の香箱こそ、姫が開きし手の中より、出でたる事は人々も、最前よくも存ぜし事。
長浦 それ〳〵、あれは
女皆 私しども〳〵
坊皆 我れ〳〵ども〳〵一統に
皆々 よう存じて居ります。
七郎 斯く人々も存ぜし香箱。すりやこの上に清玄阿闍梨へ。
惡五 イヽヤ、彼れらは櫻姫のかしづき。清玄が弟子ども。緣者の證據で、役には立たない。
殘月 そんならどんなに、申し譯いたしても。
惡五 この香箱に清玄と、書いてあるのが、何より慥かだ。
清玄 すりや、これゆゑに愚僧が汚名は
敵役 遁れぬ證據。
櫻姫 イヤ〳〵。たとへどうあらうと、清玄樣には不義はない。
惡五 そんなら外に相手があるか。

兵内　あるならそれをキリ〳〵と
悪五　清玄これでも云ひ譯が
清櫻　サア
兵內　姫の相手は
清櫻　サア
五人　サア〳〵
悪五　一言一句返答あるまい。兩人返事は、ド丶どうだ。
　　　ト香箱を打附ける。殘月思ひ入れあつて中へ入り、これを取上げ
殘月　サア〳〵、大事だ〳〵。モシ、お師匠樣。斯ういふ慥かな證據があれば、不義の相手は清玄樣、あなたでござりませう。（ト清玄思ひ入れ。）ハテ、人を助ける。ナ、サ、人を助ける出家の身で、大それた不義いたづら、お姫樣もお隱しなされまするな。コレ、この香箱の、清玄樣でござりませうがな。
悪五　そんならいよ〳〵、不義の相手は
殘月　さういふ證據があるからは、こりやモウ、寺を開かねばなりますまい。

知光　モシ、清玄様、仰せ分けられは

坊皆　ござりませぬか。

ト清玄思ひ入れあつて

清玄　かの佛經に諸佛念衆生不念佛、まつた唐土のめいかいといへる沙門、地獄に墮落し、詩文をなす。名譽の學道たりとも、破戒の罪の免かれず、長く墮獄の苦しみを受く。それは心となしたる破戒、我れは正しく人の爲め。

殘月　破戒墮落でござりませう。不義の相手は、清玄だワ。

皆々　エヽ。

七郎　すりやこの場にて、御身の難題。

清玄　ア、コリヤ。われ云ひ解かばこの上に、姫に如何なる。サ、どこまでも

殘月　不義の相手は、清玄だワ。

ト惡五郎これを聞き清玄を引据ゑ

惡五　うぬ、爰な賣主坊主め。一寺を構へし僧の身で、女を犯した罰當りめ。ソレ、三衣を引剝げ。

ト突きやる。

兵內　心得ました。

殘月　今まで生臭坊主と知らず、師匠と崇めた腹癒せ。

兵殘　キリ〳〵衣を引剝いで

　　ト立ちかゝり、手ひどく清玄が衣を引剝ぐ。清玄よろ〳〵として倒れる。櫻姬思ひ入れ。

知光　こりや又、あんまり。

　　ト寄らうとするを

惡五　寄つたらうぬらも

三人　同罪だぞ。

　　トこれにて皆々躊躇ふ。

惡五　これから直に非人へ渡し、世上へ生恥晒させるが、女犯の見せしめ。

長浦　して、姬君樣は。

惡五　僧を墮した科といひ、寺院を穢した罪ありやア、直に身共が引立てゝ、邸に預り、御沙汰の上

女皆　すりやアノあなたを

櫻姬　自らを（ト思ひ入れ）。

惡五　それも一つは魚心、姫も少しは水心、ありさへすれば又身共が
七郎　よしなに御推擧下さらば、何卒吉田の
惡五　イヽヤ、武將を掠めし科あれば、家退轉は知れた事だ。
殘月　ハツ。惡五郎樣へ申し上げまする。何卒愚僧を、當寺の跡目の儀、宜しう
七郎　そりや叶はぬ、破戒の殘月。
殘月　どうしたと。
七郎　女犯の證據は、卽ち起請。（ト出して見せろ）。
長浦　それがどうして
　ト思ひ入れ。殘月取りにかゝるを
七郎　うぬも爰から、直に追放。
　ト突放す。長浦思ひ入れ。
殘月　エヽ、いま〳〵しい。（ト思ひ入れ）。
惡五　兩人、立たう。
　ト入相の鐘鳴り、花散る。清玄思ひ入れ。櫻姫こなしあり、ザツとなる。

清玄　有り果てぬ、命待つ間の程ばかり、憂事しげくよもほゆるかな。いづれの誰か犯したる、罪をこの身に戀ひ衣、佛の御弟子がこの有樣。

櫻姫　それもこの身にせん方なう、云ふに云はれぬ事ゆゑに、尊き御身を勿體ない、罪も報いも今の間に、廻る車は焦熱の、呵責の責より恐ろしき、無實の罪に誘ひし、憎い女子とお腹も立たう。そのお怨みは清玄樣、お赦しなされて下さりませ。

惡五　サア、櫻姫。

兵内　清玄、立たう。

清玄　思へば因果は歴然に、廻り來りし十七年、姫が煩ひ忽ちに、我が身に返る香箱の、印に依つて終身を、誤まつ事もこれ全く、一念こゝに白菊が

ト櫻姫を見る。

櫻姫　エ。

トぼうんと入相の鐘打切る。清玄思ひ入れあつて

清玄　過去宿業の

ト兩人思ひ入れ。チョンと木の頭。

惡五　立たう。

ト皆々思ひ入れよろしく、キザミにて拍子

幕　（作者　櫻田治助）

二幕目

稻瀬川の場

役名――清玄阿闍梨。吉田の櫻姫。入間惡五郎。粟津七郎兼次。松井の源吾。僧、知光。同、榮昌。局、長浦。奥女中、淺茅。同、綾瀬。同、關屋。同、宮戸。百姓、十作。非人、番八。同、桶七。同、づぶ六。同、小屋助。同、北八。

本舞臺、向う藪疊。眞中に非人小屋。左右松杉の立ち樹。よき所に誂への高札二本立て、すべて稻瀬川堤の體。靜かなる禪のツトメにて幕明く。

ト爰に番八、非人の頭、桶七、北八、小屋助、いづれも非人、焚火にあたり、面桶、竹の皮包みなど取散らし、德利にて茶碗酒を呑んで居る。北八は下の流れに大根を洗ひ居る。づぶ六、同じく非人にて立ちかゝつて居て

づぶ　コレ〳〵、頭、朝つぱらから大分やるが、何ぞ好い鳥でもあるか。

番八　知れた事よ。當なしにごんつくでも買つてたまるものか。マア、汝も爰へ來て、遣ッつけろ〳〵。

づぶ　そいつは何しろ面白い。
桶七　オイ〳〵、北八。貴様は何をして居る。
北八　おれか。おれはな、何も肴が無いから、畑へ行つて大根を引ツこ抜いて來て、鹽をつけて嚙つて見や。大抵うまい事ぢやァねえ。
小屋　オヤ〳〵、飛んだ物をてめえ食ふの。おらァそんな物を食ふと、直に腹が痛くなるといつて、父さんに叱られるワ。
北八　てめえに食さうとは云はねえわえ。
小屋　誰が食ふものか。（ト立ちかゝる）。
番八　コレ、てめえ達は、寄ると觸るといがみ合ひ。そして北八、てめえ小盜みを廢せ。ぐれの癖が止まないぞ。畑の物の番をするのがおいらが役だワ。今度から廢せ。
づぶ　時に頭、その當といふのは、何ぞ好い事かえ。
番八　てめえまだ知らねえのか。アレ、あの高札を見ろ。
づぶ　ほんに、新らしいのが二本立つて居るの。
番八　あれが、諸人が御佛のやうに云つた、新淸水の淸玄樣のよ。

づぶ　フム。
番八　飛んだ事よ。吉田のお姫樣、櫻姫樣と色事で、コレ、脫衣追放といふ科にあはつしやるわえ。
づぶ　オヤ〳〵、滅多に色事も出來ねえの。
桶七　案じるな。大丈夫だワ。
づぶ　おきやァがれ。
桶七　して、その淸玄樣と櫻姫樣と、色事をさつしやると、わつちらが錢になりやすかえ。
番八　さういふ譯ではないが、そのお姫樣には云ひ號けといつてな、御亭主のあるも同じ身の上で、淸玄樣と色事をさつしやつては、不義といつて、屋敷方ぢやァ切つてしまふわな。
皆々　エヽ。
番八　また淸玄樣は、間男も同然だに依つて、討ち首にもなるところを、お慈悲で兩方ながら今日一日、この稻瀨川の河原に晒し、跡は命代りにおいらが仲間へ下さるといふ、云ひ渡しがあつたわえ。
桶七　ハヽア、そんならその、淸玄樣も、櫻姫樣も
皆々　おいらが仲間入りをするのかえ。
番八　オヽよ。片方はお公卿樣のお姫樣、片方は大寺の住持だワ。仲間入りはしつかり、それを當に、

マア、口祝ひにごんつゝ極めたのよ。

皆々　そいつは奇妙だ。

北八　もつと酒を買つて來ようか。

番八　もう好い加減にしろ。又跡でゆつくりやらかせ。

ト五人酒盛りして居る。唄になり、向うより淺茅、綾瀬、關屋、宮戸、奥女中。絹羽織の侍ひ、挾み箱持ちの仲間附添ひ出て來り、花道にて綾瀬、侍ひに囁く。侍ひ呑み込んで舞臺へ來る。

侍　ちと物が尋ねたい。身共は吉田家の者ぢやが、今日この所に晒し者ありと承つた。その番を致す者は、其方達か。

皆々　ソリヤ、仲間入りだ〳〵。（ト立騷ぐ）。

番八　これサ、騷ぐな〳〵。へイ〳〵。即ち爰が場所でござりまする。番を致すは、へイ、私し共、仲間の者でござりまする。

侍　左樣か。へイ〳〵、あの者共でござりまする。

淺茅　これは皆の者大儀。我れ〳〵は吉田家の奥勤めの者。この度姫君、不慮の事にて、お命にも係はるべきところを、格別のお慈悲を以て、この稻瀬川に晒し、其方達が仲間へ下され、緣類はいふ

に及ばず、家來たりとも、必ず情をかけるなとの嚴しい仰せ。

綾瀬　上の仰せは重けれど、いはゞ高位の姫君樣、御覽なされし事さへなき、野伏りの非人。サア、其方達が仲間にとは、餘りといへばおいたはしさ。

鬮屋　附き〳〵の我れ〳〵が、心を籠めし贈り物。少しながら、受納してたも。

宮戸　それ、用意の品これへ。

侍　畏りました。

ト挾み箱より蒔繪の提重出して、能き所へ直す。淺茅、懷中より袱紗包みの金を出し

淺茅　これも些少ながら、皆の者へ。また姫君樣御不自由の事あらば、其方衆、よしなに。

番八　ヘイ〳〵。これはお有り難うござりまする。皆、お禮を申せ。

皆々　ヘイ〳〵。お有り難うござりまする。

綾瀬　コリヤ〳〵、斯樣な事いたしたなどゝ申す事、必ず沙汰なしにして下されい。

番八　ヘイ〳〵。それは猶更勝手でござりまする。これでも仲間も大分ござりまする。大抵では行屆きませぬ。

ト皆々禮をいふ。德利を振つて見たり、重の蓋を取つて見たり、いろ〳〵する。禪のツトメになり、向

うより知光、色僧衣、入山、榮昌、麻僧衣の露をとり、經櫃やうの物を擔ぎ出て來り、直に舞臺へ來り、知光、皆々を見て

知光　これは／＼吉田の女中方、この所へお出では、定めし姫君のお手當などゝ申す事でござらう。イヤ、御苦勞でござりまする。

淺茅　これは淸水のお役僧樣でござりまするか。さて／＼不慮な事にて

綾瀨　お互ひにお氣の毒と申さうか。

四人　お痛はしう存じまする。

知光　イヤ／＼、云うて下さるな。申せば申す程一山の瑕瑾。五百戒保つた今の世の、活如來といはれた淸玄阿闍梨、女に墮落などゝは、眞に興も覺め申した。我れ／＼も師弟の事、一山の者も皆恩を受けた者共、見捨てにもならず、非人どもへ賴みの品々持參いたした。入山、榮昌、その品彼れらへ、挨拶してくりやれ。

榮昌　ヘイ／＼。ヤイ、非人ども、それへ出い。

入山　コレサ／＼。その樣に橫柄に云はつしやるな。今まで施行を出したとは違ひます。今日からお師匠樣の仲間の衆でござるわえ。ハヽヽヽヽ。イヤ、愚僧等は新淸水の所化ぢや。あれに居るは役

僧でござる。今日、師の御坊この所にて面縛せられ、その跡はこなた衆の仲間へ下さるとの事。何分師の坊の事、頼み申す。

榮昌　ハヽヽヽ。只今は大きに麁相。この品は皆精進物ぢや。迚も墮落の師匠どの、魚を食つてもよいが、これは本の表向、天蓋踊り子、これから隨分すゝめて下され、お頼み申す〱。

番八　ハヽヽヽ。これは御如才のない御出家様だ。オヽ、これは〱、いろ〱有り難うございまする。ヘイあなた、お有り難うございまする。

知光　イヤ〱、禮は此方から。以來は何かと其方達が世話になるであらう。この金子も餘り些少ぢやが、仲間の者へ酒など買うて、くれ〲頼む。鎌倉御所の御祈願所、新清水の清玄阿闍梨ともいはれし御身が、見るもいぶせき乞食の仲間、何卒不自由の無いやうに、世話して進ぜてくりやれよ。

番八　エヽ、アヽこの金も。エヽ、有り難い。そりや、兩方で百兩あるぞ。どうだ〱。

づふ　ドレ、百兩といふ金を見せて下さい。

三人　おいらにも見せて下さい。

番八　コレ〱、やかましく云ふな。騷々しい奴らだ。乞食にやァ雷の落ちたやうだぞ。

ト皆々わや〱云うて居る。この内時の太鼓になり、向うより黑四天の組子、青網のかゝりし乘り物

を二挺昇いで來る。跡より松井源吾、上下、股立の形、打裂き羽織、股引の侍ひ二人附き出て來り、
直に舞臺へ來る。

源吾 見れば新清水の僧侶、吉田の女中方、相詰め居らるゝな。コリヤ、定めて一通りの科人のやうに思はれうが、輕からざる今度の罪科、情けをかくる事決して罷りならぬぞ。料簡違ひして、後々のお祟り受けぬやうにおしやれ。

淺茅 これは松井の源吾樣、お役目御苦勞に存じまする。中々持ちまして、仰せを背くなどゝ申す儀にはござりませねど

綾瀬 いはゞお宮仕へを致せし姬君樣に、暫しのお別れ。

關屋 たとへ御意は受けずとも、外ながらお目見得いたしたく

宮戸 今朝程より相待ちましたる事。この儀ばかりは

知光 愚僧なども師弟の別れ、棄恩入無爲とは俗緣の事、佛の御弟子となつたる高恩。さりながら、大勢は上へ恐れ、竊かの見舞ひ。この儀ばかりは、何卒御勘辨。

皆々 偏へにお願ひ申しまする。

源吾 身が爲にも主人の姬、何それしきと許す時は、片手打ちにも相成るまい。坊主女の長袖なれば、

暫しの猶豫はしてくれうワ。

皆々　すりやお聞き屆け下さりますか。

源吾　長うは相成らぬぞ。

皆々　エヽ、忝い。

源吾　ヤイ〳〵、非人ども。

番八　へイ〳〵。

源吾　先達て申しつけ置きたれば、萬事行屆いて居ような。

番八　殘らず用意いたしてござりまする。

ト番八指圖して、荒蓆を能き所へ二枚敷く。づぶ六、小屋助、桶七、北八、棒を持つて立ちかゝり、番をする見得。

源吾　ヤイ、家來ども。囚人これへ、引摺り出せ。

侍一　ハツ、淸玄御坊。

侍二　櫻姬。

二人　出ませい。

ト時の太鼓、合ひ方になり、乘り物の網を取る。上の駕籠より清玄、腰繩にて出る。下の駕籠より櫻姬、同じく腰繩にて出て、兩人顏見合せ思ひ入れ。女形、坊主立ちかゝるを、非人制する事。

侍二　下に居らう。

トこれにて清玄、櫻姬、蓆の上にヂッとなる。

源吾　いかに清玄。汝淸僧の身を以て、武將の御祈願所を穢す條不屆き至極。これに依つて打ち首にも相成るべきを、お慈悲を以てこの所にて面を晒し、百杖打つて脫衣追放。命代りに非人どもへ下さる段、有り難くお請け仕れ。また櫻姬も、云ひ號けある身にて出家と不義なし、都鳥の一卷詮議等閑に致せし段、女ながらも死罪たるべきなれど、家柄といひ、その儀なく、清玄と同罪に行はれ、同じく非人へ下さる段、お請け致されい。ヤイ、非人ども、向後はわいらが仲間だぞ。兩人の者、一緖に置く事は相成らぬぞ。姬、清玄もその段心得、有り難いとお請け致せ。

清玄　眞や、實相無漏の大海に、隨緣眞如の月宿らんとすれば、五塵六慾の風波起つて、これが爲めに影を止めず。われ白露に濡衣の、名を穢すのも前世の因緣、誰を怨まん由もなし。この身は更にいとはねど、只嘆かはしきは一寺の浮沈、それのみよしなに、お執成し下されい。

知光　師の御坊へ申し上げまする。一山の者の名代、我れ〳〵お暇乞ひに

坊皆　罷り出ましてござりまする。

淺茅　變り果てたる姬君樣

女皆　お痛はしう存じまする。

櫻姬　誰々も、斯くなり果てし自らへ、心遣ひは嬉しいぞや。聞きやる通りの上のお咎め。これとても皆自が、いたづらな心より、斯うした形で逢ふも今更恥かしい。この上とても、心遣ひは必ず無用。

淺茅　エヽ、お心強い。たとへいかやうのお身にならうとも、御恩を受けし姬君樣。

綾瀨　野の果、山の奧までも

闕屋　お宮仕へを致すやう

宮戶　お許しなされて下さりませ。

侍　エヽ、下がれ〳〵。

知光　イヤ、とんと失念仕つた。これは淸水にて一萬座の護摩をあげ、調合致した良藥。この行末のお身の上、お嗜みに御所持あられませう。

ト懷中より藥包みを出して遣る。淸玄取つて

淸玄　三界に家無き淸玄、藥も今は何かせん。さりながら、心を無足にせんも如何、忝う受けます。

師弟といふもこれまで。無實に陷る清玄が、おこと等の好き手本、必ず勸行怠る事なかれ。長居いたさば上のお咎め。皆々早く、歸山いたせ。

坊皆　でもこの儘に

源吾　キリ〳〵、立て〳〵。

知光　左樣なれば、阿闍梨樣。

清玄　緣あらば、重ねて。

知光　ハツ。

ト唄になり、知光はじめ坊主皆々南の口へ入る。この內下座の上下より、いろ〳〵の仕出し大勢出かゝり、晒し者を見て居る。非人皆々これを棒にて圍うて居る。向うにて

十作　サア〳〵、早くござりませ。

長浦　ハテ、忙しない。靜かにしやいの。

トてんつゝになり、百姓十作、抱き子を懷へ入れ、長浦を引ッ張つて出て來り、花道にて

十作　モシ〳〵。長浦さん。お前は名ばかりぢやァない、心まで長浦だの。この子がせがむわな。早く來なさい〳〵。

長浦　その様に云うたとて、わたしが乳はなし、どうなるものか。マア〳〵、何にしろ、お姫さんの晒されて居る所まで行きやいの。

十作　早くしてくんなさい〳〵。

ト舞臺へ來る。長浦、櫻姫を見て

長浦　爰だや〳〵。好い所に姫君樣、ようお渡り遊ばしましたな。

十作　コレ〳〵、その小笠原はよしなさい。お前、今ぢやァ屋敷を梵天國ぢやァないか。そんならこの子に義理はあるまい。約束の所までだ。返しますよ〳〵。

長浦　成る程、こりや其方の云ふ通り、もう主人でも家來でもないの。今まではお主ぢやと思へばこそ、わたしも世話してやつたれど、里扶持の滯り、もう返す〳〵の挨拶に困り果てた。お前は公卿の懷子ぢやに依つて知るまいが、一分二百宛はお定まり、それさへ遣らぬ筈、內證子ぢやもの。サア、里扶持の勘定さつしやるか。但しこの子を返しませうか。

十作　フム。そんならこの子の里扶持は、お姫さんの方から來ないのか。おらァ又お前が引摺り込んだと思つて居た。さういふ事ならよい。サァ、お姫さん。この子の里扶持、今貰ひませう。無いのかえ。無くば、その着物でも引剝いで、地切れにせにやァならない。

長浦 コレ〱、その樣に云はずと、マァわたしに任せて置きや。イヽヤモシ、お姬樣、今日から非人となれば、お手元お納戸もあるまいし、里扶持も出來ない。こりや手元から育つがよい。コレ、子供を抱いて居るとの。これからの渡世には大きによい。脊中にも一人居りますなどゝ云ふと、人の憐れみが附いて、一文でも餘計貰ふの。アヽ、マァわたしらは子もちに遣るわいの。ぢやに依して、非人とお芋は子が錢になるわいの。(ト赤子泣く)オヽ、だがよ〱。サア〱、返します。しかもお前は、まだ乳が出るといふ事であつた。サア、ほんのお母さんだよ。

櫻姬 アコレ、人の見る目も。これまでのよしみ、其方よしなに。

長浦 イヤ〱、どうしてこれがよしなになるものか。それとも金があるか。ソレ、又せびるわいの。サア〱、抱かんせ〱。

ト無理に抱かせる。赤子頻りに泣く。櫻姬ヂッとなつて乳を含ませる。

十作 サア〱、返したからは、これまでの里扶持、いま貰はう。

淺茅 その金わたしら(ト立ちかゝる)。

源吾 コリヤ〱、控へぬか。とめい〱。

侍 下がれ〱。

長浦　どうで金はない。着物でも引剝いで行かうかいの。
十作　それがいゝ〳〵。
　　ト兩人して櫻姫に立ちかゝり、着物を脫がさうとする。
源吾　ヤイ〳〵。見れば屋敷を暇の長浦、百姓體の者を召連れ、なに立騷ぐ。
長浦　貸を取りまする。
源吾　默らう。白痴者め。女は女とも思はうが、あの者まで、こりや狂人であらう。非人ども、追立てい。
北小　畏りました。
　　ト喰はすゆゑ、兩人悔りして
長十　これは怪しからぬ。貸を取るのだわな。
北小　エヽ、きり〳〵行け〳〵。
長十　ハテ、貸を取るのだわな。
北小　行け〳〵。
　　ト長浦、十作は櫻姫へ思ひ入れ。北八、小屋助、向うへ支へる。
源吾　ヤア、容赦いたせば、樣々な奴が出てうせるわえ。どこの國にか赤子を抱いて晒し者。エヽ、これ

は何時の間に餓鬼までへり出した事やら。主人とて容赦はない。清玄坊もそれへ出て、犬つくばいにかッつくばひ、畜生の成敗、百杖打つて諸人へ見せしめ。おのれから。（ト清玄を散々に打つ）サア櫻姫どの、云ひ號けある身で、大それた不義いたづら。人も多いにづく入とは、餘り物好き。好い目に會つたその代り、今源吾が、爰で又好い目にあはす。兩人とも、なんと骨身に堪やうが

ト清玄、櫻姫をしたゝかに打つ。淺茅、綾瀨ら思ひ入れ。侍ひ非人とめる。向うバタ〳〵にて粟津七郎、麻上下、股立、大小にて駈けて出て來り、源吾を突廻し、鞭を取つて屹度なる。

侍　狼藉者〳〵〳〵。

七郎　イヽヤ騷ぐな。狼藉者でないぞ。

源吾　御身は粟津の六郎が弟。

七郎　オヽ、同苗七郎兼次だワ。源吾貞景、なぜ主人を鞭打つのだ。

源吾　ハテ知れた事。三老よりの仰せにて、役に指れし松井の源吾、家來ながらも鞭打つ役。支へ立してお咎め受けるな。

七郎　オヽそれも大概知れて居る。姫に戀慕し吉田の家、押領せんなどゝ、及ばぬ望みをかけし輩が

源吾　ヤ。

七郎　皆佞臣の業。下世話にいふ針程の事棒とやら。源吾、御身また鎌倉にあつて、斯程の騒動、なぜ知らぬ顔してお居やるのだ。
源吾　ハテ、奥向の事、身共は知らぬ姫の放埓。
七郎　附き人の身で知らぬと云うて濟むまいが
源吾　サア
七郎　それに今更出かし顔、鞭打つ役も措かつしやい。
源吾　でも上よりの仰せなれば
七郎　家の騒動それとても、手を束ねて見て居よと、これもお上の仰せかな。
源吾　サア、そりやァ
七郎　主人を打つを、忠義と思ふか。
源吾　サア
二人　サア〳〵〳〵
七郎　主人をかばひお咎め受くれば、申し譯では身が腹いたす。聞分けなければ七郎が、この場に於て覺悟の狼藉。相手になりやれ、源吾貞景。

源吾　エヽコレ、死暴れの天竺浪人、身共が自由にもなるまい。この事言上する程に、首を洗つて待つて居ろ。

七郎　オヽ、おのれが首と替へぐ〵にしようワ。

源吾　うぬ、その雜言。

七郎　なにを。

源吾　只置く奴ではなけれども、これまでのよしみ、料簡してくれるぞ。ヤイ、姫づく入を取逃がすな。

皆々　ハヽア。

源吾　アヽコレ、折角遺恨の

七郎　ヤ。

源吾　ドレ、休息すべいか。

ト合ひ方になり、源吾下座へ入ろ。仕出し侍ひ非人ども段々入ろ。

淺茅　七郎樣、好い所へ、よう來て下さりましたな。

七郎　女中方、何のこれが好い所。斯樣な所へ參つたも、源吾めが胸中心元なく、案に違はぬ無道の振舞ひ。理を非に狂げて云ひ伏せても、返らぬは姬君のお身の上。モシ、姬君樣、たとへこの上、

櫻姫　野臥り非人となり給ふとも、都鳥の一巻尋ね出し、再び花咲く、お家の榮えを飛鳥川の、淵瀬と變る人心、源吾が不忠に似もやらず、其方兄弟が志、思やるところも恥かしい。皆自らがいたづらより。兄六郎に逢うたなら、よしなに詫びして、たもいなう。

淺茅　あのお詞を聞くにつけ、お心根を思ひやり

清瀬　私しども〻お痛はしう

四人　存じまするわいなう。

七郎　イヤ〱、女中方、これに居つては却つて人口も如何なれば、暫く。

四人　でもお一人でおいとしい

七郎　ハテ、却つて姫のお爲めにならぬ。翠帳紅閨の床に引更へて、今よりしては野の末か、人の軒端に彳みて、夜の物とて荒蓆、いかなる御艱苦なさるとも、一巻の詮議父君の、その仇人も、とくと御思案

淺茅　アモシ（トとめる）。

七郎　あられませう。

ト思ひ入れ。唄になり、七郎女形を制して下座へ入る。この内に仕出し、非人、侍ひも段々消えて、清

玄櫻姫殘る。

清玄 コレ、櫻姫どの。何の恨みで清玄を、不義者なりと云ひ立てゝ、かゝるいぶせき非人とまで、成り果つるのもこなたの詞一つゆゑ。思へば〳〵、恨めしいお人ぢやわいの。

櫻姫 そのお恨みを聞くにつけ、申し譯なる一通り。申せば長い事ながら、北白川に在りし時、云ひ號けある自らへ、心をかけ、忍びし心にほだされて、假の枕も只一度、情けの胤を身に宿し、跡にて聞けば情けない

清玄 サヽ、その樣子も聞きました。世上の噂にかゝらぬうち、この鎌倉へ下向とあつて、愚僧が教化に尼となり、世の雜說を避けんが爲めとは存ぜしが、よもやこの身に不義者の

櫻姫 サヽ、無き名おはせし自らは、御身の爲めに魔王とも、いはゞ生れて十七年、開かぬ手さへ法力にて、本腹なしたる大恩を、辨へぬにはあらねども、思ひがけない入間家より、使ひに見えしその男、姿形は變れども、都で逢うたこの子の親、身の上聞かんと思ふうち、不義者なりと見咎められ、又もや男も行くへなう、落ち散りありし印の香箱、清玄といふ文字より、尊き御身を。お赦しなされて下さりませ。

トいろ〳〵切なき思ひ入れ。清玄もこなしあつて

清玄　アヽ、眞にかゝる無實の大難。思ひ廻せば因果の道理。大俗の名は宿直之助清玄、卽ち發心なしてより、廿歳の上を二つ三つ、また年若き所化たる身の、稚兒白菊と衆道の起り、命を捨てんと契約も、徒ら事と成り果てゝ、我れのみ殘るは無情とも、未練者とも唄はれん。これが今更廻り來て、世上の人に後ろ指。それも死したる白菊が、魂魄我れに（ト　櫻姫が顏をつく〴〵見て）ア業因早き（ト指折り見て）十七年。

櫻姫　ヤヽ、何とえ。（ト聞き咎める。赤子泣く〳〵）。

清玄　人を助ける出家の習ひ

櫻姫　この身の果が、思はるゝわいなう。

ト思ひ入れ。禪の勤めになり、番八うそ〳〵出で來り

番八　これはしたりお前方は、何か身の述懐を仰しやる樣子だが、モシ〳〵、今更返らぬ事でござりまするワ。そしてお前方二人の、さうしてござるところは、どうしても心中の仕損ひと見えます。モシ、清玄樣、お前樣も諸人に顏を晒しなされたからは、道心坊になつたといつて、手の內くれ手もござりますまいから、向後コレ、俗になつて、挊がつしやりませ〳〵。（ト清玄へ向つて思ひ入れ）。これはしたり、御挨拶がないわえ。モシ〳〵、お姫樣〳〵、お前樣も、わしらの仲間へ入らしやつたと

いうて、女太夫にも出られまい。いつそあの清玄樣を還俗させて、お前の御亭主になされてはどうでござります。さうすれば夫婦暮しの共挊ぎ。左樣なされませ〱。

ト櫻姬、赤子を抱へ、俯向いて居る。

櫻姬　今日斯かる身となるさへ、心苦しう思ふのに、又あだ夫を重ねよとは、女の道を捨てさすか。

清玄　穢らはしい。佛の御弟子となりし身の、今更大俗とならんや。聞く耳持たぬぞ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。(ト眼を閉ぢて念佛申して居る。)

番八　これはしたり、それは惡い思し召でござります。お姬樣も二人の男は勿論、三人でも五人でも、亭主を持つが當世でござります。清玄樣も亦、はつち坊主にならうよりは、丸々としたお頭を、厚鬢に結立てゝ、髮は本田も流行に、遲れたなれば今流行る、嗅ア束ねも似合ひませう。モシ、幸ひ爰に、コレ〱(ト以前の酒肴を取つて來り)貰つて置いた酒肴、還俗なされた御祝儀に、モシ、お姬樣、お前樣から清玄樣へ、一つ獻げて、お飲みなされませ。左樣なさるとお前方は、わしらが仲間の足を洗つて、素人衆になられます。仲間へ祝儀を出しさへなされば、町人にでも、百姓にでも、勝手な者になれますよ。

ト勸める。櫻姬思ひ入れあつて

櫻姫　すりや、何と云やる。一旦罪に伏したる自らも

番八　隨分足を洗つて、素人になられますのサ。

櫻姫　素人とやらになれば、わが身達の仲間とやらでは、ないと云やるのか。

番八　左樣でござります。

櫻姫　そんなら其方、好いやうに賴むわいの。

番八　また不躾ながら、あなたの御器量で、素人にならうと仰しやりますれば、誰でも足を洗つてくれます。惡い事は申しませぬ。わしにお任せなされませ。直に旦那を聞き出して上げます。いよいよそれが承知なら、わしが駈け歩いて、婿も仲人も今の內に拵へて參りまする。ちつとの間、お待ちなされませ。モシ〳〵淸玄樣、エヽ、お前は情が剛いお方だわえ。こなさんへの面當に、結構な婿を拵へて、その御祝儀を貰はねばならぬ。その時お前、後悔さつしやるであらうに、エヽ、坊樣といふ者は惡堅い者だ。モシ、お姬樣、婿樣は今の內、幾人でも連れて來ますぞ。サア〳〵、急がしくなつて來た〳〵。待つてござりませ〳〵。ドリヤ、婿の工面をして來ようか。

ト木魚の入つたる合ひ方になり、向うへ入る。兩人殘る。淸玄目を閉ぢて居る。櫻姫思ひ入れあつて、淸玄が側へ差寄り

櫻姬　モシ、清玄樣、今あの者が申した通り、ならるゝ事なら一時も早う、眞の人の交はりが致したい。どうぞ非人の手を離るゝやうに、力となつて下さりませいな。

清玄　そりやモウ、力となつて進ぜたいが、何をいうても出家の身で、どうも女子の力にはなられませぬ。アヽ、これを思へば以前の如く、武士の身であるなれば

櫻姬　ア、水の流れと人の身は、何時どのやうな淺ましい、身にもなるかと末の事を、思ひ廻せば果敢ない世の中。

清玄　成る程、深窓に養はれ、荒き風をも厭ひし身の、嘸や〳〵心苦しう。コレ〳〵、最前貰うた良藥、この行末の身の嗜み、進上申す。

櫻姬　エヽ、有り難い。お恨みこそあれ自らへ、却つて厚きお情の藥。なんとお禮も

清玄　ア、イヤ〳〵、云うて下さるな。人を助ける出家の身。これは女に迷ひし出家。我れは無實の罪ながら、これまで過にし十七年、散り行く花の白菊と

櫻姬　エヽ又かいな。その白菊とは何がいなア。

清玄　サア。菊の盛りを散らしたる、その罪人は卽ち清玄。さればこの姿この見せしめ、かゝる業因深き身の、浮む瀬いつか世もあるまい。然らば今より破戒墮落の前生にて、契りし稚兒と思ひかへ、

今日より姫と（ト櫻姫の手を取り、屹度なつて思ひ入れ）其方の力となりませう。

櫻姫　エヽ。すりや便りなき自らゆゑ、御出家様が勿體ない、力となつて下さりまするか。エヽ忝う思ふわいなア。

清玄　その喜びに愚僧も滿足、今より力となるからは、こなたの心の落つくやう、破戒墮落の身となりて、姫と改め、祝言しませう。

櫻姫　エ。アノ自らを、清玄様が

清玄　互ひに心一致の印。こなたの力となる上は、一念五百生無量劫、世界の土に戻れども、魂ひ更に浮む瀬あらじ。一度の枕は二世の固め、この身の破戒が慥かな證據。心安かれ、櫻姫。

櫻姫　サ、あなたがさほど眞實に、力にならうと仰しやつて、下さりまするは嬉しいけれど、御覽の通りのこの幼な子、さすれば男のある身には

清玄　その身の事を、今更成らぬとは云はさぬ〳〵。さては其方は清玄が、胸中疑ふ心あるか。

櫻姫　なんのあなたを疑ひませう。

清玄　イヽヤ疑ふ。その疑ひを晴らさすは、コレ、こなたの見る前（ト珠數を切つて捨てる）。

櫻姫　ヤヽ、お前は珠數を

清玄　姫の力になるべき印、これで疑ひ晴らされよ。

ト思ひ入れ。櫻姫當惑のこなし。よき時分より後に惡五郎、頰冠りにて窺ひ居たりしが、この時ツカツカと出て赤子を取り、櫻姫を引附ける。

櫻姫　こりや幼な子を、何ゆゑあつて

惡五　連れ行く某見忘れたか。云ひ號けの惡五郎、照門だワ。

清玄　入間の御子息照門どの。

惡五　默れ賣僧め。汝出家の身を以て、姫との契約皆聞いた。殊にこれなる幼な子は、櫻姫が生み落せし、素性知れざるこの餓鬼を、人質として色よい返事、聞かんが爲めに忍び來た。それとも心に隨はねば、眼前爰で、この餓鬼を

ト締め殺さんとする。櫻姫縋つて

櫻姫　アヽモシ、そりや胴慾な、なんでその子を

惡五　そんならおれに、返事をするか。

櫻姫　サ、その御返事は

清玄　イヽヤ、なるまい櫻姫どの。こなたは愚僧が、命に替へても

ト立ちかゝるを惡五郎捕へて

惡五　こゝな生臭坊主め。（ト清玄を引つけ）身共が戀の邪魔すれば、うぬを存分苛むワ。

清玄　サヽ、姫ゆゑなれば存分に

櫻姫　イヽヤ必す清玄樣を

清玄　ハテ、今更愚僧をかばひ立て、過分なれども櫻姫、其方の男はどこまでも

惡五　清玄われに極るとも、このマア餓鬼から苛なんで、身共が戀を

櫻姫　その子はどうぞ（ト縋るを）

惡五　エヽ、面倒な。姫も一緒に

清玄　イヽヤ、やられぬ。（ト同じく取つく。）

惡五　妨げひろげば

ト二人を突退け、赤子を浚ひ行かうとする。この時七郎走り出てこれを支へ

七郎　ヤ、こなたは入間惡五郎樣。

惡五　汝は七郎、なんで支へる。

七郎　何か樣子は存ぜねど、姫が身寄りのその幼な子

惡五　それゆゑおれが
七郎　イヽヤその子を
惡五　エヽ、面倒な。
　　ト振り切つて赤子を抱へ、一散に向うへ入る。
七郎　南無三、何處までも
　　トごん〳〵にて跡追うて入る。櫻姫心遣ひのこなしあつて
櫻姫　さうぢや。
　　ト行かうとする。清玄取附く。
清玄　イヽヤやられぬ。我が子といへど、親の素性も知れざる幼な子、殊には破戒墮落の清玄。
櫻姫　サ、その御出家を墮さんと、願ひし心にあらねども、佛のお罰か思はざる、清玄様のそのお心。幼な子取得て立歸り、その時いづれ御返事を、それまで爰を
　　ト行かうとするを屹度とめて
清玄　我が子の事は思へども、假りにも出家へ賴みの詞、承知せしより清玄が、この身を無間に沈めても、其方は大事ござらぬか。エヽ、こなたはなう。

ト　櫻姫が上着の袖に屹度取附く

櫻姫　尤もぢや〳〵。聞けば聞く程尤もとも道理とも、辨へぬにはあらねども、どうも我が子が案じられる。ちつとの間、爰を放して

ト振り切るを屹度とめて

清玄　イヽヤ放さぬ。その心にてあるなれば、いよ〳〵我れを僞る其方。破戒墮落の上からは、人の譏りもなに厭はう。枕交さぬその内は、いつかな爰は一寸たりとも、やられぬ〳〵。

トこの内源吾出て來て

源吾　入間の館へ連れて行く。櫻姫どの、來さつしやい。

清玄　やられぬ〳〵。もう斯うなつては愚僧が心に、隨がはせねば

ト清玄袖を捕へて烈しき立廻りあつて、後より淺茅、綾瀬走り出て源吾を支へるうち、櫻姫は花道へ行く。はずみに櫻姫の片袖、清玄の手に殘りしまゝ、清玄あやまつて、後の川へ落ちる。水の音。

源吾　姫はやられぬ。

ト振り切らんとする。兩人立廻つて屹度とめる。時の鐘になり、櫻姫一散に向うへ入る。舞臺は三人の立廻りの見得にて道具廻る。

二幕目　　三幕目



本舞臺正面に蛇籠、土手の張り物、川柳大分茂りし體、稻瀬川川下の景色、爰に惡五郎、七郎、赤子を爭ひ居る見得にて道具とまる。

ト兩人立廻り、赤子泣く。屹度なつて

惡五　こりやァ七郎、どうあつても、この餓鬼を渡さぬのか。

七郎　素性知れざる幼な子ながら、それと噂のある時は、姬君樣のお身の恥。どうござつても、渡されませぬワ。

惡五　いらざる妨げ。邪魔立てひろがば

ト刀へ手をかける。七郎それを留める。惡五郎赤子を下に置き、拔かうとする。よき立廻りに懷中より前幕の狀を落す。七郎手早く取つて

七郎　「松井の源吾貞景どのへ、信夫の惣太。」

惡五　それを。

ト寄るを屹度とめて

七郎　合點のゆかぬ名當のこの狀。信夫の惣太といふ奴は、當時天下のお尋ね者、名に聞えたる盜賊夜盜、殊には佞人源吾貞景、內通のこの密書。こりや一詮議、せずばなるまい。

惡五　默りやアがれ、毛二才め。いらざるうぬが詮議立て。その狀渡せ。

七郎　イヽヤ文言披見の上

ト中を讀まんとする。惡五郎見せじと支へる。この時後に窺ふ桶七、づぶ六、この中へ入り、七郎にかゝる。立廻り、惡五郎密書を奪ひ取り、行かうとする。七郎續いて行かうとするを兩人組つく。

づぶ　手頃な仕事だ、旦那樣。

惡五　川へどつさり、合點か。

兩人　心得ました。

七郎　怪しきその狀（ト行かうとするを兩人支へる）。

惡五　ソレ

ト禪のツトメになり、惡五郎密書を持ち、向うへ走り入る。七郎行かうとするを兩人支へる、立廻りよろしく、拔討ちに見事に二人を切り倒し、刀を拭ひ屹度思ひ入れ。早三重になり、この跡を追うて向うへ入る。直に凄き合ひ方、時の鐘になり、正面の土手より、茂りし川柳に取つき、淸玄、惣身濡れたる體、やう／＼と這ひ上り、咬へし振り袖を持つて

淸玄　櫻姬、櫻姬。コレ櫻姬、ようも愚僧を僞つて、爰を逃げても逃しはせぬ。墮落なしたも其方ゆゑ

行くへを尋ねて

ト花道の方へよろめき行かうとする。この時赤子頻りに泣く。淸玄立歸り、思ひ入れあつて

ヤヽ、こりやこれ姫が實の幼な子、爰にあつたは誰が仕業。その儘置かば獸の餌食。(ト取上げ介抱して)思ひ廻せば幼な子の、この父親は我が仇人。さはさりながら櫻姫、行くへを尋ぬる好きしるべ。

ト屹度思ひ入れ。この時、時の鐘の頭を打つ。悄りして撞と座す。これに驚き赤子泣く。淸玄きつと抱へて向うを見詰める。これをキッカケに木の頭

櫻姫やアい。

ト赤子をいぶりつける。木のキザミ、よろしく時の鐘の送りにて　拍子　幕。

(作者 鶴屋南北 槌井玄七)

三幕目

押上植木屋の場

郡治兵衞内の場

役名――稲野谷半兵衞。稲野谷半十郎。山田郡治兵衞。下郎、軍助。石濱宮五郎。丑島眼藏。今戸五郎二。奴、土手助。吉田松若丸。町使ひ、傳六。醫者、軸谷宗壽。弟子、由松。同、五郎

松。郡治兵衞娘、小雛。軍助女房、おしげ。弟子娘、お文。

本舞臺、三間の間、後ろ淺黄幕、前通り柾木の生垣、その間より山吹咲きかゝり居る。好き所に栗丸太の冠木門、その前へ屋臺を出し、團子茶屋のかゝり。普賢菩薩といふ石の榜示、すべて押上村植木屋の門口。床几、上に石濱官五郎、丑島眼藏、今戸五郎二、中月代着流し、大小にて、中間土手助に提重、一升入りの樽を開かせ、拳を打つて酒盛りの體。おしげ、前垂れやつしにて手拭を冠り、火鉢にて田螺の田樂を燒いて居る。流行り唄、普賢堂の鰐口、お經の聲、題目太鼓にて幕明く。

ト摘み草の仕出し、妙見參りの仕出し、捨ぜりふ云うて左右より出て來り、わや〳〵云うて入る。

眼藏　さんな〳〵。

五郎　ごうさい〳〵。

眼藏　すむゆ〳〵。（ト拳を打つ）。

官五　コレサ、二人ながらもう好い加減にして、此方へ杯を廻さねえか。

眼藏　サア〳〵、飮まつしやい〳〵。コレ姐さん、田螺が燒けたら、早く出してもらはう。

しげ　ハイ〳〵、只今上げまするわいな。

土手　モシ〳〵旦那方、なんと爰らの堀でかへどりはどうでござります。鰌でもすくひませうか。

五郎　おいらは向うの土手へ行つて、野蒜をむしつて來て肴にしようか。あいつは素的に旨いよ。

官五　爰から直に請地へかゝつて、向島と洒落れよう。江戸藝者が誰ぞ來て居るであらう。
五郎　たぼが無いと酒が飲めねえよ。

トこの時おしげ、田螺を鉢へ並べて持つて來り

しげ　これはお待ち遠でござりませう。やう〳〵燒けましたわいな。
官五　こりやァお手づから。コレ姐や、持ち合せたがちよつと献さう。一つ飲まつし。
しげ　それは有り難うござりまするが、わたしは一向不調法でござりまする。
官五　アヽ、なにか。おれが杯だから、てめえ飲まねえのか。
しげ　イエ〳〵、左樣ではござりませぬが、まことにわたしは、お酒を
土手　これサ〳〵。あなたのお杯を、有り難いと思つて飲んでもらはう。その後で又この奴が杯も、献さにやならねえぞ〳〵。
眼藏　さうだ〳〵。武士の献した杯を飲まないでは、第一不躾といふものだワ。
五郎　官五郎どのはお心よしだからそれでも濟まうが、この五郎二は癇癪持ちだ。姐えや。酒が嫌ひなら、何ぞ小さい物で、コレ〳〵、これで飲むがよい〳〵。

ト田螺を捨てゝ、鉢をおしげへ突きつける。

しげ　そりやお前樣、御無體でござりまする。たべませぬと申しまするに。
眼藏　エヽ、上がる所ぢやァ上がらうにと、これもあんまり古風なせりふだ。
官五　いつそ中を取つて、おれがこの茶碗で始めてやらうか。眼藏つがッし。
眼藏　オット承知。サア、これで飮ませるよ。（ト酌をする）。
しげ　これは又迷惑な事でござりまする。
　　ト矢張り流行り唄、題目太鼓聞える。向うより稻野谷半兵衞、深編笠、着流し、大小にて出で來り、舞臺下の方の床几に腰をかける。おしげ見て
お出で遊ばされませ。ドレ、お茶上げませうか。
　　ト立たうとする。官五郞、おしげを捕へて
官五　ハテ、打ちやつて置けな。一人ばかりの客に、茶を飮ませずともいゝわえ。爰に居て一杯飮めよ。
しげ　これはしたり、お客樣でござりまする。
眼五　おいらも客だワノ〳〵。
しげ　ちよつとお茶上げましてから。（ト振り切つて來り）今日は結構な好いお天氣でござりまする。
半兵　世話ながら、茶を一つ下されん。

しけ　ハイ〳〵。只今お茶を入替へて上げませう。（ト思ひ入れあつて）これはしたり、又土瓶を持つてござんしたか。エヽモウ折惡う。ハイ〳〵ちつとお待ち遊ばされませ。ドレ、煮花を拵へまして

トとつかはと門の內へ入る。此うち矢張り流行り唄にて、下手より宗壽、醫者の拵へにて、スタ〳〵と出て來る。土手助見つけ

土手　モシ〳〵。あなたは軸谷宗壽樣ではござりませぬか。

宗壽　イヤ、これは官五郎樣、あなた方も何か、お野掛けの御趣向と見えまする。お樂しみでござりまするな。

眼藏　オヽ、宗壽老、この間は手前屋敷へ、きついお見限りだ。

宗壽　イエ〳〵、左樣ではござりませぬ。殊の外忙かしうござりまして、存じながら

眼藏　おてまへの忙がしいのは、ちつと珍らしい。

五郎　ハテ、世間には命の要らぬ、馬鹿者もあるものだ。

宗壽　これは五郎二樣、また惡口を仰しやりますか。イヤ、その命の要らぬと仰しやれば、アヽ、斯樣な噂がござりまする。アノ鎌倉から行くへの知れませぬ櫻姫とやら、その姫を入間のお屋敷から、不義者とやら申して、殊の外お尋ねなさると、申す事でござりまするて。

五郎　コレ〳〵、そればつかりでもない。アノ松若とやらいふ若衆も、何か科があつて、武將よりのお尋ね。コレ、眼藏どの、斯樣な折には其奴らを捕へて、なんと御加增なぞといふ事に有附きたいが、貴樣、なんと思はつしやる。

眼藏　ハテ、加增いたす事ならば、其奴らを縛らうが、但しは首をもがうが、そこが侍ひの立身出世の蔓でござるて。（トこの噂を下の方の半兵衞聞いて居る思ひ入れ）。イヤ、それはまづ口の遠い事ぢやが、コレ〳〵宗壽老、貴公に賴み置いた、彼の娘の事は、どうぢや〳〵。

宗壽　エヽ、あの浪人の娘かな。モシ、あれはきつい吃でござりまするぞえ。

眼藏　隨分存じて、承知いたして居る。吃ぢやと申して大事ないて。

宗壽　サヽ、吃ではござれども、器量と申し、手跡は見事でござりまする。

五郎　ハテ、そりやア知れた事だ。親が手習ひの師匠ではないか。

宗壽　サ、その師匠もこの間からの事でござります。モシ、あの娘は武家に、云ひ號けがあるではござりませぬか。

五郎　成る程、そんな噂もござる。眼藏どの、聞かしつたか。

眼藏　イヤ〳〵、聞きませぬが、よし云ひ號けがあつたといつて、食ふや食はずの手習ひ師匠、此方か

宗壽　ら貰ひかけたら、くれさうなものだ。おてまへ、話はしたであらう。
宗壽　隨分いたしました。私しもあの師匠が病氣ゆゑに、この間も見舞ひました。イヤ、御存知ないかは知らぬが、あの內に居候ふの、ソレ、若衆が居りますぞえ。
土手　左樣々々。若衆の居候ふがゐる。
眼藏　しかも小綺麗な若衆だぞよ。
宗壽　サ、その若衆があるかないかは存じませぬが、あの娘と色事ぢやと、專ら噂でござりまする。
三人　イヤ、氣が揉めるわえ〳〵。
宗壽　モシ〳〵、あの若衆も侍ひの弟とやら申す事で、據なうあの內に、居候ふに置くさうでござりまする。
眼藏　エヽ、年も行かいで、あの若衆には、あの娘を、しめるかえ〳〵。
五郎　コレ〳〵、かの人の賴みといひ、なんと歸りがけに仕掛けて見ようではござらぬか。
土手　參りませう〳〵。わしらも參つて善惡を見屆けませう。
宗壽　モシ〳〵、わたしが又申した事を仰しやりまするな。
眼藏　イヤ〳〵、申す〳〵。なんと證人に同道いたさうか。

五郎　ようござらう。
土手　左様なされませ。サア、お醫者樣、わたしがお連れ申しませう〳〵。
宗毒　アモシ、それは眞平々々。
二人　サア〳〵連れませう〳〵。（ト宗毒を引つ張る）。
宗毒　これはしたり、惡い洒落れぢや〳〵。
眼藏　サア、行かうかえ。茶代を置いて參れ。
土手　ハイ、畏りました。
五郎　サア〳〵、連れて參らう。
宗毒　アモシ、それは餘人へ。
三人　エヽ、卑怯な醫者だ。
　　ト流行り唄になり、官五郎先に眼藏、五郎二、土手助、嫌がる宗毒を無理やりに引立て向うへ入る。
　　半兵衞跡を見送り思ひ入れ。おしげ土瓶を提げて出て來り
しげ　これはしたり、あなた樣、さぞお待遠にござりませう。お茶を入れて參じました。サア、一つ召上がりませいな。

半兵　これは世話でござつた。イヤ、女中、ちとこなたに問ひたい事がある。此あたりに近頃轉宅いたされた、山田郡治兵衛と申す、浪人どの丶宅は御存じないか。

しげ　エヽ、それはマア、幸ひな。その郡治兵衛と申しまするは、即ちわたしが旦那でございます。この間この小梅の瓦町と申しまするに、手跡指南を致して居ります。

半兵　ヤ、なんと云はつしやる。その郡治兵衛どのは手跡の指南を

しげ　ハイ、左様でござります。

半兵　ハテ、割符の合うた（ト思ひ入れ）。

しげ　エ。

半兵　イヤ、どれから参るな。

しげ　ハイ、わたしが御案内いたしませう。

半兵　それは忝けないが、店が明いては

しげ　イエ、手代りもござりまする。その人なりと

半兵　然らば女中。

しげ　サ、斯うお出でなされませ。

ト唄になり、おしげ、半兵衛と連れ立つ體にて、道具廻る。

本舞臺三間の間、正面暖簾口、上の方に一間の宮、紅梅殿といふ額を掛け、七五三を張りあり、引戸の門口、外に張交ぜの色紙を張りたる板塀。手跡指南山田郡治兵衛といふ表札を掛け、正面の壁には門弟の塗り板を掛け、二重舞臺に稲野谷半十郎、着流し若衆形にて見臺に向ひ、よき所に山田郡治兵衛、老けたる拵へ、素讀の稽古して居る。小雛、振り袖娘にて、留袖娘のお文手習ひしてゐるを、小雛立ち身にて手を取つて教へて居る。右の唄にて道具とまる。

ト直に合ひ方。

ふみ　隅田川の櫻盛りの由、お連れ立ち申し花見に參り可申候、くれ〴〵もお誘ひ下さるべく候、めてたくかしく。

郡治　立レ身行レ道揚ニ名後世ニ以顯ニ父母ニ孝之終也。

半十　夫孝始レ於レ事レ親、中レ於レ事レ君、終レ於レ立レ身。

ふみ　昨日はお文を下され忝く拜しまゐらせ、

郡治　半十郎も最前より、餘程の間、餘り氣を凝らさずと（ト痰咳の起りし思ひ入れ。半十郎駈寄つて背を撫でいろ〳〵介抱する。小雛も立寄りて介抱する）。イヤ〳〵、介抱には及ばぬ。いつもの持病、捨て、

置きやれ〳〵。

半十　イエ〳〵、餘り強う起りましては、御難儀と存じまして。

小雛　ソヽさうでござります。ワワわたしがお背中を

ト近寄るを郡治兵衛見て

郡治　オヽ、娘か。もうよい〳〵。どう致してか、この間、ちよこ〳〵と起り居つて、アヽ、どうでも寄る年と春氣の所爲か、癪めが折々。アヽ、持病には困り果るて。

ト小雛介抱して居る。半十郎白湯を汲み來り郡治兵衛に差出す。お文やはり手本の讀をさらうて稽古して居る。てんつゝになり、向うより町役人傳六、やつし股引姿にて、櫻姫と松若の繪姿を持ち出て來る。後より軍助、本綿やつし、布子羽織、一本差しにて、白張りの傘の拵へたるを十本ばかり棒の先へ雨拵へにて擔ぎ出て來り、花道にて

軍助　コレ〳〵、こなさん、そりや何を持つてござるのぢや。

傳六　イヤ、今日はお尋ね者のお觸れ書が出たゆゑ、町中を觸れて置きまするて。

軍助　ナニ、お尋ね者の（ト思ひ入れあつて）そりやお大儀でござります。シテどちらへござりまする。

傳六　貴様の内へ行きまするところサ。

軍助　アノ、わたしが内へ。ハテ、それは御苦勞でござります。(ト思ひ入れあつて兩人門口へ來て)サア、入らつしやりませ。モシ、只今戻りました。

半十　オヽ、軍助どの、早う戻つてぢやの。

小雛　茶を飲みやらぬかいの。(ト吃りながら茶を汲んで來る)。

軍助　ハイ〳〵、これは憚りでござりまする。

郡治　見れば賣り物ぢやと持つて行きやつた傘を、皆持つて歸りやつたは、コリヤ、先方までは行きやらぬか。

軍助　さやうでござります。私しが手細工のこの傘、いつもの問屋へ卸して參りませうと、大川橋を越して見ましたが、どうやら北の方に、俄に雨雲が出ましたから、これはしたり、ひよつと雨にあうては、傘はあれども皆賣り物、さすにもさゝれず、可笑しいものぢやと存じまして、早々に歸りました。澤山に傘を持つても雨を恐れるとは、イヤ、また世には、いろ〳〵な商賣も、あるものでござります。ハヽヽヽヽ。

郡治　成る程、傘賣りが雨にあうて、濡れて、戻らば、そりやモウ、傘持たぬがいつそましかえ。ハヽヽ。イヤ、こりや町役のお方、なんと思うてござりました。

傳六　ハイ、わしはお觸れがあつて參りました。

郡治　そりや何のお觸れでござります。

傳六　委細はこの繪姿に書いてござります。サア、御覽じて下さりませ。

ト二枚とも差出す。郡治兵衞取つて

郡治　繪姿とは、そりやよく〳〵お尋ね者ぢやが（ト眼鏡をかけて二枚の畫姿をひろげ）櫻姫　松若丸人相書の事。（ト讀み、思ひ入れあつて軍助と顏見合せ、半十郎小雛も各〻こなし、合ひ方になる）。

軍助　ヘエ、左樣ならお行くへ知れぬ櫻姫樣と、これも同じく行くへなうおなりなされた松若樣、あのお二人を繪姿にて、

郡治　嚴しくお尋ねなさるゝも、慥かに入間の郡領より、吉田のお家を讒言の、それがお上の上聞に、達せしゆゑのお尋ねか。

半十　これにつけても兄者人、半兵衞どのも、よもやこの儀を（ト軍助と顏見合せ、思ひ入れ）。

軍助　して、お尋ねのこの二人が、私しどものこの内に、居りまするとの御詮議でござりまするかな。

傳六　イエ〳〵、さうではござらぬが、娘子供の弟子がある、手習ひの師匠ゆゑ、モシひよつと來まいかと、それゆゑの繪姿でござります。

郡治　アヽ、それで身共も落つきました　して、この繪姿は。
傳六　それは置いてゆくのでござります。隨分氣を附けて下さりませ。
郡治　御苦勞でござります。
　　　ト合ひ方になり、傳六足早に向うへ入る。軍助跡見送り
軍助　旦那樣、油斷のならぬお尋ねでござりまする。
郡治　身共も少しの越度より、娘を連れての浪人住居、花咲く折もあらんかと、樂しみ居れど日にまし寄る年。器量は十人並ながら、疳の蟲ゆゑ舌縮み、生れもつかぬ吃の娘。これに居る半十郎の兄半兵衞と云ひ約束は致せしが、この仁とても
半十　只今にては流浪の身、縁につれたる私しも、稽古がてらのかゝりう人。
軍助　奴めとても只ならぬ、あのお方のお供して、それから直に御厄介。妹のお十の縁につけ、小遣ひ取りの張替へも、細い元手の紅葉傘、骨を惜しまず挊いでも
郡治　鹿の命毛細うして、殊に老筆、思ふやうにも（ト爰にて八つの鐘鳴る。こなしあつて）ありやもう八ツの鐘ぢやな。アヽ、春の日は長い事ぢや。コレ娘、弟子どもを、もう歸しやいの。ドリヤ、とろとろと致さうか。

ト唄になり、思ひ入れあつて奥へ入る。直に合ひ方、小雛奥の方に向ひ

小雛　みゝ皆さん、おゝお八つぢやわいな。

ト恥かしさうにいふ。奥より五郎松外二三人、手習ひ子にて各自双紙を持ち、この内に由松、ちよぼちよぼ髪の子供にて桃色木綿を頭へ卷き、疱瘡上りの體にて、これも草紙を持ち出で來り

由松　サア〳〵、お八つだ〳〵。おいらはこれから河原崎の芝居を見に行くワ。皆も行かねえか。木挽町へ行くとおれが鮨を奢るワ。奢りは奢るが、跡で錢は取るよ。寄越さねえと父さんに云ひ附けるワ。

五郎　エヽ、意地の卑しい。そんな事云はずと、辭儀して歸らんせいの。

ふみ　ハイ、小雛さん、明日參上え。（ト辭儀する）。

由松　ワアイ〳〵。參上とは何の事だ。こいつはをかしい。

ふみ　してこなさん、參上といふ事知つて居さんすか。

由松　知らねえでワ。三升とは團十郎が事だ。

ふみ　それ見さんせ。知りもせいで。

由松　エヽ、女の子の癖にしりもせいでとは、飛んだ事を云ふ娘だ。しりもせす京だ。ワアイ〳〵。

ふみ　又その様な惡口を

由松　その口へ墨を塗つてやらう。

ト硯箱を取つて筆を持ち、お文が顔へ墨を塗らうと立かゝる。お文はじめその外の子供立騒ぐを由松追うて廻うとて、思はず硯を取落し、擔ぎ來りし傘の上へ硯落ちて、墨のかゝりし樣子。お文見て

ふみ　ヤア、傘へ墨がかゝつたぞえ。

由松　おいらは知らぬ〳〵。

ト子供口々に云うて逃げるを、お文追うて向うへ入る。軍助傘を取上げ見て

軍助　これはしたり、賣り物の傘へ、この樣にマア墨を掛けた。エヽ、子供といふものは、埓もない事を

ト手桶の水を取つて、傘の墨を流して拭ひ、下の方へひろげて干す。この内小雛、姫の繪姿を取つて思ひ入れあり、半十郎に見せて

小雛　ひゝ姫君、さゝ樣の、こゝこの樣に、ごゝ御苦勞、なゝなさるが、おいとしうござりまする。

ト半十郎へ差出し思ひ入れ。

半十　その姫君のお行くへを、お尋ね申さんその爲に、わたしをお内へ預け置き、何處を當の旅ぢやゝら。アヽ、兄御の苦勞も思はれまする。

軍助　御尤もでござりまする。科無き姫君を其やうに、配符を以て津々浦々、これと申すも源吾貞景、

殊には姫の云ひ號け、あの惡五郎めが、さする業。それゆゑにこそ痛はしや、紅梅殿のお宮の內、嘸お氣詰りとは存ずれども

ト宮の方へ差寄る。この時奥にて

郡治　軍助々々。何れに居やる。少と賴みたい。(ト呼ぶ)。

軍助　ハイ〳〵、これに居りまする〳〵。何御用か。ドリヤ、承つて參らうか。

ト合ひ方になり、軍助とつかはと奥へ入る。小雛繪姿を持ち、思ひ入れあつて

小雛　迚も、かゝ片輪も、ごど同然な、廻らぬ舌の、こゝこの病ひ、しゝ死んで御苦勞、あゝ遊ばさる、ひゝ姫の御身に(ト思ひ入れあつて有合ふ硯箱を引寄せ、ひろげある傘へあたり見廻し歌をかく)。わたしが夫、お前の兄上、半兵衞樣へ。

ト吃りながらこの臺詞をいうて、半十郎へ傘を見せる。半十郎、よく〳〵見て思ひ入れあり

半十「ほころびし花の袂は風のみか、わりなく濡るゝ雨もいとはめ。」この傘へ一首の歌。心はそれと知らねども、ほころびし花の盛りの姫君の、もしや御身に代らんと

小雛　ア、アイ〳〵。

ト嬉し涙にむせび喜ぶ。半十郎も涙ぐみ

半十　ハテサテ、お前はさほどまで、優しい心の（ト顔見合せ思ひ入れあつて）お方ぢやなう。

　　トほろりとする思ひ入れ。唄になり、向うよりおしげ案内して半兵衛出て來り、花道にて

しげ　お侍ひ様、向うの内でござりまする。

半兵　案内して下され。

しげ　畏りました。（ト兩人門口へ來て）サヽ、御遠慮はござりませぬ。お入り遊ばされませ。

半兵　然らば許さつしやい。

　　ト笠を取り内へ入る。半十郎見て

半十　ヤ兄者。どうしてこれへ。

　　ト思ひ入れ。小雛も半兵衛を見て恥かしげに俯向き居る。半兵衛二人へ目をつける思ひ入れ。

半兵　久々便りも仕らず、疎遠の段。コレ、小雛どの、父君郡治兵衛どのにも、お變りもなう、堅固に暮らさるゝか。左樣か〳〵。（ト挨拶する）。

小雛　アイ、アイ。（ト口吃り、恥かしきこなし）。

半兵　イヤナニ女中、年端も參らぬ弟め、さぞ其許樣のお世話になり申さう。この上とも、何かと頼みまするぞや。

しけ　イエモウ、一つお內に居りましても、御覽の通りの店商ひ、夫軍助どのも旦那樣を、お貢ぎ申すその爲めに、僅かな細工。イエモウ、一向にお構ひ申しませぬわいな。

半十　して、兄者人には姬君樣の、世間の噂、お聞きなされましたか。

半兵　いかにも、姬君のお噂も、外の噂もよう聞いて參つたて。（ト目を附けて云ふ。半十郎心得ぬ思ひ入れ）。して、郡治兵衞どのには御在宿か。左樣か〳〵。

半十　ハイ、奧にお出でござりまする。わたしがちよつと。

　　ト立たうとする。奧にて

郡治　イヤ〳〵、承つた。それへ參つてお目にかゝらう。（ト合ひ方になり、郡治兵衞大小にて出で來り）これは〳〵稻野谷氏。先づは御健勝の段、大慶に存じまする。

半兵　そこ許樣にも、何時に變らぬお健かなる御樣子、半兵衞め、喜ばしう存じまする　お聞きもあらん、姬君のこの度の越度。鎌倉新淸水よりお行くへ知れず、それ故にこそ拙者めなぞ、お在所詮議のその爲に、斯樣に遍歷仕る。他行の間、弟半十郎こと、お手前へお預け申せしに、御厚志の段詞にも述べられませぬ。忝う存じまする。

郡治　これは〳〵、そのお詞痛みいりまする。申さば娘小雛め事は、生れつきましての、言舌わからぬ

不束者、それを貴公が申し請けたいと云はるゝゆゑ、御契約申したからは、聟舅の間柄、その樣に御叮嚀に仰せらるゝにも及びませぬ。これはしたり、お茶を持たぬかえ。アヽ氣の附かぬ

しげ ほんに不調法な。ドレわたしが

半兵 イヤ〳〵、お構ひ下さるな。

　　トおしげ立たうとする。奥より軍助茶を汲み來り

軍助 へイ〳〵、お茶差上げませう。

　　ト差出す。半兵衞見て

半兵 ヤ、その方はお家の下郎

軍助 へイ、軍助めでござりまする。御浪人のこのお家へ、夫婦が夫婦かゝりうと人。

半兵 オヽ、その儀も只今この女中に承つたが、いよ〳〵其方の

軍助 へイ、奥方でござりまする。ハヽヽヽヽ。イヤ半兵衞樣、御覽の通り郡治兵衞樣の御浪人、不自由勝なこのお内、見るに忍びず女房は、表の野道で一服一錢、この下郎めは手細工の、御覽なされませ、この傘を張りまして

　　ト歌を書いたる傘を知らずに出す。半兵衞取つて

半兵　今の渡世に致すのか。テモマア器用で（ト傘の歌を見て）「ほころびし花の袂は風のみか、わりなく濡るゝ雨もいとはめ」こりや女子の手跡ぢやが。

郡治　アヽ、娘小雛が手跡と見えるが

半十　ハイ、只今これで小雛どのが、この傘へ。

郡治　落書をしやつたか。

半十　私しへお見せなされて。

半兵　アノ、この傘の歌を弟の、其方へ小雛が。ハテ、よう落書を（ト二人へ目をつけ、傘をすぼめる）。

軍助　これはしたり、傘一本棒に振りました。

郡治　イヤモウ、何かに不自由な只今の暮らし、お恥かしう存ずる。コリヤ娘、爰へ來いやい。これはしたり、何をその樣に恥かしさうに。其方が聟どの半兵衞どのへ、御挨拶を致さぬかえ。

ト手を取つて連れて來る。

小雛　アイ、アアアイ。（ト恥かしきこなし）。

郡治　御覽なされい。子供も同然でござるて。ハヽヽヽ。

半兵　イヤモウ、未だ年は參らねど、其許の娘御ゆゑ、手跡の見事さ。この歌の心、愚昧の身共は存ぜ

ぬが、正しく戀歌。
郡治 ヤ。(ト思ひ入れ)。
半兵 定めし手爾波の歌の心も、よう連續いたしたと見えまする。
郡治 どうござるやら。併し娘をお褒めのお詞、親の身にとり、忝う存じまする。
半兵 御挨拶でござりまする。(ト七ツの鐘鳴る)。アヽ、こりや七つぢやないか。
半十 アイ、もうお歸りなされまするか。
半兵 これはしたり、只今參つた身共を、もう歸るかと申すは。ハテ其方は、早う歸したがりやるか。
併し、オヽ、日暮れぬうちに
郡治 これはしたり、久々にてのお出で。せめて御酒なと
半兵 イヤ〳〵、お構ひ下さるな。
軍助 ハテ、ゆるりとお話しなされませな。殊にどうやら雨氣づきました樣子、今宵はお泊りなされて
はどうでござりませう。
しげ 成る程、左樣がようござりませう。何は無くとも私は、お吸物でも拵へませう。お前はちよつと
軍助 合點ぢや〳〵。御酒調へて參らうかえ。

郡治　ほんにさうぢや。祝言せねども、娘が爲めの云ひ號け、隨分ともに、御馳走してくりやれ。
半兵　御老人のお心遣ひ。左樣ござらば今暫く
郡治　あの小座敷へ。娘、半十郎どの、案內しやれ。
半十　畏りました。サ、兄者人。
半兵　然らば奧へ、舅どの。
郡治　半兵衞どの。
しげ　斯うお出でなされませ。
軍助　ドリヤ、御酒調へて參らうか。

ト唄になり、半兵衞先に半十郎、小雛は恥かしさうに、おしげ附いて奧へ、軍助は向うへ入る。郡治兵衞殘る。合ひ方。

郡治　暫く便り音信も、致さぬ稻野谷半兵衞が、今日尋ねて參つたは（ト思ひ入れあり）ハテナア。

ト思案の體。流行り唄になり、向うより官五郎、眼藏、五郎二、土手助、話しひなしながら出で來り

土手　モシ〳〵、あの內でござりますぞえ。
官五　爰だ〳〵。

眼藏　おてまへ達も、何も慰みだ。
官五　太鼓を打つて進ぜうかえ。
眼藏　お頼み申す。許さつしやりませ。
　　トずつと入る。郡治兵衞見て
郡治　これは御近所のお方々、何と思し召して、見苦しいこの宅へ、マア〳〵、これへ。
官五　イヤ〳〵、構はつしやるな。これが勝手でござるて。
五郎　併し、どこに居ても同じ値なら、疊の少しも奇麗な方へ座りませう。
眼藏　これはしたり、又惡口をお云やるか。イヤナニ、郡治兵衞どの、身共は度々お顏はお見受け申すが、未だお知り人にも罷りならぬ。拙者は丑島眼藏と申す者でござる。
官五　手前は石濱官五郎。
五郎　今戸五郎二、この上ともに
三人　お知り人になりませう。
郡治　これは〳〵御挨拶。御近所に罷りありますれば、朝夕お目にはかゝりませうが、何を申すも老人の拙者、何かに取紛れまして、存じながらお尋ねも申し上げませぬ。して何れもには、何と思し

し召しまして、今日これへ。

眼藏　イヤ、別儀でも參らぬ。先達てより手前方へ、出入り仕る町醫者宗壽、あの者を頼みまして、申し入れた儀をお聞きでござらうの。

郡治　エヽ、娘めが儀でござりまするか。

眼藏　左樣でござるて。度々申し越しますれど、有無の返答ござらぬゆゑ、今日は押掛けて、その御返事を聞きに參つた。

官五　申さば朋友の丑島氏、拙者どもゝ如何と存じ

五郎　同道いたして參つたのだ。郡治兵衞どの。

眼藏　是非娘御を、申し請けませう。

郡治　これは〳〵、先づ何事も差置きまして、浪人づれの拙者が娘、御懇望の段忝う存じまする。郡治兵衞お禮は申し上げまするが、あの娘には、云ひ號けの男がござりまする。

眼藏　そりや何者でござるな。

郡治　その者は稻野谷半兵衞と申す者。併しながら當時は浪人。

眼藏　コレ〳〵、郡治兵衞どの、浪人者に遣らうより、小祿ながら鎌倉の昵近。コレ、腹を立てつしや

るな。手習ひ師匠のこの内へ、浪人者の聟を取つて、暮し方にならうと思はつしやるか。

官五　左樣々々。コレ見さつしやい。この傘も、承れば、居候ふの折助が、古骨買つてこの仕事。（ト歌を書いたる傘を見て）ヤ、こりや何だ。歌が書いてあるぢやアないか。

五郎　何だか女の手のやうだが、小嫌らしい歌と見えます。

眼藏　左樣々々。それかこれかは存ぜぬが、お尋ね者の櫻姫、それを尋ねる浪人があると聞きましたがモシその浪人が、こなたの娘の聟ならば、猶々こなたは難儀をするぞよ。殊に怪しいこの歌を、傘に書いたが爰にあるのも、ナウお二人。

官五　成る程、これはどうやら、目の附け所でござりまするぞえ。

郡治　アイヤ、滅多な事をお云やるな。殊にツカ／＼と不躾構はぬそのお詞。浪人者の身が宅へ、浪人者を聟に取らうが、そりや此方の勝手で致す儀でござる。いらぬ口出しなされずとお歸りなされい。娘が事ならお斷り。緣づくぢやと思し召し、この以後お便り御無用でござりまする。

眼藏　すりやあの娘を此方へは

郡治　屹度お斷り申した。

五郎　丑島氏、すりや此方どもの

眼藏　武士が立たぬワ。否でも應でも小雛は貰つた。奥に居るなら踏ん込んで

ト行かうとするを。郡治兵衛留めて

郡治　こりや、その許には身共が宅へ。

眼藏　破れかぶれだ。合點か。

五郎　踏ん込むがようござる。

ト支ゆる郡治兵衛を二人は引留める。この間に眼藏は暖簾口へ駈入り、小雛を引立て出る。

郡治　こりや理不盡な。娘を捕へて

ト立ちかゝるを官五郎支える。この間に眼藏ら小雛を手籠めにしようとする。この時半兵衛奥より走り出て眼藏を取つて投げ、小雛を圍ひ、敵役皆々を胸打ちに打据ゑる。屹度なつて

半兵　身動きひろぐと、ぶつ放すぞ。

郡治　こりや聟どのか。ようマア爰へ。

三人　ヤヽヽ、ナニ聟だ。

半兵　浪人しても身も侍ひ、おてまへ方も帶刀致し罷りあるが、武士の女房を見苦しい。こりや何と致すのぢや。イヤサ、小雛が爲の身は聟ぢやが、この女には何科あつて手籠めにさつしやる。女を

相手におしやるより、連添ふ身共を相手にさつしやい。お三人、サ、相手に罷りなりませう。
　ト詰め寄る。三人こは〳〵表の方へ出て
眼藏　アヽ、コレ〳〵、こなたが小雛の聟ならば、そりやァ、此方が出損ひ、皆間違ひと申すもの。ナウお二人。
五郎　左樣々々。御酒の上にてツイ座興。思へば下郎が惡い酒だぞ。
土手　アヽモシ〳〵。それではどうか私しばかりが科にして、そりやあなた方、お情ないと申すもの。
眼藏　コレサ〳〵。こんな客が居られては、迚も儘にはさせまいワ。併しこなたがこの家の小雛が聟は卽ち身共でござる。
半兵　聟は卽ち身共でござる。
眼藏　ハテサテ、立派な聟どのだが、その女房に持つといふ、娘に虫のある事を
官五　知らぬが佛も同じ事。娘の虫はあの前髮。
五郎　若衆の虫が
半兵　どう致したと。
眼藏　イヽヤ、虫のくつたコレ、この張替への（ト傘を取つて）傘に書いたこの歌も、どうやら味な、この家の噂。

五郎　嗅出す爲にさる人と、相談の上來て見れば、山田郡治兵衛といふ浪人。
土手　たしかに吉田に緣ある樣子。
五郎　いよ〳〵姬も、アノ松若（ト云はうとする。）
半兵　ヤ、なんと。
眼藏　イヤサ、松竹飾つて
皆々　祝儀に來ませう。
　　ト唄になり、三人花道の方へ行きかけ、囁き合ひ、五郎二取つて返し門口へ隱れる。あと向うへ入る。
郡治　イヤモウ、何方にも心よからぬ只今の樣子。
半兵　惡者の徘徊致すには、ハテサテ困り果てまするて。イヤ、これにつきまして舅どの、ちと其許へお話し申したい儀もござるが、何を申すも他聞の手前。（ト思ひ入れ。）
郡治　これに居るが身が娘、半十郎は貴殿の弟、外に他聞も（ト思ひ入れ）イヤ軍助の內儀、コレ一寸爰へ。
　　ト手を打つ。合ひ方になり、半十郎おしげ出で來り
半十　御用でござらば、私しなりと
しげ　イエ〳〵、たしか私しを。

郡治　コリヤ、おしげどの、軍助の歸るまで、おてまへを賴みたい。
しげ　ハイ、お使ひに參りまするのかえ。
郡治　オヽ、外でもないが、知らるゝ通り日參いたす長命寺の不動尊、今日は珍客もござつて、他行も致しにくい。おてまへ、なんと代參に行つてはくれまいか。
しげ　ハイ、そりやモウ詣つて參じませうが、何ぞお跡に御用があつては
郡治　イヤ〳〵、跡には娘めも罷り居れば、氣遣ひなしに、身が代參に
しげ　畏りました。左樣なら直に行つて參りまするが、小雛樣、隨分お氣をおつけなされまして、親御樣へも、お客樣へも、モシ、半十郎樣。(ト二人へ思ひ入れ。)
半十　そんならこなた、大儀ながら
しげ　ハイ、參りまするは參りませうが、どうやらお客のあなた樣、濟まぬお顏を御覽じて、親御樣の俄にわたしを御代參、どうやらお跡が案じられ　(ト思ひ入れ。)
郡治　まだ行きやらぬか。(ト屹度思ひ入れ。)
しげ　ハイ、參りまするでござります。
ト唄になり、思ひ入れあつて向うへ入る。郡治兵衛こなしあつて

郡治　見らるゝ通り、他聞はござらぬ。何事なりと。

半兵　承知仕りました。コリヤ弟、これへ參れ。

半十　ハイ。（ト何心なう側へ來る。）

半兵　イヤ、別儀でない。其方は、兄半兵衛が云ひ號け致し居るあの小雛と、密通いたし居らうがな。

半十　エヽ。そりやマアどう仕りまして

小雛　なゝ、なんで、わゝわたしが

ト兩人とも急いたるこなし。

半兵　所詮左樣でござりまするると、よもや弟め、身が前で卽答に白狀も致すまいが、郡治兵衛との、貴殿は御存じはござりませぬか。

郡治　手狹な宅に親子とも、朝夕一つに罷り居れど、娘は貴公へ何時々々に、緣づく事とそれのみを樂しむ樣子。其許の弟子とてもその如く、身共を親も同前に、心をつけての介抱は、アヽ忝いと喜んで罷りあるに、何を證據に其許は、彼れら二人を、不義といふには

半兵　證據がござる。

郡治　ヤ。

半兵　即ち證據は、コレ、この傘の、歌をお見やれ。
郡治　ナニ、娘が書いた傘の
小雛　そゝその詠み歌を、なゝなんで證據と
半十　兄者人。
半兵　「ほころびし、花の袂は風のみか、わりなく濡るゝ雨もいとはめ。」
小雛　そゝそりや、ひゝ姫君のお……御身に代る
半兵　イヽヤ戀歌ぢや。
半雛　エヽ。
半兵　歌の心を判斷なせば、ほころびしとはこれまでに、包み隱せし我が戀も、顯はれたりといふ心。花の袂は風のみか、花の盛りの咲きぶりも、わりなく濡るゝ……よそ外に、色やあらんとよみたりし、戀歌の謎が慥かな證據、郡治兵衛どの。貴殿はお心づかれませぬか。
小雛　アヽ、もゝもし、どどうして、そゝ其やうな
　　ト急いて云ふを郡治兵衛制して
郡治　コリヤ娘、急く事はない。其方が心も半十郎の、不義邪の無い事も、とくより承知致して居るぞ

半兵　イヤ、そりや舅どの、お詞相違致して居る。杯は致さねど、先達てより進上致さう、申し請けませうと云ひ號け致した、小雛は身共が妻でござる。それゆゑにこそ親子も同じ其許と存じ、實の弟めまで、暫く貴公にお頼み申せしところ、斯樣な義が出來いたしては、拙者は勿論、其許には、皺腹なりともなされずば、世間へ面が立ちますまいぞえ。郡治兵衛どの、お年寄へお氣の毒ながら、申し分は申さねば、刀の手前稻野谷半兵衛、武士道が立ちませぬ。

郡治　御尤ものお詞。然らば面晴れ、拙者も娘を屹度詮議仕り、いよ〱それに極まらば、その時こそはいづれ武士道立てゝ進ぜう。相手の詮議は貴公の方にて。

半兵　承知致した。サ弟、今聞く通りぢや。身が侍ひを立てさせる心があらば、有樣に云うてしまへサ

半十　イヤ兄者人。そりやお情けない御一言。たとへ外にて不義いたづらを仕りませうが、何とて兄の云ひ號け、その娵の小雛どのと、道ならぬ事いたしませう…コレ〱、お前も無實の疑ひうけ、云ひ譯がしたうても、心が急いて、一倍物が云へますまい。コレ〱（ト清書双紙に硯箱を添へて差つけ）身に覺えない云ひ譯を、サヽ、ちやつとこれで〱。

小雛　アア、アイ〱。

ト右の草紙をとつて、身に覺えなき事を、草紙の裏へ書く事。

半兵　何をおのれが口賢しう吐かしても、疾より身共が存じて居るわえ。小雛も今更涙にむせび、身の云ひ譯に反古の裏、草紙の裏へ樂書は、夫の身共を阿呆に致すか。白痴と見極め、コリヤ小雛、双紙を穢すその手間で、身がこの面を穢さいでな。

ト小雛が書く側より扇を以て半兵衞その手を度々邪魔する事。小雛度々書きかへ、堪へかねて双紙を引破つてワツと泣き落す。

半十　尤もでござりまする。小雛どの、口惜しからう。嘸や云ひ譯したからう。その胸がおいとしい。常から仲好い同い年、似寄りのわたしら、二人ゆゑ、世間の噂にどのやうな、惡い串談云へばとて、左樣などうしてみだらな事が

半兵　サ、そのみだら至極な人目立つ、道ならぬ事いたしたゆゑ、兄の面が立たぬといふのぢや。それを却つて包むに於ては、武士のすたつた某が、只今爰で腹切らうか。

半十　アモシ、なんであなたを

半兵　サ、切腹さするが氣の毒とも存ずるなら、小雛と不義を致しましたと、白狀いたせサ。

半十　そりやお情けない。決して左樣な

半兵　覺えはないか。

半十　あの世の佛を誓ひにかけ
半兵　包み隱せば、身共が切腹。
半十　アモシ、必ず短氣な
半兵　然らば不義と白狀いたすか。
半十　サ、その儀ばかりは
半兵　云はねば切腹。
半十　サア〳〵
半兵　兄に命を捨てさせるか。キリ〳〵白狀致し居らぬか。

ト屹度云ふ。半十郎無實の難と涙に暮れヂッとなる。その時何心なく軍助、德利を下げて戻り來り、門口へ來て內の樣子を怪しみ、外に窺ふ。尤もこの出のうち、聲番聲をかける事なし。半十郎涙を押へ、思ひ入れあつて

半十　エヽ、情けない。身に覺えなき惡名を、云ひ譯せんとする時は、腹召るゝと仰しやるゆゑ、この身に覺えなきながら
半兵　小雛と不義の、白狀いたすか。

半十　身に覺えなき事ながら

小雛　アアもし、それではわわわたしも、覺えなき身に

半兵　惡名受けるは、覺悟の前ぢやワ。

小雛　エヽエヽお前はなう。(ト半兵衛に思ひ入れ)。

半兵　サ弟、いよ〳〵不義のいたづらを、致しましたと、コリヤ、ナ、申してしまへ。(ト思ひ入れ)。

半十　惡事千里と世の譬へ、お耳に入りし上からは、成る程不義を(ト小雛と顏見合せ術なきこなし)致しました。(トわつと泣く)。

小雛　エヽヽお前は僞り。(ト急いて云ふこなし)。

半兵　さてこそ密通、舅どの、弟は白狀いたしましたぞ。

ト郡治兵衛小雛が顏をよく〳〵見て、愁ひのこなしあつて

郡治　杯いたさぬ事ながら、武士と武士とが云ひ約束、致したからは今更に(ト思ひ入れあつて)半兵衛どの、貴殿の御舍弟、愈々不義に極まりますれば

半兵　兄が成敗仕る。

郡治　ヤ。

ト思ひ入れ。半兵衞スラリと拔く。半十郎見て惡びれず、目を閉ぢて兩手を合せ、首差のべる。半兵衞見て

半兵　流石は

半十　エ。

ト目を明く。半兵衞、半十郎の首を打落す。小雛「ワツ」と驚くを郡治兵衞キツと留める。半兵衞、半十郎の首を差出し

半兵　郡治兵衞どの、肉身の弟ながら、不義者なればこの通り。

郡治　御尤も。天晴れ武士。

半兵　して其許は

郡治　不義の相手は

小雛　エ。

ト思ひ入れ。郡治兵衞、小雛が手を取り顏を見詰め、涙にむせび、思ひ入れあつて

郡治　武士の娘ぢやコレ……十六歳まで生きたが果報、不義はせぬぞよ。

小雛　アアアイ、うう疑ひ晴れて（トいろ／＼思ひ入れ、嬉しきこなし）。

郡治　不義ならねども、親に武士道。

小雛　アアアイ。

ト郡治兵衛に我が身を差つける。郡治兵衛思ひ入れあつて、キツと氣をかへ、拔打ちに小雛が首を打落す。軍助、ツカ／＼と入る。郡治兵衛見て、血刀を差出す。軍助愁ひを隠し、手拭にて刀を拭ふ。郡治兵衛白刃を納める。

軍助　ア、お胸の中が

郡治　コレ。（ト思ひ入れあつて）云ひ號けの聟、花嫁の首、貴公へ進上。

ト差出す。半兵衛取つて

半兵　これで身共が武士道も

郡治　お主へ忠義も立ちませう。

半兵　ヤ。

郡治　引出の目録。

ト姫の畫姿を取つて差出す。半兵衛受取り見て

半兵　すりや、姫君の

郡治 御用に立てば、未來永々
半兵 夫婦でござる。
郡治 エヽ忝い。
軍助 お主に代る小雛樣。たゞ犬死は御舍弟の
半兵 イヽヤ弟も

トつか／＼と寄つて紅梅殿の戸を開く。内より松若丸顏を差出し

松若 ア、不便や二人は
半兵 アモシ。（ト戸をシヤンと閉す）。
郡治 すりやこの内を
半兵 とくより承知。松の小枝を切つたるも、即ち松の身……サ、緑も松の

ト半十郎の首へ目をつけ思ひ入れ。郡治兵衞首を取上げ

郡治 松と櫻のその身に代る
軍助 娘心の謎の歌。（ト傘と繪姿を持添へ差出す）。
半兵 ア、不便な小雛が

ト思ひ入れ。五郎ニ窺ひ出て

五郎　證據の二品。

ト引浚ひ駈出すを、軍助立かゝつて引つける。

郡治　蟻の穴より

軍助　堤の崩れ。

半兵　お禮は重ねて

ト木の頭。五郎ニ立上るを軍助屹度押へる。

お暇いたさう。

ト三人顔見合せ、これをキザミ。皆々仕組み宜しく、

銅鑼のツナギにて引返し。

ひやうし幕

四幕目　三圍の場

役名――吉川息女、櫻姫。清水清玄。下郎、軍助。松井源吾。丑島眼藏。今戸五郎二。石濱官五郎。

本舞臺三間の間、三圍の土手、正面へ石の鳥居、左右は榎の立ち樹、柳櫻。向う遠見に今戸橋待乳山夜の景色。よき所に石段を取附け、掛茶屋の床几。爰に源吾、焚火をしかけ、浪人の姿にて尻をからげ、眼藏官五郎、雨に濡れたる體にて焚火にあたり居る。本雨、弘福寺のツトメにて幕明く。

官五　なんと、今の雨はだしぬけに、素的に降つたではござらぬか。

眼藏　されば よ。あの雨でづぶ濡れになつた。源五どの、こなたも雨具は無し、さぞ難儀をさしつたでござらう。

源吾　イヤモウ、春雨の難儀より、當時流浪の今の難儀。吉田の家に在る内に、惣太を頼んで都鳥の一卷、今以て手に入らぬも、あの惣太めが高金を強請るゆゑの事。然るにこの程、其許方の執成しにて、隱れ忍ぶこの源吾、よろしき有附あるまでは、いづれも方、この上よろしく頼み存ずる。

眼藏　イヤモウ、その儀は決して苦勞さつしやるな。身共が朋友殘らず頼み置いたれば、氣遣ひはござ

らぬが、先達て娘小雛が事につき、罷り越したる手跡指南の浪人こそ、吉田家の浪人、山田郡治兵衛に相違ござらぬて。

官五　彼奴が内に正しく松若。殊にお尋ねの櫻姫も、隱まひあらうも知れませぬて。

源五　それは耳寄り。いづれもが左樣仰せあれば、松若めを連立ち退いたる下郎の軍助、このあたりで見受けたからは、姫松若が隱れ居るまいものでもござらぬ。して、間者となつて殘られし、五郎二どのは歸りませぬか。

眼藏　あの五郎二は跡に殘り、小雛を浚つて參る手つがひ。暇どるは氣遣ひ。もう歸る時分でござるが

ト焚火にあたり窺ひ居る。禪のツトメになり、向うより五郎二、歌を書いたる傘と、姫の繪姿を持ち走り出て來り、三人を見て

五郎　そこに居るは石濱氏、源吾どのにも、そんなら歸りを

源吾　遲いは如何と案じ居つたが、いよ〳〵身共が在所を尋ねる、吉田に身寄りの郡治兵衛、今一人のかゝり人は、軍助めでござるかな。

五郎　云はるゝ通り相違ござらぬ。知らるゝ通り跡に殘り、小雛を首尾よく浚はんと、存じたところに相違して、郡治兵衛が小雛の首を、ぶち切つたと思はつしやい。

官眼　ヤア、そりやア、なぜ切つたのだ〳〵。

五郎　サヽ、それといふのもこの繪姿の櫻姫、嚴しくお尋ねあるゆゑに、姫の附人稻野谷半兵衞、彼奴が武士を立てさせんと、可哀や小雛も首にした。それも正しく身替りの、もくろみと知つたゆゑ、小雛が書いた傘の歌、殊に幸ひ姫の繪姿、引淩つて持つて來た。正しく跡から軍助め、うせるは必定、必ず油斷さつしやるな。（ト繪姿を見せる。）

眼藏　コレ〳〵、その繪姿は強氣に濡れた。焚火で乾かすその内に、このマア鳥居へ貼つて置いて

ト鳥居下の柱へ貼り置く。

官五　して居候ふの若衆めは、どうしましたな。

五郎　彼奴も兄の半兵衞めが首にしたのは、正しく一物あつての事。

源吾　さすればあの家に松若が、隱れ忍ぶに疑ひない。それにしても軍助めが、そんなら爰へ

ト向うへ思ひ入れ。眼藏も向うを見て

眼藏　アレ〳〵、あの物音は正しく軍助。

源吾　爰へうせたら總がゝり。

四人　合點だ。

ト身拵へする。矢張り禪のツトメ、向うバタ／＼にて、軍助一散に駈け來り、走りよつて眼藏を捕へ、
三人を見て

軍助　ヤ、こなたは松井の源吾貞景。

源吾　さう吐かすは奴の軍助。

軍助　源吾貞景。ハテ好い所で

二人　逢つたなア。

軍助　お家の佞人松井の源吾、こなたを捕へて一卷の詮議。所持なし居らば軍助に、キリ／＼爰で、渡さつしやい。

源吾　默れ、下郎め、その一卷の紛失を、決して身共は存ぜぬワ。心憎きはこの傘、小雛が樣子も皆聞いた。正しく姫の身代りと、もくろんだ工みの一々、この貞景に云つてしまへサ。殊に吉田の松若も、われが沈んで置かうがな。

眼藏　おいらが組で隱まひ置く、松井の源吾に指でもさすと、寄つてたかつて嬲り切り。

軍助　すりや姫君と松若樣の、樣子を詳しく

源吾　間者を以て皆聞いた。包まず吐かせばその通り、さなきに於ては下司奴。

眼藏　うぬが命も寐ぐさつた。念佛申して

皆々　覺悟しろ。

軍助　ヤア、小癪な高言、邪魔すれば是非に及ばぬ。軍助が相手になつて四人とも、憂目を三圍隅田堤、

沖の鷗も水禽も、羽音も斯くやと

ト禪のツトメになり、四人を相手に立廻りあつて屹度なる。これより祇園囃子になり、正面の屋根船段々と下つて來り、淺草の方へ漕ぐ行く思ひ入れ。この鳴り物を借り、四人立廻りよろしく、軍助初め敵役四人深手を負うたる體にて、一人づゝ土手の上より向うの川へ切り込む事。軍助殘つて苦痛の思ひ入れ。鳴り物打上げ、捨て鐘、忍び三重。深手に惱むこなしあつて

エヽ、口惜しい。心は矢竹に逸れども、急所の痛手に身内の惱み。迚も存命叶はぬ軍助、これがこの世の（ト思ひ入れ。）南無阿彌陀佛。

ト腹へ突込み、タヂ〳〵として刀を拔き、正面の川へ飛込む。水音して鷗大分群がる。蛙の聲、唄淨瑠璃のかゝり。能き時分、向うより淸玄、破れ笠、破れ衣の姿にて、安下駄を穿き、振り袖の片袖に包みし前幕の赤子をいぶりつけながら出て來る。南の口より櫻姫、姫の衣裳古びたる形、古蓑を着て、破れし大黑傘をさしかたげたる體、跣にてたど〳〵出て來り、文句一ぱいに兩人能き所にイずむ。時の鐘、蛙の聲、空には鷗群がり、鳥の聲に目をつけて、こなしあつて

櫻姬　むら鳥の、立ちにし別れ今更に、事なしなともしるしあらめや。

清玄　佛に仕ふ身ながらも、人を助ける爲ぞとて、木石ならぬ清玄が、戀の一字を身に受けて、そのまさなごと今更に、それが高じて情けなや。

櫻姬　思ひ返せば御寺にて、不義の男を助けんと、尊とき僧を破戒させ、その罪科が今の身に、散りかかりたる櫻姬、隅田の嵐に濡れ衣の、變り果てたる姿ぢやなう。

清玄　迚も無間に沈む身を、思うて見ても今一度、その仇人に見えんと、この幼な子を養育の、苦患は知らで今頃は

櫻姬　何方の誰が手しほにて、育つ我が子を一目なと

清玄　逢うて重なるこの恨み

櫻姬　戀し床しのみどり子の

清玄　親が目先へ櫻姬。

櫻姬　逢ひたい

清玄　見たい

櫻姬　佛神樣。

清玄 姫に

櫻姫 我が子に

清玄 どうぞ

二人 逢はせて下さりませ。

　　ト又唄になり、兩人心々の思ひ入れよろしく、本舞臺へ來る。時の鐘、誂への合ひ方、木魚の音、暗がりゆゑ兩人摺れちがふ。櫻姫は正面の石段を上がり、土手の上へかゝる。清玄もつゞいて土手の方へ行かうとする。赤子頻りに泣くゆゑ、いぶりつける。櫻姫幼な子の聲を聞いて、土手に立ちどまり、思ひ入れ。

清玄 オヽ、また乳が飲みたいか。殊には今の一降りに、身內が濡れて、それでせびるか。アヽコレどうぞ（ト焚つけし跡を見て）幸ひ爰に野火の焚き捨て。ドレ、差くべて見ようか。

　　ト差寄つて落葉を拾ひ、焚つける事。本雨にしめり、いろ〳〵燃えつかぬ思ひ入れ。櫻姫土手の上にて、こなしあつて

櫻姫 旅の人かは知らねども、せわる幼な子連れての樣子。暗うて黑白は解らねど、定めて女中であらうも知れぬ。乳房が細うて難儀な人か。自らとても細き乳房といふものゝ、せめてこれなと與へたら、

我が子の祈禱。もし死にやつたら後生菩提。ドレ抱取つて（ト土手を下りんとして石段に止り思ひ入れあつて）イヤ〳〵、浮世を忍ぶ自らが、この身の上を知られなば、跡の後悔。とはいふものゝせわる子を、その儘見捨てゝ通るのも、本意ならねど

ト立どまつて思ひ入れ。下には清玄、いろ〳〵して焚きつかぬ思ひ入れ。

清玄 これはしたり。この風雨には、どのやうにしても焚つかぬか。コレ、どうぞやんでくれゝばよいが。（トあちこちするうち捨てゝある傘を見つけ）オヽ、幸ひのこの傘、捨てゝあるのは天の助けぢや。アヽ、有り難い〳〵。ドレ、これをひろげて、傘の下で焚きつけませうか。（ト傘を開き、歌の書いたる方を石段の方へ廻し、火を焚きつける。雨を除る思ひ入れにて、パッと燃立つ）。ヤレ〳〵嬉しや。ドリヤ、これで着物を干してやりませうか。

ト赤子の小袖の裾を焚火にあぶる思ひ入れ。この火あかりにて傘に書きし文字を、櫻姫よく〳〵見て

櫻姫「ほころびし花の袂は風のみか、わりなく濡るゝ雨もいとはめ。」女子の手跡、心ありげな、正しく戀歌。身のいたづらもほころびし、花の袂も今の身は、わりなく濡るゝ、アヽ、雨もいとはめ。今のこの身に。（トほろりとする。清玄はあかりにて鳥居に貼りし繪姿を見て、口の中にて讀む事。この清玄が額を櫻姫窺ひ〳〵見る事あつて）慥かにそれと思へども、破れ衣に破れ笠。

清玄　これも誰ゆゑ。ヤヽ、櫻姫人相書。

ト讀み立てる。赤子泣く。いぶりつける事。思ひ入れあつて

櫻姫　難儀な御出家。藥の布施物。

ト以前の藥を投げてやる。清玄取つて

清玄　ハテお優しい。女中の聲ぢやが

櫻姫　もしやその子が

清玄　ヤ。

ト布施鉦を打つ。これを木の頭。清玄、櫻姫を見んと傘を取除ける。この時本雨サツト降つて來り途端に焚火は消える。櫻姫は幼な子、清玄は櫻姫を見んとして、暗くなるゆゑ本意なきこなし。焚火のしめると一度の仕組み。時の鐘の送りにて、清玄口に唱名をとなへ、赤子をいぶりつける。この樣子よろしく、拍子

（作者　鶴屋南北）

五幕目

岩淵庵室の場

役名━━吉田息女、櫻姫。葛飾のお十。淸水淸玄。僧、殘月。局、長浦。見世物師、因果勘六。百姓、長八。古手屋、九郎八。岩淵權助。

本舞臺三間の間、誂への庵室。上の方障子屋體、その前石塔、墓場の體、柳の大樹。門口に竹の簀戸、下手に生垣、わら葺の地藏堂出入りあり。爰に殘月、還俗したるなまばんの頭を頭巾にて隱し、鼠布子にて、輿の薄板を毀して提灯入れを拵へて居る。長浦、局の頭にて、木綿やつしに着替へて、早桶を鉈にてこはして居る。勘六、山ぜげんにて煙草のんでゐる。九郎八、風呂敷包みを背負ひ古手屋。長八百姓にて紙袋に蜥蜴を入れ、これを提げて立ちかゝり居る。すべて北本所岩淵地藏堂草庵の體。てんつゝに双盤を冠せ、幕明く。

九郎　コレ〳〵、庵主どの、師匠坊の病氣は、少しは快い方かな。

殘月　アイ〳〵、今朝程は快い方でござります。

長八　時にをばこ、こなたのこなして居るのは、早桶ではござらぬか。

長浦　アイ、こりや早桶の明いたのでござんす。これを此やうにこなして置いて、焚火にしたり、又はいろ〳〵な小細工に使ひまするわいな。

長八　エヽ、早桶の明いたのが小細工の種になりますか。ハテサテ、廢らねえものでござるの。

長浦　イエモウ、廢る物というてはないものでござんす。輿の古いのであの樣に、提灯入れを拵へたり早桶をこなして焚火に使ひ、短い所は下り〳〵に賣つてやります。モシ〳〵、新佛の着た經帷子は、茶袋に拵へまするわいな。

九郎　アヽ、そりやア氣味の惡い、薄穢い事だ。併しおいらも毎日々々、湯灌場物を買つて歩けば、あんまり退いた仲でもござらぬて。

勘六　時にこの間から頼んで置いた、爰らには素的な奴が居ようの。どうだ、まだ摑まりませぬか。

殘月　左樣サ。今年は溫いに合せては、蛇の出が遲うござります。お前この頃、山男を出してござるではないか。

勘六　さればサ。兩國へは山男を出したが、近いうちに蛇遣ひの女も出すつもりよ。

長八　モシ、蛇がいらば捕まへて進ぜませう。この間山男に食せるといつて、頼ましつた蜥蜴を、大分捕まへて來ましたが、どうぞ買つて下さるか。

殘月　ほんに、こなさんを頼んで置いたつけの。モシ、勘六さん、蜥蜴を買つて置かうか。

ト道具箱へ散してある刃物を片寄せる。

勘六　オイ〳〵。どうで毎日要るものだ、取つて置きませう。モシ、お前、爰へ見せなさい。

長八　アイ〳〵。何だかこの頃は又、蜥蜴もシケだけにござります。

ト紙袋を渡す。勘六ソツと取つて袋の中を見て

勘六　モシ〳〵、こりやアみんな青蜥蜴ぢやアないかえ。

長八　左樣サ。青蜥蜴がえら居ますで

勘六　この人はマア、わつけもないものを捕まへて來た。青蜥蜴が食はれるものか。こいつを食へば、立ち所に死んでしまふワ。

長八　エヽ、青い蜥蜴は毒でござるかえ。

勘六　イヤモウ、大毒サ。

殘月　青い蜥蜴が毒にならないで、何が毒になるものか。

長八　折角捕まへて無駄事をしました。業腹な。（ト袋の儘そこへ捨てる）。

九郎　モシ〳〵。其方の用が方附いたら、何ぞわしらが買つて行きさうな代物がござるかの。

殘月　イエ、まだ湯灌場物は出ませぬが、何だかこの頃は仕合せ悪いその上に、師匠坊が病氣でござつて、居候ふ一倍錢が要ります。コレ〳〵、伯母御、こなたの着類や頭の道具、なんとあのお人に

拂うてしまうてはどうでござるの。

長浦　これはしたり。こなさんも滅相な事を云ふ人ぢやわいの。着類も頭の道具も、身分不相應にこの葛籠の中に、コレ〳〵（ト古葛籠を明け、中より姫の小袖、鏡臺鏡その外手道具を出し）見さんせ。

わしや此やうに持つて居れど、一つとして賣り拂ふ品はござらぬわいの。

九郎　モシ〳〵、伯母さん。お前その簪や振り袖を、しまつて置いて何にさつしやります。

長浦　ハテ、このお人わいの。何にするものぢや。わたしや頭も結うて、小袖も着て、なよじめいて歩くわいな。

長八　ナニ、それを着て歩く。その齢でか。こいつは大笑ひだ。こなさんが振り袖を着たら、よい見世物だんべい。ハヽヽヽヽ。

勘六　何ぞ好い見世物なら、わしが相談しませうか。成る程、その振り袖を伯母御が着たなら、鬼娘の上をゆく、こいつは素的な太夫だわえ。

九郎　まことにこれが因果者。

長八　錢は戻り〳〵。

長浦　エヽ、憎らしいわいなう。

九郎 ドリヤ、この頃に來て見ませうか。

ト双盤になり、捨ぜりふにて九郎八向うへ入る。

殘月 コレ／＼、伯母御、お前もマア、いつまでそれを持つて居ようと思はつしやる。どうでわしらもこんな庵室に、へばりついて居たとて、身の出世にもならぬから、一種でも金にして、これを元手に商ひにでもかゝらう。その心掛りでわしが頭も、有やうはザツとこの位なものサ。

ト頭巾を取る。なまばんの頭へ附け鬢して居る。

勘六 イヤア、こなさんは坊主だと思つたら

殘月 還俗する心掛けサ。

長浦 ほんにモウ、其やうに男らしい頭を見ては、猶しも思ひが增穗の薄ぢやわいの。（ト思ひ入れ）。

勘六 アヽ、そんならお前は、あの庵主の伯母御ではないの。

長浦 アイ、わたしやゝるお屋敷の局役、勤めて居つた姫君から、拜領したこの品々。殊にこの殘月どのは、その時からのわたしの馴染。この人にも還俗させ、わたしも頭にこの着物、振り袖衣裳に身を粧ひ、世間晴れてのわたしや祝言がして見たい。それ濟むまではどうして賣つていゝものか。コレ男、一度着て見ぬその內は、何が拂うてよいものかいな。

ト小袖を二重舞臺の蓆屏風へ掛け、樂しみに見惚れること。

殘月　イヤハヤ、呆れた婆アだ。

勘六　それで解つた夫婦者。ほんに好い氣な女中だわえ。イヤ、女中といへばこの間、寺島の野道で、賤しく見えぬ屋敷の娘、迷子になつたやら、ぶらついてあるいて居たゆゑ、情けらしく騙しこみ、おれが内へ引込んで置いたが、何をいつても近所の手前、惡い奴等が嗅出すまいものでもない。幸ひ爰は人家離れた庵室、なんと連れて來ようが、ばつたりに賣り切るまで、居候ふに置いて下さい。還俗するこなた衆ゆゑ、元手の足しにならうも知れぬ。なんと相談に乘る氣はないか。

殘月　そりやァ耳寄り。隨分相談に乘つて、その女も置いて進ぜうが、マア早く連れて來さつしやいよ。

勘六　そんなら直に連れて來るが、爰に難儀な事があつて、その女が着て居た小袖は、おれが通路にぶち込んで、ちつとむづかしい。コレ、連れて來るうち、何ぞ着せさうなものはあるまいか。

殘月　成る程、これも有りさうな話だ。どうぞその女に着せて來るうち、何ぞ　(ト思ひ入れ)。コレ〳〵伯母御、今出したその小袖を、ちよつと貸さつしやい。連れて來る間その女に

ト云はうとする。長浦ピンとして

長浦　イヽエ、なりませぬ。どこの女子か知れもせぬ風來者に、大切のわしが嫁入り小袖、何のよしみ

に着せようぞいの。わしや知らぬ。否ぢやわいな。エヽ、阿房らしい。

残月　勘六さん、あの通りだ。アヽ、何ぞ來るうち

勘六　何でもいゝ〱。

残月　それだといつてわしらが内に、どう見たところが遊んで居る物は、コレ〱、この衣ばかりサ。

ト蓆屏風に掛けてある淸玄の古衣を取つて見せる。

勘六　ハテ、衣でも何でも大事ない。萬更姫を裸でも連れて來られない。併し頭をどうしたらよからう。

残月　コレ〱、迚も衣を着る位なら、此わしが網代の笠がよからうぞえ。（ト網代笠を渡す）。

勘六　成る程、これを冠せて連れて來よう。

残月　それでよくば、早く賴みます。

勘六　こなたより此方が急ぎだ。ドリヤ、連れて來ようか。

ト流行り唄に双盤になり、勘六、笠衣を持ち向うへかゝる。揚幕より葛飾のお十、世話女房の拵へ、横帶にて、頭へ手拭を巻き、達摩耳木莵小立の小袖を小風呂敷に包み、これを提げて出て來り、勘六と摺ちがひ、お十は門口へ來る。勘六は向うへ入る。

お十　ハイ、ちとお頼み申しませう。岩淵の地藏尊は、これでござりまするかえ。

殘月　アイ、爰でござります。どれからござりました。
お十　左樣なら御免なされませ。（ト内へ入る。殘月狼狽へ頭巾を冠る）。イエ、わたしや淺草邊の者でござりまするが、まだ當歳とは申すもの丶、男の子が一人ござりましたが、疱瘡に取つかれ、ハイ、亡しましたわいな。
殘月　へ丶、それがどうしたえ。
お十　なくなりましたその跡で、近所の衆の話で承りましたが、この地藏樣は子育ての御願を、お諾きなさると聞いたのも、まことに後の祭とやら、役に立たぬ事ながら、短い壽命も約束事、あの世で助けてやりたう存じまして、あの子の手遊び、地藏樣へ納めた上、せめては賽の河原にて、石を積みます苦患など、苦勞のないやう、どうぞ御回向をなされて下さりませ。
ト風呂敷の中より紙包みの二百を出し、殘月が前へ置く。殘月こなしあつて
殘月　これは〱、御叮嚀に。へ丶丶丶。旦那寺もござらうに、此方までお心着かれまして、お物いりの中で、これは〱。へ丶丶丶、よろしく回向仕るでござりませう。さて〱それは、惜しい事をなされましたな。
お十　イエモウ、水子ながらも一人ッ子、内の者も大きに力落しでござりますわいな。

殘月　その筈の儀でござります。さて〳〵お氣の毒、南無阿彌陀佛々々々々々。

お十　左様ならばわたしも、地藏様へお詣り申して、お念佛も上げたく存じまするが、あのお堂へ參りましても、大事ござりませぬかえ。

殘月　隨分よろしうござります。お念佛を上さつしやるが、申さば佛の爲めでござるて。ハヽヽヽ。

お十　ハイ、左様いたして歸りませう。お堂へは爰から入りまするかえ。

殘月　左様でござる。即ちこれからお入りなされませ。

お十　アイ、少しの間お念佛を、ドリヤ、上げて參りませうか。

ト合ひ方になり、持つて來たる小立、達摩を持つて地藏堂の中へ入り、回向する體。内にて鉦の音聞える。殘月跡見送り

殘月　ハテサテ、若い女だが、奇特な事だ。その上に器量は好し、イヤ、天晴れな女房振りぢや。

トいろ〳〵思ひ入れ。長浦是を聞き、ムツとしたる體にて

長浦　コレ、器量がよしとは、そりや誰が事ぢやえ。

殘月　ハテ、今お堂へ入つた内儀の事サ。

長浦　何ぢや、内儀の事ぢや。コレ、エヽ、こなたはなう。（ト殘月の胸づくしを取つて）惡性男の坊主返

りめ。

殘月　ナニ、坊主返りだ。アノ愛ナ狸婆アめ。

長浦　アイ、わたしや狸ぢや〳〵。狸ぢやによつて、八疊敷のこの庵へ、へたばりこんで居るわいな。わたしも吉田のお館に、勤めて居れば局役、それをいろ〳〵釣り出して、坊主の女房になるわたしが、こなたの目から狸と見えるか。狢と見えるか。コレ、こなたを馬十とようつけた。わしやこなたを馬場馬と思うて居るわいのう。

殘月　エヽ、おきやアがれ。女さへ來ると、また大福餅を賣りつけるが、よい〳〵婆アめ。

長浦　わたしがよい〳〵婆アなれば、こなたはわい〳〵坊主ぢや。

殘月　エヽ、よい機嫌な。お猿婆アめ。

長浦　又お猿と改名したか。エヽ、こなさんは

トむしやぶりつく。殘月突き倒す。この時屏風に掛けし小袖、屏風の中へ落ちる。直に赤子泣く。兩人屏風を押倒す。内に淸玄、病氣の體にて、木綿蒲團を敷き、寢所へ落ちたる姫の小袖を取上げ、不思議さうに目をつけ、赤子をいぶりつけ居る。此うち合ひ方。兩人見つけ、氣の毒なる體にて

殘月　ヤヽ、お師匠樣、お心持は

長浦　宜しうござりまするかえ。

ト清玄はこれに構はず、姫の小袖に見惚れ、思ひ入れあつて

清玄　模様もそれと覺えある、移り香殘るこの小袖。夢幻か清玄が、枕の許に落ちたるは、もしや心が通ぜしやらん。戀し床しい仇人に、せめてこの世で（ト思ひ入れ。）

殘月　申し〳〵、師の御坊、うつゝない事仰しやりまするな。

トこれにて清玄心づいたるこなし。あたりを見て

清玄　其方は殘月。お局、アヽ、愚僧はいかう逆上いたしたと見ゆるが、コレ、この女子の小袖は、どうして爰へ。

長浦　アイ、そのお小袖はお館にあつた時、櫻姫樣より私しが、拜領いたした品でござりまする。

清玄　すりや櫻姫どのより。さもありなん。今暫くもまどろみし、夢の心地に見えし姫、恨みのたけを思ふ內、この子のせわるに心づき、目覺めて見ればこの小袖。いはゞ正しく。コレ、櫻姫どの、覺えがあらう。逢瀨つれなき稻瀨川、その砌よりこの幼な子、出家の手しほに育つるも、もしや我が子に引かされて、又の御見もならうかと、行くへ定めぬ清玄が、人目も恥ぢずこの樣に、育つる事を其方は知らぬか。コレ、そりや聞えぬぞよ櫻姫。わが身は知らぬ事ながら、その前生は未までも、

變らじものと云ひ交はし、共に死なうと思ひしが、若氣の至り、未練な心がこの身の誤り、只大切なるその時の（ト以前の香箱、袋入り、襟に掛けしを出して）それゆゑ肌身は放さぬこの品。逢うて其方に渡したいノ＼。この程たしか庵崎の、闇はあやなし行きちがひ、せわるこの子の聲聞いて、我れへくれたる良藥は、稻瀨川にて清玄が、姫に與へし覺えの藥。さては尋ぬるその人と、後で思うて詮なき別れ、殊に思はず今爰で、よしない小袖を見たゆゑに、一倍胸が碎くるやうな。コレ、床しいわいのく。

ト小袖を抱へ思ひ入れ。此うち地藏堂を明け、お十窺ひ居る。殘月は香箱を金と思ふ間違ひのこなしあつて

殘月　申しノ＼、お師匠樣。左樣ならこの子供は、犬狼の餌食とも、なるが不便と仰しやつて、拾うておいでと存じたら、そんならその子は、櫻姫どのゝ

清玄　アイヤ、左樣でもあるまいが、人を助くるは出家の習ひと、それゆゑよしない、連れ參つて今での後悔。殊には思はぬこの姫の、夢を見るとは、アヽ、穢らはしいく。（ト小袖をあたりへ捨てる。）南無阿彌陀佛々々々々々々々。

トこの時赤子泣出す。お十、そろく門口へ來る。

長浦　ほんに左様でござります。併し、なんぼこの子を助けたいと、思しめしても男の事。わたしが乳房は役に立たず、白雪糖や水飴も、乳があつての上の事。殊にお寺も同前な

殘月　この庵室で子供の養育、どうして心に叶ふものでござりませう。

清玄　サ、愚僧とても左樣には存ずるが、今更どうも仕樣もやうが

お十　アイヤ、その致し方はござりまする。

清玄　ヤ。

ト合ひ方、お十内へ入り

お十　見ました所が幼い子を、お育てなさるゝ御出家樣、なか〳〵あなたの手一つで、どうも心許なう存じまする。わたしも昨日今日までも、育てましたる當歳子、疱瘡でなくなして、乳房さへまだ上がらぬが、その子の仕合せ。疱瘡で死にやつた我が子のため、お賴みならば預かりませう。こちから斯樣に申すならば、里扶持取らうといふやうな、左樣な事も申しませぬが、なんとマア、御相談なされた上、わたしが方へお預けなさんしては、どうでござんすえ。

清玄　成る程、賴もしい女中の詞。乳のない家に留め置いて、せわつてばかり置くなれば、蟲氣の出るは、こりや必定。

四幕目　　　　六幕目



殘月　里扶持までも取るまいと、名乘りかけての里の親。

長浦　そんな里親聞き出して、一分二百をわたしは丸吞み。コレ、殘月どの、なんとよい口でござんすが、こりやあのお內儀にお賴み申すが、いつちよいぢやござんせぬかえ。

お十　サ、御得心なら、わたしが內は山谷町。亭主は町へ茶屋廻り、名も有明の仙太郞。わたしは女房のお十と申しまする。お預けなさるゝ思し召しか、承つて參りませう。

淸玄　賴もしさうなお內儀の、世話してやらうと云はるゝは幸ひ、そんならこの子を、宜しうお世話を。

殘月　左樣が宜しうござりませう。（ト赤子をお十が方へ持ち來り）モシ、お內儀さん、何分よろしう、お賴み申しまする。（ト渡す）。

お十　お氣遣ひなされまするな。隨分蟲氣の出ぬやうに、わたしが乳房でこのお子を。コレ〱、幸ひ爰に死んだ悴がこの小立、幡。天蓋にも直してと、持つて參つた事ながら、お氣にさへ掛けさんせねば、何も祈禱と申し、このお子に着せ申さうかえ。

淸玄　何分よろしう賴みます。

お十　そんなら直に。（ト風呂敷より小立を出し、赤子に着せろ。包みありし振り袖をちよつと見つけて）こりやコレ慥かに、ちぎれし振り袖。

清玄　イヤ、その片袖は今日まで、その子の肌に附けさせたれど、好い着る物が出來たで仕合せ。これぞまことに慈悲善根。

お十　お案じなさるな。お近い内に機嫌なお顔を

殘月　なにサそれには

長浦　必ず及ばぬ。サヽ、ちつとも早う

清玄　女中樣。

お十　ドリヤ、うまくを、飮ませませうか。

ト唄になり、赤子を抱へ、思ひ入れあつて向うへ入る。清玄見送つて

清玄　ハテサテ、世には情けある人もあるものぢやなう。アヽ、情けないのは小袖の主の（ト小袖を取つて思ひ入れ。）アヽ、又逆上したか。いかう眩暈が

殘月　サヽ、冷えぬやうになされませ。

ト殘月二枚折を引廻し、淸玄を寢させる。長浦思ひ入れあつて小聲になり。

長浦　コレく、殘月どの、今淸玄が持つて居た、アノ、この樣な形をした物を見さんしたか。

殘月　見たともく。慥かにあれは臍繰金。あいつを見てはもう片時も早く、仕舞ひをつけるは、先刻

に見たる(ト紙袋を見つけ、二重舞臺の鑵子の下の燃えるを見つけ)こいつを幸ひ、鑵子の沸湯へ

ト青蜥蜴を鑵子の中へ明ける。

長浦　コレ〳〵、その青蜥蜴を鑵子の中へ入れたは

殘月　コリヤ。(ト囁く)。

長浦　アヽ、あれで師匠を

殘月　これサ。あの毒でいかねえ時は、まだ仕樣はいくらもある。どうで病者けた師匠坊、殺されねえでも近い内に、くたばるは見るやうだ。一日々々居候ふに居て、食ひ潰されようより、殺してしまふが向うも勝手、此方も仕合せ、兩爲めといふものだ。

長浦　成る程、手短かにそれもよからう。アレ〳〵、鑵子の湯が、沸えこぼれるよ〳〵。

殘月　オツト、合點だ〳〵。

ト茶碗を持つて行き、鑵子の湯を氣味惡さうに汲んで來り、蓆屛風を明けて窺ふ。合ひ方になり

モシ、お師匠樣、お目か覺めてござりまするか。

清玄　何ぢやゝら、うつら〳〵と、寢るも寢られず。

殘月　左樣でござりませう。晝の間は物騷がしうござりまして。サア、お藥を上げませう。(ト差出す。)

清玄　こりや藥ぢやと云やるか。

殘月　左樣でござりまする。常からお藥は上がりませぬが、どうやら今日は取分けお顏の色が惡うござりまするゆゑ、あなたにお隱し申しまして、近所の醫者を賴みまして、お藥を貰ひました。卽ちこれが一番煎じ、覺めぬうちに召上がつて下さりませ。

ト清玄茶碗の中へ思ひ入れあつて

清玄　イヤ〳〵。人の生死は卽ち定業。俗と違つて出家の身で、死ぬる命が惜しいというて、服藥いたすは、却つて迷ひの種ぢや。ハテ、運に叶へば、捨てゝ置いても本復する。時節到れば耆婆扁雀の療治でも、叶ひ難きは人間生死、藥は却つて無用にしやれ。

ト差置く。殘月、長浦顏見合せ、思ひ入れあつて

長浦　モシ〳〵、左樣ではござりませうが、折角煎じたそのお藥。

殘月　せめて一服、召上がつて下さりませ。

清玄　イヤ〳〵、服藥無用、只今も云ふ通り、必ず藥は

殘月　服まつしやりませぬか。（ト清玄頷く。殘月茶碗を持ち、清玄が目先へ差出し）清玄どの、くらはつしやい。

清玄 ヤヽヽヽヽ。

ト驚く。引捕へて

殘月 何を〳〵。動かす事ぢやァねえ。藥といつたを氣取つたか、服まぬなんぞと逃げ口上。さう知られたらもう自棄だ。藥といつたは蜥蜴の毒だワ。これをこなたにくらはして、殺してしまふ目算だ。キリ〳〵爰で、服んでしまへ。

清玄 すりや推量に違はず、師匠に毒を與へる其方。エヽ、成行き存ぜぬ惡人めが。

殘月 これサ。世迷言は死んでから云はつしやい。コレ〳〵長浦どの、爰へ來て手傳はつしやいな。

長浦 早く服まさつしやいな〳〵。

殘月 サア、くらやァがれ。

清玄 イヤ〳〵服まぬ。その毒服まぬ。

殘月 エヽ、くらへといふに。

ト引つける。長浦後より廻つて清玄を押倒し、兩人立かゝり、殘月毒を無體に服ませんとする。清玄服むまいとする。立廻りにてこの毒、清玄が片頰へかゝり倒るゝ。長浦は割り木を以て無性に打つ。殘月朱巾を取つて首を締めんとする立廻り。清玄の頰紫色に變じ、見苦しき面になる。長浦見て

長浦　アレ〳〵、清玄の顔が、片ツ面變つた〳〵。
殘月　大きな聲をさつしやるな。毒がかゝつて變つたの。こりやモウ絞め殺して
　　ト兩人していろ〳〵立廻り。清玄こける事。夜具を打かける。又兩人して割り木にて打つ。清玄血を吐いて落入る思ひ入れ。兩人こなしあつて
長浦　殘月どの、もう死んだであらうの。
殘月　おれもさう思ふが、待たつしやい。息が止つたか、窺つて見よう。（ト死骸の口へ手を當て思ひ入れ）。
長浦　どうだ、死んだか〳〵。
殘月　よし〳〵、死んだ〳〵。
長浦　そんなら早く金を奪つてしまはつしやい。
殘月　首に掛けてうせ居つた。（ト襟に掛けたる香箱を取つて）ヤヽヽ、大分こりやア輕いワ。
長浦　金があつたかえ〳〵。（トよく〳〵見て）
殘月　イヤア。コレ〳〵、形が形ゆゑ、慥かに金と思つたら、こりやアコレ香箱だワ。エヽ、骨折り損の草臥れ得となつたわえ。（トあたりへ香箱を捨てる）。
長浦　コレ〳〵。そりやアよいが、この坊樣を殺しばなしでもよいかえ。

殘月　ナニいゝ事があるものか。近所の者に見られては株じまひだ。併し病人で居たゆゑ、病死したと
いへば事は濟むて。
長浦　そんなものだよなう。
殘月　その蒲團を寄越さつしやい、（ト淸玄が死骸へ蒲團をかむせ、前へ二枚折を立廻し置き）サア／＼、こ
れでよい／＼。近所の手合ひが聞いたら、師匠坊は病死したと云はつしやいよ。
長浦　合點ぢや／＼。併し、いつまで斯うして置くのぢやえ。
殘月　いつまで置かれるものだ。お前はアノせうさん堀の、穴掘りの權助を早く呼んで來て下さい。
長浦　アヽ、あの權助にしまはせるのかえ。
殘月　さうサ。彼奴を他人にすると、どう感を附けやうも知れぬ。サア、早く呼んで來さつしやい。
長浦　合點ぢや／＼。ドリヤ、一走りに行つて來ようか。
ト禪のツトメになり、長浦向うへ走り入る。殘月殘つて
殘月　アヽコレ、思ひがけなく罪を作つた。併し師匠の事だ。ドレ、水向けでもしてやらうか。
ト水向けして回向して居る。矢張り禪のツトメにて、向うより權助、穴掘りの拵へにて、鍬と鋤を擔
ぎ出て來て內へ入る。

権助　ハイ、御免なされませ。権助でござります。早く來いと呼びに遣はされましたから、うろたへて參りましたが、佛樣でも參りましたかな。

殘月　オヽ、権助どんか。コレ、聞かつしやい。外から佛は來ねえが、病人でかゝり人になつて來た、師匠坊が、たつた今死なれたの。

権助　エヽ、お師匠樣がなくならつしやりましたか。そりやアいかいお力落しでござりませう。して、何處らへ葬むらつしやりますえ。

殘月　されば、爰等がよからうと思ふわえ。

ト靜かなる禪のツトメ。兩人上の方へ穴を掘りかゝる。向うより勘六先に立ち、櫻姫、長襦袢の上へ以前の僧衣、綱代笠を冠り、下駄を穿き、勘六に手をひかれ出て來り、花道にて

櫻姫　コレ、わが身は自らを、何れへ連れて行くのぢや。

勘六　これナ。あんまり大風な事を云はねえものだよ。あの向うの庵室が、女の居るには靜かでいゝ所だから、連れて行くのだヨ。

櫻姫　そりや過分なぞや。

勘六　アレ、又大仰をぶつこ拔くワ。（ト門口へ來て）コレ、庵主、內にござるか。彼の者を連れて來たよ。

殘月　オヽ、勘六どのか。遠慮はない。連れて入らつしやい〳〵。

ト兩人內へ入る。權助は矢張り穴を掘つてゐる。櫻姬、笠を取ると、古き袖頭巾を冠り居る。

勘六　庵主、見さつしやい。笠の下から美しい顏が見えるから、嚊アが袖頭巾の古いのを冠せて來たのよ。

殘月　イカサマ、こいつはおつりきな判じ物だ。して、こなさんは、納める所を拵へて來たのか。

勘六　サ、そこは如才はないの。小塚ツ原の千代倉で、奉公人を尋ねるが、なんとおれの口ぢやア向うの通りが悪いワ。そこでこなたを伯父とも兄ともいつて、向うを得心させれば、今夜直に、金になる仕事だわな。

殘月　そいつは好い手つがひだの。そんならおらア兄だと云はうが、今夜直に金になるかよ。

勘六　ならねえものを連れて來るものか。そんなら斯うさツし。この玉はこなたに預けたから、どこへも遣らつしやるな。おらア直に一走り行つて、相談を極めて來ようよ。

殘月　さうさつしやい〳〵。早く行つて來さつしやいよ。

勘六　直に極めて來る。コレ〳〵、あの子や。必ずどこへも行くまいぞ。この人の側を放れまいぞ。直に行つて來るから、待つて居さつしやいよ。

櫻姬　何しに何れへ行くものぞ。便りしるべもない身の上、少しも早う、戻つてたもや。
勘六　戻つて來るよ。あれ聞かつしやい。あの通りの大風だ。
殘月　戻つてたもやも凄まじい。ハヽヽヽ。
勘六　ドリヤ、行つて來ようか。
　　ト禪のツトメになり、勘六向うへ入る。
殘月　コレ〳〵姐さん、必ず案じさつしやるな。怖い事はないよ。斯う見えても爰は寺ではねえ。町家も近い地藏堂。わしは爰の庵主だワ。必ず心を置く事はねえ。さう思つて居さつしやいよ。
櫻姬　嬉しきわが身の志、必ず見捨てゝたもるなや。
殘月　ハテ、大風なせりふ附だ。ハヽヽヽ。コレ〳〵、見捨てる事ぢやァねえワ。案じさつしやるな〳〵。アヽコレ、この生温かいに熱苦しいその頭巾。マア、取るがいゝ〳〵。
櫻姬　兎も角も、よきやうに
殘月　悪いやうにはしねえよ。（ト頭巾を取つて顏を見て、悔りして）ヤア、お前は、お姬樣だ〳〵。
櫻姬　さう云やる其方は、御寺に居やつた
殘月　ハイ、殘月でござりまする、ヤレ〳〵、お懐かしや。ようマアお出でなされました。マア〳〵此方へ

お出でなされませ。(ト二重舞臺へ連れて上る。この時權助見て膽を潰し、石塔の蔭へ隱れて窺ひ居る。)イヤモウ、移り變りまするは、世の習ひとは申すもの丶、姫君樣が此やうな、お姿でこの庵室へ。(ト清玄の事を思ひ出せし思ひ入れにて)ほんにマア、虫が知つてか。彼奴をよく〱先にやらかしてしまうた。彼奴がマア生きて居たなら、それこそほんに、愚僧が願ひの大きな邪魔、よつてたかつて殺したは、結ぶの神のお手傳ひなすつたのか。

櫻姫　アヽコレ、殺したとは何をマア、怖い事云やるぞいの。

殘月　イエ〱、何も怖いものではござりませぬ。只今殺したと申したは、何でござりまする〱。オヽそれ〱。爰はこれでも藪蚊が多うござりまするから、あなたを刺しまするなら、愚僧が斯う打殺しますると申した事でござりまする。(ト蚊を打殺す思ひ入れあつて)申し〱。このマア、ぢわぢわ寒いのに致しては、早い蚊の出やうでござりまする。殊に今日は春風寒う、さぞマアそのお肌薄では。アヽコレ、お風召さぬやうに。幸ひ〱、この小袖をお召しなされませ。

ト以前の裲襠其外小袖も取つて來り、櫻姫に見せる。この時合ひ方になり、長浦向うより歸つて來り、内を窺ふ。櫻姫小袖を見て、合點の行かぬこなしにて

櫻姫　ヤヽ、こりや自らが着古せし、覺えの小袖。

殘月　サヽ、お覺えがござりませう、いつぞや清水にて局長浦、あなた樣より拜領いたして

櫻姬　ヤヽ、すりやアノ局も

殘月　この庵に居りまする。マヽ、あなた樣にはちつとも早う、お召替へ遊ばすには、サヽ、この納戸へお入りなされませ。

ト合ひ方にて殘月小袖を持ち、櫻姬に附き、障子の中へ入る。權助伸上がつて納戸の方を見る。門口には長浦窺ひ居る。

權助　疑ひもなき櫻姬。どうして一人で爰へ來たやら。病死したといふ淸玄が、この庵室に居る事を、よもや聞いたらうかうかと、便つて來よう筈もないが、そんならこりやァ惡者めらに、拘引かされて來たに違ひないと見えた。

長浦　あの性惡の殘月どの、いつの間にかはお姬樣を連れて來て、わしが貰うた小袖まで、慥かに着せる樣子ぢやが、そんならあの坊主返りめが、姬をコッソリ梵妻にする氣ぢやの。エヽ腹の立つ〱。

トいろ〱思ひ入れ。障子の内より櫻姬、小袖を着替へ、殘月も出て來る。兩人は又隱れて窺ふ。

殘月　サア〱、少しはこれで只今のやうな、いぶせきお姿引替へて、昔に變らぬ櫻姬樣、あのお局の長浦どのも居りまして、お前樣の遣はされたる、コレ〱（ト鏡臺、鏡、其他手道具を出して）斯樣に

あらましはござりますれば、御不自由な儀もござりますまいて。

櫻姫　すりやァノ局も、この庵に來て居やるかいの。

殘月　左樣でござりまする。お案じなされますろな。只今から私しどもがお側にあつて御苦勞はさせませぬ。モシ、お姬樣、その代りには鎌倉で申した事を、申し、お叶へなされて下さりませうな。

トしなだれかゝる。權助石塔の蔭にて思ひ入れ。外には長浦腹の立つこなし。

櫻姫　鎌倉で云やつた事とは、そりや何ぢやぞいの。

殘月　何ぢやとはお覺えがござりませう。あなたにはこの殘月、いやみな事ぢやが、惚れました。首尾せぬうちにお寺の騷動、淸玄どのもそれからのしくじり。今となつちやァ、誰に憚る事もござりませぬ。モシ、お姬樣、ちよつと爰で思ひのたけを

ト挑む。權助、長浦いろ〳〵思ひ入れ。

櫻姫　アヽコレ、大膽な。慮外しやると免さぬぞ。

殘月　ナニ、免さぬえ。モシ、お前、その時分とは違ひますよ。今ぢやァ宿なし同前なお姬樣、否でも應でも物にする。

櫻姫　エヽ、慮外者。放さぬか〳〵。

ト二人爭ふ。權助長浦、つかつかと入り、權助は殘月を取つて投出す。長浦は殘月が胸づくしを取る。

權助　間男め、見つけたぞ。

長浦　間女め、見つけたぞ。

ト　この聲に悸りして

殘月　ヤヽ、わりやァ穴掘り。こちらは局の

長浦　アイ、長浦でござんす。局ぢやわいの。

櫻姬　ヤ、わが身は局。コレ、懷かしいわいの〱。ようマア爰へ、來てたもつたなう〱。

長浦　アイ、よう爰へ參つたので、何もかも見ましたぞえ。コリヤ、形見ぢやと下さつたそのお小袖も、斷りなしに着飾つて、わたしが男をお姬樣、ようマアお前は寢取らんしたの。

權助　さうだ〱。こなさんは其方で譯を附けるがよい。この穴掘りの權助は、間男を捕まへた。坊主返りの殘月め。動きやァがるな〱。

殘月　ヤイ〱、この穴掘りめは、怪しからぬ事を云ひ出したな。なんでわりやァ間男だ。イヤサ、穴掘りの權助が女房に、姬がなるものか。ハヽヽヽヽ。こいつは氣でも違つたさうだ。

權助　おきやァがれ。氣も違ひはしねえぞ。おれが女房はお姬だワ。それを嘘だと思ふなら、そりや、

この手拭を取つて、權助樣の御面相を
ト頰冠りを取る。櫻姬、權助を見て

櫻姬　ヤ、其方はいつぞや淸水にて、逢うたその夜に別れてより

權助　アヽコレ。お前と深く云ひ交はした、わしやァ穴掘り釣鐘權助。お前の亭主だ。おれが嚊ァはお姬樣、姬は女房だ。わしは亭主だ。なんと亭主で、あらうがの。
ト思ひ入れ。櫻姬もこなしあつて

櫻姬　成る程、わが身が云やる通り、自らは女房ぢやぞ。女房も女房、二世までと云ひ交はした、私が大切な男といふはこの者ぢや。主のある身に不義云やると、きく事ぢやないぞ。さう心得て居やいなう。

權助　あれ聞いたか。おれが女房だワ。その主のある女に、なぜ今のやうなみだらな事を仕掛けたのだ。サア、云ひ譯があるか。云ひ譯がねえと、還俗首をもいでやらうか。（ト立ちかゝる。）

殘月　イヽヤ、さう手輕く首はもげめえ。コレ權助、われは又この姬を女房だといふが、しつかりとした人別でもあるか。イヤサ、何が證據で又、女房だといふのだ。

權助　人別よりは何よりは、この權助が女房に、違ひないといふ證據は、おれが腕のこの刺靑だ。
ト腕を捲り、釣鐘の刺靑を見せる。

殘月　その刺青が何の證據だ。
權助　佛の穴を掘るおれが、腕へ彫つたはこの通り、そこで異名を釣鐘權助。この刺青を女房も、同じく彫つた、腕はこれだワ。（ト櫻姫の手を捲り上げ、釣鐘の彫つたるを見せる）。
殘月　イヤア、姫の腕に釣鐘を、同じく彫つてござるとは
長浦　イヤモウ呆れたお姫樣。
權助　命といふ字の上を越す、二人が二人釣鐘を、思ひ合うたる入れ黑子、これでも夫婦であるめえか。
殘月　サア、そりやァ
權殘　サアく
權助　間男坊主め。首をもぐぞ。（トかゝる）。
殘月　アヽ、夢になれく。
長浦　それ見やしやんせ。日頃こなたが惡性ゆゑ、斯うした難にあうたのも、みんなお前の心から。コレ、權助どの、見ても居られぬわたしが挨拶。仲人ぢや。どうぞ濟まして下さんせいの。
權助　坊主野郎がわからぬ首を、取つたところが役に立たぬ。いゝワ。こなたが女の仲人なら、早い話に濟ませてやらうが、どうマァ並びを附けるのだ。首代で濟ましてやらうワ。

長浦　サア、そこぢやわいの。知らんす通りの取つき身代、餘計な事も出來ぬによつて、その首代に百疋出しませう。
權助　ナニ百疋。
長浦　アイ、一分出さうが、濟まさんせいの。
權助　間拔け婆アめ。此奴等は人を見損なつたのか。一分ばかり何にするものだ。モウ〳〵料簡がならねえ〳〵。首をもいでやるべい〳〵。（ト出刃を持つて立ちかゝる。）
殘月　アヽコレ〳〵、仲人どの、どうで一分で濟むまい程に、もちつと直してコレ、頼みます〳〵。

ト首を押へて蹲まる

長浦　ようござんす。憎い人でも今更に、萬更見ても居られまい。コレ、權助どの、して、どれ程出せば、濟まして下さんすぞ。
權助　どれ程も、これ程も、たかゞ地藏堂守り坊主、思ふ程は取れめえわえ。せう事がない、斯うしてやらう。値打はないが、破れた庵に地藏堂、世帶道具の二人が溫袍、身ぐるみ出して丸裸、一切おれに渡したら、それを規模に濟ませてやらうワ。
殘月　ヤア、ナニ、屋財家財を取つた上

長浦　わたしも裸になるのかえ。
殘月　そんな事なら、破談だ〳〵。
權助　破談と吐かせば首を取らうか。（ト立ちかゝる。）
殘月　アヽコレ、どうでもしよう〳〵。
權助　おれが云ふ通りに殘らず渡すか。
殘月　アヽ、渡します〳〵。コレ伯母御、どうするものだ。命代りに財產渡して、身ぐるみ脫がう。こなたも脫がッし。
長浦　わしや恥かしい。否ぢやわい。
殘月　否といつちやァ首にかゝはる。サア〳〵、仲人から、なるがよい〳〵。
ト無理やりに長浦を引剝ぐ。權助捨ぜりふにて殘月を引剝ぐ。二人とも下着ばかりになる。兩人顏見合せ、ワッと泣出す。
權助　エヽ、業晒しめ。これから內は勿論、諸道具着類も殘らずおれが物だぞ。二人ながら、キリ〳〵爰を出やァがれ。
ト引捕へて表へ投り出す。兩人茫然としたる思ひ入れにて

長沛　殘月どの。
殘月　お局。
二人　何の態ぢや。
殘月　ハテ、情ない事だ。ほんにどうやら降りさうになつて來た。少しごろつくやうでもあり、コレ、權助、寺を開く印しに、なんと傘を一本貸してくれまいか。
權助　そいつは當り前だ。この古傘を貸してやらうか。
ト番傘を取つて投り出す。殘月取つて
殘月　エヽ、鬼の目にも涙のやうな、雨がポチ〳〵落ちて來た。
長沛　アヽ、情けない事ぢやなア。
ト双盤になり、兩人傘を持ち、惡身のこなしあつて、向うへ入る。
權助　大箆棒め。あの態わえ。
ト櫻姫駈寄つて權助に縋り
櫻姫　コレ、逢ひたかつたわいの〳〵。いつぞや長谷の櫻谷、わたしが閑居へ來やつた其方、初手に逢うたるその時とは、姿形も相違して、見紛ふばかりの賤しい下部。よもやと思へど覺えある、そ

の入れ墨が慥かな證據。たとへ其方は下樣の、氏系圖無き者にもせよ、妾が始めて見えし殿御。惡緣契り深きといふ、譬へに違はぬ、可哀やあの子も。

權助　モシ〳〵。ほんにその、わしの餓鬼はどうしましたえ。

櫻姬　サア、その緣り子も鎌倉にて、この身の難儀のその砌り、見失ひしを尋ねんと、さまよひ歩く隅田堤、暗きその夜に、逢うたは慥かに。

權助　なにサ、打ちやつて置きねえ。お互ひは若いや。なまじつけい、子の無いのが氣樂サ。

櫻姬　さは思へども、いとしやあの子は、どこにどうして。（ト思ひ入れ）。コレ、わしや變る心は微塵もない。殊に世に落ちこの樣に、便りなき身の妾ぢや程に、必ず見捨てゝたもるなよ。コレ、其方ばかりが便りぢやわいの。

權助　モシ〳〵、お姬さん。必ず案じなさるな。ナニ、お前をわしが見捨てるものか。併し昔からいくらも例しはある。お姬樣に思はるゝ、男は公卿の息子どのか、但しは色の生白い、紫の羽織を着て、一文字の編笠で、大小差した美男でなくちやァ、色男ぢやァなかつたが、流行りやァ穴掘りに、色男が出來るとは、世の中も餘ッ程ひねつて來たわえ。モシ、お姬さん。わしやァの、決して見捨てる事ぢやァねえが、お前又わしを捨てなさんなよ。

櫻姫　いや〳〵。世に便りない自ら、今更其方を何で捨てうぞ。コレ、どうぞ力に、なつてたもや。

權助　そりやァお前お案じなさるな。隨分と力にはなつてあげるが、そこに話があるて。何を云ふにもわしやア貧乏人の事だ。お姫様を女房に持たうが、腰元やお局を遣はせて置く工面は出來ねえよマァわしらが嗅ァにならうと思へば、そんな形をして居てはましょくに合はねえ。茶微塵の袷に、松阪縞の前垂の、紐を廻して帶の代り、髪は櫛卷油氣なし、その代りには足元は又御大層だ。八幡の鼻緒に欅の引摺り、三枚重ねに天鵞絨鼻緒、鐵漿へがしの白齒が第一、長家歩きと朝寢が御朱印、そこからうんと出にやァ、裏店づきあひは出來ねえよ。

櫻姫　何ぢややら其やうな雲上な事は、自らは存ぜねど、其方、よいやうに指圖してたもや。

權助　エヽ、お前もいゝ事を云ふぞ。嗅ァの身持を惡くするを、亭主が一日内に居て、その指圖はかりしては、商賣がお留守になるわな。アヽコレ、どこぞへ頼んで人柄の、惡くなる稽古をさせたいものだが。

櫻姫　歌、連歌の稽古とは違ふものかや。

權助　違はねえでどうするものだ。アヽコレ、お前をどこぞ遣つて置く所を。オヽ、あるぞ〳〵。先刻お前を爰へ連れて來た山ぜげんの勘六、あの男に相談して、四六屋體へでも預けて置くが早廻り

だ。さうしよう〳〵。コレ、お姫さん、わしやアちよつと相談して來る所があるから、ちつとの内待つて居なさい。どこへも行きなさるなよ。

櫻姫　何しに何れへ行くものぞ。さはさりながらこの草庵、どうやら怖うて隅々までが。早う戻つてたもいの。

權助　ナニ直に歸ります。怖い事はねえよ。待つて居なさい。殊によると外の人も來ようから、身仕舞はするがいゝ。コレ〳〵（ト鏡臺を出し）こりやアお前の遣つた道具だ。髮でも撫でつけて、顏でも直して支度をして居なさい。アヽ暮れたな。勝手が知れまい。ちよつと灯をつけて行かう。（ト行燈を取出し、灯をつけて思ひ入れ）。南無三、油が無いわえ。あの佛壇にあらうも知れぬ。（ト思はず清玄の死骸を見つけ、恟りして）アヽ、こいつは不氣味だ。

ト飛退く。櫻姫驚く。

櫻姫　何ぢやぞいなア。

權助　なにサ、怖くはないよ。

ト介抱する。櫻姫、權助が小指の無いを見て

櫻姫　ヤ、小指はどうしてっ

權助　これかえ。こりやア何サ。アノ何だ。先度假宅で心中に切つたよ。

櫻姬　オヽこわ。

權助　何サ、怖い事はないわな。怖がりなさるな。併しあんまり佛壇の方へ寄りなさんなよ。隨分門口の方へ出て居なさいよ。忽ち歸るよ。（ト門口へ出る。掠めて雷鳴る）。アヽ、雷だな。降らねえうちに、どりや行つて來ようか。

ト双盤合ひ方。雷ごろつく。權助一散に向うへ入る。櫻姬跡見送つて

櫻姬　早う戻つてたもや。コレ、必ず早う。（ト門口より空を見て）ヤア、ありや雷のお鳴りなさるのぢやないかや。アヽコレ、雷が鳴るなら爰に居てたもいの。コレ、わし一人どうしてマア。アヽ、モウ行きやつたか。殊に、今云やつたは、身仕舞して支度せいと云うて行きやつたが、誰やら爰へ同道して來やるのか。それなればこの樣に、亂して居るも人の譏り。鏡も館にありし時、朝夕見馴れしこの姿見、久々にての我が面、せめては髮につや油、鬢のほつれを

ト獨吟になり、櫻姬鏡臺の鏡に向ひ、雨てんをさし髮を撫であげ、鬢のほつれを直す。この内掠めて雷、雨車、この時捨て置いたる香箱を見つけ、思ひ入れ。

何やら爰に。（ト取上げ見て）ヤ、こりやコレいつぞや淸水にて、淸玄樣の法力ゆゑ、生れついた

る妾が手の內、開いて見れば清玄と、文字の殘りしこの香箱。蓋と同じ模樣にて、文字は變れど白菊と、書いてあるのも、何とも以て、（ト又あたりにある振り袖の片しを取上げ見て）稻瀨川にてちぎられし、こりや自らがこの片袖。この庵室にあるといひ、思ひ廻せば庵崎にて、雨のその夜の暗まぎれ、たしかにそれと思へども、あまりといへば變りし姿、よもやさほどに。この香箱と、この片袖、爰にあつたは清玄どのが、モシこのあたりに。（ト思ひ入れ。雷餘程鳴る。恐るゝこなし）アヽコレ、ひどうお鳴りなさらねばよいが。それにつけても、早う戻つてくれはせいで

　　トこの時段々雷ひどく鳴出す。トヾ本鐵砲ドンと打つ。櫻姫アッと突俯す。清玄蘇生せしこなしにて顏を上げる。身節の痛みを苦しみ、手桶の水を柄杓より飲む。櫻姫も心づく。

清玄　二人の者がよこしまゆゑ、情けなくも打ち打擲、惣身かほどに節惱むは、こりや正氣を失うたと見える。

櫻姫　ヤ。今の人聲。コレ、何者ぢや／＼。

　　ト慄へ／＼窺ひ見る。清玄も聲を聞きつけて

清玄　咎むるは女子の聲。どうしてこの庵に、若い女子が

櫻姫　アレ、又人聲が。誰ぢやぞいの。

ト怖々窺ふ。この時囲爐裏の火パッと燃え立つ。二人屹度顔を見て

清玄　ヤ、其方は慥か

櫻姬　清玄樣か。

清玄　ヤ、櫻姬どの。

櫻姬　エヽ。

ト逃げんとするを、よろぼひ寄つて屹度留める。誂への合ひ方になり、清玄思ひ入れあつて

清玄　エヽ、情ないぞや櫻姬。身に覺えなき清玄を、破戒の僧となしたるも、これ皆其方の心一つ。それにつれなき志し、この程雨夜の暗紛れ、乳房なき子を抱かゝへ、さまよふ折に行合ひしは、稲瀬川にて清玄が、其方に與へしこの良藥。廻り〳〵て又ぞろや、愚僧が再び手に入りしは、慥かに其方を思ふゆゑ、在家を尋ねて我が存念、晴らさん爲めに忍びし草庵。病の上に非道にも、打ち打擲が身にこたへ、たとへ行歩は叶はずとも、どうぞ願ひを叶へて下され。櫻姬、コレ拜みます、拜みます。

櫻姬　尤もでござんす。僞り云うたは皆自らがこの身の科、これ程までに破戒墮落の清玄どの、返事ばかりもしたけれど、お前も知つてのわたしが惡性、子仲まである忍び夫、思ひがけなう淸水にて、

清玄　めぐりあひしを見咎められ、その科お前に負はせし妾。

清玄　サ、其方の生んだ幼な子を、抱きあるいての行くへの詮議、子に引されて靡かうかと、出家のあるまい、その幼な子を抱きかゝへ

櫻姫　すりや自らが實の和子。

清玄　愚僧が手しほに養育の。して幼な子の父親は。

櫻姫　サ、云ふに云はれぬ賤しき者の、胤と思へど、因果と可愛ゆう。

清玄　一生口外せまじきと、これまで包みし、その前生を物語らん。承れよ、稚兒白菊。

櫻姫　エヽナニ、白菊とは。

ト誂への合び方になり

清玄　稻瀬川にてこなたの前、外事にのみ云ひなせども、清玄自休のその昔、不心中にて生き殘り、道を守つて江の島の、渦巻く淵に沈みたる、稚兒白菊は櫻姫、生れぬ先きの、其方ぢやわいのう。

櫻姫　エヽ。すりや稚兒の白菊が、生れて來たは妾かえ。

清玄　證據は卽ちこの香箱。握りし儘に誕生の、姫は白菊、この清玄とは前生より、重緣重なる互ひの戀路。因果の道理を辨へて、心に隨ひ色好い返事。コレ、拜むわいの〳〵。

櫻姫　エヽ、情けない清玄樣。たとへ前生どのやうな、深い戀路であらうとも、今はお前のよしみある、義理ある妾を戀詫びたまふは、そりや道ならぬ戀といふもの。コレ、どうぞ思ひ切つて下さりませ。

清玄　イヤ〳〵。どういつても思ひ切られぬ。所詮其方が隨はねば是非がない。病み耄けたるこの清玄、所詮命は風前の灯火。破戒の上はなに厭はん。つれなき其方を刺し殺し、我れもその儘自害なし、未來は一つ蓮の樂しみ。（ト出刃を取つて）サ、櫻姫、承引なくば、死んで下され。

櫻姫　エヽ。

清玄　イヤサ、この世の緣は薄くとも、未來で添はう。死んで下され。

櫻姫　サアそれは

清玄　但しこの世で諾いて下さるか。

櫻姫　サアそれは

清玄　命を取らうか。

櫻姫　サア

清玄　諾いて下さるか。

櫻姫　サア

清玄　サア

二人　サア〳〵

清玄　エヽ、聞入れなくば、其方を殺して。（トよろめきながら出刃を持つて櫻姫へ立ちかゝる。櫻姫逃げんとする。立廻り。トヾ櫻姫出刃を取つて清玄へ打つけ、惣身に當り、よろ〳〵となつて）こりや刃物を打つけ、殺す心か。

櫻姫　アヽコレ、どうして。

清玄　イヽヤ殺すか。死なばもろとも。

ト櫻姫を引倒し、いろ〳〵立廻りあつて、トヾ出刃を上の方の切り穴へ打込む。清玄立廻りの中にこの穴の中へこけ落ちる。櫻姫駈よつて

櫻姫　アヽコレ、危ない。清玄樣。

ト駈寄つて引上げんとする。穴の中に落ちたる出刃、清玄の咽喉笛に貫き、血に染みて、よろめきながら出て

清玄　こりや大膽な。女の身で我れを殺すか。

櫻姫　アヽ、勿體ない。なんでこなたを殺さうぞ。赦して下され、清玄どの。

トよろめき寄つて立廻り。清玄いろ〱苦しみ、後じさりに穴の中へ落ちる。櫻姫出刃を持つたるまゝ摚と倒れ、茫然となる。この時權助向うより出て來て、門口より

權助　ヤレ〱、待ち遠であつたらう。

櫻姫　ヤ、今戻つてか。

ト狼狽へて云ふ。權助飛退き

權助　何だな仰山な。愕りさせた。コレ、どうしたのだ〱。

櫻姫　自らは、今の雷に驚いてな。

權助　エヽ、なんぼ姫だといつて臆病な子だぞ。さう氣が弱くつちやァ女の挊ぎは出來ねえよ。ほんに挊ぎといへば、おぬしの事を相談して來たが、好い口があるワ。小塚ッ原の千代倉で、抱へが欲しいといふが、何も緣づくだ。行つて見さつし。

櫻姫　わが身よしなに、計らうてたも。

權助　オヤ、亭主を捉まへて、わが身よしなに計らうてたもゝ凄まじい。コレ、お姫さん。商賣屋へ行つちやァ、思ひ入れ下素張りを覺えねえよ。併しこの形ちやァ目に立つが、賣り物に花を飾れだ。

それでもよからう。ほんに、値打のある道具は持つて行かうワ。（トそこらを見廻し、暖簾口へ入る。直に頰かむりして小風呂敷を擔げ出て來て）サヽ、一緒に來さつし。

ト櫻姫の手を引き花道の方へ行きかゝる。この時清玄の死骸ドロ〳〵にて起上がり、櫻姫、タヂ〳〵と引戻さるゝ事、權助これに心づかず、櫻姫思ひ入れあつて

櫻姫　エヽ。

權助　どうしたのだ。

ト介抱する。この時襟に掛けたる都鳥の一卷出かゝる。これにてドロ〳〵打上がる。心火消える。櫻姫こなし。守りへ目を附ける。頰冠りの手拭取る。權助の片頰、淸玄の如くになる。櫻姫　悔りして

櫻姫　ヤ、その面差は、淸玄どの。

權助　エヽ、おれだわな。

櫻姫　ほんに其方は

權助　權助だよ。

トこれにて櫻姫キツと氣をかへ

櫻姫　所詮この身は

權助　ヤ。

櫻姬　毒くはゞ

ト思ひ入れ。これを木の頭。權助恟りして

權助　イヤ、去りやアしねえよ。

ト時の鐘の送りにて、拍子

權助、櫻姬の手をひき、捨て鐘にて向うへ入る。知らせにつきシャギリ。

幕

（作者　鶴屋南北）

六幕目大詰

山の宿町の場

三社祭禮の場

役名――小塚原千代倉のかゝへ、風鈴お姬、實ハ櫻姬。葛飾のお十。釣鐘權助。淸玄の亡靈。町抱へ、有明の仙太郎實ハ栗津七郎。家主、金兵衞。判人、勘六。金貸、大村屋綱右衞門。五人組、利兵衞。片琴屋夢右衞門。番人、三太。家主、杢兵衞。入間惡五郎。稻野谷半兵衞。

本舞臺三間の間、後ろ黒幕、よき所に九尺の自身番。前通り駒寄せ、辻行燈、誂への木戸。山の宿町といふ天水桶。よき所に丸井戸。幕の中より赤子の泣き聲。時の鐘にて幕明く。

ト金兵衞、利兵衞、李兵衞、夢右衞門、何れもふんごみ羽織、家主の形。三太、夜番人、鐵棒を持ち、何れも役場提灯を持つて、ワヤ／＼云うて居る。よき所に前幕の赤子、反古張りの籠へ入れて捨てゝある體。按摩、夜蕎麥賣り、飛脚體の者、その外、夜の仕出し二三人立ちかゝり、これを見て居る。捨ぜりふ云うて、仕出しは左右へ別れて入る。

金兵　イヤモウわしが行事の日といふと、樣々な事がござる。此捨子もザッと町内の入費と見えますて。

利兵　成る程、金兵衞さんの夜番といふと、こんな事が度々ござるて。

夢右　なんぼ捨て子でも下冷がするから、斯うしても置かれますまい。自身番へ入れて置きませうか。

李兵　ひよつと犬にでも食はせたら、どんな町内へ難儀がかゝらうも知れませぬ。

金兵　してマア、何時に捨てゝあつたの。

三太　アイ、わしが八ツ半の廻りに出た時は、まだ捨てゝはなかつたが、大方七ツ時分の事と見えます。

利兵　早速貰ひ手があるなら、遣らつしやるであらうの。

李兵　どうで金を附けずば、貰ひ手はござるまいて。

夢右　時に、組合の權助どのはまだ見えぬが、知らせに行つたか。

三太　そりや、とつくに起しに行きましたが、今直に行くと云はれました。

夢右　イヤ又、あんなイケずるい男はない。面もむづかしいが、根性も同じやうな生れだ。

利兵　なにサ、面と根性とよく似て居ます。

杢兵　一體胸氣な男サ。

金兵　コレ〳〵、その樣に惡く云うて、聞きつけたら大抵では濟むまい。權助どのが來たら、その通りを話しませうか。

三人　アヽ、コレ〳〵。わしらではない〳〵。

金兵　それ見たか。口程でもない衆ではあるぞ。

ト時の鐘になり、向うより權助、羽織ふんごみ、家主の拵へにて、月行事といふ弓張りを持ち、スタスタと出て來り

權助　これは〳〵組合の衆。さぞお待遠でござりませう。イヤモウ、據ない用事がござつて、今朝出ましたが、やう〳〵今歸りました。して、捨て子は男の餓鬼かな。

金兵　左樣々々。肥つたよい男の子でござる。アヽコレ、外へ遣るにしても、金の附く話サ。何にしろ

町内の入費でござらう。早速貰ひ手があればよいが。

皆々　何にしろ、早く乳母を取らずばなりますまい。

權助　成る程なア。乳のある女を頼まざアなりますまい。これ程までに育てゝ捨てるとは、イケ邪慳な奴もあるものだ。マア、ちつと町内の入費だが、モシ金兵衛さん、どうで人に遣るにしても、金が附きませうが、そりやァ御承知かな。

金兵　イヤモウ、二兩なり三兩なり、金が附かねば貰ふ者もござるまい。そこの所は隨分承知して居ます。ナウ、お組合の衆。

皆々　左樣々々。そりやアどうで金は附く事サ。

權助　そんなら早い話だが、斯うしなさい。知らつしやる通り、わしも子がねえが、三兩も附く事なら、いつそこの捨て子をわしが貰つて、その三兩を里扶持の足しにもしたなら、男の子を一人儲けるといふものだ。いつそその捨て子を、わしが貰つて育てようかえ。

金兵　イヤモウ、さう早く埒が明けば、組合も世話がござらぬ。あの宿老とも相談の上、隨分と貴樣に進ぜませうて。ナウ、さうではござらぬか。

利兵　さうとも〳〵。早く形の附くがようござる。

夢右　三兩な取込んで、息子が一人、うはで出來ますぞえ。
三太　そりやア貰ふ話がようござりまするて。（トロ々にいふ）。
權助　御町内の衆が承知なら、隨分わしが貰ひませうが、何にしろ明日の朝まで、乳は其方で飮ませて下さりませ。
金兵　これは何より易い事でござる。そんならいよ／＼三兩で、權助どの、貰はつしやるか／＼。
權助　どの道、子は一人貰はねばなりませぬから、何も緣づくだから貰ひは貰ひませうが、三兩ではちつと廉くはねえかえ。なんと、物は相談だが、もう二分出さいか。
皆々　何かな。三兩二分かな。
權助　さうサ。
金兵　ようござる。二分位の事は話も附けませうよ。
權助　そんならこの捨て子に、添へ金が三兩二分よ。
金兵　それでやりませう。
權助　承知なら一つ〆めやせう。
皆々　アヽ、よい／＼。（ト手を打ち）アヽ、おめでたうござります。

權助　これはどなたも、お世話でござりました。
金兵　そんなら權助どの、斷うしませう。今夜はわしらが嚊ァの乳をのませて、明日は早く組合内から金を拵へ、こなたの所へ連れて行きませう。その積りにして待つてござりませ。
權助　どの道、よいやうにお頼み申します。
金兵　サア〳〵、そんなら抱き子を連れて歸りませう。イヤ、そんなら權助どの。
皆々　明日逢ひませう。

ト捨て鐘になり、わや〳〵云うて皆々下座へ入る。權助殘つて

權助　さて、まづ彼奴等をくるめて、今の餓鬼を貰ふと云つたばかりで、三兩は此方へ着服するが、アヽコレ、それにしても、おれが此やうに、守りと見せて掛けて居る吉田の家の神祇官。（ト襟に掛けたる一卷を見て）褒美を遣らうと頼んだる松井の源吾も、金には餘ッ程、放れ際の惡い奴だわえ。

ト思ひ入れ。向うより中間、印附きの小箱を灯し、忍び乘り物一挺、若黨一人附いて出て來る。權助は自身番へ上がる。この駕籠舞臺へ來る。若黨、駕籠へ立寄り、囁く思ひ入れあつて、自身番へかゝり

若黨　ちと尋ねたい事がござる〳〵。
權助　アイ、何用でござりますえ。

若黨　イヤ、別の儀でもござらぬが、この番地に權助と申す家主はお居やらぬかな。

ト權助思ひ入れあつて

權助　家主の權助はわしでござりますが、どれからござりましたえ。

若黨　おてまへでござるか。然らばその旨。（ト駕籠の側へ寄り、思ひ入れあつて）卽ち權助、これに罷り居りまする。

トこれを聞き駕籠の戸を明け、入間惡五郎、羽織大小にて出て來り

惡五　コリ家來、面談の內、暫く爰を。

若黨　畏りました。

ト指圖して、供廻り下座へ入る。權助思ひ入れ。

權助　モシ、權助をお尋ねなさるゝお前樣は。ヤ、あなたは慥か淸水にて

惡五、文の使ひを賴んだる、入間惡五郎だ。今宵ひそかに家來僅かに、忍び參つた用事といふは外ならず。其方が實名信夫の惣太、その一器量ある者ゆゑ、かねて源吾が賴みし一儀、その一卷を受取りに參つた。

權助　アヽ、左樣ならあなた樣か、わたしが方にある一卷を、受取りにお出でなされましたか。

悪五　いかにも。

權助　ソリヤハヤ、わしが方にあつたとて、役にも立たぬこの一卷。（ト懷中より出して）お渡し申して肩を輕く、致したうござりまするが、何を申せ、源吾樣より

悪五　そりや尤も。左樣存じて割符もこれに。（ト前幕の密書を出して權助に渡す）。

權助　こりやコレ、いつぞや私し方より、貞景樣へ上げました

悪五　其方が手跡のこの狀を、持つて來たのは心置きなう、受取り歸らん證據の印文。して一卷は

權助　卽ちこれでござりまする。

ト渡す。悪五郎よく〳〵見て

悪五　疑ひもなき神祇官。某しかと受取つた。何かと骨折。權助、重ねて

ト懷中して行かうとする。權助思ひ入れあつて

權助　アヽモシ、悪五郎樣。わたしが差上げました手紙を證據の印文と、一卷受取りお歸りは、そりや隨分よろしうござりまするが、御覽じませ。わたしがお願ひ申しました、この文言にござりまする、二千兩の御褒美は、只今下さりませぬかな。

悪五　成る程、その金子の儀は此方より、追つての沙汰。その節異議なく渡してくれう。今宵はこの儘、

権助　罷り歸るぞ。

権助　イエ〳〵、左樣なお約束は仕りませぬ。何分金子は引替へと、あの貞景樣の仰せゆゑ、命がけのあの仕事。褒美が高いと思し召しませうが、吉田の家が千兩や二千兩で、賣買ひになりませうか。そんならあんまり、値の好い褒美でもござりませぬ。それとも金と引替へなら、只今でも上げませうが、さもない内は、御無用になされませサ。

ト屹度いふを、惡五郎ムツとしたる思ひ入れにて

惡五　コリヤヤイ権助。わりや身共を疑うてのその挨拶か。町人風情の小さい心に引比べ、その金子を渡すまいと思ふか。左樣な卑劣な惡五郎でない。いつ何時でも金子は渡さう。

権助　サア、いつ〳〵と仰しやるなら、只今爰でそのお金を

惡五　エヽ、聞分けの惡い奴。持ち合せたる金子はこれには

権助　無くば金を持つて來て、お持ちなされませ。マアその一卷を

ト取りにかゝるを、惡五郎拔討ちに切りつける。権助立廻つて

権助　こりやア、こなさん、どうするのだえ。

惡五　聞分け惡い、慮外な奴ゆゑ。

權助　イヽヤ、聞分けはいゝ方だ。こなさんは知るまいが、源吾どのとは金と代物、引替への應對をして置いた。こなたを寄越したは、只捲上げる目算か。イヤ、おつかない手合ひだわえ。

惡五　默り居らう。左樣な目算身共は存ぜぬ。慮外吐かさば、身共が手討に。

ト又斬りつける。權助この刀をもぎ取り、惡五郎を切り下げる。よろぼひ寄つてむしやぶりつくを、一卷密書を咬へ、返す刀に見事に切り下げ、あたりの井戸を見つけ

權助　死骸は井戸だ。（トこの時鷄の聲聞える。悯りしてあたりを見廻し思ひ入れ）エヽ、脛に疵持ちや

トほつと思ひ入れ。明七つの鐘。鷄の聲、四ツ竹節の合ひ方になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間、家主權助一人住居の世話場。正面暖簾口、下の方、竈、水瓶、臺所一式飾りつけ門口に錠卸しある。よき時分より三社祭のかすめたる屋臺囃子になり、道具とまる。

ト右の鳴り物にて、向うより綱右衞門金貸の拵へにて出て來る。あとよりお十、前垂掛けにて綱右衞門をなだめながら出て來る。あとより有明の仙太郎、鳶の者の拵へにて附いて出て、三人門口へ來て

綱右　否だ〳〵。家主へ屆けて仙太郎、われを暗い所へ遣つて見せるワ。

お十　ハテマア、御料簡なされませいな。

仙太　これサ嚊ア、家主へでも、地主へでも、打ちやつておいてやるがいゝ。

お十　ハテ、それぢや世間へ聞えて、外聞が悪いわいなア。
仙太　外聞も當分も、ナニ構ふものか。
綱右　アレ〳〵、あゝいふ無法を云ふワ。モウ〳〵〳〵、料簡ならねえ〳〵。三日限りの積りで、十兩といふもの貸したぞよ。その日限が切れたに、なぜ嗅アを寄越さねえ。それだによつて家主へ屆けるのが、おれが横を云ふのかえ〳〵。
仙太　横を云ふのだ〳〵。其方より屆けねえでも、此方から屆けるわえ。
綱右　アレ、ア丶横を云ふワ。
お十　マア〳〵、腹も立ちやんせうが、常からあゝいふ生れ附きちやによつて、料簡して下さんせ。その上マア、聞きなさんせ。外から里にとつておいた子まで、主がどこへか質に置きなさんしたといなア。それでわたしや一倍氣を揉んで居る最中。お前の腹立ち、尤もでござんすが、どうぞマア家主さんへ斷る事を
綱右　待つてくれろといふ事か。コレ、かみさん、今こなさんの云ふを聞けば、里に預かつた子まで、アノ質に置いたと云はつしやるが
お十　左樣でござりますわいなア。

綱右　イヤハヤ、呆れた男だ。

仙太　コレ〳〵、何も呆れた事アねえ。子だといつて質に置くまいものか。昔から人質といふ事は、いくらもある話だ。

綱右　ヱヽ、どう云へば斯う云ふと。さう聞いては猶々家主へ預けるワ。大家の内は、どこだ〳〵。

仙太　そこの内が大屋だわえ。

綱右　コレ、錠が下りてゐるが、家主は留守か。預けに來たが、なぜ留守を使ふのだ。大屋に逢ふわえ。家主に逢ふわえ。

仙太　おいらが家主が、叮嚀に外から錠を卸して胡麻をする。起さつしやい〳〵。

綱右　起さねえでワ。コレ、大屋どの、起きさつしやい〳〵。エヽ、おえない湯灌場だ。

ト門の戸をくらはす。屋體囃子になり、向うより權助戻つて來り、この聲を聞いて綱右衞門を取つて引退け

權助　この人は何だ。こゝはおれが内だが、留守へ來て何をごたつくのだ。イケ騷々しい。飛んだ間拔だ

ト鍵を出し、門の錠を明けて內へ入る。

仙太　モシ、お家主さん。何かとおやかましうござりませう。一體マア斯ういふ始末でござります。

お十　ハイ、御免遊ばしませ。（ト内へ入る）。

權助　こりや何か。わしらが店子の仙太郎どの、あの男が大仰をブツくらわすのは、こなさんの内へ來た人か。

仙太　左樣でござります。

綱右　コレ〳〵、こなたが大屋か」イヤサ、家主かよ。コレ、長家内に出入りがあつて屆けに來た。大仰屋の綱右衞門を、なぜ貴樣は猫の子をゐりわるやうに、首ッ玉を引撮んで此方へ列出したのだ。

權助　イヤサ、この大屋は物を知らぬ博學文盲多才な男だわえ。

綱右　サア、わしやア物知らずの大屋だが、こなさん又今何と云つた。おれが內を湯灌場と云つたぞよ。家主の內が、なんで湯灌場だ。湯灌場の譯を聞かう。

綱右　アヽ、これ〳〵。今湯灌場と云つたが氣にかゝらば、そりやマア幾重にもわしが惡いが、コレ、大屋さん。あの店子の仙太郎を、預つたといふ預りを書いて下さい。

權助　ナニ預りを書け。そりやア何で預りを取るのだ。

仙太　モシ〳〵大屋さん、その始末はわつちが申しやせう。外の事でもござりやせぬが、御存じの通り、三社樣のお祭で、友達手合ひが素敵に勇みやすから、わつちらもしみッたれでも居られやせぬか

ら、あの人を頼んで十兩借りやした。その時お前云ふ事にやァ、三日限りにこの嚊ァを、書入れろと云ひやすから、何にしろ金の出來るがいゝから、書込んで借りやした。その三日の日が切れたから、嚊ァを渡さずば、お前屆けて出入りにするといつて、そのごたつきでござりやす。

權助　アヽ、それで預りを取らうといふのか。打ちやつて置かつしやい〳〵。

綱右　コレ〳〵家主、なぜ打ちやつて置くのだ。それぢやァ濟まねえよ。書入れた女を寄越さねえ程な、太い奴を店子にして、こりやァ家主も相談づくで仕事にかゝるのかえ。濟まねえぞ〳〵。おぬしで解らずば、組合へ屆ける。組合はどこだ〳〵。

權助　やかましいわえ。猿田彦の提灯持ちめ、そんな通りをくつて凹むやうな大屋ぢやァねえワ。善い事は知らねえが、惡い事に於ちやァ餘ッ程修行したものだ。昨日今日この當地へ、少間ながら家主の、株を買つたる釣鐘權助、晦日々々の店賃も、快く納めちやァ、家主の鼻の下が干上がるワ。退役は當り前よ。ほんの事だが、おれの店子の内から、御褒美を頂戴の親孝行が出たらお目にかゝるまい。その代りには出入りは持つて來いだ。預りは板行にして、落し紙と一緒に吊して置くワ。おれが内の前は引廻しの立場よ。唐ぢやァねえが、身親類の首へ繩を附けさうな、一粒選りの惡黨なら、いつでも來さつし。店請け無しに貸して進ぜるよ。

お十　モシ、聞きなすつたか。
仙太　成る程、結構なお長屋でござります。
綱右　イヤ、呆れた大屋だ。併しこなたの株で大屋をするから、その位な大仰は云ひさうなものだ。そんならどうでも預りは
權助　出す事はならねえワ。人の女房を書込んで、三日限りの高利貸、此方から持出すワ。まごつきやアがるとぶツ挫くぞ。
ト莨盆を持つて立ちかゝる。綱右衛門狼狽へ門口へ出て
綱右　アヽコレ親方、そりやアお前、氣が早いといふものだ。ナウ仙太郎、さうぢやアねえか。
仙太　コレ、濟ます氣なら、默つて歸らつしやい。
綱右　歸る〳〵。歸るは歸るが、いかにしても、あんまり馬鹿々々しいわえ。
權助　無駄を云はずと、死んだやうにして歸りやアがれ。
綱右　ハイ〳〵、只今死んだやうにして居ります。
トかすめたる聖天になり、思ひ入れあつて向うへ入る。
仙太　イヤモウ、何かとお前のお詞が添つたばつかりに、得心して歸りました。コレ、嬶アや、お禮を申

せ〳〵。

お十　取締りの無い主の氣性、この上ともに、お頼み申しますぞえ。

權助　なにサ、これしきの出入りは、わしらが長家ぢやァ、白湯を飲むやうだ。ハヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。屋體囃子になり、向うより金兵衞、利兵衞、夢右衞門に、金兵衞の女房、抱き子を抱へ、この人數、捨ぜりふ云ひながら出て來て、直に門口へ來て

金兵　權助どの、昨夜は御苦勞でござりました。

三人　さぞ眠たうござつたであらうに。

權助　これは金兵衞さんも、組合の衆も、よくござりました。サア〳〵、此方へ入らつしやりませ。

ト皆々内へ入り

金兵　イヤ、時に權助どの、昨夜お頼みの事も宿老へ話しまして、町内相談の上、三兩二分附けて、あの抱き子を、其許へ養子に遣るつもりに極めました。連れて來ました。受取らつしやりませ。

權助　これはどなたもお世話でござりました。もしその相談が極らばと、第一乳が先立つゆゑ、乳のあるかみさんも頼んで置きました。

金兵　それはよう氣が附きました。イヤナニ利兵衞どの、その三兩二分を、權助どのに渡さつしやりませ。

利兵　さうしませう〳〵。コレ〳〵權助どの、あの子に附きます約束の三兩二分、受取つて下さりませ。

ト懷より小判三兩二分出して渡す。

權助　これは早速に忝うござります。どなたへも宜しうお賴み申します。

夢右　時にこれは組合から、わざつと祝うて進ぜます。神樣へお神酒を上げて下さりませ。

杢兵　あまり輕少でござるが、祝うて進ぜまする。アヽおめでたうござります。（ト酒樽を權助が前に置く）

權助　これは〳〵、お造作な。要らぬ事をなされて、取引け私が好物の品を、エヽ、忝うござります。

金兵　イヤモウ、お禮で痛み入ります。ハヽヽヽヽ。

ト此うちお十抱き子を見て悧りする。仙太郎も思ひ入れ。

金兵　時にこの子は、めでたう受取らつしやりませ。

權助　イヤモウ、わたしもお庇で、跡取りを儲けました。

ト金兵衞の女房が抱へて居る赤子を抱取り、いぶりつける。

利兵　定めて權助どの、祝はつしやるであらう。

杢兵　外は知らず組合は、一番に大振舞ひがござらうて。

夢右　その節はしつかりと飲み口でござる。樂んで居ませうかえ。

權助　イヤモウ、その時は片肌脱ぎやす。
金兵　それを樂しみに、サア組合の衆、お暇いたさうか。
三人　さうしませう〳〵。（ト皆々門口へ出る）。
權助　これはお早々でござります。
金兵　イヤ、ほんに疱瘡が流行りますぞや。氣をつけさつしやりませ。雜司ヶ谷のお守りを戴くがよい。
　併し近年は、半田稻荷からも守りが出ますて。
權助　アヽ、半田稻荷は何處でござるえ。
金兵　知らつしやらぬか。葛西金町半田の稻荷。
皆々　疱瘡が輕い。痲疹も輕い。
　　ト合ひ方になり、金兵衞踊るを皆々囃して向うへ入る。權助子を抱いて跡を見送り思ひ入れ。
權助　おへねえ間拔めらだ。（ト赤子泣く。お十をヂロりと見て思ひ入れ。）コレ、かみさん、乳を一杯振舞
　つてくんな。
お十　エ。アイ。
權助　イヤサ、せわるこの子が、御無心ながら

仙太　ドリヤ、お暇申さうか。

　　ト出ようとするを、權助シャンと門口を締めて

權助　仙太郎、待ちやれ。かみさん、振舞つて下さいよ。

　　トお十にさしつける。仙太郎も愕とする。合ひ方變る。兩人思ひ入れ。お十赤子を抱き

お十　すりや、こなさんが、アノこの子を

仙太　アヽコレ、滅多にそれをナ（ト思ひ入れ）。

權助　云ふと亭主がどのやうな、身に押し緣がかゝらうが、棒にさし結ひ家主も、店子の事ならかゝり合ひ。さう睨んだから三兩を、見込んで貰つたこの捨て子、もう一役に立てる氣だ。仙太郎、おぬしに遣らうが、この餓鬼ばかりは、貰はずばなるまいよ。

仙太　三兩つけて貰つた子を、又ぞろわしに。

權助　二十兩に負けてやらう。

十仙　エヽ。

權助　捨て子は要らぬが三兩でも、小判の端を取つた金。餓鬼を捨てたは長家內、おぬしも店子の仙太郞、首綱かゝるが苦しくば、この家主に二十兩、出して捨て子を連れて行け。否と吐かせばこの

由を、恐れながらと持ち出すが、仙太郎、二十兩で、捨て子を貰やれな。
仙太　サ、捨て子は此方へ貰はうが、見す〳〵こなたに二十兩。
お十　その金とても今爰に
權助　それもあるのサ。
仙太　エ。その金があるとわえ。
權助　女房のお十を貰ふわえ。
二人　エ。
權助　どうで、乳母を置かにやァならぬ。幸ひおれが店内に、乳のある女房當分は、雇ふ代りに其方から耳を揃へて二十兩、此方へ取るのだ。仙太郎、何と胸氣な家主の、この惡智惠は違つたものか。
仙太　よしない捨て子を足にして、二十兩たァあんまりな。
權助　サ、それだに依つてその金の
お十　調ふまでに不束な、金の代りにァノわたし
權助　質に來る氣か。
お十　行かねば主の

仙太　難儀となるゆゑ
權助　女房は預かる。
お十　成る程、お前へ
仙太　今から屹度
權助　預かつたよ。

トお十を引附ける。唄になり、仙太郎思ひ入れあつて向うへかゝる。この唄の内向うより四つ手駕籠の垂れを下し、勘六附いて出で來り、仙太郎は駕籠へ目を附け、向うへ入る。勘六門口へ來て

勘六　オイ、頼もうよ。權助どのは内か。
權助　さういふ聲は勘公ぢやァねえか。
勘六　内にか。ヤレ嬉しや、駕籠の衆、ちつと待たつし。（ト此うちお十赤子に乳をのませて居る。赤子泣く。）
なんだ貴樣は、子のある女房を持つたのか。
權助　馬鹿を云はつしやい。金の附く捨て子だから貰つて、ちつとのうち乳のある、かみさんを頼んだのよ。
勘六　こなたも物好きな男だ。嬶ァがあつても挊がして置きながら、その上捨て子を貰ふたァ、苦を求

めるやうなものだ。

權助　ナニ苦になるものか。貰つて置いてもいゝ時分にやァ、まびいてしまふワ。

勘六　ハテ、いけ邪慳な男だ。コレ、それについて少し話があつて來たが、外でもねえ、小塚ッ原へ自前に預つた、あの嚊ァ衆を連れて來たよ。

權助　ヤ、そりや、なぜ。

勘六　サァ、聞かつしやい。見てくれはあの通りの代物だから、ずつと出した所の評判、飛んだものよ。サァ小塚ヶ原の千代倉へ、お姫樣の自前が出るといつて、素敵な客よ。併しあんまり物云ひから取廻しが、お公卿樣の娘のやうで、でんつくの客はてれるといふ噂があるから、内の小指が成るたけ司ばりには仕込んだが、貴樣も知る通り、刺青のあるお姫樣だワ。あの釣鐘があんまり小さいから、風鈴だと云ひ出して、今ぢやァ風鈴お姫〳〵と云ひやす。イヤ、客は待ち札で來るの。

權助　その又客のある女を、なぜ鞍替へに出すのだ。

勘六　サ、そこだわな。客はあるが、誰が云ひ出したか、あの女郎の枕許へ、化物が出るといふゆゑ、そいつは變だと、サァそれからの鞍替へサ。聞かつしやい。どこへ仕替へに出しても、行く先々へ化物が附いて歩くから、何處でも嫌がるわな。玉に置いては申し分は無いが、化物の附くには、ど

の親方も手古摺つて、マア何にしろ、こなさんに話した上と、そこで連れて來たのサ。

權助　あの女に化物が附いて歩く。

勘六　さうサ。

權助　そいつは氣障な話だの。さう云へばおれが面が、この樣に相好の變つた樣子も、モシその樣な祟りの所爲か。アヽ、そいつは不氣味だ。なんぼ美しくつても、化物が附いて來られちやア、そいつは御免だ〳〵。

勘六　成る程、さう云へばこなさんも、元からそんな顔でもなかつたが、わしは又怪我でなつたと思つて居た。イヤマア何にしろ、引渡す所は貴樣だ。受取つた上の話にしませう。コレ、駕籠の衆や、玉をこゝへ渡して歸らつしやい。イヤ〳〵、ひよつとしたら用があらうも知れぬ。向うの酒屋にでも待つて居て下され。

駕舁　ハイ〳〵、お待ち申しませう。サア、お穿き物を直しやしたよ。

ト合ひ方になり、駕籠舁誂への下駄を直す。駕籠の垂れを上げ、中より櫻姫、茶縞女廣袖、黒の三尺廻り、下に博多染の中形縮緬、廻りむく留袖の寢卷、下馬鳴海縮緬絞り、男帶を締め、島田髷。根を文殼にて卷いたる誂への拵へにて、長煙管と莨箱を持ち出て來り、内へ入る。駕籠の者向うへ入る。お十

赤子をいぶりつけて居る。櫻姫、のさ〳〵と權助が傍へ來て、お十を見て、ムッとしたる思ひ入れ。

權助　お姫や、又お歸りか。よく鞍替へに出るの。てめえも判人の爲になる女だ。

櫻姫　判人衆の爲にやァなるが、亭主の爲には。妾はならぬかえ。コレ、自らが鞍替より、アレ、あの女は何處から連れて來たのだ。コレ、口廣いこつたが、主の下ッ齒と極つた女子は、自らより外この日の本に二人とあつていゝものかな。その上にまだいとけなき、見りやァあの女の子が、とつけもねえ、お乳や乳人に抱かせて、養育あらばイザ知らず、自らなぞは子供は嫌ひだよ。エヽ、しみつたれな。好かねえ事を、よしねえな。

ト此うち權助、よく〳〵聞いて居て

權助　勘六どんや。ちつとの內行つて居る間に、せりふは餘ッ程仕込まれたと見えるが、どうしても、まだお姫樣が拔けねえわえ。

勘六　その筈だわな。根が生れが生れだから、どこぞのかい曲りにやァ地金が出るのよ。

櫻姫　よしねえな。何ぞといふと其方までが、そんな事を云ふが、性はこれもノ、あのたらちねの朝な夕なに。オヤ又詰らねえ事を云ひさうだよ。

權助　成る程、こいつはお姫樣の中へ、惡婆を等分に滾ひ込んだから、手打ならツナギといふところだ

が、どうでもこいつは繼ッ子が出來さうな事だよ。
お十　繼ッ子とは、この子の事かえ。
櫻姫　エヽ何だな、しみつたれな。その子はマア何處から誘うて來たのだよ。
權助　アコレ、あの餓鬼は捨て子だがの、譯があつておれが貰つて置くのよ。
櫻姫　エヽ、薄穢ない。乳飲ッ子は戻してたもいの。幼き者が欲しくばの、自らが生み落せし、お前のほんの子があるぢやァねえかな。
權助　コレ、馬鹿を云へ。餓鬼は欲しくはねえが、金が附くから貰つたのよ。
勘六　それ〳〵、何といつても金が先立つワ。コレ、權助どん、主の嗅衆は貴様に渡すが、加判をついたはこの勘六。向うも商賣人だから、いつそお姫を野玉を挊がせうといふから、それぢやァこなたの顔も穢れるから、二十兩は右左に取つて來て進ぜうと、嘘を云つて來たから、その金を不肖ながら、返してやつて下さいよ。
權助　これサ、こなさんも鷹揚な生れだわえ。お姫を預かつてやつたとて、もう一文も爰にはねえよ。
勘六　無くつちや矢ッ張りお姫を親方へ返して、野玉に出すとも、切りを叩かせるとも、向う任せだ。サアお姫、また小塚ッ原へ來さつし。(ト櫻姫の手を取る)。

櫻姫　ナニ、あの家へ又ぞろ戻れと云やるのか。アタ置きねえな。イケ無作法な、自らが手を取つて、緩怠至極。エヽ、好かねえ人だ。(ト振り切る)。

勘六　それでも金が濟まねえ内は

權助　イヽヤ、その金は濟ましてやらう。

勘六　ナニその金を、アノ爰で

權助　渡すにしても話がある。勘六どん、斯ういふ始末よ。

ト囁く。勘六呑み込み、思ひ入れにてお十に目を附け

勘六　アヽ、替へ玉にか。それぢやァ話せる。

權助　これサ、好いぢやァねえか。

勘六　隨分いゝのサ。

權助　其方の方が得心なら　コレおかみさん、お前、ちつとのうちあの男と、小塚ッ原の千代倉へ、おらが嗅ァの名代に、居て下さいな。

お十　エヽ。アノそのお方の名代に、わたしを勤めにやるのかえ。

權助　イヽヤ、まだ勤めとも、賣切りとも、入我々入でちつとの內、行つてくれゝばその內に、仙太郎と

も相談して、返す話も出來ようが、今聞く通り、こんなの亭主も二十兩、おれに寄越さにやならぬ金。おれもこなたが聞く通り、加判の主に渡す金、二十兩に凹んで居る。そこで膝とも談合もの。大屋へするのも、亭主へするのも同じ事、かみさん、ちつとの間、質草になつて下さい。

トこれにてお十思ひ入れあつて

お十　ようござんす。大屋さんのお顏を立てゝ、わたしがお前のおかみさん、お近附ではなけれども、一風變つたお姫さん、その人質に行く時は、亭主の爲めにも半口は、かゝりや繋がる長家の內、案じなさるな。參りやせうよ。

權助　それでわしも落ついた。流石に主も女の江戸ッ子。

お十　エヽ、煽てなさんな。わたしは行くが亭主へ又

權助　呑み込ませるよ。

勘六　そんなら直に

お十　この子を置いて。(ト下に置く。赤子泣く)。

櫻姫　エヽ、泣く子も目を明け。氣障な幼な子。

權助　七つ下りだ。

お十　送つておくれよ。

ト七つの鐘。勘六附いてお十外へ出る。向うより仙太郎窺ひ出て、花道にて

仙太　軍助が妹のお十。

お十　仙太郎どの。

仙太　主人の姫の

お十　代りにわたしを

勘六　ヤ、得心づくか。

仙太　ソレ、去り状（ト書き物をお十に渡す）。

お十　エヽ、嬉しうござんす。（ト去り状を開き見る）。

仙太　お仕着せ通りの三下り半。宛名を見やれ。

トお十書き物の末の名を見て

お十　お十どのへ、粟津の七郎。そんならあなたも

仙太　サ、それだによつて、代りにおぬしを

お十　ちつとも早う。

勘六　駕籠の衆や。

トこの聲にて揚幕をサッと明ける。以前の四つ手駕籠、ツカ〳〵と出かゝるを

仙太　コレ。（ト抑へる。駕籠の者立どまつてゐる）。

權助　何だか表で（ト門口へ出ようとする。火鉢にかけし土瓶を蹴返し、炭火パッと立つて沸茶足へかゝりし思ひ入れ）。熱々々。（ト足を抑へる）。

仙太　サ、行きやれな。

ト唄になり、お十、勘六、仙太郎附いて向うへ、駕籠の者跡じざりに入る、權助思ひ入れあつて

權助　エヽ、大きに火傷をした。コレ嚊アや。ほんに久し振で歸つたの。コレ、酒も一升貰つてある。まづ日の暮れぬうちから、寢支度をして置かうか。（ト木綿の夜具を出す）。

櫻姫　よしねえな。今夜は自らばかり寢所に行つて、仇な枕の愁ひもなう、旅人寢が氣散じだよ。

ト床へ入つて夜具を引ッかける。權助側へ寄つて

權助　コレ、嚊ア、てめえ煩さからうが、この捨て子も、てめえの夜着の裾へでも、入れて寢かしてやらねえか。（ト枕許へ連れて行く）。

櫻姫　エヽ、よしねえな。そんなしみつたれたものは、自らは好かねえわな。

權助　てめえもよく自ら〳〵と、梅ヶ枝でんぶが聞いて呆れるワ。コレ、嬶ア、先に聞いたが、てめえの所へ化物の客が上るぢやァねえか。何か、四つ時分から來るか。

櫻姫　エヽ、よしねえな。化物話しはよしてたも。

權助　よして袂のわけ二つサ。ハヽヽヽ。コレお姫、モシ化物が出たならな、打切つてしまはツし。おらァ刀を持つて居るワ。コレ〳〵。（ト戸棚を明け、中より刀を持つて來り）こりやァこれでも名作物だ。もし化物が來たら、遠慮なしに切るがよい。

櫻姫　すりやその刀は、アノ其方の。アヽ、斯うぢやァねえ。御免よ、主の魂ひか。

權助　さうサ、拵へは穢いが、イヤ素敵に切れるの。（トこの時赤子泣く）。エヽ、やかましい。又吠えるか。併し、もう乳の飲みたい時分でもあらうよ。

ト寝はらばうて足にて叩きつけて居る。暮六ツの鐘。合ひ方にて、向うより三太、走り出て來り、門口にて

三太　モシ〳〵、權助さん。御町内に寄合ひがござりまして、残らず會所へ來てござります。お前さんばかりだ。サア、お出でなされませ〳〵。

權助　エヽ、又寄合ひか、行かずともよからう。居ねえと云へ。

三太　モシ／＼、ちよつとお出でなされませ。今夜のはお前、お振舞が豪的だ。八百善の仕出しでござります。一倍飲めやすによ。

權助　ア、、今夜のは何の寄合ひだ。

三太　アノ龜田屋の地面の話しでございやす。

權助　そいつは行かずばなるまい。（ト思ひ入れして）コレ、嚊アや。よく留守をさつし。

櫻姫　アイ、、今夜は一人寢る。內の小指が皮肉とやらを云やらうと、思ひ廻せば

權助　思ひ廻さずと置くがいゝよ。

櫻姫　お前一人で歩行しやるか。

權助　なんだ、てめえマア亭主を捉まへて、上げたり下したり、白痴が凧を揚げるやうだ。コレ、性を附けて居ろ。

ト唄、時の鐘になり、權助羽織を着て、三太を連れ、向うへ入る。櫻姫跡見送り

櫻姫　これサ、灯もつけずに行つたの。いづれに行燈の用意があるやら。エ、、焦れつたいよ。

ト合ひ方にて臺所より角行燈を持ち來り、灯をつけ、枕許へ直し、床の內へ入り、思ひ入れあつて

オヤ、今夜ばかりはてめえの軆のやうだ。手馴れし爪琴あるならば、今宵の憂を。併し琴の組より新

内節の方が餘つ程氣が利いて居る　ドレ、ごろ寢とせうか。(ト夜着を着せようとする。赤子しきりと泣く)。エヽ、なんだな。枕許へ小やかましいものを置いて行つたの。コレ、權助さん、この子もお前連れて行きねえな。コレ、寢られねえわな。(ト思ひ入れあつて)アヽ、思へば妾もあのやうな、蒼の花の綠子を、捨てゝ今ではこの樣な、姿詞も淺ましい、これが吉田の(トこなしあつてあたりを見廻し)オヤ、客人が聞くかと思つた。いつもは廻しで煩さいに、今夜ばかりは極樂といひたいものだが、また松井町へでも拵がせるであらう。

ト床の上より煙管を出し、煙草をつけて、枕許の莨盆引寄せ、吸ひつけんとして火入れの火消えたるゆゑ、手を伸して行燈の灯をつけんとする。薄ドロ〳〵、寢鳥、この行燈自然と跡じさりになる。灯せし灯暗くなると思へば、又パッと明るくなる。いろ〳〵とあつて、行燈跡じさりになるに隨ひ、櫻姫煙管を持つたまゝ前へいざり出る事あつて、フッと心づく。二枚折の屛風の蔭より淸玄の死靈忽然と現はれ、この行燈を手を伸して引いて居ること。櫻姫不思議さうにこれを見ると、ズンと立つて屛風を取除ける。淸玄の靈忽ち消ゆる事。櫻姫心得ぬ思ひ入れにて、屛風をいろ〳〵見る。破れし張交いろ〳〵反古まで交張りにしたる樣子。其うちに戒名一枚逆さまに貼つてある。櫻姫剝して見て

逆さに貼つたは、こりや戒名。アモシ、心の迷ひか。(ト有合ふ火鉢へ打込む。パッと煙立つ。櫻姫寒氣

立つ思ひ入れにて）オヽ寒む。何だかゾツとしたが、流行り風は御免だ。ドレ、汗でもかゝうか。

ト夜着を取除け着ようとする。その蔭に清玄の死靈、忽然として恨めし氣に櫻姫を見詰める。櫻姫怖氣立ちしが、屹度氣をかへ、床の上にて莨盆を引寄せ、煙管にてガタ〳〵と叩き、死靈の方を見て思ひ入れ。これより誂への凄き合ひ方。寢鳥、薄ドロ〳〵、雨窓下し、舞臺は薄暗くなる。

コレ、幽靈さん、イヤサ、そこへ來て居る清玄の幽靈どの。附纏ふやうな性があらば、ちつとは聞分けたがいゝわな。自らが先々を鞍替するも、其方の死靈が附纏ふゆゑ、馴染の客まで遠くなるわな。エヽ、人の挊ぎの邪魔をするのか。妨ぐるのか。最初はこの身に怖氣立ち、いとしやとも不便なとも、因果の道理と思ひしに、毎夜の事ゆゑ馴れつこになつて、怖くないよ。幽靈もさう足が近くつちやア、末始終がつまるめえよ。今夜は勤めを達引くと、いうても妾はその節は。オヤ又姫が出た。コレ、つうくつは出來ねえよ。サア、消えなよ〳〵。夜が明けるよ。幽靈が朝直しでもあるまいサ。消えな歸りな。エヽ聞分けの惡い。坊主客はこれが鬱陶しい。コレ、いつぞや何と云つたな。妾は知らねど其方から、櫻姫が前生は、稚兒白菊といやつたからは、いはゞ其方に此方から、恨みこそあれ恨まるゝ、コレ、話しはねえよ。これぢやァ其方があんまり横といふものだ。よし恨みつらみあらうがまゝ、北白川にあるならば、神祇官の吉田の館、禁庭の政事を取行ふ少將惟

貞、どうして死靈が來られやう。今斯うしたしがねえ身になつて居ると思つて、自らを見縊つて附纏ふか、世に亡き亡者の身を以て、緩怠至極。エヽ、消えてしまひねえよ。

ト屹度云ふ。清玄の死靈思ひ入れあつて赤子に指をさす。櫻姫こなしあつて。

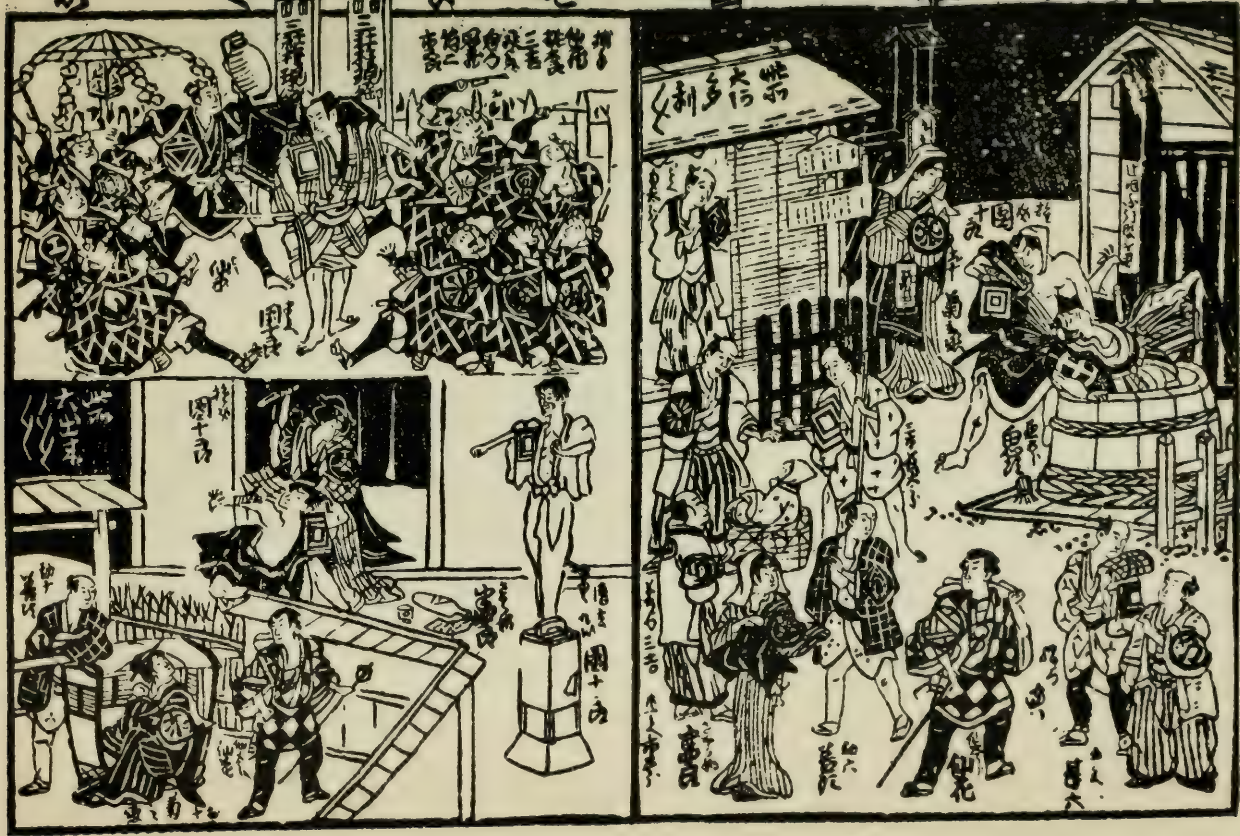
エ、エ、ナニ、そんならこの子が妾が腹に誕生の。エ、エ、すりやアノ忍び男は現在清玄どの〻實の弟といふのかえ。コレ、そりやアノほんの事か。コレ、我が子かいの。(ト抱上げんとする。ドロ〳〵にて清玄の死靈、櫻姫を側へ寄せぬ思ひ入れ。櫻姫いろ〳〵こなしあつて)去りし恨みは、我が子にも近づけぬのか。清玄どの。エヽ、こなたはなう。

ト思ひ入れあつて以前の刀を見つける。手早く取上げスラリと拔く。ドロ〳〵にて清玄の死靈忽ち消える。櫻姫茫然となつてあたりを見廻し、刀を納め

そんなら死靈は。アヽ、消えたの。コレ (ト赤子を取上げ) 知らぬ事とて、わたしは其方の (ト泣く子をいろ〳〵といぶりつけ、乳を含ませる)。乳房慕ふは血筋のしるし、我が子の顏もろく〳〵に、覺えられぬも身の因果。コレ、母ぢや、我が子ぢや、可哀や其方は、果報つたなき、生れぢやなう。

ト抱〆め〳〵思ひ入れ。時の鐘、かすめたる屋體囃子になり、向うより權助醉ふたる體にて出て來り、門口にて

六幕目　七まくめ



權助　コレ、嬶アや。歸つたぞ〳〵。お姬や〳〵。寢たか〳〵。（ト內に入る。）

櫻姬　今戻つてか。手間がとれたの。

權助　その筈だ。素敵に飮んだ。豪的に醉ふ奴サ。コレ、てめえ子守をするか。打ちやつて置け〳〵。其奴は、どこの馬の骨か、牛の骨か知れねえ捨て子だア。打ちやつて置け〳〵。

櫻姬　サヽ、今寢るわいの。せめて親子の對面も

權助　ナニ、今夜は饂麪ぢやアねえ、かき鯛よ。イヤ又、あら煮が箆棒に旨かつた。おらアもう飮まねえよ。何もかも內證へ遣つてしまへサ。てめえ今夜は廻しが幾人ある。床を上げるとぶッ挫くぞえ。

櫻姬　コレナ、千代倉ぢやアねえワ。爰は山の宿の內だわな。

權助　ナニ、山の宿の假宅だ。馬鹿を云ふな。とうに越してしまつた。

櫻姬　エヽ、爰はお前の內だといふに。

權助　さうか。ほんに內だア。これサ、そんなしみつたれた餓鬼は捨てゝしまへといふに。

ト赤子を捨てんとする拍子に、袂より以前の密書落ちる。櫻姬手早く取つてちよつと見て

櫻姬「松井の源吾貞景樣へ、信夫の惣太。」ヤ。（ト懷中する）。

櫻助　ナニ、松井町へでも出よう。どうで稼いでもらはねばならぬよ。爰へ來いよ。（ト無理に手を取り

連れて行く。一升徳利と茶碗を持ち來り）コレ、一杯飲まねえか。コレサ、飲まねえかよ。

櫻姫　アイ、飲むわいな。エヽ飲むわな。

ト權助へ見えぬやうに今の密書を、そろ／＼と行燈の灯にて讀む思ひ入れ。權助これを知らず

權助　コレ、てめえ何もそんなに、元がお姫樣だといつて、大風な權高に極る事はねえ。おれだといつても、腹から折助でも穴掘りでもねえよ。侍ひだわよ。屹度した侍ひだよ。

櫻姫　その侍ひの時の、お前の名は。

權助　名か。そりやァ滅多には云はれねえよ。

櫻姫　信夫の惣太。（ト大きく云ふ）。

權助　ヤ。（ト合ひ方。悄りして思ひ入れ）。コレ、てめえ、よく知つてるの。

櫻姫　アイ、知つてるわな。

權助　それほど知つてるなら、一杯飲まつし。

櫻姫　お前始めやな。

權助　おらァ素敵に飲んで居るが、斯うなりやァそこは又飲むのサ。（ト茶碗にてぐツと飲み）てめえ、なんぼお姫だといつて、おれも侍ひだワ。追つけ見たがよい。とつけもなく出世するワ。それとい

ふのは、これだア。(ト首に掛けたる守りを見せて)こりやア守りだと思はうが、これでも都鳥といふ一巻だ。コレ、それだによつて誰にも云ふまいぞえ。こいつで出世するの。こりやア勿體ない守りだ。爰等へ掛けて置きの木の團十郎でござい。

ト一巻を二枚屏風へ掛ける。櫻姫屹度目を附け、さてはといふ思ひ入れあつて

櫻姫　して、その一巻が何ゆゑ其方。コレ、どうして持つて居るのだ。

權助　これか。こりやア何よ。その持つて居た持ち主を、コレ〳〵(ト刀を取つて)この刀で殺したのよ。その時にこの小指をくはれた奴サ。それからこの當地へ來ても、隅田川で十二三の、若衆の餓鬼をぶち殺して、サア尋ねられるワ。こいつはむづかしいと、これから態を惡くして、屋敷奉公して居たワ。なんと何時でも斯ういふきつとした、金になる物を持つて居るもの。追ツつけ釣鐘權助の守、酒樽の飲助といふ大名になるワ。コレ、誰にも云ふまいぞよ〳〵。

ト茶碗酒を飲みながら思はず口走る。この内櫻姫、いろ〳〵こなしあつて

櫻姫　そんならいよ〳〵アノ其方が(ト云はうとして)お前、それに違ひなしか。

權助　違えなし〳〵。違えなしの木百日紅。てめえもアノ、公卿の娘だから、大名の嬶アになつたとても(トこれにて少し氣の附いたる思ひ入れにて)イヤア……今云つた事はみんな嘘よ。アヽ、嘘だ〳〵。

マア〳〵云つたものよ。エヽ、嘘だ〳〵、しつかり嘘だ。

櫻姫　マア、その酒ま一度。飮みねえな。

權助　飮みねえぢやァ〳〵、飮んでやらるゝ由良之助ぢやァねえ、權助樣だ。ハヽヽヽヽ。面白い面白い。

ト現なき事を云つて打倒れ寢る。櫻姫側へ寄つて

櫻姫　コレ〳〵、起きねえな〳〵。もう一杯飮みねえな〳〵。コレ〳〵。(トゆり起す。權助一向他愛なき體。櫻姫そろ〳〵床を離れ、件の一卷を手早く取つて開き見ろ)。今ぞ吉田の家再興。父の敵も、弟の仇も、只一時に自らに、知らしめ給ふか、エヽ、有り難い。(ト一卷を懷中し、密書を見て)疑ひもなき證據の密書。さすれば不便やこの幼な子。(ト取上げ見て愁ひのこなしあつて)父が最期のこの刃物、我が子も夫も現在の(ト思ひ入れあつて、有合ふ權助が羽織を赤子に打掛け、いろ〳〵とこなしあつて)敵同士ぢや。南無阿彌陀佛。

ト目を閉ぢて赤子を刺し殺す。時の鐘、拍子木の頭、凄き合ひ方。これより權助が方へ窺ひ寄り、夜着の上より突き通す。權助手を負ひ、のたくり出し

權助　うぬはお姫か。なんで亭主を

ト掴みかゝる。櫻姫又切りつける。立廻りのうち、向うより勘六、綱右衛門、小田原を灯し、すた〳〵と出て來り、何心なく内へ入らうとして、この體を見つけ、愕りして灯を消し、こけつまろびつ兩人とも向うへ駈けて入る。この内櫻姫は權助を討とめ、こなしあつて

櫻姫　悪人ながらも親と子の、菩提の爲の

ト持つたる白刃にて髻を拂ふ。これをキツカケに時の鐘。所々にて早拍子木を打立てる事。櫻姫愕りして、わな〳〵慄へ、一卷を大切と納戸の暖簾を一布引切り、ぐる〳〵と巻いてしつかと肌に括りつける。この時向うより勘六綱右衛門先に三階下立役、不殘鉢卷、六尺棒、町人にて、いろ〳〵の弓張りを持ち、窺ひ〳〵門口へ來て居る。櫻姫何心なく門口を明ける。

大勢　人殺し。

ト棒を振上げる。櫻姫驚き、門の戸ピツタリ、これを木の頭。櫻姫ホツトして慄ふ。この仕組よろしく拍子

幕

幕のうち屋體囃子にてつなぎ

本舞臺三間の間、うしろ黑幕。正面、柵矢來の中に大行燈、三社祭の幟を立て、上の方に誂への炭置き場、すべて山の宿河岸通り、三社權現祭禮の體、屋體囃子にて幕明く。

ト捕り手八人、いづれも衣裳大口、笠鉾の笠を冠り、びんざゝらの誂への姿、その中の一は天狗の面、高足駄にて鉾を持ち、猿田彦の形にて、矢張り右の鳴り物にて出て來り、あたりを窺ひ囁き合ひ、上の方の置き場へ目を附け、別れて窺ふ。三味線入り誂への鳴り物にて、右の置き場の中より、袖頭巾、櫻姫の衣裳を着たる女一人、葛籠の中より櫻姫の振り袖の出かゝりしを背負ひ、窺ひ〳〵出てくる。八人の捕り手、道を遮り、立廻りあつて、八人とも笠鉾、冠り物を捨てゝ兩肌ぬぐ。黑四天に襷をかけたる姿を肌脱きに見せたる體にて、各〻十手を持つてしやんと取りまく。女形の袖頭巾、この中へ入り、ちよつと立廻りあつて、取りまき見得。

一同　動くな。

捕一　祭りの姿にいでたちしも、人をあやめし不敵の女。

捕二　召捕らんためこの如く

捕三　三社祭りのびんさゝら。

捕四　今宵よみやのどさくさに

捕五　淺草町々辻小路。

捕六　囃し立てたる夜神樂の

捕七　爰も氏子の山の宿。

捕八　引いて引き出す牛車。

捕一　形も黒の

ト葛籠へかゝり、皆々ひき下ろし、「捕つた」とかゝる。拍子に、頭巾衣裳も脱げる。稲野谷半兵衞の姿になる。皆々見て

捕一　さてこそ曲者。

一同　捕つた。

トかゝる。立廻り。びんざゝらの鳴り物にて、よろしくあつて

やらぬワ。

ト取りまく。この時、下座より仙太郎實は粟津の七郎、肌ぬぎ、一本差し、つか／＼と走り出て

七郎　朋友稲野谷半兵衞どの、紛失なしたる都鳥、その一巻は手に入りましたか。

半兵　氣遣ひあるな七郎どの、姫君艱難あそばされし、その甲斐あつて手に入る一巻。殊には父君、梅若君、お二方の敵も首尾よう

七郎　して、姫君にはいづれへ

半兵　葛籠の中にお忍びあつて、道の狼藉思ふがゆゑ

七郎　館へ伴ひ、お家の榮え。

捕一　櫻姫でも人殺し。

八人　やらぬワ。

ト八人、十手にてバラ〳〵と取りまく。

半兵　なんと。

これより二番目所作事始まり、左樣に御覽下さりませう。

ト打込みになり、皆々引ッ張りの見得よろしく、ちよん〳〵〳〵

幕

（作者　鶴屋南北）

四天王産湯玉川

してんわううぶゆのたまがは

四天王産湯玉川

第一番目　三建目

北野天満宮の場
市原野地藏堂の場

役名――相馬六郎公連。御厨三郎正賴。物部平太有風。女宮、因幡の局實ハ熊手のお爪。河内冠者源賴信。坂戸九郎雲早。樋爪五郎鬼秀。岩倉兵太則景。大原太郎時連。藤原仲光。常陸之助平正盛。神職、榊數馬。市原四郎宗重。岩城藤太鬼虎。加藤豐後次郎忠正。賴信下部、菅平。橋立三郎成春。隱亡、斑の巳藏。保昌娘、小式部。小姓、松丸。同、梅丸。同、竹丸。住の江七郎妹、關の戸。室田郡司妹、初花。純友娘、桔梗の前。相馬太郎良門。

本舞臺三間の間、上の方へ寄せて石の鳥居、左右朱の玉垣、下の方少し筋違に老松、これに小社を取つけ、上の方に梅の立ち木、日覆より紅白のつり枝、よき所に二十五座と書きたる張り札、石燈籠などよろしく、すべて北野天滿宮鳥居先の道具。爰に加藤豐後の次郎忠正、厚袘丸ぐけ、熊谷笠を脱ぎかけ、立ち身。上の方に岩倉兵太則景、大原太郎時連、八瀨の權藤兼則、市原四郎宗重、いづれも白丁の上

ばかり引きかけ、大小にて、前に鳥籠を置き、詰めかけて居る。下の方に仕丁六人扣へ居る。空に白鷺、雁、小鳥舞うて居る。トヒヨ、早神樂、アリヤ〳〵の懸け聲にて幕明く。

忠正　既に一陽來復、歌舞伎の正月周の春、惠みは深き御贔屓の、お禮參りに北野なる、この御神へ社參の路次、なんで邪魔立ておしやるのだ。

則景　當今御惱平癒の禱り、あるが中にも先ッこの如く、當社に於て放生會。

時連　まつた内侍所の神器の奉幣、廿五座の神樂を奏すこの庭先。

兼則　何か怪しきおのれが扮裝ち、非常を糺す我れ〳〵は

宗重　正盛幕下の英勇士、我れ〳〵が引立て詮議するのだ。

則景　そこ一寸も

皆々　動くまいぞ。

忠正　イヽヤ、何も怪しい者ではない。某は俵藤太秀郷の郎等、加藤豊後の次郎忠正と申す者。ふとした事にて主人の勘當、今日當社へ源の賴信公御社參と聞き、主人へ執成し願はん爲の神詣り、必ず聊爾召さるゝな。

則景　ヤア、口賢きその一言、今太平の御代とは云へど

時連　純友將門が殘黨、此處彼處に徘徊なし
兼則　都を窺ふその折柄、我れ〳〵が目に懸つたは天の網。
則時　宮奴、彼れを引つ立てろ。
仕丁　ハッ……腕廻せ。

ト忠正にかゝるを執つて見事に投げろ、この時忠正、懷より人相書を落す。則景手早く取つて

則景　將軍太郎良門人相書。
三人　さてこそ怪しい。
忠正　それを。

ト取りにかゝるを四人支へろ、この立廻りに傍の鳥籠を蹴返す。この中より雁二三羽出て、人相書を啣へ、空へ舞ひ上ろ、忠正思ひ入れ。

忠正　ヤヽ、大切なるあの人相書、跡追つかけて
則景　ヤア、今の繪姿所持するからは、猶々怪しい素浪人。
時連　この場を動くと
四人　手は見せぬぞ。

忠正　ハテ、仰々しい詮議立て。あの繪姿はかねて諸國へ廻つたる、良門が人相書、討取つてそれを一つの功となし、主人の勘當詫びせんと持つて居るのだ。いらざる詮議は措かつしやい。

則景　ハヽヽヽ、吐かしたり腹の皮。その良門は音に聞えししたゝか者。

時連　痩浪人の腕先で、刃が立つものか。

四人　馬鹿な面な。

忠正　ヤア、云はせて置けば、役目を功に樣々の雜言。浪人しても身も侍ひ、今一言云つてお見やれ、腮骨切つて切り下げるぞ。

四人　なにを。

ト皆々きつとなる。この時向うにて

呼び　院使のお入り。

トこれにて皆々思ひ入れあつて

忠正　折も折とて院使のお入り。

則景　命冥加な素浪人、身許の詮議も暫時の猶豫。

時連　宮奴ども、彼れを引つ立て、社内で屹度。

宗重　取逃がさぬやう

四人　番いたせ。

仕丁　ハッ……立たう。

忠正　やかましいわえ。……ドリヤ、頼信公のお入りを待たうか。

ト向うへ思ひ入れあつて、大拍子になり、仕丁取り巻き、忠正奥へ入る。直に三味線入りの下り葉になり、向うより因幡の局、官女の拵へ、白髪の下げ髪、裲襠、緋の袴を穿き、檜扇を持ち、御鏡の箱を仕丁に持たせ出る。跡より樋爪の五郎鬼秀、裃衣裳、大小にて附添ひ、仕丁三人、因幡の局へ參内傘を差懸けて來る。この内下座より神主榊數馬、狩衣、烏帽子にて出迎ふ。因幡の局直に本舞臺へ來り、よろしく住ふ。

鬼秀　禁庭守護の武士、樋爪の五郎鬼秀、女官には遠路の長途。

數馬　當社の神職、榊數馬。

因幡　ホヽオ、兩人ともに正盛幕下の武士とな。自らことは大内の女官、因幡の局と申す者。かねぐ勅諚下りし如く、君の御惱平癒のため、今日當社に於て、御鏡奉幣申し付けよとある勅を受け（ト懐中より勅書を出し）即ち勅書。まつた御鏡守護なしたり。神職よろしく、神すゞしめの神樂を

奏し、奉幣祈念いたしてよからう。
數馬　ハアヽ、勅諚畏り奉りてござります。
因幡　然らば御鏡は、奉幣の間其方に預ける。お受け致しや。
數馬　はゝッ。(ト鏡を受取り) 屹度守護仕るでござりませう。
因幡　まだ其方へ申し聞かせんは、この度源の頼光が武威に依つて、大江山の鬼神を退治、一先づ洛中穩かなりといへども、未だ天慶承平の殘黨、此處彼處に徒を組み、既に謀叛の氣を現はし、丹波の國千丈ヶ嶽に城廓を構へ、純友の殘黨伊賀壽太郎、野武士を語らひ、楯籠るよし。これに依つて今日この處へ、源平の武士を召寄せ、その技を選んで討手申し付けよとある、勅諚兼ねし局なれど、女官の身の上、軍の事は武士に問へとある古人の敎へ。正盛頼信參るまで、其方達に問ふべき用事もあれば
鬼秀　すりや、我れ〳〵に討手の事を、御相談なさるゝとな。
則景　イヤモウ、詠歌とやら、ほしかとやら、生ぬるい事は不得手なれども
時連　軍の事は我れ〳〵が得手もの、委細詳しく
四人　申し上ぐるでござりませう。

因幡　オヽ、それなれば妾が安堵。又その上に自らとても、神事の役。其方達も役人とあれば、萬事詳しう。

數馬　左樣ござらば、私しが御案内。

因幡　アイヤヽ、謀計は密なるを以て尊としとやら、軍の評議に餘人は憚り。神職には御鏡守護なし、跡より參れ。

數馬　畏つてござりまする。

鬼秀　然らば女官には、我れ〳〵がお附き申して

因幡　萬事社内で

四人　申し上ぐるでござりませう。

因幡　サヽ、案内しや。

ト管絃になり、因幡の局に、鬼秀、仕丁、附いて、鳥居の内へ入る。續いて則景、時連、兼則、宗重同じく入る。數馬殘り、思ひ入れあつて

數馬　さて〳〵女官とやら、藥罐とやら、女の癖に氣のつまつた事を云ふものだ。それはさうとこの御鏡とやら、噂には聞いて居るが、ついぞ見た事も無い。斯ういふ時でなけりやァ見られない。ち

よつと拜んで置かうか。

トあたりへ思ひ入れして、箱の蓋を明け、錦の袋の鏡を出す。この時ばつたりと音して、夜神樂になり、下の方小社より白刃出る。數馬恟り、こなしあつて、鏡を持ち、上の方に窺ふ。この内社を切り破り、坂戸の九郎雲早、百日鬘、好みの形、拔刀、錦の袋に入れたる鬼切丸を持ち、舞臺へ出て、白刃を納め、思ひ入れ。

雲早 正盛どのに頼まれて、奪ひ取つたる鬼切丸、これを手渡しする時は……こいつも古手な役廻り。古いせりふは置炬燵、あたる櫓の幕の紋、出世の蔓が羽を伸して、隣り町から舞つて來た。出づら早々忝ない。

ト思ひ入れ、この時數馬、窺ひ寄つて、鏡を持つたまゝ後より

數馬 曲者。

ト組付くを、振り解き、鏡を引つたくる。數馬「それを」とかゝる。立廻つて雲早、數馬を引付け、鏡を見て

雲早 こりやこれ讓り葉の御鏡。（ト數馬「ムウ」と起上つてかゝるを、拔討ちに切り下げる。とゞめを刺し、思ひ入れあつて）一品共に、うまい／＼。

ト思ひ入れ。この時鳥居の内より、鬼秀出かゝりゐて

鬼秀　坂戸の九郎。

雲早　コレ。

　　　トわたりへ思ひ入れ。

鬼秀　して、二品共に手に入つたか。

雲早　源氏の重寶鬼切丸、また讓り葉の御鏡も、首尾好く手に入つたれども、この姿で持つてゐては、
　かねての手筈が……二品共に御身に渡す。

　　ト鬼秀に渡す。

鬼秀　すりや、二品を

雲早　渡すといふその譯は。

　　ト鬼秀に囁く。

鬼秀　そんならいよ〳〵、院使というたも

雲早　コリヤ。（ト思ひ入れ。）

鬼秀　幸ひ今日正盛、頼信、當社に於て討手の願ひ。ところを我れ〳〵が、隣り町から馴染だけ、正盛ど
　のと心を合せ

雲早　頼信一味の源氏の奴ばら、深いところへボンと云はせ

鬼秀　命のつき末大晦日、敵役の天正月、めでたく一ツ

雲早　〆めて置け。

兩人　シャン〳〵シャン。

ト兩人手を打つ。この時奥にて

呼び　神事の刻限。

ト呼ぶ。鬼秀思ひ入れあつて

鬼秀　最早神事の刻限なれば、この鬼秀は神事の役人。

雲早　萬事はその場で

鬼秀　必ず手筈を

雲早　お行きやれ。（ト大拍子になり、鬼秀鳥居の内へ入る。雲早殘り）。ムウ、これで右の役目は濟んだ。この上は頼信が參詣の道に待ちうけ、あはよくば、いつその事に、ばらしてしまへば直に近道。さうだ。

ト行きにかゝる。よき時分、忠正、下の方より出て、立ちふさがり

忠正　さうまくは参るまい。

雲早　ウム、見りやァ見馴れぬ粕野郎、この雲早が行く先を、なんで邪魔立てひろぐのだ。

忠正　オヽ、邪魔立てするも外ぢやァねえ、卵で磐石蟷螂の、おのが口からたつた今、頼信公をばらすと云ふを、じつと聞いて居られぬ忠正、搦めとつて拷問する。サァ、尋常に繩かゝれ。

雲早　ハヽヽ、ほざいたりな腹の皮、昔は女で在原の、今は男に業平橋、石の地藏か何ぞのやうに、この雲早に繩かゝれとは、形に似合はぬ大きな事を云ひ出したな。道押つ開いて通さばよし、支へこさへをしやァがると、其いけつ首をさらばひ落し、伸び放題なうぬが體、人間並にしてやるぞ。

忠正　こま言云はずと腕廻せ。

雲早　小癪な。そこ退け。

忠正　腕廻せ。

雲早　面倒な。觀念ひろげ。

ト拔いて切りつける。立廻り。兩人「ドッコイ」と見得になり、これより鳴り物を借りて、兩人たてあつて、好き見得にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間、正面、北野天滿宮廻廊の飾りつけ、直に「神事の刻限」と呼ぶ。これにて廿五座の鳴り物になり、正面の廻廊左右へ引割ると、段幕を張りたる一間の踊り舞臺を好き所まで押出す。これに倣ひ、九尺の高足の簾屋體押出し、よろしく道具納る。

ト知らせに付て段幕を切つて落す。爰に橋立三郎成春、着流しの上へ狩衣を引懸け、惠比壽の面を頸に懸け、紙にて切つたる鯛を釣竿へ付けたるを持ち、上の方に小式部、廣振り袖着流しの上へ、千はやを引懸け、立ち身にて、左右の手に玉と鍵を持つて、辨天の見得にてよろしく住ひ、兩人思ひ入れあつて

小式　見渡せば、木々の梢に咲き初めて、周の春知る梅が香の、惠みの風に誘はれて、薫り床しき北野なる、實に御神も賞で給ふ。

成春　花の顔見せ早咲きの、笑顔つくろふ蛭子の尊と、烏滸がましくも神事の役人、橋立三郎成春、各各様のお呵りも

小式　かへり未熟の不束者、名も小式部の內侍とて、今日の役目の辨財天。

成春　てんぽの皮とお目見得は

小式　耻かしいやら

成春　嬉しいやら。色も香もある

小式　眺めぢやなア。

ト　これより下座へ取り、所作よろしくあつて納まる。

小式　モシ、成春樣、人も多いに二人して、今日の神事の役人とは、結ぶの神の神代より、男女のその中を、和らぐ和歌の浦波の、片男にあらぬ片思ひ、どうぞこれ見て下さんせいなア。

ト　短册を出す、成春取つて

成春　「大江山生野の道は遠けれど、まだ文も見ず天の橋立。」

小式　三郎樣、モシ。

ト　これより口說きになり、合ひ方の中へかすめて、廿五座の鬼の出る鳴り物を打込み、下座より岩城の藤太鬼虎、鬼秀、兩人赤と靑の鬼の面を持ち、片手に花の枝を持ち出て來り、直にちらしにかゝり、この內へ交り、少し振りあつて正面の屋體へかゝる。この時合ひ方、祝詞に變り、簾卷上げると、內に因幡の局、以前の形にて、誂への鉾を持ち、立ち身。

因幡　そも／＼汝が棲家といふは何れに在りや。

鬼秀　豐葦原の中津國。

鬼虎　この日の本こそ鬼神の世界。

鬼秀 この世の人を取り盡し、魔界となして
兩人 目に物見せん。
因幡 愚や外道、鬼のしこつき、武士の源の賴光が
成春 太刀威の風におしなへて
小式 うら靡けたる秋津洲の
因幡 草も木もわが大君の御代なれば
成小 何れか鬼の棲家なるべき。
鬼虎 ありがたや和歌の德。
鬼秀 目に見ゆる鬼神も、忽ち心和ぎて
兩人 いかにもこの土を立去るべし。
因幡 追灘をまなぶ鬼去來。
成春 蛭子の尊。
小式 辨財天女。
因幡 神風や、伊勢の御神かけまくも

トちらしになり、因幡の局、鉾にて鬼を追ひ廻す。成春、小式部、豆を打つ事よろしくあつて、所作納まる。ト直に向うバタ〳〵になり、仕丁一人駆けて出て花道に控へ

仕丁　申し上げまする。

兩人　何事ぢや。

仕丁　何者とも知れず、神職を手に懸け、御鏡を奪ひ取り、立退きましてござります。

ト云ひ捨てゝ引返して入る。皆々思ひ入れ。

小式　ヤヽ、すりや御鏡の失せ給ふは

成春　假初ならぬ大内の御寶。

因幡　兩人ともに、草を分つて詮議いたせ、早う〳〵。

虎鬼　コレサ、お局、何を仰しやる。

鬼秀　その儀は最前奥殿にて

成小　エ。

因幡　ア丶、コリヤ、何も云はずに、早々詮議を。ナ、合點か。

トこれにて兩人呑み込み

鬼虎　心得ました……さうだ。

ト大拍子になり、鬼虎は東の口、鬼秀は花道へ、一散に驅けて入る。ト直に揚幕にて「正盛參詣」と呼ぶ、東の口にて「賴信參詣」と呼ぶ。これにて舞臺三人思ひ入れあつて

因幡　御鏡失せさせ給ふ折柄、幸ひなるかな、非常を糺す內裏の武士。平の正盛

成小　源の賴信公

三人　參詣とや。

ト又「參詣」と呼ぶ。これにて三味線入りの亂れになり、花道より平正盛、鉢鬘、長裃にて、小さ刀、赤旗を持ち、跡より則景、時連、兼則、宗重いづれも白丁の上ばかり、紅梅の枝を襟に差し、三寶に水引にて結ひたる手形を載せて持つて出る。東の口より源賴信、裃衣裳にて、これも小さき白旗を持ち、跡より初花、關の戶、竹丸、梅丸、松丸、稚兒髷、刺貫、皆々白梅の枝を襟にさし、三寶に手形をのせ持ち、兩花道とも手習子、花見の模樣にて出て來り、双方ともよろしく花道にとまり

正盛　國家既に亂れんとする時は、孔孟の教へ用ふるに足らず。身不肖ながら常陸の助平の正盛、平家諸軍の采配たれども、今度千丈が嶽の討手を乞ひうけんと、一味の武士を引具して、只今社參いたしてござる。

賴信　孫子雞陽山に入つて賊軍を防ぐ、女兵を以て討つたるためし。その唐土の故事を引き、引連ねたる女子童、弱よく剛を清和の皇孫、河内の冠者源の賴信、舍兄賴光の名代として、即ち社參いたしてござる。

則景　天滿宮へ參詣とて、皆一樣の手習子、花見扮裝の某は、たんごと異名を呼ぶ岩倉兵太則景。

時連　へまむし入道のしこし山、やま水天狗と名を得たる、形も人より大文字の、大原太郎時連。

兼則　坂に車を押す如く、油斷大敵小敵でも、跡へは戻らぬ武勇の強者、八瀨の權藤兼則。

宗重　軍八陣永字八萬、席書淸書晴れの場所、いつでも一筆、市原四郎宗重。

初花　古への手習ふ人の筆始め、今も春ぞと咲く梅の、室田郡領が妹初花。

關戶　濱千鳥跡ある方に武士の、譽も代々に書き殘す、住の江七郎が妹關の戶。

梅丸　賴光公の伽小姓、いつもお首尾は上々あげ、褒美の松葉、名は梅丸。

松丸　師匠を手本に精出して、やがて出世を、松丸といふ小ませ者。

竹丸　嘴青き小雀も、習はうよりも馴れよとて、心は直な名は竹丸。

敵役　皆々參詣

立役　致してござりまする。

因幡　平の正盛。

成小　源の頼信公。

因幡　まづ〳〵、これへ。

正頼　ハツ、然らば御免下されい。

ト鳴り物になり、兩花道の人數殘らず舞臺へ來り　入れ違つて、正盛は上の方、頼信は下の方、皆々よろしく住ふ。因幡の局思ひ入れあつて

因幡　見れば各自所持せしは、如何なる品でありつるぞ。

正盛　ハツ、天滿宮の社前に於て、朝敵討手の願ひにござれば、寺子を表せし手形の奉納。

頼信　味方に異變反り忠、せまじき爲の誓ひのまなび。

正頼　方々、院使へ御覽に入れてよからう。

トこれにて皆々、因幡の局に手形を見せる。

因幡　兩將ともに、武略に秀でし優美の計ひ。これに付けても津の國の、生田の川にはあらねども、鳥は一つ、射手は二人の弓取りに、いづれを討手と定めんぞ。兩將ともに、軍の意見申してよからう。

正盛　過つる頃、某、大江山の討手を蒙り、いさゝか不覺を取るといへども、全く武略の拙きにあらず、勝負は時の運に依る。併しながら、世の人口を防がんため、この度の討手を仰せつけられ下さらば、伊賀壽が籠る城廓を、手間隙入らず踏み破り、天下泰平の勝鬨上げんは瞬く內。この儀は偏へに、正盛に、仰せつけられ下さりませう。

頼信　アイヤ、正盛どのゝ申さるゝは、尤もにはござれども、今度の討手も丹波の國、千丈が嶽とござれば、先年舍兄頼光、鬼神退治の吉例もござれば、何卒討手は頼信に、仰せつけられ下さりませう。

因幡　兩將ともにゆゝしき爭ひ。この局も、いづれをいづれとも……オヽ、それ〳〵、今日自ら守護なしたる、讓り葉の御鏡、神職の司より紛失。いづれなりとも、早く詮議仕出したる方へ。

正頼　討手を仰せつけんとや。

因幡　いかにも。

正頼　最前の繩付きこれへと申せ。

ト兩人思ひ入れ。

女形　ハアヽ……岩城の藤太鬼虎どの。

敵役　樋爪の五郎鬼秀どの。

皆々　縄付き、これへ。

ト揚幕にて

兩人　畏りましてござります。

ト時の大鼓になり、向うより鬼秀、忠正に大縄を懸け、東の口より、鬼虎、雲早に縄を懸け、出て來り、直に本舞臺へ來り

下に居らう。

ト下に引据ゑる。

因幡　この兩人の縄付きを、御鏡の盗賊と云やるのか。

頼信　ハッ、最前當社へ參詣の路次、御鏡紛失との取沙汰。折りもあれ、院使のお入り場所をも辨へず劍戟を以ての狼藉、殊に怪しき扮装ゆゑ、御鏡詮議の手懸りにもと、召捕りましてござりまする。

雲早　コレ、頼信公、イヤ頼信どの、この坂戸の九郎が、姿を變へて徘徊するは、將門純友の殘黨、洛中を窺ふ時節、密かに詮議せよとある、正盛公の仰せを受け、隱し目付の雲早を、あぐちもきれぬ分際で、なんで縄を打つたのだ。

鬼虎　こりやァ雲早が、ばゝァを云ふも尤もだ。此方がばゝァだから、彼方も大方爺いでもあらう。爺い

いと婆ァの繩取りが、鬼秀鬼虎、こりやァ一々神樣にやァ當りまへだ。おらが後楯だ、思ひ入れ
突ッぱれ〳〵。

正盛 コリヤ、坂戸が申す通り、いかにもこの正盛が隱し目付の雲早に、繩懸けた賴信が粗忽であらう。
ト賴信思ひ入れ。

賴信 アイヤ、この賴信、坂戸を搦めしは、何はともあれ、場所辨へぬ劍戟の振舞ひ、事鎭むるは大內
守護の武門の役目。

成春 それを粗忽とお云やれば、それなる次郎忠正に

小式 繩懸けられし正盛公も

皆々 御不念かと存じます。

鬼秀 ヤア、主も無き瘦浪人、御鏡紛失の折柄、隱し目付の雲早と

則景 切つゝはつゝの爭ひゆゑ

時連 繩打つた正盛公を

四人 なんで不念とお云やるのだ。

忠正 不念と云ふは外でもない、この忠正は田原家の近臣、御寳の驪龍の一卷守護の役。その一卷紛失

なしたる、科に依つて主人の勘當。

成春　某が主人、卜部の季武を以て、頼信公へ主人の勘當、執成し下さる様にと、かね〲の願ひ。

忠正　斯る姿でお館へ、度々行くも面ぶぜ。幸ひ今日この社へ、御参詣と承り、かねての詫びを願はんと、お待ち申して居る折柄、あれなる九郎が

雲早　何がどうした。

忠正　頼信公を待伏せして

雲早　ヤ、こいつが〲、跡方も無い事を、いひつけ口をしやァがる。四の五の無しに、鏡を取つたもおのれであらう。

鬼虎　オヽ、慥かにさうだ。其奴だワ。

鬼秀　サア尋常に

四人　白状しろ。

忠正　ヤア、云はせて置けば、様々の拵へ事。もう料簡が

ト立ちかゝる。成春とめて

成春　ヤコレ、忠正どの、立騒いで見苦しい、扣へてお居やれ……只今忠正が申す通り

賴信　この賴信へ主家の勘當、執成しくれよと度々の願ひ。下郎ながらも見所ある侍ひ、天下の爲に英雄を惜むは源家の家風。
正盛　ムウ、それ故あれなる浪人と、親しう交るとお云やるのか。
賴信　いかにも、目を懸け遣はしましてござります。
　　　ト正盛思ひ入れ。
正盛　院使へ申し上げまする。讓り葉の御鏡の盜賊、相分りましてござります。
因幡　何と申す正盛、御鏡の盜賊知れしとや。オヽ、悅ばしや〳〵、そりや何者ぢや、早う申しや〳〵。
賴成　ムウ。して、御鏡の盜賊は
敵役　何者でござるな。
正盛　外でもない、この賴信。
賴成　ヤ。
正盛　イヤサ賴信、こなたのいひつけで、これなる浪人に盜ませたに違ひはあるまい、包まず白狀してしまやれ。
賴信　ヤア、亂氣ばしおしやつたか。何を證據にこの賴信を

成頼　御鏡の盗賊とは。
正盛　頼信を御鏡盗賊と云ふ譯は、田原の重寶驪龍の一卷に、千年歲古る土蜘蛛の生血を澆ぎ、死したる者に捧ぐれば、立ち所に蘇生なす希代の一品。然るにこの度、君重き御惱に渡らせ給へば、萬一の御時は、無くて叶はぬ驪龍の一卷、これなる忠正が守護の役にて、盜みとられしと云ひ觸らし、今日また當社に於て、御惱平癒の爲奉幣の御鏡紛失、この二品に心を懸くる者こそ、君を呪咀なすおこの曲者。また頼信が、筋なき浪人に親しみ、二つの寶を取り隱し、一天下を掌握なさん下心と、この正盛が睨んだ黑星、寸分違ひはあるまいがな。
頼信　ヤア、身に覺え無き謀叛呼はり。殊更二品の御寶を取り隱したなどゝは、跡方も無き僞り表裏。菅公も照覽あれ、頼信毫頭覺えはないぞ。
正盛　ヤア、覺えないと云はれまい。君萬一の事ある時は、無くて叶はぬ主家の寶を失ひし、不忠不義の浪人と、何ゆゑあつて親しむのだ。
頼信　サ、その儀は
雲早　そんなら惡工みを嗅ぎ出す爲の、隱し目付の雲早に、なぜ繩を打つたのだ。
頼信　サ、そりやァ

正盛　何ゆゑあつて不忠不義、匹夫下郎と親しむのだ。
頼信　サ、それは
正盛　但しは源の、それが家風か。
三人　サア〱
正盛　頼信返事は
四人　ドヽ、どうだ。
小式　頼信公、仰せわけられれは
女形　ござりませぬかいなァ。
正盛　鬼虎、坂戸の九郎が縛め、解いて遣はせ。
鬼虎　ハツ、畏まつてござります……そりや、一七日の縄解きだ。
ト縄を解く。
雲早　こりやァ斯うなけりやァ叶はぬ事だ、うぬ頼信、覺えてうせろ。
ト忠正口惜しきこなしあつて
忠正　エヽコレ、身許の怪しい雲早が繩を解き、この忠正ゆゑ頼信公まで、無念の汚名。豊後の次郎が

荒事師の初舞臺、もう料簡がならねえぞ。

ト大繩を切り、立ちかゝる。賴信こなしあつて

賴信　コリヤ〳〵、忠正、高位の人に慮外があると、弟美女御前が好い手本、必ず共に逸まるまいぞ。

ト思ひ入れ。忠正これにてギツとなる。

成春　因幡の局、正盛公へ申し上げまする。二品の寶の盜賊は、この橋立三郎めでござりまする。

賴信　アヽ、コリヤ成春、そりや何を申す。尤も賴信を庇ふ心底は過分なれども、月日の光り明らけく、身に曇り無き寃の罪も、ナ。

ト思ひ入れ。

成春　でも、差當る

賴信　ハテ、扣へて居やれ。

因幡　思ひも寄らぬ賴信が、御鏡の盜賊とは、顏に似合はぬ、てもマア、恐ろしい惡工み。正盛、よきに計らうてよからう。

正盛　畏まつてござりまする……なんと賴信、天道は正しきだワ。科無き坂戸に繩打つたその報いだ。今又おのれをふん縛るのだ。

鬼秀　サア、尋常に

四人　腕廻せ。

ト皆々立ちかゝる。この時揚幕にて

仲光　待つた。

皆々　何がなんと。

仲光　まづ〳〵お待ち下されい。

ト早舞になり、向うより藤原仲光、上下衣裳、大小にて、首桶を持ち、出て來り、跡より下部菅平、奴の形にて、幕明きの仕丁交り出で來り、花道にて

仕丁　彼奴をやつちやア

ト菅平を搔退け、かゝらうとする。

菅平　留立てひろぐと、叩ッ切るぞ。

ト脇差へ手を懸ける。これにて仕丁、逃げて入る。直に兩人舞臺へ來り、仲光、敵役を押退け、好き所へシヤンと住ふ。

賴信　そちや、父滿仲の家來

成小　藤原の仲光どの。
頼信　見れば首桶持參の樣子、さてはいよ〳〵弟の
仲光　美女御前の御首を、討ち奉つてござります。
小式　ほんに思へば思ふ程、味氣ない世の
女形　成行ぢやわいなア。
正盛　ムウ、仲光が討つたりといふ美女御前は、多田の滿仲が末の悴、出家させんと叡山へ登せ置きしに
仲光　性質お生れ猛くして、出家を嫌ひ、碩學修法の高僧を打擲なし
正盛　勅使院使へ度々の緩怠、その罪既に叡山に達し、彈正臺の廳に下り、斷罪せよと嚴しい勅命。
頼信　美女が首討て仲光と、父滿仲の御怒り。
仲光　討てとあるのも主人の仰せ、討ち奉るも主人の公達、その太刀取りはこの仲光。
正盛　首實驗はこの正盛、それゆゑ爰へ持參なしたか。
仲光　なか〳〵左樣。
因幡　コリヤ、仲光とやら、そちや爰を何れと思ふ。御惱禱りの神の庭、殊に院使の自らが前とも憚ら

ず、忌はしき首級を持参するのみならず

正盛　御鏡の盗賊たる頼信に、繩懸けんと致すのを、何ゆゑあつて留めるのだ。

仲光　恐れながら院使へ申し上げまする。繩打つ科人は、頼信ではござりますまい。

因幡　ムウ、して、何者に繩打つのぢや。

仲光　恐れながら、院使因幡の局に。

因幡　ヤヽヽヽ、なんと。

仲光　正盛公、多田の滿仲の乙の若、美女御前の首、イザ。（ト首桶の蓋を取つて）御實檢下されませう。

ト管絃になり、白髪の官女誠の因幡の局の首を差付ける。皆々思ひ入れ。正盛も思ひ入れあつて

正盛　仲光、わりやこの正盛を嘲弄致すか。見りやァ白髪たる女の皺首、それを美女が首だと云ふのか。

仲光　イヽヤ、市原野の女非人。

因幡　ヤ。（ト思ひ入れ）。

仲光　熊手のお爪とやらんが首。なんと正盛公、方々、繩打つて引く科人は、因幡の局でござらうがや。

敵役　とは又何ゆゑ。

仲光　菅平、その密書これへ。

菅平　ハア、。

　　　ト密書を出す。仲光取つて

仲光　成春、それにて讀み上げい。

　　　ト成春に渡す。雲早、因幡の局、思ひ入れ。成春披き見て

成春　ナニ〳〵、「いよ〳〵今日北野に於て奉幣使因幡の局を、途中に於て密かに害なし、彼の市原野の女非人熊手のお爪と申す老女を局に仕立て、萬事彼れに申し含め、頼信はじめ源氏の奴ばら罪に取つて落すべく候ふ。

頼信　猶また源家より奉納の鬼切丸、頼み置き候ふ通り計ひ可申候ふ。坂戸の九郎へ。」

仲光　宛名を破つて棄てたるは、この仲光が寸志の一つ。

小式　さてこそ今日の院使の局、大內にては見馴れぬ女官と思ひしに、すりやこれなる局は紛れ者にて

頼成　誠の局はこれなる首級で

皆々　あつたよなア。

雲早　すりやその密書が

仲光　局の死骸の傍らに

雲早　もう斯うなつちやァ破れかぶれ、仲光、うぬが

ト切つてかゝるを、仲光立廻つて、雲早をあてる。

仲光　忠正、菅平、院使を引出せ。

菅忠　ハツ……サア、あま酒婆アめ、化の皮を現はせ。

ト因幡の局を引出す。敵役立ちかゝるを仲光、成春支へる。此うち忠正、菅平、因幡が衣裳を引剝ぐ。これにて因幡、やつし襤褸の形になる。皆々思ひ入れ。

忠正　いつその事に。

ト立ちかゝる。仲光とめて

仲光　ハテ、高が女の物乞ひ非人、捨てゝ置きやれ。(ト思ひ入れ)。

小式　そんならいよ〳〵院使といふは、アノむさくろしい

初關　非人であつたかいなア。

因幡　ナニ、むさくろしい非人であつたかいなアも有り難いな。コレナ、腹からの非人でこんな仕事が成るものかな。これでも昔は由ある人のお孃樣、身狀が惡さに勘當され、頸へ袋をかけ出しの、女乞食も功を經て、仲間の内でも市原野の、熊手のお爪と異名に呼ばれ、搔むしるほど慾氣のない、

お婆ァさんの物貰ひだによ。コレナ、七ツ過の影法師を見る様な、すてきに長い兄いどん、生き過ぎた命のお餘り、此方から手の内にくれてやらァ。欲しかァ取つてゆきねえな。(トこなし)。

忠正　うぬ、其いけツ口を

　　　ト又立ちかゝるを、仲光留めて

仲光　ハテサテ、棄てゝ置きやれな。(ト思ひ入れあつて)正盛公、これにて頼信盗賊の名を捻切り棄て

正盛　イヽヤ、疑ひ晴れぬ。

仲光　美女御前の事につき、首實檢の正盛公へ、ちと折入つて仲光が、お願ひ申す筋あれば、密書の宛

正盛　ムウ、すりやそれを恩に着せて

仲光　サ、事の穩便、この場を納めしその代り

頼信　美女御前の身の上に

成小　恙のないやう

仲光　アイヤ、討たねば天下の禮が立たぬ。不便ながらも、悴幸壽が

正盛　すりや、身代りで

仲光　アイヤ、委細の樣子は奧殿にて
忠正　とは云へ驪龍の一卷も、慥かに正盛。（ト立ちかゝる）。
正盛　なにを。
賴信　心がゝりは密書の中。
成小　鬼切丸も最早紛失。
仲光　アコレ、何かの事は仲光が……サ、御兩所ともに奧殿にて
正盛　賴信、仲光。
仲光　正盛公。
正盛　皆參れ。
ト管絃になり、思ひ入れあつて、この人數皆々奧へ入る。雲早、お爪殘り、雲早心付き思ひ入れ。
つめ　雲早樣。
雲早　熊手のお爪。
兩人　ヤレ〳〵、ひやいな目に逢つた。
つめ　いま〳〵しい、折角うまくやりかけたを、あの仲光とやらが來やァがつたばつかりに、古い奴だ

が、まんまと首尾よく、物の見事にだりむくつた。

雲早　イヤモウ、あゝいふ手詰めになつたからは、どうで命はないものと、思ひの外にずる〳〵べつたり。それに付けても、あの仲光めは、よく〳〵慈悲深い奴でござるわえ。

つめ　違ひねえ。まだしも石を抱かねえのが見つけ物だ。その上、まだ〳〵肝心の、あの御鏡とやらんも到頭隠し果せたからは、今日の仕事も無駄にやァならねえ。骨折代の御褒美は、正盛様からずつしりと、お貰ひ申さにやならねえよ。

雲早　ハテ、そりやァ云はずと知れた事だ。まだその上に、先刻神前へ持つて來た、御悩を祈りのあの勅書も、まんまと鬼虎が盗んでしまへば、やがて天下は良門の

つめ　定めしわたしも引上げて、その時にやァお局様かえ。そりやァ有り難い。それにつけても、あの正盛様に、もう一遍逢つた上、よく取極めをしてゆきたいものだが。

トこの時管絃になり、兩人恟り振り向く。この途端に正面の簾巻上げる。内に正盛、以前の形、立ち身にて三人顔見合せ

兩人　正盛様。

正盛　コリヤ。

ト やはり管絃にて、思ひ入れあつて、舞臺へ來り

雲早、して、いひつけた鬼切丸は

雲早 その一腰も首尾よく手に入り、御鏡もろとも鬼秀に、しつかりと手渡し致して置きました。

正盛 ムウ、すりやこの上は討手の一條。それにつけても、邪魔になるあの賴信め、今日の社參を幸ひに、猶も當社に忍び居て、雲早、彼奴をばらしてしまへ。

雲早 心得ました……それは格別、良門公、今朝病死の上からは

正盛 氣遣ひ致すな。いま良門相果てゝは、身が大望の妨げ。一度この土へ蘇生なす、祕法はかねて某が、手に入れ置きしこの一卷。

ト懷中より一卷を出し見せる。

雲早 ムウ、すりやこの上は、尋ぬる土蜘蛛、手に入りさへすれば、良門公蘇生は瞬くうち。

つめ アヽ、モシ〳〵、それこそこの頃洛中で噂ある、あの駒が洞に、凡そ千年にも及ぶといふ、人までくらふあの土蜘蛛。

正盛 その蜘蛛を生捕らんと、この程、平太有風と申し合せ、今日酉の刻を限りに、あの土蜘蛛を僞り引出す手番ひ。某事も彼の地へ立越え、事を計らんかねての手筈。

つめ　ほんにマア、隅から隅まで、如才の無い始末方サ。

ト この内始終かすめて管絃。この時下座より鬼秀、以前の袋入りの劍を持ち出て來る。

鬼秀　いづれも……正盛様。

正盛　鬼秀、して手に入つた二品は。

鬼秀　お氣遣ひなされますな。二品共に恙はござりませぬ、併し身共が持つては危ないものと、預る品品神前の、額の間へ忍ばせ置いたが、さて〱大きに心遣ひでござつた。イザ、二品とも、お受取り下さりませ。

ト 懐中より以前の鏡を出し、一腰もろとも正盛へ渡す。正盛、袋の口を明け、ちよつと見て

正盛　出來し召れた。二品もろとも、正盛慥かに受取つた。さりながら、譲り葉のこの御鏡、蜘蛛の棲家へ所持なさば、穢れ不淨の恐れと云ひ、平太有風に手渡し致すそれまでは、幸ひ其方に、しかと預ける。

ト 鏡をお爪へ渡す。

つめ　成る程、今日の働き、御褒美の出るまで、そくたくとやらの印に、しつかり預つておきませう。

ト 此うち正盛、寶劍を袋より出し、自分の刀を取つて、寶劍を腰に差し

正盛　雲早は必ずとも、頼信めを、合點か。

と刀を差出す。

雲早　心得ました。

ト刀を受取る。正盛懐より書き物を取出し

正盛　この上は、一刻も早く鬼秀には、この廻文時日を移さず、伊賀壽太郎を始めとして、味方へ持參かねての手筈、とつくりと牒し合せよ。

鬼秀　心得ました。

ト廻文を受取る。

この廻文を持參せば、味方も同時に集まるは治定。

つめ　そんならわたしやァ市原の

雲早　この雲早は頼信めを

正盛　必ずぬかるな。

雲鬼　心得ました。

ト三人別れて行かうとする。此うち後へ忠正窺ひ出て

忠正　さてこそ御鏡。

ト かゝるを、正盛支へる。この間にお爪、鏡を持ち、「ソレ」と上手の井戸へポンと入る。

南無三。

ト 行かうとするを、雲早、鬼秀支へる。忠正振り切るを、正盛引留める。

正盛　両人、早行け。

雲鬼　然らばこの儘。ソレ。

ト 早めの大拍子になり、鬼秀は花道、雲早は下座へ入る。忠正、正盛を突放して、「ソレ」と同じく井戸へ飛び込む。正盛、つか〳〵と行き、思ひ入れあつて

正盛　こざかしき青二才め。この井戸こそは、駒ケ洞への間道、一味の手配りなし置けば、可哀や彼奴も……ハヽヽヽヽ。

ト 思ひ入れ。管絃になり、下座より小式部出て来り、正盛とちよつと顔見合せ、奥の方へ正盛行かうとするを、小式部とめて

小式　アイヤ、正盛様、マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。

正盛　コリヤ小式部どの、身共に待てとは。

小式　サア、好い折柄と申し、この小式部が、あなたを只今お留め申したは

正盛　サア、留めたは

小式　サア、矢ツ張り留めたのぢやわいなア。

正盛　ヤア痴けた。禁庭守護の隙なき正盛、女童に用事はない。

小式　サア、それぢやと云うて大切な……自らがお願ひ。

正盛　何、某へ願ひとは。

小式　サア、女子の方から厚皮な事ながら、慕ふ殿御を思ひの餘り。

正盛　こりや、正盛に色事の、その媒酌をしてくれいとな……して、先の男は。

　　　ト小式部思ひ入れあつて

小武　サ、先の殿御は、常陸の介正盛樣。

正盛　ヤ。

小式　恥かしながら自らが、どうぞ願ひを、お叶へなされて下さりませ。

　　　ト正盛へ寄添ふ。

正盛　イヤ、正盛は誠の武士だ。女には絆されぬ。

小式　なんとえ。

ト、この時則景、時連出て來り

則景　心知れざる保昌が娘。

時連　必ず御油斷なされますな。

ト小式部これにて思ひ入れあつて

小式　こりやお二人さん、すりや自らを疑うて

正盛　知れた事、この正盛には如何の譯で。

小式　譯の何のと、どうしてマア、惚れたに譯があらうかいなア。

則景　イカサマ、こりや尤も。

時連　そんなら眞實惚れたといふ

正盛　證據があらば

小式　サ、その證據は

ト正盛が側へ來て、刀へ手を懸ける。

正盛　指切る心か。

小式　アイ……心中に。

正盛　イヤ、心中には及ばぬ。

小式　そんなら叶へて下さんすか。

正盛　ハテ知れた事、どうなりと。

ト小式部寄添ふ。此うち成春出て來り窺ふ。正盛小式部を引寄せる。

小式　オヽ嬉し。（ト傍へ寄つて正盛が懷より以前の一卷を引出し）こりや御鏡と思ひの外

トこの時成春ズツと寄つて

成春　その一卷は

ト手を懸ける。正盛ちよつと取つて懷中して、小式部を突放し、思ひ入れ。

則景　ヤア、橋立三郎成春。

時連　慮外があると

兩人　免さぬぞ。

正盛　イヽヤ、身共へ慮外より、二人は重き不義の科人。

成春　なんと。

則景　イカサマ、畢竟今の色事も、俗に云へば、口塞ぎと申すもの。

時連　まだ年端も參らぬが、如才のない仕方でござる。

正盛　何は格別、不義の兩人、記錄所へ引立て召され。

則時　心得ました……兩人共に立たつせえ。

成春　アイヤ、この身にとつて露ほども、覺えなき不義の惡名。慮外召されば某も、お相手に相なりまするでござりませう。

トきつとなる。この時下座にて

兼宗　その爭ひより、證據は爰に。

成小　ヤ、なんと。

ト大拍子になり、兼則、宗重。松丸、梅丸、竹丸を引立て出て來り、宜しく住ふ。成春、兩人を見て

成春　ヤア、其方達は

兼宗　なんと不義の證據であらうが。

成春　すりや、其方達が何も彼も

松丸　アイ、別當樣の圍ひの内で、小式部樣がおよつてお出で遊ばすと

梅丸　成春樣がお側にござつて、介抱なさるゝと思うたゆゑ
竹丸　お藥を貰ひ申して上げうと思うて、このお方にその事を
成春　すりや、アノ二人が……小式部どの。
小式　成春樣。
兩人　ホイ。
ト當惑の思ひ入れ。
兼則　まだ〳〵そればかりぢやァない、二人寄つて乳くり合つたその跡に、落ちてあつたこの短册。
ト以前の短册を出し、正盛へ渡す。正盛取つて
正盛　ドレ。「大江山生野の道は遠けれど、まだ文も見ず天の橋立」。ムウ、こりやこれ、あれなる小式部が、三郎を慕ふ心の戀歌。
時連　サア、二人とも、斯ういふ證據が出る上は
四人　不義でないとは云はれまい。
トこの時下座にて
仲光　お騷ぎあるな、その不義の科人は、仲光、捕へ置きましてござりまする。

ト大小の合ひ方になり、下座より仲光出て來り、思ひ入れ。

時連　この場に居合す不義の科人。

四人　それを仲光、捕へしとは。

仲光　イヤ、そりや科人が違ひました。

四人　今更外に不義者とは。

仲光　只今お目に懸けるでござらう……ヤア、菅平、不義者これへ。

菅平　畏つてござりまする。

ト大拍子になり、鬼虎へ繩を懸け、これを菅平引立て出て來る。

小式　すりや彼の者が

成春　不義の科人。

菅平　下に居らう。（ト引据ゑる）。

敵役　鬼虎どのゝこの體は。

仲光　正盛公、これが卽ち不義の科人、なんとお覺えがござりませうがな。

正盛　イヽヤ、その儀は正盛、覺えない。

鬼虎　アヽコレ、今日は人の身、翌日とも云はず、我が身にかゝつたこの縄目、誠にこれが正眞の、鬼虎が目から泪が出ます。これサ、正盛樣、不義とやらで無い事を、よく云ひ譯をして下さりませ。

正盛　仲光、こりやこの正盛を嘲弄するのか。

仲光　全く以て某が、禁庭守護の正盛公、何しに嘲弄仕りませう。その者こそ、不義の科人に相違ござりませぬ。

正盛　して、鬼虎を不義といふ

四人　證據があるか。

仲光　いかにも證據がござる。

四人　何で證據が

仲光　證據どころか屹度した、きはめが付いて罷りある。

四人　なんと。

仲光　その品これへ。

初關　心得ましてござりまする。

ト大拍子になり、下座より初花、關の戸、三寶に勅書を載せ、これを持ち出て來り

即ちこれなる一品が、この者が不義と申す

仲光 慥かな證據。

鬼虎 それを。

ト立ちかゝらうとするを

菅平 動くまいぞ。

ト引据ゑる。

正盛 其きはめとやらを正盛へ。

仲光 イヤ、これにて御覽に入れませう……きはめをちよつと

ト初花願書を披き

初花 紛れも無い不義者の極め、とくと御覽下されませう。

ト見せる。皆々見て悃り。

皆々 ヤア、すりやその願書を

小式 ほんにそれこそ今日當社へ

成春 奉幣使より勅の願文。

仲光　君が御惱を禱りの願書、神前深く忍び入り、奪ひ立退く上からは、おろそかならぬ大罪人、それをまだしも不義者と、申し立てしは仲光が、この場の寸志。なんと好い不義者でござりませうがな。

皆々　サ、そりやア

仲光　但しこの旨、一々つぶさに奏聞召さるか。

皆々　サ、そりやア

仲光　かゝる證據がござつても、これなる二人に御疑念ござるか。

皆々　サア／＼

仲光　なんと慥かな不義者でござりませうがな。

皆々　ムウ。（ト思ひ入れ）。

成春　すりや、某に

小式　不義の汚名は

兩人　ござりませぬか。

四人　みす／＼知れた不義者を

正盛　イヤ、成春に疑ひ晴れた。

仲光　然らばこれなる科人は、今日の神事の折にめで、正盛公へ進上いたすでござりませう。

ト菅平へ思ひ入れ。菅平心得、鬼虎の繩を解く。

初花　アノ大切なる

關戸　勅書の盜賊。

仲光　ハテ、願書めでたう立返れば、故なく命助くるも、一つは御惱祈りのため。

鬼虎　イカサマ、こりやア好い料簡だわえ。

菅平　アイヤ、去りながら、申さば大罪、せめて百杖。

鬼虎　ヤ、なに百杖。アヽ、コレサ、必ずそれにやア及ばねえ。

則時　百杖當てれば此方にも

兼宗　百杖あてる科人がある。

仲光　して、そりや何者。

正盛　外でもない、それなる小式部だ。

仲光　ムウ、一旦事の相濟みしに、又ぞろ何の罪ござつて。

正盛　この正盛へ慮外の罪で。

成小　ヤ。

仲光　正盛公へ慮外とは、何とも合點が

小式　サ、それはアノ、ついしたわざくれで、正盛樣の懷中から

仲光　すりや推量に違ひなう。

小式　イヽヤ、尋ぬる品にはあらずして

正盛　何がどうした。

仲光　たとへそれにはあらずとも、この仲光が詮議して。

ト立ちかゝる。

正盛　慮外な奴の。

ト振り切る。成春、小式部、立ちかゝるを、鬼虎、敵役四人、支へる。仲光、正盛が懷中より一卷を引出し

仲光　こりや、正しく田原の

正成　それを。（トちよつと取つて懷中して）要らざる詮議に藤原の仲光、この場はこれで濟ますとも

四人　重ねてきつと返報は

仲光　そりや此方も同じ事、禁庭守護の正盛公、この場は一旦

小式　事忽せに濟ますとも

成春　重ねて呉越と

初關　爭ふか。

皆々　詞を殘して

仲光　正盛公。

正成　とは云へ仲光

トちよつと思ひ入れ。

小式　コレ。

ト隔てる。

正盛　重ねて逢はう。

ト管絃になり、正盛先に則景、時連、兼則、宗景跡より鬼虎附いて向うへ入る。皆々跡見送り

仲光　ハテ、かたくましき正盛公の心底。それにつけても、先年亡びし將門が一子、將軍太郎良門、よ

りより一味を語らふよし。察するところ正盛公、彼れに心を寄するは治定。

成春　殊に御鏡の御在所も、大方それと思ひしに、今所持なせし一巻こそ、正に田原の驪龍の一巻。

小式　それに就いて差當るこの身の難儀、故なう事の納まりしも、仲光様の、忘れは置かぬ、嬉しう思ひますわいなア。

仲光　アイヤ、ナニその禮に及ぶべき。去りながら、野心の者の蔓れば、油斷ならざる折も折、源家の重寳鬼切の

菅平　サ、その一腰も察するところ、慥かに正盛。

成春　コレ。(ト思ひ入れ)。

仲光　サ、彼れと云ひ、これといひ

成春　アヽ、心ならざる

兩人　事どもぢやなア。

初花　アイヤ、何はともあれ、最早黄昏、小式部様には神事のお役目。

關戸　めでたう相濟みましたれば、はやお館へ。

仲光　イカサマ、斯る今日の仕儀……コリヤ、菅平。

ト菅平に囁く。

菅平　すりや、正盛が跡を慕うて

仲光　サ、必ずともに、心を着けてナ。

ト兩人思ひ入れ。

成春　サ、歸り詣でに神垣の、只何事も天滿つる

小式　またの逢瀨を成春樣。

初關　路次の間は

菅平　下郎が見送り。

成春　然らばこれにて

小式　仲光樣。

成仲　お別れ申す。

ト三重になり、小式部先に初花、關の戶、松丸、梅丸、竹丸、成春跡より菅平附いて、向うへ入る。

仲光殘り

仲光　この上は勅書の願文、又ぞろ再び寶前へ。

ト三寶の願書を持つて、ツカ〳〵と奥へ行かうとする。この時下座より賴信出で來り

賴信　仲光にはあわたゞしい。して、何事なるぞ。

仲光　ハツ、君の御惱を禱りの爲、願書則ち取得ましたゆゑ、早速再び神前へ。

賴信　すりや恙無く手に入りしとな。この上は粗略ならぬ伊賀壽が討手、猶豫は君の御大事、猶も再び奏聞遂げん。

仲光　然らば拙者はこれなる勅書。

賴信　片時も早く神前へ。

トこの時後へ雲早出て來り、窺ひ寄つて

雲早　賴信觀念。

ト拔打ちに切つてかゝる。立廻りにて兩人、雲早を留めて

賴信　こりや、謀叛に一味の荷擔人め。この賴信を何とする。

雲早　知れた事だ。それなる勅書を奪ひ取つて、二人共に打つ放す。賴信、觀念ひろげ。

ト引ぱらつて又切つてかゝる。早舞ひになり、三人立廻りよろしく、トゞ眞中に雲早、刀を振り上げ上と下に賴信、仲光、三寶の勅書を捧げ、三人見得よく、きつと留める。早神樂にてこの道具ぶん廻

す。

本舞臺、後黑幕、正面板松、下の方に切り穴、この前に蘆大分茂りあり。時の鐘、山おろしにて道具とまる。

ト矢張り右の鳴り物にて、下の切り穴よりお爪、以前の形、御鏡を抱き、息せきとして出て來り、舞臺へ來り、ほつと吐息をつき、思ひ入れあつて

つめ　ヤレ〳〵、あの忠正めが、跡を追ひ〳〵うしやァがつたが、この拔け道は荷擔人の、山賊の住家と云ひ、どうして中々彼奴らが、一人や二人追ひかけても、氣遣ひはないと、思ひの外に手強い奴。なんでも捕まるまいと、虚空むてんに如何やら斯うやら、爰までは逃げ延びたが、併し大勢に切り立てられ、深手を負うた樣子であつたが、大方今時分は、野たれ死にくたばつたも知れねえ。アアコレ、息が切れて耐へられねえ。何處ぞそこらに、清水でもありさうなものだ。

トあたりを見廻し思ひ入れ。時の鐘、山おろしになり、この時、下の切り穴ばた〳〵にて、切り穴より山賊の手下一人四天の形、拔刀を持ち出て來る。跡より忠正、以前の形にて、肌を脱ぎ、袴の高股立、數ヶ所手を負ひし見得、血刀を提げ、跡より手下一人同じく四天の形、左右にて忠正をつけ廻し出て來り、三人ちよつと立廻り、きつととまる。お爪これを見て

つめ ヤア、執念深い野郎め、とう〳〵爰まで……もう斯うしちやァ居られない。

ト逃げにかゝろ。忠正、二人を振り切り、お爪を引つ捕へ

忠正 ヤイ、非人め、うぬが所持した一品は、紛失なしたる譲り葉の御鏡。穢い汚ない分際で、手にかけるは不浄の穢れ。及ばぬ事と諦めて、その神寳を忠正に、きり〳〵爰で渡すまいか。

ト此うちお爪、忠正が様子を見て思ひ入れ。

つめ アヽ、イカサマ、さう聞けば此方とらが風體で、斯ういふ物を勿體ない。何を云ふのも命が物種これまで折角働いた、仕事もみんな骨折り損、南無三寳と諦めて、直に渡して……と云つたところがソレ、この深手。オヽ、彼方此方と切られて痛からうの。こりやァ却つて覺束ない。それより鏡は、この儘おれが

ト引拂つて逃げようとするを、忠正引留める。手下両人支へろ。この立廻りにお爪、脾腹をあてられ倒れる。二人は忠正に切つてかゝろ。これより谺に山颪を被せて、忠正タテあつて、二人を切り倒し、どうとなる。この時お爪心付き、落ちてある白刃を取つて忠正へ切つてかゝる。忠正これを受留め、ちよつと立廻りあつて、兩人よろしく見得。時の鐘、山颪にて、この道具廻る。

本舞臺、一面の岩山、後山幕、眞中に洞穴、これより舞臺へ血汐の滴り、上の方に松の立ち木、

吊り枝、これに仕懸けあり、この傍に「棧敷ヶ嶽麓駒ヶ洞」と彫りたる古びた傍示杭。爰に正盛、以前の形、肌脱ぎ、高股立にて、鬼切丸を以て、大きなる土蜘蛛を引敷き、これを刺し通して居る。上の方に物部の有風、山たち付、好みの山獵師の拵へにて、誂への異形なる槍を以てこれに立ちかゝり、突きかけて居る。この見得、早笛、大どろにて道具納まる。ト鳴り物かすめる。兩人思ひ入れあつて

有風　たとへ如何程の變化たりとも、高が蜘蛛と思ひの外、塵を飛せし今の動搖。

正盛　この程夜な〳〵洛中に、人を惱ます妖怪も、これなる蜘蛛の變化の所爲。今某が手に懸くるも良門蘇生の祕法の一品。

有風　まんまと首尾よく

正盛　忝ない。

ト劍を引拔き、血を拭ひ、鞘に納め、兩人入れ代つて

有風　して、田原藤太秀鄕が、龍宮城より授かりしとある、彼の驪龍の一卷は。

正盛　云ふにや及ぶ。それこそは卽ち爰に。

ト以前の一卷を出し

これなる蜘蛛の生血を以て、この一卷へ。

ト思ひ入れあつて、蜘蛛の傷口より血綿を引出し

せいこん祕密の奇特あらば、今目前に驪龍の驗見せしめ給へ。歸命頂禮々々々々。

ト血綿を一卷へ打付ける。どろ〳〵になり、兩人少し放心の思ひ入れあつて

有風　ハテ、爭はれぬ希代の一卷。

正盛　まだこの上に、これなる驪龍の奇特といふは、辰の年月日時に生れし者、この一卷を所持する時は、爲す事皆自在と聞き及ぶ。

有風　それこそかねて荷擔の良門公、云ひ號けある純友が娘桔梗の前こそ、辰の年月日時揃ひし生れと聞く。これ幸ひと思へども、先年落城より、娘の行方皆くれ知れず。

正盛　何はともあれ、差當る源家重代鬼切のこの一腰、今日我が手に入ると云ひ、望みし蜘蛛を刺し通せしは、取りも直さず大望の血祭り。今よりしてこの劍を蜘蛛切丸と名け、同意を結びし伊賀壽なれば、渡すも何か惜しからん。有風、手渡し致してよからう。

ト劍を差出す。有風、これを取つて

有風　いかにも大義を思ひ立つも、無くて叶はぬ名刀。某とてもかねて伊賀壽に荷擔なし、倶に大義を計らんと、斯く姿を變へて徘徊なすも、この程千丈ヶ嶽への討手、いよ〳〵賴信に極まらばと、

正盛　殘黨ばらを掻きあつめ、源氏の武士に白泡吹かせ、取挫がんはかねての手筈。
有風　オヽ、潔し平太有風。
正盛　猶この上に何彼の密談。
有風　三二イ一の日取りを以て
正盛　夜陰に集まる岩倉山。
有風　契約の期を
正盛　相待ち申す。
　トこの内始終谺、山颪、時の鐘にて、下座よりお爪、忠正、立廻りながら出て來り、この中へ入り
忠正　御鏡渡せ。
つめ　エヽ、小癪な、早くくたばつてしまやァがれ。
　トお爪、忠正へかゝる。正盛、お爪を引廻す。有風、鏡を引つたくる。
　ア、コレ、それをどうするのだ。
　ト寄るを、有風、正盛、二人をあて、有風、袋入りの鏡を見て
有風　こりやこれ、疑ひもなき讓り葉の名鏡。

正盛　これぞ即ち某が、手段を以て奪ひし御鏡、折を幸ひ平太有風。

有風　二品ともに某が、今手に入つたる上からは

正盛　これより直に千丈ヶ嶽へ立越え、伊賀壽太郎に面會なし、何かの計議を運らされよ。

有風　心得た。この上は粉骨碎身なし、軍勢催促いたすでござらう。

　ト この時お爪起上がつて

つめ　こりやァ正盛樣、そんなら何かえ、お前方二人で云ひ合せ、おれにやァ思ひ入れ骨を折らせ、その恩賞もぶん流し、褒美の合紋に渡したあの鏡まで、ずる／＼に卷上げようといふ底巧みだね。こりやァ恐ろしい。ようござりやす。お前方がさういふ目論見をしなさりやァ、此方も又出る所へ出て、明るさ暗さを立てにやァならねえ。マア、さう思つて待つて居なさい。

　ト 行かうとするを、正盛引留め、立廻りに、懷中より右の一卷を取落す。お爪手早く取つて

こりやこれ一卷、

　ト 正盛「ソレ」を取らうとする。この時忠正起上がつて

忠正　その御鏡を

　ト よろぼひながら正盛へ掴みかゝる。この間にお爪、行かうとするを、有風支へる。このとたん下座

より菅平窺ひ出て

菅平　さてこそ怪しい。

ト二人へかゝる。この間にお爪ちよつと拔け、花道へはいり。

つめ　當分これを預つたよ。

と矢張り山颪、時の鐘にて、お爪、一卷を持つて逸散に花道へ入る。舞臺は此うち皆々立廻り。有風は山刀を拔いて、菅平を切り下げる。盛正は正忠を切り倒し、直に乘り懸り、とゞめを刺す。この時大どろ〳〵になり、松の枝に土蜘蛛現れる。これにて兩人、たぢ〳〵として、きつと見て思ひ入れ。

これより樂の合ひ方。

有風　ハテ、心得ぬ俄の動搖、又ぞろ一ッの蜘蛛現はれ、糸繰りかける有様は

正盛　傳へ聞く唐土の非田文は、車輪の如き山蜘蛛を見るに、その絲をたぐる事、まさに布を引くが如し。

有風　卽ち弓を以て射殺せしに、はんしやくの蜘蛛現はれ、頭を嚙んで、忽ちその仇を報いしためし。

正盛　それは唐土その古へ、これは目前、察する處、彼の葛城山に年を經し、長崎と名けし土蜘蛛こそ今命を絕ちし山蜘蛛と、合體なすと覺えたり。

有風　名けてこれを葛城の、女郎蜘蛛と云ひ傳ふ。

正盛　さてはこれなる山蜘蛛の

有風　仇を報はんその爲に

正盛　現はれ出でしか。

有風　何にもせよ。

トこの時菅平起上がり

菅平　怪しいこの場の

トよろぼひ寄るを、有風突廻す。正盛受取り、拔討ちに切り下げ

正盛　ハテ、小ざかしい。

ト刀を引く。菅平、見事にかへる。これを木の頭。

兩人　振舞ぢやなア。

トカケリ、大ドロ〱にて

直に禪のツトメにて引返し。

幕

本舞臺三間の間、後黑幕、正面より少し上へ寄せ扉付きの辻堂、內に石地藏、軒口に地藏堂といふ額を懸け、眞中に破れたる破風を見せ、この屋根へ人の登る事。左右に誂への白壁、腰板、緣側付、この堂の下の方四本柱、雨覆を懸け、白き幕を張りたる誂への別火屋の模樣。この前に蓆を敷き、上に位牌、香爐、鉦、撞木など並べあり。下の方に柳の立ち木、これにも人の登る事。日覆より一面に吊り枝を卸し「市原野地藏堂」と書きたる破れ卒塔婆、枯蘆生ひ茂り、すべて古びたる誂への道具。爰に巳藏、やつし隱亡の拵へにて、短き竹箸を以ち、骨を選つて居る。二人の町人、一本差し、施主の形、供一人、骨拾ひの見得。堂の內に鼠木綿の頭巾、麻衣の堂守り、後向きにて鉦を鳴らし居る見得。時の鐘、紙砧の合ひ方にて幕明く。

町一　これは思ひがけない、こなた衆の世話になりまする。

町二　イヤモウ、このやうに灰になつたるその跡は、まづ念の殘らぬと申すもの。必ず粗末にならぬやうに賴みますぞや。

巳藏　ハテ、そりやア氣遣ひさつしやりますな。外の仲間手合と違ひ、わしに限つては、隨分と叮嚀にしますが、燒けた佛に粗末があつて濟みませうか。サア〳〵、これで高野へ送るとも、どこまで持つてござつても、持ちよいやうにして上げやせう。

ト壺を繩にて提げるやうにして、供へ渡す。

町一　これは〳〵、叮嚀に、よう念を入れて下さつた。嘸この佛も悦ぶでござらう。

町二　この親類の喜六も、それでこそ大きに安心しましたよ。

町一　アヽ、これを思へば、昨日までも、呵りちらした嬶が事、又思ひ出して泪の種、嘸や草葉の蔭で……はくしよ。

ト嚏をする。

供男　旦那、どうなされました。

町一　おれが噂をするさうだ。

町二　何を云はつしやる。サア、行きませう〳〵。

ト木魚の音になり、供の男壺を提げて、三人下座へ入る。

巳藏　何だ、昨夜から埒もない佛の來る事だ。並燒ばかりにかゝつて居ちやア、ましよくに合はねえ。

ト腰より摺火打ちを出し、煙草を吸ひつけ、そこらを方付ける。又木魚入りの合ひ方に紙砧を交ぜて、向うより御厨正賴、黒羽二重の小袖、浪人者の拵へ、大小にて、藁草履を穿き出て來り、跡より乞食二人、革葛籠に天秤棒を通し、その上へ竹笠を載せ、兩人して擔ぎ出て來り、花道にて

乞一　モシ旦那、河原に居たわつち等に、賴みたいと云ひなさつたに依つて、この葛籠を擔いで來やし

たが、こりやマア、どこまで行きやすのだえ。

乞二　それにこの節アわつちらも、お祝ひ取りで忙しいに、何でも持つて行つてくれろと、僅な錢で爰まで來やしたが、どうか泣出しさうな天氣になつて來やした。ちつとも早く歸りたうござりやす。

正頼　ほんに、其方達も大儀であつた。その葛籠の中は、今日煙りとなさん御主人方の、大事のお形見ぢや程に、價を遣はし、頼んで爰までは來た。もう少しぢや。（ト向うを見て）アレ〳〵、向うに見ゆるが市原野の無常場、あれまで持つて行てくりやれ。

ト正頼先に乞食附いて本舞臺へ來り

乞一　サア〳〵、約束の處へ來やした。

乞二　そんならわつちらは、爰へ置いて歸りやすよ。

トよき所へ葛籠を下ろし、捨ぜりふ云うて下座へ入る。巳藏見て

巳藏　ヤレ〳〵、先刻からお待ち申しました。大方お前樣が、お施主方でござりませう。

正頼　そんなら其方が、この市原野の無常場を預る者か。やう〳〵と只今の兩人を頼み、持つて來たこの葛籠。マア、何事も其方達、よきに頼む。

巳藏　アヽ、モシ〳〵、頼まれねえでも、何うで此方の商賣だもの、何も彼も手都合して置きましたが、

正賴　まだ少し間がござりやせう。
巳藏　心急くまゝ何處がどう、道は急いで來たれども、そんならまだ火は懸りませぬか。
正賴　イヤモウ、押付け刻限でござりませうが、知らせの半鐘が鳴らぬ内は、火を懸ける事ぢやござりませぬ。
巳藏　それで少しは落付いた。そんなら其方に賴みといふは、この葛籠ともに烟りとなして、亡きお方の、修羅の苦患を晴らさん爲に、これまで持たせて來た程に、ともに烟りと
正賴　ハア、それで解りましたが、併しこの儘燒いてくれろと云はつしやるかえ。
巳藏　サア、今は仇なる浮身こそ、灰となしたるその上は、念も殘らぬといふ事ゆゑ、烟りとなして
正賴　それはマア勿體ねえ。中は何かは知らねえが、ちよつと横店へ見せても、貳朱や壹貫はありさうな代物。なんと惜しい物を燒くものでねえ。
ト この時知らせの半鐘鳴る。
巳藏　ありや、最早知らせの
正賴　ヤア、もう火を懸ける刻限だわえ。ドリヤ、火を取つて來ようか。
ト 木魚の合ひ方になり、巳藏、机にある香爐を持つて堂の後へ入る。正賴殘り思ひ入れ。紙砧の合

ひ方、一つ鉦。

正頼　アヽ、思へば淺ましきは、流浪せし效もなう、誰あらう相馬譜代の家臣、御厨三郎正頼とも云はるゝ身の果か。御父將門公には御無念の御最期、やがて父君の吊ひ軍せんものと、良門公をお供なし、この都に上り、世を窺ふその内に、風邪の心地に在せしが、積る病苦に年月の御艱難やら、終に空しく御臨終。この市原野の煙りとなり給ふも、せめて御遺骨は一ッにと、肌身離さぬこの一品。(ト懷中より袱紗に包みし將門の髑髏を出し)父君のこの髑髏と一ッになして、都の内へ葬らば、御心に叶ふ道理。又葛籠の中の御裝束も、共に煙りとなすならば、御一念も殘りなく、これより外の事こそあらん。それ〳〵。(ト革葛籠の中より、金冠白衣、紫の裝束を取出し)これこそは將門公、過ぎし頃相馬内裏のありし時、御身に付けさせ給ふところの、金冠白衣、まつた紫の御裝束は、純友公、關白太政大臣へ贈り給はると聞き及ぶ。事成就のその上は、東に殘る百官百司、皆それ〳〵の裝束も、今は燒場の灰となるも、是非もなき世の成行き。思へば〳〵口惜しい。

ト思ひ入れ。この時巳藏、うそ〳〵出て來る。このうち正頼、ちよつと白衣と髑髏を懷中して、跡の品も葛籠へ入れ、蓋をする。この時雨車の音烈しくなる。

アヽ、折惡い、この時に雨が降つて來るとは。オヽ、それ〳〵、暫しが間。

ト葛籠を片寄せようとするを、巳藏何心無く手を懸け

巳藏　アイ、わしが方付けやせう。

正賴　イヤ〳〵、滅多に其方に

ト巳藏を退け、正賴片寄せる。

巳藏　ドリヤ、そろ〳〵と懸りませうか。

ト巳藏、上の溫袍を脫いで、下の半纏になつて、溫袍を葛籠の上へ載せる。正賴こなしあつて

正賴　あの辻堂に、雨を凌いで

ト正賴は辻堂の緣へ腰を掛ける。巳藏、堂の内に向ひ

巳藏　坊さん、降つて來たが、もうおめえ歸らねへか。

ト坊主は堂の内にて何か云ふ心。巳藏呑み込み

ナニ、笠を貸せとか。途方もない人だ。内に居て笠を被るのかえ。成る程、こいつは尤もだわえ。ふきぬけの堂だもの。（ト思ひ入れあつて笠を尋ね出し）アヽ、あるぞ〳〵。好い物があるワ。ソレ、こいつを被つてゆきなせえ。（ト竹笠を堂の内へ投げ込み、自分は火屋の前へ來て）サア、火を掛けますよ。御燒香はこれでなされませ。

正頼　ドリヤ、御回向を

ト正頼燒香して回向の思ひ入れ。巳藏は幕の内へ入る。この時幕の内にて火の燃える事。正頼は鉦を叩き、段々早念佛になる。この時禪のツトメ、ばた〳〵になり、向うよりお爪、前幕の形にて、逸散に驅けて出て來る。この物音に巳藏、幕の内より出て、兩人行逢ひ

巳藏　誰だ〳〵……ヤ、わりやア熊手のお爪ぢやアねえか。

つめ　さう云ふは班の巳藏、コレ〳〵、今跡から追手の懸るもの。斯うしちやア居られねえ。どうぞ何處ぞへ、早く隱してくれろ〳〵。

巳藏　こいつは何だか譯も云はないで、暗雲に隱せ〳〵と云ふが、見る通りだ、どうして燒場へ隱されるものか。その上、今佛に懸つて忙しい。早く行け〳〵。

つめ　成る程尤もだが、併し只も頼まねえから、マア聞いてくれ。正盛公に荷擔なし、坂戸の九郎に頼まれて、因幡の局といふ院使となつて、まんまと首尾よく失敗つた。命辛々やう〳〵と、爰まで迯げちやア來たが……コレ、やつてのけたこの一卷。（ト懷から一卷を出し）これこそ田原の重寶、龍宮より持ち來りし、驪龍と名けし、蘇生させる一卷だといふ事。これさへありやア、大金になる代物だ。

巳藏　ナニ、蘇生させる一卷だ。人を生かして隱亡の商賣がなるものか。馬鹿な事を云ふ奴だ。
つめ　この一卷で浮み上りやァ、その時こそは、おぬしにも分け口を遣るが、なんと半口乘つて。何處ぞへ隱してくれまいか。

トうろ〳〵して居る。この時正賴、後より窺ひ寄つて

正賴　ナニ、蘇生させる一卷とは
巳藏　そんなら後で樣子をば
正賴　委しく聞いた田原の重寶、驪龍の一卷、此方へ渡せ。

ト取りにかゝる。巳藏支へて立廻り。

つめ　オヤ〳〵、おめえさんは厭らしい小差出た。おらが仲間を見るやうな、形もそゞろなお侍ひさんお剩りならば上げやうが、折角せしめた代物を、其方へ持つて行かうとは、餘り押しの強過ぎる。この熊手のお爪が手へ入つたからは、滅多に渡す事ぢやァねえ。マア、さう思つて居なせえよ。
正賴　いらざる非人、殊に女の身を以て、その一卷に心を懸けると云ひ、最前からの詞の端、正しくわれも紛れ者。
巳藏　まづそれよりはうぬが俗稱、怪しい浪人、觀念。

ト側にある鉈にて、正頼に打つてかゝる。この立廻りに正頼、懐中より以前の髑髏を落す。お爪取つて透して見る。この時火屋の明り、辻堂の白壁へ映る。どろ〳〵になり、この髑髏の影、七ツに見える仕懸け。三人きつとなつて

つめ　髑髏の影の七ツに映るは

巳蔵　これぞ正しく

ト巳蔵髑髏へ手を懸けるを、正頼隔てゝ取りにかゝる。

正頼　映るは火屋の無常の煙り、

つめ　これこそ先年亡びたる將門の髑髏。

ト髑髏を取つて行かうとするを、正頼やるまいと引留める立廻り。巳蔵支へて

巳蔵　さてはおのれは良門の

トかゝる。これにて時の鐘、風の音烈しく、お爪、正頼、巳蔵、金冠白衣、一卷、髑髏をかせに三人立廻り。尤も葛籠の上に紫の裝束と巳蔵が布子載せてあり。三人立廻りのはずみに、一卷を上手辻堂の破風の崩れへ投げ込み、白衣金冠は舞臺よき所へ捨て置き、お爪は髑髏を持つた儘、柳の枝へ踏みかけ、破風へかゝる。正頼巳蔵は立廻りながら堂の内へ入り、巳蔵は鉦を打つて居る坊主を引退け、堂の内より天井へ上る思ひ入れ。正頼刀を抜き、巳蔵を切りつける。これにてタヂ〳〵として

兩人とも又舞臺へ戻り、立廻り。このうちお爪は、柳より破風の邊りへ這ひ上がり、崩れの方へ立寄る時、崩れより髑髏を持つたる右の腕引込み、太刀音して腕を切り落す體。お爪は上より落ちて苦しむ。この時件の髑髏は下の方叢へ落ちろ。このうち巳藏、正賴も手を負うて三人とも倒れる。このとたんに下の蘆間より小鳥の聲して雀大分たつ。これをきつかけに誂への凄き合ひ方になり、破風を蹴破り、相馬の六郎公連、黑麻衣を脱ぎかけ、着込みの形にて、一卷を持ち、拔刀にて、出かゝる。下の方蘆間より押分け、桔梗の前、さらげの黑髮、さゝぎつきの廣袖、紫のしごき付け太刀にて、頭の付きし牛の皮を被り、落ちたる髑髏に目を着けて出かゝり、火屋の明りに心得ぬといふ思ひ入れにて、上の方へ窺ひながら髑髏を拾ふ。このうち公連は柳に傳はり下りて來り、桔梗に目を着け立ちかかり、捨てゝありし金冠白衣を見つけ、兩人これを取らんと立廻り、宜しく、白衣を火屋の内へ投げ込む。このうち始終火屋の燃ゆる明り映る事。兩人よろしく立廻りながら火屋の幕へ手を懸け、引斷つて取る。卜内には鹽薦を懸けたる桶の小口を見せ、後の方にて火燃えて居る。この濡れ薦の上に白衣落ちかゝりある。兩人燃え火の明りにてこの品を見付けちよつと立廻り。このうち桶の箍へ火移り、桶は左右へばら／＼と崩れる。卜内に相馬太郎良門好みの鬘、白の裝束、淺黄の刺貫、惣身所所に火の燃えつきし體。この時正賴、巳藏兩人起上がり、公連へかゝり、立廻りに、巳藏一卷を取り、はずみを打つて火屋の幕を越え、中返りして火屋の中へ投げ込まれる。正賴、公連と立廻り、卜ゞ公連、正賴の刀を取り、切り下げる。巳藏は一卷を持ちたる儘、良門の死骸の上へ倒れる。卜この一卷の德にて、良門蘇生の思ひ入れ。巳藏に執付きたる儘、むつくりと起上がり、よろ／＼と出て、一卷

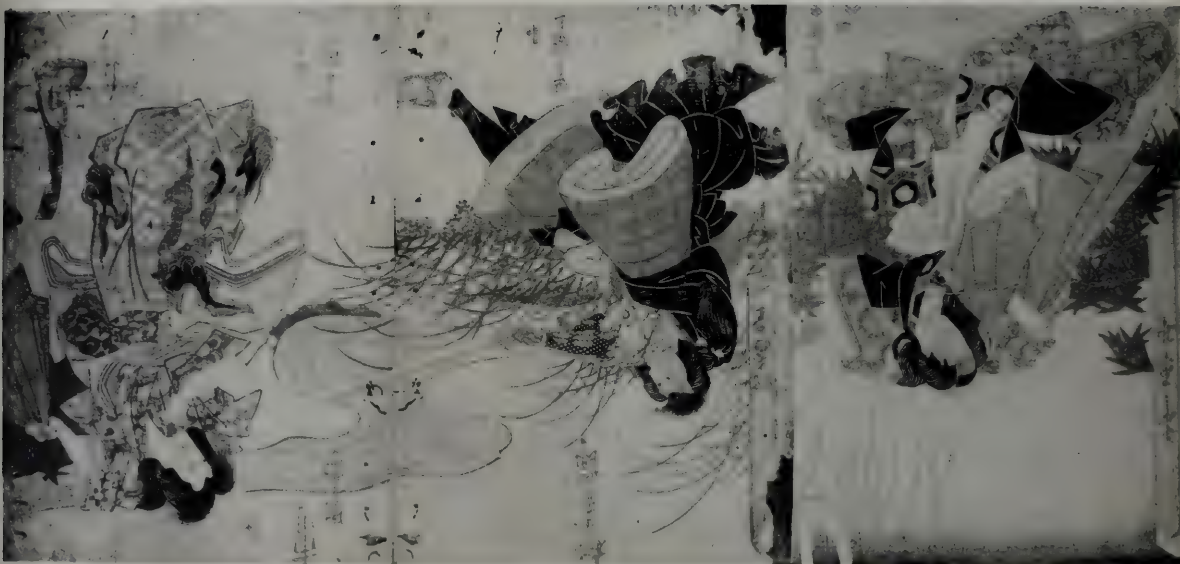
を奪ひ取り、巳藏を突退け、その身もよろ〳〵として、火屋の柱に行きあたり、ホツト息をする。これより又凄き合ひ方に變り、燃火消えて、暗やみの仕組みにて三人立廻り。このうち巳藏、又かゝるを公連、巳藏を斬る。ト、良門白衣を取上げ、公連は髑髏を懷中する。桔梗は一卷と金冠手に渡る。この時ちよつと立廻つてほぐれ、眞中に公連、刀を拔きかけ立ち身。下の方に桔梗、以前の牛を被りて顏を隱す。良門は上の方へ轉げ、息の切れたるこなしにて、水向けの茶碗を見付け、公連へ目をつけながら水を飲む。これをきざみに宜しく拍子

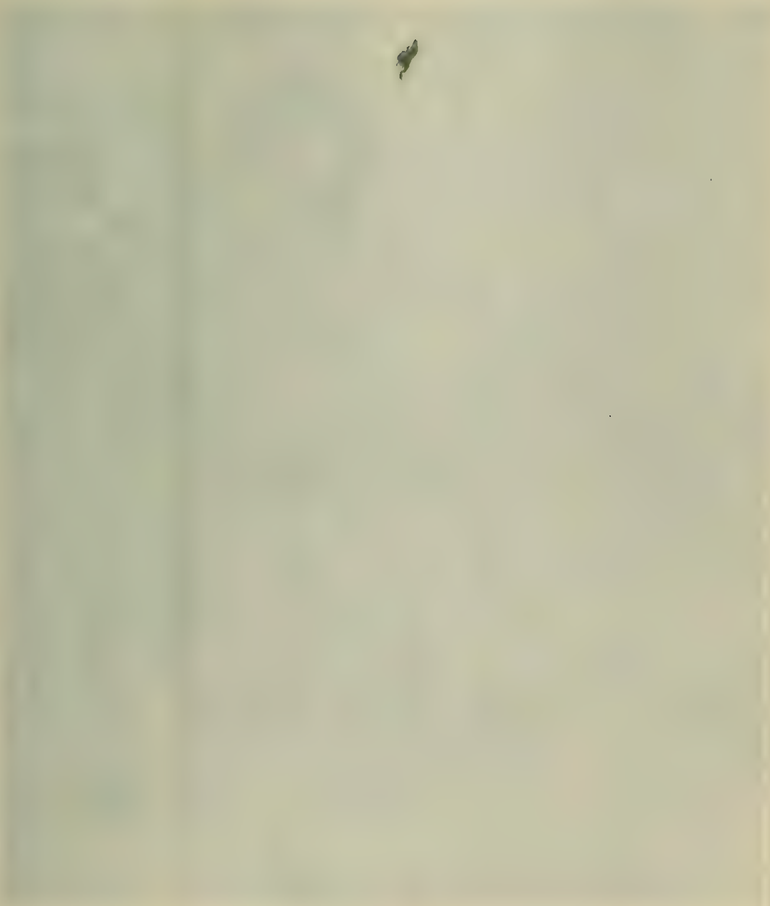
幕

第一番目　四建目　洛陽弘徽殿山御所の場

役名――橋立三郎成春。高峰四郎光景。八瀬權藤兼則。樋爪五郎鬼秀。尾の道甚太。賴光の奴、伊勢海老あかん平。胡蝶太夫の禿、とこよ。坂田公時。卜部季武。足柄山の分身山姥。傾城、胡蝶實ハ葛城山の土蜘蛛。常陸の助平正盛。

本舞臺三間の間、正面誂への閂門、左右の奥築地、上の方に見越しの松、すべて洛陽西山のほとり、弘徽殿山御所のかゝりよろしく、幕の内より成春、上下衣裳、大小の形にて、勢子の形の高峰光景、八瀬の兼則が腕を捻ぢあげゐる。上の方に鬼秀、ぶつ裂羽織、股引、大小、勢子頭の形、下の方に勢子四人、陣笠割竹を持ち、立ちかゝり居る。時の太鼓、早神樂にて幕明く。ト光景、兼則振解き





ちよつと立廻り。

光兼　橋立三郎、腕廻せ。

成春　ヤア、心得ぬいづれも。何ゆゑ狼藉召さるゝ。

光景　慮外緩怠尋常に

兼則　腕廻して繩かゝれ。

成春　イヽヤ、さう聞いては猶更に、仔細とつくり三郎が、胃腑に落ちるそれまでは、逃げぬ、隠れぬ、源家の棟梁、頼光公の拝領たる、弘徽殿のこの山御所。各々の振舞ひ、正盛公の狼藉召さるゝ、仔細を申せ。

鬼秀　何を小癪な。仔細もごさいも、云つたら源家の大きな恥。弘徽殿の山御所、頼光拝領あつたにもせよ、今に於て修覆も加へず、家移りの、沙汰も無いのは、臆病卑怯、大方世間の噂の通り、化物屋敷に聞怯ぢして

光景　捨てゝ置くのが其方の越度、幸ひ今日は正盛公、この西山へ鷹狩りの

兼則　序に仔細を見屆けて、言上せよとの仰せを受け

鬼秀　罷り向つた我れ〳〵へ、妨げひろがば繩打つて

光景　正盛公の御前へ引く。

兼則　但しは今の手向ひを、御免なさいと三拜して

鬼秀　この山御所を正盛公へ

三人　渡して疾く〳〵立歸れ。

成春　成る程、仔細をよく聞けば、尤もさうで腹の皮、事をかしくも妖怪に、恐るゝ源家の我れ〳〵とは、うぬらが心に引較べ、當推量の狼藉無法。脛一寸でもこの御所へ、踏んごませる事罷りならぬ。

鬼秀　イケ面倒な。構はず御所へ踏んごめ。

皆々　合點だ。ソレ。

ト立ちかゝり、門内へ行かうとする。成春支へる立廻り。てんつゝになり、花道より駕籠舁二人、四つ手駕籠を舁ぎ、出て來て、鬼秀に行きあたる。皆々思ひ入れ。

駕籠　ハイ、御免なされませ。

光景　御免なさいぢやァ赦されない。

兼則　うぬ等、どこからうしやがつた。

駕一　ハイ〳〵、どこからと申して私しらは、九條の里の廓から
鬼秀　なんだ廓から。そして爰をどこだと思つてうしやァがつた。
駕二　どこの爰のはござりませぬ。賴光様の御拜領の、お屋敷へ參るのでござります。
成春　待て。其方達は合點の行かぬ、九條の里よりこの御所へ。して、その駕籠は何者ぢや。
駕弍　ハイ、それはどうも
鬼秀　云はれぬと吐かしやァ猶怪しい。うぬ等を赦して置かれぬわえ。
駕一　飛んだ災難だ、ナァ棒組。
駕二　構ふ事はねえ。逃げろ〳〵。
ト駕籠を置いて下座へ入る。
鬼秀　ヤイ、待ちやァがれ……併しハヤ、何うで彼奴等は雇はれ者、合點の行かぬは駕籠の內。
成春　イヤ、それとても御兩所へ、志しある駕籠の內、詮議させては源家の瑕瑾。
鬼秀　また邪魔をするか。アヽ聞えた。さては成春、駕籠の內のは、おぬしが九條の馴染だな。
成春　イヤサ、痴けた放埓惰弱。成春、左樣な覺えは無い。
光兼　そんなら駕籠の內は何だ。

成春　イヤサそれは
鬼秀　おぬしが馴染か。
成春　サア
皆々　サア〳〵、どうだ。
成春　ハテ、時も時、折も折と、源家を計る、こりや正しく讒者の工みの罠だわえ。
　　トぢつと思案の思ひ入れ。この時駕籠の内にて
とこ　大江山生野の道は遠けれど。
鬼秀　ヤヽなんと。いとたほやかなる色の初音。
兼光　ほんに可愛らしい、どこであらう。
とこ　アイ、爰ぢやわいなア、
　　ト摺り鉦入りの唄になり、駕籠の内より禿とこよ、さゝぎ付の振り袖にて、文を持ち、ツイと出る。
　　皆々惘り思ひ入れ。
鬼秀　イヤア、さてこそ廓の太夫の模様。そりやさうだが、今の歌は。
とこ　アイ、わたしが駕籠の内で、歌骨牌を取る夢を見たわいなア。

兼光　ハテ、しほらしい里雀。
鬼秀　それで聞えた大江山
成春　生野の道は遠けれど
　　ト向う揚幕の内にて
正盛　まだ文も見ぬ天の橋立。
　　ト三味線入りのこだまの合ひ方になり、花道より正盛、鷹野の形、付太刀草鞋、騎射笠、跡より尾の道兵太、ぶつ裂羽織、鷹を据ゑ、勢子二人、割り竹を持ち、附いて出て來る。
　尾の道兵太、あれを見よ。獲物の合圖と思ひの外、正盛が鷹野の道すがら、生野の道の今の吟聲。
鬼秀　この小びつちよめが囀りました。
正盛　太夫ごは西の禿にならひけり、悧發に見ゆる里の禿。
兵太　とんた所へ文使ひ、怪しい奴でござりまする。
正盛　これも一興。夜ずへの鷹、くれるまで休息。イザ、參れ。
兵太　まづお越し遊ばされませう。
　　ト矢張り右の鳴り物にて、正盛先に兵太、勢子附いて本舞臺へ來る。皆々下の方へ入れ代ろ。成春、

前へ出て

成春　存じ寄らざる正盛公、主人頼光拜領せし、弘徽殿の山御所、御家來を以て何ゆゑの狼藉、尾籠の御所存はな。

正盛　默れ成春。狼藉などとは覺えなき。この正盛へ難題。頼光の威勢を拒むに似て、甚だ以て心外千萬。それはともあれ、合點の行かぬ廓の小もの。コリヤ、禿、そちや何者に頼まれて、この所へ參つたのぢや。

とこ　アイ、わたしは茨木屋の太夫さん、胡蝶さんの所から、季武さんの所へ行くのぢやぞえ。

正盛　ナニ、季武への文使ひ。して、その文は

ト取らうとする。成春、ちやつと、とこよを下手へ廻し

成春　イヽヤ、年端も行かぬ禿、季武への文にも致せ、正盛公へは恐れある、里の女の痴れ言。

正盛　オヽ、見せられまい。源家の武士はそれともに、九條通ひの放埒惰弱。コリヤ、禿、胡蝶といふは金時が、深間と聞いたが、誠さうか。

とよ　アイ、わたしが太夫さんは

ト云はうとするを

成春　イヤコレ……何を問はれうとも、東西分かぬしどなき小兒。物数云ふな。控へて居れ。

トとこよが袖を牽いて留める。

正盛　イヤ、子供とて、東西を存ぜぬでもない。コリヤ、見よ、この鳥は何と云ふ。

ト鷹を手に据ゑて見せる。

とこ　その鳥はな

ト正盛が側へ行く。正盛わざと緒を緩める。これにて鷹それて、上の見越しの松へとまる。皆々見て驚き

兵鬼　ヤヽ大事のあの鷹。

兼光　逃がした禿め、動くまいぞ。

トとこよへかゝる。成春、立廻りにて左右へ突退け、とこよを圍ひ、きつとなつて

成春　ハテ、仰々しい。小兒の過り。手籠めに致して何とする。

兵太　知れた事、縛り首……支へ立てする橋立三郎。

兼光　われも同類、覺悟しろ。

ト皆々立ちかゝる。

成春　はし鷹の、野守の鏡得てしかな……たとへ外れたる鷹なりとも、拳へ戻る一工夫、思案もあらん、先づお待ちやれ。

正盛　梢にまとふ足草を、射きらば拳へ戻るの道理。橋立三郎、一手いたせ。

成春　アノ拙者めに、晴れの弓矢。

兵太　手覺えあらば、三郎成春。

正盛　急いで一手仕れ。

成春　畏つてござりまする。

ト鼓の合ひ方になり、成春身拵へよろしく、兵太が持ちたる弓矢を番ひ、花道の角まで來て、宜しくあつて

矢頃も幸ひ狙ひの的……エイ。

ト切つて放す。鷹は外れて日覆へ舞ひあがる。

兵鬼　ヤアヽヽ、又もや鷹が外れたぞよ。

兼光　重ねヾヽの身の越度。

鬼秀　橋立三郎、覺悟いたせ。

成春　ムウ、すりや拙者が不覺ゆゑ

皆々　禿めともに縛り首。

正盛　ヤレ、立騷ぐな。正盛に耻辱與へし二人の奴等、並べて置いて身が手討ち、有り難いと思つてそこへ直れ。

成春　是非に及ばぬ工みの罠、拙者が越度は悔んで歸らず、去りながら、幼き者まで御成敗とは、そりやあんまり。

正盛　助けて欲しくば廓の文、四天王に耻かゝす、その痴話文、爰へ出せ。

とこ　怖い殿さん、そんならこの文上げようかえ。

ト文を出さうとする。成春取つて寸々に引裂き

成春　とても遁れぬ非道の工み、怖い事はない。不覺は取るな。身が側に控へて居れ。（トとこよをチッと引寄せ）イザ、すつぱりと正盛公。

正盛　祕藏の鷹を失ひたる、うぬらが科は自業自得。今が最期だ。成春、觀念。

ト拔きかける。向う揚幕の内にて

あか　待てエヽ。

皆々　なんと。
正盛　ハテ心得ぬ、風の猲か向うづら、揚幕きつて一聲は
鬼秀　左樣でござります。膽にこたへるやんちやん聲。
兵太　どうやらおれが、ぼんちやんに似たやうな聲。
正盛　何にもせよ、正盛へ恥辱を與へし二人の奴ら。
鬼秀　成敗なすを
皆々　待てとは
あか　待ちやァがれエヽ。
ト大太鼓入りの鳴り物にて、花道より、伊勢海老あかん平、奴の拵へ、角鍔の一本差し、誂への持ち草履を摑み、見事に振つて出て、花道に住ふ。
皆々　ドツコイ。
正盛　待て〳〵。見れば蟲眼鏡で見分ける程な芥子奴。
鬼秀　そも先づうぬは
皆々　何奴だエヽ。

ト爰にてあかん平、つられあつて納まる。

皆々　ドツコイ。

鬼秀　サア、いづれもや、なんぼ小くても山椒は山椒、顔見世の吉例は遁されまい。如何計らひませうな。

正盛　さうだ、摘んで引ッ立てろ。

鬼秀　ソリヤ、引ッ立てだ〳〵。

兵太　ア丶コレ、そんなに騒がつしやるな。なんぼ吉例だと云つて、貴様もおれも、あのお子を立てヤイ……と云つたら、それこそ名苗字に係はるぞよ。

鬼秀　さうサ〳〵、所詮おいらはねぶ一てう。かけ構ひの無い權藏、四郎、見事な手柄が、見たい〳〵。

兼則　エ丶、手輕く云ふな。おいらだと云つて、手柄の程は、なう、光景。

光景　それこそ皆様がよう御存じ。行くは無駄だが、せう事がない。

兼則　二人一座では心細いが、サア、歩びやれ。

光兼　氣を落さずとも、ドリヤ〳〵〳〵

ト兩人よろしく花道へ來て

奴めエ丶。

あか　なんだ。

ト きつと見る。

光兼　アイ〳〵、お願ひでござりまする。

ト怖々下に居て

どうぞモシ、少つとばかり、あつちの方へ。

あか　否だ。

光景　御尤もでござりまする。そこが大通、通り者の高麗さん、どうしてわたしらがお前を引立てとは ほんの役目のせう事なし。

兼則　もしえ、高麗屋の若旦那、お前を悪くして御覧じまし、親方よりは、先づおんばさんに呵られます。

あか　やかましいわえ。八里半でも喰やアがれ。

光景　そりや御褒美の、大ふかし〳〵。

ト本舞臺へ來る。

鬼秀　エヽ、らつちもねえ。

兼則　それだと云つて、ほんの祝儀ばかり。

光則 ほんに、お父さんは嬉しからう。

兼光 イヨ高麗屋。

あか 上手を吐かすな。今そこへ行つて、あたゝを据ゑるぞ。

皆々 イヤア、。

あか 三升艾を捻つて置け。

皆々 イヤア、。

あか 晝行燈の用意をしろ。

皆々 イヤア、。

あか さらば御こしを押立てようか。

ト矢張り大太鼓の鳴り物。皆々「アリヤ〳〵」の懸け聲にて、あかん平、本舞臺へ振つて來る。皆々を千鳥に分け、正盛を突廻し、成春とこよを圍ひ、きつと見得。

皆々 ドツコイ。

成春 好い所へ伊勢海老あかん平。

とこ 好う來て下さんしたなア。

あか　わしが來るからは、千石船だと思つて、落付きなせえ〳〵、

正盛　正盛が前とも憚らず、慮外緩怠不屆き者。

あか　何も云はずにお二人は、おれが貰ひました。

正盛　何と吐かす。

あか　手へ〳〵します、おいらにおくれ。

正盛　いかさまなア。物數云ふも互ひに無駄。せう事が無い、助けて遣らう。

皆々　アヽモシ、それでは

正盛　ハテ、小さくても長崎針、怪我の本だ、流してしまへ。

あか　そんならこの儘お二人様を

成春　あかん平出かした。廓の禿もろともに

とこ　嬉しやお供いたしませう。

鬼秀　オット吉例だ。めでたく高麗さん、〆めやせう。

皆々　シャン〳〵〳〵。

ト敵役、立役皆々手を打つ。

正盛　おきやァがれ……エヽコレ、折角頼光に、けちを付けようとした仕事を、赤奴め。

あか　云ひ分があるか。

皆々　なにサ、お前。

あか　おとなしいおぢいだ。サア、行きませう。

ト成春先に、とこよが手を引き、あかん平附いて花道へかゝる。

正盛　とは云ふものゝ、この儘に。

鬼秀　あかん平を、ソリヤ。

勢子　やらぬワ。

トかゝる。あかん平、抜討ちに六人を一緒に切る。切り首を出し、皆々ぶつかぶりにて倒れる。

皆々　イヤア。

ト皆々跡退りして思ひ入れ。

あか　弱蟲めら。さらば。

ト抜刀を擔ぎ、きつと見得、片シヤギリになり、成春先に、とこよ、花道へ入る。舞臺の人數引張りよろしく

幕

幕の外あかん平、刀を擔ぎ、見事に振つて入る。跡シヤギリ。

原作では、この次が引返しで、「古御所奥殿の場」になり、淨璃璃の一場があるのだが、どうした譯かこの場だけ、脚本が傳はつてゐないので、殘念乍ら省かねばならぬ。只淨瑠璃の詞章は存してゐるから、これに依つて梗概を書いて置く。

淨瑠璃名題「蜘蛛のいとし殿御荒事のかはいの者やな巍嵬宿直噺」

同　常太夫
富本豐前椽
同　駒太夫
三絃　鳥羽屋里長
同　里夕

〽さるほどに、源家のいさほし世に高く、下し賜はる古御所を、今宵宿直の兩勇士、須海の四天にたとへたる、いかもの造りたゞならぬ、多聞持國もかくばかり、降魔のねむりぞゆたかなる。

この置浄瑠璃が切れると、卜部季武と、坂田公時の兩人が、碁をかこんでゐる見得でセリ上がる。

〽絲によるものならなくに我が戀は、心細くも面影の、庭にしよんぼり夜の雨。

これで花道へ傾城胡蝶がセリ上がつて、振りになる。

〽濡れは苦海の道芝や、せかれて逢ひにきた時雨、惚れた殿御は丸木の弓よ、強い自慢の武士も、心の外の仇まくら、怨みながらも又いとしさに、勇ましい氣を慕ひ來て、おぼつか涙わくかせも、もつれて三輪の小田卷を、いろの仲立ち戀の罠、可愛い男に身上がりも、ぬけて廓の習ひかや。

胡蝶は花道から舞臺へ來て二人の前に立ち、セリフがあつて、色めかしい所作事になる。

〽里の便りがうるさうて、物云へぬのが今更に、文の傳手さへもどかしく、氣強い男の若い顏、見たいが病ひ逢ひたいが、身まゝにならぬ荒武者も、ひぢかは腕の力瘤、撫でゝつぶやく强者の、玉の盃底なき風情、見る目をかしく、へゝ、へゝ、ハゝゝゝゝ、碁盤のこめもあげはまの、のびた色目をおさへてはねて、口舌の駄目も岡目から、助言する氣ぢやないけれど、四つ目殺しの初心さに、斯樣申す才藏なんぞは、お客樣の赤い顏、おん女郎樣の白い手で、しめたらほんにおめいかう、小春の餅ぢやと興じける。〽夜半廻りと戯れて

滅多に踏みかへ濱村屋、酒なら相手に成田屋の、色の用心身の用心、ちよつと廻つて高麗屋、氣の通り筋割り竹の、音に紛らし走りゆく。

三人が種々踊つた末、季武は二人を殘して入つてしまふ。これは幸四郎が二役山姥に替る爲である。

〽逢うて嬉しい心の願ひ、嘘が誠になまなさけ、それが實やら浮氣やら、知らで迷ひの明暮れに、女夫に成田の不動さん、そつと頼んで鹽斷ち茶斷ち、愚痴のありたけしつくした、願ひも直な心から、神の利生であろかいなア、げに傾城とて里に住む、女は常の女やら、元より藝者女郎には、ちつともくひあひ仲の町〽胸ぐら取つてコレ申し、なんぢやいなアの睦言は、アヽつがもないではないかいな〽春は揚屋の櫻狩り、居ながら花に浮れ酒、夏の短夜寢もやらで、曉がたの時鳥、ないて手管の別れ酒、秋に月見の大もん日、客ある方へと迎ひ酒、土手の霜ふむ猪牙で押す、四つ手で走る大門口、邪正一如と見る時は、色即是空そのまゝに、煩惱あれば菩提あり、禿はみどり花は紅白遣り手が慾も、酒に浮るゝ色の世の中。

胡蝶は公時を色仕かけでとろかさうとしたが、直に正體を見破られてしまふ。胡蝶は葛城山の土蜘蛛と姿を現はす。前幕に正盛に刺された蜘蛛の妻蜘蛛なのである。公時はその妖術に悶絶し、蜘蛛は姿を消す。

〽迷はじと思ふ心のせきかねて、千筋百筋亂れ緒の、いとゞ亂るゝ胸苦しさに、いとしなつかし小夜衣、しがらみかゝる物思ひ 〽我が背子が來べき宵なりさゝがにの、蜘蛛の振舞ひかねて知る、葛城山に年を經し、世にも名をしる女郎蜘蛛。

爰へ山姥の姿が現はれて、公時を呼び起す。

〽起きよ公時、無明の眠り 〽あらうつゝなの若者や、目さませ起きよ、千筋の絲に、からまき引くやあをち風、屛風倒しに震動して、異形の姿げんぜんたり。

公時は氣が附いて、母の姿なるに驚く。

〽いつとう空しく谷の聲、それにはあらぬ山御所の、山また山や山姥が、恩愛千筋にひかれくる、烏帽子寶よほんそ子の、男なりとてます鏡、見かはす親子笑の眉、昔の乳房したふらん。

爰で山姥は足柄山の時代を思ひ出した體で、公時と二人、振りになる。

〽嬉し昔の顏見れば、岩根枕にいと〳〵抱いて、添へ乳したこと思ひ出す、さつてもさても和御寮は、誰れ人の子なれば、よう似た〳〵在所のいちやに、赤い〳〵花もみぢ、折りてかざして谷峯越えて、獸相手にかち角力 〽鬼ならござれ夜叉ござれ、天狗は元より寢酒の肴、

うぶ毛むしつてぐい〳〵、かゝさんあからも一むかし、今はきん〳〵きつとした、萬倍知行のお侍ひ、行儀がよいではないかいなア。

山姥は公時に別れる愁ひの振り。

〽夫の形見と見るにつけ、其方の大事さ大切さ、わけてお主は清和の流れ、源きよき御大將、頼光公へ御奉公、勤むるうちの明暮れも、武藝をはげみ立身せよ 〽山姥の子と笑はれな 〽其方の影身に附き添うて、猶行く末を守るべし、今ぞ名殘のかへる山、別れの袖もいぢらしき。

山姥は名殘を惜しんで消える。そこへ土蜘蛛が再び現はれ、折柄忍び込んだ平正盛に、夫蜘蛛の仇とかゝり、立廻りになる。

〽報いは目前蟲けらすら、夫の怨みを晴らさんため 〽神變自在の通力に、御殿しきりに鳴動し、うろたへ逃げるうしろ髪、正盛やらぬと土蜘蛛の、又も千筋のいとすごき、朧の姿怪しけれ。

正盛は源家の仇といふので、公時も正盛に切つてかゝる。

〽おろかやかよはき蜘蛛の身に、及ばぬ夫の仇がたき、くも手に物は思へども、力なみだの

むら時雨、山めぐりする山姥の、業通こゝにかびなして、のがれがたなく蜘蛛の圍に、かけまく武勇の力にて、今ぞ本望嬉しやなア。

山姥の靈が再び現はれて蜘蛛に加勢し、首尾よく正盛を斃す。

〽一陽開く智勇の花、歌舞伎の春こそめでたけれ。

山姥、土蜘蛛、公時の三人、引張りの見得で幕になる。

第一番目 五建目

洛陽戻橋廣小路の場
極樂寺堤の場

役名――童子長屋の店頭、鐵門鬼兵衛實ハ相馬六郎公連。反魂丹賣り、長井長助實ハ二の瀬源六近忠。三上太郎政安。雪駄直し、鬼松。姉川兵藤時澄。板元手代、文藏。堤彌惣俊次。山邊四郎景光。同宿、叡山の雷雲。受太刀、萬吉。あなごの庄司娘、千代姫。山伏、黑川の見珍。佐倉瀧夜叉宗任。滿仲の一子、美女御前。市原野の菰垂れ安實ハ相馬良門。

本舞臺、三間の間、向う淺黃幕、葭簀張りの水茶屋、軒に鱗佐久良と書きし長提灯、茶屋の道具一式、床几二三脚直し、この傍に居合拔きの藥見世、大太刀を餝り、その外道具一式並べ、誂への通

り。幕の内より長井長助、野袴、居合抜きの形にて、長き刀を差し、萬吉、受太刀にて、齒磨の箱を持ち、立ちかゝつて居る。上の方に橋の袂を見せ、開帳の丸提灯、同建札など立てあり。橋の際に雪駄直し鬼松。茶屋女おみれ、紅絹の切わりに入れたる笈摺と見えるやうな袖なしを着て、若い衆の仕出し大勢へ茶を汲んで居る。吉五郎、武松、大勢に附いて居る。すべて洛陽戻り橋廣小路の體。辻打ちにて幕明く。

ト仕出し、東西より來て、舞臺の左右に別れ、居合を拔くを見て居る。

萬吉　齒磨反魂丹御用なら、この間にお求めなされませう。
仕出　おれに齒磨を下さい。
同　此方は反魂丹を下せえ。
長助　コリヤ、うか〳〵致すな、此方でも御用と仰しやる。
萬吉　ハイヤイ、齒磨、反魂丹お召しなさい。
長助　コリヤ〳〵、餘り其やうに押賣りを致すな。賣り過ぎては歸りに錢が重くて迷惑いたす。
萬吉　なか〳〵左樣でござイ。
長助　さてこれよりお約束の通り、一太刀、拔いてお目にかける。

萬吉　さよでござイ。

長助　その前にちよつと御披露申さねばならぬは、私し家傳の齒藥、第一動ぐ齒を据ゑ、齲齒、口熱、
　惡い齒は拔いて上げる。

萬吉　さよでござイ。

長助　長い事は御退屈ぢや。これより一腰拔いてお目に懸ける。(ト身拵へして、太刀を拔いて)これが卽ち鞍馬相傳、八そうの構へ。横に拂ふが車切り、肱懸、ひら首、向う袈裟、イヤハア。

ト居合を拔く事よろしくあつて納まる。

大勢　イヤア、奇妙だ〳〵。

ト辻打ちになり、仕出し皆々下座へ入る。入れ違ひ向うへ入る。

みね　モシ〳〵、長助さん、お茶でもお上がりなされませぬか。

萬吉　モシ親方、折角姐さんの御馳走、お前もさぞお草臥れでござりませう。

長助　なか〳〵左樣でござイ。

萬吉　モシ〳〵、それはわしが申すのでござります。

長助　おきやアがれ。

吉五　おいらもこの間に一服しようか。
武松　ヲイ、職人衆、慾張らずと煙草にしなさい。
鬼松　それがよからう〳〵。

ト辻打ちになり、皆々捨ぜりふにて煙草をのむ。このうち向うより番附賣り文藏出る。跡より雷雲、なまづの役、旅僧の拵へにて、笠を持ち出で來る。

文藏　玉川やぐら下番附〳〵。
雷雲　オイ、番附屋、一枚下さい。
文藏　ハイ〳〵。

ト一枚やる。雷雲取つて見て

雷雲　こいつは面白さうだわい。團十郎に幸四郎、半四郎、路考、築地も爰に居るな。こりやアおかたじけ。
文藏　モシ〳〵、錢はえ。
雷雲　これは一枚てんぼうサ。
文藏　ハテ、悪い顔ね……玉川やぐら下番附〳〵。

ト兩人本舞臺へ來る。雷雲こなしあつて

雷雲　姐え。茶を一ツ下さい。

みね　ハイ〳〵。

ト雷雲へ茶を出す。

長助　どうだ、番附屋さん、芝居は大分評判が好いね。

萬吉　モシ、どこの芝居でござります。

文藏　ハイ、葺屋町でござります。

吉五　今度玉川彦十郎といふ芝居が出來たぢやァねえか。

長助　左樣でござります、殊の外大繁昌サ。

萬吉　旦那、わしも葺屋町なら見物に參りたうござります。

長助　この頃に一日伴れて行かう。

萬吉　それは有り難うござります。

長助　併し其やうに芝居の繁昌するといふも、下總の相馬も亡び、丹波の酒呑童子も退治られ、世の中が治まつて、めでたいからの事サ。

鬼松　それはさうと、伊賀壽太郎とかいふ者が、大江山の千丈ヶ嶽に籠り居るとの噂。
吉五　そこで賴光樣が、四天王の衆を討手に差向けられたゆゑ
雷雲　大江山が伊賀壽と源氏の軍勢で、武士の入込みになつたゆゑ、商人、職人の潤ひになるさうだな。
長助　左樣サ、そこで今ぢやァ大江山へ、切り見世の商賣屋が出來て、大抵繁昌な事ではござりませぬ。
雷雲　そいつは素見に行かずばなるまい。
皆々　イヤ、飛んだ和尙樣だ。ハヽヽ。
　　ト笑ふ。この時寺の鐘鳴る。
長助　あの鐘は晝の回向。
みね　私しはちよつと參詣して參ります。長助さん、見世をお賴み申します。
吉五　おいらも地內で拤いで來よう。
長助　そんならおむす。
皆々　サア、來なせえ。
　　ト辻打ちになり、皆々先におみね附いて、下座へ入る。長助、雷雲殘り
長助　時に御出家樣は、どれからどれへお通りなされまする。

雷雲　どれといふ當ても無いが、ちつと金儲けの筋があつて來たのサ。
長助　金儲けと聞いては耳寄りなお話し。して、その仔細は。
雷雲　先達て仲光は、我が子の幸壽を切つて美女丸を助け、叡山へ登し置いた事、伊賀壽太郎はのかに聞き、正盛より贈り越したる蜘蛛切丸へ、源氏の血筋の生血を濺ぎかける時は、いよ〳〵源家調伏疑ひなしとあるゆゑ、美女丸を引ッ捕へ、伊賀壽どのへ伴れて行けば、褒美の金はずつしりだが、譜代の家來堤の彌惣俊次が計ひにて、美女丸を女順禮に姿をやつし、行方知れずと聞き及ぶ。もしこの邊へ來たならば、引ッ捕へて褒美の金にする氣はないか。どうだ〳〵。
長助　そいつは面白い話しだが、お前はその美女丸とやらの顏を知つてござりますか。
雷雲　愚僧は猪の熊雷雲といふ、叡山の所化なれども、美女丸が顏はろく〳〵に知らぬ。
長助　ようござります。諸人の入り込むこの都。
雷雲　怪しい女順禮と
長助　見たならそれと引ッ捕へ
雷雲　身元を糺したその上で
長助　もし美女丸である時は

雷雲　大金儲けの
長助　魂膽話しは
雷雲　地內の茶屋で
長助　御出家樣
雷雲　商人、來やれ

ト辻打ちになり、雷雲、長助下座へ入る。右の鳴り物にて、向うより娘千代姬、振り袖やつし、萠黃色の誂への帶にて出る。跡より美女御前、順禮の形、堤の彌惣、白髮鬘、同く順禮にて、革籠を背負ひ出で來り

美女　モシ〳〵、お女中樣、向うが大分賑かでござりますが、ありや何でござります。
千代　あれは日高の觀音樣、今度戾橋でのお開帳でござりますわいなア。
俊次　順禮に觀音樣は、昆布に油揚、葱に鮪、爰へ來たのも御緣のあるのぢや、お詣り申して行かうではないか。
美女　それがようござんせう。そんなら父さん。
千代　私しもあれまで御一緒に。

兩人　サア、お出でなされませ。

ト三人本舞臺へ來る。

千代　お前さん方も、爰で御休息なされませ。

兩人　左様なら、御報謝にあづかりませう。

ト床几に腰を掛ける。

千代　見ますればお若い女中さん、順禮なさるは、定めてお配偶にお別れなされたゆゑ、その御菩提といふ様な事でござんせうな。

美女　ハイ、左様でござります。わたしも思ふ夫に死別れましたゆゑ、尼法師とは存じましたれども、父さんの云はしやんすには、其やうに思ふは、尤もなれど、去る者は日々に疎しとやらで、又その内には、今の歎きも遠ざかり、二度の嫁入りもある習ひと申されまするゆゑ

俊次　それまでの憂さを忘るゝ爲に、親子連れにて都見物がてら、順禮するのでござります。

千代　それはお奇特な事でござんす。私も心願がござりまして、此やうに外を内と歩きますわいな。

美女　して、お前様は、この御近所のお方でござんすかえ。

千代　ハイ、私しはこのあたりに住む村鄉士にて、その昔々この所に、あなごの庄司といふ者あり、

その娘の千代姫と、申す者でござんすわいなア。

美女　左様ならお前さんは、この開帳へは日參でござりませうなア。

千代　イエ〳〵、丁度お前樣のお話しの通り、私しも思ふ夫ゆゑ、此やうに毎日々々、ぴよい、ぴよいと飛び歩きますわいなア。

俊次　ハヽア、お前は大事の旦那どのに、死別れたと申すやうな事かな。

千代　イエ〳〵、私しは生別れ。

兩人　そりや又、どういふ譯で。

千代　サア、お話し申すも恥かしながら、いつぞや泊めた熊野の道者、たわむれがツイ誠となつて、夜明けて見れば、いとしらしい殿御の顏。又逢ふまでの印にと、下さんした佛餉袋、持歸りて開き見れば、黑川のけんちんといふ法印さん。それから尋ね逢ひ、一度が二度の度重なり、今ではお腹も只ならぬに、その男めもこの頃は、餘處におたのが出來たやら、久しう顏も見せ居らぬ。今でも逢うたらこの怨み、云はうと尋ねて歩きます。わたしが心の切なさを、推量して下さりませ…ほんにさうぢや。

ト、ツイと立つて下座へ入る。俊次この話に聞き惚れたる思ひ入れにて、床几ひつくりかへり、どう

となりたる儘、跡見送り居る。美女丸こなしあつて

美女　アノマア、女中さんとした事が、ぬしの云はしやんす事ばかり云うて、ほんにすげないお方では
あるぞ。

俊次　イヤハヤ、呆れたものだ。思ひ入れ人に受けさせて

美女　ツイと立つて行かしやんしたは

俊次　色氣違ひと見ゆるわえ。ハヽヽヽ。

ト時の鐘になり、あたりへこなしあつて

美女　堤彌惣俊次。

俊次　美女丸樣。

美女　コレ……人目憚る今の身の上、一旦仲光が忠義に依つて、我が子の幸壽を身代りとなし

俊次　君危きを遁れ給ふゆゑ、叡山へ登御あつて、御出家を勸め參らす內、正盛早くもこの儀を察し、
これへ來かゝる道すがらも、叡山法師、君の追手と巷の風聞。

美女　然らば猶豫は却つて禍ひ。

俊次　一先づ都を、我が君樣。

美女　俊次参れ。

ト行かうとする。下座より雷雲、出かゝり居て

雷雲　あれにて様子は残らず聞いた。美女丸主従、引ッ縛つて褒美の金。うしやアがれ。

美女　全く以て私しは

俊次　左様な者ではござりませぬ。

雷雲　こま言云はずと、うしやアがれ。

ト辻打ちになり、両人を引ッ立てようとする所へ、下座より吉五郎、武松、文藏と喧嘩するを、長助おみね支へ、わや〳〵云うて出て來り、皆々ごつちやになり、雷雲をこづき廻す。雷雲うろ〳〵して

雷雲　コリヤ〳〵、どうするのだ〳〵。

文藏　どうするも凄まじい。合點しねえぞ〳〵。

皆々　ハテマア、料簡さつしやりまし。

吉五　いやだ〳〵。野郎め、どうするか見やアがれ。

ト在合ふ火入れを取つて、文藏の頭へ打付ける。これにて文藏の頭、白髪親仁のやうになる。此うち長助、美女、俊次に囁く。両人心得、小隠れする、雷雲これを知らず

雷雲　邪魔をせずと、退きやァがれ。

ト皆々を突退け、おみれ、文藏を、美女俊次と心得、兩人を引付け

よしない事で詮議の怠り。美女丸もろとも、親仁め、うせう。

文藏　おらァ親仁ぢやァねえ。若い者だ、若い者だ。

雷雲　何を此奴が……いづれもござれ。

捕手　心得ました。

ト下座より捕り手四人、ばら／＼と出で

雷雲　二人の奴等を、合點か。

捕手　親仁め、動くな。

文藏　おらァ親仁ぢやァねえ。まだ若いぞ／＼。

雷雲　おとぼね立てるな。

ト雷雲と捕り手、文藏とおみれに猿轡をかけ、縛る。

皆々　こりや、どういふ譯でござります。

雷雲　寄りやァがるな……いづれも、引立て召されい。

捕手　科人、立たう。

ト時の太鼓になり、おみれ、文藏、捕り手四人、雷雲附いて向うへ入る。

吉五　エヽ、いま〳〵しい。あの番附屋の賣溜めを見込み

武松　もたれ懸つて酒にしようと思つたに

鬼松　横間から飛んだ邪魔が入つた。これから行つてお頭に强請らう。

吉武　それがいゝ。サア〳〵、來やれ。

ト辻打ちになり三人下座へ入る。長　助殘り、あたりへ思ひ入れ。此うち向うより、山伏黑川の見珍、白脛引、行衣、袈裟にて、箱を背負ひ、錫　杖を突き出て、直に本舞臺へ來る。長　助、見珍を見て

長助　イヤ、黑川の見珍さん、大分御精が出まするな。

見珍　これは長助さん、いつも御繁昌でおめでたうござります。

長助　モシ、見珍さん、この頃あだな話しを聞きましたぞえ。

見珍　さればサ、聞いて下さい、飛んだ女を孕まして、跡へも先へもゆかねえのサ。

長助　そりや、猪くつた報いだ。仕方がない。女房に持つ氣かえ。

見珍　なにサ、今では臭ひを嗅ぐも否だから、この頃は逃げて歩きます。
長助　ハテ、頼もしい色事だねえ。
見珍　時に長助さん、何ぞ金になる話はないかの。
長助　おつりきな金になる話しと云ふは
ト囁く。
見珍　ヤア、そんなら彼處に、その二人が
長助　モシ、二人の衆、もう出てもようござります。
俊次　ハイ〳〵、畏りました。
美女　どなたかは存じませぬが、危い所を、あなたのお庇を持ちまして、助かりましてござります。
俊次　重ねてお禮申す爲なれば、お名をも聞きたう存じまする。して、あなた様は。
長助　わしは名もない、只の町人、長井長助といふ商人でござります。
美女　左様ならあなたが、長助様でござりまするか。
見珍　ヤア、これが今の話しの賣り物か。ハテ、美しいなア。
美女　最前からの御介抱、有り難う存じます。

長助　お前方、往還をござつたら、又今のやうに追手の者が來るであらう。今度は裏道傳ひで

美女　有り難うは存じまするが、不案内なる私しら二人。

俊次　殊に足弱を連れましたれば

長助　オツト、氣遣ひせまい。その案内は見珍さん、送つてやつて下さるまいか。

見珍　イヤモウ、この姐さんの事なら、送つてやらねえでどうするものか。その代りには、お情の御報謝にあづかりたいが、定めて承知でござらうな。

美女　何の事やら存じませねど、親切らしいあなたの事なりや

見珍　どうともすると云ふ事か。エヽ、畜生め。ちつとも早く、サアお出で。

ト美女丸の手を執り、行かうとする。この前よき時分より、千代姫出かゝり居て、いろ／＼思ひ入れあつて、この中へ割つて入り

千代　モシ、見珍さん。

見珍　ヤ、千代姫か。

千代　お前はなア／＼。ようも／＼、わたしを此やうな身にして、外の女を道端で、お情の御報謝とは胴慾な、そりや聞えませぬ、見珍さん。

見珍　サア、その御報謝も口から出任せ、なか〳〵左樣な事ではない。

千代　たとへどのやうに云はしやんしても、あの女中さんと一緒にやる事は、ならぬ〳〵。

長助　エヽ、面倒な。ちつとも早く、法印どの。

見珍　そんならお女中。

ト美女が手を執り、行かうとする。

千代　イヤお前は

ト寄らうとするを

長助　支へるおのれは

ト千代姫を引付け、居合の襷にて、手早くよき所へ縛り付ける。

三人　これは。

長助　こゝ構はずと、ちつとも早くござりませう。

ト三重になり、見珍、美女が手を執り、俊次附いて、東のおゆみへ入る。長助は下座へ入る。千代姫跡見送りこなしあつて

千代　エヽ、情ない見珍さん、心憎きはあの女、見替へられたが口惜しい。跡追つかけてこの怨みを、

云はうとすれど儘ならぬ、がんじがらみのこの繩目。アレ〳〵、向うへ女中の手を、執り行くは道々痴話か。エヽ妬ましい、早う行きたい。誰ぞこの繩、解いてくれぬかい、ハアヽヤイ。（卜泣き落す。早めのやうな合ひ方になり、こなしあつて）オヽ、それよ〳〵。信仰記の四段目に、足で鼠を描いたるためし、それは雪姫、我れは千代姫、やはかそれには劣るまじ。さりながら、鼠を描く事此方の不得手、せめては犬でも、オヽさうぢや。南無當寺の開帳佛十一面觀世音、力を添へてたび給へ。南無大慈大悲の觀世音、奇妙頂禮々々々〳〵々。

卜祈念の思ひ入れにて、これより足にて犬を描くこなし、よき時分ドロ〳〵と聞えるやうに双盤を入れたる鳴り物になり、下座より縫ぐるみの犬一疋出で、千代姫を見て、無性に吠えつく。

さては觀世音の、我れに力を添へ給ふか。エヽ、有り難やなア。（卜犬はいよ〳〵飛付くゆゑ）エヽ畜生め、おれをくひつくのではない。繩を頼む〳〵……エヽ、物を知らぬ畜生め。おれは狂人ではないぞ。

卜足にて蹴飛すゆゑ、犬は猛つて猶飛びかゝる。そのはずみに思はず繩切れる。千代姫ふつと心付き

有り難や忝や、薩陀の功力にこの繩目、易々解ける上からは、行く先知れし一文渡し、きなかの川に舟なくば、泳ぎ越えても、オヽ、さうぢや。

ト早めたる双盤になり、東の口へ驅けて入る。犬も跡より追ひ驅け入る。てんつゝになり、花道より駕籠舁二人、垂れの下りたる四つ手駕籠を擔ぎ出で、直に本舞臺へ來て下ろし

駕一　旦那、お約束の所まで來ました。モシ、旦那々々。

駕二　ハ、ア、よく寐てござる。もうちつと寐かし申せ。そのうち一杯やつて來よう。

駕一　それがいゝ。サア、來やれ。

ト兩人下座へ入る。向うバタ〳〵になり、乞食一人、錦の袋に入れたる廻文狀を持ち、走り出で、直に本舞臺へ來り

乞食　今日吉日に當るゆゑ、お頭良門公の內裏に於て、關白祝ひのまなびあるにつき、軍勢催促のこの廻文狀。(トあたりへ思ひ入れあつて駕籠を見つけ)外へ洩れぬと思ひの外、駕籠には人の居る樣子、聞き噛られては一大事。

ト駕籠へかゝる。內より廻文を取つて投げのける。又起上がつて

それを。

トかゝる手先を執り、駕籠の內より鐵門鬼兵衞、五分月代、切り見世頭の拵へにて、廻文を啣へ、ずつと出で

鬼兵　錦の模樣は繋ぎ馬。そんならこれが

乞食　南無三それを

　　　トかゝるを見事に投げのけ

鬼兵　オヽ寒い。こいつは雪だわえ。

　　　ト時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、程よく草土手。爰に菰垂れのかまぼこ小屋。うしろ一面の藪疊、卒塔婆をゆひ込み、この中より石塔の上ばかり見せ、日月の付きたる紙の旗、天蓋など小屋の左右に見せ、爰に香取三郎諸早、三上太郎政安、姉川兵藤時澄、山邊四郎景光、佐倉瀧夜叉宗任、印幡軍藤峰盛、いづれも襤褸の上へ裝束の上ばかり引つかけ、冠を被て笏を持ち、小屋の左右に居並び、すべて極樂寺堤を相馬内裏に見立てたる會合の體。この見得、時の鐘、山颪にて道具とまる。

諸早　將門君の御遺詮に依つて、御嫡子たる良門公を、太子と仰ぎ奉り

政安　純友公の御息女は、良門公のお云ひ號けあるに依つて、御印として取替したる一首の短冊。

時澄　末の誓ひと御所持はあれど、この程姫君には、お行くへ知れずと聞き及ぶ。

景光　御在所求めし上は、女官の司といざなはしめ、ぜうねい殿に移し参らせ、北の御所と稱し奉らん。

宗住　君は今より四海の主、武將頼光が武徳を求め

峯盛　又は君父の教養とて

時澄　おぼし立ちあるに依つて、階下に伺候の百官百司。

諸早　清花をかたどる某は、香取の三郎諸早。

政安　三上の太郎政安。

時澄　姉川兵藤時澄。

宗住　佐倉の瀧夜叉宗住。

景光　山邊の四郎景光。

峰盛　印幡の軍藤峰盛。

諸早　皆々出仕の上からは

時澄　私しならぬ天の賜物。

峰盛　民を撫育の御勳し。

諸早　おまなびあられよ。

六人　良門君。

　　　　　　　　　ト この時小家の内にて

良門　九重の都に春の來る事早し、百尺の樓のほとりに日は起る事遲しと、アラかしましの人々よなア。

　　　ト篳篥の入りたる樂の鳴り物にて、菰垂れ卷上げる。ト内に良門、前髮鬘、直垂と見える襤褸、非人の形にて、袱紗に包みし短册を持ち、雪駄直しの駕籠の上に、紫の裝束、金冠を直し、香を焚き、恭しく拜をして居る思ひ入れ。皆々これを見て

六人　お頭、良門公。

良門　コレ。（ト思ひ入れ。時の鐘）圖らずも方々の勸めに依つて、御父將門公の遺業を繼ぐの儀式。過ぎゆく父は情なや、秀郷、國香が軍配にて、本望達せんのみならず、敢へなくこの世を去り給ふ。子として敵將もろともに、何とて月日を拜すべき。思ひ立つたる我が大望。今日よりしては平の良門、方々けいえい致してよからう。

政安　流石は將門公の御嫡子、天晴れ健氣な御孝心。

時澄　斯る御諚の下る上は

景光　摂家清家は云ふに及ばず

諸早　少辨参議に至るまで、二心あらざる

六人　我れ〱六人。

良門　皆一様の扮装ちに、麿が所持なす御装束を、交へ姿は七人の

六人　將門公へは好き追福。

良門　天下を望むは今この時。

六人　片時も早く、良門公。

良門　ヤレ、音高し方々。さかしき源氏の計ひにて、姿繪を以てこの良門を詮議なすよし、人目にかゝらば事の破れ。（ト冠と装束を駕籠の中へ入れる。皆々思ひ入れ）まづそれまでは、祕すべし〱。

六人　然らばこれより、我れ〱は

良門　コレ。

ト皆々に囁く。

六人　心得ました。

良門　行け。

六人　ハツ。

　ト時の鐘になり、諸早、政安、時澄は東の口、景光、宗住、峰盛は本花道へ入る。良門、あたりへこなしあつて、以前の短冊を取りあげ

良門　思ひ廻せば過ぎし頃、伊豫に純友下總に、御父親王將門公、國は遙かに隔たれど、心一つに身をせめて、末の榮華を計らんには、近しき一家と純友の、息女を太郎良門に、云ひ號けあると聞き及べど、互ひに幼き頃なれば、それと知らねど誓ひの印しと、親々が、取交したるこの短冊……「山幾重八重の汐路を隔つとも、えにしは近きものにぞありける。」これにつけても、夫婦は二世とあるからは、たゞ懐かしきは妹背の愛戀。

　ト短冊を見てほろりと思ひ入れ。風の音、トヒヨになり、前幕の雁、繪姿を啣へ來り、舞臺の立ち木程よき枝へ繪姿を落し、元の所へ舞ひあがる。良門、短冊を懐中しながら、思はず繪姿を見て

旋風と共に雁の、羽音につれて、何やら爰に。（トよく／＼見て）ナニ「將軍太郎良門人相書の事」……ヤヽ、そんならこれがアノ、良門の

　ト墓手桶にて我が顏を寫し、繪姿をよく／＼見較べ、じいわりと氣を更へ、繪姿に見惚れ、ぢつと思ひ入れ。この時小屋の蔭より鬼兵衞、以前の形にて、つか／＼と出て、良門が襟髪を掴み

鬼兵　おれと一緒にちよつと來やれ。
良門　エヽ、恟り致しました。
　　ト振り放し、鬼兵衞を見て
あなたは旦那方。わたしに來いとは
鬼兵　オヽサ、われにちつと用がある。
良門　して、その御用とは
鬼兵　サ、その用といふは
　　トつかへる思ひ入れにて「ウム」と心付き、草履の鼻緒を切り
用といふは、この草履の事よ。
良門　この草履がどう致しました。
鬼兵　ちよつと直してくりやれ。
良門　エ。
鬼兵　イヤサ、鼻緒を立てゝもらひたい。
良門　アノ、私しに　（ト思ひ入れ）。

鬼兵　腹が立つか。

良門　どう致しまして。

鬼兵　そんならちよつと

　　　ト草履を差付ける。ドロ〳〵になり、良門、ちやつと懐を押へる。

良門　どうやら今のは。（ト思ひ入れ）。

アモシ、旦那様、ちよつと直して上げませう。

　　　ト直しの道具を取る。

鬼兵　いよ〳〵おぬしが

良門　ハイ、商賣でござります。

　　　ト顔を覗く。兩人氣味合ひの思ひ入れにて、チョンと木のかしら、良門、針を持ち、口にて絲をしごく。これをきざみにて、宜しく拍子

鬼兵　ヤ。

幕

第一番目

五建目　童子長屋切り見世の場

大詰　玉川座初寄せの場

役名――鐵門鬼兵衞實ハ相馬六郎公連。鏡山の住かへ、百足のお百實ハ田原秀郷娘千晴。長非長助實ハ二の瀨源吾近忠。山伏、黑川の見珍。若い者、太郎次實ハ丹波太郎鬼住。岩倉喜藤太。八瀨權藤。高峯四郎。片岡金吾。路地番、猪の熊坊主の熊實ハ雷雲。庄司娘、千代姬。抱へ女、おてふ。同、お辰。ごろつき、茨木長吉。同、虎熊十松。同、石黑權七。抱へ女、指切りおさん。同、見てくれお松。七人藝の座頭、猿島歌遊實ハ相馬太郎良門。渡邊源次綱。菰垂れの安實ハ桔梗の前。仲間、栗の木又治實ハ伊賀壽太郎成信。堤彌惣俊次。滿仲一子、美女御前。高麗屋錦升。濱村屋路考。音羽屋薪水。成田屋宗三郎。高麗屋高麗藏。成田屋桃太郎。定役、づぶ市。濱村屋路曉。紀伊國屋曙山。定役、善次。大和屋杜若。成田屋三升。

本舞臺三間の間、凄き岩組み、爰に照葉の蔦葛生しげり、正面、筋金入り鐵門を締切り、潜り戸を開き、入口に「火の用心」と書きたる辻行燈。上手、葭簀張り、このうちに大釜を据ゑ、傍に板看板「大ふかし八里半」と記し、下手天水桶に「童子長屋」と書きたる板を打ち、すべて丹波の國、大江山、童子長屋切り見世の體。幕の内より茨木長吉、虎熊十松、石黑權七、地廻りの形、切り見世のおたつ

と喧嘩して居る。路地番猪の熊坊主、なまづにて、黒雲の半纏を着て、傍におさん、お松、おてふ、切り見世女郎の拵へにてこの中へ入り、皆々、わや〳〵云うて居る。四つ竹節、鐵棒の音、通り神樂を被せて幕明く。

長十　否だ〳〵、料簡しないぞ〳〵。

女三　ハテマア、靜かになさんせ。

たつ　なぜお前方、靜かにしない。わたしもこの長屋では、小口をきいたあた坊お辰、この喧嘩は、おれが預かつたよ〳〵。

長十　否だ〳〵、料簡しねえぞ〳〵。

まつ　お前方、そのやうに云はしやんすが、一體この喧嘩は、どういふ譯でござんすえ。

熊　姐え、聞いて下さい。おれもこの童子長屋では、人に知られた和尚だ。慾張りぢやアないが、路地番と、大ふかしを二株持つて居る。商人のものを思ひ入れくつて、錢が無いと吐かすからの事よ。

てふ　ハテ、それも心安いからの事。

さん　この衆は毎晩素見しに來なさんすゆゑ知つた顏、お腹も立たうが、わたしらが挨拶。

てふ　料簡して下さんせいなア。
長吉　姐え達の挨拶といひ、思つて見れば、此方に云ひ分は無いのサ。
十松　和尚、今のは間違ひだ、腹も立たうが料簡して
權七　今までの通り、心安くしてもらはうぞ。
熊　そのやうに碎けて出れば、此方にも云ひ分は無いのサ。
長吉　そんなら一つ〆めてくれ。
皆々　ヨイ〳〵〳〵。
十松　時に猪の坊や、ぬしの所の大釜は、なぜごんなに凸凹があるのだ。
熊　サア、聞きなさい。この大釜は、酒呑童子の眷族が飯を炊いた釜サ。それでこんなにいがらがあるが、こりやア鬼の釜サ。
權七　アヽ、鬼の釜か。道理で鬼の腮のやうだ。
長吉　イヤ、又このやうにおいらが、大江山へ來てごたつくと云ふは、今度また伊賀壽太郎とやらが、千丈ケ嶽へたて籠り、純友の弔ひ戰
十松　賴光樣が、渡邊の綱を討手に寄越されたが、まだ戰は始まらないか。

権七　大軍が控へて居るゆゑ、この近邊は賑やかになりました。
熊　それゆゑ六郎公連は、將門を諫め兼ね、その身は浪人して居たを、幸ひに侍ひを廢め、酒呑童子の棲んだこの岩屋を、切り見世の長屋にして、六郎公連は店頭の鬼兵衛と名を更へ、商賣をして居るとは、飛んだ話しでないか。
まつ　それゆゑわたしら初め、京大坂から子供衆が、大江山へ住替へに參りましたわいなア。
てふ　この前の酒呑童子は、人の娘や、大内の官女を連れて來てさん酒の相手にしたといふ噂。
たつ　それに引替へ、今度の店頭鬼兵衛親方は、女を連れて來ても、女郎に使ふとは女四　情深い、よいお方でござんすわいなア。
たつ　よいお方と云へば、この手合ひをこの儘では、ナア、和尚さん。
熊　イカサマ、五の字當てたいものだが。イヤア、好い所へいつもの臺屋が。オヽイ〳〵。
ト呼ぶ、向うにて
歌遊　ハテ、忙しない、姐さん、マア〳〵靜かになされまし。
ト てんつゝ、通り神樂になり、向うよりお百、山出し女、好みの形にて、袴羽織を着たる座頭猿島歌

遊の手を引き、跡より臺屋の若い者太郎次、木綿やつし股引にて、鬼毒酒としるしたる三つわり樽を
持つて出て來り、花道に止る。舞臺皆々これを見て

皆々　目見えの女中さん、今お歸りかえ。

百　お前方も、さぞお待兼ねでござんせう。わたしも待兼ねたゆゑ、歌遊さんの迎ひに、早う行て遲う戻つたが、なんと手柄者であらうがな。

歌遊　わたしも寄席を打つて居りましたが、度々のお迎ひゆゑ、早速參りましたが、この猿島歌遊をお呼びなさるゝは、ハヽア、聞えた、今日は冬至とやらでござりまするな。

百　モシ〳〵、その、てうじ〳〵といふは、何の事でござりますえ。

太郎　なにサ、てうじ〳〵ぢやァねえ、冬至とう夜といふ事よ。成る程、馬鹿には療治のないものか。

百　有つたらお醫者が流行りませう。

歌遊　チヽ〳〵ヤツトン〳〵。

ト口三味線にて浮かれる。

太郎　何をするのだ、らつちもない。サア、行きませう。

ト三人舞臺へ來る。

長吉　ハヽア、そんなら今宵冬至だから、頭の内にこの歌遊先生の、八人藝や影繪があるのか。

皆々　こりや面白からうわえ。

歌遊　私しのやうな無調法者を、御贔屓なされまして有り難うござります。その上美しい女中さんに手を引かれ、この山道を何の苦もなく、參りましてござります。

太郎　お前にも、女の好いと惡いが知れますか。

歌遊　ハテ、知れませいで。そこが昔とつた戀塚。この女中様は、女郎衆でござりませう。

熊　イキ、きついものだわえ。この子は下野の生れの者だが、近頃鏡山でふせをして居て、男にばかり仇付いて居るゆゑ、判人がこの長屋へ住替へに寄越したが、怪しからぬ刎ね者サ。

百　わたしもさう思うて居るゆゑ、まだ見世へは出ませぬ。女郎衆の使ひや、勝手を手傳うて居ますわいなア。

歌遊　この女中さんが勤めするは、定めて色男のためといふ事か。

皆々　但しは親孝行か。

百　イエ〳〵、色でなし、孝行でなし、尋ねるものがござりまして。

歌遊　ハテ、似た事もあるもの。わしも尋ねるものがござります。

百　こりやをかしい。お前、目も見えぬに尋ねさんしては、知れまいがな。

歌遊　その様に思ふは尤もなれど、この方には直に知れる證據がござります。

百　して、その證據は。

歌遊　その證據といふは、わしが肌に懸けて居るこの守り。

ト錦の守り袋を出して見せる。

百　そりや何でござんすえ。

歌遊　これは云ひ交した女と、取交した慥かな證據。

皆々　アイヤ、先生、受させるな。

歌遊　これさへ持つて居れば、直に知れます。

百　その守りをわたしにお見せ。

歌遊　成りませぬ。大事の守り。

百　大事の守りを

歌遊　サア、取つて見やれ。

百　守りを取ろな。

皆々　サア取つて見やれ。

ト駒鳥の合ひ方になり、歌遊先に皆々跡へ附き、お百は向うへ廻り、子とろの見得にて皆々門の內へ入る。太郎次、熊殘り、兩人あたりへこなしあつて

太郎　入道雷雲、して、美女丸は手に入りしか。

熊　されば聞いて下せえ。この間戻り橋にて見かぢつたゆゑ、引ッ縛らうと思うたところに、飛んだ替へ玉を喰つてつまらぬゆゑ、人足繁きこの所に、網を張つて待つて居る。それはさうと鬼毒酒と記したるその樽は

太郎　成る程、合點が行くまい。某伊賀壽どのに賴まれ、臺屋の酒に毒を仕込んで、源氏の對陣の憂晴らしに、軍兵ども、この所へ來るは必定。この酒をおつ喫はせ、鏖殺しにするかねての計略。

熊　うまい〳〵。天晴れ方術。

太郎　目指す敵は

熊　大將渡邊。

太郎　コレ、必ずともに、祕すべし〳〵。

ト兩人思ひ入れ。この時向う、ばた〳〵にて、見珍、前幕の形にて走り出で來り

見珍　跡から追手のかゝる者、どうぞ隱まつて下さりませ。

　　ト兩人恟りして

太熊　イヤア、お前は敵討の化け物か。

見珍　そのやうな者ではない。わしは黒川の見珍といふ山伏だが、若氣の至りとは云ひながら、あなごの庄司が娘、千代姫といふ者を孕まし、その上惡い所を見付けられ、嫉妬の深い女ゆゑ、わしが跡を追つかけて、今爰へ來ます。何卒隱まうて下されまし。

太郎　そいつは難儀であらうが、人の入込む所へ隱すといふ事は、ナア、和尙。

熊　それサ、困つたものだな。オヽ、有るぞ／＼、あの釜の中はどうだ。

太郎　それがよい／＼。

　　ト兩人して釜を下ろし

熊　モシ、山伏さん、隱れなさい。

見珍　そいつは有り難い。モシ、二人の衆、女を孕ませ、表門で難儀して、終ひに釜とは、飛んだ風呂だ。

兩人　無駄を云はずと、早く入りなさいよ。

見珍　田舍者でござる、御免なさい。

ト通り神樂になり、見珍、釜の中へ入り込む。ト向うより長助逃げて出る。跡より千代姫、前幕の形、片々の小鬢へ角を二本生し、じだらくなる形にて、帶を曳摺りながら出て長助を執へ

千代　お前が見珍さんを逃がしたゆゑ、わたしがこの嫉妬。サア、見珍さんを、今返せ〳〵。

長助　見珍が事は、おらア知らない〳〵。

ト突飛ばし、兩人とも舞臺へ來る。

千代　サア、見珍さんを返せ。見珍樣いなう〳〵。

太熊　モシ、長助さん、あの女は狂人か。

長助　見珍といふ山伏を、追ひかけて來た女サ。

千代　モシ〳〵、今この所へ、くつきりとせぬ、色の黑い、山伏さんは見えなんだかえ。

太熊　イヤ〳〵、其やうな者は見えぬ〳〵。

千代　ハテナア、何處へ隱れたやら、見珍樣いなう〳〵。

ト釜に目を着け

ハテ、心得ぬ。あの釜の伏せてあるは、昔の安珍は道成寺の釣鐘の内に隱るゝ。今の見珍は慥か

にこの釜。

熊　イヤア、ありやァおれが大事の道具。

千代　いよ／＼怪しい。

ト三人を突退け、釜を廻る。この時千代姫の帯解け、尻尾の様に見せたる仕組みにて、千代姫いろいろをかしみの思ひ入れ。

長助　おきやァがれ。コレ／＼姐え、腹の立つは尤もだが

太郎　おいらが惡いやうにはしない。

熊　なんと料簡しては下さるまいか。

千代　そりやモウお前方の、其やうに云うて下さんす事なら、どうなりと致しませうが、その代り見珍さんに逢はせて下さりますかえ。

太郎　隨分逢はせてもやらうが、怨みつらみを云つては納まらないよ。

千代　イエモウ、斯う打明けた上からは、何も云ふまいわいなア。

三人　そんなら何も云はないの。よし／＼。

ト釜の側へ來て

熊　サア、見珍さんとやら。

三人　怖い事はない。出なさい〳〵。

ト釜を取る。内に見珍、以前の形にて、しやつきりと立つて、まじ〳〵して居る。皆々見て

皆々　イヤア、見珍がどうかした〳〵。

熊　ハヽア、聞えた。先刻これを被せる時、釜に水氣があつたゆゑ、けんちんが氷りついたと見える。

長助　けんちんが氷つたら、いり豆腐にするがいゝ。

皆々　何を云はつしやる。

千代　モシ〳〵、こちの人が、あのやうにならしやんしたが、どうぞ仕様はないかいなア。

熊　案じる事はねえ。頭の內へ連れて行き、火で炙ると直に治る。オイ、若い衆、ちよつと來て下せえ〳〵。

三人　なんだ〳〵。

ト云ひながら、門の內より長吉、十松、權七出て來り

ごたつきなら叩ツ挫くがいゝ。

熊　なにサ、山伏が氷りついたゆゑ、長屋の厄介だ。頭の內で暖めて下さい。

十松　成る程、しやきばつて居るゆゑ
長吉　そこらに土砂は無いか。
權七　ナニ、死人ぢやァあるめえし。
十松　湯灌場へ直にやらうか。
三人　ア、、冷たい〳〵。
　　ト通り神樂になり、三人、見珍な擔ぎ、門の內へ入る。
長助　山伏どのはあれでいゝが、これからは姐さん、二人仲好くして、どの樣な三尺店でも持つて、けんちん千代姬と、夫婦になつてはどうだ。
千代　そりや嬉しうござんすが、一錢の貯へ無ければ
熊　好い事がある。お前この童子長屋で、切りを叩いてはどうだ。
千代　切りを叩くとはえ。
熊　切り見世を排ぐ事よ。
千代　そりやモウ、どうなりとしようけれど、嫉妬ゆゑに生へた二本の角。
熊　困つたものだ。モシ、長助さん、お前の齒を拔く藥で、あの角は拔けまいか。

長助　どうであらうか。何にもせよ、見た上で

千代　どうぞお頼み申します。

　　ト長助角を動かして見て

長助　これは八重角と云つて、至つて悪い。一本は早く抜くがよい。

千代　二本皆抜くがよいわいな。

長助　二本抜くと命に係はる。

千代　左様なら、せめて一本抜いて下さりませ。

長助　一本位は殘して置くがいゝ。ごたつきめ等を角で突いてやるがいゝ。

太郎　牛の喧嘩ぢやァあるまいし。

千代　どうぞ痛くないやうにお頼み申します。

長助　氣遣ひせまい。長井長助家傳の藥を、角の根際へ揩込み、この紙を啣へさせ、手を三つ打つと直に抜ける。

　　ト懷より藥を出し、角の根へ揩込み、紙を千代姫に啣へさせて、手拍子を打つ。これにて角一本落ちる。

そりやもう抜けた。

ト千代姫、角を探り見て

千代　ほんに一本抜けたわいな。

太郎　そいつは奇妙だ。そんなら今の話しの通り

熊　頭の内へ目見えに連れて行かう。

千代　そこを何分。

熊　そんなら姐え。

三人　サア、行きませう。

ト四ッ竹節の合ひ方になり、熊、千代姫が手を執り門の内へ入る。長助も行く振りにてちよつと小隠れする。太郎次残り、跡見送り

太郎　今の女を味方に入れ、この酒を源氏の奴等に強ひつけさせ、手間隙なしに鏖殺し。ちつとも早く、ソレ。

ト行かうとする。この時長助、ツカ〳〵と出て

長助　怪しいその樽。

太郎　何を此奴が

ト兩人樽を枷に、ちよつと立廻りあつて

長助　ちよつと改め見ようと思つて

太郎　イヽヤ、改められる覺えはないワ。

長助　見せともながるが、詮議の一ツ。正しく仕込みし

太郎　それ聞かれたら

ト腰に差したる三ツ目ぎりを持つて打つてかゝる。これより曲ばちの鳴り物になり、兩人立廻りあつて、トヾ長助、太郎次をきつと執へる。この見得にて道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間、岩組み、酒呑童子の居間を切り見世に見立て、裏手にしたる躰。上の方に高足の屋體、この下より瀧の流るゝ模樣。下草鬼薊盛りの體。蹴込み庭石、垣根、欄間これも岩組み簾上下し誂へ、上に結構なる唐障子。尤もこの道具前通り引上げる仕掛け、上の方に岩組みの切り穴、爰より谷間へ降りる好み。爰に鬼兵衛、五分月代、切り見世店頭の拵へ、童子格子の掻卷の着付。後にお松、おてふ、酌をして居る。臺屋物の鉢肴取りちらし、傍にお辰、鏡臺に向ひ顏をして居る。熊、大俎板にて鹿を切つて居る。長吉、權七、葱を拵へて居る。十松、箱火鉢へ煎鳥鍋を懸け、火をおこし

て居る。歌遊、太鼓を打ち居る。おさん、三味線、山伏見珍、甚九を踊つて居る。この見得、四天王の山入りを世話に碎きし模樣、障子の向うにては金棒の音、そゝり唄、四ツ竹節の合ひ方にて道具とまる。

さん　醉うた〳〵よた五句の酒に

ト皆々囃す。見珍踊る事あつて納まる。

皆々　イヨ〳〵、きついもの〳〵。

見珍　アヽ、大汗になつた。これで先刻の寒さを取返した。

まつ　法印さんの甚九は、どうでも越後じみて居るね。

長吉　越後じみるとは、そりやァ帷子の事ぢやァねえか。

てふ　アレ、また長吉さんの惡洒落だの。

十松　洒落に見しよとて紅鐵漿つきよぞ。

さん　コレナ、お前方も好い加減に洒落ねえな。ごろつきの癖に。

權七　エヽ、措いてもおくれ、おいらがごろつきなら、おぬし達はどろ付だ。

見珍　どうだ〳〵、國みつさん藥齒磨はあやまるの。

たつ　何だな、お前方は。しら店から來た田づくぢやァあるまいし、此方の親方の年中世話になりながら、惡洒落はよしねえ。利いた風な。

見珍　利いた風とはおれが事か、この唐茄子くらひめ。

たつ　どうしたと。

ト立ちかゝる。熊留めて

熊　コレ〳〵、お前方も何だな。一ツ鍋の物を食ふ念頃合ひで、何もいさくさを拵へる話しもねえわな。長い月日にやァ、その位な事はあり内だわな。互ひに不請するがよい。ねえ、親方、さうぢやァござりませんか。

鬼兵　和尚が云ふ通り、それに違ひはねえ。おれも腹からの店頭でもねえ。これでも二本きめたが、おれが氣めえじやァ、とても武士にはなれまいと、そこで侍ひはなげにうつて商賣屋、ほんの事だが、氣樂でいゝよ。

歌遊　モシ、親方へ。私しもこの中、お前さんの以前のお話しを承りましたが、アノ將門樣とやらに勤めてお出でなされました。アヽ、何とやら申したねえ。

鬼兵　おれが名か。

歌遊　左様サ。

鬼兵　おらァ平親王將門様のお側を勤めた、六郎公連と云ふ者よ。

　　ト眞鍮の火鉢を引寄せ、あたる。

歌遊　エヽ、アノお前様が

鬼兵　昔は本名といふものは、芝居でも隠したものだが、今の世界ぢやァそれぢやァいかねえ。誰が怖くつて本名を隠すものか。併し、店頭で六郎公連ぢやァ通りが悪いの。

歌遊　なんで又浪人となりましたえ。

鬼兵　聞かつせえ。三代相恩の主人だが、さて豪勢な生れ付よ。わしが意見を聞かばこそ、良薬口に苦しとやら、主の威光で横たつぷり、こいつは云ふも無駄事と、槍をつかした公連が、足は洗へど商賣は、泥水呑むを合點で、鬼の岩屋で切り見世とは、餘つ程の捻り者か。

歌遊　エヽ、左様かえ。世間の噂には聞きましたが、平親王將門と位を取つた、お歴々の御家老様が、よくマァ馴れぬ賣色の親方株とは、成る程捌けた御氣性だね。

　　トこの時奥、ばた〳〵にて、人音して、お百逃げて出るを、千代姫追つかけ出て

千代　イエ〳〵、阿呆の癖に、わたしを馬鹿にさんした。もう〳〵〳〵、堪忍せぬ〳〵。

百　アヽ、あやまつたわいな〳〵。

ト大勢の中を逃げあるく。千代姫、追ひ廻すを、見珍とめて

見珍　コレ〳〵、おれを追ひかけた癖が止まず、又あの娘を、どうするのだ〳〵。

千代　モシ〳〵、聞いて下さんせ。わたしが大事のこの角へ、あの子がコレ、このやうな引裂き紙を結ひつけ、好い風の神ぢやと云ふわいなア。揚土ぢやァあるまいし、エヽ、腹の立つ〳〵。

ト角へ引裂き紙を付けたる儘、お百へ立ちかゝり思ひ入れ。

百　アヽモシ〳〵、其やうに腹立てゝなら、わたしが詫びる程に、どうぞ堪へて下さんせ〳〵。

見珍　アレ、あの樣にこの子が詫びる程に、もう堪忍してやらねえか。

てふ　サア、仲直りをしておくれ。

たつ　女は當つて碎けろと云ふわな。サヽ、わつちにおくれ〳〵。

千代　オヤ〳〵、この子達はおくれ〳〵と、わたしを風の神だと思ひなさるかえ、そんならよいわな、仲直りを致しやせう。

百　そりや嬉しいわいな、そんならお前と指切りを致さうかえ。

千代　アノ、嘘つこに指切るのかえ。

百　さうぢやないわいな。ちよつと指をお出し。

千代　アノ、小指かえ。

ト千代、小指を出す。お百我が小指を指切りをして

百　サア、これで仲直りが濟んだわいな。

皆々　イヤ、二人ながら餘つ程

千代　エヽ、口しほだわな。ホヽヽヽおへねえ間抜けだ。

皆々　イヤ、こいつは大笑ひだ。

百　ちやん〳〵坊さんは、爰にござんすわいな。ホヽヽヽ。

ト熊の天窓を打つ。

見珍　して、親方、この娘は、宿場へでも向けませうかな。

鬼兵　されば、どうで錢見世の玉だ。それに切りをたゝかせるがいゝぞえ。

千代　アイ、きりでも鉋でもよいから、わたしやどうで岡場所を勤めて見る氣だよ。モシ、旦那さん、お頼み申します。

鬼兵　イヤ、餘つ程皮の厚い飛んだ踵だ。

千代　左樣サ、輕石を通ひで取りやす。

歌遊　モシ〳〵、親方え。七人藝に致しませうか、影繪を先に始めやせうか。

鬼兵　影繪もよからう。併しまだ日は暮れない。そこらを締めて、この衝立の後へ蠟燭を立てるがいゝ

長十　呑み込みやした〳〵。

ト障子の衝立を直し、蛸足の蠟燭立を直し、火をとぼし

女四　サア〳〵、歌遊さん、始めなさい〳〵。

歌遊　そんなら先づ最初は、影繪をお目にかけませう。

ト衝立の後へ廻る、鬼兵衞見て

鬼兵　コレ〳〵先生、ぬしの影繪の前藝に、ちよつとわしが見せる手品がある。ぬし達も見さつし。この袱紗包みの品が、數も七ッに映るは奇妙。それ、見さつし。

ト懷中より袱紗包みの髑髏を出し、包みの儘衝立の蔭へ寫す。ドロ〳〵にて、髑髏の包みは七ッに映り、鬼兵衞の手は一本に映る。皆々見て

百　アレ〳〵、親方さんの持つて居さんす包みは、七ッに映るわいな〳〵。

見珍　それでも店頭の手は矢ッ張り一本、包んだ品は七ッの影。そんならもしや

鬼兵　エ。

見珍　イヤ、奇妙な仕懸けだ。

　　ト思ひ入れ。歌遊聞き耳を立て

歌遊　モシ〳〵、何と仰しやります、親方さんの持たしつた、何か知らぬがその品が、七ツの影に映りますかえ。そいつは不思議な細工だ。

見珍　奇妙な細工だ。映して見さつし。

歌遊　ハイ〳〵、ドレ、お見せなされませ。ちよつと私しが

　　ト件の包みを取り、衝立へ寫す。薄ドロ〳〵にて、包みも七ツ、歌遊の手も七ツに映る。皆々思ひ入れ。

見珍　イヤア、今度は包みのその外に、持つたる歌遊の手も七本、口も八十八人藝、それが眼前七本の

百　手の影映る座頭さん、どうでもお前は手のある坊さん。

歌遊　そんなら持つたる私しが、手も七本に

鬼兵　七人藝が七本の、影の映るは、正しく血筋の

　　ト立ちかゝる。

歌遊　エヽ、氣味の惡い。
　　ト包みし品を抱へる。お百ちやつと取つて
百　この品わたしにおくれ。
鬼兵　そんならお百は、それが欲しいか。
百　イエ、影繪に仕懸けの細工物、わたしが貰うて晩の樂み。どうぞそれを
鬼兵　欲しくば遣らうが、粗末にするな。
百　アイ、屹度大事に
鬼兵　預けて置かう。
歌遊　そんなら歌遊も七人藝の、支度にそろ〳〵
鬼兵　かゝりや繋がる繋ぎ馬、由緣身寄りが
歌遊　エ。
　　ト思ひ入れ。鬼兵衞もこなしあつて
鬼兵　アヽ、勝手が知れまい。
百　わたしが手を引き

鬼兵　送つてやりやれ……併し必ず轉ばすなよ。
百　オヤ、藝者衆ぢやあるまいし。
鬼兵　おきやァがれ。
百　サア、斯う來なさんせ。
歌遊　ハイ、お世話でございます。
　ト四ッ竹節になり、お百、髑髏を懷中して、歌遊へ目を着け、手を引いて奥へ入る。直に通り神樂になり
權七　これから又この手合の、隱し藝をさせにやァならねえ。
十松　おいらが又藝と云つちやァ、濁り酒と中汲を曲呑みにして見せべえ。
たつ　オヤ〳〵、そいつは飛んだ藝だの。わつちらは藝は無いが、毎日毎晩四ッに組んで居る爲か、力はあるの。この暮に年が明くと、春からは又角力に出やす。なんとお前方は、わつちと捻つて見る氣はないか。
女形　オヤ〳〵、飛んだ隱し藝だねえ。
熊　そいつは奇妙だが、どうしてマア、お辰さんと取組む角力は、この長屋にはあるまい。

長吉　あるが最期之助、そいつは化け物だ。(ト思ひ入れ) イヤ、化け物と云へば、あの鬼娘に一番取らせちやア如何だ。

十權　こいつはよからう。女角力がいゝ〳〵。

見珍　イカサマ、こいつは面白い……コレ〳〵千代姫、あの姐さんと、角力を取つて見ろ〳〵。

千代　エ、アノ自らに女子角力を取れかえ。オヤ〳〵〳〵、どうしてマア其やうな、荒々しい事がならうぞいの。殊にわたしはお腹のやゝが……イエ〳〵、そりやどうぞ、赦して下さんせいなア。

鬼兵　コレ〳〵、腹に物のある體で、なぜ女郎奉公に來た。それぢやア相談は出來ないよ。

千代　サ、それは

見珍　アヽ、モシ〳〵、親方々々、今仰しやるこの千代姫が、腹に子があると申したは、そりや大きな間違ひ。よく物を辨へても御覽じませ、此やうな者を孕ませる男が、廣い世界に

千代　エ、あるぞえ〳〵。現在お前が

見珍　アヽ、コレ〳〵、夢になれ〳〵。もう斯うなつては親方へ身晴れ。この法印が手前の腹は抱くワ一番角力を、取つて見ろ〳〵。

千代　お前がさう云うて下さんすりや、わたしは氣強う取りやんす。モシ、親方さん。

鬼兵　それなら話しもして見よう。コレ、てめえ達は、あの娘と、抱へのお辰を、取組ませろ／＼。
長十　呑み込みやした。サア、姐えや、角力を取らっし／＼。
　　ト千代姫に立ちかゝる。千代姫いろ／＼思ひ入れあつて
千代　アノ、姫御前に、どうでも角力が
鬼兵　取らねば腹に曰くがあるか。
千代　サア、それは
鬼兵　角力を取るか。
皆々　サア／＼／＼、どうだ。
　　ト千代姫思ひ入れあつて
千代　エヽ、そんならとても濡れた袖、親方さんの見る前で
見珍　わがみは角力を取る心か。
千代　この身の願ひにや替へられませぬ。
見珍　そんなら差詰め行司は法印。鬼娘の角力、始まり／＼。
　　ト白囃子になり、千代姫、上着を脱いで長襦袢の形、お辰も身拵へして、力足を踏み、双方立合ふ。

見珍反古團扇を持つて行司の見え。

見珍　西は子持腹々々。東、鹽花々々。

ト兩人下座をきり、塵手水などよろしく

こなた、子持腹々々。かたや、鹽花々々。

トよろしくあつて團扇を切る。三味線入りの白囃子になり、兩人摑み合の角力よろしく、トゞ、千代姫、お辰を投げて

千代　ヨイヤサ。

見珍　勝角力、子持腹々々々……何ぞ褒美に。

ト千代姫が振り袖を取つて

去る御方樣より、勝角力子持腹へ下さる。纏頭のお禮々々。

ト小袖を投げる。過つて上の方の岩間へ投げ込み、谷底へ落ちたる見得。見珍うろたへ

南無三、振り袖を、あの谷間へ落したが、爰から傳はつて

ト岩へ取りつき、降りにかゝる。

鬼兵　アヽコレ、その谷底は、女郎子供の仕がく場に、拵へ置いた少しの下店、素人手合は遣られない

落ちた小袖は此方で取る。必ず遠慮してもらはうぞえ。

ト思ひ入れ。見珍これにて扣へる。千代姫思ひ入れあつて

千代　なんでも負けてはなるまいと、腹を揉んだせいか

ト腹を撫でる。腹の内にて赤子泣く。千代姫恂り思ひ入れ。

皆々　イヤア、慥かに今のは赤子の聲。

見珍　そりやこそ、腹で子が泣くワ。

千代　アヽモシ、お前方の空耳か。今鳴いたは慥かに鷄。しかも小鳥の聲。アヽ、小鳥が鳴けば親鳥も
なくは性ある習ひぞや。

皆々　エヽ、おきやアがれ。

見珍　そりやこそ、又赤子が腹で泣いた。こいつは大變。

千代　ほんにお腹で

見珍　コレサ、此方へ。アレ又、泣いたワ。

たつ　さつさと泣かんせ。

ト押やる。又赤子泣く。

千代　アレ、又泣いたワ。

見珍　きり／＼來さつし。

ト引つ張る。又赤子泣く。

千代　そりや又泣いたワ。

見珍　こつちへござれや……さつさとござれや。

ト四ツ竹節になり、見珍、お辰、千代姫を引ッ立て、奥へ入る。皆々跡を見送り

皆々　イヤ、餘ッ程はねた代物だ。

トこの時向う揚幕にて

呼び　上使。

皆々　アレ、親方、上酒を賣りに來ましたよ。

鬼兵　上使の呼び聲、珍しい。さらば上使を呼んで見ようか。

トこの時又「上使」と呼ぶ。誂への太鼓謠ひになり、向うより渡邊源次綱、好みの長裃、大小にて算盤絞りの手拭を鉢巻きにして、金棒を引き、鷹揚に出て、花道よき所に住ふ。皆々見て

四人　上使といふはこなさんか。

綱　いかにも、上使といふはわしでござんす。頼光公よりの……上使。

鬼兵　なに上使だ。童子長屋の切り見世へ

松　酒屋と思へばお屋敷さん。

てふ　新酒か、古酒か、劍菱か。

熊　但しは四方の瀧水か。

長吉　上使の譯を

十松　聞くべいか。

皆々　トこれにて綱思ひ入れ。

綱　アヽ、そんならこの手合は、上使と聞いて、酒の事だと思ふのか。それも尤も。斯る嶮岨の聳ちて、雲も行くなり大江山、鬼の居ぬきの新長屋、冬至は知れた四ツぎりと、岩屋の角へ懸け行燈そこへ上使は氣の利かぬ。太鼓謠ひで素見は、肩で風切るそゝり節、廻り南枝の梅が香や、花の顏見世こち風が、堺町から葺屋町、五年振りでの戻橋、云はずと江戸ッ子三田生れ、紋の表はす渡邊の、アヽつなもねえ小二才が、ごろつき手合ひに渡りに來た。童子長屋の店頭、鬼兵衞さん、お心安うお頼み申しやす。

鬼兵　そりやこなさんが。長く臺詞を廻せば分りやした、サ、お若いの、マア爰へ來て話さつしやい。

綱　アイ、有り難うござりやす。わしも上使で、然らばそこへ。

皆々　ヤ。（ト思ひ入れ）。

綱　通りやすよ。

ト又太鼓謠ひになり、切れにて綱、本舞臺へ來り、あたりを見て

成る程、爰であつた。六人連れの山伏で、童子を欺した鬼が洞。アヽ、久し振りで來て見る……どなたも御免なせえよ。

ト上の方、よき所に住ふ。

長吉　モシ、頭、上使とやらに凹んぢやァ、わつちらが立たねえよ。

十松　立入りがあらば凹ましてやらう。

皆々　締めてやらつしやい。

ト立ちかゝる。鬼兵衛よろしく留めて

鬼兵　コレサ〳〵、見つともねえ、何を騷ぎやァがる。たとへこの童子長屋へ、雷が一萬匹落ちようと、そこは又、へこむ鬼兵衛でもねえ。うす外聞が惡い、靜かにしやれ。

ト これにて皆々扣へる。鬼兵衞思ひ入れあつて

綱 形も勇みに拵へて、路地番體の御上使は、源氏の陣よりわざ〳〵と、近附きながらござつたのか。左樣サ。都方よりわざ〳〵と、陣を張つたる大江山。千丈ケ嶽に楯こもる、伊賀壽を討手に向ひしが、今に戰に及ばぬ成信。兩軍互ひに寄つたばかり、睨み合つたる今この時、近所に屯ろの諸軍勢、やかましからうと存じ付き、戰の始まる前方に、渡り引きに來やした。頭、おやかましうござりやせう。

鬼兵 イヤモウ、そりやァお互ひだよ。お前の方で戰を始めさつしやれば、此方でも切り見世を始めたから、そりやァお互ひ長左衞門……モシ、兄さん、持ち合せたがお近附きの爲、憚りながら上げやせう。

綱 そりやァおかたじけ。一ッたべやせう、わしも。前方この岩屋で、鬼殺しの一升も、童子を相手に酒盛りしたが、久し振りで來やした。ドリヤ、御馳走になりませう。

鬼兵 そんなら憚りながら

ト茶碗をさす。

綱 戴きやすよ。

十松　お酌をしやせう。

ト銚子を持つて立ちかゝり、つぐ。

綱　こりやア憚り。

鬼兵　肴をしやれ。

熊　心得ました。

ト最前拵へたろ、鹿の刺身、大鉢ともに差出し

モシ、たつた今ぶち殺した鹿の取りたて。しゝむら四五寸押切つて、舌打してぞ參られける。ハハヽヽ。

トこの内綱、酒を飲んで

綱　イカサマ、この以前來た時は、大きな俎板に女のしゝむら、血酒の馳走は中位ゐであつたが、ちつとの内に世の中も、變れば變る大江山、鬼の岩屋の切り見世へ、時代な上使も、ちつとこじつけ。

鬼兵　イヤ〳〵、今の世の中ぢやア、勇みも上使に來さうなはめだ。してマア、こなさん、何の渡りに上使の形で

綱　どうで云はにやァ解らぬ理窟。殊に天下に係はる大事。ごろつき手合の聞く手前。ちつとの間、
若い手合を。

ト思ひ入れ。鬼兵衞も思ひ入れあつて

鬼兵　解りやした。此奴等が聞く手前、ツイ斷うくと話されもしめえ。ようございやす……コレ、今
聞く通りだ。ぬしがおれに内々の話しがあるさうだ。そのうち、てめえ達は爰に居ては惡い。控
へ店へ行つて居ろ。呼ぶまでは來るなよ。

熊　モシく、それだと云つて、どういふはめにならうやら。

皆々　滅多には行かれねえく。

トわやく云ふ。

鬼兵　ヤイくく、わいらが居たとて、それを力にするやうな鬼兵衞ぢやァねえ。うせろと云はゞ、
うしやァがれ。

皆々　そんなら、頭。

女皆　アノ、わたしらも

鬼兵　早く行けと云ふに。

ト四ツ竹節になり、舞臺へ人数殘らず心を殘して奥へ入る。鬼兵衞跡先を見廻し、思ひ入れあつて

綱　モシ、兄貴、遠慮はねえ。話しがあらば、わしにとつくり。話しやせうが、店頭のこなさんに、女郎子供の逹引なら、ツイ斯う〳〵と話しやせうが、殊に以前は侍ひでも、今は町人、鐵門鬼兵衞、そのこなさんの內ゆゑに、上使ながらも商賣相應、無遠慮合點世話たつぷり。併しそれでも話されまい。わしも詞を改めて、上使の口上云ふからは、又こなさんも昔へ返つて

鬼兵　爰で上使の受答へ、承知しやした。窮屈ながらちつとの內、また侍ひで三ツ指は、三ツ星付いた御上使へ、わしも詞を改めて

綱　さう物事が行きわたれば、わしも重疊々々。此方も改めて、源氏の陣より上使の役目、渡邊の源次綱。

鬼兵　お受けは卽ち將門方、相馬の六郎

綱　公連どのよな。

鬼兵　其許には源氏方よりの

綱　上使。

鬼兵　上使とござらば、イザ先づあれへ。

綱　上座御免。

鬼兵　お通りあられませう。

ト管絃を崩せし鳴り物にて、思ひ入れあつて、綱、二重へ通る。鬼兵衞は掻巻を脱ぎ、大小を差して、下手へ來つて、思ひ入れあつて

源氏方より、見苦しきこの公連が隱れ家へ、上使の御入來。御用の趣き、承りたう存じまする。

綱　源家の大將頼光公より、六郎公連へ上使。

鬼兵　ハヽハツ。

綱　我が君の嚴命餘の儀にあらず、先達て亡びたる將門が一子、將軍太郎良門も、都の内に隱れ住むといへど、難病に冐され、全快もなく病死なせど、修驗の法に蘇生なし、存命なりとも、分明ならぬ巷の取り沙汰。殊に朝敵純友が臣、逆賊伊賀壽太郎成信、千丈ケ嶽に出城を構へ、源家の討手を相待つこの節、渡邊卽ち出陣なし、この麓まで押寄せしが、案内知れざる嶮岨の山道、迂濶に落す事叶はず、數日を送る今日只今。承れば六郎公連、弓矢を捨てゝ當所の住ひ。去りながら、古主の恩義を謝さんがため、良門を隱匿ひ置く條、世上の聞え、急ぎ首打ち相渡さば、恩賞として、

丹波丹後兩國を與へん。源家に仕へ、忠勤の勵まれよ。右の條々承知の上は、相渡せよと武將の墨附。即ち渡邊持參いたした。良門討つて源家へ降參、身共もよきに推擧いたさう。公連どの、有無の返答、承りたい。

ト合ひ方。鬼兵衞思ひ入れあつて

鬼兵　こは存じ寄らざる賴光公の御疑ひ。相馬の家の成行きを、存ぜしゆゑにこの身を退き、勘氣を受けしこの公連。知らるゝ通り町人の、殊に賤しき世渡りは、武門を捨てたる拙者が面晴れ。それに何ぞや古主の公達、良門どのを何ゆゑに、隱まひ置くべき筋はござらぬ。それも造說。まツた武將もさほどまで、愚昧の拙者を御懇望、墨附まで下さるゝ事、仰せはこの身の譽なれども。二君に仕へぬ六郎が胸中、お受け申さぬ一通り、御前よしなに渡邊どの、申し上げられ下されい。

綱　すりや、源氏よりその許を懇望あるに、降參いたさば譜代同然の、臣下となさんずお受けを辭み、まツた良門隱まはぬと、いよ〳〵貴殿は云ひ張り召さるか。

鬼兵　勘氣を受けたる公連が、何ゆゑ良門隱まひませう。御疑念晴らされ、御尤もに存じまする。

綱　イヽヤ、その返答、暗い〳〵。斯る惰弱のこの住居は、油斷を見する胸中と、さとくも知つたる源次綱、はや先達て間者を入れ置き、慥かに聞く。隱さず太郎良門を、この家に忍ぶとお受けを

しやれ。

鬼兵 イヽヤ、左様にお云やつても、隱まひました覺えはござらぬ。

綱 すりや、どうあつても覺えないか。

鬼兵 ハテサテ、諄いその問ひ事。よし又太郎良門を、隱まひましたらどうなさる。イヤサ、渡邊どの、今は落ちぶれこの活業、以前は相馬の譜代の武士、祿を食んだる六郎公連、古主の好みに若し自然、頼まれますれば隱まひます。斯う云ひ出しちやァ隱まはぬ。その良門を隱まつたと、云つてこなたの向う面、女郎子供の貰ひ引、それよりちつと實のある掛合ひ。童子長屋へ轉げこんだら、何方が來ようと、鐵門鬼兵衞が引受けちやァ、連れて行かれるものならば、指でも付けて見さッせえ……トサア、今の身分ぢやァ申しやすが……御上使樣、この公連が御返答は、斯くの通りでござりまする。

綱 貴殿が左樣にお云やれば、猶又渡邊、吟味いたさにや罷りならぬ。よし又この家に良門、隱まひないにも致せ、この程よりして大江山、鬼ケ洞の大空に方つて、怪しき雲の棚引く樣子、正しく剛勇豪傑の輩、但しは名だゝる御寶の、隱しあらんと某が、漢の高祖の故事より、計り知つたる希代の雲立ち。正しくあれなる谷間こそ

　　　　トつかつかと谷の方へ立ちかゝらんとする。鬼兵衞立廻つて留め

鬼兵　イヽヤ、谷間は見せられぬ。あの別家には抱へ置く、奉公人のしがく部屋、とやに付いたる女郎の寢所。醫者か但しは按摩取り、女髮結ひのその外は、若いお方はやられませぬ。

綱　斯う云ひ出しては刀の手前、石城なりとも踏みこんで……トサア、云ふのは野暮か武士附合ひ。主は此方の店頭、今日の上使は勇み肌、そんなら物事生世話にして、跡で話を付けやせう。さてこれからが今一條。（ト思ひ入れ）六郎公連、賴光公が、味方に加へんその爲に、持參いたしたお墨附、お受けか、聞きたい。

　　　　ト立文を見せる。鬼兵衞思ひ入れ。

鬼兵　その御返答暫く御容赦。

綱　源氏へ味方は不得心なか。

鬼兵　イヤ、左樣でもござらねど、今日下作なこの活業、刀の手前も。

綱　左樣あらんと態々と、上使に參つた渡邊が、面と云ふと矢ッ張り時代めく。鬼兵衞さん、面の立つやう、お賴み申しやす。

鬼兵　その調子で賴まれちやア、まんざらな御挨拶もなりやすまい。ようござりやす。今日の七ッの鐘

までに、七ッの影の良門どの、

綱　わしが役目の渡り引、待つてくれうか。

鬼兵　さういふ始末サ。

綱　して又、味方に抱へる返事は

鬼兵　それも後まで臍を決め、武士にならうか、矢ッ張り洒落た

綱　泥水呑んで、氣を樂に、暮らす心か、但し又

鬼兵　銹びた刀を今一度、帶刀するか。

綱　武士町人の隔てなき

鬼兵　引張り込みのこの長家、四ッ切り行燈を暮れ六ッに

綱　その刻限までもう一遍。

鬼兵　廻つて來るうち胸の戸も

綱　明けるも仕合せ、さもなくば

鬼兵　三度廻るに谷の戸の、明けて云はれぬ

綱　隱まふ良門。

ト ちよつと谷間を窺ふ。鬼兵衞隔てゝ

鬼兵　マア、奥へ

綱　廻つて來やすよ。

ト唄になり、正面の屋體へ入る。思ひ入れあつて簾下ろ。鬼兵衞殘り、跡合ひ方。

鬼兵　ハテ、今日はこの長屋へ、樣々の者の來る日だわえ。その揚句に久し振りでの上使の挨拶、ちつとの內も石部金吉、これだに依つて、モウ〱、一生武士になる氣はどうして

ト煙草盆を引寄せる。合ひ方になり、奥よりお百、茶臺に茶碗を載せ出て

百　旦那さん、ハイお茶。

ト立ち身にて差出す。

鬼兵　アヽ、煮花か。（ト取らうとするはずみに茶碗、頭の上へ落ちる）アツヽ〱、何をしやアがる。

トこのうちお百、下の方へ來り、笑つて居る。

べら棒め、笑ひ事ぢやアねえ。常不斷いひつけて置くのに、立つて茶を出しやアがるな。沸茶を頸の廻りへ、アヽ、ひり〱するワ。油藥でも塗らざアなるまい。今度から氣を付けて出せ。エエ、ちつと性を付けやアがれ、大間拔め。

百　ト唄になり、思ひ入れあつて奥へ入る。お百、跡見送り笑ひながら、鬼兵衛が眞似をして
今度から氣を付けて出せ。エヽ、ちつと性を付けやァがれ、大間抜め……ホヽヽヽ、何ぞと云ふと、間抜ぢやの阿呆ぢやのと呵り散らし、朝から晩まで、豆腐取つて來い、酒屋へ走れ、戸棚の鍵が見えぬのと云つちやァ呵り散らして、ほんに髪を結ふ間もねえわな。（トあたりの鏡臺を見つけて）オヤ〳〵、爰に鏡も櫛も有つたわいの。今の間に髪を撫でつけて置かうか。又あの女郎衆が見付けたら、買ひ物買ひに遣るであらう。ちよつとこの間に、撫でつけて置かうわいな。

ト合ひ方になり、鏡臺を引寄せ、下の方へ來て鏡を見付け、顏を直し、髪を撫でつけて居る。この時正面の簾上る。奥より太郎次、以前の樽を持ち、熊、附いて出て來る。このうち合ひ方通り神樂に變る。

熊　モシ〳〵、丹波太郎どの、先刻詳しく聞かうとは、思ひましたがあたりの人目。そんならいよいよその酒は

太郎　これが即ち神變鬼毒酒。只氣遣ひは、あの湧出るその川下は、伊賀壽どのゝ圍みのうち。若しあの瀧へ毒が入ると、城中一度に毒氣に當るは必定。必ずともに御油斷あるな。

熊　アヽ、そんならこの酒を飲めば死ますの。よし〳〵、マァ、試みに飲まして見ませう。

太郎　コレ〳〵、まだ話があるワ。あの奥へ來て居る奴は渡邊、伊賀壽を討手の大將だ。ならう事なら、彼奴に早く飲ませたいものだ。

トこのうちお百、うろ〳〵して聞いて居る。

熊　オツト、その相談は呑み込んだ。此方の内へ來て居る渡邊、そいつは飲ませる算段があらう。

太郎　そんなら必ず、入道ぬかるな。もう一走り城中へ。

熊　太郎どの。

太郎　コリヤ……ドリヤ、出物の支度にかゝらうか。

ト四ツ竹節になり、足早に向うへ入る。熊、樽を取つて

熊　さてこの毒酒は受取つたが、どうぞ試みをさせる奴が（トお百を見付け）コレ〳〵、お百、てめえ其處で何をして居る。

百　わたしかえ。わしや顔を直して居るわいなア。

熊　べら棒め、未だ店へも出ねえ癖に、無駄に白粉や紅を嘗めちらして、子供らに呵られるな。コレ、てめえにおらァ飲ませうと思つて、酒を持つて來た。

百　アヽ、アノわしにその酒を飲ますのかえ。

熊　さうサ、嬉しいか〳〵。して、わりや酒は好きか。

百　アイ、わたしや酒は、いかう好物ぢやわいの。

熊　そりやア幸ひだ。この酒を、早く飲め〳〵。

百　エヽ、アノ、その酒をかえ。

熊　飲むなら早く飲めよ。

百　それだと云うて、飲むと死ぬといふ酒は、わしや否々。お前お飲み。

熊　イヤア、そんなら毒といふ事を

百　今あそこで聞きました。飲んで死ぬ酒はわたしや嫌ひ。お前飲んで死になさんせ。わたしや飲む事はベッかッかう。

ト、ベッカッカウして思ひ入れ。熊、こなしあつて

熊　ムウ、飛んだ事を聞いたな。コレ、必ず人に云ふな。

百　イヽエ、わたしや云ふわいな。

熊　イヤ、此奴困つたあまだ。惜しいものだが助けては置かれぬ。サア、この酒を早くくらへ。

百　サア、この酒を早くくらへ。

熊　エヽ、焦れつてえ。くらつてしまへ。

百　お前が飲んで死んでおしまひ。

熊　エヽ、その息の根を

ト立廻りになり、兩人をかしみの模樣よろしく　件の樽を岩の上へ投げ上げる。これにて樽の口破れて、毒酒流れし見えにて、岩を傳ひ、赤き布水流れる。このとたんに流れの廻りに咲きし鬼薊、仕掛けにて段々枯れる。

百　アレ〳〵、酒のこぼれに彼の水は、赤くなつて流るゝは面白い。そして、アレ〳〵、あの鬼薊が枯れるわいの〳〵。こりや好い仕掛けぢや〳〵。

熊　なに鬼薊が枯れた。（ト思ひ入れあつて見て）イヤア、水色變つて流るゝは、あの水へ毒が入ッたか。サア〳〵〳〵大事だ。あの水が城中へ流れては、伊賀壽の軍勢鏖殺し。サア、大事だ〳〵。

百　サア、大事ぢや〳〵。

ト手を打ち囃す。

熊　エヽ、このあまめは笑ひ事ぢやない。いつそ、うぬを

ト　お百を引付ける。これよりをかしみの立廻りよろしく、流行り唄の合ひ方にて、兩人立廻り　トヾ

熊を瀧壺へ打込み、お百囃し立てゝ笑ふ。熊、毒水を飲みし思ひ入れにて、這ひ上り、血を吐き苦しむ。

百　おいらぢやないよく。

ト思ひ入れ。熊はよろめきながら立ちかゝる。お百逃げるはずみに、熊を又瀧壺へつき込み、覗き見て

おいらは知らぬく。

ト手を打ち囃す。この手拍子を聞きて、奥より歌遊、以前の形にて、同じく手を打ち出で

歌遊　捕まへよく。捕まへて酒飲ましよ。（ト出て來て、お百が手を打つを聞き探り寄つて）ドッコイ、捕まへたく。

百　アヽ、こりや先刻の座頭さん、目の無い癖にどうさんす。

歌遊　どうするとはコレ姐え。目は不自由でもこの歌遊、えて吉に不自由はない。隨分達者な七人藝。コリヤ、座頭の色に、なつてくれぬかく。

百　エヽ、こりやをかしいわいなア。そしてお前は、目鼻立の好い座頭さんぢや。

歌遊　目鼻立が好いとは、座頭にあてつけたお詞、併し手足は……イヤ、其方は男に懸けては、枇杷葉

湯ぢやと聞いたぞや。

百　イエノ〳〵、わたしや枇杷葉湯は強い嫌ひ。わたしが好きなは

歌遊　てまへの好むは

百　耳ッとう……ぢやわいなア。

ト耳の際にて云ふ。歌遊悔りして

歌遊　これはしたり、枇杷葉湯が耳ッとう、すんでの事に目が廻ると云ひたいが、大きに鼻を廻した。それはさうと、先刻てまへが親方から預かつた、影絵に使うた彼の品は、持つて居るか〳〵。

百　アイ、彼の品は、これぢやわいなア。

ト出しかける。

歌遊　サア〳〵、その七ッに映る細工物、ま一度わしに見せと云うたら、又目の無い癖にと云はうに依つて、ちよつと探らせてくれまいか。

百　探つてならば、ソレ、爰に。

歌遊　ドレ、どこに。（ト探り歩く）。

百　エヽ、爰ぢやわいな。

ト突きこかす。この時歌遊、襟より短册の入りし守り袋ぶらさげる。

歌遊　これはしたり、目の無い者をそのやうに、去りとては又（ト探り歩く）。

百　アヽ、ソレ〳〵、其處は山川、谷へ轉けたら落ちるぞえ。

歌遊　誠にこゝらが、我が戀は細谷川の丸木橋。

百　踏み返されて濡るゝ袖かな……バア。

ト此うちいろ〳〵のをかしみ。

歌遊　サア〳〵、ちよつとその品を

百　見たくばお前に、ソレ〳〵〳〵、襟に懸つた（ト取らうとする）。

歌遊　サア、これは滅多に見せられぬ。

百　そんならわたしも見せられぬ。

歌遊　ハテ、ちよつと嗅せて

ト追ひあるく。お百逃げるはずみに岩間より谷へ轉けおちる。歌遊その音を聞きて

イヤア、今の音はどうしたのぢや。若し谷川へ踏みかへされて

ト探り〳〵、同く谷へ轉けおちる。見珍後に窺ひ居て

見珍　今の二人はこの谷間。そんなら蔭に造りし別家に

ト續いて入らんとする。この時長助窺ひ出で、ツカ〳〵と寄つて」

長助　さては谷間に隱まふは

ト見珍を支へ、谷間へ立寄る。見珍立廻つて、長助をあて、岩角に傳はり下りる。長助心付き、立ちかゝる。この時暮れ六ツの鐘鳴る。正面の簾の内にて

綱　この家の主公連どの、最早暮れ六ツ。

鬼兵　上使へお受け致すでござらう。

ト管絃になり、簾上がる。内に綱、やつしの形、大小、床几にかゝり、金棒の先へ玉錢を繋ぎし大鳴子を結び、金札と見せし見得。三寸のけんどん箱に腰を掛け、鬼兵衞、莨盆控へ居る。

鬼兵　最早黄昏、遠寺の暮れ六ツ。

綱　待ちに待つたる御挨拶、源氏のお味方おしやるか。但し強情云ひ張るか。刻限來たゆゑ聞きたうごんす。御亭主、返事はどうでござる。

鬼兵　お味方しませう。

綱　アノ、降參を

鬼兵　隨分しませう。よく〳〵思へば生眞面目に、互ひに我強く云つたとて、役に立たねえ無駄事と、これから氣を更へ當世に、源氏へ味方のこの公連、いよ〳〵お味方申すでござらう。

綱　流石は捌けた御挨拶、それではわしも上使の規模。今から源氏へ扶持人なら、諄く申さず隱まはずとも、良門の詮議をさつしやい。それが卽ち二心無きこなたの胸中。良門討つて手柄が見たい。

鬼兵　承知しました。以前は敵でも、今日向源氏へ仕へるからは、忠義始めに良門どの、……サ、良門公に出ッ會さば、成る程討つて渡しませう。

綱　卽ち目代は二の瀬の源吾。貴殿は殘りて良門の、詮議の上にて首討ち渡さば、その節渡す武將の墨附。

ト墨附を渡す。

長助　心得ました。拙者は殘つて太郎の詮議。首と墨附引替へに。まづそれまでは嶮岨の深山、源氏の軍勢取圍めば、所詮遁れぬ太郎良門。

鬼兵　そんならお前は仲人の、心で跡に殘るがよい。

綱　味方に招きし公連どの、金札ならねど渡邊が、當座の土產この品を、爰へ殘して

ト金棒を渡す。鬼兵衞取つて

鬼兵　玉錢繋ぎしこの鳴子、金札代りに置き土產、鳴子の形角あれど、繋ぎし錢の角とれて、圓う附合ふ味方と味方。鬼の手切れに羅生門、手は切らずとも良門の

綱　首切る役はこなさんへ、身分相應、望みの金札。

鬼兵　承知しやした。

トこの時六ツの太鼓を打ち、長吉、權七、誂への提灯を二張り持ち、づか〳〵と出て

二人　頭、迎ひに來やした。

權七　木の葉落しの天狗風、寒さ凌ぎに

綱　羽織を寄越せ。

兩人　着てござりますかえ。

綱　然らば二の瀨は跡に殘つて

長助　首受取つたらお墨附。

鬼兵　受取るわしは良門の

綱　首見た上で

長助　心得ました。

鬼兵　そんなら上使はお歸りか。
綱　いかいお世話に
鬼兵　あんまり粗末サ。
綱　併し何彼の
鬼兵　あの達入れは
綱　くれ〴〵、頭。
鬼兵　ヤ。
綱　頼みやしたよ。

ト唄、時の鐘、長吉、權七、先に提灯を持ち、綱、向うへ入る。長助は奥へ入る。鬼兵衞、鳴子を持つて跡に殘り、屋體へ上り

鬼兵　心得難き若者ゆゑ、谷間の別家へ隠まひ置き、素性を問へど知らぬとばかり。殊に源氏へこの樣子、委しく聞え渡邊が、上使に來つて今の頼み。目代の武士も殘し置き、あたりを圍ます手配りでは、滅多に油斷は（ト薊の萎れしを見て、よく〳〵目を着け）谷間に生立つ四季咲の、あの鬼薊の萎れしは、何かの氣懸り。ハテナア。

ト思ひ入れ。知らせにつき簾、さら〳〵と下りる。又知らせあつて正面の道具、前面を引上げる。直に誂への鳴り物になり、よろしく道具替る。

本舞臺三間の間、高足の藁菰の庵り。向う岩組み、紅葉の蔦絡み、左右の柱緣側とも皮付きの栗丸太、欄間より古簾かゝり、上の方、屋體の前へ瀧壺をせり上げ、すべて谷底の景色。瀧の水色赤交りに流るゝ模樣にて、よろしく道具納まる。

ト小太鼓入りの樂になり、上の方に薦垂れの安（前幕の良門）切繼ぎ非人の衣裳、結構に仕立てたる形、竹仕込みの刀を傍に置き、面桶を持ちゐる。これへお百酒をつぎ居る。安の後に歌遊、座頭、以前の形にて、安が肩を揉み居る。岩株には千代姫が落したる小袖懸かりある。安の受けたる面桶へ紅梅の折り枝落ちてあり。安これに目を着け居る。お百は歌遊の襟より下りたる短册の入りし守り袋を何心なく見て居る見え。三人とも思ひ入れの模樣よろしくあつて、この儘せり上げる。鳴り物は好きつかけに、跡合ひ方殘る。

安　梅が香や、非人の小屋を思はずも、誘はれたる奧丹波、谷間の樹木押曲げて、瀧をかたどるこの庵、見上ぐる上は鬼が城、今は繁華の盛り場と、聞いたばかりに隱れ住む、この谷間へ落ちかゝつたる……盲人、賤の女、お怪我もなうてお仕合せ。この非人めも安堵いたした。

歌遊　アヽ、そんならお前は、この谷間の非人樣かえ。さうとは知らず爰の內へ、轉げ落ちたる座頭の坊、

取り敢ずお肩の療治、誠にこれが按摩取りで驅落ちでござります。

百　ほんに座頭さんの道連れに、道行ながらわたしも驅落ち。

　　ト此うち安、瀧の流れへ目を着け

安　五百機立てゝ山姫の、手織りの錦蔦かづら、峰を染めなす紅葉の、木々にはあらで大江山、いくのゝ道を流れ寄る、岩切り通す瀧津瀬の、水も怪しき紅の、血汐に見ゆる時もあり、それこそ鬼が窟ぞと、聞きしに違ふ水上は、色を商ふうかれ女の、化粧の水を紅白粉。

歌遊　化しやうと聞けば化け物と、思ひながらも見えぬが一德。

百　ちよつとお酌と差寄れば、持つてござんすその品は、慥かに非人の

安　所持する面桶、杯代りと引受けし、酒に紅梅、風に誘はれ落花狼藉。白梅ならば此方の安堵。紅梅ゆゑに少しは氣懸り。

　　トきつとなる。この時合ひ方變り、歌遊ひねりながら、わなわな顫ふ。此はずみに出かゝりし守りの短冊が目にかゝるゆゑきつと見る。この拍子に安の守りに入りし短冊出かゝる。お百これへ目を着ける。兩人思ひ入れ。

「いかにせん身も不知火の筑紫にし、あづまの果の人ぞ戀しき」……ヤヽ、こりやこれ妾が

歌遊　エ。

ト思ひ入れ。安、氣を更へ

安　ハテ、聞き馴れしその歌は、この短册を御所持ある……さては床しき

歌遊　ハテ、座頭のわたし、云はゞ盲目の垣覗き。

安　して、短册の持ち主は

歌遊　知らぬが佛。

安　守りの內の戀歌の心。

ト歌遊が顏を見つめて、懷中の繪姿と、そつと較べる思ひ入れ。

百　「山幾重八重の汐路を隔つとも、緣は深きものにぞありける。」

ト良門の短册を讀む。歌遊聞き耳立て

歌遊　それぞ九州黑崎の、妻に贈りし

安　この繪姿に

ト驚き、我が守りを手早くしまふ。歌遊も一時に守りを隱し、兩人ホツト思ひ入れ。

歌遊　ハテ、お若衆は、いかうお肩が

安　サヽ、もう宜しうござります。これは近頃お慮外な。非人の私し、ハイ、有り難うござります。

歌遊　これはしたり、高みから落ちかゝり、介抱されたそのお禮、按摩で濟めば安いもの。もそつと揉んで進ぜませう。

安　イエ〳〵、もう宜しうござります。して、此方のお女中樣、どこぞ痛めはなされませぬか。

百　アノ、わたしも爰へ落ちしなに、ハツと思うてこの肩が、アイタヽヽ、コレ、座頭さん、わたしをも、ちつと揉んでおくれぬか。

歌遊　揉まいではく〳〵、上から落ちて來る前から、揉みたうて〳〵、そればかりで落ちた谷間。モシ、お前はいよ〳〵アノ、野伏りどのかえ。

安　左樣でござります。この間まで都なる、一條の戻橋、身は菰垂れの安といふ、野伏りでござりまする。生れ所も二親も、存ぜぬからは腹からの、正眞正銘交りなし、系圖正しき非人めを、爰の旦那の鬼兵衛樣が、お連れなされて此やうに、崖の下家の仕がく場に、何を見込みが有つてやら、小屋へも歸さず留めさつしやるは、誠に有り難迷惑でござります。

百　オヤ〳〵、そんならお前は、お餘り貰ひのお乞食さんかえ。かう見た所が好い若衆さん、立派な殿振り。お乞食さんでも大事ない。わたしやお前の肩を揉んで上げようわいな。

ト安の肩を揉みにかゝる。歌遊思ひ入れあつて

歌遊　エヽ、腹の立つ〳〵。こなたに氣のあるこの歌遊、おれを差置きその若衆どのゝ肩を揉むなら、よいワ〳〵。氣のあるてまへのその肩を、おれが揉んでやらうワ。

トお百の肩を揉みにかゝる。

百　こりやおかたじけ。精出して揉んでおくれ。

歌遊　揉まいでどうせう。上から下まで揉んでやるワ。

安　モシ〳〵、女中樣、わたしはもうお揉みなされずとようござります。只今まであの座頭さんに、揉んでもらうたそのお禮に、又わたしがお前を揉んで上げませう。

トずつと立つて歌遊の肩を揉む。

百　これはしたり、折角お前の肩を揉まうと、思ふわたしを振り捨てゝ、エヽ憎らしい、揉んで上げるわいなア。

トずつと立つて安の肩を揉む。歌遊思ひ入れあつて

歌遊　これはどうだ〳〵。折角揉んでやらうとすれば、ずんと立つて、あのお乞食の按摩を取るとは、さうはさせぬワ。矢ツ張り手前を揉んでやらうワ。

トずつと立つて、又お百の後へ廻り、肩を揉む。この時奥より千代姫出かゝり、見惚れる思ひ入れ。

安　これはしたり、折角お前を揉んで上げようと

トまた立つて行き、歌遊の肩を揉む。千代姫思ひ入れあつて安に見惚れ、そつと寄つて、安が後へ廻り、肩を揉む。

百　アレ、又其方へ行きなさんしたかいなア。わたしやお前の肩が揉みたいわいなア。

ト立つて行き、安と思ひ、千代姫が肩を揉む。

歌遊　これはしたり、又跡の〳〵千次郎を始めたか。否でも應でも、揉んでやるワ〳〵。

ト探り〳〵跡へ來る。お百ずつと立つ。歌遊これを知らず、千代姫をお百と思ひ、肩を揉む。

安　モシ〳〵、それではわたしばかり好い正月を致します。どうぞわたしにも揉ませてやつて

歌遊　下さりませうと云ふ方でな。

安　餘まり違ひもござりませぬ。わたしはアノ女中樣の

トずつと立つてお百が手を執り、脇へ來て肩を揉む。歌遊は見えぬゆゑ千代姫を揉んで居る。

百　これはしたり、お前の肩を揉みたいわいなア。

ト互ひに辭儀合ひして跡へ廻り、又先より立つて跡へ廻る。此うち捨ぜりふにて兩人思ひ入れ。歌遊

　　これにて心付き

歌遊　待つたり〳〵。どうも合點が行かぬわえ。おれは一人捕へて揉んで居るが、二人の聲は其方である。おれが精出して揉んで居るこの女中は

　　ト千代姫が頭を探り見て

コレ〳〵、何やら爰に生えたのは

千代　アイ、わたしや千代姫ぢやわいなア。

歌遊　ナニ千代姫ぢや。して、爰へ生えたは

千代　そりや八重角。モシ、鬼娘ぢやわいなア。

三人　イヤア。

　　ト三人惘りして飛退く。

歌遊　さてこそな。先刻見えた鬼娘の目見えぢやな。

安　してマア、お前は、何しに爰へござりました。

千代　モシ、お若衆さん、聞いておくれ。わたしや最前上着の小袖を、この谷間へ落したと思はんせ。それを取りに參つたわいな。

安　エヽ、左様でござりまするか。道理こそあの岩角に、振り袖の小袖が上より落ちかゝり……そんなら取つて上げませう。（ト岩に懸りし小袖を取つて）サヽ、これを持つて、早うござつた道へ、お歸りなされまし。

千代　イエ〳〵、わたしや歸らぬわいなア。モシ、お若衆さん、その小袖はわたしのぢやがな、斯う見たところがこの谷間の日蔭住ひ、さぞや冷えるでござんせう。この小袖は、マア〳〵、お前着て居なさんせ〳〵。

安　これはしたり、お前のお小袖、持つてお出でなされまし。

千代　ハテ、着て下さんせいなア。

百　コレ〳〵、着せる物なら遠慮せずに、着るがよいわいなア。

歌遊　てまへにはおれが着せるワ。

百　エヽ、すかん事云ひなさんすな。

ト此うち安、千代姫が振り袖を着て、迷惑なる思ひ入れ。

安　これはマア、思ひも寄らぬ振り袖姿、併しこれでは、餘程暖かうなりました。

千代　サア、お前が暖かうならんしたら、わたしが願ひを叶へて下さんせ。

安　モシ〳〵、お前のマア願ひとはえ。

千代　アイ、惚れたわいなア。

安百　エヽ。（ト恟りする）

千代　どういふ縁やら今爰へ、来るとその儘お前を見て、惚れたとこそいへ〳〵、モシ〳〵〳〵、どうもならぬ程惚れました。わたしもこれまで云ひ交した男があつて、お腹に小兒まで宿した、その山伏と、死ぬ死なうとコレ〳〵（ト思ひ入れあつて懷中より剃刀を出し）此やうに剃刀までも持つて參つたが、その山伏は思ひ斷り、今からお前に河岸を替へ、色になる氣ぢや、お若衆さん、サ、僞りならぬ心中に、指でも、髪でも、但し又、コレ〳〵、お好みならばこの角なりと切つて上げる。サ、返事して下さんせ〳〵。

安　アヽ、モシ〳〵、其やうに押賣り心中、わたしは御免なされまし〳〵。

百　さうぢやわいなア。鬼娘の癖にこの若衆さんに惚れたとは、エヽ、厚かましい、アノマア、顔わいな。ホヽヽヽ。

千代　何ぢやこの女は、わしが顔見て笑うたな。コレ、若衆さん、お前ゆゑにはわたしや、この女に笑はれて耻掻いたぞえ。アイ、もう〳〵生きては居やんせぬ。この剃刀で自害して死にやんす。留

めさんすな。サア、自害ぢや〳〵、自害立ぐらみ。

ト剃刀を咽喉へ當てゝ騒ぐ。皆々留めて

歌遊　コレサ〳〵、危ない〳〵。マア〳〵、刃物を寄越さつしやい〳〵。

ト千代姫が持つたる剃刀を、無理に引つたくり、握つて居る。この體を安、お百目を着ける。

千代　イエ〳〵、剃刀を渡さんせ。

歌遊　イヽヤ、渡されませぬ〳〵。どこにマア滅法界な、刃物を持つて、死なうの何のと剃刀三昧、怪我をしたらどうしたものだ。

安　左樣でござります、刃物三昧がいつち惡うござりますが……モシ、歌遊さんとやら、お前樣、ようマアお手が切れませぬの。

歌遊　エ。(ト思ひ入れ)。

安　爭ふ剃刀竹箆を、握るやうなる取捌き。それに少しの疵も見えず、ようマアお前は怪我もなう。

百　ほんに手に疵も付けぬとは、こりやマア、お前は丈夫な事でござんすな。

歌遊　なにサ、わしが手の丈夫なではござらぬ。この剃刀が鈍ら、これぢやア切れませぬよ。

ト捨てる。安その剃刀を取つて

安　左様ならこの刃物は、大きなまくら物、切れる役には立ちますまいな。

歌遊　大方そこらと見え……ませぬて。

安　お前は左様仰しやるが、アノ、わたしは切れるか、切れぬか。

ト剃刀にて左の小指を面桶の上にて切る。薄ドロ〳〵になり、安の懐中せし一卷の德を現す見えにて安ちよつと懐を押へる。お百も思ひ入れ。千代姫うろたへ

千代　ヤア、お若衆さんが指切つたか。ドレ、治丹坊でも取つて來て上げようわいな。

ト驅けて、下座へ入る。歌遊聞き耳立て

歌遊　アヽ、そんなら今のあの音は、この非人の若衆どの。

百　アレ〳〵、指を切つてぢやわいな。

歌遊　ドレ。

ト立ちかゝる。

安　見えますするか。

歌遊　ヤ。（ト思ひ入れあつて）イヽエ、見えませぬの。

安　左様でござらう、見えますならばこの繪がお前の、この兩の目に見えますか。

ト良門の繪姿を出す、お百見て

百　ヤ、それこそ相馬の

安　アコレ、この繪はな、新内裏、その繪圖面と見えますか。

歌遊　イヽエ、皆もく見えませぬが、新内裏とは珍らしい。こなたが其處で話すなら、耳は人並盲人の聞取り傍聞耳學問、覺える爲に世話ながら

百　側のわたしも面白い、お話しならば聞きたうござんす。

安　女中の聞いて他愛なき、無駄事ながら聞くも興……その無駄事は今爰で、切つた小指は誰への心中。これもするゝゝ

歌　エ。（ト思ひ入れ）。

百　痛い指よりわたしらは、髮切るのが大きなましサ。今云はしやんすその繪の譯を

安　聞くは當座の耻とやら、聞くも語るも末代の、耻辱となりし下總の

歌遊　三木足らぬ猿島郡、岩井の鄕の新内裏。

安　比叡の峰より瞰下せし、平安城を今爰に

百　瞰下す繪圖は何ぢやゝら。

歌遊　解らぬ女子に、目の無い座頭。

安　荒くれ武士もむくつけに、假に官位の吾妻の内裏。

歌遊　ドレ。

ト眼を明かうとする。安これに目を着ける。歌遊ちやつと閉ぐ。これより誂への合ひ方、繪圖を眞中に置き、安は上、歌遊は下、お百を中に夾み、繪圖へ思ひ入れ。

安　清涼紫宸も藁葺きの、褄戸御格子渡殿も

百　それこそ慥かに繩絡げ。

歌遊　巨勢の金岡描きたる三十六の繪障子には

百　反古で貼りたるいろはにほへと、塵紙交りの切貼りにて

歌遊　桐壺、梨壺、梅壺は、裏の背戸屋の物置部屋、玉だれ古き、菰垂れにて

百　しやうねい殿の御寢處に、帳臺几帳は、

安　藁埃かゝりの古暖簾。

百　ゆこうもこうは

歌遊　前垂れ股引さく半纏。

安　陽明日花都芳門。
歌遊　建禮待賢いんふ門、十二の御門は
百　庄屋、百姓、長家門、垣の破れの犬潜り。
安　九重の玉しき庭と詠ぜしも
百　八重に藁敷きかつくりそつくり、槌打つ跡はでくぼく庭。
歌遊　殿上人の冠りは
安　夜なべ仕事の懸とうがい。
百　減つた摺子木斜に構へ、鍋なり公家の前渡り。
安　參內奏す鈴の音の
百　稻付け馬の驛路の鈴。
歌遊　女御更衣は典內侍。
安　手織り木綿の五ツ衣。
歌遊　弘徽殿の細殿にて、朧月夜の內侍の鏡の口ずさみ。
安　在所嗅子の訛りし鼻歌。

百　連添ふ聲は田植歌。
安　男唄ふは麥搗く歌。
歌遊　紅葉の御賀、花の宴。
安　德利の酒の喜見城。
歌遊　伶人舞樂を奏するは
百　この世の日高に念佛の太鼓。
安　その外舞姬盆踊り、似ても似付かぬ年中行事、都を寫す相馬の内裏、この繪圖面に

ト歌遊は無念のこなし。安は繪姿を取つて引合す思ひ入れ。

云はれぬ企て、天の憎しみ。
歌遊　天の憎みはこらへても、こらへられぬは上戸の癖。酒があるなら天目で
安　内裏の學び。(ト銚子を取つて) ドリヤ、落葉を焚きませうか。

ト思ひ入れ。この時簾の内にて

鬼兵　その天杯は取措いて、配膳を据ゑませう。

ト合ひ方になり簾卷上げる。内に結構なる配膳を持つて、鬼兵衞、立ち身にて、思ひ入れあつて、安

見て

安　ヤ、あなたは旦那の鬼兵衞樣。

鬼兵　見ればお座頭、目見えの女、てまへ達も爰へ來てか。

百　アイ、わたしや上の崖からころ〳〵と

歌遊　二人連立ち、轉け落ちて參りました。

鬼兵　危ない事の。おれもこの程伴れて來た非人の若者、もう食事の時と思ふゆゑ、盛立てゝ持つて來たのサ。サア、加減の好い內。

安　これはしたり、未だ欲しうはござりませぬ。お心遣ひは、御無用になされて下さりまし。

鬼兵　欲しくないなら、勝手な時に食ふがよい。ほんに、先刻寄越した、銚子の酒はまだあるかの。

安　ハイ、只今まで、鬱を晴らして居りました。

鬼兵　酒があるならおれも相手にならうが、ほんに杯はあるかの。

安　イエ〳〵、杯はござりませぬゆゑ、持ち合せましたこの面桶、これで今まで御酒をたべました。

ト面桶を出して見せる。

鬼兵　イカサマ、此奴はいゝ杯だ。酒があるなら、わしも面桶で飮んで見よう。（ト取上げる）。

安　アモシ、そりや非人の道具、どうして其やうな器で、けしからぬ、およしなされまし。

鬼兵　ナニけしからぬ事があるものか。乞食非人も同じ人間、その人間に隔てはない。風の變つたこの杯、これで飲みたい。

安　その杯が旦那樣、お氣に入つたら私しが、これに似寄りの好い器、この杯でお勧め申しませう。

ト合ひ方變つて、片脇の蓆の内より、金冠を取出し、面桶の上へ載せ

旦那樣、これが丁度好い杯、これで一献。

ト鬼兵衞に差出す。鬼兵衞、よく〳〵見て

鬼兵　こりやこれ御冠、非人のおぬしがこの品を

安　拾ひました。

鬼兵　そりや何處で

安　所は都市原野、無常の煙りに誘はれて

鬼兵　月も朧の雨空に、火星の明りにあり〳〵と

安　影も七ツのその品と、衣冠正しき御裝束。

鬼兵　闇も閃めく金巾子の

安　冠に添へし一卷は

歌遊　それぞ世に云ふ驪龍の一卷。（ト思はず云ふ）。

鬼兵　お坊は知つてか。

歌遊　ア、イエ、聞いたばかりサ。

鬼安　アノ、割符の合つた

歌遊　お話しでござります。

ト三人よろしく思ひ入れ。鬼兵衞、安を見て

鬼兵　アヽ、こなたは思ひも付かぬ、振り袖を着て居るの。アヽ、こりや谷間ゆゑに冷えるのか。

安　ハイ、左樣でもござりませねど

鬼兵　それに男のその形で

百　アヽモシ、そりや先刻の鬼娘さんが、あの岩角へ落した小袖、この若衆さんに着せて行きなさんしたわいなア。

鬼兵　アヽさうか、寒くばおれがどんざ布子、寒さ凌ぎに着るがよい。お百、てめえ、あの道を傳はつて、取つて來やれ。

百　アイ、取つて參りませうが、あの岩角に取付いて上がるのかえ。
鬼兵　藤蔓に取付いて上がれば、直に長屋の入り口へ出る。ちよつと取つて來てやりやれ。
安　イエ〳〵、必ずお世話なされて下さりまするな。
百　それぢやと云うて、取つて來て上げようわいな。
歌遊　アヽ、こなたが行けば、おれも道連れにして、親方の内まで、送つてもらひませう〳〵。
鬼兵　ほんにさうしてやるがよい。爰にちつと話しもあれば、お百、お坊が手を引いて、送つてやつてくりやれ。
百　エヽ、また座頭さんを連れて行くのかいな。薄面倒な。サア、來なさんせ。
歌遊　深い御緣だ。
　　ト　お百、歌遊の手を荒げなく引つ張る。
鬼兵　アヽ、コレ〳〵、お百、てまえアノ、先刻におれが預けた品を、持つて居やうな。
百　アイ、影繪に寫した細工物かえ。
　　ト　帶の間より、以前の袱紗包みを出さうとする。歌遊思ひ入れあつて
歌遊　そんなら七ツの

ト手を懸けようとするゆゑ、お百、ちやつと懐中する。歌遊氣を更へ

送つておくれ。

ト唄になり、歌遊が手をお百引き、思ひ入れあつて下座へ入る。跡合ひ方。

鬼兵　コレ、客人、ちよつと爰へ來て下せえ。（ト安が手を執り、二重へつれて上り、件の金冠を差出し）名乘つて下せえ。

安　エ、そりや何を名乘りまする。

鬼兵　平親王將門公の御公達、將軍太郎良門なりと、お名乘りなされて下さりまし。

安　思ひがけない旦那樣。この程都の戻り橋、野伏り非人の私しを、お伴れなされて人知れず、谷間の隠れ家。ちぎれたれども御簾洩る月、内裏に等しき崖造り、この非人めを招待なされ、有り難うはござりまするが、先達ても申す通り、私しは菰垂れの安といふ、非人に相違ござりませぬ。疑ひはらして住み馴れし、蒲鉾小屋へ、お歸しなされて下さりませ。

鬼兵　イヽヤ、さうは云はせぬ。いよ〳〵違はぬ良門どの、證據があつても名乘らつしやらぬか。

ト安これにて少し思ひ入れあつて

安　して、その證據は。

鬼兵　證據はこれだ。

ト前幕に手に入りし廻文を出す。安ちよつと見る事あつて

安　その書き物が證據でござるか。

鬼兵　戻り橋にて非人の會合、これ皆良門味方の者、諸國の殘黨驅け催ふす、この廻文がわしが手へ、入つたからは包み隱さず、良門どのと名乘らつしやい。

安　たとへ左樣な廻文とやらが、出ようが、わしは存ぜぬ、知らぬ、一向覺えはござりませぬ。

鬼兵　すりや、これ程に心を盡し、こなたの素性を尋ねても、わしには明して下さらぬか。

安　ハテ、諄い事仰しやりまし。只今も申す通り、良門とやら、太郎とやら、二ツの名ある非人ではござりませぬ。この上お尋ねは御無用でござります。

鬼兵　そんならどうでも……アヽ、牛に經文、馬の耳……アヽ、云ひますまい〳〵。ふつつりと今から尋ねますまいが……コレ〳〵折角

ト件の膳を安の前へ直す。

安　有り難うはござりまするが、斯樣な膳部へ坐りまする私しではござりませぬ。似合つたやうに面桶へ、お剩り物の何なりと、取らせてやつて下さりまし。

鬼兵 イヽヤ、折角持つて來て、この儘持つても立たれねえ。否でも應でも達引に、この配膳へ。

安 ハテ、聞譯のねえ旦那樣、非人の身にて結構な、この高蒔繪の懸け盤が、わしに第一氣に入らぬ。御馳走御無用、氣に入りませぬ。ハイ、早く持つて立たつしやりませ。

ト足にて膳を蹴返す。

鬼兵 これ程進めて承引なく、足下に懸けし慮外なわつぱ。良門ならずば

ト立ちかゝる。安、懐より驪龍の一卷たちよつと出しかける。薄ドロ〳〵にて、鬼兵衛、思はずタヂタヂとして、きつと思ひ入れ。

ハテ、心得ぬこの動搖、察するところ藤太秀鄕、龍宮城より持來りし、驪龍と名けし一卷あり。辰の年月日時揃ひし者、男女に限らず所持する時は、自然と妙術受くると聞く。若しやはそれを所持なす奇特か。

安 イヽヤ、この身に覺えはござらぬ。さはさりながら私しを、良門ならんとお尋ねは、して又あたは將門に、由緣りのお人か。

鬼兵 それも疾くより云ひ聞かし、本名隱さぬ六郎公連。斯樣に心を盡す上は、包まず隱さず速かに

安 名乘れとあつても矢張り野伏り。併しあなたが正銘の、公連樣なら私しも、お尋ねなさるゝ良門

様に、成り代ッて非人が御意見。

ト冠を取つて散々に打つ。鬼兵衛その手を執つて

鬼兵　こりや野伏りの身を以て、この公連を、なんで打擲いたすのだ。

安　良門どのゆゑ

鬼兵　ヤ、

ト思ひ入れ。合ひ方變る。安、きつとなつて

安　承平三年の花の空、無念殘りし將門の、召されし冠のこの打擲、云はゞ相馬の譜代の武士、たとへ諫めを聞入れなく、位を望む企てあるとも、臣下の公連附添はゞ、やはか暗々貞盛、秀郷、彼れらが優しき軍配に、落命あるべき君ならねど、身退きたる臆病未練、命惜しさに武門の道を忘れし公連、予が目に懸らばカウ〳〵、不忠の武士とこの如く、良門どのなら恨みの數々。

ト冠にて散々に打ち、襟髮摑んで突放す。此とたんに上着のやつし脱げて、下に白無垢、水上下の形になる。安、きつとなつて

ヤヽヽ、下に着込みし無紋の上下。さては覺悟の心よな。

鬼兵　良門公に逢ひ奉らば、君の胸中探り知り、この身を抱いて諫めに入れ、聞入れ給はぬその上は

覺悟極めし六郎公連。この程一條戻り橋、非人となつてござある御身、正しくそれと知つたるゆゑ、同道なして實名を、尋ね問へども今日まで

トこの時見珍窺ひ出て

見珍　さてこそ隱まふ將軍太郎。いづれも、ソリヤ。

ト高聲に云ふ。十松、凜々しき形、跡より岩倉喜藤太、高峯四郎、八瀬の權藤、片岡金吾いづれも四天の形にて、ばら〳〵と出て

十松　太郎良門、腕

四人　廻せ。(ト取卷く)。

鬼兵　この公連が詞も待たず、緩怠至極。

見珍　イヽヤ、太郎良門を

トかゝる。鬼兵衞立廻つて、見珍を見事に切り下げる。十松跡四人とも安へかゝる。安ちよつと立廻つて、一卷を出し、差翳す。これにて、ドロ〳〵になり、五人とも目を眩し倒れる。安これを見て、につこりと思ひ入れあつて、兩人とも二重へ上がる。ト簾一面に下りる。直に下座よりお百驅けて出る。跡より歌遊、以前の形にて追ひ驅けて出て來り、あちこちとお百を追ひ廻し、トゞ捉へて

歌遊　ドッコイ〳〵、逃がさぬ〳〵。捕まへた〳〵。

百　これはしたり、この座頭さんは、又わしを追うて來なさんしたか。エヽ、爰を放しなさんせ〳〵

歌遊　イヤ〳〵、放さぬ〳〵。放さば直に瑞德寺。さうはさせぬワ。强つて放せなら放さうが、その代り、てまえが持つて居る、あの七ッに見えた包みを、ちよつと見せてくれぬか〳〵。

百　エヽ、又あの品を見せいと云はしやんすのは。コレ〳〵、これかえ。

ト包みを出して探らせる。歌遊探り見て

歌遊　オヽ〳〵、これぢや〳〵。慥かにこれがわしが尋ぬる

ト取らうとする。この時小蔭より、目ばかり出したる、黑の忍び、窺ひ出て、歌遊を突廻し、取つて投げ、お百を引擔ぎ、時の鐘の送りにて逸散に向うへ走り入る。歌遊殘り、思ひ入れあつて

これはどうぢや。何でもあの女が持つて居る、包みの品を取つた上に、あの女も抱いて寢ようと思つたら、二ッに一ッ皆いすか。斯う投げられたは今の女か。ハテ、强い奴ぢやなア。

トうつとりとなる。この時バッタリと音して、下の柴垣を分ける。この音に歌遊、恟りして顫へながら、探り〳〵小隱れする。ト柴垣を切り拂ひ、安、繩を襷に懸け、以前の振り袖を高くからげ、仕込みを拔持ち、冠を咬へ、搔分けて出る。尤も此うち凄き鳴り物。この跡より十松附いて出る。安、白

刄を納め、思ひ入れ。十松窺ひ寄つて

十松　捕つた。

ト十手を振り上げる。安、懐中の一巻を翳す。ドロ〳〵になり、十松立ち身にて苦しみ、見事に倒れる。安、一巻を懐中して、冠を持ち、花道の方へ行かうとする。歌遊この時、探り〳〵出て、窺ひ寄つて、安を留める。安、振り解いて、歌遊を切らうとして、氣を變へ、向うへ行きにかゝる。

歌遊　曲者待つた。

安　ヤ。

トぎつくり思ひ入れあつてとまる。

歌遊　相馬に由縁りの紛れ者。マア〳〵待つた。

安　紛れ者とは過言の至り、兩眼叶はぬ身を以て、要らぬ口出し、退り居らう。

歌遊　イヽヤ退らぬ。盲人が、今組留めて（ト取付く）。

安　いらぬ腕立て。

歌遊　座頭が相手に

ト盲探りの立廻りよろしくあつて、歌遊、見えよき止りに、兩眼見開き、きつとなる。

安　盲人なりと思ひの外、さては兩眼明かよな。

歌遊　閃めく眼は日月の、千尋の底まであり／＼と、又は高山深山の樹木、梢に雲霞の群る諸鳥、一分一點五分五厘、人に勝れし兩眼にて、見拔いて置いたわつぱの曲者、搦め捕つて手柄にする。サア、速かに、名乘つた／＼。

安　いはれぬ廣言、覺悟なせ。

ト切りつける。歌遊、かい潜つて立廻り。此はずみに安、一卷と冠をわざと落す。歌遊、手早く取つて、きつとなつて

歌遊　さてこそ以前所持せし金冠、今一品は藤太秀鄕、奪ひ取られし驪龍の一卷。これを所持なす上からは、相馬に由緣の殘黨ならん。名乘つて我れに繩かゝれ。

安　して、其方は何者にて

歌遊　我れは渡邊譜代の郎等。

安　匹夫如きに速かに、名乘り聞かさん姓名持たぬワ。

歌遊　强つてその名を明さぬ上は、一卷、冠を破却なさうか。

安　サ、それは

歌遊　但し實名云ひ聞かすか。

安　サア、それは

歌遊　破却なさうか。

安　サア

歌遊　サア

兩人　サア〳〵〳〵

歌遊　なんと。（ト詰め寄る）。

安　戰場ならで姓名を、名乘るまじきと思ひしに、一卷、冠を破却なすべきその有り樣、辨へ知らざる匹夫ながらも、その振舞に力なく、今ぞ名乘らん、よつく聞け」（ト思ひ入れあつてきつとなり）辱くも桓武天皇の御子、葛原親王より四代の後胤、常陸の大椽國香が弟、鎭守府將軍義政が嫡男、下總國猿島郡、岩井の郷に新都を築き、承平の戰ひに、經基、貞盛、秀郷が爲に、無念の最期を遂げたりし、平親王平將門が一子、將軍太郎平良門……とモシ、お名乘りなされて下さりませ。

ト下に座り、繩襷を取る。振り袖ほぐれて、裾亂れしごきの形になる。

歌遊　ヤヽヽなんと。
安　不死身にあらぬ小指の心中、これもお前に。
　　ト紙に包みし切り指を出す。
歌遊　ヤ。
安　お懐かしうござりまする。
　　ト思ひ入れ。合ひ方變る。
歌遊　我が實名を名乘りし汝、合點行かずと思ひしに、さては婦人のその性隱し、良門なりと云ひしは女、殊に小指を心中とは。
安　そのお尋ねは怨めしい。お顔知らねど親々の、云ひ號けある妾が夫、連添ふ殿御は天が下、廣い世界に二人とも、懸替への無き良門樣、證據は即ちお前の御手跡。肌身離さぬ一首の歌。
　　ト守りの短冊を出す、歌遊取つて
歌遊　「山いくへ八重の汐路を隔つとも、縁は近きものにぞありける」……こりや某が贈りし詠歌、まツたその節此方へ、云ひ號けせし女が元より、贈り越したるこの短册、覺えぞあらん。
　　ト懷中より守り袋の短册を出し、安に渡す。安取つて

安「いかにせん身も不知火の筑紫にし、吾妻の果の人ぞ戀しき」……疑ひもなきわたしが手跡。最前思はず互ひの懐中、落ちかゝつたる短册の、證據の外はお前のお行くへ、如何成行き給ふぞと、明暮れ案ずる其うちに、雁の便りに拾ひし姿繪、引合すれば寸分違はぬ

ト姿繪を出し見せる。

歌遊　津々浦々へ配符の繪姿。
安　鳥が教へしわが夫の
歌遊　人相書と思へども
安　知らぬ顔なる最前の
歌遊　人目の關に隔てられ
安　名乗り合ふにも
歌遊　心に任せず
安　生死の程も如何ぞと
歌遊　長の年月、案じに胸の
安　安き心もあらばこそ

歌遊　尋ね慕ひし

安　念が届いて

歌遊　互ひに爰で

安　廻り逢瀬も嬉しい詠歌。

歌遊　それが證據の女夫の名乗り。

安　思へば我が夫、良門公。

歌遊　桔梗の前。

安　よう顔見せて下さんせいなア。

ト歌遊に取着き、思ひ入れ。

歌遊　さてはそなたが某の、云ひ號けせし桔梗の前にてありけるか。最前それなる繪姿を、相馬内裏の繪圖面と僞り、我が胸中を探らん爲、賤の女と戯れの、あしらひもいひなす口占、詞の内にも相馬の成行、憂ひを催ふす五音の調子、只者ならずと推量に違はず

桔梗　父純友の許しにて、女夫の結びはなすもの丶、夫は關東、妾は九州、お顔拜まぬ其うちに、朝敵なりと兩家の滅亡。良門公は亂軍にて討死とも、又お命全う、都にお忍びなさる丶とも、風の便

りを聞くばかり。殊にわたしは辰の年月日時揃ひし誕生なるを、父純友どの密に招き、汝世にも稀なる生れ、その年月揃ひし者、藤太秀郷龍宮より、持ち歸つたる驪龍の一卷、それを所持なすその時は、男女に限らず妙術を、その身に受くると委しき敎へ。幼な心に聞きつるが、何卒一卷手に入らば、かよはき女の身ながらも、妖術行ひ我が夫、そのお力にもと心づき、流浪の內にも不思議にや、市原野のほとりにて、手に入る一卷、懷中なせば噂に違はず、自然とその身も雲霧に、形を隱す希代の一卷。これを囮りに徒黨を集め、男姿にこの身をやつし、良門なりと思はせしも、命なければ源氏にも、さては良門亡びしと、枕を高う思ふは治定、その虛に乘つて御身の大望。何處にお忍びなさるゝとも、旗揚げあるは疑ひなしと、淺き女子の心より、思ひ付きたる將軍太郎、良門樣と勿體ない、夫の姓名我が儘に、野伏り非人に穢せし段々、我が夫、モシ、お免しなされて下さりませ。

歌遊　その云ひ譯にて、なに怨まん。男を思ふ優しき胸中、世に亡き我れをさほどまで、貞女を立てし桔梗の前。云ひ聞かさんはこの身の生立ち。父將門の血筋を受繼ぎ、我れも不死身の威德にや、刃の立たざる生れなれども、老少不定の世の例ひ、一旦この身に難病受け、都に於て落命せしが、一味の武士の計ひにて、年古る蜘蛛の生血を以て、不思議に蘇生のこの良門。其方が一卷手に入

る夜、父將門の召れし白衣、我が手に入つて肌身を離さず。

梗桔　この上は妾が手に在る一卷、まつた父君召されし冠、この所にてお前に手渡し。イザ、お受取りなされませう。

ト二品を渡す。歌遊思ひ入れあつて

歌遊　又その父の形見の冠、白衣も共に手に入る上は、數日移さず徒黨を集め、源家の奴ばら鏖殺し、都に靡かす相馬の旗揚げ、一天四海は良門が手の內。父の御無念晴らすはこの時。アラ〳〵喜ばしやなア。

桔梗　威あつて猛きその形相、見奉りし上からは、妾が願ひも叶ふの道理。もうこの上は

ト跡云ひさして、仕込みを取つて乳の下へ突立てる。良門驚き、寄らうとすれど、一卷持ちしゆゑ、血汐の穢れにて、ドロ〳〵にて、良門寄られぬ思ひ入れあつて、

歌遊　ヤヽヽ、これは。

桔梗　この動搖は取りも直さず、所持ある一卷、龍宮城の例ひにて、死人に近附く惡龍なし。乳の下切つたる血汐の穢れ、驪龍の奇特に疑ひなし。

歌遊　して又其方は何ゆゑ生害。

桔梗　妾が最期は我が夫の、足手纏ひの綱も斷れ、廣い世界に一騎立ち、心勵ます冥途の先驅け。モシ夫婦は二世。一ツ蓮に。

歌遊　半座を分けて（ト思ひ入れ）。

桔梗　エヽ、嬉しうござんす。

ト良門が顏を見上げて思ひ入れ。この時下座より鬼兵衞、長社袮に啻替へ、ツカ〳〵と走り出で、この中へ入り、思ひ入れ。兩人これを見て

其方は六郎。

ト公連拔討ちに桔梗の前が首を討つ。又、ドロ〳〵になり、良門、タヂ〳〵として撞と座す。

公連　將軍太郎良門の首、討取りました、お渡し申さう。

ト鼓の合ひ方になり、正面の簾卷上げる。ト長助實は二の瀨の源吾、社袮、大小にて、首桶を抱へ前へ出て

源吾　然らば首級は二の瀨の源吾、受取り申さう。

公連　イザ。

ト桔梗の前の切り首を渡す。源吾よろしくあつて

源吾　渡邊どのゝ指圖にて、將軍太郎良門の、首討ち渡さば、賴光公より、下し給はるお墨附、源家へ從ふ公連どの。イザ、受取り召されい。

公連　ハツ。

ト思ひ入れあつて墨附を受取る。

古主なれども太郎良門、討取つたれば二心無き條、この旨武將へよしなに御推擧。

源吾　氣遣ひ召さるな。この由二の瀨が言上いたさん。鬼神も拉ぐ將門親子、威光に亡び源家の榮え、めでたき御代。首級はこの儘持參なし、よきに披露仕らん。

公連　然らば偏へに

源吾　公連どの。

公連　お役目御苦勞。

源吾　お別れ申さう。

ト三重、時の鐘になり、向うへ入る。公連殘つて、一卷を取上げ、良門にかざす。薄ドロ〳〵にて良門心づき、ずつと立つてあたりを見廻し、桔梗の前が死骸を見て思ひ入れ。

公連　お心付きしか、我が君樣。

良門　其方は公連。さては汝が桔梗の前を

公連　源家へ從ふ奉公始め。

良門　首を討つたか。

公連　いかにも。

良門　人面獸心。

ト落ちたる白刃を取つて、公連をしたゝかに切る。これにて撻となる。

公連　こりや何ゆゑに公連を

良門　ヤア、何ゆゑとは不忠臣、現在かく云ふ良門と、云ひ號けある桔梗の前、大望叶はば后とも、敬まはれんに敢へなき生害。薄手にあらば臣下の役、介抱なすべき身を以て、首級を討つて渡せしは、源氏へ從ふ二心のおのれ。我が手に懸くるは、まだもおのれが武門の譽れ、天命思ひ知りをろう。

公連　すりや我が君にも、天命と申すを御存じか。

良門　ヤ、なんと。

公連　エヽ、情なき良門公。（ト誂への合ひ方）。我が天命を存ぜぬよりは、御身の父君將門公、勿體なくも

大位を望む無道人。さるに依つて純友の娘、桔梗の前こそ、辰の年月日時揃ひし生れを幸ひ、驪龍の一巻奪ひ取り、妖術を承繼ぎ、良門公の后ととなへ、天下を掌握なすべき企て。父君亡び失せ給へど、親の血筋を承けたる御身、又ぞろ謀叛の思し召し。公連とても心は一致。さは去りながら、生死知れざるあなたの御在所。源家に心ゆるさせんと、戻り橋にて出逢ひし非人、只者ならずと知つたるゆゑ、この家に伴ひ隠まひ置き、良門なりと實名名乘らせ、源氏方より討手來らば、彼れが首討ち、頼光を欺き、御身に旗揚げさせんずものと、思ふ存念届きし今日。綱が附け置く源氏の武士、身替り受取り歸りし上、我れも味方の體にもてなし、その虚に乘つてあなたの行くへ、尋ね求めて頼光始め、附添ふ諸武士も討ち亡ぼし、御身は卽ち總追捕使。さある時は、公連が、忠孝二ツの道も立ち、帝を安んじ奉らんと、思へども情なや、御心猛き良門公、逸まり給ふ御振舞ひ。所詮存命叶はぬ某、この上は大軍を以て不意に押寄せ、頼光始め源家の奴ばら鏖殺し、父御の修羅の妄執を、晴らさせ給へ、良門公。

良門　云ふにや及ぶ、汝が勸め。さは知らずして不忠と心得、我が手に懸けしは愚盲の良門。去りながら、父が素性を受繼ぐ某、武將將軍望みにない。一旦この土へ生れしからは、一天四海を我が手の內。黄金花咲く相馬の內裏、草葉の蔭より拜みなせ、公連。アラ〳〵、快やなア。

ト頭巾を投げ棄て、下は好みの鬘。衣裳引拔きにて、白衣の着込み。金冠と一巻を片手に持添へ、きつと思ひ入れ。

公連　天晴れゆゝしきその姿、諫め申さん公連ならず。この上は頼光よりの墨附、引裂き棄てゝ、當座の存念、晴らさせ給へ良門公。

ト立文を渡す。良門取つて

良門　云ふにや及ぶ。頼光づれが汝等へ墨附。見るも中々穢らはしい。

ト立文を披き、引裂かうとして、思ひ入れあつて

ヤヽヽ、この墨附の文言は、こりや自害せし桔梗の前、この良門が一命を、助けくれよと渡邊へ命を捨てゝ頼みの文體。さては疾より内通なし、我れを助けんその爲に、自害なしたる貞女の操

公連　女に惜しき志。墨附贈りし渡邊も、天晴れ武士感じ入る。さは去りながら、某は、最早知死期に近づく刻限、跡より追付き、あなたのお供、恐れ多くも

ト襟を搔上げる。

良門　臨終正念。

公連　南無阿彌陀佛。

良門　二人が追福、未來の門火。

ト書置を框火鉢へ打込み、煙硝火立つ。公連きつと思ひ入れ。良門この途端に首を打落す。これと一緒に遠寄せになり、所々にて貝鐘太鼓を打つ。良門きつとなつて

さては源家のへろ〳〵武士、この良門を遁さじと、取圍ませる貝鐘なるか。ハテ、小ざかしい。

ト思ひ入れ。どんちやん早めになり、下座より長吉、權七、りゝしき形、喜藤太、四郎、權藤、金吾四天の形にて、槍を提げ出て、良門を取巻き

長權　良門

四人　動くな。

良門　小癪な奴等。道あけて通せ。

長權　ソリヤ。

四人　覺悟。

ト槍にて突きかける。これより大太鼓入りの鳴り物になり、良門、六人を相手に立廻りあつて、皆々を追ひ込み、花道へかゝる。向うより二の瀨源吾、着込み凜々しき形にて出て來り、良門へ槍を突きかけ、きつと留めて

源吾 珍らしや良門公、匹夫下郎の手にかゝらんより、源氏譜代の忠臣たる、二の瀬源吾が御首頂戴、速かにお覺悟あれ。

良門 小癪な、そこ退け。

ト行きにかゝる。源吾槍を突かける。ちよつと立廻りあつて入れ代り、良門向うへ行きにかゝる。この時向うにて弦音して、矢一本來て、良門の蟀谷へ立つ。直に矢を拔取り、短冊を見て、きつとなり

父が不死身の例しにならひ、今射かけたるこの矢じるし……ムウ。「將門はこめかみよりぞ射られける。

ト向う揚幕の内にて

千晴 俵藤太が謀計にて。」

良門 ヤヽヽ、なんと。

千晴 秀郷が娘千晴、良門どのへ、見參々々。

トつゝかけになり、向うよりお百實は千晴、烏帽子ぬぎかけ、衣裳の上へ秀郷の狩衣を引懸け、弓矢を持ち出て來り、花道にて良門を支へ、きつと留めて思ひ入れ。

良門 この良門を支へる女、さては汝も、疾くよりこの家へ入り込んで

千晴　いつぞやよりも怪しき盲人、正しくそれと察せしゆゑ、心足らざるみづしの女、下司に奉公近寄つて、實名探るも我が父の、失ひ給ふ驪龍の一卷、正しく御身が所持なさん。返し與へよ、良門どの。

良門　小ざかしきその一言。天下を望むに屈竟の一卷、我が手に入るこそ天の與へ、やはか人手に渡すべきや。

千晴　愚かや良門。天下を望む英雄の、寶を以て賴みとは卑怯の至り。さは去りながら驪龍の一卷、お渡しなくば、我が手に入つたる將門どのゝこの髑髏、武士に云ひつけ、破却なさうか。

良門　サアそれは

千晴　驪龍の一卷、お渡しあるか。

良門　サアそれは

千晴　破却なさうか。

良門　サア

兩人　サア〳〵〳〵

ト千晴、良門を押戻し、舞臺へ來り

千晴　二品互ひに取返せば、兩家の納り。

良門　不思議に手に入る一卷なれども、父が髑髏に替へがたし。この一卷は千晴に渡さん。

千晴　然らば髑髏も良門どのへ。

良門　イザ

千晴　イザ

兩人　イザ〳〵

ト二品互ひに取替へ

千晴　これより田原の家相續。

源吾　双方二品取替へる上は

良門　一旦この場は立別れ、やがて大軍引率し、賴光始め源家の奴ばら、それまで預ける彼れらが素頭

千晴　將軍太郎良門どの。

良門　田原の千晴。

源吾　方々

皆々　さらば。

良門　これより二番目始まり、左樣に御覽下さりませう。

ト打込みになり、大太鼓の鳴り物にて皆々入れ代り、引張り宜しく、正面の屋體へ上がり見得。知らせにつき、山幕を振り落す。これより、しやぎりの繋ぎ、道具建出來次第、山幕切つて落す。これをきつかけに兩窓ぶたを下し、兩棧敷へ茶屋々々の團子提灯を引出す。

本舞臺、三間の間、玉川座の木戸前の飾付け。太鼓櫓、正面木戸口を開き、内に役者紋付きの大提灯を吊し、仕切り場は青簾、鶴の紋付きの高張りを立て、すべて十七日夜寄初めの景色、矢張りしやぎりの鳴り物にて道具納る。

ト矢張り鳴り物打續けにて、向うと下座より、仕出しの手打ち連中、子供交りにて、長提灯を持ちわや〱云うて左右へ入る。木戸の内より定役づぶ市、醉ひたるこなしにて、定役の箱ぶらを提げて、くだを巻きながら出る。善次、權平、淸吉、同じく定役の拵へにて、各々芝居の合印の付きし箱ぶらを持ち、づぶ市を宥めながら出て

善次　これサ、づぶ市、てまへのが尤もだ。役あての云ふ事だ、不請しやく〱。

權平　今夜はめでたい寄初めだから、何も云ふ事はねえ。

清吉　その理窟は何時でも云はれるわな。
づふ　否だ〳〵。役あてだと云つて、そんならおればかり留める事はねえ。あんまり目の明かねえ仕やうだ。おらアもう札を上げて引込む。否だえ、馬鹿らしい。
三人　コレサ、それぢやア惡い。云ふ事を聞くものだ。
づぶ　聞いて居るワ〳〵、聞いて居れど、あんまり方圖がねえ。おらア役あてが、對手だ〳〵。
三人　コレサ、溫なしくするものだ。寄初めだ〳〵。
ト捨ぜりふにて、わや〳〵云うて居る。矢張りしやぎりにて、向うより四つ手駕籠を擔ぎ出る。跡より堤彌惣俊次、旅の形、駕籠に附き、出て來り、この中へ入り
俊次　モシ〳〵、役者衆は、もう來ましたか〳〵。
づぶ　ナニ役あてがどうした。怖くはない〳〵。この猿松め。
ト俊次に取つてかゝる。三人は留める。俊次膽を潰し
俊次　アヽ、醉つて居るさうな。
づぶ　ナニ醉つて居る。醉やアしないぞ〳〵。（ト立ちかゝる）。
三人　ハテ、通りの者だワ。間違ひになつては惡い〳〵。

ト留める。木戸の内より頭取市門、跡より番川、義兵衞、袴羽織、仕切り場手代の拵へ。市右衞門、惣八、留場の形にて出て來り

市右
惣八　定役、迎ひがあるワ〳〵。

市門　サア〳〵、親方の方へも、太夫さんへも、まだ四五人行かねばならぬ。早く行つてもらはう。

權平　ハイ〳〵、畏りましたが、今夜大ごみで人が引つぱり足りやせぬ。

善次　わつちらは役ぢやァねえが、築地からわざ〳〵提灯持ちに來やした。

市門　コレ〳〵、常磐町の親方なら、名代のづぶ市であらう。

づぶ　なんだ、どうした。醉ひはしねえぞ、よい〳〵め。

三人　コレサ、頭取さんだ。默らねえか。

番川　サア〳〵、もう一遍迎ひに行かう。

義兵　提灯はいゝか〳〵。

三人　アイ〳〵、ようござります。

市右　そんならわたしやァ親方の方へ參りやせう。てまへは太夫さんの方へ行かつし。

惣八　合點だ〳〵。サア、提灯が入るよ〳〵。

市門 早く賴むよ〳〵。

市右 サア、行くぞ〳〵。

ト矢張りしやぎりにて、番川、市右衛門、權平、淸吉、揚幕へ入る。義兵衛、惣八、善次、づぶ市 東の口へ入る。市門殘り、捨ぜりふ云うて居る。俊次 窺ひ寄つて

俊次 モシ〳〵、頭取樣とやら、ちよつとお目にかゝりたうござります。

市門 ハイ〳〵、何でござりますな。

俊次 イエ、別の事でもござりませぬ。今宵爰へ役者衆が見えまするかな。

市門 左樣でござります。今晩は寄初めと申して、座中の衆が皆芝居へ寄りますて。

俊次 モシ〳〵、その內に、市川團十郎と申す人もござりますか。

市門 アイ、そりや座頭でござりますから、是非來ねばなりませぬ。

俊次 エヽ、左樣なら見えられまするか……モシ〳〵。(ト駕籠に向ひ)團十郞が見えますと申します。お喜びなされまし〳〵……モシ〳〵、頭取樣、私しは遠國の者でござりますが、その團十郞どのに逢うて、內々お賴み申したい事がござります。

市門 アヽ、モシ〳〵、今晩はこの通り取込んで居りますから、お逢ひなさることは御無用になされ

まし。

俊次　イエ〳〵、左様ではござらうが、ちよつと取次いで下されまし〳〵。

市門　これはハヤ困つたものだ。モシ、まだ餘ッ程間もござりますぞえ。

俊次　隨分よろしうござります。何時までも待ちませう……イヤモシ、駕籠の衆、貴樣達は寒いに、斯うさつしやい。あの蕎麥屋へでも行て、支度してござれ〳〵。

二人　ハイ〳〵、左樣いたしませう。

ト駕籠は下の方へ殘し、駕籠舁二人下座へ入る。

俊次　左樣なら、團十郎どのにお賴み申します。

市門　これはハヤ當惑な賴みぢや。

ト迷惑なるこなし。誂への寄初めの鳴り物になり、俊次は駕籠の際へ來て控へ居る。ト向うより權平清吉、箱提灯を提げ、番川附き、成田屋三升先に、高麗屋錦升、同高麗藏、音羽屋薪水、姿屋馬十成田屋宗三郎、丹羽屋助太郎、三升門弟桃太郎、錦升門弟松虎、紀伊國屋曙山、大和屋手代久七、いづれも上下、寄初めの拵へ。留場市右衞門、惣八その間〳〵へ立役の各々の紋付きの箱提灯を持ち出て來る。東の口より、善次、づぶ市、同じく箱ぶらを持ち、手代茂兵衞、跡より大和屋杜若、濱

村屋路考、松鶴屋文車、濱村屋路曉、吾妻屋園枝、濱村屋路丹、同路川、いづれも寄初めの拵へ、この間々へ替紋付きの箱提灯、下立役交りにて双方同じやうに出て來り、舞臺にて行あひ

杜若　親方、今晩はおめでたうござります。

錦升
三升　お互ひにおめでたうござります。

錦升　太夫さんは兩座で、別して御苦勞でござります。

杜若　誠に大きに疲れませうよ。

三升　サ、一ツ〆めませう。

ト皆々手を打つ。

杜若　サ、親方、お通りなされまし。

三升　マア〳〵、お前から。

ト式禮する。此うち俊次、そろ〳〵三升の側へ來て

俊次　モシ〳〵、團十郎樣はお前でござりますか。

市右　ア、、邪魔だ、退かつしやい〳〵。

三升　ア、コレ〳〵、手荒くするな〳〵。田舍の衆と見える。

市門　モシ〳〵親方、何やらお前様にお頼みがあると云はれて、先刻からわたしを頼んで居られます。

三升　お頼みとあるを聞捨てにもなりますまい……コレ〳〵、只今直に參ります。お前方は、マア〳〵お先へ。

惣八　サア〳〵、先を退かう〳〵。

トわや〳〵云うてこの人數、殘らず木戸口へ入り、手を打つ音聞える。權平、提灯を持ち、市右衞門惣八、三升、俊次殘る。

三升　コレ〳〵、わしは團十郎でござりますが、何のお頼みでござります。

俊次　ハイ〳〵、お頼みは、このお人でござります。

ト垂れを上げる。内に美女丸、若衆の拵へ、着流し、一本差しにて駕籠より出て、三升に向ひ

美女　お初にお目にかゝりました。私しは遠い都の者でござりまするが、お江戸歌舞伎の其ゾじに、御高名なる市川團十郎樣に、お目にかゝり、お願ひ申す譯あつて、わざ〳〵これまで參りましてござりまする。

三升　見ますれば、お人柄なお若衆樣。して、何のお頼みでござります。

美女　ハイ、お弟子になされて下さりませ。

三升　エ、左様ならお前、役者になる氣でござりますかえ。

美女　左様でござります。何も存ぜぬ不束者、御門弟になされまして、どうぞお側でお教へなされて下さりませ。

三升　成る程、これまでいくらも素人方から、頼んで參る役者の門弟。して、お前は、立役が望みか、女形かえ。

美女　ハイ、女形が致して見たうござります。（ト恥かしき思ひ入れ）。

三升　隨分お世話も致さうが、此方の掟で、弟子受けが入ります。して、お前は、お宅は何處でござります。

美女　ハイ、私しが氏素性は、即ち爰にござります。

ト懷中より守り袋を出し、渡す。三升、取つて、中の書き物を披く。この時、頰冠りにて顏を隱せし男、うそ〳〵と出て來り、窺ひ居る。三升書き物を見て

三升　淸和源氏の嫡孫、多田の滿仲の四男。

ト讀まうとする。美女丸「モシ」と思ひ入れ。この時立ち聞きして居たる男、この書付けを守りとも引ツ攫つて驅出す。皆々惘り。

三人　泥坊々々。

ト追ひ驅ける。今の男は土間の見物の中に小隱れする。市右衛門、惣八、淸吉、箱ぶらを花道に捨て
て追ひ驅けて入る。三升向うを見て

三升　ハテ、飛んだ奴だ。

ト美女丸に目を附け、思ひ入れ。これをきつかけに拍子

幕

幕引付けると、小隱れしたる以前の男、土間より出て、あたりを窺ひ、時の鐘になり、手拭を取る。栗の木又治にて、老けたる拵へにて、以前の書き物を出し、よく〳〵見て懷中する。この時幕の内にて大勢、手を打つ音聞える。これにてきつと氣を更へ、手拭を被り、捨てある消えた提灯を拾ひ、提げて向うへ入る。知らせにつき「二番目ぢや〳〵」の呼びあつて、跡しやぎり。

第二番目

堺町成田屋内の場
和泉屋奥二階の場

役名――栗の木又治實ハ伊賀壽太郎成信。高麗屋錦升。濱村屋路考。大明の臣、下駄陽官玉眼

實ハ物部平太有風。玉川座讀立て、榮吉。高麗屋闍升。刀屋、藤兵衞。門弟、桃太郎。同、小團次。同、團兵衞。食客、義兵衞。小道具方、文太。留場、市右衞門。念佛講頭、意覺。大通辭、馬淵藤馬實ハ大宅太郎光遠。門弟、市川玉枏實ハ美女丸。大丸手代、文七。大明の桝花女實ハ奥女中袖崎實ハ壽太郎娘、玉琴。盡せぬ屋娘、お高實ハ保昌娘小式部。成田屋三升假名碓氷荒太郎貞光。

本舞臺、三間の間、世話場の二重屋體、正面床の間に、故人市川白猿の畫像を懸け、前机に位牌香爐、花立てを置き、屋體上の方に、ゆかうに大太刀を懸け、衣裳葛籠。この上に「暫」の素袍、衣裳も飾り、三寶に神酒供へなど飾りあり。下の方、門口、成田屋と書きたる腰高の油障子。向う欄間に額見世祝儀の札澤山張り、一體十月晦日顏見世に、十三回忌の追善を兼ねたる大取込みの模樣、雪降りの景色、誂への鳴り物にて幕明く。

ト爰に門弟市川桃太郎、同小團次、蒸籠の內より饅頭、羊羹、ういろう、右の引菓子を、盆へ並べて居る。善好は舟橋屋の菓子折を持ち居る。よみ立榮吉、假聲遣ひの拵へにて、路考の仕着綿厚の羽織を着て働いて居る。講坊主意覺、畫像に向ひ回向して居る。金屋藤兵衞、袋入りの脇差を持ち、大丸の手代文七、成田屋の居候ふ義兵衞、箱火鉢へ煮花を仕かけて居る。皆々よろしくあつて

皆々　さて今晩はおめでたうござります。

桃太　とりわけ今夜は顔見世の中へ、白猿樣の十三回忌で、一倍取込んでござります。

小園　お客があるのに講中が來なさる。アノ、誠に顔見世の二番目のやうでござります。

彌兵　さうでござりやせう。親方はお留守かえ。

榮吉　アイ、金藤さん、お聞きなさい。惣淩ひを方付けてから、芝へお寺參りに行かれました。もうお歸りでござりませう。

義兵　イヤモウ、今に歸られませう。どうで今晩淨瑠璃の稽古がござりやす。善次さんは御用でお出でなされやしたか。

善次　イエ〳〵、義兵衞さん、お構ひなされますな。この節柳島の庭に咲いた、四季咲きの杜若、大和屋の太夫さんから、御佛前へお供へなされて下さりませと遣はされました。遲くも御燒香に參りますが、隣りの稽古がござりますから、それまで善次を上げますと、お傳言でござりまする。

小園　それは有り難うござります。よろしく太夫さんへお頼み申しやす。カウ、善次さん、お夜食が出來るによ。

善次　どうで食つて行く氣サ。それを見込みに使ひに來やした。

文七　エヽ、今夜はアノ白猿様の御法事でござりますか。私しはまだ餓鬼の時分でござりましたが、あなたが木挽町で、六部の狂言なされました。巡禮は市紅様でござりました。イヤ、途方もない當りでござりました。

藤兵　おらァ親方にお目にかゝつて、好い掘出し物があるから、持つて參りやした。お歸りまでお待ち申さう。

意覺　コレ〳〵、義兵衞さん、おらが内から、まだ珠數は來ないか。

義兵　イエ〳〵、まだ持つて來られませぬ。

意覺　ハテ、何をして居る事だ。大きに間拔けだ。

桃太　モシ〳〵、意覺さん、親方が堅くいひつけて行かれました。今晩はどうでお客が多いから、明るいうち百萬遍は申してしまふがよいと云はれましたから、早く始めなさいな。

意覺　サア、始めるつもりだが、何を云つても珠數を忘れた。

善次　ナニ珠數を忘れたえ。とつけもねえ、そりやァ誰が忘れたえ。

意覺　オヽ、善好さんか、強い雪だの。併しこんな時には、お前の合羽は着當だね。

善次　おらさへ見ると合羽咎めか。お前珠數を忘れたと云はつしやるが、講中で忘れたのかえ。

意覺　イヤ、愚僧が忘れた。

皆々　イヤ、怪しからぬ坊樣だ。ハヽヽヽヽ。

意覺　コレ〳〵、そんなに笑はぬものだ。おれ程な名僧は、今の世には無いワ。この間も去る所から、德本樣の名をおれに讓らうと云つて來た人があるが、愚僧は人の名は貰はぬ。手前一騎で名僧になるて。

皆々　何となりなさる。

意覺　おれはわかぼん。

皆々　ナニそんな名僧があるものか。

意覺　そんなら洒落本。

皆々　イヤ、おへねえ和尚だ。

善次　エヽ、和尚ばかにした。

皆々　よくこじつける。

ト誂への鳴り物になり、向うより小道具師文太、竹の八丁笠、安下駄にて、よい〳〵めいたる拵へにて、投げ首を三十ばかり繩に通し、これを提げて出て來り

文太　モシ、これを親方へお目にかけてくんなさい。
小園　文太か、何しに來た。
文太　先刻親方がネ、暫の投げ首は五百ばかり拵へろと、素的な事を云ひなさつたが、これで間に合ひやせうか、お見せ申したいね。
善次　コレ〳〵、文太、その位あつたら隨分よからう。明日その幕になつてから、それで願へば濟まうワ。マア、明日の事にしろ〳〵。
文太　善さん、そりやア有り難い。親方が少ないと云ひなさると、お前の所爲だ。
善次　篦坊め、如何ともしやアがれ。それとも規模があるか。
文太　ありやす〳〵、この切り首の内で、天窓の長さうなを、お前の首に、わたしやア除けて置きやす。
善次　おきやアがれ。數首へ廻つて堪るものか。早く行きやアがれ。
文太　アイ、これを置いて、夜食を喰ひに來よう。
　　ト行かうとするを、意覺思ひ入れあつて
意覺　コレ〳〵、あの人、待たつしやい〳〵。
文太　アイ、わたしかえ。

意覺　こなたの事だ。その首をおれに貸さつしやい。
文七　モシ〳〵、意覺さん、あの首を借りて何にしなさる。
意覺　お前方も知る通り、珠數を忘れて、定めて内から持つて來るであらうと、待つほど方圖ねえ。そこで珠數の代りに、あの首で、百萬遍を始めるつもりだ。
皆々　イヤ、お前、飛んだ事を云ふ坊樣だ。どうして首で百萬遍が
意覺　コレサ〳〵、お前方は氣の利かねえ。今夜の佛樣は暫だワ。暫の法事に團十郎の内で、數首で百萬遍をくらねえで
皆々　成る程、こりやァ尤もだ。
意覺　サア〳〵、白猿さんの畫像の前で、數首の百萬遍だ。わしが云ふやうに申しませうぞ……サア、珠數に取りつかつしやい。

ト桃太郎、小團治、文七、金藤、善次、義兵衞、文太、切り首の球數に取りつく。意覺、鉦を鳴らし回向あつて

意覺　サア、始めますぞ。
皆々　始めなさい〳〵。

意覺　エヽ、數首だんぶつ。

皆々　數首だんぶつ。

意覺　數首だんぶつ。

ト百萬遍を始める。騒ぎ唄になり、向うより三升、蛇の目の傘、足駄、好みの形、駕籠より出たる模樣。團兵衛、ばつち下駄がけ、番傘を差し、駕籠の蒲團と包みを抱へ出て來り、直に門口へ來て

團兵　義兵衛さん、親方がお歸りだよ。

皆々　オヤ、親方がお歸りだ。（ト皆々立つて來り）さぞお寒うござりましたろう。

三升　なにサ、駕籠ぢやァそんなに寒くもなかつた。その筈よ。紋付きの小袖も羽織も着た儘で行つて來たが、いま見世へ脱いで來た。

團兵　イヤ、駕籠は知らねえが、歩いちやァ素的に寒い。それに芝から此方へ向つて來るもの、お堪りがあるものか。新橋から恰度爰まで十八人、凍え死に倒れて居た。鳶や烏も雪に中つて、ばたりばたりと、上から凍え死に死んで落ちるが降るやうサ。親仁橋からは八尺五寸雪が積つた。

ト大層に云うて思ひ入れ。

意覺　これは親方、お歸りなされましたか。いつもながら好い顏見世で、おめでたうござります。殊に

今夜はいかい御報謝。愚僧も只今まで數首でお念佛を上げました。

團兵　エヽ、何かえ、白猿さんの法事だけ、暫の數首かえ。

意覺　左樣々々、さぞ佛樣もお悦びでござりませう。

三升　成る程、こりやァ市川流の百萬遍には、打つてつけな珠數だね。

善次　モシ、親方え。こりやァ大和屋の太夫さんから、御佛前へ。

三升　こりやァいらぬ事を。善好、よく云つて下せえ。

ト船橋屋の折と竹花生の杜若を小團治佛前へ供へる。桃太郎懷紙を持つて來り

桃太　モシ、親方え。お前樣のお留守に、文紀さんといふお人から參りました。

三升　オイ／＼、ちつと間があらうと云つて置くがいゝ。（ト懷紙を見て）「なんだ、佐野れん……佐野れんとは何處だ。

榮吉　モシ／＼、そりやァいつぞやお前お出會ひなされた、下野の佐野の文紀さんの處から參りました。

三升　あの佐野の客人か。それを文紀さんと云ふから知れねえ。

小團　慥かあのお客は、治郎右衛門さんと申しやした。

三升　アヽ、佐野の治郎右衛門か。もう一字で佐野の治郎左衛門になるに、飛んだ八ツ橋だ。

文七　モシ、親方さん、お衣裳の綿は厚過ぎは致しませぬか。

三升　これは大丸屋の文七さん……厚い程がいゝね。

藤兵　モシ、親方え。ちよつと差が出たから持つて参りました。

三升　そりやァ見たいの。併し今ちつと忙しい、待つて居ねえ。

藤兵　アイ〳〵、何時でもよろしうございます。

ト此うち猫一匹出て、文太の袂より干物を咬へ引出し、奥の方へ逃げて行く。文太見て

文太　エヽ、この畜生め、磐城屋で貰つて來た干物を取りやァがつた。待ちやァがれ〳〵。

ト追つて文太奥へ入る。

義兵　あの男は、干物一枚で血の道を上げて行つた奴サ。

三升　コレ、てめえ達も聞いたか。今日お寺での話しだが、アノ何處とやら云つたつけ、異國の船が入津したとの噂。大方商ひ唐人であらう。

文七　左樣でございます。併し女の唐人も參つたと申す噂でございます。

三升　時に大分用がある。艾屋の市兵衛はどうした。

小團　今まで居なさいました。

三升　ぬし達に夜食を進ぜたか。

義兵　イヽエ、まだでござります。お前様と一緒に。

三升　エヽ、氣の利かねえ。おれに構はずと早くあげなせえな。今夜は客人が有るわな。

義兵　左樣なら、どなたも此方へお出でなされませ。

皆々　しつかい床へ廻るやうだ。

意覺　愚僧も、もう一度喰べて行かう。

團兵　サア、斯うお出でなされませ。

ト皆々世話して善次、金藤、意覺、流行り唄になり、奥へ入る。三升殘つて

三升　あれ程云つて置くに、ちつと居ねえと、もう斯うだ。コレ〳〵、定香盤の火が絶えて居るのに。

ト定香盤へ火を移して居る。合ひ方になり、奥より門弟玉柏（前幕の美女丸）紫の置き帽子、女形の拵へにて、茶を汲んで持ち出て來り

玉柏　ハイ、親方、お茶を上げませう。

ト差出す。三升取つて

三升　アヽ、煮花か。

玉柏　左様でござります。

ト三升思ひ入れあって茶を取り

三升　この間寄初めの晩に、思ひがけなうわしへの頼み。歌舞伎役者の其うちでも、若女形になりたいと、頼ましつたに引かれもせず、名も市川の玉柏と、家にある名を付けましたが、お前の出した守りの書き物。あれがいよ〳〵違ひのない、素性でござらば源家の嫡流。

玉柏　アヽモシ、その實名を

三升　お氣遣ひなされまするな。滅多にうか〳〵口外いたす、わたしでもござりませぬ。思へば斯樣な譯合は、狂言の筋にいくらもある事でござります。殊に取分け今晩は、大混雜の歌舞伎の顔見世。お客が多いに、朋輩衆の人出入り、氣をつけませうぞ。

玉柏　心得ました。必ずよしなに

三升　コレサ、それぢやァ時代だ。世話でやんなよ。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより中働き、菊蝶のぶらを灯し、跡より濱村屋路考、置き帽子、羽織、塗り下駄、蛇の目傘、その跡より又中働き一人、四ッ花菱のぶらを灯し、番傘をさして出る。その跡より高麗屋錦升、羽織、長合羽、蛇の目の傘をさし、高麗屋闇升、半合羽、白張りの傘をさし、下駄に

て出て來り、皆々直に門口へ來り

路考　サ、モシ、親方。

錦升　マア〳〵、お前から先へ

路考　イエ〳〵、お前樣。

錦升　そんなら闇升、來さつし。

ト皆々内へ入る。三升皆々を見て

三升　イヤ、親仁さん、ようお出でなされました。ア、濱の太夫か、闇升。サア、そこは寒いよ……お前又この雪に、よく出て來なさいました。

錦升　ナニ寒いと云つて、隱居の年回だもの、槍が降つても燒香に來ねばならぬ。

路考　わたしも振りの稽古を仕かけて、お燒香に參りました道で、和泉町の親方さんにお目にかゝつて御一緒に參りました。

闇升　モシ、親方え。生憎今日は雪が降りまして、お寺參りが、さぞお寒うござりましたらう。

三升　イヤ、思つた程にもねえものだ。

錦升　時に、大和屋の太夫さんは見えたか。

三升　アイ、ぬしは隣りの二番目の浚ひを方付けてから、燒香に行かうと、先刻善次を使ひに寄越されました。

錦升　さうであらう。兩方ぢやァ大抵の事ぢやァねえ……路考さん、お先へ燒香いたします。

　ト錦升、燒香する。續いて路考、闇升、燒香して思ひ入れ。

アヽ、爰へお位牌を飾つたの。誠に五代目市川白猿、おいらが燒香よりは、迚ものことに、あなた方へ。

三升　併し顏見世早々、口上申してもよからうかの。

錦升　ハテ、そこがお馴染みお取立て、江戸根生ひの故人市川白猿、お叱りもあるまいよ。

三升　左樣なら御免なされませ。

錦升　サ、門弟の手合も爰へ出さッし。

　トこれにて桃太郎、小團治、榮吉、文七、團兵衞、以前の形にて後へ並ぶ。錦升、三升、年回追善の口上あつて納まる。

皆々　サア、お膳の支度をしよう。

三升　時に親仁さん、太夫さんにも、引合せる者がある。爰へ來な。(ト玉柏を招き)コレ、この子はこ

の間話しました、寄初めの晩に、急に弟子入りをした、玉柏といふわたしが弟子分だが、どうで女形で市川もおかしいから、ゆく〱は山科甚吉にするつもりサ。濱のも近附きになつておくれ。

路考　アイ〱、お心安うお頼み申します。ちつと遊びにお出でなされませ。

玉柏　何事も不束な某、よろしく頼む。

三升　アヽ、これはしたり。

錦升　イヤ、大風な女形だ。

三升　コレ、闇升、其處に菓子があらう、爰へ持つて來さッし。

闇升　アイ〱……アヽ、船橋屋だね。

ト云ひながら出す。錦升見て

錦升　船橋の折は、大和屋から來たのか。

三升　左樣サ、船橋屋を杜若からとは、船橋に杜若、アヽ、コレ〱、これも御佛前へと參りました。

ト花活けの杜若の花を見せる。

錦升　そいつは面白いの。船橋に杜若、どうやら佐野の治郎左衛門の世界のやうだ。

三升 モシ〳〵、お父さん、治郎左衛門といへばおつな事がありますゥ。あの佐野の客人、治郎右衛門といふお方から、點を取りに來やした。こいつも好い都合だね。

團升 親方、おつな都合だね。

トこの時奥より榮吉、藤兵衛出て來り

榮吉 これは和泉町の親方、お出で遊ばしましたか。

藤兵 モシ、親方え。先刻のチョイ差を御覽じませぬか。

三升 ドレ、見せねえ。（ト小脇差を見て）こいつは大分汚れて居るの。拵へはいゝが、鞘が禿げて居るぜえ。

藤兵 左樣でござります。餘つ程差したもののさうに見えます。銘は籠釣瓶でござります。

三升 ナニ籠釣瓶……モシ、お父さん、おつな銘だね。

錦升 佐野の懷紙に船橋屋の折、寄越した人は杜若、そこへ折好く籠釣瓶。

榮吉 水もたまらずまツこの通り、とモシ、あの狂言の時のせりふは、よく座敷でも遣ひましたね。

路考 モシ、きん藤さん、なんぼ籠釣瓶ぢやと云うて、なかごは錆びて赤木の短刀。

三升 コレ〳〵、太夫、籠釣瓶に赤木の短刀だ。イヤ、そいつは素的な緣喜だ。春の狂言の種にならう

ア、コレ、大和屋のがござらねえで悪い。早くこの事を云つてやつて、春の狂言にかゝらせやせう。

錦升　さうさつしやい。龜井戸の親仁は大のせつかちだ。太夫さん二人は、八ッ橋もあれば船橋もある三升、てめえ差詰め治郎左衞門だの。

三升　何サ、お前だ。

錦升　イヤ、おらア何でも、ア丶、どうで強惡な仕組みで、御見物樣方に憎まれにやア、狂言にならねえ。

闇升　左樣でござります。今ぢやァ顏見世の二番目も、わたしらが若い時とは、イヤ、素的に違ひやした。

三升　ア丶、闇升か、年が知れるぞえ。そりやアもう、ぬしが云ふ通り、二番目といふと、雪の世話場は二階下、引越し女房に葛籠を背負つた入り聟が、麻裃の出も古い奴だ。取わけ媒人があい〳〵袴でもあるまいと云はれちやア、作者も困るであらうよ。

路考　モシ、親方え、今の狂言の樣子は、春の世界に好いぢやァござんせぬかィ

錦升　好いのサ〳〵、大和屋のへはおれが逢つて話して置かう。幸ひ今日は日柄が好いから。マアこの

世界で決めて置かう。

三升 そんなら〆めませう。

ト皆々手を打つ。金藤、榮吉も手を打つ。三升見て

これはしたり金藤、てめえも聞いて居たな。

藤榮 アイ、どうか面白さうでござります。

三升 コレノヽ、ぬし達の聞く所ぢやアねえから、必ず話すまいぞ。

藤榮 アイ、合點でござります。

錦升 わけて作者に云つては惡いよ。

三升 コレ金藤、中身はコレノヽ、素的に錆びて居るぞえ。

ト思はず拔き放す。折よく玉川座の惣淩ひ、鳴り物聞え、最前の猫出て來り、この白刃へ飛付き狂ふ

錦升、路考眞中へ入り、きつと見得。

アヽラ、怪しや。今拔き放ちし籠釣瓶、刃金の鍛へ試みんと

錦升 白刃を翳せば、アレノヽ、刃金に狂ふ畜生の、恐れ氣もなきこの場の不思議。

路考 聞き傳へたる柏木の、衛門と云へる御方は、猫の狂ふに御簾の隙、女三の宮を垣間見給ひ、戀ひ

慕ひしといふためし。

三升　それかあらぬか唐猫の、胡蝶にあらぬ白刃の面。

錦升　まさに名だゝる名劍なるか。何にもせよ、奇異なる劍の

三人　有樣ぢやなァ。（ト思ひ入れ。）

閶升　イヨ三千兩と、見物は褒めやせう。

藤兵　アヽモシ、その名劍で參りがけに、なかごで鰹節を搔きました。その匂ひかも知れませぬ。

三升　エヽ、おきやァがれ、飛んだ物を持つて來た。

錦升　すんでの事に、爰で狂言の稽古にかゝつた。

皆々　ハヽヽヽ。

錦升　イヤ、今夜は客人があるから、どうで更けるであらう。お暇しやせう。

路考　わたしも御一緒に參りませう。

閶升　太夫さんはわたしらが送りやせう。

藤兵　モシ、置いて參りませうか。

三升　どっともさつし……左樣なら、明日お目にかゝりませう。

錦升　アヽ、よく降る雪だの。

ト流行り唄になり、錦升、路考、闇升、金藤、供の男提灯を持ち、めい／＼せりふにて向うへ入る。

榮吉　モシ、親方、あの金藤さんは、飛んだ物を持つて來たね。

玉柏　わたしも希代の名劍と、思ふに違ふ

三升　これはしたり、また時代なせりふか。イヤ、そりやアさうと、衣裳の事で大丸にも用がある。歸るならちよつと知らせてもらはう。

玉柏　畏まりました。申しつけるであらう。

三升　ヤレまた時代だ。

ト誂への唄になり、玉柏奥へ入る。兩人殘る。向うよりお房、盡せぬ屋と書きたるぶらを灯し、若い者文吾、袱紗を懸けし廣蓋を持ち、下駄、傘を差し、出て來り

ふさ　親方、今晩はおめでたうござります。

文吾　さて好いしめりでござります。

三升　オヽ、お房か。文吾先生、何を持つて來た。

ふさ　モシ、親方、お聞きなされ。この間お話しのあつた、唐船のお方が、顏見世を見たいと仰しやつて、宵にお見世へ唐人の客がお出でなされました。

三升　ナニ唐人の客が來た。

文吾　左樣でございます。その上日本の市川團十郎に近附きになつて、國へ歸りたいと仰しやつて、卽ちお前樣の所へ、顏見世の祝儀ぢやと仰しやつて、コレ／＼、枝珊瑚樹、唐更紗、虎の皮、モシ

モシ、これは唐の胡弓でございます。

ト品々を段々廣蓋へ載せ出す。三升膽を潰し

三升　コレ／＼、そりやァ唐人は、女客ぢやァあるまいの。

ふさ　イエ／＼、大明の皇女、桝花女樣と申して、好い御器量でございます。

文吾　その唐人の番頭さんが、團十郎に近附きになりたいと云つて、今爰へお出でなされまする。

三升　イヤ、そりやァ飛んだ話しだ。コレ／＼、今爰へ唐人のお客が來るといふが、そりやマア、何と挨拶しよう。何を云つても解るまいではないか。

ふさ　イエ／＼、通辭のお方が附いて參ります。

三升　そいつはあやまるぜ。そのマァ袴を寄越さッし。

榮吉　アイ〳〵、これかえ。

ト袴を持つて來り、穿かせる。此うち捨ぜりふにて手傳ふ。これより唐樂になり、前垂れの下女、盡せぬ屋と書きたるぶらを灯し出る。跡より唐人下駄陽官玉眼、沓を穿き出る。跡より下女番傘を差かけ、馬淵藤馬、羽織衣裳、大小、通辭の拵へ、下駄、傘にて出て來り、直に門口へ來り

玉眼　しやむちやううんさい。（ト内へ指さす）。

藤馬　しやかん〳〵。

ト頷く。玉眼承知の思ひ入れにて、矢張り唐樂にて内へ入り

下女　モシ〳〵、唐人の番頭さんがお出でなされました。

ふさ　サア〳〵、あなた樣、あれへお通りなされませ。

藤馬　承知いたしした。團十郎宅はこれかえ。

三人　左樣でござります。

ト藤馬、玉眼に向ひ

藤馬　すこらん〳〵すむゆう。

玉眼　ちよこん〳〵こうさいブウ。

ト上手へ通る。この時三升、手を突き、平伏して

三升　へイ〳〵、誠にこれは冥加至極もない儀にござりまする。卽ち私しが市川團十郞でござります。只今は數々の下され物、有り難う存じます。この上とも御贔屓なし下されませうならば、エヽ、有り難う存じまする。（ト叮嚀に挨拶する）。

藤馬　アヽ、これはおてまへが、聞き及ぶ市川團十郞でござるか。この度大明國より來朝いたされしは、賴光公へお使ひの女官、桝花女夫人の、日本ならば付け家老、ト駄陽官玉眼士、サア〳〵、お目見え致されい〳〵。

三升　ハイ〳〵、この上とも御贔屓お取立ての程を、お願ひ申し上げまする。

ト此うち三升を、玉眼よく〳〵見る事あつて、急いたる思ひ入れにて

玉眼　かばぴんちやんなちよろまかさんふんふけらい〳〵。

ト腹の立ちたる思ひ入れ。皆々悧りする。三升、藤馬が側へ寄り

三升　モシ〳〵、只今あなたが仰しやりまする儀は、あれは、どうなされたのでござりまする。

藤馬　コレ〳〵、三升どの、あれは何でござるて。只今おてまへが市川團十郞は私しでござると申したらば、これは團十郞でない、似せ者ぢやと仰しやつて、お腹をお立てなされたのぢや。いよ〳〵貴

三升　公團十郎どのならば、我れら團十郎に相違ないと、お云やるがよい〳〵。

ハイ〳〵、左樣申しませう……ヘイ〳〵、あなた樣へ申し上げます。私しは團十郎に相違ござりませぬ。

玉眼　かばぴんちやんなちよろまか〳〵。

ト睨みつけて、懷より暫の畫の卷き物にしたる、豐國畫の團十郎の似顔を出し、いろ〳〵見較べる事あつて

うんらいとうばうくいなんふせつそれんてんもくふてうい〳〵。

ト又睨みつける。

三升　モシ〳〵、あれは何と仰しやるのでござります。この上のお願ひには、あなた樣に和言を御存じならば、何卒私しども如き愚盲の者ゆゑ、和言のお詞お願ひ申しまする。

藤馬　成る程、和言の儀も委しう御承知なされてござる。(ト玉眼に向ひ。)すようかんらいしやうむホウ

ト玉眼思ひ入れあつて

玉眼　和言の通用、願ふと申すか。

三升　日本の詞、お願ひ申しまする。

玉柏　ヤイ、こゝな團十郎の僞り者め……コリヤ、ヤイ、市川團十郎と申すは、唐土までも聞え、コレ見をれ、この如く面體描きし畫面は、唐へも渡つて居るワ。それにおのれ何ぢや、見をれ、この繪とは拔群の相違、面に赤き筋も見えず、眼中は劣らざれど、其やうな見すぼらしい團十郎が、日本は愚か、こんな野郎が唐にもあろか。こゝな團十郎の似せものめ。サヽ、藤馬どの、茶屋か、座敷へ罷り歸らう。斯樣な儀が桝花女樣へ申さるゝものか。日本人でないと見込み、唐人を阿呆に致すか。（ト立上がる）。

藤馬　御尤も／＼。仰せの通り團十郎ではござるまい。斯樣申す馬淵藤馬なども、貴公へ申し譯がござらぬ。サヽ、茶屋の女子ども、案内いたせ。

三升　これはマア、思ひも寄らぬお疑ひを受けました。外には在るかは存じませぬが、お江戸の團十郎は私しでござります。これはハヤ、迷惑な儀でござりまする。

ふさ　モシ／＼、あの樣に仰しやりまするから、マア／＼、私しどもへお連れ申しませう。又いたしやうも

下女　折角お連れ申して、お氣の毒でござります。

ふさ　これからいつそ茶屋々々の、飾り物をお目に懸けませう。

三升　コレ、そこをよろしう頼むよ。
三人　畏りました。
藤馬　イザ、玉眼士。
玉眼　藤馬どの。
三人　サア、お出でなされませ。

ト唐樂になり、下女、ぶらを灯し、玉眼、藤馬、お房、文吾、下女、向うへ入る。三升、榮吉、うつとりとなつて

榮吉　モシ、親方え、飛んだお客が取れました。
三升　何だか誠に夢を見たようだ。

ト思ひ入れ。この時向うより誂への長提灯を灯し、三升の手拭を被りし若い衆の勇み、子供交り大勢手打ちの模樣、わや／＼と出て來り、門口へ來て

手打　オイ、三升さん、おめでたうございます。一ツ〆めやせう／＼。
三升　アイ／＼、〆めませう。

ト榮吉も交り、手を打つ。

手打　これから高麗屋へ行かう〳〵。

ト　わや〳〵云うて向うへ入る。此うちに一人、四角の内に三ツ星に一の字の一ツ紋付けし花色の古半纏、下馬の形の栗の木又治殘り、淺黄の手拭を取つて、袂より五合德利、懷より竹の皮包みを出し、そろ〳〵と内へ入り

又治　モシ、親方、今晩はおめでたうござりやす。

三升　アイ、おめでたうござります。

又治　こりやアお前さん、餘り少しだが、顔見世の御祝儀に、わたしらが身分相應に、お祝ひ申して上げやす。イヤ又、此方の親方は、べら坊に評判が好いよ。

三升　そりやア忝うござります。折角來なさつたに御酒でも上げたいが、見なさる通り今夜は取込み又この頃にござるがよい。マア、話して行きなせえ。

ト　奥へ行かうとする。

又治　アヽ、モシ〳〵親方、そりやアもう、今宵の事だから、お取込みでありませうが、わたしもお前この頃つまらねえ羽目になつて旅へ行きやすが、それに就いても、ちつと話しがあるのサ。

三升　サ、話しもあらうが、今夜は取込んで居るわな。

又治　そりやァわしも知つて居るがね、何を云ふもお前
　　ト分らぬ事を云つて居る。この時奥より玉柏出て來り
玉柏　モシ、大丸屋樣が、もう御歸館と申されまする。
三升　これはしたり、また雲上な事を云ふか。ちつと性を附けねえな。
　　ト玉柏氣の毒なるこなし。又治、玉柏をヂロ／＼見て
又治　モシ、親方、あの若衆さんは、お前のお弟子かえ。
三升　アイ。據なく賴まれて
又治　さうでござりやせう。賴まれなされたらう。その賴み手は知らねえが、慥かに多田の
三升　エ、どうしました。
又治　サ、たゞの……若衆さんぢやァない。大方ぬしは女形、又或る時は若衆方、どぢをくらはす役廻り。若衆で美女丸紫の、帽子を被れば美女御前。
三升　ヤ。
又治　變生男子はこゝらであらうよ。
　　ト思ひ入れ。この時向うよりお房、走り出て

ふさ　モシ、親方、お内かえ〱。
三升　なんだ、居ねえでどうするものか。
ふさ　モシ〱、あの唐人のお客の事で參りました。
三升　アヽ、また唐人か。
又治　モシ親方、マアわしが志だア。旨くもねえ酒でも、一杯飲んでくんなせえまし。
榮吉　コレサ〱、お前もしつこい人だ。今夜でなくつてもいゝぢやァねえか。
ト立ちかゝつて云ふ。
又治　今夜はめでたい晩だから、祝儀に來たのだわな。おいらは錢貰ひに來たのぢやァねえよ。團十郎さんにお話しがあつて來たのだ。何もそんなに下じきにする事はねえ。わしも三田の仕樣の屋敷で、栗の木又治といふ者だ。三升さんと一杯飲まうと思つて來たのだ。飲ませざァいゝわな〱。
榮吉　コレサ、親方は取込んでござると云ふに、聞き譯のねえ、モシ、送りの衆〱。
ト市右衞門、惣八出て來り
又治　何もむづかしい話しはねえわな。
市右　さうではあらうが、今夜の事だわな。間違ひになつては惡いわな。

惣八　マア〳〵、此方へ來て、おいらに話しねえ〳〵。
又治　アヽ、なにか、ぬし達はおれを〆めるのか。サア、〆めさつし〳〵。
兩人　コレサ、聞き譯の惡い。マア、來ねえな。おいらが預かるよ〳〵。
又治　いゝかえ。ぬし達が預かるの。いゝかえ〳〵。
兩人　いゝよ、解つて居るよ。
ト又治を騙して奥へ伴れて入る。
三升　誠に今夜は、いろ〳〵な唐人が來る。
ふさ　その唐人が申すには、あの様な團十郎があるものか。あれが日本の團十郎かと笑うて居ます。それと申すもお前様が、地顔でお出でなさるからの事でござりまする。どうぞ衣裳鬘で、嚇しておやりなされませ。
榮吉　イカサマ、あの様に團十郎の似せものだと吐かして行きました。外聞が惡うござります。隈取つて見せるがようござります。
三升　それだと云つて、舞臺の拵へが内でなるものか、狂人の沙汰だ。
房榮　でも外聞が惡うござります。

ト三升思ひ入れあつて

三升　さう云へば、そんなものか。いつそ暫の拵へをして見せてやらうか。

房榮　さうなされませ〳〵。

三升　そんなら暫の支度にかゝらう。コレ、急に用が出來た。皆來てもらはう〳〵。

トこれにて奥より意覺、善好、文七、小團治、桃太郎出て

皆々　親方、なんでござります。

三升　コレ、外ぢやァねえ。今夜表の客の唐人が、おらが内へ近附きに來て、おれを見て、この男は團十郎ではない、その證據はこの繪だと云つて、暫の繪を持つて來て引合して見て、おれが事を似せものだと云つて歸つたから、今から暫の拵へをして、表の二階へ行つて、一番暫の形で逢はうと思ふ。

皆々　そいつは好うござりやせう。

三升　おれもけちな團十郎だと云はれちやァ、お江戸の恥なり、日本の恥になるワ。

皆々　左樣サ。

三升　そこで急に支度にかゝる。桃太郎や、鏡臺を持つて來や。

桃太 アイ〳〵。

ト好き所へ鏡臺を直す。

文七 モシ〳〵、お衣裳は私しがお着せ申しませう。(ト衣裳にかゝる)。

桃太 まだ綴ぢてあつたよ。此方へ持つて來なせえ。

ト文七、桃太郎、二人して衣裳を持ち、奥へ入る。

三升 床山は居るか〳〵。

小園 アイ〳〵、長介はわたしが呼んで來やせう。(ト下座へ入る)。

善次 サア〳〵親方、手水の湯を持つて來やした。

ふさ 左樣なら私しは內へ行つて、そのつもりに致しませう。

榮吉 さうしなせえ〳〵。唐人客を歸しては惡いよ。こんな時には羽織がごろ〳〵する。

ト傍へ脫捨てる。

ふさ 左樣なら早くお賴み申しまする。(ト驅けて向うへ入る)。

三升 コレ、囃子の手合も呼んで來い……ソレ〳〵、文太夫は居るか〳〵、大薩摩が肝心だ。

意覺 大薩摩か、よし〳〵。おれが行つて買つて來る。燒芋でも、ふかしたのでも、兩方取つて來やせう

ト向うへ入る。

榮吉　エヽ、あの坊主は、芋を買ひに行くやつサ。文太夫さんを呼びながら、この大太刀からやつて置かう。

ト大太刀を擔ぎ、向うへ驅け入る。この時又治、うろ〳〵奥より出かゝり

三升　エヽ、湯が温い。

善次　オツト、汲み替へて來やせう。

ト手水盥を持つて入る。此うち始終三升鏡に向ひ、顏を直し、いろ〳〵思ひ入れ。この時玉柏は、うろ〳〵して居る。又治は後にて、榮吉が脱ぎたる羽織を見つけ、寒いといふこなしにて着る事。玉柏三升これを知らず

玉柏　何やらそわ〳〵とした館の樣子、これが歌舞伎の掟よな。

三升　コレサ、又時代か。ちつと世話で云ひねえな。コレ、おれが顏の仕やうも、よく見倣つて居るがいゝ。

玉柏　ハイ〳〵、畏りました。

トこの時、前の鏡へ又治の影映るゆゑ　三升、榮吉と思ひ

三升　どうだ、文太夫はどこに居た。
玉柏　エ。
三升　さう云ふのは誰だ。（ト振り返る）。
又治　わしでござりやす。
三升　アヽ、先刻の人か……羽織を着たゆゑ
又治　寒さ凌ぎに引つかけやした。
三升　酒をか。
又治　イヽエ、羽織を
ト傍にある胡弓の巣を取つて
アヽ、胡弓の巣だな。
三升　唐人客の土産物サ。
又次　アノ、これが
三升　さうサ。
又治　こんなつまらぬ土産より、あのお若衆を

ト立ちかゝる。三升、又治を突退ける。玉柏は立たうとする。この時、かんてらへ雪かゝり、消える
これを木のかしら。

三升　これはしたり、氣をつけねえな。

ト玉柏を呵る顏にて、又治へ目をつける思ひ入れ。拍子
幕引付けると、流行り唄のツナギにて、引返し。

幕

本舞臺、三間の間、芝居茶屋二階の體。向う打抜き、飾り物、燈籠、虎屋の蒸籠の後を見せ、向う
茶屋は鯉の瀧登りの燈籠明りを灯し、手摺りへ毛氈を懸け、その外、平舞臺に飾り好みあり。下の方
に梯子の上り口、尤も顏見世夜の景色。騒ぎ唄にて幕明く。

ト爰に玉眼、醉ひたる體。桃太郎、小團治、玉柏、羽織の形。下女おとき、おつれ酌をして居る。
榮吉、惣八、前幕の形。盡せぬやお高、前垂れ懸け、茶屋娘の形。取り肴、大鉢、大平、吸ひ物など
取散らし、拳を打ちゐる。

玉眼　さんやすむゆふごふさい〳〵。

たか

ト拳を打つ事あつて玉眼負ける。

たか　そりや、あなた樣、御酒ぢや〳〵。

とき　サ、召上がりませ〳〵。

ト大杯を差付け、酌にかゝる。

玉眼　又それに酒か。飲まいでワ〳〵。この玉眼は至つて酒は好物ぢや。大明の名酒と違ひ、イヤ又、日本の酒は湯を飲むやうで益體ぢや。ハア、、これを思へば、大明國の物は自由ぢや、イヤモウ日本は誠に益體な國ぢや。

トいろ〳〵惡く云ふ。皆々腹の立つ思ひ入れあつて

榮惣　モシ〳〵旦那、日本は左樣なら不自由な國でござりますか。

玉眼　イヤモウ、至つて小國。好い手本は、最前近附きになつた市川團十郎。あのやうな團十郎が、何處の國にあるものか。餘り唐土人を馬鹿に致した仕方ぢや。

たか　イエ〳〵、左樣仰しやりましても、あれが團十郎に違ひござりませぬ。どう致しまして、お客樣をお騙し申す事ぢやござりませぬ。

玉眼　イヤ〳〵、なんぼ其やうに云つても、初めて逢うた團十郎ゆゑ、似せ物を見せたのぢや〳〵。

桃太　これは疑ひ深い。あの團十郎は卽ち私しの師匠でござります。

小團　どうで繪空事と申しまするから、錦繪とは違うて居ります。

玉柏　左樣なものであらうわいの。常々の風俗と、紙に描きし親方とは、そりや拔群の相違。衣裳を着けて顏隈取りし形相、ハアヽヽ、大明國の人々へ、お目に懸けたいものぢやなア。

たか　左樣でござります。鬘をお懸けなさんすと、わたしらは毎日見ながら、見違へますわいなア。

とき　成る程、お高さんの云ひなさんす通り、初めてお出でのお客樣を、粗末に致してよいものでござんせうか。

つね　御機嫌直してもう一獻、サ、御酒になされませ〱。

玉眼　イヤ〱、わいらは遠い唐土の客と心得、馬鹿にするのぢや〱。アヽ、これを思へば、長崎の丸山なぞでは、客を見ると大事にするて。

ト玉眼愚癡を云ふ。

とき　これはしたり、いづれぢやと申しまして、お客を粗末に致してよいものでござりますか。

榮惣　左樣サ、それは旦那の愚癡を仰しやるとやら。

團兵　日本では、ばゝアを云ふと申します。ハヽヽヽヽ。

たか　それはさうと桝花女樣は、もうお歸りなされさうなものでござんす。

桃太　どう致しても、日本の顔見世の、珍しい飾り物を、御覽じてゞござりませう。

玉眼　コリヤ〳〵、わいらは珍らしからうと思ふが、大明國にも顔見世はあるワ。イヤ、又唐土の顔見世が、わいらどもに見せたいわえ。

女形　エヽ、見たうござりますわいなア。

榮吉　成る程、唐土の顔見世は賑かでござります。前方、私しも參つて見物いたしました。その時は大明の芝居で、讀立てを私しが、三年いたして居りました。あの方の踊もよう覺えて歸りました。

玉眼　アヽ、われは大明へ渡つたか。

榮吉　左樣でござります。

玉眼　それは幸ひ、其方の踊が見たい。サヽ、踊つて見せい〳〵。

榮吉　ハイ〳〵、畏りました。併し唄三味線では、御存じある人はあるまい。私しが直にあて振りで踊りませうか。

桃小　こいつは見物だ。踊らッし〳〵。

　　トこれより唐人囃子の入りし唐音の唄になり、榮吉あて振りを踊る。この鳴り物、だん〳〵と雲上に

なり、自然と唐樂になると、向ふ揚幕に立てし襖を明け、留場市右衛門、朝顔付きの手燭を持つて送りの見え。跡より唐女桝花女、天冠を被り、唐團扇を持ち、左右に唐人の小姓右門、左門、長柄を兩方より差懸け、大通辭馬淵藤馬附いて出る。また跡より下女おふさ、送りの模様にて、奥二階より出で來る見得。皆々直に舞臺へ來る。

皆々　イヤ〳〵、桝花女様のお歸りぢや〳〵。

女形　これはお早うござりました。サア〳〵、こちらへ入らつしやりませ。

ト桝花女、上の方へ通り、女形手傳うて高床几に腰を掛ける。

市右　込み合ふ所を私しが、お先を拂ふは送りの役。又この二階まで唐女様を送つて參るとは、どうやらお茶屋の二階が、西の下を見るやうでござります。

ト玉眼、桝花女に向ひ

玉眼　雪中とは申しながら、事珍しき日本の顔見世、茶屋〳〵の飾り物、御一覽遊ばされましたか。

桝花　輪金少門有景花景能見芙蓉花國不慶口開々々。（ト藤馬手を突き）

藤馬　ハヽ、左樣でござります。聞きしに優る日本の顔見世、御覧なされて殊ないお悦び。茶屋の女子どもへも一禮申せと、あなたよりのお言葉。冥加ない儀ぢや、お受け申せ〳〵。

ふさ　これはマア。有り難いお詞。芝居の茶屋の私しどもが、大明國の桝花女様より、お詞下されまするとは、冥加至極もない仕合せ。お高さん、お禮仰しやりませ。

たか　アイ〳〵。この上とも御見物にお出での節は、見苦しうはござりまするが、どうぞ私し方へ入らつしやりまするやうに、ハイ〳〵、お願ひ申しまするわいなア。

藤馬　桝花女様へ申し上げまする。則ちこれは、盡せぬ屋の娘たかと申す者。この後御見物の節は、お出入りに相成りまするやうにとの願ひ。併し大明國より日本の顔見世見物に參るとは、誠に珍らしい儀でござりまする。併し打出してからは、大明國へ歸りが遲くならうな。ハヽヽヽ……コリヤ〳〵、今晩お召しなされた役者ども、それへ出い〳〵。

トこれにて桃太郎、小團治、玉柏よき所へ出る。

桝花女様へ申し上げまする。これへ召寄せましたるは、日本の歌舞伎役者、何卒和言のお詞遣はされませうならば、さぞかし悦びまするでござりませう。この儀を伺ひ申し上げまする。

ト桝花女こなし有つて

桝花　覺えたる日本の詞、和言を以て桝花女が、汲みかはす九献の友。サヽ、自らが身近う寄りや。

三人　ハアヽ、有り難う存じまする。

桝花　三千餘里を隔りて、山海波濤をわざ〳〵と、この日本へ來朝せしも外ならず、源家の棟梁源の頼光、名將の聞えある事、大明國まで隱れ無き條。去るに依つて、國土の使ひとして來朝。動の弓、すい羽ひやう羽の鏑矢、頼光へ相渡し來れよと勅に依つて、この國へ渡ると雖も、聞きしに違ふ愚將頼光。

玉眼　大明の寶を贈るべき、大將ならねば直樣歸朝。出船のその間に、日本の名所古蹟御一覽のため、誘ひ申せし芝居町。音に聞えし團十郎、この繪に相違の皆僞り。（ト以前の錦繪を出し）さすれば日本は、僞りを表となす。神國ならぬ表裏の外國、見ると聞くとは大きな相違。

ト此うち玉柏こなしあつて

玉柏　ヤア、詞が過ぎる異國人、日本を侮みするのみか、頼光公を愚將なりと云ひ立て、神の御末の在します、この日の本を外國なりとは、何を以て……トサア、源氏の諸武士が聞く時は、然こそ思はん。この身は賤しき歌舞伎役者の其うちにも、物事內端の女形の見習ひ、申したとても

トこなし。此うち桝花女、目を着け居る。玉眼、藤馬思ひ入れあつて

藤馬　ヤア、まだ前ぶりにあるからは、丁稚子供も同然な身を以て、目に角立てたる今の振舞ひ。

玉眼　この日本を惡樣に云つたが、わりやァ腹が立つか。

玉柏　イエ〳〵、私しは毫頭左様な

玉眼　すりや、腹は立たぬか。

玉柏　ハイ、左様でござります。

藤馬　こりや、さうありさうな事。いよ〳〵それに違ひなくば、玉柏とやら、桝花女様より下し置かるるお杯、身共がこれにて酌を致さう。その杯は……オヽ、ソレ〳〵、云ひつけた品、持参いたせ。

小姓　ハアヽ。

ト隣座敷の鳴り物を借り、小姓兩人、大きなるぎやまんのこつぷを、しつぽく臺に載せ、兩人持つて來り、玉柏が前に置く。

藤馬　サ、今あなたより下し置かるゝお杯、此こつぷへ滿々と、一ッ引受け、爰で飲め。

玉柏　エヽ。

玉眼　まだ〳〵、そればかりでない。大明國を僞りし、團十郎のこの畫面、桝花女様には彼れ等が見る前で、引裂いておしまひなされ。サヽ、御遠慮なしに、引破つてお捨てなさい。

ト件の繪を桝花女へ渡す。桝花女こなし。

桝花　なにさま其方の云やる通り、唐土までも聞えたる團十郎は　この繪に相違の皆僞り。我が國へ立

歸り、國王へこの旨奏聞。其方が勸めに、この繪は爰にて

皆々　すりや、この畫面をあなた樣には

女形　引裂き捨てると仰しやりまするか。

藤馬　引裂き捨てるのみならず、サ、わつぱめ、身共が爰で酌いたす。これなるこつぷで一つ飮め。

玉柏　すりや、どうあつても私しに

藤馬　なみ〳〵受けて、飮んで見せろ。

玉柏　サアそれは

桝花　引裂き捨てうか。

門弟　サア

皆々　サア〳〵〳〵

玉眼　急いで引裂きお捨てなさい。

桝花　勸めに任せて、ドリヤ

ト件の畫を引裂かうとする。藤馬は銚子を持ち、玉柏に立ちかゝる。四人の女形、桃太郎、小團次、太刀下の樣に前へ並ぶ。市右衞門、榮吉、惣八、小姓二人、後に立ちかゝり居る。この見得好き程に

向う襖の内にて

三升　暫く。

ト聲かゝる、皆々思ひ入れあつて

玉眼　イヤア。今我れ〳〵がお勸め申す、團十郎の畫面、引裂き捨てんとなさるゝ折柄。

藤馬　殊にこれなる前髪へ、酒を勸むるその所へ、遙か向うの奥座敷で、暫くと云つたぞよ。

榮市　そりやこそな。

玉眼　どうか彼の聲は、今まいつた成田屋の聲だぞよ。

藤馬　イヤア。

桝花　この繪を裂かんとなす所へ、暫くと聲を懸けしは

眼藤　何奴だエゝ。

三升　暫く。

眼藤　暫くとは

三升　暫く〳〵〳〵。

〽かゝる所へ向うより、碓氷の荒太郎定光は

ト大小の人寄せになり、向う襖を開き、三升、懸烏帽子、柿の素袍、暫の形にて出て來り、きつと見え。

〽今日顔見世の吉例と、その暫を二番目の、世話場へ入れし荒事は、珍しかりける次第なり。

ト宜しく花道よき所へ住ふ。

皆々　ドッコイ。

ト玉眼、藤馬、いろ〳〵見る事あつて

玉眼　イヤア、コレ〳〵、藤馬どの〳〵、顔見世の二番目と云ひ、芝居の茶屋のこの二階へ、奇妙な形の人間が出ましたな。

藤馬　左樣々々、身共なぞ、これまで逢うた事もない人間でござるが、お待ちなされ、どうやら其許樣が御所持なされた、あの繪によく似たではござらぬか。

玉眼　成る程、さう云やれば、コレ〳〵（ト以前の繪を出し）イカサマ、顔には赤き筋もあり、形の樣子若しやこれが、團十郎ではあるまいか。

皆々　そも先づうぬは、何奴だ、エヽ。

ト暫のせりふあつてきつと見得。

桝花　この桝花女が目通り、荒くれ者のあの若衆、疾く〳〵爰を遠ざけい。

眼藤　畏りました。

皆々　モシ〳〵、引立てでござります〳〵。

藤馬　ナニ引立てだ。そりやア何の事だ。併し見渡したところが、座敷は残らず日本人、云はゞ向うの幕の內。

玉眼　この方殘らず、勝手を知らぬ唐人ばかり、貴公御存じか。

藤馬　どう致して。引起しと云ふ藥は、茅町に看板が見えましたが、引立てといふ藥は承らぬ。

玉眼　ハテ、それは困つたものだ。

ト兩人捨ぜりふ云うて居る。好き時分、梯子の口より、又治、醉ひたるこなし。綿厚の木戶羽織を着て胡弓の巢を持つて出て來り

又治　モシ〳〵、お前方は、暫の引立てを知らつしやらぬさうだね。さうかえ。（ト始終生醉の見え）。

眼藤　存ぜぬ〳〵。其方存じて居らば、賴みたい〳〵。

又治　そりやア知つて居やす。引立てには先へ鯰坊主が出ねばならぬ。幸ひ羽織はこの濱村屋の、木戶

の揃ひで間に合はさう。

玉眼　アレ〳〵、鯰坊主とは、清の國のけし坊主の事か。

又治　いゝや、打ちやつて置きねえ。この手拭で斯う頭へ包んで、幸ひ胡弓の巣を髭に見立てゝ

ト淺黄の手拭を頭へ巻き、胡弓の巣を取つて耳へ挟み、髭と見せる仕懸け。

榮吉　コレ〳〵、そりやァ成田屋へ置いて來た、おれがのだよ〳〵。

又治　よしサ、ちつとのうち借り道具だ。

眼藤　ア、それが日本の鯰といふものかな。

又治　サア〳〵、これから鯰坊主の引立てを見て置きねえ。ドリヤ〳〵〳〵。(ト花道へ行き) エヽ、わつばめ、きり〳〵爰を、立て、エヽ。

トこれにて三升、又治を見て

三升　此奴なんだ、急拵へのこじつけ鯰、うぬは爰へ何しに來た。

又治　われを引立てに來た。きり〳〵そこを立てエヽ……と云ふは嘘。兄イや、さてこの顔見世は、思ひも付かぬ役をさせるワ。よもやおれが鯰坊主をしようとは、妙見様も御存じあるまいな。十三回忌の今日の佛様は、猶更御存じはあるまい。併しあの唐人手合の聞く前だ。引立てゝ見せうと

からを云つて來たからは、達引と思つて、親仁を一番立てゝくりやれ。これ程でもいゝから、留場の方へ、立つてもらはう〳〵。

三升　なんだ、爰を立て。コレナ、こなたとわしは、今年一年附合はねばならぬ顔だワ。さう他人にはしねえものだ。したが、外の人でもなし、據ねえお前の頼みだ。いゝワ、主の云ひ條立つて、ちつと許りでも立つてやらう、と云ゝたいが、否だ。ならねえ。癇癪のおこらぬ内、引ッ込まつしやい。引ッ込まねえと、親仁どのとは云はさねえ。所は名に負ふ玉川座の花道から、四谷に近き大久保の、孟宗竹の雪の藪、筍子を掘りにやるぞよ。

又治　さう吐かしやア、是非ともおれが（ト立ちかゝる）。

三升　どうしたと。

ト睨みつける。又治、思ひ入れあつて

又治　エヽ、親孝行の次第を御覽じろ。この度の親孝行、誠に珍しき親孝行〳〵〳〵。上下では事明細、親孝行の次第〳〵。

ト舞臺へ歸る。

眼藤　エヽ、らッちもねえ、何を云ふのだ。

桝花　女子と侮り、慮外な曲者。退るまいか。

三升　なに退れ。アヽ、そんならお前が、大明國から日本へ、顔見世見物に來た、桝花女といふ唐人の女客。短册袱紗揚枝差、狂歌發句のお望みなら、厭味の無いがまだしもだ。その厭味の無い唐人の客人へ、それへ參つてお知るべになりませう。お傍去らずの毛唐人、天麩羅の招牌どの、今そこへ行くぞ。

皆々　イヤアヽ。

三升　大明國へ飛脚を遣れ。

皆々　イヤア。

三升　遺言があらば寢言に云へ。

皆々　イヤアヽ。

三升　さらば御輿を舁き上げべいか。

トとひよになり、三升、舞臺へ來り、立役皆々、アリヤ／＼の懸け聲、吉例の通りにあつて、三升素袍を刎れ立ちかゝる。又治、玉眼、藤馬を突廻し、玉柏、桃太郎、その外門弟女形を圍ひ、きつと見得。

玉柏　そんなら其方は、碓氷の定光にてありしか。ようマア爰へ

女形　ござんしたなア。

三升　姐え達を始めお若衆も、氣遣ひのきの字もねえ、大船に乘つたと思つて、落付いてござりませ。年々歳々吉例の、市川流の暫は、時代に依つて變る役名。今度の世界は先づ差詰め、定光といふ役廻り。まんざら茶屋の二階でも、團十郎とばかりでは、外記節でも出憎いから、役名借りた碓氷の定光。奥二階から見て居れば、團十郎の姿繪を、引裂かうとする桝花女樣、なんでその繪を破るのだ。

桝花　さてはこの繪に寸分違はぬその打扮ち。そんなら其方が、大明國まで聞えたる

三升　いかにも市川團十郎、成田屋の三升とはわしでごんす。この神國の其うちにも、お江戸に生れた有り難さ、御贔屓受繼ぐこの三升。その繪を破ると云はつしやる、マアこなさんが氣に食はぬ。女ながらも、曳摺り下して

ト桝花女を執へ、姿繪を引たくる。この時裝束取れて、下は後帶の御殿女中の形になる。立役女形皆皆「オヽ」と驚く。此うち小姓兩人、唐裝束脫げて、下は奥小姓の形になる。頭の飾り落ちて糸毛の禿になる。桝花女、天冠落ちて椎茸髱の鬘、懷より文を落す。三升取つて

イヤア、唐の女と思ひの外、椎茸髱のお屋敷さん、今懐から落ちた文。

桝花　アヽ、その文を

三升　ドツコイ、こりやァ渡されぬ。

トこれにて桝花女恥かしき思ひ入れ。

疑ひ受けた團十郎、暫の形で出たからは、これぢやァよもや二人ながら、云ひ分はござるまいの。

眼藤　サア、云ひ分は

三升　どうしました。

眼藤　無え……併しこれぢやァ此方の臍が

三升　落ちたる文のこの宛名。(ト見て)「三升様まゐる、焦るゝ身より」……ヤ、こりやァ

又治　ドツコイその文。(トちよつと取り)アヽ、これで讀めた。そんなら唐女の御守殿は、この成田屋への付け文か。

三升　そいつは御免だ。思ひ懸け無い駈込みに、この形でも居られまい。ちよつと顔を落さう……内の鏡臺を借りてくれろ。

門弟　アイ／＼、承知しました。

ト奥より鏡臺を持つて來り、直す。三升鏡臺に向ひ、顏を拭き、衣裳鬘を取る。皆々寄つて、方付けろ。又治思ひ入れあつて

又治　團十郎といふ者は、荒事師だと思つたら、飛んだ濡れ事師だの。

玉眼　この玉眼が渡海を幸ひ、三田の仕のお屋敷で、袖崎といふ女中が賴むに是非なく、拵へもの ゝこりやァ桝花女。おればかりは誠の唐人。

藤馬　通辭と云つたも、あのお屋敷の部屋

又治　アヽ、そんならこの女中が、團十郎に氣があつて、持つてござつたこの文か。こりやァ一番讀まずばなるまい。

ト封を切らうとする。

袖崎　アヽコレ、あの衆が聞く前で、その文讀んでは、どうもわたしが（トこなし）。

又治　こりやァ一番あやまつたね。どういふ事か宵に來て、思ひもよらぬ成田屋から、この二階まで附いて來て、新板かはつた茶屋場の暫。引立てにまで出たわしだ。爰は一番お屋敷さんの願ひの通り、三升さん、思ひの丈を

玉柏　そんなら唐女と仰しやつたは、アノ、お屋敷のお女中樣。

藤馬　思ひに思つた袖崎樣、首尾なさるれば、おいらも悦び。
たか　粋を通して皆さんは、マア、下座敷へ來なさんせ。
女形　わたしらとても共々に
榮惣市右　首尾好く行つたらおいらも御祝儀。
文七小園　エヽ、慾張る奴サ。
右門　アノわたしらは袖崎樣の
左門　お側離れて
ふき　お二人ながら、下の座敷へ。
玉眼　唐のお客の引込みに、もう唐樂も使はれまい。
藤馬　エヽ、跡はこつそり成田屋が……エヽ、畜生め。

ト思はず藤馬、玉眼が背中を煙管にて叩く。この時背中にて鉦の音してぐわんと鳴る。藤馬悄りする。三升、又治、玉眼へ目を着ける。玉眼、背中を縮めて思ひ入れ。唄になり、この人數殘らず梯子より下家へ降りる。この唄彈流し、三升思ひ入れ。袖崎、上の方に俯向き居る。又治は文を持つたまゝ、三人殘る。

又治　モシ、親方え。人といふ者は、どこでどういふ事が有らうやら知れねえものだね。宵にお前の所へ祝儀に行つたが縁となり、どうやら今ぢやァ、わしが引受けになる奴サ。モシ、親方、この文は、マア、お前の方へ受取つて置きなさいまし。

ト三升へ文を渡す。

三升　成る程、云へばそんなものだ。して、お前も、あの袖崎様とやらのお屋敷か。

又治　左様サ、あなたのお屋敷で、又治といふ小者でござります。

三升　斯う心安くならうとは知らず、先刻は粗忽な挨拶をしやした。おれの内へ行つて、酒でも飲んで下さりまし。

又治　そりやァ有り難うござります。三田のお屋敷へお出入りの盡せぬ屋。わしは下へ行つて、自由にたべやせうよ。

三升　そんならどうなりと、心いつぱいにさつしやれ。

又治　さう致しやせう。モシ、袖崎様、お前さん常から、近付きになりたい〳〵と仰しやつてござつたその成田屋、思ひの丈をそこへまき出し、云ひたい事を云はつしやりまし。又此やうな首尾はありやすまい。エ、モシ、俯向いてござりますな。下を見りやァ方圖がない。……モシ、三升さん、

お屋敷者を、よろしくお頼み申しやす。

　ト唄になり、二階より下へ降りる。跡合ひ方、三升、袖崎が側へ差寄り

三升 モシ、袖崎様とやら、お前様、どういふ趣向で唐人の眞似をして、この茶屋へお出でなされました。お前様が飛んだ新手をお出しなされたばつかりに、わしもこれまでに無い、茶屋の二階で暫の荒事師、こりやァ誰が思ひ付でござります。

袖崎 サア、この思ひ付の作者は、今下へ行きやつた、あの又治といふお定口の使ひの小者。彼れがわしへ、斯う〳〵なされと敎へたゆゑ、殊にこなさんへ頼みもあり、その樣子はわしが口から、どうも云はれぬ事ゆゑに、その文の文言に細々と書いて

　ト又俯向いて居る。三升思ひ入れあつて

三升 そんなら此お文の内に、あなたのお頼みが……ようござります。わしも團十郎でござります。お前様がどの様な事をお頼みなさるゝとも、それを跡へ引くやうな三升でもござりませぬ。エ、モシ、お氣遣ひなされますな〳〵。

袖崎 そりや、嬉しうござんすわいなア。

　ト思ひ入れ。此うち袖崎、寒けのこなしにて顫へて居る。

三升　モシ〳〵、お前樣、大分先刻からお顫ひなさるゝ樣子だが、モシ、どうぞなされましたか、御持病でも發りましたか〳〵。
袖崎　ハイ、今日の雪に中つたやら、持病の積氣で（ト思ひ入れ）。
三升　そりやァお惡うござります。お冷えなされては惡い。マア〳〵、ちつとの內暖まつてお出でなされませ……コレ〳〵、內の衆や〳〵。
ト呼び立てる。この時梯子の口よりおふさ出かゝり
ふさ　ハイ、お呼びなされましたか。
三升　コレ〳〵、このお方がお風邪氣だ。お蒲團を持つて來てお貸し申すがいゝ。
ふさ　アイ〳〵、心得ました。
ト二階の口より夜着蒲團を取上げ、捨ぜりふにて、好き所へ敷き、あたりの屛風を立てる。この前より好き程に正面の障子を立てる。
モシ〳〵、親方さんえ。お醫者樣でもお呼び申しませうかえ。
三升　イヤ〳〵、それ程でもあるまい。マア〳〵、ちつとお橫になりなされませ。
ト袖崎を蒲團の上へやり、三升介抱して

モシ〳〵、ちつと押して上げませうか。

袖崎　忝うござんす。この左の方でな。

三升　ハイ〳〵。爰かな〳〵。

ト袖崎の癪を押す。兩人思ひ入れ。

成る程差込む樣子だ。コレ、てまえ、白湯を熱くして持つて來さッし。そしておらが内に良い藥があつた。

ふさ　ハイ〳〵、ちよつと沸して參りませう。（ト裝束を見て）これはしたり、お裝束が爰にござんす。屏風に懸けて置きますぞえ。

ト唐裝束を六枚屏風へ懸け、下家へ降りる。

三升　それでも強く發りませいで、お仕合せでござります。どう致しても今晩の雪ぢやア、大概な持病は發りますによ。イエモウ、癪にかけちやア、私しは苦手でござりますから、癪の蟲がグウグウと云うて下ります。ほんの事だがお前樣、癪の蟲も團十郎に逢つちやア、青菜に鹽でござります。（ト片手に癪を押へ、右の手にて件の文を抜き、燭臺の明りにてよく讀む事あつて）ア丶アノ、私しへのお頼みの、お文の文言見ますれば、アノ門弟になりたいと、申して參つたこの程の……そん

なら彼れに

袖崎　疾うから思ひはかけながら、今日まで云はれぬ心の丈を、云うてもらふは三升さん、お前を力にわざ〳〵頼みに

三升　イヤ、大方かうであらうと思つた。

袖崎　モシ、どうぞお前（ト思ひ入れ）。

三升　畏りました。そこは私しも三升でござりまする。お屋敷様のお頼みを、眞實この身に引受けてお世話いたしまへす。又外へは口外いたしませぬ。附合ひ多き役者の身分、若しや、とあなたのお疑ひもござりませうが、成田山の不動樣を、勿體ないが誓ひにかけ、屹度他言は致しませぬ。

ト袖崎へ文を返す。

袖崎　エヽ、嬉しうござんす。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、下家より玉柏こし高の茶臺に塗り蓋のしたる湯呑を持ち、上つて來り

玉柏　ハイ、親方、お白湯を持つて參りました。それへ上げませうか。

ト屛風の際へ來る。この跡を跟けて又治、一腰を隱し持ち、そろ〳〵と上り來り、花道の方へ行き窺ひ居る。

三升　オヽ、お白湯を持つて來たのか。サア〳〵、爰へ寄越さつし。

玉柏　ハイ〳〵。（ト茶碗を三升へ渡し）左樣なら、もうよろしうござりまするか。

三升　アヽ、コレ〳〵、まだちつと用がある。爰へ來るがよい。

玉柏　ハイ、外に御用がござりまするか。

三升　外でもねえが、あなたの御持病のお癪、先刻から押して居たが、强氣に肩がつかへた。一服のむ內、てまへ代つて押して上げるがいゝ。

玉柏　ハイ、私しが押しても宜しうござりますか。

三升　よくなくつて。御病氣の時は、誰彼れの見境はない。爰へ來て押して上げるがよい。

玉柏　ハイ、左樣なら、御免遊ばされませ〳〵。（ト袖崎が傍へ差寄り）モシ〳〵、こゝらでござりますか〳〵。

ト癪を押して思ひ入れ。その間に三升は屛風の外へ出て

三升　コレ〳〵、てまへ、おれが手代りに押へて上げるがいゝワ。モシ、袖崎樣、お氣には叶ひますまいが、私しが門弟內、團十郞が名代、必ず〳〵御遠慮なく

ト袖崎と顏見合せ

袖崎　モシ。

ト玉柏が手をとらへ、思ひ入れ。三升もこなしあつて

三升　風が當てやせう。

ト屏風を引廻す。時の鐘、獨吟になり、三升、ゆつたりとして梯子より下に降りる。又治、此うち花道より窺ひゐる。これより屏風へ目をつけ、そろ〳〵と舞臺へ來る。これまでに獨吟斷れる。又治、あたりを見廻し、持ちゐたる蜘蛛切丸を出し、拔いて蠟燭の明りにて、よく〳〵見て、また袋にてとつくりと拭ひ、上り口の上草履を取つて寢刃を合はせる仕組み。これにて唄一ぱいに切れる。また時の鐘、常の合ひ方になり、下家より、玉眼、唐裝束を脫ぎかけ、窺ひながら上つて來り、又治と顔見合せ、兩人とも花道へ行く。又治、小聲になり

又治　平太有風、すりやこの一腰が、源家の重寶蜘蛛切丸の劍とな。

有風　いかにも。正盛どのより先達て、伊賀壽どのへの一味のしるし。まツたこれなる讓り葉の御鏡も揃へてその節受取り參つた。この名鏡も成信どのへ。

ト懷中より三建目の鏡を出し、又治へ渡す。此うち袖崎、屏風の內より出かゝり窺ひゐる。

又治　すりやこれが讓り葉の（ト懷中して）この程某手に入れしこの書き物、これぞ正しく美女丸が臍

の緒。源家の血筋の素丁稚め、この蜘蛛切丸にて命を斷ち、刃に血汐をそゝぐ時は、源家の類葉調伏咒咀も同じ事。滅亡いたさす修驗の教へ。さるに依つてこの所へ身を忍ぶ美女丸方へ、娘の玉琴、入込ませ置いたるからは、彼れが手引で今宵の內に

ト件の書き物を出し、ちよつと見せて又懷中する。

有風　然らば拙者が後詰して、若し逃げ來らば美女丸を、どつさりばつたり。

伊賀　我れも御主君純友公の仇敵、源氏の身寄りを害するは、今宵娘が唐女のあの裝束、この身に纏つて彼奴らを討たば、主君の生立つ大明の、卽ち冠裝束。

有風　それと察して持參の冠、お渡し申さう。

ト唐冠を出し伊賀壽へ渡す。袖崎思ひ入れ。

伊賀　必ずともに取逃がすな。

有風　伊賀壽どの。

伊賀　行け。

有風　ハツ。

ト時の鐘になり、袖崎後にて思ひ入れ。獨吟、有風窺ひ〳〵、下家へ入る、袖崎は屏風の內へ入る

此うち伊賀壽、唐裝束、冠の形に身拵へする。唄切れる、合ひ方、時の鐘、伊賀壽、窺ひ〳〵屏風へかゝる。袖崎は窺ひ出る。兩人行當り、顏見合せ

伊賀　娘、玉琴。

袖崎　父上樣。

伊賀　美女は其方、戀に事寄せ

袖崎　屏風の內に

伊賀　出來した娘、手引に隨ひ

ト屏風の內へ踏込まんとする。玉琴縋つて

玉琴　父上、待つた。

伊賀　時刻が移る。

ト掻退けて行かうとする。玉琴きつと取着き

玉琴　お待ちなされて下さりませ。

伊賀　合點の行かぬ娘の玉琴、今宵の手番ひ云ひつけ置きしに、今更猶豫のこの體は。

玉琴　お助けなされて下さりませ。

伊賀　そりや何者を助けよと
玉琴　源家の公達、美女丸樣を
伊賀　ヤ。
玉琴　お助けなされて下さりませ。
伊賀　ヤヽ、なんと。
玉琴　サヽ、お前の大望、妨げ致すぢやなけれども、常々よりのお話しにて、源氏の身寄りを害する劍、誰をか斬らんと評議の内、お前の手に入る守りの書き物、美女丸樣と知つたるゆゑ、思ひ立つたる俄の企て。斯うノヽせいとの敎へに從ひ、親の爲ぞと仰しやるゆゑ、仕果せ見ればやごとなきまだ前ぶりの美女丸樣、いかに源氏へ敵對なす、伊賀壽が娘のわたしでも、手引いたしてあなたのお命、どうしてお前に討たされませう。モシ、かねての願ひか知らねども、どうぞあなたのお命は、お助け申して下さりませ。
伊賀　すりや、大望のこの期に及んで、丁稚が面體なまじひに、澁氣の拔けた若衆めゆゑ、おのれは色に迷つたな。
玉琴　イエノヽ、色には迷はねど、お前の榮えをあらせたく

伊賀　まだ吐かすか、不孝者めが。（トきつと引付け）色に迷はぬ心ぞと、口では云へどそりや僞り、色に迷ふに違ひない。おのれも伊賀壽が娘でないか。親の大望妨げなし、源氏の類葉見遁す心か。性根の腐つた畜生め。手引なれば、おのれも同罪、カウ〳〵。（ト思ひ入れあつて散々に打据ゑ）心の腐つた畜生め。

玉琴　お腹が立たばお前の手に懸け、たとへこの儘殺されても、わたしが心はお前へ孝道。親を大事と思ふから

伊賀　たとへ留立てひろぐとも、今宵の手筈はいつかな延さぬ。源氏の血筋の美女丸が、素頭刎ねるは蜘蛛切丸。これ軍神の血祭と、思ひ定めし伊賀壽が大望。おのれら如きの諫めは用ゐぬ。邪魔すゐるな。

玉琴　どうぞ今宵は

伊賀　エヽ、面倒な。

ト立廻つて燭臺倒れ、明り消える。これより忍び三重、時の鐘、暗やみの模様。伊賀壽過つて玉琴をあてる。これにてウンと倒れる。この物音に下家より、有風窺ひながら

有風　今の物音、氣遣はしい。

伊賀　コリヤ。

ト引寄せて囁く。有風呑み込み、白刃を抜いて二階の口へ立ち、逃がさぬ仕組みにて囲み居る。好き時分、玉琴心づき、屏風の内へ探り寄り、玉柏へ囁く。玉柏心得、梯子の口へ、ソカ／＼と行かうとする。有風暗やみにて白刃を構へる。刀の光に玉柏悄り窺ふ。その隙に伊賀壽は、窺ひ／＼屏風の内へ行き、玉琴窺ひ出るを、玉柏と心得、伊賀壽、玉琴を捉へ、頭を見て、女の髪ゆゑ手荒く突きやる。この時下座より三升、前幕の一腰を差し、窺ひ上り、玉琴を探り見て、逃げんとする玉琴の髷を、立廻りにて件の一腰にて切る。伊賀壽この聲に近寄るを、三升、玉琴を捉へ突きやる。直に伊賀壽受取り、頭を探り見て、髷は程よく切れてあるゆゑ、玉柏と心得、きつと引付け、刀へ手を懸け、思ひ入れあつて

伊賀　血をあやすれば名鏡の穢れ、其方密かに

有風　心得ました。

ト鏡を受取り、懐中して下家へ入る。三升立聞きして、跡を跟けて行かうとして、玉柏に行當り、探り見て囁き合ひ、三升、玉柏を伴れ、下家へ入る。此うち伊賀壽、玉琴を捉へ居る。玉琴、以前の文を咬へ、覺悟して聲を立てぬ仕組み。

伊賀　正しく美女丸、蜘蛛切丸の刃にそゝいで、源氏を調伏。その血祭りに

ト胸元を突きにかゝる。玉琴、この手に縋つて、伊賀壽の顔を今一度見たき思ひ入れにて、わつと聲立てようとして心付き、文を咬緊め、ぢッと思ひ入れ。伊賀壽は玉琴が胸先を突き通す。これにて「わつ」と倒るゝを、手早く首を打落し、返し板にてこの切り首、文を咬へ居る。此うち下家より、お高お房、紅絹の鉢巻、襷りゝしき形、一腰を差し、手燭を隱し窺ひ上る。伊賀壽、首を探り、見たき思ひ入れ。後へ捕り手二人、黒具の形にて上り來り

捕手　捕つた。

ト十手にてかゝる。伊賀壽透さず白刃を差付くる。時の鐘、喑やみの立廻りにて、二人を見事に切つて捨て、首の咬へし書き物を探り

伊賀　首級に殘る書き物は

トこの時藤馬實は大宅太郎光遠、先に前野の次郎、河野の小文治、今井の軍藤、堀江の藤太、肌ぬぎ大小りゝしく、上の方より、ばら／＼と取卷き

光遠　伊賀壽成信。

皆々　腕廻せ。

トこの時お高、おふさ手燭を差出す。伊賀壽、切り首を明りに見て、

伊賀　こりやこれ、娘玉琴。

治郎
藤太　捕つた。

　　ト かゝるを立廻り、きつとなる。この時書き物、ばら〳〵と解れる。

伊賀　こりやこれ娘が手跡のこの書置。さては美女丸、討ち洩らせしか、殘念な。

三升　美女丸君は御安泰、氣遣ひあるな、成信どの。

伊賀　ヤ、なんと。

　　ト 鼓の合ひ方になり、美女丸、肌脱ぎ、一本差し、若衆鬘にて、有風の切り首を持ち、跡より三升、鏡を持ち、下家より上がつて來る。伊賀壽兩人を見て

　さては美女丸存命よな。

三升　氣遣ひあるな伊賀壽どの、保昌樣よりお賴みにて、美女丸君を名乘らせて、役者の弟子で隱まひ者。これと申すもこなさんを、おびき出さうといふ狂言。さうとは知らず不便なは、あなたに代つて玉琴の

光遠　通辭と云ひしも源氏の侍ひ、大宅の太郎光遠。伊賀壽の手下の平太有風、毛唐人とは皆僞り。

三升　名鏡を所持する曲者、引ッ捕へて取り返し、直に斬うとは思ひしが、光遠樣の手にかゝり

美女　首級となつたる平太有風。

三升　この御鏡は三升が、きつと守護してこれ爰に。（ト鏡を見せる）。

たか　この茶屋町に忍びしは、保昌が娘小式部。

ふさ　二の瀬の源六近忠が妹みたらし。

榮吉　歌舞伎役者の我れ〳〵も、本名隱してこの姿、門弟中の本名は

桃太　河原の小文治ぬけみち。

小團　前野の次郎ちかふね。

市右　堀江の藤太つゝら。

榮吉　今井の軍藤引ふね、皆市川の

皆々　流れの末。

伊賀　さてはうぬらにやみ〳〵と、騙かられしか、殘念な。斯くなる上は我が本名、名乘り聞かさう。

某こそ、伊豫の椽純友が一族、伊賀壽太郎成信なるワ。

皆々　さてこそな。

伊賀　歌舞伎役者の市川三升、本名あらん、それを吐かせ。

三升　本名無くて叶はんや。お江戸根生の市川流、團十郎とは假名にて、誠は矢ツ張り市川團十郎、本名あれば本所二ツ目、お江戸の意氣地立川の、談州樓は三升連、焉馬の世話に成田屋の、七代續いた三升に、本名あつてたまるものか。誰だと思ふ、アヽ、つがもねえ。

光遠　最早叶はぬ太郎成信、これにて源氏へ

皆々　降參々々。

伊賀　小癪な奴等の。

光遠　ソリヤ。

皆々　動くな。

ト皆々ばら〳〵と棹に取卷き、きつと見得。

三升　まづ今日はこれぎり。

打出し

蝶鵆山崎踊

てふもひよくやまざきをどり

蝶鶼山崎踊

序幕

秋葉境內の場
清水寺の場
境木地藏堂の場

役名——濡髮長五郎。放駒長吉。まぼろし竹右衞門。竹右衞門娘、お早。橋本娘、お照。橋本若黨、左源次。倉岡下部、雁助。新丸木の仁右衞門。

本舞臺、三間の間、うしろ淺黃幕、草土手、板松の並木。上の方松の立ち木。この前に「大山道」と記したる傍示杭。田舍めいたる掛け茶屋、床几を直し、駄菓子、瓜、西瓜など並べ、幕の內より富士大山の道者大勢、割掛けの荷物、納め太刀、思ひ〳〵の仕出し。茶屋の亭主、皆々へ茶を運び居る。すべて相州赤間橋秋葉境內の體。大拍子の神樂にて幕明く。

ト東西より口々の仕出し出て左右へ別れ入る。

茶屋　サア〳〵、どなたもお茶をおあがりなされませ。その內には片蔭も出來ませう。

道一　イカサマ、晝の中は暑くて、道捗も行きませぬ。

道二　それ〳〵、今の内ゆるりとして、夜に入つて歩くがようございます。

道三　盆山なれば月はあるし、緩りとして行きませう。

道四　併し、日數の知れた富士大山、そのやうに怠けて居ては、內で案じませう。

道一　イカサマ、それもさうかい。そんならそろ〳〵行きませう。

道二　御亭主、世話になりました。

亭主　どなたも、お緩りとなされませ。

四人　サア〳〵、ござりませ〳〵。

ト矢張り、大拍子にて、皆々捨ぜりふにて向うへ入る。引違へて平方左源次、旅侍ひの形、跡より駕籠舁猪之、附いて出て來り

猪之　オイ〳〵、親方、見ればお前は何か尋ぬる樣子。駕籠でも入用なら、安く參りやせう。

左源　イヤ〳〵、おれが尋ぬる物は、馬駕籠ではない。外にちつと尋ぬる物が

猪之　外に尋ぬる物とは、人足でも要ると云ふ事かえ。輕子ならわしがやりませう。

左源　イヤ〳〵、其やうな事ではない〳〵。

ト舞臺へ來り

茶屋　これはお早うござります。サア、お茶あがりませ。

猪之　親方、そして何を尋ねさつしやります。

左源　外でもないが、足弱の女中のお供して、江戸へ下る者だが、この邊は富士大山の道者、その上お大名方のお泊りゆゑ、暮れに及べと、宿を取損うて難儀いたす。御主人の女中は、地藏堂へお待たせ申して置いたが、なんとこの邊に宿屋はあるまいか。

猪之　成る程、今時分は、其やうな事がいくらもござります。斯うなされまするがいゝ。この先へござつて、茶屋でも百姓家でも、譯を云つて、頼んで見さつしやりませ。

左源　然らばその邊へ參つて、頼んで見ませう。若いの、世話でござつた。

ト大拍子にて左源次下座へ入る。向うより雲助二人、四つ手駕籠を擔ぎ出て來る。猪之見て

猪之　てまへ達は好い仕事を取つたな。おれにも肩を入れさせてくれねえか。

雲一　誰だと思つたら、御所柿の猪之か。又おいらが仕事をかするのか。いま〳〵しいべら坊だ。

雲二　この旦那は、ゆうべ夜通しゆゑ、眠いと云はしつた。あんまり大きな聲をして、起し申してくれるな。

猪之　てまへ達は馴染の旦那か。

雲一　オヽヨ。品川の丸本の旦那よ。
雲二　この旦那なぞは、今は仕合せよ。金はしつかり、妾を連れて江の島參り。その疲れやらよく寝てござる。それだからおらが方の天神樣の唄にも、駕籠に乘るとも駕籠舁くな、中に客人寝てござる。と云ふではないか。
兩人　何を吐かす。
雲一　オイ〳〵、御亭主、水を一杯下さい。
茶屋　ハイ〳〵、只今汲み替へてあげませう。
ト手桶を持つて下座へ入る。
雲一　時に何ぞ、好いぐれでも來さうなものだが
猪之　今爰へ來た侍ひが云ふを聞けば、若い女を地藏堂へ、待たせて置いたと云つたが
雲一　そいつは好いぐれだ。なんと仕事にはなるまいか。
雲二　仕事と云へば、てまへ、この中の代物はどうした。
猪之　サア、聞いてくれ。お頭が折角盗んだ二幅の掛け物、一幅は捨賣りにしたが、餘まり詮議が嚴しいとて、頭がおれに預けたゆゑ、おれが持つて居るのよ。

ト一軸を出して見せる。

雲一　コレサ、駕籠に聞いて居る。静かに云へ〳〵。

雲二　旦那も起し申してもよからう。モシ、旦那々々。

ト起す。駕籠の内より丸本の亭主仁右衛門、垂れを上げて

仁右　アヽ、とろ〳〵とやらかした。もう立場へ來たのか。

猪之　モシ旦那、昨夜は嶋で大じやれと見えて、お疲れだね。

仁右　ナニサ、其やうな事ではない、大變よ。

三人　ハヽア、そりやァ何でござります。

仁右　サア、聞いて下さい。女を連れて大山から、江の島鎌倉へ來たところが、その女が途で駈落ちをしたゆゑ、方々尋ねたら、おらァがつかりしたのよ。

雲一　そりやァ大變、抱への子供衆か、お娘御かえ。

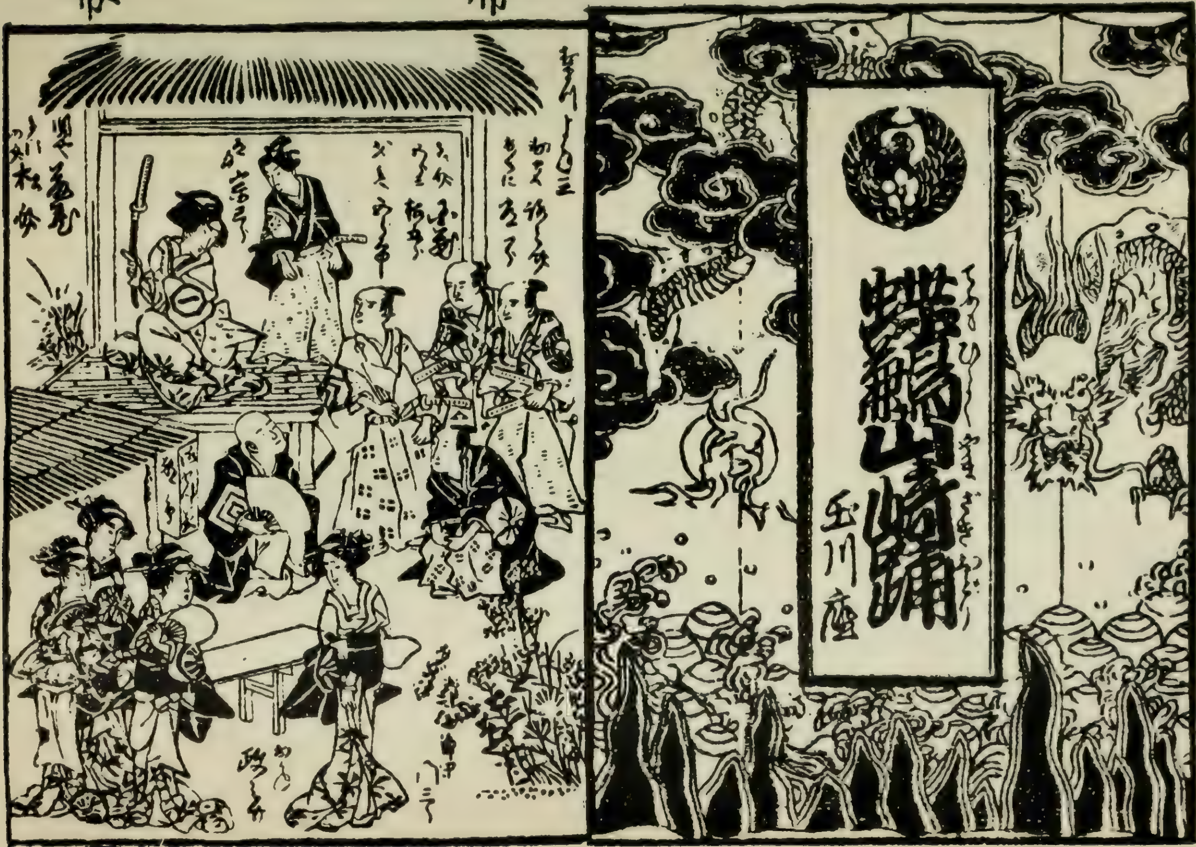
仁右　恥かしい事だが、その女はおれが妾よ。毎晩〳〵泊りで、うるさいと思つて逃げたであらうが、今にでも捕まへたら、貸した金だけは取つてやらにやァならぬ。おぬし達もこの道をがんばつて下さい。その女をつかまへたら、酒手はしつかりだワ。

三人　さうしてその女は
仁右　大和屋といふ代物よ。
雲一　畏りました。そいつは好い仕事が出來たわえ。
雲二　そんならこの筋をがんばらう。
猪之　登りは知れたお關所なり
雲一　江戸へ下るは知れた事。
仁右　三人の衆、頼みました。
三人　合點でござります。

ト大拍子になり。三人捨ぜりふにて駕籠を持ち、向うへ入る。引違へて向うより旅中間雁助、狀箱を首にかけ出て來り、直に舞臺へ來て

雁助　それにござるは、江戸品川宿丸木の、仁右衛門どのではござらぬか。
仁右　お前は倉岡丈左衛門様の御家來衆、どれへござります。
雁助　わしは、お旦那丈左衛門様の御用で、其許様のお宿まで參るところ。ヤレ〳〵、好い所でお目にかゝりました。

幕　席



仁右　火急のお使ひと見えますが、して、その御用は

雁助　委細はこの状箱。中の品をお受取り下されい。

ト狀箱を渡す。仁右衛門、中より袱紗包みの折紙を出し

仁右　ヤ、お手紙と思ひの外、この品は。

雁助　外でもござらぬ。菊池の重寶龍虎の掛け物は、南方十次兵衛が忰放駒長吉、南與兵衛の忰濡髪長五郎、この二人にて、龍虎二つを預かり居るところ、先達て紛失ゆゑ、兩人の者はお國を追放それがお旦那の幸ひとなり、丈左衛門様は今では出頭。併しながら、その一軸が手に入れば二人は歸參、それでは何かの妨げゆゑ、跡に殘つたこの折紙、二品が手に入つても、この折紙が無ければ歸參は叶はぬゆゑ、旦那が持つてござれども、餘りに詮議が厳しいゆゑ、手許にあつては如何と存じ、心の知れたおてまへゆゑ、暫くが間お預け申してと、主人の口上でござります。

仁右　遠路の所、御苦勞でござりました。左樣ならこの折紙は、私しが慥かに預かりましてござる……これにつけても、人の果報は知れぬもの。丈左衛門どのは、元は輕い身分でござつたが、段々立身して今では大金持ち。その上お首尾に任せ、代官の山崎與次兵衛、忰與五郎もろとも退役させ

雁助　跡役は丈左衛門様。又同役の橋本治部右衛門も、何彼の邪魔になるゆゑ、毒を盛ツて二人殺せば

仁右 此奴も家は斷絶。それゆゑ娘のお照も、御陣屋へぼッ拂はれて、江戸へ下るとの噂。今では上見ぬ鷲の丈左衛門どの、その手傳ひをしたはこの仁右衛門、それゆゑ多くの分前を取りわしは今では町人となり、品川で泥水商賣。恩になつた丈左衛門どのゝお頼み。大切なるこの折紙、命に懸けて預かりました。

ト この前よき時分より、左源次出かゝり居て

左源 二人ともに、動きやァがるな。

仁右 ヤ、こなたは

雁助 治部右衛門の家來左源次だな。

仁右 そんなら何かの様子を

左源 残らず後で立ち聞いた。治部右衛門様を毒害なし、まだその上にお家の重寶、一軸の折紙と聞いては見遁しならぬ。此方へ渡せ。

仁右 おきやァがれ、命に懸けて預かる折紙。

雁助 うぬに渡してたまるものか。

左源 所を斷うして

ト大拍子になり、左源次折紙を取らうとする。雁助支へる。三人立廻りのうち、左源次折紙を持つて駈出すを、仁右衞門、雁助、跡追つ駈け向うへは入る。知らせについて前の道具を引いて取り、後の淺黄幕を切つて落す。

本舞臺、一面櫻の花盛り、向う朱塗りの高欄、長足の舞臺、誂への石段、音羽の瀧壺、一體結構にして好みの通り、すべて洛陽淸水花見の體。しやでんの囃子、大どろ〳〵にて道具とまる。

ト舞臺よき所よりめつきの蝶々二羽、日覆へ引いて取る。誂への鼓唄一トくさり切れる。好みの鳴り物になり、放駒長吉、前髮鬘誂への拵へ、深編笠、大小にて、一軸の箱を持ち、濡髪長五郎、前髮鬘、これも誂への形、深編笠、大小にて、一軸の箱を持ち、長吉の鐺をとらへ、支へてゐる見え。右の鳴り物にて、この兩人を見事にせり上げる。ト長吉鐺を振切り、又支へて一軸の箱を枷に、ちやつと立廻りに、編笠取れて、兩人きつと見得。

長吉　書帙の下に曉之夢猶眠不忘絲芬芳たりと、滿花盛んの淸水に、歸り詣での下向にそれと

長五　見れば覺えのその一軸、所持して同じいでたちに、笠の眉深を訝かしく

長吉　覗けば以前の朋友たる

長五　元は菊池の奥小姓。

長吉　角ある中の角前髪。
長五　南方十次兵衛の御子息。
長吉　南與兵衛の御子息。
長五　互ひに程經し
長吉　この年月、久々にて御意得申した。
長五　まづは堅固で、放駒長吉。
長吉　濡髪長五郎。
長五　ハテ、好い所で
長吉　逢ひましたなア。

ト思ひ入れ。肥前節のやうな合ひ方。

長五　正しく所持なすその品は、菊池の重寶、呉道子が龍虎の一軸。
長吉　離れ〴〵の紛失ゆゑ
長五　對に揃へて折紙もろとも
長吉　お上へ差上げ、歸參を願ふか。

長五　おんでもない事。
長吉　それは此方も同じ事、龍虎二幅はおれの手柄に
長五　イヽヤ、身共が差上げて、元の本地へ立歸り
長吉　菊池の小姓長吉も、預かる寶の紛失ゆゑ、扶持も知行も放れ駒、一代野馬で暮らさうより、歸參をすれば槍置馬、その馬場先を支ふれば、切るとも突くとも武門の法。それとも命が惜しいと思はゞ、その品身共に渡して行け。
長五　小ざかしいその一言。小鍛冶が鍛へし劍で打つとも、忠心無二の鐵拳、六具甲冑帶せしより、惣身は濡れ髪、鈍刀金が、ナニ立つものか。こま言云はずと此方へ渡せ。
長吉　その爭ひは無益の至り。
長五　互ひに武士の
長吉　意氣地と
長五　意氣地。
長吉　刀にかけて
長五　外に助太刀とてもなく

長吉　水も交えぬ清水の
長五　花の盛りの華々しく
長吉　散るか。
長五　散らぬか。
長吉　互ひの勝負は
長五　薩陀の功力と
長吉　天に任せて
長五　イザ
兩人　イザ〱〱

ト雙方詰めより、箱を枷にちやつと立廻り。「ドッコイ」と思ひ入れ。誂らへ、華やかなる鳴り物になり、兩人石段のタテ存分あつて、トゞ石段のよき所へ行く。立廻りの刀過つて兩人相討ちになりたぢ〱と思ひ入れあり。

長五　長吉。
長吉　長五郎。

長五　これで互ひに遺恨もなく

長吉　未來は一つ旅の道連れ。

長五　門出を祝うて歌ふまいか。

長吉　イカサマ。（ト苦しき思ひ入れあり）一張の弓の勢ひたり。

長五　東南西北の敵を容易く亡ぼせり。

長吉　サヽ、笑うて死にやれ。

長五　いかにも……フヽヽ。

長吉　ハヽヽ。

兩人　ハヽヽヽ。

トこなしあつて互ひに刺し違へ、がつくりと思ひ入れ。一ツ鉦入りたる合ひ方、時の鐘になり、黒幕を振り落す。誂への通り、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、上の方誂への地藏堂、下の方同じく念佛堂、眞中大きなる傍示杙、これに「武藏相模の國境」としるし、すべて東海道境木、地藏堂の闇夜の體。窓ぶたを卸し、時の鐘にて道具と

まる。

ト双ばんの入りたる馬士唄の合ひ方になり、花道よりお早、振り袖娘、江の島參り、駕籠より出たる儘の形にて、百度參りの緡を持ち、東の花道よりお照、屋敷女中の拵へ、これも駕籠より出たる拵へにて、百度參りの緡を持ち出て來る。兩人上下の堂へ百度參りの事よろしくあつて、トド百度の緡を納めたる心にて、兩人こなしあつて、左右に別れ

はや　南無延命地藏樣、どうぞわたしをお助けなされて下さりませ。父さんの貧苦ゆゑ、僅かな事で仁右衞門樣の内へ行つたれど、勤め奉公といふでもなく、わたしを抱へ、江の島詣りに伴れて來て毎晩泊り〳〵で、旦那さんがうるさうてならぬゆゑ、駕籠より出て、爰までは逃げて來たれども

てる　江戶に知邊の便りもなう、故鄕を離れ、長の旅路。アノマア左源次は、宿を取りに行きやつたが何をして居やる事ぢやゝら。行く先とても知れぬ道筋。このマア暗い事わいの。

はや　此やうな時お賴み申すは、神佛樣より外は無いゆゑ

てる　聞き及んだ地藏樣、お百度は上げたれど

兩人　折惡い雨曇り。

ト互ひに暗き思ひ入れ。





はや　女中さんさうなが、お前も地藏樣へ、御參詣でござんすかえ。
てる　暗うて見えませぬが、左樣仰しやるお前さんも
兩人　お氣の毒な事でござんすな。
　　トかすめたる雷鳴の音になり、以前の蝶々二ッをの堂へ引いて取る。兩人空を見合ひて
はや　御覽じませ、どうやら雷さんが
てる　その上雨もほろついて參じました。
はや　幸ひ此お堂で
兩人　雨やみ致して參じませう。
　　トお早は下の堂、お照は上の堂へ探り寄る。この時左右の堂の内にて、人音するゆゑ、兩人悑りして窺ひ居る。上の堂より長吉、ぐれの拵へ、いさみの形。下の堂の内より長五郎、大山詣り町人の形。双方よき途端に出て來り、目の覺めたるこなし、ほつと思ひ入れあつて
長五　ヤレ〳〵、飛んだ夢を見た。
長吉　これといふも、二ッの寶が欲しいゆゑと
長五　心に思ふはこの冷汗。

長吉 併し身に金が入ると云へば
長五 こいつは工面が
兩人 直るわえ。
　　　　トこなし。此うちお早、お照、氣味惡き思ひ入れにて
はやてる モシ、お前方は
　　　　ト耳元にて云ふゆゑ、長吉、長五郎恂りして
兩人 イヤア、化け物。
　　　　ト思ひ入れ、長吉、よく／＼考へて
長吉 待てよ。今のは慥か女だが、ハヽア、聞えた。
長五 お前方は村の女中、この地藏堂へ
長吉 出逢ひに來たのか。
兩人 畜生め。
はやてる イエ／＼、わたしらは其やうな者ではござりませぬ。
はや 江戸へ行く者でござんすが、雨がぽろついて參りましたゆゑ

てる　雨宿りして居りました。

はや
てる　して、お前方は

長吉　わしやァ馬士……イヤ、馬にも乗つて、槍一本の主だが、仔細あつて夜行いたす侍ひでござる。

ト嚴しく云ふ。

長五　晝の中は暑いから、日暮れ方から大山參詣の町人……イヤサ、朝廷より御綸旨受けたる旅僧でおぢやる。これより江戸へ歸院いたす。

トこれも嚴しく云ふ。

はや
てる　それは幸ひ、そんならどうぞ御一緒に江戸までお連れなされて下さりませ。

長吉　隨分送つて遣らうが、その代り

兩人　禮には幸ひ辻堂で

トめい〳〵囁き思ひ入れ。

はや
てる　サア、どうなと致しませうが

ト兩人身體を探り見て

はや　エヽ、御出家樣と思ひの外、此お頭や身の廻り。

てる　お侍ひさんでもないものを、人を騙して

はや
てる　憎いお方でござんすな。

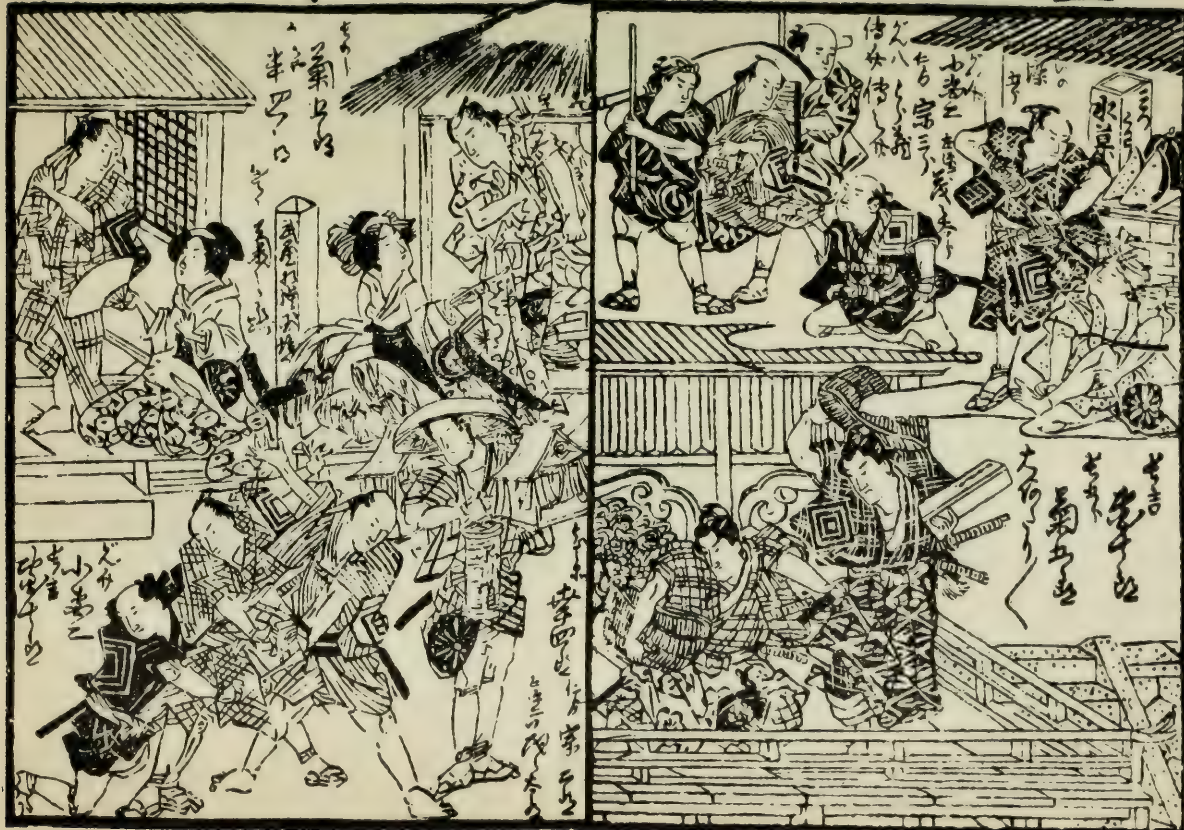
ト身を背ける。この時大雷烈しく鳴る。「アレ」、「モシ」トお早は長五郎、お照は長吉に寄添ふ。此はずみに堂の内へ狼狽へて入る。こなしあつて戸をしやんと締める、禪のツトメ、雷鳴の音にて、向うより左源次、以前の折紙を持ち、跡より仁右衞門、雁助追ひかけ出て、立廻り、舞臺へ來て

仁雁　その品渡せ。

左源　何を小癪な。

ト三人、折紙を枷に立廻り。向うより幻竹右衞門、老けたる拵へにて、大山御神酒の荷を擔ぎ、品川講中と記したる提灯を持ち出てこの中へ入り、思はず彼方此方と突廻され、提灯を消し、暗き思ひ入れ。この時竹右衞門、荷の上に付たる絹風呂敷に包みし大山の札守りを落したるゆゑ尋ねる。三人も立廻りに折紙を落し、これも尋ねる。雁助、折紙を拾ひ行かうとする。左源次探り寄つて雁助を支へるゆゑ、是非なく後の境木のもとへ打込み、木隱れする。この內、竹右衞門、札守りを拾ひ取るを、仁右衞門探り寄つて、竹右衞門の持つたる札守りを折紙と心得引つたくり

二幕図



仁右　大事の一品、忝い。

ト左源次この聲を聞き、取らうとする。竹右衛門、仁右衛門を留めて

竹右　コレサ、そりやァわしが頼まれ物だ。

仁右　何を此奴が

ト兩人を突飛ばし、件の札守りを折紙と心得、大事に持つて逸散に下座へ入る。左源次追駈け入る
竹右衛門、うろ〳〵して、「コレサ〳〵」と行かうとする。この時堂の内にて人音するゆゑ、竹右衛門窺ひ居る。右の堂より、めい〳〵女形の手を引き出て來て、四人囁き合ひ、お早は扇蝶の簪を後の證據といふ心にて長五郎に渡す。お照も同じく菜種の花菊蝶の散らし繪の扇を長吉に渡す。よき時分小隠れしたる雁助窺ひ出て、覺えある境木の元へ探り寄り、右の折紙を取つて行かうとする。竹右衛門探り寄つて、思はず雁助が持つたる折紙へ手を掛け、今の札守りと心得取らうとする立廻り。この内四人も窺ひ居る。竹右衛門右の品を引つたくる。又かゝる雁助が脇差を探り取つて

竹右　泥坊々々。

と云ひながら抜き身を振り廻す。この時下座より仁右衛門、左源次、札守りを奪ひ合ひながら出る。お照、お早「アツ」と云うて驚く。長吉、長五郎、女形兩人をいとふゆゑ狼狽へる。これにて八人ごつちやになり、この紛れに思はず左右へ入り代り、お早は長吉、お照は長五郎。この内仁右衛門、

件の品を持ち向うへ行くを、左源次追ひ駈け入る。長吉、長五郎も、めい／＼入り代りたるを知らず、女形の手を取り行かうとする。竹右衛門、風呂敷包みを見て

ト雁助窺ひ寄つて

大事の物を既の事に

雁助　その折紙を寄越しやアがれ。

トかゝる。

長吉
長五　ナニ折紙とは

ト探り寄つて竹右衛門の持ちたる折紙へ手を掛ける。立廻り。包み解けて中より折紙出る。これを引合ふはずみに、折紙は竹右衛門の手へ殘る。この內雁助、起上がつて、刀を拾ひ取つてかゝるゆゑ、お早、お照思ひ入れ。竹右衛門は雁助を見事に撲り倒し、折紙を星影に透し見る。この仕組みよろしく、拍子

幕

二幕目

花屋敷の場
水神の森の場

役名――菊池多門之助。倉岡丈左衛門。三原有右衛門。沼江五郎次。寺島良助。奥女中、關屋。五百崎淨閑。山崎與次兵衛。山崎與五郎。橋本若黨、左源次。倉岡下部、雁助。百姓、野手の三作。倉岡中間、下駄の市助。高麗屋錦升。成田屋三升。音羽屋梅幸。大和屋杜若。濱村屋路考。山崎娘、お關。藝者、お松。

四建目役觸れ濟むと、弘福寺の禪のツトメ、てんつゝ交り、左右より仕出しの若い衆大勢出で來り

△ なんとマア、菊塢の朝顔は、ありや餘國にはござるまい。誠にお江戸は有り難い所でござるわいの。

○ さやう〳〵。耳には聞けど、目に見ぬ物は多くござるぢや。わしらは今度、秋の七草の揃うたを始めて見ました。

□ 聞けば今日は、江戸役者が打揃うて、朝顔見物に來るといふ噂でござる。

× 役者揃ひを見たいものでござるて。

△　わしらはこれから向うへ渡つて、二藤で綴りと支度いたして、晩には燈籠としやれませう。

三人　これはお供いたしたいな。サア〱、参りませう。竹やア〱。

ト呼びながら、件の鳴り物にて幕の引付へ入る。二度目の知らせにつき、鳴り物、流行り唄になり、賑やかに幕明く。

本舞臺、三間の間、庵崎菊塢庭先、秋の七草盛りの體。正面に伊豫簾を懸けたる大和葺の亭座敷上の方、朝顏搦みし枝折門仕立の四ツ目垣、長床几に掛行燈、下の方に「秋の七草」といふ誂への傍示。その外この道具正うつしに飾り、花屋敷の隱居 淨閑、坊主鬘、十德の形にて、屋體には短册箱卓の上に隅田川の繪圖、朝顏の名寄せ懷紙類を載せ、花を活けて居る。女藝者お松、女中おせん、おくに、おかれ、おきよ、いづれも對の浴衣、對の前垂れにて、朝顏の團扇を持ち、草履下駄にて、手桶又は漏斗にて花へ水を打つて居る見得よろしくあつて

淨閑　コレ〱、てまへ達もいひつけて置く通り、今朝未明に菊池家の若殿、多門之助樣のお入り、庭の掃除も、よいか〱。

せん　ハイ、そりやモウ、私どもゝ如才なう、隨分お庭の掃除は致して置きました。なうお國どの。

くに　おせんどのゝ申しまする通り、若殿樣の秋草御賞覽と承り、定めて奥のお女中方も、お出であらうと昨夜から

かね　爰にござんすおきよどのなどは、髪を結ふので、夜ひとよ懸りましたわいな。

きよ　これはしたり、おかねどのゝ又惡口、有やうは奥向のお女中樣ぢやござんせぬ。今朝來なさんす葺屋町のお役者方に、思はれたさの朝化粧かえ。

まつ　大方そこらでござんせう。わたしも昨夜からお宅へ參つて、淨閑樣の殊ないお世話。モシ、御隱居樣、お前もちつとお磨きが、ありさうなものぢやぞえ。

淨閑　成る程、これは尤もぢや。我れらも有やうは若やいで、付け鬢でも致せばよかつたに、エヽ、昨日鬘屋の友吉へ便りが有つたに、殘念な事をしたわえ……コレ〳〵、もう若殿のお舟が着いたであらう。てまへ達は、お迎ひに〳〵。

四人　畏りました。サ、ござんせいな。

　ト流行り唄になり、お松始め、七草の扇團扇を持ち、草履下駄にて向うへ入る。淨閑思ひ入れあつて

淨閑　若殿樣はもうお出でゞあらうが、あの葺屋町の立者衆は、どうでも手間が取れやう。どうぞ朝凉の内ござればよいが……ドリヤ、其うち秋草へ水打つて置きませうか。

ト誂への漏斗を出し、水を打つ事。太鼓入り、賑やかなる鳴り物になり、向うより、沼江五郎次、寺島良助、袴ばかりの形、大小にて、お先を拂ひ、菊池多門之助、羽織袴、大小、若殿の拵へ。關屋、練絹の帽子、奥女中にて跡に附き、三原有右衞門、袴大小、跡よりお松、おせん、お國、おかれ、おきよ、いづれも籠莨盆、褥その外手廻りの道具を、めい〳〵持つて出て來り、直に舞臺へ來る。女形皆皆先へ廻り、長床几へ褥を敷き、多門之助、腰を掛ける。皆々よろしくすまふ。淨閑手をつかへ

淨閑　これは〳〵、若殿樣にはお早いお入り。淨閑めが物好きの朝顏、殊には植ゑ置きましたる秋草の盛り御大家のあなた樣方の、お慰みのため未明のお入り、冥加至極もなき仕合せ、有り難う存じ奉ります る。

關屋　若殿樣へ申し上げまする。これが卽ち花屋敷の主、庵崎淨閑、綽名は菊塢、お詞を下さりませう。

多門　すりや、其方が、この主、淨閑とな。今日はこれなる有右衞門が勸めに依り、未明に參りし隅田川、聞きしに勝る秋草の盛り。物好きしたる朝顏も、又一しほの好い眺め、多門之助、滿足に思ふわやい。

淨閑　ハツ。

ト平伏する。

有右　聞き召されたか淨閑どの、若殿樣には御意に叶ひし只今のお詞、お勸め申した有右衞門なぞ、別して大慶。なんと御兩所、左樣ではござらぬか。

五郎　いかにも、三原氏のお云やる通り、菊池家の若殿樣、お心に叶へばこそお褒めのお詞、斯く申す沼江五郎次を始め

良助　お供いたせし寺嶋良助、我れ〳〵ども、至つて恐悦仕つる。

關屋　いかにも、おの〳〵方の仰せの通り、若殿樣の御機嫌の體を拜しまして、かく申す關屋なども、別ましての悅び。それにつきまして承りませうは、今朝未明より、歌舞伎役者を御馳走に、お召しなされしとの奥向の取沙汰。淨閑どの、いよ〳〵左樣にござりまするかな。

淨閑　成る程、その儀も丈左衞門樣より先達て、御沙汰ござりまして、當時名高き歌舞伎役者、殊には別ての御馳走に、正眞正銘混り無し、お江戸根生の江戸役者、水道の水の混りなし、皆江戸前の立者と、朝顏盛りの朝の內、お目に懸けるが淨閑の思ひつき、これは外でも出來ますまい。憚りながら御前よしなに、有右衞門樣、御披露なされて下さりませ。

有右　イカサマ、これは一段と好い趣向。若殿樣、お聞き遊ばされましたか。これは至つて見物事でござりまする。

まつ　左樣でござりまする、それゆゑにこそ此やうに、秋草揃ひの前懸も

せん　倉橋樣のお物好き。桔梗、苅萱、破木香。

くに　上々方は藤袴、尾花が中の女郎花。

かね　萩もあらはに男へし、紫苑、撫子、紅の花。

きよ　野菊、射干、葉鷄頭、瑠璃朝顏も一樣に、色を染め出す花屋敷。

淨閑　別て庵主が若殿へお慰みには、これ〳〵。

　　　ト籠に入れたる都鳥を取出し

これが即ち東路の、隅田川にて名にふれし、鷗とも又都鳥、いざこと問はんと歌人の、詠み置かれたるこの鳥を、のどけき空へ放すが御馳走。

三人　こりや一段と好い趣向。

淨閑　菊塢が庭へ都鳥、霞たつ空へ、放し鳥〳〵。

　　　ト籠を明け鳥を放す。羽音して都鳥六七羽、トヒヨになり空へ飛ぶ。ト羽の間に仕込み置きたる紅白の花瓣一度に吹散る。皆々見て

關屋　これは一しほ庵主の御趣向。

三人 やんや〳〵。

ト摺り鉦入り、蟲の音、誂への唄、賑やかなる鳴り物になり、揚幕より濱村屋路考、大和屋杜若、紫置き帽子、對の羽織、草履下駄、銀張りの團扇を持ち、成田屋三升、これも一對の形、草履下駄、派手なる扇を持ち、跡より高麗屋錦升、これも一對の姿、跡より音羽屋梅幸、これも同じ拵へ、五人揃ひの秋草朝顔を染めたる形、絞りの袷帷子なりとも浴衣なりとも、隨分派手なる揃ひの形、尤も一人づゝ揚幕を開かせ、鳴り物、出の唄、立役女形も別々に一人づゝ、當りのある誂への鳴り物。右の順にて花道へ華やかにすまふ。鳴り物をかすめてトヒョ、花瓣ちら〳〵と散りて都鳥舞うて居る。路考これを見て

路考 名にし負ふ、鳥の行くへや花屋敷。モシ、太夫さん、あの空に舞うて居るのが都鳥とやら。そして、アレ〳〵、鳥の翼から、花が散るやうに見えますするぞえ。

杜若 あれは大方菊塢さんが、お屋敷のお客へ御馳走になされた、思ひつきと見えるぞえ。モシ、三升さん、アレ〳〵、あの嘴と足の赤いのが、慥か都鳥といふのだね。

三升 左樣々々。あの霧の中に白く舞うて見えるのが都鳥にて候ふ……おきやァがれ、飛んだ渡し守だ

錦升 川には白く又黑く赤みのあるは、あれは卽ち名にふれし、西瓜の皮の流るゝにて候ふ……常磐津

の文句で、古い淨瑠璃よ。

梅幸 「鳥の名の都となりぬ梅屋敷」……成る程、益賀さんの碑の通り、誠にこれが、花の東に花の都、朝露を受けた朝顔の庭は、やはらかめが又格別なものだね。

三升 それと云ふも、お前も爰に寮があるが、第一隅田川といふ地名が命だ。向うに大江戸八百八町、富士と筑波を右左、その眞中にござるから、大晦日まで花を絶さぬ菊塢の丹精、誠にあの和尚は寢ても見るのは花の夢。

錦升 そいつは飛んだ蝶々だ。したが、この秋草の鹽梅は、どうしてこれが外にはあるまい。

皆々 イヤ、見事々々。

淨閑 イヤ、その見事より、五人揃ひが一しほ見事、歌川風の錦繪同然。イヨ大和屋に濱村屋、高麗屋に成田屋、おらが隣りの音羽屋ア。

女皆 何を仰しやりますぞいな。

淨閑 サア〳〵、どなたも、これへ〳〵。

五人 左樣なら、御免遊ばされませ。

ト賑やかなる鳴り物にて、五人は會釋あつて舞臺へ來る。

淨閑　これは〳〵、皆打揃うて好うぞやお出で。庵主の淨閑、滿足々々。卽ちあれに若殿樣。サヽ、御前へ〳〵。

錦升　これは淨閑樣、今朝はお招ぎ、有り難う存じまするが、モシ、御庵主樣、左樣ならば御大家の若殿樣が

淨閑　左樣々々、しかも菊池多門之助樣。貴公達をお招きあつて、未明より御入來なされてぢやて。

杜若　これはしたり、左樣存じましたなら、上下など用意致しませうに、私しどもは誠に朝顏見物とばかり存じまして。

路考　太夫さんの仰しやる通り、內を出る時急ぎまして、申さば役の間ゆゑ、誠に心が急きまするわいな。

三升　モシ〳〵、淨閑樣、浴衣の形でよい程に、必ず早うのお手紙に、私しお株の朝寢坊、大きな目をやう〳〵覺して參りました。

梅幸　そんなら斯うしやせう。わたしが內へ袴を取りに走らせませうが。アヽコレ、何を云つても太夫さんと濱のには、わたしが內の袴はどうも

淨閑　アヽ、コレ〳〵、お隣りの御亭主、その御心配は決して御無用。若殿樣の御前とあらば、大方拵

へも、定めし時代であらうから、そこを出し拔けに、樂屋着の姿が御覽なされたいとのお好みゆゑ、わざと沙汰を致さぬぢや。サヽ、お側へ寄つて、お目見え〳〵。

錦升　でも、餘り無躾にござりませう。

淨閑　ハテ、そこが上々方の御一興でござるて。

錦升　左樣なら御免下さりませ……サ、太夫さん、お先へ。

杜若　親方、お前お先へ。

ト會釋あつて皆々よろしくすまふ。有右衞門、よく〳〵見て

有右　イヤナニ關屋どの、御覽じたか。斯く申す有右衞門なぞは、役者の素顏を始めて見ました。これが誠に、當時流行りの役者の朝顏。

關屋　左樣でござります。今朝の御趣向を、奧向にてお聞きなされて、私しが今日のお供を、羨まぬ女中方はござりませぬ。その代りお賴み(り)お袱紗、扇。イヤモウ、山ほどござりまするわいな。

淨閑　左樣々々、これへお扇子を持つて來やれ。

まつ　アイ〳〵。

ト皆々手傳ひ、五本入りのかけ流しの扇箱、その外袱紗、團扇を大分取出す。

錦升　これはマア、冥加もない、有り難い仕合せでござりまする。即ちこれなるが岩井半四郎、瀨川

　トめい〳〵引合さうとする。

淨閑　これはしたり、高麗屋の親方、其お引合せには及びませぬ。主方を御存じないお方が、天が下に

あるものかい。矢張りその儘に、サヽ、お側へ〳〵。

錦升　それは冥加至極もござりませぬ。有り難う存じまする。

淨閑　コレ〳〵、女ども。お杯を〳〵。

女皆　アイ〳〵。

　ト銚子、杯、大鉢の類、結構なるわき取りに載せ、めい〳〵運び出す。

女皆　サア〳〵、お酌いたしませう。

　ト立ちかゝる。

錦升　イエ〳〵、餘り早朝と申し、殊に役前でござりまするから、御酒の儀は、御容赦なされて下さり

ませ。

有右　イヤ、大役を引受けては、その筈の儀でござらう……時に杜若丈、ちとお願ひがあるが、何ぞ其

許、あの路考丈を相手に致されて、少しばかり彼の踊りの手事なぞは、拜見が叶ふまいか。

杜若　ハイ、折角のお賴みでござりまするが、その用意の心懸けで上がりますれば、文字太夫、式佐なぞも召連れまして、衣裳、鬘等も持參仕りませうに、お殘り多う存じまする。
有右　左樣承つては、身共なぞも至つて殘り多う存ずるて……併し、三升丈の不斷仰せらるゝ、アヽつがもないと申す詞がござるが、あのお詞に、彼の怒るゝ顏色を差加へて、兩眼見開き睨まる狂言位は、拜見が叶ひませうか。それも御用意が無うては、眼中の運びなども、相違いたす儀もござらうかな。
三升　ハイ、素顏で睨みましても、却つてお慰みには相成りますまいて。
淨閑　モシ、三原樣、それを又とくに私しへ仰せられまするると、何か好い趣向もござりませうに、殘念な儀でござりまする。此お顏では何でも出來まする。まづ助六もあり、總角もあり、意休は勿論白酒あり、この趣向は、卽ち菊塢の庭から出ました。
五人　エヽ、この庭から助六の趣向が
淨閑　コレ、庵主はわしなり、皆朝顏でござります。ハヽヽ……さて、どなたも今朝御披露いたすは、今年も又菊塢上京いたすで、肝心の時分お目に懸らいで、アヽ、殘り多うござります。サアノヽ、どなたも、寛いで安坐なされて、緩りとお話しと申したいが、どなたもお役前で嘸お忙しながら

うが、どうぞお扇子へ、めい〳〵の御發句を願ひます。

　　ト扇を大分出し

扨てこの扇子を、大和屋の太夫さんへは、御紋に合せて三本、即ち三つ扇の心。

　　ト三本頼む。

梅幸　定めてわたしには、重ね扇で二本ぎりとは、有り難うござります。

淨閑　サ、その重ね扇も、五ツ所紋にすればその數十本。

　　ト渡す。

三升　わたしが紋は、こいつは引あてになるまい。

淨閑　イエ〳〵、そこを捻つて、この扇を、斯う〳〵〳〵、四角に取つて即ち四本、三升に見立てゝ三
四十二本。

　　ト渡す。

錦升　わたしが三ツ銀杏も、太夫さんと同じ事で

杜若　三ツ扇とあひこうかえ。何ぞ外にござりやせう。

淨閑　さう詰められては大の閉口。

路考　わたしが結綿はえ。

淨閑　あるの〳〵。卽ち結綿は七五三、その數お前へ十五本。

　ト渡す。

併し、めい〳〵お宿へお歸りでよし。

路考　晩ほど認めて置きませう。

有右　コレ〳〵庵主、我れ〳〵どもが罷り居つては、どうか窮屈な樣子と見受けたが

錦梅三　イエ〳〵、どう致しまして。

有右　イヤ〳〵、左樣見受けた〳〵。

淨閑　これは三原樣のお詞、きつい通り者〳〵。

有右　通り者か〳〵。

淨閑　サ、その通り者のお詞に甘えまして、暫くこれにて五人の衆は御休息。若殿樣もあなた方も、粋を通して後に逢はう、さらばだと、仰やるところなぞもようござりませう。

有右　その通り〳〵、少しの間、若殿樣には

關屋　庭の千草の色品を

女五　私しどもが御案内。

多門　菊塢も一緒に

淨閑　サア、入らつしやりませ。

　ト唄になり、皆々入る。杜若、路考、梅幸、錦升、三升殘つて、思ひ入れあつて

三錦梅　アヽ、これで延び〳〵とした。

杜若　お幼少くても、上つ方の前だけに氣が詰まるね。

梅幸　モシ、太夫さん、遲うはあるまいかえ。

三升　ハテ、好い時分には迎ひが來るわな。

錦升　時に音羽屋のは、酒はどうだ。

梅幸　イヽエ、この頃たべやせぬ。

三升　さう云つても、三年振りでお前には逢つたの。

杜若　さうサ、お前は三年振りだが、わたしやァ久しく一座をしやせぬ。

梅幸　左樣サ。

路考　わたしやァ未だ、ろく〳〵に、梅幸さんとは御一座を

錦升　さうであらうの。音羽屋の、濱のを賴みます。

梅幸　アイ〳〵、ちつと遊びに來なさい。

杜若　錦升さん、お前御酒はえ。

錦升　アイ、今日は幾日だの。

三升　ナニ、お前の禁酒の日は、昨日が鬼子母神の御緣日であつた。

錦升　そんなら一口やつて行かうか。マア〳〵、音羽屋の、お前始めねえ。

ト大猪口を獻す。

梅幸　マア〳〵、成田屋の、お前始めて。

ト大猪口をさす。

三升　どうして、わたしやァこれで飮むと箆坊に醉ふ。梅幸さん、お前これで始めなさい。おいらはこの小さい猪口で始めやせう。

ト小い猪口を取上げ、梅幸大猪口を取つて

梅幸　エヽ、大きな猪口だの。

路考　わたしがお酌を

梅幸　これは憚り。

ト受ける。

錦升　三升、それで始めさつし。

三升　下戸には相應な猪口だね。

ト差出す。杜若見て

杜若　オヤ、お前方は杯を別々にするの。どうか仲直りの様だの。

梅幸　ほんにさう見えるかえ。

錦升　イヤ、又一年一座せぬと、素人方の方で、いゝ加減に名を付けて、様々な評をするものよ。

三升　なに、人の噂も七十五日といふが、これから七十五年もこの顔で一座をしやす。

梅幸　性はおいらもその積りよ。

錦升　三升、一ッ飲まつし。

三升　これは憚りでござります。

ト兩人酒を飲む事。

杜若　ほんに、顔の揃つた祝儀に、珍らしく花屋敷で、華やかに〆めませう。

四人　面白うござりやす……よい〳〵。

ト五人手を打つ。流行り唄になり、向ふより虎藏、團兵衞、染五郎、傳之助、錦吉、めい〳〵迎ひに來たる心にての拵へ、捨ぜりふにて出て來り

虎藏　モシ〳〵、親方、べらぼうに急ぎやした。
錦升　虎藏か。おらが內の男はどうした。
虎藏　樂屋へつけて置きやした。
傳之　太夫さんえ。わたしやァ柳島から直に來やした。
杜若　駄鳥は來たかえ。
傳之　アイ、舟に居ります。
染五　汐時が好いから、直に兩國へ着きやす。
團兵　おいらは朝顏を見ようと、昨夜からさつぱり寢ないせいか、べらぼうに眠いワ。
錦吉　仕合せとおいらは、昨夜から隣りに泊つて居たで、丁度間に合つた。
梅幸　よくてまへ達は迎ひに來てくれた。
三升　團兵衞も柳島から來たか。

園兵 イヽエ、今朝行つて、又引返して來やした。
三升 また大行を云ふな。
染五 船頭は要らねえ、わたしが又素的に押して見せよう。
錦升 そんならお暇乞ひをして行きやせう。
三升 モシ、隱居さんえ〳〵。
淨閑 オイ〳〵。
ト出て來り
オヽ、もう迎ひが來たのか。これはどなたも御苦勞。
五人 ハイ〳〵、秋草はきつい御評判でござります。
淨閑 サア、その評判を聞いて、わしも今度お前方が見えたら、どうで舟までは暑からうと、コレ〳〵
ト繪絹張りに七草を畫きし日傘を出し
サア〳〵、舟まで、これを差して行て下さりませ。
ト渡す。
三梅
路杜 これは好い思し召しでござります。

淨閑　マア、ちよつと御前へ伺つて
　　　ト思ひ入れ。多門之助、有右衞門、五郎次、良助、關屋、五人の女形出て
女五　もうお歸りでござりまするか。お舟までお送り申しませう。
有右　これは〳〵、いづれも今朝は大儀々々。若殿樣にも殊ないお悦び。
關屋　皆の衆のござんした樣子、奧樣へも申し上げたら、嘸お悦びにあらうわいの。
錦升　へイ〳〵、この上とも御前よろしう。
多門　皆も大儀じや。
五人　エヽ、有り難う存じまする。
淨閑　サア〳〵、淨閑も送りませう〳〵。わしも一緒になつて送らうと思うて、わざ〳〵鬘も拵へて置いたぢや。コレ、おせん、懸けてくれ〳〵。
せん　アイ〳〵。
　　　ト紫の置帽子をかけし不器用な細工の若衆鬘を淨閑かけて
淨閑　モシ〳〵、なんと美しからうが
皆々　好く似合ひました。

淨閑 モシ、わしが樣な女形があつたが、御存じはあるまいの。
五人 ヘイ〳〵、存じませぬ。
淨閑 大阪の女形で、かつら山友吉どんと生寫し。ア丶、猿の狂言では、回向院で大當りサ。ハ丶丶ハ丶。
五人 サア、參じませう。

ト祇園囃子の樣な浮いたる唄になり、杜若へ傳之助、件の日傘を差かけ、路考へ染五郎、錦升へ虎藏三升へ團兵衞、梅幸へ錦吉、めい〳〵誂への日傘を差かけ、おせん、おきよ、菓子簞笥、煎茶の箱なぞを持ち、浮閑、秋草の大團扇を持ち、青傘をさして女形の振りにて跡に附き、向うへ入る。多門之助、關屋、有右衞門、良助、五郎次、お松、お國、おかね殘り

關屋 なに、いづれもへ申し達しまするは、若殿樣には御歸館の砌り、木母寺お立寄りの仰せ出され、その御用意遊ばさるゝが宜しうございませう。
良助 心得ました。御同勢は卽ち水神の森にて、お供待いたさせてございまする。
五郎 關屋どのには、先達て奧方より、山崎與五郎へ下しおかるゝ御書面はな。
關屋 卽ちこれに、所持仕つて居ります。

ト懐中より袱紗に包みし立文を出す、有右衞門見て

有右　すりや、その御書は奥方より

關屋　家改易の山崎與次兵衞、越度あれども代々の代官役、何卒與五郎に跡目相續いたさせたき旨、奥方より若殿樣を以て、大殿へのお願ひ。憚りながら、御披見遊ばし下さりませう。

ト差出す。多門之助披き見て、思ひ入れあり。

多門　母上樣のお情を以て、與五郎に山崎の跡目相續いたさせたき御書。ナニ有右衞門、其方に相渡す。父上樣へ。

有右　畏つてござりまする。お館に於きまして、殿へ拙者が、差上げまするでござりませう。

ト懐中する。

關屋　すりや、その御書は有右衞門樣より

有右　しかと差上げまするでござらう。

ト關屋これにて思ひ入れ。流行り唄になり、向うより雁助、袴大小、若黨の拵へにて、四ツ花菱の紋散しの春慶塗りの狀箱を持ち出て來り、有右衞門を見て

雁助　これは〳〵有右衞門樣、好き折柄にお目にかゝりました。お旦那丈左衞門樣より、あなた樣へ密

事の御狀が

ト差出す。有右衞門ハツと思ひ入れ。關屋目を着け

關屋 ナニ丈左衞門樣より密事の御狀と

有右 アヽ、コレ／＼、何を申す。密事ぢやの四ツじぢやのと、痴けた事を。

雁助 でもお旦那が、密事じやと御意なされたゆゑ。

有右 これはしたり、それは密事ではあるまい。慥かにそれは……オヽ、それ／＼、四つ乳／＼。四つ乳の皮の三味線を求めてくれいと、かね／＼丈左衞門どのゝお頼み、大方その用向の手紙であらうワ。

ト呑みこませる。雁助呑みこみ

雁助 成る程、左樣々々、四ツ乳の皮の三味線を、みつじとは、イヤ、無調法申しました。

まつ こりやおかしいわいな。丈左衞門樣が四ツ乳の三味線お尋ねとは、お顏にも似ぬ尋ね物。

くに お堅い顏を遊ばして、お三味線がなりますかえ。

かね ほんにこりや、合點の行かぬものぢやわいな。

雁助 イヤ／＼、餘り笑はしやるな。おらが旦那はあゝ見えても三味線の名人、卽ち師匠は杵屋六三サ。

女三 こりやをかしいわいな。

有右　その文箱は身が預る。これへ持て。

ト有右衞門取つて懷中して

關屋　イヤナニ關屋どの。其許には今一應、若殿樣のお供召されて、あの奥庭の秋草をお慰みのため今一度、お供いたして參つた跡、あなた樣にはその密事

有右　ヤ。

關屋　サ、四ツ乳の御狀を

ト思ひ入れ。

有右　關屋どの。

關屋　有右衞門樣。

多門　皆も一緒に

關五良　まづ入らせられませう。

ト唄になり、關屋心を殘し、多門之助、良助、五郎次、お松、お國、おかれ、この一件入る。有右衞雁助殘る。合ひ方。

有右　ヤイ、雁助、われは大きな不機轉者。あの若殿の聞く前で、イヤモウ、手に汗を握らせをつた。

雁助 私しもツイうつかり。モシ、即ち御狀を

ト渡す。有右衞門披き見て

有右「紙面を以て申越候、かね〴〵領地の百姓へ貢金の儀、身共より山崎與次兵衞へ貳百金貸附け、返濟迄に家の系圖我等方へ預りしは貴公と豫々口談の通り、與次兵衞役儀未熟と云立て近鄕に沙汰させ、その越度にて與次兵衞は浪人、まつた合役橋本治部右衞門事、譜代の若黨即ちこの者我等妾とらが爲には實の親なるに依り、人知れず申付け、治部右衞門を毒害致させ、家は改易、兩家は乃ち丈左衞門が跡役と罷成候へども、百姓三作と申す者、山崎の系圖強て返し吳候樣押しての願ひには候へども、豫て心を懸け候與五郎が姉お關、身が心に隨ひ候はゞ相談にも及ぶべき旨、さなきに於ては相返し申さず候、龍虎の一軸これとても內々にての詮議、治部右衞門毒害の後彼の家來は聞えを憚り、仁右衞門と改め町家の住居、貴殿某大望叶ふそれまでは、一家中へ洩さる樣第一と存じられ候以上、月日、有右衞門殿へ、丈左衞門。」

ト讀み終り、思ひ入れあつて

コリヤ〳〵、雁助、存じの通り若殿の乳人、あの關屋めが居る內は、油斷のならぬこの密事。矢張りこの儘狀箱へ。

ト蓋をして元のやうに結へ、封をして

雁助 其方に渡し置くぞ。

下郎がしかと、お預かり申しました。

ト此の時奥にて

○ 有右衛門どの〳〵、若殿のお召しでござります。

ト呼び立てる。有右衛門狼狽へ。

有右 へイ〳〵。只今それへ〳〵……コリヤ〳〵、雁助、見つけらるゝな。

雁助 よろしうござります〳〵。

トせはしく呼び立てるゆゑ、有右衛門うろたへ奥へは入る。お松出かゝり窺ひ居る。

雁助 思へば去年平塚で、失つたあの折紙。また書き物を預つたが、どうかおれには心遣ひだ。

ト思ひ入れ。お松後より狀箱へ手を掛ける。雁助ちやつとなつて

コリヤ女、何をする。

まつ アイ、お前が持つて居なさんすその狀箱は、四つ乳の三味線注文書とあるゆゑ、借りて參つてま

た外に、藝者のわたしに誂へてと、注文ものゝ關屋樣のお指圖ゆゑ、その注文書を見せて下さん

せ。

雁助　イヽヤ、注文貸されねえ。旦那の三味線誂へた、跡でなければ注文は

まつ　どうぞわたしに

雁助　ならねえワ。

ト狀箱を枷にかよわき立廻り。騷ぎ唄になり、よろしくあつて、件の狀箱を前の流れへ取落す。水にせかれて流るゝ。

まつ　ヤア、あの狀箱を

雁助　爰の流れへ落したか、なんでも取得て

ト流れへかゝる。お松も立寄るを雁助引退けて世話の立廻り。騷ぎ唄になり、向うより淨閑戻り來りこの體を見て、雁助を引付け

淨閑　お松坊、何を女の

まつ　關屋樣からお指圖の、あの狀箱を

雁助　爰の流れへ。

ト寄るを引付け

浄閑　さでが有らうに。

雁助　おれが借りよう。

　ト寄るを立廻つて朝顔の鉢を取つて雁助に被せ

浄閑　この間にすくやれ。

まつ　アイ。

雁助　それを

　ト寄るを浄閑よろしく押へる。状箱は下座へ流れ入る。お松右の跡をつけて入る。騒ぎ唄にて道具廻る。

　本舞臺、正面に石の祠、横に見せたる石の鳥居、左右茂りし松の古木、石碑、これに「水神の宮」としろし、よき處に蒲鉾の小家、出入りあり。舞臺前波板、日覆より一面に榎の吊り枝、すべて隅田川水神の森の模樣。爰に山崎與次兵衞、老たる浪人體の拵へにて、右の流れに竿を下し、釣をして居る。平方左源次、頬冠り非人の形にて、筵を敷き、箒竹より土瓶を吊し、枯枝を集め焚いて居る。この見得誂への合ひ方、虫の音にて道具とまる。ト與次兵衞思ひ入れあつて

與次　こりや、また餌を取られたさうな……アヽ、その筈でもあらうか。身共とても餌に離れ、見る影もなき袖乞ひの、どこを當途に今の身の上。ハテ味氣なき

　　ト左源次と顔見合せ

これはしたり、益ない繰言。コレ、もう茶は出來たであらうな。

左源　ハイ〳〵、只今煮花が出來まする。

　　ト思ひ入れあり。

誠に人の身の上は、アヽ、定めなきものでござりまする。私しが御主人にも、橋本治部右衛門と申してお代官の家柄。あなたにも御同役。朋輩の讒言ゆゑ、兩家ともにお家は改易。治部右衛門樣には程なく御病死。お娘御のお照樣のお供して、東へ下る去年の夏、平塚の驛にてお照樣も見失ひ、お行くへ尋ぬるその爲に、非人となつて隅田堤、水神の森に此やうに、雨露凌ぐ私しが、不忠詫びにもこの間、お目にかゝつた與次兵衛樣。

與次　以前の因なみと其方の世話。名に負ふ山崎與次兵衛として、筋目正しき代官も、時代につれて浪人の、娘お關と二人連れ、國を拂はれ是非なくも、今では悴與五郎も、御用先にて野州にと、聞いて彼れめが在所を尋ね、下る道にて思はずも、めぐりあうたは同役の、橋本氏の若黨左源次。非

人の小家に親子とも、世話になるのも不思議な縁。斯く親切にお身が介抱。忝い〳〵。

左源　これはしたり、其お禮には及びませぬ。さりながら、兩家ともにお家の斷絕、これも思へば恨みある、丈左衛門がなせる業。

ト思ひ入れあり

アヽ、イヤ〳〵、斯樣な事を申す間も、尋ね求むる主人の娘御、その在所をとこの程より、心願かけし關屋の里、天滿宮の御利益にて、少しも早う、廻り逢ひたう存じまする。

與次　成る程、はや一年も經ちし事、さほど思ふも至極尤も。して、今日は關屋の天滿宮へ、參詣をおしやるのか。

左源　左樣でござります。ちよつと詣つて參じませう。其うちにはお關樣も、お歸りなさるでござりませう。

與次　オヽサ、身が娘のあのお關めは、三圍りの舟着きにて、彼の素燒の土器を求め、往來の人の慰みに、細い元手の女商人。

左源　アヽ、淺ましい親子御の御艱難。それといふのも、御領分の百姓を、お救ひなされたばつかりに、却つて今の御浪人。アヽ、それも天道樣が、見通しでござりまする。

與次　身共も左樣諦め居るて。サヽ、そんなら早う參詣して來やれ。

左源　畏りました。お煮花も出來たでござりませう。召上がりませ……ドリヤ、行つて參りませうか。

ト唄になり左源次、竹の仕込みを持ち、思ひ入れあつて下座へ入る。與次兵衞跡を見送り

與次　アヽ、若いに似合はぬ奇特な男。娘も、もう歸りさうなものぢやが。アヽ、これを思へばその以前日頃娘が身の願ひ、不思議な緣とて箱根の在方、御領分の百姓三作との不義いたづら。二人が中に剰へ、子まで出生なしたる樣子、さながら不便に思へども、一家中の手前といひ、面目もなき緣談と、身も等閑に打捨て置きしが、土民ながらも頼もしき志ある者といひ、今は流浪のこの身を幸ひ、誰に憚る遠慮もなし。切めては娘が心ゆかし、ア、どうぞ折好う三作へ、早う添はせてやりたいものぢやが……オヽ、最前おろしたこの釣竿、こりやこの儘に魚の餌食。餌に離れた身共などは、せめて夢なと。ドリヤ、菰垂れで一睡やらうか。

ト唄になり、與次兵衞釣竿を下せし儘小家の内へ入り、菰垂れを下す。直にてんつヽ、禪のツトメになり、向うより市助、ほろ醉ひ機嫌にて、中間の拵へ、綿厚の帶、草履取りの形、眼尻に傷を付け、町人が首筋をとらへ出て來る。跡よりお關、絹やつし、後帶にて、へぎの上に素燒の土器を大分載せ、こ

れを持ち、附いて出て來る。

町人　ヘイ／＼、御免なされませ／＼。

市助　素町人の分際で、不屆きな奴。以後の見せしめ、どうするか見やァがれ。

町人　アヽ、どう致して、人樣に傷を付けてよいといふ譯はござらねど、そこが無調法ゆゑ。

せき　それと申すも私しが、此お方へ厄介物をお勸め申し、賣つてあげたばつかりに、思ひも寄らぬこの場の御難儀。元はと云へば、私しから起りましたやうなものゆゑ、此お方へお氣の毒に存じます。お屋敷樣の御立腹は、さら／＼御無理ではござりませぬ。それゆゑ共々先刻にからのお詫び。どうぞ私しにお免じなされ、お赦しなされて下さりまするやう、ハイ／＼、お願ひ申し上げまするわいな。

市助　イヽヤ、いくら詫びたと云つて、おれも傷をつけられたからは、それだけの事をしにやァならない。イケまじ／＼としたしやつ面でも、叩きかいて料簡してやるべい。生しらけた氣障な野郎めだ。

ト足にて町人が顔を蹴る。お關、中へ入り、これを留める。

せき　アヽモシ、もう御堪忍なされませ。殊に見れば一向に、年端もゆかぬ若いお方。もしもの事でも

あつた時には、猶々私しがお氣の毒。ちつとも早うこの所を、ナ。

ト町人に行けと思ひ入れあり。

サ、この間に早う。エヽ、急用がござんすわいな。

町人　それでは却つて、跡でお前に

せき　アノ、これはしたり、何の私しに

市助　イヽヤ、うぬを逃がしていゝものか。野郎め、貧乏揺ぎもさせはしねえぞ。

せき　なんの逃がしませう……ほんにお前、斯うしなさんせ。この寺島によいお醫者様がござんす。早う行て、膏藥なと貰うてお出でなさんせいな。

町人　そんならこの寺島の醫者どのへ行て

せき　それがようござんす。お前が爰に居なさんしては、サ、サ、ちつとも早うこの所を、ナ

ト逃げろと思ひ入れあつて

サヽ、早いがよいぞえ。

町人　でも、それでは却つて、跡でお前に

せき　アヽ、これはしたり、なんの私しに

市助　イヽヤ、そんな事で逃がしていゝものか。われもあの野郎を逃がすが最後、女と云つて容赦はしねえぞ。
せき　なんの私しが逃がしませう。エヽ、早うお醫者樣を連れてござんせ。
町人　そんなら、ちやつと行つて來ませう。
市助　イヽヤ、うぬ、やる事はならないワ。
　ト行きにかゝるを、やらじと支へて
せき　アヽモシ、ようござんすわいな。
町人　何かとお前の
せき　ハテ、早うござんせ。
市助　うぬ、待ちやァがれ。
　ト引留める立廻り。お關留める。此うち流行り唄をかすめて、禪のツトメをかぶせたる鳴り物になり町人心を殘して下座へ入る。直に向うより倉岡丈左衞門、大小、ぶつ裂羽織、半天股引の形、切草鞋にて出て來る。跡より股引脚絆の中間二人附き出て來り、舞臺の樣子を見て、家來に思ひ入れ、中間先へ立つて

中間　コリヤ〳〵、扣へぬか〳〵、片寄れ〳〵。

ト制す。これに構はず市助、捨ぜりふにてお關を突退け行かうとする。此うち丈左衞門舞臺へ來り市助を見て

丈左　其方は家來市助か。

市助　これはお旦那、只今お越しなされましたか。

ト扣へろ。これにて、お關、逃げようとするを、丈左衞門じろりと見て

丈左　コリヤ〳〵、女待て。

せき　ハイ、御用でござりまするか。

ト控へる。

丈左　ヤア、そちや、與五郎が姉のお關ぢやな。

せき　あなたは倉岡丈左衞門樣、思ひがけなう、ひよんな所で

ト思ひ入れ。

丈左　して、何やら爭ふこの場の樣子、家來市助、何事ぢや。

市助　その樣子と云ふは、この市助めが、面へ傷を付けられました。

丈左　すりや、この女子にか。

市助　イヽエ、その女ではござりませぬが、相手の野郎を捕へしところ、その女めが支へこざへを致したゆゑ、つひ取逃がしましたからは、相手も同然。女とは云はさぬ。うぬが面へ傷を付け、この市助が腹を癒にやァならねえワ。

丈左　すりや、身が家來へ、狼藉ひろぎしその者を、取逃がせしとな。

市助　それぢやに依つてその女めを

丈左　待て〳〵、市助、われが申すは尤もながら、取るに足らざる女の事、武士たる者の相手にならうか。この女子は身に預け、逃げ失せしとあるその曲者、未だ遠くはよも行くまい。尋ね探して連れ參れ。

市助　畏りました。左様ならあの野郎めを、引ッ捕へて參る內、その女めは必ずともに

丈左　氣遣ひ致すな。身共がきつと。

せき　アヽモシ。

ト立廻るを丈左衞門とらへて

丈左　イヤ、滅多にわがみは

市助　お旦那、あなたへ。
丈左　早く行け。
市助　お預け申しました。

ト禪のツトメになり、市助下座の方へ入る。

丈左　若殿には木母寺へのお立寄り。家來ども、わいらは其うち休息いたせ。
中間　ハッ。

トこれにて二人下座へ入る。丈左衞門、お關殘り

丈左　家來はみんなまいてしまふ。何の遠慮はない。サヽ、關女、近う寄りやれ。ヤレ〳〵、久し振りといひ、思ひも寄らず變つた所で……これといふも偏へに、結ぶの神の引合せ。今浪々の身と云ひながら、そもじも代官山崎氏の娘。して、父御の與次兵衞どのには、嘸かし艱難召さるゝであらう。
せき　イエモウ、お恥かしい今の身の上。浪人の身の寄る邊なく、詮方なさに親子とも、今は果敢なく隅田川、水神の森の傍らに、賤しい非人の交りなし、往來の人の情にて、その日を送る袖乞ひ同然。

丈左　すりや、人の噂に違ひなく、袖乞ひ物貰ひか。ハヽヽヽ。いかに零落れたればとて、乞食非人とまで成り下がるとは、ハテサテ、笑止千萬な。

せき　それと申すも、山崎の家に代々傳はりし系圖の一卷、承れば丈左衞門樣、あなたのお手へ渡りしとの事。畢竟申さば、それゆゑに山崎の家斷絕。どうぞその品お返しなされて下さりませうならば、有り難う存じまする。

丈左　そりやハヤ、外ならぬそもじが願ひなれど、一卷が身が手へ渡りし事、定めし樣子は知つてゞあらうが、先達て二百金、山崎氏へ用立てしその砌り、返濟まで引當てに、預かり置きし系圖の一卷。然るに金子は今以て一向に方付かず、その上預けし一卷ばかり、今更返しくれよとは、手前勝手なその一言。されどもそこがよみと歌、たとへ金子は濟まずとも、事に依つたら內證で、返して遣るまいものでもないが、かね〴〵云ふ通り、身が心に隨へば、あの一卷は直にお身に。ナ、コレ、關女、久しいものだが、色好い返事は、どうしてくれる〳〵。

トしなだれる。

せき　そりやモウ、事を分けてのあなたのお詞、御尤もではござりまするが、どうもその事ばかりは。

丈左　色よい返事は、出來ぬと云ふのか。

せき　殊に以前は兎も角も、世に零落ぶれて袖乞ひの、今は賤しい身すがらと云ひ、どうマア其やうな

丈左　ハテサテ、以前に變つた姿ゆゑ、愛想の盡きたなんぞとは、そりや一通りの事よ。そんな水臭い心だと思ふか。戀に上下の差別はないワ。コレサ、これ程までに思ひ込んだ、身共が心底察してくれぬか。どうぢや／＼。

せき　それ程までに思うて下さんすお前のお心、嬉しいは嬉しけれど、如何に上下の隔てがないとて、よう思うても御覽じませ、有らう事か、非人の娘とお武家樣、よも縁組みはなりますまい。

丈左　すりや、どうあつても

せき　ハイ、こればつかりは、御免なされて下さりませ。

丈左　口外致せし武士の恥。たつて心に隨はねば、この上は刀の手前、料簡ならぬ慮外者、武士たる身共が家來の面體、傷を付けたる相手も同然。屋敷へ引立て、成敗なさうか。

せき　サ、それは

丈左　但し、心に隨ふか

せき　サア

丈左　それとも否か。

兩人 サア〳〵〳〵

丈左 返事をせねば、是非とも身共が

　　ト引立てにかゝる。お關、ちやつと立廻り、丈左衞門が腕先をきつと捕へる。

丈左 こりや、女に稀れなこの手練。すりや、かね〴〵お身にも

せき 女子ながらも物堅い、武家に育ちし心がけ。

丈左 ヤ。

　　トこれにて突放し、思ひ入れ。

せき お恥かしうござりまする。

　　ト控へる。

丈左 アイヤ、その手の内を見るといひ、猶々身共が思ひは百倍。殊におぬしが日頃から、あだな噂も薄々聞いたが、思案の外も、コレ關女、また滿更でもあるまいぞよ。

　　トてんつゝ、禪のツトメになり、向うより三作、やつし紺の脚絆、手甲、草鞋がけ、百姓の旅形、小さき風呂敷包み、天秤棒にて兩がけを擔ぎ、菅笠を持つて出て來り、花道にて

三作 この堤の入り江のあたりに、老人と若い女の袖乞ひと、今も跡でのその噂。アヽコレ、早う逢ひ

たいものぢやが

ト舞臺へ來り、丈左衞門を見て

三作　ヤ、それにござるは倉岡様。お前も爰にござりましたか。

ト　お關見て

せき　ヤア、お前は

ト恥かしき思ひ入れ。

丈左　御支配下の百姓三作。エヽコレ、悪い所へ來たなア。

三作　イヤ、丁度よい所で、お目にかゝつて先づ安堵。して、御親父與次兵衞様にも、お變りもござりませぬかな。

せき　アイ、父さんにも隨分お達者でござんすが、ようマア、お前、尋ねて來て下さんした、嬉しうござんすわいな。

ト三味線入りの禪のツトメ。

三作　それは何より。マア〳〵、丈左衞門様にも、爰にお出でなさるゝこそ幸ひ、私しめがお願ひの筋早速ながらこれで申し上げませう。さてハヤ、外の事でもござりませぬが、與次兵衞様御親子のお

身の成行き、お氣の毒と申さうか、目も當てられぬお痛はしさ。尤も御子息の與五郎様には、當時は僅か許りのお當がひにて、御奉公向お勤めなされてはござれども、それと申すも先達て、親御與次兵衛様、お役目預かりしその折柄、一ッは倉岡様のお執なし、及ばずながら私しめが、お願ひ申して償ひ金、恩借致せしその砌り、あなたへお預け申したる系圖の一巻。金子の方もつかざる内、何ともハヤ、申し兼ねました儀ではござりますれど、一旦暫しが間右の品、何卒此方へお返しなされて下さりますやう、丈左衛門様、お願ひ申しまするは、ハイ／＼、この事でござりまするて。

丈左　成る程、其方が願ひ、一通りは聞えたなれど、一旦金子の引當に、身共へ預けし一巻を、暫しが間貸しくれよとは、こりや聞えた。下々で申す、養子質とやら、又はそれを外々へ預け、金子借用いたす心か。

三作　イエ／＼、どう致して、毛頭左様な儀は

丈左　アイヤ、さうであらう。外で金子を調達いたし、定めし身共方へ返濟いたさうといふ手段も有らうが、さうか／＼、それとても、さうか／＼。

三作　成る程、金子調達の心がけ、満更ないでもござりませねど、それに付きましても系圖の一巻、與

次兵衞樣の手にさへあれば、御地行所よりお願ひ申し、御子息の與五郞樣へ、御親父樣の元のお役目、お代官役を仰せつけられなば、恩借いたせし金子の儀も、早速返納いたすやうにも相成りますれば、それゆゑ止む事を得ませず、あなた樣へのお願ひ、幾重にもお聞き屆け下さりまするやう、偏へにお願ひ申しまする。

丈左　その身の失をも辨へず、今更いらざるその穿鑿。以前は殿の御扶持人、身も朋輩の山崎與次兵衞帶刀もなした身が、いかに浪人すればとて、見る影もない今の袖乞ひ。しかもお關がたつた今、山崎親子は非人ぢやと、この丈左衞門に申したぞよ。その非人なる身を以て、なんの系圖がいるものか。とても及ばぬ望み立て、無益な事と、サ思へども、そこが一ツは膝とも談合。かねぐお關に云ふ通り、身共が心に、ナ……サ、身が心にさへ叶ひなば、預かり置きし系圖の一卷。

ト懷より袱紗包みの系圖の一卷を出し

幸ひ所持して罷りある、この一卷がさほどまで、望みあらばお關が心、たつた一ツでどうならうと、たとへ非人であらうが儘、身が引上げて宿の妻。

せき　たとへこの身はどのやうな憂き艱難も、あの一卷さへあるならば、もしや弟の與五郞が、身の出世にもならうかと、それゆゑ望む品ながら、子までなしたる二人が仲、それを見替へて今更に、ど

うマア心に

丈左　さてこそ子まであると云ふからは、かねて噂に違ひなく、關女が密通の男といふは、これに居る百姓の三作か。道理で身共が、これまでさま〴〵と、アイヤ、これまで二人がその仲に、子までなしたと聞くからは、身共も滅多に一卷は、手放す事はならない。さう諦めて親子とも、生涯非人で朽ち果てろ。ムヽヽハヽヽヽ。揃ひも揃うた大白痴め。

トお關、三作思ひ入れあつて

三作　ムウ、この三作とても土民といひ、取るには足らぬ身なれども、御領分に住むからは、止む事を得ず倉岡樣へ、失禮ながら途中のお願ひ。聞濟みなくとも是非なけれど、最前よりの樣子といひお關どのへさま〴〵と、何やら味な詞の端。それが心に叶はぬゆゑやら、腹立か知らねども、御仁體にも似合はぬ雜言。あまりと云へば

ト口惜しき思ひ入れ。

丈左　ヤア、いはれざる土ツほじりめ。身共をなじるその一言、目に角立てる慮外者。いつその事に

ト刀の柄へ手を掛け立ちかゝる。お關これをちやつと留める事。よき時分小家の内より、與次兵衞出かゝり居て、この時ぢつと出て丈左衞門を支へる。

せき　お前は父さん。

三作　與次兵衛どの。

丈左　こりや浪人の袖乞ひどの、なんで身共を

與次　いかにも袖乞ひのこの老人、貴殿は朋輩の倉岡氏と、サ、申すも遠慮。今はこれなる水神の、木蔭に伺ふ袖乞ひも、云はゞ所の下役人、もしもの事があつた時には所の迷惑。マヽ、お鎮まりなされませ。

丈左　ムウ。　ト思ひ入れ。

與次　最前より何も彼も、あれで樣子を承りしが、三作どのゝ志し、身に取つて忝けれど、一旦浪人なしたこの與次兵衛、再勤の儀は勿論、悴與五郎にも、少々たりともお當がひ、旅先の御用向相勤め罷りあれば、立身出世はその身の器量。さすればこれまで、我が家に傳はりしとはいひながら、今更望まぬあの一卷。それより老しかゝる身の、望みと云ふは娘のお關、日頃我れへの願ひといへど、親の許さぬ徒ら事。あの三作と不義密通、いへば仕官の其うちは、輕き身分の農業人、三作への縁談は、思ひも寄らねば等閑に、打捨て置きしが時節到來、承れば孫までも、出

生なせしとあるからは、この上は身共とても、娘にかへても浪人いたし、一生この身は袖乞ひ浪人、百姓の婿取りたりとて、誰が笑はう。爰で逢うたが好き幸ひ、今より關は改めて、親が許し娶合はする。行末長う三作と、夫婦仲好う添ひ遂げやれサ。

せき　そんならわたしが日頃から、願ひの通り三作どの、お許しなされて女夫の結び。エヽ、嬉しうござんす。

三作　ハッ、有り難き與次兵衛樣のお慈悲。心輕い土民の身を以て、お代官たるあなた樣のお娘御と、不義ひろいだる不届き者、縛り首に逢うたりとも、怨むる筋はなけれども、それに却つてお關樣、今改めて私しへ、下されまするは有り難けれど、只願はくはお家の系圖。

せき　それいなア、成らう事ならその一卷、手にさへあらば弟が身の上、若しや出世の程にもと

丈左　サ、ならうと思はゞ一卷は、現在身共がコレ爰に。たとへ親が許さうが、定まる夫があらうともお關が心たつた一ツ。今でも男を思ひ斷り、身が心にさへ隨へば、金はさて置きこの一卷、直に渡して遣はすが、それでも心に隨はぬか。

せき　サア、その一卷は欲しけれど、今更どうマア其やうな

與次　アイヤ、役にも立たぬその繰り言。浪人しても山崎與次兵衛、娘の關を賣り物にはせぬ。身が望

みなきその品を、いつまでクド〳〵申すのは、身共ばかりか娘まで、生涯路頭に迷はしたいか。

三作　アイヤ、全く左様な

與次　心でなくばいらざる義理立て。系圖が戻れば身は代官、御支配下の百姓と、いふが中にも水呑み百姓、中々娘はエヽ遣られぬ。この袖乞ひが娘のお關、片時も早く連れてお行きやれ。それとも強つて詞を背かば、七生までの勘當ぢやぞ。

せき　それ程までに云はしやんす、父さんのお詞背くは、却つてこの身の不孝。さは云へお前一人をこの儘爰に、どうしてマア

三作　それもいつぞや三作が、在所へ強つてと申せども、あの物堅い親旦那、中々以て。

與次　ヤア、まだ〳〵申すは、勘當が受けたいか。

せき　アヽモシ、何しにお詞背きませう。

三作　然らば直樣この場より、我が本國たる相州へ、同道いたすでござりませう。

ト立上がらうとする。丈左衞門思ひ入れあつて

丈左　イヽヤ、その女は身共へ對して慮外者。屋敷へ引立て糺明するワ。

ト與次兵衞を引退け、お關へかゝる。お關足元に障る釣棹を取上げる。この先へ以前の文箱かゝり上

がる。これに心付かずその儘丈左衞門の目先へ差つける。丈左衞門これに目を付け

丈左　この狀箱は、慥かに覺えの

與次　何やら怪しい文箱の中を

ト差寄る。丈左衞門狀箱をちやつと取つて

丈左　イヽヤ、怪しい狀ではない。

與次　怪しくなくば、ちやつとこの場で

丈左　イヤ、恥かしながら、こりや付け文だ。

三作　して、そりや何者へ。

丈左　外でもない、これなる關女へ。

せき　エ、そんならわたしへ。

ト文箱へちやつと手をかけるを、三作これをちやつと引つ奪り

三作　今改めて三作が、女房と定まる此お關、それに何ぞや不義の付け文。この場へ出れば三作が面が立たぬ。武士百姓の差別はない。どこへ如何いふとばしりが、かゝつて行かうも知れぬゆゑ、そこをはかつて、この文箱、こりや封の儘そつくりと、わしがお貰ひ申しました。

丈左 思ひも寄らぬあの文箱、慥かにそれと思へども、場所が惡さに

與次 只何事もこの上は、娘が事を見捨てぬやうに

せき 力と頼むは三作どの、又もや折もあるならば

三作 お尋ね申すでござりませう。必ずともにあなたにも

せ三 隨分ともに御機嫌よう。

丈左 とは云へ、みす〳〵あの二人を

ト寄るを、與次兵衞ちやつと支へて

與次 アイヤ、必ず無事で

三作 その內お目に

せ三 かゝりませう。

ト唄、時の鐘になる。三作お關思ひ入れあつて、兩人花道へ入る。與次兵衞跡を見送り

與次 ア、いそ〳〵として行きをつた。娘が心は大抵の悅び。まづは身共も一ツの安堵。ア、これにつけても仕官をなし、立身出世を願ふより、今のこの身が食はず貧樂。ドリヤ、仕懸けて置いた網でも漉かうか。

ト合ひ方、木魚の音にて、與次兵衛思ひ入れあつて小家の内へ入る。丈左衛門殘る。下座より有右衛門、雁助出て來り

有右　丈左衛門どの。これにござりましたか。

丈左　あわたゞしい三原氏、して、貴殿へ文通いたせしが、披見召されしか。

有右　さればその儀でござる。いかにも御紙面、身共披見は致してござれど、今日殿のお供先といひ、身が懷中なしては如何と存じ、直樣又ぞろこの雁助へ預け置きしに、過つて取失ひしとの事でござる。

丈左　すりやアノ密書を

ト思ひ入れ。

雁助　それと申すも、下郎めが粗忽とは申しながら、一通り申さねば譯が分りませぬ。先刻に有右衛門樣より雁助めが、狀箱ぐるめにお預かり申せしところ、花屋敷に居つた女郎めが、見かぢつての支へこさへ。爭ふ機みに思はずも、前の流れへ落せしゆゑ、さま〴〵と尋ねますれど、一向行くへが知れませぬて。

丈左　さてこそ違はぬ今の狀箱。そんならいよ〳〵、ウム

ト思ひ入れ。有右衛門懐より以前の關屋より廻りし書き物を出し

有右　殊更今日奥方の推擧を以て、與五郎へ下さるゝとあるこれなる御書。卽ち有右衛門が受取り置いてござる。

丈左　すりや、奥方より與五郎への御書とな。それは格別、あの密書、二人の奴らが見るならば、是非とも親の與次兵衛へ見せるは治定。

有右　すりや、取落したとある、あの密書をば

丈左　コレ。

ト囁く。有右衛門呑み込み

有右　すりや、袖乞ひして居る老いぼれめを

ト小家へ思ひ入れ。この時下座より左源次出て來り、雁助を見て

丈左　コレ。

左源　ヤア、雁助め、爰にうせたな。

雁助　うぬは治部右衛門が若黨の左源次か。

左源　オヽ、左源次だ。去年八幡で見かぢつたる龍虎の折紙、定めしおのれが在所を知らん。サア、眞

直に吐かすまいか。

雁助　イヽヤその在所、この雁助は知らねえワ。

左源　知らぬと吐かせば、どこまでも、この左源次が

　ト雁助へかゝるを丈左衞門、これを支へる。此うち後へ與次兵衞出かゝり居て

與次　ナニ、龍虎の折紙を、それなる下郎が。すりや盜賊は

左源　いかにも正しく倉岡どの。

　ト云ふを丈左衞門、拔打ちに左源次を切り下げる。

與次　こりや左源次を

　ト差寄るを丈左衞門、有右衞門の兩人して與次兵衞が肩先へ切り付ける。左源次刀を拔合はせるを雁助引付ける。與次兵衞「アッ」ト苦しむ。兩人又切りつけるを、與次兵衞双方を宜しく留めて

與次　ヤア、卑怯未練な丈左衞門、有右衞門に荷擔なし、斯くまで衰ふ與次兵衞を、何ゆゑあつて騙し討ち。

丈左　いかにも仔細は密事の文通、あの土民めが手に入るからは、どうでおのれが耳に入る。この身の科を山崎めに、訴へられては一大事、それゆゑ生けては置かれぬワ。

與次　すりやそれゆゑに

丈左　ばらしてしまへ。

ト禪のツトメ、時の鐘、これに葛西念佛をかぶせたる鳴り物になり、又與次兵衞へ切りかける。與次兵衞後より一腰を取つて拔放し、これにて受留め立廻りよろしく、トド與次兵衞、雁助を見事に切り下げる。左源次苦みながら有右衞門と立廻り。丈左衞門又切りつけるを、與次兵衞身をかはし、付入つて切り込む。よき時分後へ市助出て來り、これを見て

市助　ヤア、旦那へ刃向ふ老いぼれめ。

ト一腰を拔いて與次兵衞をしたゝか切り下げる。これにて丈左衞門付入つて切り込み、兩人して與次兵衞を切り下げる。有右衞門も左源次を切り倒す。この時有右衞門、懷中より右の書き物を好き所へ取落す事。トド與次兵衞撻と倒れる。

お旦那、もういくぢはござりませぬ。併しとゞめをお刺しなされませ。

ト丈左衞門思ひ入れあつて

丈左　イヤ、とゞめには及ばぬ。

ト双方血刀を拭ひ鞘に納め、この時丈左衞門落ち散りある書き物を見付け、これを取上げ

丈左　こりやこれ、奥方より與五郎への御書。

ト思ひ入れあつて

幸ひ〳〵。

有右　丈左衞門どの、その御書は

ト右の書き物を引裂く。有右衞門これを見て

丈左　コレ。

ト有右衞門に囁く。この時下座にて

内より　お立ち。

ト呼ぶ。三人思ひ入れ。

丈左　すりや、最早殿には

市助　お立ちとござりまする。

ト三味線入り禪のツトメになる。これにて三人身繕ひして居る。下座より多門之助先に關屋、五郎次良助、その外供廻り大勢出て來る。市助はすつと下へ下がつて扣へる。

關屋　何やら心得ぬこの場の様子。マヽ、お扣へ遊ばされませ。

丈左　イヤ、さのみお氣遣ひな儀ではござりませぬ。矢張りその儘。

トこれにて皆々舞臺へ宜しくすまひ

多門　さりながら仔細ぞあらん、丈左衞門、何事ぢや。

丈左　ハッ、仔細と申すは、先達てお暇出でし山崎與次兵衞、この所に忍び、殿に近寄り、討留めんと企みし老いぼれ。今一人は治部右衞門が下部、彼れらと申し合せし事、拙者が家來雁助と申す小者、詳しく樣子承り、注進いたせしゆゑ、早速雁助めに案內いたさせ、驅付け見れば早この通り、家來を仕留めし憎き奴等。尤も橋本が下部は落入つてござりまするが、察するところ、大事を知られしゆゑ、手に掛けしと相見えましてござりまする。

有右　さりながら奥方より、御厚志を以て下し置かれし御書の趣き、疾くと申し聞かせしところ、誠に恩を仇とやら、老耄なせし與次兵衞こと、まッこの如く御書までも、引裂き捨てし大罪人、

丈左　何はともあれ、召捕らんと存ぜしに、殿を嘲けるのみならず、その上刃向ふ重々の理不盡、手に餘りますゆゑ止む事を得ず、それゆゑ是非なく、刃傷に及びましてござりまする。

關屋　すりや、お暇賜はりし與次兵衞どの、その身の祿は離るゝとも、五常を守る日頃の氣質。よも殿樣をお恨み申し、隱れ忍んで刃向ふ所存は。ハテ、何とやら。

ト丈左衞門、有右衞門へ思ひ入れ。禪のツトメ、バタ〳〵にて、向うより山崎與五郎、大小、半天、股引、旅形にて出て來り、舞臺を見て、花道よき所へ扣へる。

良助　コリヤ、山崎與五郎どの。

五郎　唯今歸國召されしか。

關屋　すりや、北國筋の御用向、首尾よく相勤め召されしか。幸ひ殿樣にもこれにお渡り遊ばさるれば、何はともあれ、先づ〳〵此方へ。

與五　ハツ。

トつか〳〵と舞臺へ來り、下の方に手をつかへ

先づ以ちまして殿樣を始め、何れも御健勝の體、憚りながら、恐悅に存じ奉りまする。

多門　與五郎には道中筋の役目、大儀であつた。

與五　ハツ、有り難きそのお詞。殿にも今日この邊へお入りと承り、歸國の趣きお屆けをと、直樣これへ參る折柄、手前親共お入り先にて慮外との儀。如何の儀に候ふや。して〳〵、樣子は。

丈左　貴殿の親たる與次兵衞どの、その身は怨まず、老いし身で、主君へ遺恨を挾み、今日この邊へ若殿の、忍びのお出でを幸ひに、治部右衞門が家來を語らひ、殿を害せん企みの樣子。聞き屆け

し身が家來を、手に掛けしのみならず、剩へ奥方より、おてまへへの下し文、引裂き捨てし傍若無人。その上劍戟を振舞ふ狼藉ゆゑ、是非なく身共が手に掛けたワ。

與五　すりや、それゆゑに身が父を、この場に於て倉岡どの、おてまへの手に掛けられしとな。して、狼藉のその樣子、何れも方にも

有右　いかにも、その場に居合せしは、即ち斯く云ふ有右衛門、その證人は身共でござる。

丈左　狼藉者の事ゆゑに、即ちとゞめは刺し申さぬ。歸國を幸ひ一世の別れ。仔細を備さに聞かつしやい。

與五　然らば

ト思ひ入れあつて、與次兵衛が死骸の側へ差寄り

親人樣、與五郎でござりまする。悴めでござりまする。親人樣、お心を確かに。モシ、親人樣。

トいろ／＼介抱する。これにて與次兵衛、眼を見開き、丈左衛門、有右衛門を心にて指さす事あつて、がつくりと落入る。與五郎思ひ入れ。

オヽ、こりや親人樣、この世の別れ。せめてたつた一言なりと、モシ

トいろ／＼あつて身體を撫で廻し

エヽ、こりやこれ、はや絆は切れしか。ホヽヽヽホイ。

ト思ひ入れあつて

空しくこの場で親人の、御最期ありしとも察するところ、連綿たる系圖の一卷。殊にかね〴〵親どもの、役儀に心を懸けるの輩。ウム。

ト無念の思ひ入れ。三味線入りの禪のツトメ。

丈左 ハヽヽヽヽ、老耄したか知らねども、天命知らぬ老いぼれめ。主に刃向ふその天罰、直に廻つてみじめな其ざま。

有右 イヤナニ、殿へ言上も相濟む上は、丈左衛門どの、とゞめの刀は

多門 いかにも、身に恨みを含み、刃向はんとせし與次兵衛とあるからは、ナニ丈左衛門、早々とゞめを致してよからう。

丈左 ハッ、畏り奉つてござりまする。

ト與五郎が見る前ゆゑ、思ひ入れあつて

それに扣へし身が下部市助、それへ出い。

市助 ハッ。

ト下の方より、おづ／＼前へ出て

御用でござりまするか。

丈左　殿の御前と申し、恐れ多き事ながら、手に餘りしこの與次兵衛、下部ながらも其方が働きにて仕留めしからは、その功に賞で、御免を蒙り、其方にとゞめを刺さす間、有り難いと存じ、この場に於て、とゞめを致せ。

市助　エヽ、すりや、この下郎めに、アノとゞめを

ト思ひ入れあつて

思ひも寄らぬ旦那の仰せ。併しお譽めのお詞といひ、この身に取つて有り難うはござりますれど殿樣始め、お歴々樣の前と申し、その儀ばかりは幾重にも、御容赦に預かりたう存じまする。

丈左　すりや、主たる身共が詞を背くか。

市助　アイヤ、何しに下郎め、あなたのお詞を背きませう。

丈左　然らば、きり／＼とゞめを致せ。

市助　ハツ、さほどまで仰せらるゝ事ならば、何しに違背いたしませう。是非に及びませぬ。見苦しながらいづれも樣、御免なされて下さりませ。

トつか〳〵と差寄り、與五郎を見て

サア、そこを退かつしやい。

ト與五郎をかきのける。與五郎思ひ入れあつて「ウム」と寄るを、有右衞門、ちやつとこれを留める事。市助、一腰をさらりと拔き放し、與次兵衞が死骸に跨り

御主君に刃向ひし天罰、その身に思ひ知らつしやい。

ト與五郎へ思ひ入れしてとゞめを刺す。與五郎無念の思ひ入れ。市助下へ下つて與五郎を尻目にかける。

やれ〳〵、ハヤ、心柄とは云ひながら、思へば、哀れなのたれ死。そこらあたりにまじ〳〵と、不便や現在目前に、親の命を取らるゝを、指さす事もならぬといふは、ヤレ〳〵、笑止千萬な儀でござりまする。

ト此うち與五郎口惜しき思ひ入れあつて、死骸に取着き

與五　いかに時節とはいひながら、刃にかゝつて非業の横死めさるゝのみか、情なき下部如きがとゞめを受け、さぞ御無念でござりませう。果敢ない御最期でござりまする。

丈左　ヤア、役にも立たぬその繰言。御前に於て見苦しい。扣へさつしやい。

闕屋　して、この上は忰たる、與五郎が身の上は
多門　罪ある與次兵衛か忰ゆゑ、その儘には差置き難し。與五郎事はこの場に於て、暇を遣はす。
丈左　こりや、さうは有りさうなもの。子の身として親の罪科、云はゞ同罪なるべきに、お暇とはまだしもお情。然らば直樣與五郎は、この場に於て御追放。ソレ、市助、とてもの事に彼れが帶刀、召上げい。
市助　ハッ、畏りましてござりまする。
ト與五郎が方へ來り
サア、與五郎どの、その大小を渡さつしやい。
ト與五郎が帶刀を捥取り、これを良助、五郎次が前へ差置く。
闕屋　いかに老少不定と云ひながら、淺ましい親子御の成行。思へば果敢ない身の上ぢやなア。
トこの時寺鐘の入相を打つ。
有右　存じも寄らぬこの場の猶豫、御歸館の御用意あつて、然るべう存じまする。
多門　イカサマ、最早黄昏ならん。早々歸館いたすであらう。
丈左　いかにも、穢れ不淨のいとひもござれば、片時も早くこの所を

關屋　左樣ならば、若殿樣。

多門　丈左衞門を始め、皆の者。

丈左　イザまづお立ち

皆々　あられませう。

トやはり三味線入り禪のツトメ、靜かなる時の鐘になり、多門之助先に關屋、丈左衞門、有右衞門、良助、五郎次、供廻り附いて皆々花道へ入る。與五郎殘り、跡を見送り、與次兵衞が大小を取上げ、思ひ入れあつて

與五　實に淺ましき父上の、この場の御無念の御最期。これも誰ゆゑ日頃から、よこしま非道のあの倉岡。

ト無念の思ひ入れ。

先達て我が家の一旦斷絶に及びしも、全く彼れめが讒言ゆゑ。然るに百姓三作が、願ひに依つて伜たる、身共を新規御取立て、小祿なりと賜はりしも、丈左衞門へ三作が、賄賂を以て賴みしゆゑ。さすれば彼れに一旦の、恩義もあれど今目前、現在父を手に掛けられ、又ぞろ再び追放の、身の上となつたるも、皆倉岡めが爲せる業。思へば〳〵極惡人の丈左衞門、父が妄執、晴らさで

置かうか。

ト向うを見詰めて思ひ入れ。此うち矢張り時の鐘、かすめて靜かなる禪のツトメ。向うより丈左衛門窺ひ〳〵出て來り、花道に躊躇ひ、好き時分から引返して揚幕へ入る。與五郎右の大小を差し

程は行くまい。この場を去らず、さうだ。

トつか〳〵と花道の方へ行きかける。揚幕にて

丈左　エイ。

ト聲して與五郎が膝口に手裏劍立つ。これにて、たぢ〳〵として摚と坐す。チヨンと木の頭。與五郎無念の思ひ入れにて向うを見詰める。これをきざみにて、よろしく拍子

直にシヤギリ。

幕

三幕目

阿部川町隣同士の場
淺草寺町の場

役名——濡髮長五郎　放駒長吉。三宅順藏。三原有右衛門。家主、彦助。盜人、佐渡七。同、

伊之助。同、眼八。同、傳助。竹右衞門娘、お早。橋本娘、お照。家主女房、お丸。

本舞臺、三間の間、上の方、一間の障子屋體。正面常足の二重舞臺。向う押入れ、暖簾口神棚、これに誂への繪馬を上げ、神酒徳利を備へ、いつもの所に門口。下の方、前側ばかりの半障子を立てたる隣家、出入りあり。その外朝鮮矢來。幕の内より家主彦助、燒火鉢に向ひ、肴を燒いて居る。物貰ひ二人、佐渡七、座頭頭巾を冠り、祝儀取りの體。皆々立ちかゝり、わや〳〵云うて居る。すべて阿部川町のほとり、借家住居の體。葬式の鳴り物、てんつゝにて幕明く。

物貰　アヽ、お旦那樣、宿無しが二疋、お久し振りでござります。お宮詣りの御祝儀々々々。

彦助　今は手がふさがつて居る。通つた〳〵。

佐渡　私しは御當所近邊の持ち場、枝柿澁市が代でござる。承れば此方樣に、お宮詣りのおめでたがござるとの儀、此方どもの例でござれは、相變らず御祝儀を、お貰ひ申しに參じました。

彦助　成る程、此方の内に宮詣りはあつたが、亭主は留字。お内儀は少さいのを連れて產土へ行つたれば、わしは留守を賴まれた。おらアこの長屋の家主、彦助といふ者だが、勝手が知れないから今日は出ない。通らつしやい〳〵。

物貰　其やうな事を仰しやらずと、私しども二疋の中へ

物貰　お餘りでも、御祝儀でも、お願ひ申します〳〵。
彦助　エヽ、聞わけの無い乞食めら、どう盲も早く歸りやァがらねえか。
佐渡　然らばおてまへ樣は、お家主でござるか、これは御免下され。私しは少々頭に病がござるゆゑ、斯樣な物を冠つて居ります。左樣なら其許は、町役もなされてござるゆゑ、何も彼も御存じでござらうな。
彦助　長屋の世話と、葛西から前金を借りる事は知つて居るが、外の事は何も、知らない〳〵。
佐渡　御存じなくば申して聞かさう。そも〳〵我れ〳〵が濫觴は、しかも人皇十一代、推仁帝は粹な君そのお子樣は、百人一首の內に歷と出てござる。その歌は、アヽ何やら、これのお內はめでたいお家……イヤさうではない。これやこの行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關、と申し、蟬丸樣の跡を垂れる我れ〳〵。
彦助　やかましいわえ。大家に向つて跡を垂れるの何のと、あてこすりを吐かすと、撲き挫くぞ。
佐渡　イヤ、其やうな無法を云はゞ
物貰　大家を撲き挫け。
彦助　何を此奴が

ト皆々立ちかゝる。葬式の鳴りもの、てんつゝになり、向うより家主の女房お丸、産衣をかけたる赤子を抱き、跡よりお照、世話女房の拵へにて、張り子の犬、袋の豆を大分持ち出て來り

てる　これは〳〵、お家主のおかみ樣、今日は有り難う存じます。お前さんのお庇で、この子もお宮詣り致しました。

まる　めでたう歸つて、長五郎さんを悦ばすがようござんす。とてもの事に、お內まで參りませう。

てる　左樣なら、さうなされて下さりませ。有り難う存じます……ハイ、只今歸りましてござります。

彥助　お內儀、今お歸りか。

ト　お照皆々を見て

てる　モシ〳〵、こりや何でござります。

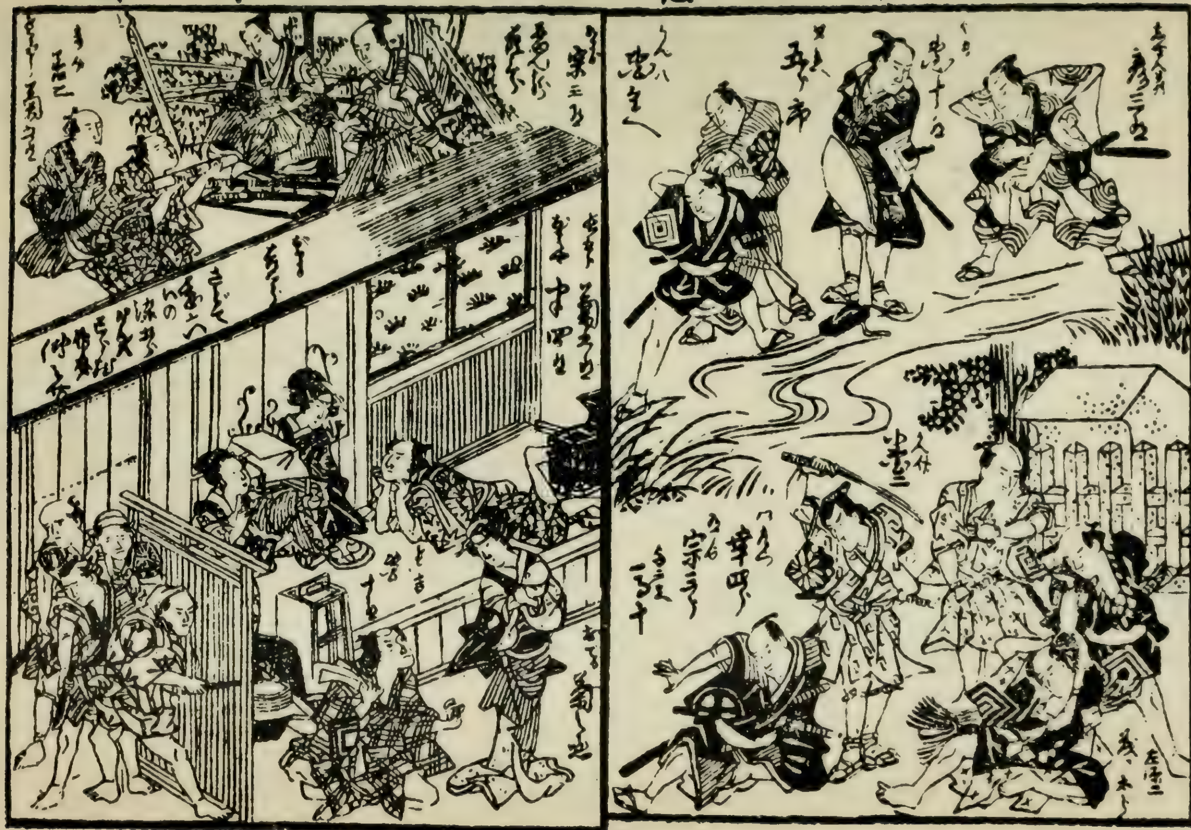
彥助　アヽ、聞いて下さい。こいつ等は宮詣りの祝儀を取りに來たから、皆留守だと云つたら、それからごたつき出してこの通りに

てる　ハテ、僅かな事でござんせう。めでたいこの子の宮詣り。これで好いやうになされて下さりませ。

ト　紙入れを彥助に渡す。

お前さん、さぞお草臥れでござりませう。サア、此方へ遣はされて下さりませ。

三幕目　口まく目



ト女房より赤子を受取る。此うち彦助金を包み、

彦助　うぬ等は仕合せな奴等だ。早く持つて歸りやァがれ。

ト佐渡七探り寄つて

佐渡　こりやお金。これは結構なお捌き。有り難うござります。

物貰　お捌きもいゝが、御器量も好いわえ。

佐渡　イカサマ、餘つ程美しい代物だ。

トあたりを見廻すを、お丸見て

まる　按摩さんが、目が明いた〳〵。

佐渡　イヤ、こりやァ、お加持の利いたのだ〳〵。

彦助　何をこの騙りめらが

ト在合ふ薪を持つて振り廻す。此うち佐渡七、門口の戸締りを見る事。皆々立騒ぐ。これに紛れて佐渡七物貰ひ二人逃げて行くを、彦助追ひ駈け、向うへ入る。お照跡を見送り

てる　モシ〳〵、お家主樣、もう堪忍なされて遣はさりませ。

まる　モシ、こちの人、怪我でもして下さんすなえ。

てる　こちの人と云へば、長五郎さんは、今日は店から早う歸りなさんす筈ぢやが、遅い事ではあるぞ。

まる　それはさうと、わたしどもの內から、世話して寄越しました、雇ひ女中のお早さんは、どこへ行きましたえ。

てる　ハイ、今日は取込みゆゑ、可哀さうに御近所へ、お宮詣りの配り物に參じました。

まる　それは嘸お忙がしうござりませう。左樣なら私しはお暇申します。

てる　ハテ、マアよろしうござります。態ツと有の儘でも上げませう。

まる　有り難うはござりますが、お內方もお取込み、又後ほど參じませう。そんならお照さん

てる　ようお出でなされました。

ト唄になり、お照、子を抱いて奧へ入る。お丸向うへ入る。右の唄を返して、向ふよりお早、雇ひ女の拵へにて、袱紗のかゝりし重箱を持ち、跡より長五郎、髪結ひの形にて、砥石を提げ、下駄がけにて出て來り

長五　オヽ、お早坊、今日は強飯配りか。御苦勞だの。

はや　旦那さん、今お歸りでござりますか、今日はお早うござんすな。

長五　今日は內も忙がしからうと思つて、店を早くはねて來たが、嬶アはもう歸る時分か。

はや　ハイ、もうお歸りでござりませう。

長五　どうぞ五日も十日も歸らにやアいゝ。

はや　そりやなぜでござりますえ。

長五　てまへさへ居てくれゝば、嚊アと竈はほんの据ゑ物よ。

はや　其やうな事をおかみさんがお聞きなされたら、大抵な事ではござりますまい。オヽ、怖い事〳〵。

トこなしあつて兩人舞臺へ來り、長五郎內へ入り

長五　今日はさぞ忙がしかつたであらうな……オヤ、嚊アは未だ歸らねえさうだ。

はや　左樣なら、まだお歸りではないさうな。

長五　さて〳〵今日も草臥れた。てめえも草臥れたであらうが、大儀ながら、肩を二ツ三ツくらはしてくれないか。

はや　ハイ〳〵、畏りました。私しは此方へ雇ひに參りまして以來、おかみさんへ遠慮いたして、つひぞお前さんのお側へ寄りました事はござりませぬ。今日は幸ひおかみさんもお留守の事で、しつぽりとお肩を摩つて上げませう。

ト長五郎の肩を揉む。

長五　こいつは中々よく利くわえ。併しながら、おぬしがやうな美しい女に、久し振りで揉んでもらふせえか、どうか身體が解けるやうだ。罰が當ると皆様の思し召しも如何だ。それからてまへも草臥れたであらうから、損得無しに其方を揉んでやらう。

はや　滅相な事仰しやりませ。雇ひ女の事なれば、お前さんは御主人、私しは奉公人、その上あなたの様な、いとしらしいお方に、揉んでおもらひ申したれば、私しこそ罰が當りませう。

長五　ハテ、遠慮に及ばぬ。これから其方を

はや　それでは餘り無遠慮なれど、それ程に仰しやる事なら、憚りながら

ト肩を出す。

長五　イヤ〳〵、上は跡で、肝心の下の方が大事。横に寢たり〳〵。

はや　それではあんまり

長五　なにサ、大事ない。寢たり〳〵。

はや　左様なら、御免なされませ〳〵。

ト長五郎、お早が下を揉みながら

長五　イヤモウ、按摩に揉んでもらふ時と、斯う尻馬に乘つた時は、どこやらが味な氣になるものよ…

…此まア、やわ〳〵ぼちや〳〵とした腰つき、こりやどうも堪えられぬ。

トいろ〳〵こなし。

はや　アレ、悪い事をなされまするな。

長五　コレサ、おれは主人、なぜ主の云ふ事を背く。

はや　なんの、お前さんの仰しやる事、背きは致しませぬが、何をお隠し申しませう、アノ、私しには

長五　男があるか。

はや　サア、枕こそ交さねど、云ひ交した男がござります。

長五　ハテ、似た事もあるもの。おれも矢ツ張りその通り、枕は交さねえが、マア内へ連れて來て、女房にはしたが、手も付けない。その月から腹がほてれん。こいつはお土産を押つゝけられたと思ふから、何も云はずに女房にはして置くのよ。

はや　それでもお前さんは、おかみさんになされたからよいが、わたしは今にその男の

長五　行くへが知れにやア、いゝ加減にさらばひ置いて、どうだ、相談する氣はないか。

はや　また其やうな串談ばつかり。あの樣な美しいおかみさんが

長五　サア、今云ふ通りの譯ゆゑ、一所寢は一向しない。その證據はコレ、見やれ。

ト神棚の繪馬を取つて

女房もおれも諦めて、二人が心へ錠を卸して、この通りサ。

はや　お前さんも、よう嘘をお吐きなされませ。あのやうな美しいおかみさんを置きながら、よう手を出さずにお出でなされませう。うそ〱、其やうに嘘を仰しやりますと、藏前の閻魔樣へいひつけますぞえ。

長五　ナニおれが嘘を云ふものだ。嘘を吐かぬ證據は、親のあざ名に松助三朝、たとへ閻魔に舌を拔かれるとも、鬼の來ぬ間にちやつと爰で

はや　アレ、せはしない。ひよつとおかみさんが

長五　なにサ、嬶ァの歸るには、まだ間があるよ〱。

はや　それぢやと云うて

長五　ハテ、大事ない。

トこの時奥よりお照、好みの形にて出て來り、兩人を突廻し、ついと出る。兩人こなしあつて

そりや、閻魔樣が來たぞ〱。

はや　エヽ、氣味の惡い。どこへ閻魔樣が

ト照を見て

ヤア、お前はおかみさん。

長五　南無閻魔大王サ、南無阿彌陀佛々々々々々々。

てる　アイ、わたしは閻魔大王サ。モシ、雇ひの女中さん、わたしは閻魔樣に似て居りますかえ。

はや　どうしてまァお前さんが

てる　それでも今、閻魔が來たと云はしやんしたぞえ。

長五　サア、閻魔と云つたは、オヽ、それ〳〵、神棚に在つたこの繪馬の事サ。

ト右の繪馬を出す、お照見て

てる　ヤ、この繪馬に互ひの心に錠前を、かけし誓ひもそら錠と、いつの間にやらこの合鍵。

長五

はや　ヤ。

てる　とサア、むづかしう云ふやうなわたしでもござんせぬ。長五郎さんと夫婦とは云へど、一所寢もして下さんせぬ。それに引かへお前の深切、今のやうに中睦しいを見れば、わたしや羨ましうござんす。どうぞこれからわたしに成り代り、このお方を大事にかけて下さんせ。若いお前を雇うて置くも、この事を頼みたいばつかりぢやわいな。

長五　ヤ、そんならおぬしは、現在亭主と譯あつても、悋氣らしい事もなく
はや　打つて變つてそのお賴み。
てる　承知とあらば
　　　　　　　ト神酒德利を取って來て
　　賴みの印にこの杯。
長五　イカサマ、女は當つて碎けろと
はや　和か過ぎてわたしが術なさ。
てる　賴むわたしが心の切なさ。
長五　二ツの心を
はや　汲み分けて
てる　水も漏らさず
長五　この末ともに
はや　お前を大事に
長五　賴むと云ふは、さても捌けた女房たなア。

ト思ひ入れ。葬式の鳴り物、てんつゝになり、三人杯ごとよろしく、此うち向うより彦助、小道具屋の包みを背負ひ、小屏風を持ち、跡より長吉、屋根屋の拵へにて、世帯道具を擔ぎ出て來り

長吉 モシ〳〵、大家さん、この中店を云ひ込んだ通り、今日引越して來ましたよ。

彦助 この男は聞譯の悪い、あれ程獨り者には店を貸さぬと云ふに、なぜ押しかけて引越して來たのだ。

長吉 サア、その女房は、急にはどうも

彦助 女房がなければ、店は貸されぬ〳〵。早く歸つた〳〵。

長吉 そいつはつまらぬ。そんなら歸りやせう。

ト行かうとして

大家さん、女房を一人思ひ出した。しかも大極上無類飛切りといふ女房がござります。

彦助 それでは隨分店を貸します。して、その女房は。

長吉 ハテ、物覺えの悪い。お前の世話で雇ひ女に出したお早は、わしが女房でござります。

彦助 アヽ、お早坊は貴樣の下齒か。あの子なら大極上だ。

長吉 時に大家さん、先の主人方へ譯を云つて、暇を貰つてはくんなさるまいか。

彦助 手形證文した奉公人ではなし、雇ひの事なれば、暇をくれさうなものだ。

長吉 何分お頼み申します。

彦助 合點だ。早く掃除でもするがいゝ。

長吉 畏りました。サア、早う參りませう。

ト兩人舞臺へ來る。長吉は荷を方付けて居る。彦助は内へ入り

彦助 許さつしやい。家主でござる。

三人 お家主樣、お出でなされませ。今日は有り難うござりました。

長五 何ぞお觸れでもあつて、お出でなされましたか。

彦助 わしは今から道具市へ行きますが、一ッたばねては下さるまいか。

長五 今日は仕事を早くしまうたが、明日になされてはどうでござります。

彦助 そんなら明日頼みます。時にお早坊、表で誰か逢ひたいといふ人が來て居ますよ。

はや わたしに逢ひたいと云はしやんすは、どの樣なお方でござんすえ。

彦助 サア、誰か知らぬが、ちやつと行つて來さつしやい。

はや ハイ／＼、左樣ならちやつと

ト門口へ出て

わたしに逢ひたいと云はしやんすお方はえ。
長吉　おれだよ〳〵。
はや　ヤ、お前は長吉さん。わたしに用とはえ。
長吉　外の事でもねえが、おらア爰へ引越して來たが、これからはおぬしとおれと共挊ぎだ。もう雇ひなんぞには出さないワ。
はや　エヽ、お前とわたしと共挊ぎと云はしやんすが、わたしはお前の女房になる事は否でござんす。
長吉　又、うぬはそんな事を云ふ。そんならこの扇の事は忘れたな。
ト序幕の扇子を出して見せる。
はや　其やうな事は知らぬわいな。
ト扇子をあたりへ捨てる。
長吉　さう吐かしやア、うぬを曳摺つて
はや　アレ、何をなされます。
長吉　やかましい。此方へ來やアがれ。
ト否がるお早を連れて隣りの内へ入る。

長五　オイ〳〵。お早坊、お客のあるのに、いゝ加減にして歸らないか。
彦助　イヤ、あの女中は、隣りの御亭主に用があつて
てる　お早さんとした事が、今日引越しなさんしたお隣りの旦那、まだ馴染もあるまいに、此マア隙の
　いる事わいな。
長五　てつきり彼の女は、裾ッぱりと見えるわえ。
彦助　其やうに思はつしやるなら、なんとあの女に、暇を遣つては下さるまいか。
長五　エ、そりやなぜでござります。
彦助　何を隱しませう、あのお早坊には亭主がござります。
てる　アノ、お早さんには御亭主がござんすかえ。
長五　ハヽア、その事だわえ。云ひ約束の男があると云つたが、若しやそれが尋ねて來たか。
てる　其やうな事とは知らず、お前と譯ある樣子ゆゑ、わたしに成り代り、何かの事も頼んだなれど、
　主ある女と聞いては、お前も義理が立ちますまい。
長五　其やうに云はれて見れば、おれも面目ないが、して、其お早が亭主と云ふは
彦助　聞けば以前は菊池の浪人、それでも身分は落さない、高くとまつた屋根大工、たしか異名は、放

駒の長吉とやら。

長五　エ、そんならかね〴〵噂に聞いた、菊池の浪人長吉と

てる　長五郎さんも世に在る時

長五　今も立拔く二人が仲。

てる　場所もあらうに隣り同士。

長五　二ッ並んだ蝶々も、留まる瀬の無い泥水に、流れ寄つたる濡髮も、意氣地を磨く男と男。その長吉が女房と、知らず結んだひよんな杯。

照彦　エ。

長五　大家さん、話してお出でなさい。

ト唄になり、長五郎奥へ入る。跡合ひ方になり、兩人こなしあつて

彦助　ヤレ〳〵、いろ〳〵な事で大きに遲くなつた。ちつとも早く競場へ行きませう。

てる　モシ、何ぞ面白い道具はござりませぬかえ。

彦助　今日はがらくも何もござらぬが、この箱入りの掛け物は、二幅對と見えるが、片々あるゆゑ役に立たぬ。今日市へ出して錢になればよし、さもなくば張交ぜにでもするが、箱は嵩ばつて惡い、

歸るまで置いて下さい。

ト何心なく片隅へ右の箱を抛り込んで置く。

てる 左様なら、今度好い物が出ましたら、お見せなされて下さりませ。

彦助 呑み込みました。ハヽア、日が暮れかゝつて來たわえ。お内儀、世話になりました。

てる ようお出でなされました……オヽ、たアがよく〳〵。

ト弔ひの鳴り物、合ひ方になり、お照抱き子を寝かし付ける。彦助、小道具と件の懸け物を持ち、門口へ出る。この時隣りの前にて今の扇子を見つけ

彦助 爰に扇が落ちてある。ハヽア、女扇だな。こいつは面白い繪だわえ。この屛風へ張交ぜにせうわえ。

ト此うち始終右の鳴り物にて、彦助、扇を持ち向うへ入る。ばた〳〵になり、隣りの家よりお早、草履を穿き出て來り。此方の内へ入り

はや モシ、お助けなされて下さりませ〳〵。

てる エヽ、日暮れ方に氣味の惡い。誰ぢやえ。

ト見て

はや　お前はお早さん、何でござんすぞいな。

はや　サア、聞いて下さんせ。あの憎ていな長吉さん、わたしを無理に内へ連れて行き、女房でもないものを、女房ぢやなんのと嫌らしい事ばかり。わたしや嫌で〳〵ならぬゆゑ、どこぞへ逃げて行きたいが、それでは此方の旦那さんのお顔も見られず、又爰に居りましたれば、毎日々々うるさうてなるまいし、いつそわたしは、死んでもしまひませうかいな。

てる　滅相な事云はしやんせ。また外に仕様もござんせう。そんなら お前は

はや　アイ、長吉さんとはナ

ト云はうとする。この時隣りの内にて

長吉　お早坊や〳〵。

ト呼ぶゆゑ、お早思ひ入れ、お照囁き、お早を上の障子屋體の内へ突きやる。内に長五郎、寝て居る。これにて悧りして起上がり、お早を見て

長五　お早坊か。

はや　旦那さん。

てる　モシ。

ト思ひ入れ。

長五　まゝの皮よ。

トこなし。

てる　それでしつぽり。

ト合ひ方になり、障子を閉す。この時隣りの内より長吉、醉うたるこなしにて、五合德利と竹の皮包みを持ち、何か尋ねる心にて、よろ〳〵ながら出て來り

長五　いま〳〵しいべら坊だ。今の扇をどこへ遣りやァがつた。お早坊や、おらが嚊ァはどこへ行つた知らん。

ト此方の門口へ來て、內の門口へ入りながら

御免なさい、私しは今日お隣りへ引越しました者でござります。以後は御別懇に賴み存ずるツサ。

てる　左樣でござりまするか。この上ながらお心安うなされて下さりませ。見ましたところが、お前さんの所も、お若い世帶でござんすな。お子樣でもござりますかえ。

長吉　何サ、今までは方々ごろ付いて步きましたゆゑ、今度新世帶サ。それに引かへお前さんの所は、いゝお住居だ。その上おかみさんの御器量は好し、御亭主さんは、どのやうなお方か知らねえが

てる　ヤレ〳〵、いゝお子だねえ。

てる　アレ〳〵、お隣りの叔父さんが、坊は好い子だとお褒めだよ……アレ、御覧じませ。お前をぢつと見て居りますぞえ。

長吉　オヽヨ〳〵。坊は誰が子だよ〳〵。ハテ、いゝお子だぞ。

てる　モシ〳〵、この子はどうやらお前さんに、似てをりますやうでござんすぞえ。

長吉　なにサ、御器量のいゝところは、お前さんによく似て居なさるのサ。

てる　アレ又あのやうな事ばかり。

長吉　イヤ、先刻から無駄ばかり云つて、まだお禮も申さぬが、大家さんのお世話で、雇ひに寄越して置きました、女の亭主でござります。何かとお世話樣でござりました。

てる　そんならお前がお早さんの

長吉　亭主の長吉といふ者でござりますか、今日引越しについて暇をもらひ、内へ呼び寄せましたが、どうでもお前さんの所がいゝかして、ぴんしやんして駈け出しましたが、此方へ來ては居りませぬかえ。

てる　アイ、たつた今

長吉　エ。

てる　サア、たつた今お前の所へ行きなさんしたが、その跡は存じませぬ。

長吉　ハテ、どこへ行つた知らん。歸るまで一服のんで行きませう。おかみさん、火を一ッお貸し。

てる　アイ、その燒火鉢にござります。

ト長吉煙草を吸ひつけながら

長吉　見れば見る程美しいものだわえ。おかみさん、お近附の爲に一ッお上がり。

ト手酌にて飮み

アヽいゝ。左樣ならおさはり申しやせう。

てる　わたしや酒は嫌ひでござります。

長吉　愛想の無いおかみさん、其つんとした所が命だわえ。畜生め。

トお照を抓る。

てる　モシ、何をしなさんすぞいな。

長吉　何をするものか。男が此やうに抓るのは、憎いで抓るのではないよ。よしかえ〳〵。俗に云へば惚れたからサ。おらが女房も居ず、爰の御亭主も留守と見える。ちやつとこの所におきまして。

ト お照に抱着くを突放し

てる なんでござんす。今日引越して、まだ馴染もないに、アタ嫌らしい。その上、主のあるわたしを捕へ。サア〳〵、早う歸りなさんせ。

長吉 歸りますへ。其やうに追ひ出す事はねえ。わしは女房を尋ねに來ました。そんなら女房は居りませんね。

てる アイ、此方の内には居りませぬ。早う歸りなさんせ。

長吉 左樣ならおかみさん、明日緩りと參りやせう。

ト 行かうとして、お早の草履を見て

そんなら、いよ〳〵わたしどもの、女房は居りませんね。

てる アタしつこい、居りませぬわいな。

長吉 わしが女房は居ないと云はつしやるが、どうして爰にお早が草履。

てる ヤ。

長吉 雇ひに寄越して置くうちは兎も角も、暇を取ればわしが女房。それを引摺り込んで置くからは、何か譯があらう。その譯を聞きたいね。

てる　サ、それは

長吉　何か迂散な内の樣子。所詮四の五は面倒だ。家搜しをしてくれべい。

ト奧へ行かうとするを留めて

てる　モシ、待ちなさんせ。

長吉　なんでわたしを留めなさるえ。

てる　サア、お前を留めたは……オヽ、それ〳〵、恥かしい事ぢやが、惚れました。

長吉　それは誰にえ。

てる　アノ、お前に

長吉　エヽ。

ト恟りして、ぶる〳〵と思ひ入れ。

醉が醒めたら寒くなつて來た……モシ、そりやお前、眞の事かえ。

てる　ほんの事でなうて。女子の口からどうマア恥かしい、嘘が云はれやうぞいな。今お顏を見るとその儘、兎やかうとは思うて見たれど、お前の心が知れぬゆゑ、今まで包むは女の嗜み。

長吉　畜生め。お前がその氣なら、早く爰で

てる　ハテ、折を見合せ、互ひの思ひを

長吉　どうして折を待たれるものか。ちやつとこの間に

てる　それぢやと云うて

長吉　ハテ、善は急げ。

てる　アレ、待ちなさんせ。

ト振り切るを追ひ廻す。この時障子屋體より長五郎出て、兩人を引分け、眞中へ出て

長五　不義者、そこ動くな。

てる　ヤ、お前はこちの人。

長吉　ヤア、そんなら隣りの亭主といふは、以前の朋友、與兵衛どのゝ御子息長五郎。ハテ、思ひがけない。

長五　南方氏のお世繼長吉どの、久々にて御意得申す。

長吉　互ひに以前は菊池の藩中。

長五　前髪立ちの連れ男子。

長吉　しかも國主のお氣に入り。

長五　小姓勤めの
長吉　有名の二人。
長五　以前の家名は
長吉　今の異名。
長五　放駒の長吉。
長吉　濡髪の長五郎。
長五　變つた形で
長吉　變つた所で
兩人　逢ひましたなア。
長五　その朋友でありながら、身共が妻へ不義云ひかけ、まだその上に、寶詮議の所存はないか。それでも武士か、侍ひか。浪人しても以前が以前、殿のお名まで穢す道理。爰な不忠者めが……と云へば武ざめいて惡い。時に長公、どうしたものだ。何もおらが嬶アをつらまへて、あんな事をしてくれる事はねえぜ。
長吉　おぬしにさう云はれて見れば、あんまり立入りがねえやうで、おらア穴へも入りたい。濡髪が女

房と知つて、ナニ此やうな事をするものか。今更思へば面目ない。料簡して下ツしく。

長五　其やうに譯を云ふに、まんざら聞分けぬおれでもねえ。この一件は、マアこの座限り。

てる　そんなら何も彼も、堪忍して下さんすか。エヽ、嬉しうござんす。

長吉　それでおれも落付いた。

トこの時本釣鐘鳴る。

ハア、もう入相ださうだ。ドレ、これからそろく

てる　お歸りかえ。

長吉　イエ、まだわしやア歸られませぬ。

長五　そりやアなぜ。

長吉　間男の詮議をしにやアなりませぬ。

長五　なんと。

長吉　此方の内の間男一件は濟んだが、もう一口のおらだ方の、間男一件の詮議をしにやアならない。

サア、かみさん、ちやつと爰へ出てもらはう。

てる　アノ、わたしに用とはえ。

長吉　しらを切るなえ〳〵。夫婦馴合ひで、おれが女房を引摺り込み、慰み物にしたからは、間男も同然だ。そのかたはどうつけるのだ。

長五　さて〳〵、今日は一件の多い事だが、それも互ひの事なれば。打捨て置かれぬ。

てる　イエ〳〵、この間男はわたしが懸り、お前は見物して居なさんせ……サア、長吉さん、お早さんと長五郎さんと、譯でもあるやうに、間男の詮議々々と云はしやんすが

長五　それには何ぞ、慥かな證據が

長吉　あるとも〳〵、慥かな證據が

長五　あるなら見ませう。

てる　アヽモシ。

ト證據があつて惡いといふ思ひ入れ。

長吉　何奴も此奴も、ほえ面をかはくなよ……その證據は爰に在るワ。

ト門口に置きたる以前の草履を取らうとする。この時幕明きの物貰ひ、下手よりツイと出て、この草履を引攫ひ、逸散に逃げて入る。長吉惘りして、あつけに取られ居たりしが

泥坊々々。


ぬれがみ長五郎
尾上菊五郎
五渡亭国貞画

ト追つ駈け行かうとする。

てる　モシ〳〵、間男の詮議はどうなされます。

長吉　ちよつとおらア、そこまで。

てる　イエ〳〵、さうはなりませぬ。詮議しかけたこの一埒、きつとした

長吉　その證據は

てる　ござりますかえ。

長吉　何も無い。

ト云ひながら向うへツイと入る。跡両人こなしあり。

てる　ほんにマア、をかしいお方ではあるぞ。したが、モシ、お早さんはえ。

長五　サア、それと聞いたゆゑ、爰に置いては面倒と、裏の口から隣りの内へ

てる　それでわたしも安堵いたしました。

長五　安堵といへば、燈火も灯し、蚊燻しも仕懸けずばなるまい。

てる　ほんに、いろ〳〵な事で取込んだゆゑ

トお照、あかりを灯しながら

長五　あのお隣りの長吉さんとやらは、をかしいお方でござんすな。をかしいぢやァない。ちつと氣を付けやれ。今も彼處で聞いて居れば、この子はお前に似たの何のと、引越して間も無い人と、心安立てが過ぎるから、今のやうな間違ひが出來るといふもの。それにつけてもお照、今日までは何も云はないが、いつぞや境木の地藏堂で、味な縁から話し合ひをしたら、おぬしが云ふには、身儘になるまでは、男の肌も觸れないと、堅い事を云ふゆゑ、面白い女と連れ歸り、女房に持ち、手も付けない内に孕んで、この坊主を產んだが、どうもおらァ合點が行かない。

てる　アレマア、今となつて其やうな事を。しかもソレ、辻堂で、しツぽりと、その時別れの捨て詞もわたしや本まに思うたゆゑ、二世の印とお前へ渡した、その品はえ。

長五　爰に持つて居るが、その印といふは、この簪か。

ト序幕の簪を出して見せる。

てる　アレ、又かいな。其やうな簪はわたしや知らぬ……アヽ、聞えた。わたしを内へ連れて歸り、女房にはして見たれど、今更嫌になつたゆゑ、其やうな事を云はしやんすか。どうぞ心を取り直し、一所寢せずとも、お前の側へ置いて下さんせえ。

長五　サ、それでもどうやら。
てる　お早さんへ義理が立たぬかえ。ほんに移り易いお方ではあるぞ。
　ト長五郎を抓る。
長五　ア、、痛い、何をするのだ。
てる　何をするとは、わたしや腹が立つわいな。
　ト飴の袋、犬の張子を打ちつける。
長五　此奴、投打ちをするな。さう吐かせば、おれも斯う
　ト莨盆を打ちつける。
てる　お前がさうなりや、わたしも斯う。
　ト彦助が置きたる件の一軸の箱を投げつける。この時長五郎思はず一軸の箱に目を着け
長五　この箱はどうやら見たやうな……ヤ、、、こりやこれ尋ぬる一軸の箱。この品は何者が
てる　そりや最前、お家主の彦助様が
長五　して、その家主は
てる　たしか今宵は道具市。

長五　この手筋から詮議して、二幅揃はゞ本地へ歸參。
てる　そんならお前は
長五　提灯付けやれ。
　　　ト お照、小提灯を灯し、差出す。
てる　夜更けぬ内に、ちつとも早う。
長五　今宵の競場は、かねて話しの
　　　ト門口へ出て
てる　行く道筋も心を着けて
長五　あの簪の樣子といひ、もしや女房は
てる　エ。
長五　氣を着けて寐やれ。
　　　ト時の鐘になり、長五郎、小提灯を提げ向うへ入る。この時赤子泣く。お照抱取り、門口を締め
てる　いんのこ〳〵……ドリヤ、父さんのお歸りを待ちませうか。
　　　ト此うち始終時の鐘にて、お照奧へ入る。この時向うより佐渡七、伊之助、眼八、傳助、いづれも盜

賊の形にて、窺ひ〳〵出て來り、花道にて囁き合ひ、舞臺へ來て、伊之助こなしあつて門口をこじ明ける。これより三人内へ入る。眼八は古半纏頰冠りの儘、出刃庖刀を持ち、門口を窺つて居る。傳助、佐渡七が差して居る一軸を脇差と心得

傳助 てまへはおつりきな脇差をきめて居るな。

佐渡 こりやァ脇差ではない。いつぞや頭と一緒に、去る處へ入つた時、盗んだ懸け物。一幅は賣つたが、こればかり殘つて居たゆゑ、脇差と見せて、白痴嚇しに差して來たのよ。

伊之 エヽ、此奴等は、口ばかり叩いて居ずと、まぶらしい爰の內。アヽ、小座敷から勝手の方を搜せ搜せ。

兩人 合點だ〳〵。

ト傳助、佐渡七、奥へ入る。此うち眼八あたり見廻し、飯櫃、蓋茶碗、いろ〳〵取つて來て飯など食ふ事よろしく、此うち向うより長吉、以前の形にて出て、我が內へ入らうとして思はず眼八を見て

長吉 そこに居るのは誰だ。

眼八 やかましい。怪我でもしない內、早く行きやァがれ。

長吉 おきやァがれ。この泥坊野郎め。

眼八　何を此奴が

ト出刃にて突いてかゝる。長吉、眼八を撲り倒し、出刃を引つたくり、この機會に眼八が着て居る古半纏取れる。又立廻りに、庖刀を取り閃かせる。これにて眼八向うへ逃げて入る。長吉件の半纏を着て、頬冠りをして内へ入る。伊之助に囁く。伊之助は眼八と心得、何ぞ食はぬかといふ思ひ入れ。長吉領き、何か撮みながら茶を呑んで居る。此うち奥より佐渡七、傳助、お照に猿轡を懸け、引立て出て來る。この時三人の後より長吉出て、お照の側へより、こなし。皆々見て

伊傳　エヽ、畜生め。

佐渡　コリヤ、靜かに。

ト皆々よろしくこなし。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、寺めいたる藪垣、この後より塔婆、高燈籠、淺草寺町のほとり。爰に長五郎、以前の形にて、彦助の持ちたる一軸を持ち、三宅順藏、有右衛門、侍ひの形にて、彦助に繩を懸け扣へる。中間二人、挾み箱、箱提灯を持つて立ちかゝり、時の鐘、木魚の入りし合ひ方にて道具止る。

彦助　アヽモシ、御免なされませ。

長五　モシ〳〵、お家主樣、何も怖い事はござりませぬ。この一軸をこなさんが持つてござれば、虎の懸け物もまだ無ければならぬ。どこから買つたか、それを云つてしまふがようござります。

順藏　おのれ、有やうに申せばよし、たつて陳ずるに於ては、爲にならぬぞ。

有右　殊更夜更といひ、斯樣な品を持參いたせしは、何とも以て胡亂な奴、拷問なして白狀させうか。

彥助　アヽモシ〳〵、私しは阿部川町に居りまする、家主彥助と申す者でござりまする。その懸け物は二幅對と見えまするが、片々の端物ゆゑ、安く見倒しをしたより外に、申し上げます事はござりませぬ。御免なされて下さりませ〳〵。

長五　こりやさうではござるまい。こなさんは誰ぞに賴まれて、わしが尋ぬる虎の懸け物は、何處ぞへ隱してありませうが。

彥助　なにサ、私しは其やうな太い事をするやうな家主ではござらぬ。どうぞ赦して下さりませ〳〵。

順藏　斯樣に申すからは、よも僞りはござるまい。彼れめは赦して遣はされい。

長五　然らば其許樣のお詞に免じまして

ト彥助を突遣る。

有右　おのれ、家主をも致す身で、盜み物を買ふなぞとは不屆き千萬、以後をきつと愼み居らう。

彦助　有り難うござります。

長五　この龍の一軸は、同役たる長吉の預りなれども、二品紛失の内、一品たりとも手に入るは、未だ武運の盡きざるところ、何卒お上へよしなに言上。

順藏　委細承知いたしてござる。

ト一軸を順藏に渡し

長五　合點參らぬは御兩所樣、何ゆゑあつてこの所へ。

有右　イヤ、こりや斯樣でござる。紛失の寳はともあれ、其許の御親父與兵衛どの、お家へ對して大忠臣、その功に免じ、捨扶持にても遣はし、歸參させよとある仰せゆゑ

順藏　衣服大小を取持たせ、只今貴殿の御宿所へ參る折柄、思ひ懸けないこの幸ひ。

長五　有り難き其お詞。併し龍虎二幅の懸け物も、對に揃はゞ本地へ歸參いたすべきを、ハテ、殘念な、

順藏　イヤ〳〵、片したりとも手に入らば、捨扶持の外、半地に取立てよと殿の御內意。貴殿はこれより、親御の家名を其儘に、南與兵衛と改め、殿へお目見え……衣服大小を持て。

中間　ハツ。

ト挾み箱の蓋へ衣服大小を載せ、長五郎の前へ置く。

長五　すりや、私しへ衣服大小、エヽ、有り難う存じまする。

ト思ひ入れ。この時向うよりお丸、以前の儘にて出て來り

まる　モシ〱、長五郎さん、お前の內へ泥坊が入つて亂騷ぎ。早うお歸りなされませ〱。

長五　さては今宵の留守を見込み

彥助　その盜人め等は

長五　お先へござつて、彥助どの

彥助　合點だ。

ト彥助お丸向うへ入る。

有右　與兵衞どのには、ちつとも早う。

順藏　殿より下さる衣服大小。

長五　辭退申さず、頂戴いたすでござりませう。

ト思ひ入れ、時の鐘にて、この道具廻る。

本舞臺。元の世話場に戻る。爰にお照、赤子を置いて、以前の儘。佐渡七、伊之助、傳助、立ちか

かつて居る。ト此うち三人、お照を引つ張り、捨ぜりふにて乗りかゝらうとする。長吉これを見て、件の出刃庖刀を振り廻し、三人立廻り。この機會に伊之助少し手を負ひ「ウン」ト悶絶する。この體を見て兩人逃げる。この時、佐渡七、腰に差したる一軸を落して行く。長吉こなしあつて、手早くお照の縛しめ、猿轡を取る。この間にお照、落ちてある出刃庖刀を取上げ

てる　盗人が入つた〳〵。

ト庖刀にて突いてかゝる。

長吉　コレサ、靜かに〳〵。

てる　おのれ盗人。

ト切つてかゝる。長吉の頰冠り取れる。お照見て

ヤ、お前は

長吉　おかみさん、耻かしい。

ト思ひ入れ。

てる　思ひがけない今宵の仕儀、長五郎さんへの申し譯、わたしが命を

ト死なうとする。

長吉　ハテ、死ぬに及ばぬ。はやまるまいぞ。

てる　よこしま事とは云ひながら、お前に肌身を許しては、猶更義理が立ちませぬ。それぢやに依つて

長吉　おれも思はぬ出來心。必ず共に

てる　イヽエ、殺して

長吉　コレ、待たつしやい。

ト留める。この時長吉、思はず落ちてある一軸を取上げて見て

ヤ、こりやこれ紛失なしたる虎の一軸。こりや長五郎が預かり。おれが尋ねる龍の一軸と一つになし、殿へ差上ぐれば本領安堵。

てる　すりや、その品が、かね〳〵聞き及ぶ、長五郎さんが失はしやんした、虎の一軸とやらでござんすかえ。

長吉　いかにも。

てる　その品諸共取揃へば、元の本地へ歸參とあれば、枕こそ交さねど、長五郎さんへの身の云ひ譯、どうぞそれを

長吉　ヤ。

てる　サア、それも斯うなるお前と悪縁、今更長五郎さんへの手前も恥かしうござんす。どうぞわたしを連れて、立退いて下さんせ。
長吉　その心なら面白い。どうで揃はぬこの一軸、斯うなるからは破れかぶれ。
てる　さう云はしやんしても、お前の心が
長吉　疑はしくばおぬしへ心中、本地へ歸らぬ法もあれ、その證據はこの一軸。
　　ト引裂かうとする。
てる　アヽモシ、疑ひ晴れました。お前の心中、成らう事ならその一軸を
長吉　ヤ。
てる　長五郎さんの戻らぬ内に、この子を連れて
長吉　足手纏ひのその餓鬼は、爰へ捨て子の置土産。
　　ト赤子を取つて下へ置く。
てる　それぢやと云うて
長吉　そんなら亭主に未練があるか。
てる　さうではなけれど

長吉　未練を云はずと、早く爰を

ト一軸を懐中して行かうとする。彦助窺ひ寄つて

彦助　盗人見付けた。

ト　かゝるを、ちやつと立廻つて花道へ行かうとする。向うにて人音するゆゑ

長吉　ヤ、あの提灯は

てる　たしか長五郎さん。

長吉　そんならこれから

てる　道を變へて

長吉　來やれ。

ト　時の鐘、三重になり、兩人、東のあゆみへ入る。揚幕より長五郎、小提灯を持ち、衣服を着替へ、大小にて、跡より順藏、有右衞門、以前の形にて足早に出て來り

長五　これが卽ち拙者が宅でござる。

有右　盗人どもが逃げ去らぬ内

順藏　お急ぎなされい。

ト三人舞臺へ來り

長五　家内へ盜賊入りしとの儀。女房は居らぬか。女房ども〳〵。

ト　あたりへ思ひ入れ。この內彥助起上がつて

彥助　ヤア、お前樣方は

有右　ソレ、盜人、捕へさつしやい。

順藏　心得てござる。動きやアがるな。

ト彥助を捕へる。

彥助　アヽ、モシ〳〵、私しは泥坊ではござりませぬ。泥坊はそれに居ります。

順藏　おのれ盜人。

トうごめき居る伊之助を捕へる。

伊之　オヽ、痛い〳〵……ヤア、お役人樣。

ト逃げうとするを直に繩懸け

順藏　サア、盜人め、おのれ一人でもあるまい。同類を吐かしをらう。

伊之　私しはこの通りの手負ひゆゑ、何も存じませぬ。御免なされませ〳〵。

順藏　ヤア、おのれ陳ずれば、拷問なして白狀さする。これでも云はぬか。

ト刀にてこじあげる。

伊之　アヽ、申します〳〵。どうぞ少し緩めて下さりませ〳〵。

順藏　然らば、サア、眞直に申し上げい。

伊之　サア。お聞きなされませ。私しども同類四五人で、爰の内へ入りましたところ、餘り美しいおかみさんゆゑ、引捕へました。

長五　何と申すぞ。

伊之　サア、それからお定り通り猿轡を欲め

ト此うち長五郎じゆつなきこなし。順藏思ひ入れあつて

順藏　アヽ、コリヤ〳〵、もうよい〳〵。科は赦した。勝手な所へ行きをらう。

ト繩を解かうとする。

有右　待たつしやい、順藏どの。大切なる科人。なぜ繩を緩めさつしやる。

順藏　サ、それは

有右　生温い其許の拷問。これからは拙者が代つて吟味いたす……コリヤ〳〵、其方命が助かりたくば

伊之　白狀いたせ。何案じる事はない。今の趣を殘らず云つてしまへば、其方を助けて遣はすわえ。

伊之　左樣なら、白狀さへ致さば赦して下さりますか。

有右　オヽ、赦して遣はす。して、どうぢや／＼。

伊之　サア、お聞きなされませ。これからは肝心かんもんの所でござります。まづその美しいかみさんを引捕へましたら、私しどもを搔退け、先へかゝつた奴がござります、よく／＼跡で聞けば、隣りの御亭主との事。素人衆にかすりを取られました。それから私しがと存じましたら、出刃庖刀を振り廻しましたゆゑ、私しは此やうに怪我、外の者は逃げ去り、跡で二人はちん／＼かもゝまだその上に、虎の懸け物を持つて、二人連立ち、駈落ち致したと見えまする。

長五　ヤヽ、虎の一軸とあるからは、それは慥かに

彦助　盜人は隣りの亭主、家搜し致して

ト隣りの內へ入る。

有右　約束通り、この間に早く。

ト伊之助が繩を切り解く。

伊之　有り難うござります。

順藏　うぬを遣つては
　　トかゝる。有右衞門支へる。此うち伊之助向うへ入る。彦助隣りの內よりお早を引立て出て來り
はや　モシ、お家主さん、私しをどうなされまする。
彦助　この女は盜人の同類。
はや　全く私しは……ヤ、長五郞さんのこの姿は
長五　サア、聊かの功に依つて、親どもの家名をその儘、南與兵衞と改め、本地へ歸參の衣服大小。
はや　エヽそりやマア、お內儀さんもさぞお喜びでござんせう。歸參とあらばわたしも共々。
有右　イヽヤ、ならぬ。盜人の同類たるこの女、此奴をせごして寶の詮議。
順藏　お待ちなされ、有右衞門。
長五　何ゆゑあつてその女を
有右　ハテ知れた事、紛失の二品は手に入つたれど、殘る一品折紙もろとも、手懸りの詮議いたすを、
　　何ゆゑ止めさつしやる。
長五　サ、それは
有右　剩へその盜人は、こなたの女房を伴れて駈落ちとの事。イヤサ、武士が女房を間男されても濟みま

すか。思ひなしの爲か、どうやら女房を引奪られさうな、薄のろけた面だわえ。ハヽヽ。
　　ト思ひ入れ。長五郎無念のこなし。順藏、ツカ〳〵と寄つて、長五郎の大小を取上げ

順藏 南與兵衞、改めて長のお暇。

長五 すりや、又ぞろ拙者が

はや ヤア、兩腰お取上げの上からは、元の町人濡髮の

順藏 長五郎、本地へ立歸るまで、とても揃はぬこの一軸、しかと貴殿に預け申した。この上歸參の手土産は、武士道立つる女敵の首、必ずともに。

長五 承知いたしてはござれども、根をたんだゆれば、女敵と申すでもござらぬ。

はや モシ、女敵と仰しやりますか。して、そのお二人さんはえ。

長五 男といふのは隣りの亭主、相手の女はあのお照。

はや ヤヽ、そんなら二人は。ハテ、思ひがけない。
　　ト思ひ入れ。

有右 それ程知れた不義間男を、女敵でないといふその仔細は

長五 あからさまに申せば、暗やみの、はじめ終りも今更に、云ふに云はれぬ妻が身の上。

はや　サア、わたしとても同じ身の上、二世と誓ひし夫とは、思ひの外の長吉さん、その女房と疑ひかかり、心にもなきこの災難。
彦助　今更益ないその述懐。
有右　この上は盗人の、妻と定まるこの女。
はや　すりや、どうあつても私しは
有右　ソレ、引立てい。
彦助　動きやァがるな。
長五　イヤ、この女は私しに、お預けなされて下されい。
有彦　そりや又なぜに。
長五　悪事を働し盗人、おびき寄する餌の人質。
有右　でも、澁皮の剝けた女。アヽ、聞えた。人質やら、妾やら、間男の爲替をするのか。イケ馬鹿馬鹿しい。
長五　然らば器量すぐれし女ゆゑ
順藏　長五郎もろともに、遣はす事は

有右　罷りならぬ。

はや　すりや、人質にァノわたしは

有右　叶はぬ事だ。

はや　そんならどうあつても、長五郎さんと一緒に行く事は、なりませぬかいな〳〵。

ト順藏の傍へ行く。

モシ、お役人樣、どうぞわたしを長五郎さんの、お側に居られますやう、お執成しを

順藏　アイヤ、有右衞門どの、この女が強つての願ひ。

有右　どの樣に申しても、罷りならぬ。

はや　すりや、此やうに申しましても……ハテ、是非に及ばぬ……さうぢや。

ト在合ふ燒火鉢の鐵きうを取り、顏へ押當てる。これにて「ウン」と放心する。皆々思ひ入れ。この時赤子頻りに泣く、長五郎、赤子とお早へこなしあり。

長五　エヽコレ、お早、早まつた事を……他人の胤とは知りながらも、捨てゝ置かれぬこの幼な子。

ト赤子を抱上げ、お早の側へ立寄り

コレ〳〵、お早、氣を確かに。

ト思ひ入れ。これにてお早心付き、幼な子を見て

はや　女子の役に、その子はわたしが

ト赤子を抱取る。皆々お早を見て

皆々　ヤヽヽ、その顔は

はや　モシ、お侍ひ様、これではお供が叶ひませうが

有右　玉に疵とは云ひながら

彦助　イヤあつかましい、その面で

ト取散らしある鏡を取つて差付ける。お早これに向ひ、ぢつと思ひ入れあつて

はや　長五郎さん、必ず見捨てゝ下さんすな。

長五　天晴れ貞女。

順藏　同道許した。

はや　嬉しうござんす。

有彦　うぬを

ト有右衛門は長五郎へかゝるを順藏支へる。彦助はお早へかゝる。長五郎支へて見事に投げ退ける。

お早「モシ」と幼な子を差付ける。これにてお早、長五郎思ひ入れよろしく拍子

幕

四幕目

品川新丸本の場
鈴ヶ森の場

役名――濡髪長五郎。放駒長吉。山崎與五郎。駕籠舁き、甚兵衛實ハ竹右衛門。新丸本の仁右衛門。遊女、みやこ實ハお照。三宅順藏。三原丹平。三作母、妙貞尼。同一子、捨松。若い者、忠八。倉岡下郎、蓮八。山崎娘、お關。遊女、豊町。同、園菊。同、山の井。肴賣り、えびざこの十。

本舞臺、三間の間、正面の見付、九星七星の印をまゐらの算に付たる大唐紙、下の方、一間新丸本と書きたる長暖簾、中足の二重、蓮子付の惣二階、大庇の軒口、下の方に戸樋竹の受け筒、この前に用水桶を飾り、すべて品川新宿旅籠屋のかゝりよろしく、大行燈を置き、幕の內より女郎豊町、園菊、山の井、めい／＼莨盆を扣へ居並び、店先に忠八、若い者の形、客を引いて居る。七月廿六夜の體、木魚双盤、流行り唄にて賑やかに幕明く。

ト花道と下座より、いろ／＼の仕出し大勢、行違うて入る。

忠八　サア、入らつしやりませ。新丸本でござい。入らつしやりませ〳〵。モシ〳〵、モシ。

ト客を引く事よろしく、此うち客一人、忠八に囁いて上がる。

ハイ〳〵、よろしうございます……豐町さん、お支度よ。

豐町　オヤ、忠八どん、わつちやァ心待ちだよ。

忠八　久しいものだよ……よろしうございます。サア、入らつしやりませ。

ト客は奥へ入る。

園菊　今宵は廿六夜ほどあつて、どうでも客人の足が繁いの。

山井　さうサ、お日和が好くつてお仕合せだ。わつちらは拜まうと思つても、お上がりの時分は、眠つたい盛りだよ。

園菊　そこを辛抱して、今夜は拜むがよいよ。

山井　どうぞその時分に、目が覺めればよいが

ト流行り唄になり、奥より仁右衞門、老けたる亭主の拵へにて、紋付の糠枕を持ち、出て來り

仁右　コレ〳〵、忠八、この枕は誰がのぢや。

ト見せる。

忠八　ハイその枕は、豐町さんのでござります。

仁右　ヤイ、あまめ、爰へ來をれ。

豐町　旦那さん、何でござんすえ。

仁右　何ぢやどころか、コリヤヤイ、雪駄屋へ拂ふ勘定を、一分二朱書出しへくるんで、神棚へ上げて置いたが、かいくれ見えぬワ。そこで方々尋ねたら、この枕の抽斗に、書出しにくるんだ儘入れてあるのは、おのれであらう。不斷手癖が惡いと聞いたが、コリヤ、おのれ、小盜みをしをるな〳〵。

ト一分二朱を出して見せる。

豐町　アヽ、モシ〳〵、わたしやァ昨日の晩、取つた覺えはござりませぬ。わたしぢやァござりませぬござりませぬ。

仁右　ソレ〳〵、誰も昨日の晩とも云はぬ内に、おのれが方から、問ふに落ちいで語るとやら、おのれどうしてくれう。

ト立ちかゝる。皆々留めて

園山　アヽ、モシ、御堪忍なされませ〳〵。

忠八　あの子の手癖の惡いのは、困つたものだ。
仁右　イヤ〳〵、留めるな〳〵。懲らしめの爲に

ト立ちかゝる。皆々留める。豐町逃げて奥へ入る。皆々捨ぜりふ。流行り唄になり、向うより竹右衞門、三尺帶にて息杖を持ち、駕籠の甚兵衞にて出て來る。跡より雜魚場の十、柿の筒袍、脚半、魚賣りの形、魚の荷を擔ぎ

十　生鯵や、鯵や大鯵、ぶゑんのいさきオイヽヽ。

ト呼びながら出て、花道にて、甚兵衞振り返り

甚兵　可愛らしい聲だな。アヽ、ざこ場の十か。
十　よく精を出すな。
甚兵　オヽヨ、丸本から急ぎを云うて來たが、片棒が無い。どうでも六夜だけ急がしいと見えた。
十　おれが棒組にならうか。
甚兵　おきやァがれ。おれと肩が釣合ふものか……併し、子供の成人するは今の間だ。四五年の内には、てまへと肩の釣合ふ樣にならうか。
十　違ひない、そこサ。

甚兵　おきやァがれ。しやれた小僧だ。

ト舞臺へ來り

ハイ、駕籠屋が參りました。

忠八　オイ〳〵、まだ間があらう。ちつと待たつし。

甚兵　ハイ、幸ひ棒組は跡から參ります。

仁右　コレ〳〵、小僧、魚は何だ……アヽ、鯵か。いくらする。

十　アイ、ばんどうサ。

仁右　アヽ、十で八文か。

十　エヽ、あたじけない。腐つた鯵でもさう賣るものか。イケあたじけない親仁だ。大鯵やァ、ぶるんのいさきチヽ、

ト呼びながら入る。

ハテ、大ふうな小僧だ。

ト甚兵衛をよく〳〵見て

ヤヽ、貴様は山崎與次兵衛様に奉公した、若黨の竹右衛門ぢやないか。

甚兵　さう云ふ貴様は。ほんに、橋本治部右衛門様に奉公した、仁右衛門どのか。

仁右　オヽヨ。

甚兵　ヤレ〳〵、久し振りで逢つたの。

仁右　マア〳〵、御健勝で

兩人　互ひにめでたうござる。

甚兵　貴様は爰の御亭主で、アノこの店は

仁右　仕合せとわしが店だ。これと云ふも、贔負にして下された丈左衛門様、この旅籠屋株も求めて下され、今では新丸本の仁右衛門といふ、親方株になつたのよ。

甚兵　ハテ、そりやァ人は運づくなものだ。貴様は旅籠屋、おらァ駕籠舁き、あんまりな違ひだ。

ト思ひ入れあり

ほんに聞きたい事がある。去年の夏であつたが、品川の丸本の亭主が、妾が欲しいというて、世話をする者があつたが、貴様はそんな覺えはあるか。

仁右　ある〳〵。去年の夏、妾を尋ねたはおれだが、貴様はそれをどうして知つて居る。

甚兵　サ、その時に貴様とは知らず、おれが娘のお早といふを、その妾奉公させようと、連れて來るそ

の途で、娘に逃げられて、今に行くへが知れぬが、年寄りの妾に遣らうと云ふたがうるさく、途から駈落ちと思はるゝて。

仁右　ハテ、そりやァ惜しい事をしたの。

甚兵　アヽ、今時分はおれも、貴樣といふ聟が出來やうに、ハテ、惜しい事をした。ハヽヽヽ。

仁右　時に久し振りだ。マア〳〵、奧へ來て一杯飲まつしやいな。

甚兵　そんなら辭儀無しに馳走にならうか。

忠八　モシ〳〵、夕河岸が來やせう。わしは何ぞ拵へませう。

甚兵　ナニ、忙がしいに構ひなさるな。

仁右　マア、斯う來さつしやい。

甚兵　ハテ、仕合せな事だの。

ト流行り唄になり、仁右衞門、甚兵衞、忠八奧へ入る。引違へて奧より三原丹平、侍ひ客にて文を持ち出るを、豐町追つ駈けて出て來り

豐町　モシ〳〵、お客さん、その文をおくれな。忠八どんに知れると惡いわな。

丹平　コレ、豐町、この文には「みやこ樣へ長吉」とあるが、そんならアノ、身が惚れて居る、みやこに

は、長吉といふ、いろが有るか〳〵。
豐町　イエ〳〵、いろぢやアねえのサ。
丹平　そして何だ。
豐町　あの、みやこさんを爰の內へ、權九郎といふ判人衆と、相談して賣つて寄越した、みやこさんの兄さんださうサ。
丹平　ハテ、そいつは合點が行かぬわえ。あの、みやこが親は、家改易した橋本治部右衞門、その娘のお照、あの女に兄は無い筈、そいつは合點が行かぬわえ。
園菊　そんな事もござりやせう。その長吉さんといふは、三田の駕籠屋の甚兵衞といふ人の息子でね。
山井　每晚々々客になつて、みやこさんの所へ通つて口說く樣子サ。それでも、みやこさんは長吉を、しみ〴〵うるさがつて居やすよ。
豐町　エヽ、お前方は、役にも立たぬ口をきゝなさんな。
丹平　ハテナ、その長吉なら南方十次兵衞が悴、彼奴がそんならアノ、みやこに
園町　いつそ惚れて居なさるのサ。
山井　今夜もアノ、豐町さんのお客になつて、上がりなさつたよ。

豐町　エヽモウ、お前方は、いらざる事を

丹平　よし〳〵。さう聞いてはあの、みやこ、今夜はもう〳〵これ程でも、おれが側をば離されぬ。ドリヤ、引付けて置かうか。

ト騷ぎ唄になり、ついと奥へ入る。引違へに忠八出て來り

忠八　サア〳〵、今夜は物日だよ。お茶を挽かぬやうに、ちつと精を付けなさいよ。

三人　エヽ、先刻から精を付けて居るよ。

ト思ひ入れ。流行り唄になり、向うより與五郎、杏葉牡丹の紋付の袷、小袖にて深き笠を被り、八卦おきの形、一本差し。跡より長五郎、これも杏葉菊の紋付きの袷小袖、一本差し、旅形、菅笠を持ち出て來り

與五　當卦、本卦、失物、待人、當用善惡の考へ。

ト花道にて

長五　オイ〳〵、占方どの〳〵、ちと頼み申したい。

與五　ハイ〳〵、考へ物でござりまするか。

長五　左樣でござる。わしは旅の者でござるが、小兒を連れましたる女一人、途にはぐれましたが、そ

の女と小兒の成行き、別條はござらぬか、考へて下さるまいか。

與五　隨分見て進ぜませう。アヽコレ、どこぞの店を借りまして……オヽ、アノ丸本のお店を借りて

ト鳴り物にて兩人舞臺へ來り

御免なされい。ちとお店の端を借用致しまするぞ。

園菊　アイ〳〵、また占屋さんがござんした。何ぞ考へてもらはうぢやないかえ。

豐山　そりやよからうわいな。

忠八　モシ〳〵、お二人一座かな。

長五　イヤ〳〵、獨り旅でござるて。宿が出來ようかな。

忠八　ハイ、隨分出來まするが、モシ旦那、お相手を一人お呼びなされませぬか。

長五　アヽ、女郎の事か。そりやモウ、一人泊め惡くば、如何やうとも致さう。

忠八　ハイ〳〵、今晩は物日でもござりますれば

ト與五郎を見て

モシ〳〵、お前もお泊りなされまするか。

與五　成る程、品川宿とあれば、ちつと尋ねたい事もあり、然らば一宿いたさうか。

忠八　ハイ〳〵、お序にお相手をあなた様も

與五　身は女郎を求めたうもないが、尋ねたい事あれば、マア〳〵、如何やうにも致さうて。

長五　して、其許は、何方よりこの江戸へは

與五　拙者は相州より江戸表まで、姉の行くへを尋ねまして

長五　お出でなされたのかな。

與五　左様でござるて。

長五　ハテ、似た事でござる。尤も私しは、この間江戸表より、幼な子を連れさせましたる女一人同道仕り、また尋ね求むるも、若い男の女を伴ひ、申さば駈落ち者でござる。その兩人を尋ねるため、斯様に遍歴仕るて。即ち今朝六郷の渡し場にて、小兒を抱いたる連れの女にはぐれまして、今日一日尋ねまするが、今以て逢ひませぬて。

ト好き時分より仁右衛門、丹平、正面の唐紙より覗き居る。

與五　それはお心遣ひな儀でござる、殊に今晩は廿六夜の事なり、人込みでござれば、中々お逢ひなさるゝ事も、この様子では

ト思ひ入れ。

忠八 モシ〳〵、あなたがた、爰は店先でもござります。マア〳〵、お座敷へお出でなされませ。
與五 然らば宜しう頼むぞや。
豐町 ハイ〳〵、私らが御案内いたしませうわいな。
長五 コレ〳〵、風呂は有らうな。
忠八 隨分お入れ申しまする。
與五 泊りへ着いて風呂が無しでは、さて惡いものでござるて。
長五 左樣でござりまする。
豐町 お荷物はこれでござりまするかえ。

ト長五郎が小風呂敷の包みを提げる。

長五 オヽ、その包みばかりぢやが、其うちには大事の品がある。必ず外へ遣るまいぞ。
豐町 アイ〳〵、合點でござんす。

ト風呂敷の内には件の一軸、袱紗に包みし扇蝶の簪入れ有る事ゆゑ、長五郎この品へ思ひ入れ。與五郎も系圖の一巻を包みし小風呂敷を腰に付けて居たるを

忠八 モシ、あなたのお包みも、お預かり申しませうか。

與五　イヤ〳〵、これは八卦道具……商賣物ゆゑ、ちと預け憎いて。
忠八　左様なら、今晩は込みあひまするから、お氣をお付けなされませ。
園山　モシ、あなた、奥へござりませぬか。
與長　サ、御一緒に參じませう。

ト品川騒ぎになり、與五郎は小風呂敷の包みを持ち、園菊、山の井附いて奥へ入る。この鳴り物にて向うより運八、旅形の若黨にて、大小、脚絆、草鞋、菅笠を持ち出て來り、店先へ來て

運八　頼まう〳〵。
仁右　ハイ〳〵、どなたでござりまする。コレ、忠八は居るか……丹平様、マア〳〵、此方へお出でなさませ。

ト丹平を伴ひ出て來る。運八丹平を見て

運八　ヤ、あなたは丹平様でござりまするか。
丹平　丈左衛門どのゝ小者、運八でないか。
仁右　アヽ、案内をなされたは、アノ倉岡様の御家來衆とな。
運八　左様でござる。イヤナニ、仁右衛門どの。身共只今參つたは、別儀でござらぬ。

ト仁右衛門が方へ差寄り、あたりへ思ひ入れあつて

先達てよりお旦那丈左衛門樣を、敵なりと申し立てまする、山崎與五郎、彼奴に今日出逢ひましたるところ、このお内へ泊りし樣子。即ち形體は占や算、杏葉牡丹の紋所の付きし着物を着ましたが、彼の與五郎めでござる。又その上に先達て、水神の森にて、浪人の與次兵衛、丈左衛門樣の密書を拾ひし樣子。見れば其許のお名前もござつたゆゑ、引攫ひ參つてござる。

ト四立目の密書を仁右衛門に渡す。

仁右 ヤヽヽヽ、どうしてその密書が與次兵衛の手に入つた事やら。餘り不思議な事でござる。この書面を取られては、わしは主殺しになります。ハテ、危ない事なう。

ト右の密書を懐中して

私しが此やうに泥水商賣を致すも、皆丈左衛門樣のお庇。これと申すも私しが、主人治部右衛門を、彼の毒を盛つて……それをお頼みなされたは丈左衛門樣、その褒美に今の暮らし。不便なは治部右衛門が娘のお照、只今では現在の、家來の私しが所へ勤め奉公に參り、みやこと申すは主の娘のお照どの。これを思へば人の身の上は、いつ何時、どの樣にならうやら、知れぬものでござります。

丹平　左樣〻、身共もそのお照には執心ゆゑ、每晚〻〻通ひまするが、今に承知いたさぬて。

仁右　それはともあれ、丈左衞門樣を敵と狙ふ與五郎も、人ざかしきこの所へ、每晚〻〻入り込むとの事。

丹平　丈左衞門樣の妨げなれば、人知れずあの與五郎めを

仁右　ばらしてしまふは、モシ、丹平どの

　　　ト丹平へ囁く。

丹平　アヽ、そんなら泊つたを幸ひ、あの與五郎めもおぬしが働きで、今夜のどさくさに、バッサリやらかす。

仁右　モシ。靜かに仰しやりまし。

　　　ト思ひ入れ。あたりへこなし。

運八　して、私しがお知らせ申した一儀、仁右衞門どの、御承知かの。

仁右　忝うござる。お聞きの通り此方にも、その用意最中でござる。

運八　然らば身共も立歸つて、右の樣子、主人丈左衞門へ申し達すでござらう。丹平樣、これにてお別れ申しませう。

丹平　丈左衞門どのへ宜しう賴む。して、倉岡どのには

運八　一兩日は、市場の役所に罷りあります。

仁右　運八どの、御苦勞でござります。丹平どの、サ、入らつしやりませ。

ト流行り唄になり、運八引返して入る、丹平、仁右衞門奥へ入る。奥、バタ〳〵にて十、逃げて出る跡より甚兵衞、追ひ出て來り

甚兵　うぬ、小僧め、よくおれが頭へ灸をするゐたな。

十　それでもお前が眠つて居たから……コレ、眠たくは、目覺ましに枝豆を一把やらうか。

甚兵　そいつは有り難い。目覺ましによからう。

ト十、枝豆をやる。甚兵衞思ひ入れ。奥より豐町、袱紗包みの簪を持ち出て來り

豐町　オヤ〳〵、お前方は枝豆とおしやれだの。わたしにもちつとおくれ。

甚兵　よく食ひたがる女だ。

豐町　エヽ、お前、つれない事をお云ひだね。コレ、駕籠屋さん、お前、なんと賣りたい物があるが、買つておくれぬか。

甚兵　賣りたいとは、そりやァ何だ。

豐町　アイ、わたしやァ、客人が簪を拵へてくんなさつたが、どうもちつと持ち憎い譯があるから、どうぞお前買つてくんな。サ、早く買つてくんな。

ト盜み物ゆゑ、きよろ〳〵とする思ひ入れ。甚兵衞もこの簪を、よく〳〵見て。

甚兵　どうやらこりやァ、去年途から親を捨てゝ駈落ちした、お早がさして居た扇蝶のこの簪。どうして爰へ……コレ、お前、こりやァどこで貰つた。

豐町　どこだやら、初會の客人サ。

ト甚兵衞思ひ入れあつて

甚兵　二百ばかりなら買つて置かうよ。

豐町　モウ、たんとにはならぬかえ。

甚兵　それで賣りな。

豐町　エヽ、どうするものだ、賣りやせうサ。お錢おくれ。

甚兵　二百なら買つて置くのよ……サァ、二百。

ト渡し

エヽ、又買喰ひに遣ふのだの。

豐町　アイ、簪を賣つて、鰻飯を喫べるのよ。
　　ト二百握つて駈けて入る。
甚兵　エヽ、女郎子供といふものは
　　ト簪をよく〳〵見て
どうでもこりやァ娘が簪。どういふ廻りで爰の内へ
　　トぢつと見て思ひ入れ。此うち十、後へ廻り
十　耳つとう。
　　ト大きく云ふ。
甚兵　エヽ、悄りさせた。
　　ト思ひ入れ。騒ぎ唄になり。この道具をぶん廻す。

本舞臺、正面いつぱいに總二階の櫺子内の方を見せ、下の方に梯子の上り口。尤も平舞臺にて表二階大座敷の體。よき所に屛風を建て、夏夜具を敷き、爰に長吉、みやこが胸づくしを執り、枕を振上げ居る見得にて道具とまる。

ト矢張りよろしき騒ぎ唄、廿六夜の藝者の鳴り物聞える。

長吉 コレ、そんならわれはどうでも、おれと寝る事は、ならねえと云ふのか〳〵。

みや そりやモウ、お前、今云ふ事ぢやござんせぬ。阿部川町の隣り同士、長五郎さんのお世話になつて居る頃から、わたしやちと譯あつて、男を尋ねる者ゆゑに、あの長五郎さんを男と見込んで亭主分。殊に幼な子を産み落し、その子も尋ねる男の胤。その厄介まであるわたしを、長五郎さんが尋ねる男に逢ふまでと、世話に懸けて子守りまで、置いて遣らうと雇うた女中。その時お前ござんして長五郎さんとも友朋輩。

長吉 サ、その朋輩のこの長吉、同じ屋敷に勤めた内、尋ねにやならぬ龍虎の一軸、あの長五郎が方にも一軸。それも此方の手に入れて、揃へてお上へ差上げんと、心を砕く長吉が、思案の外のてまへに迷つて、盗人の入つた晩を、幸ひと引つ拂つて、品川のこの丸本へ連れて來て、毎晩々々通つて口說くおれが心。コレ、ちつとはてまへ、思ひやつてくれてもいゝぞえ。

そや さう云はんす程、お前の身勝手。恥かしいが、一度の枕に、子まで出來たる男があるゆゑ、お世話に預る長五郎さんは、表向の亭主分、其お方の顏の立たぬ事まで、仕出したは皆お前。殊にわたしを連れて來て、思ひがけないこの勤め。云はばこなたは男ぢやない。コレ人賣りぢや、誘拐し

ぢや。これにつけても、内へ殘した幼な子は、今頃はどうしやつたやら。わたしが斯ういふ心と知らず、長五郎さんは嘸やわたしを、僞り者、人間の皮を被た、犬とも思うて居なさんせうと、わたしやそれが悲しうて〳〵、悔しいわいな〳〵。

ト此方へ寄つて泣く。長吉思ひ入れあつて

長吉　何も泣く事はない。てまへもあの長五郎は頼んだ亭主よ。そんならおれも間男といふでもないワ
ない證據は此やうに、毎晩〳〵口說きに來ても、つひぞ一度もコレ

トしなだれ寄る。

みや　エヽ、知らぬわいな。

ト振り切る。長吉ムッとして

長吉　エヽ、うぬ、ちつとは情を知るものだワ。

ト立ちかゝる。この時豐町、走り出て來り

豐町　モシ〳〵、みやこさん〳〵、あの客人の丹平さんが、お前が床に見えぬと云つて、又腹立てゝ居なさんす。ちやつとお出で〳〵。

トみやこを引つ張つて連れ行かうとする。

長吉　イヽヤ、侍ひ客に逢はずともいゝ。爰に居ろ〳〵。

　　　ト引留める。

みや　イヽエ、爰に居る事は否ぢやわいな。

豊町　サア〳〵、ちやつとお出でな。

　　　ト引つ張る。

みや　イエ〳〵、あの客人に逢ふも否なり。爰に居るのも猶更に、いつそわたしや死にたうござんす。

　　　ト身を顫はして泣く。

豊町　サヽ、さう云はずと、お出でな〳〵。

　　　ト引つ張る。奥にて

忠八　ハイ〳〵、只今お連れ申します。みやこさん〳〵。

　　　ト呼ぶ。

豊町　アレ、忠八どんが來ると惡いよ。サ、お出で〳〵〳〵。

　　　ト無理にみやこを連れて入る。長吉廻し床に一人殘り

長吉　イヤ、情の强い奴も見たが、彼奴がやうな向うの見えぬ、男へばかり情を立て、毎晩通ふおれが

云ふ事、斯う又聞かぬ女も見ぬわえ。こいつは今夜も、獨り寢にせずばなるまい。

ト屛風引廻す。矢張り下の方に割床取つてあり。流行り唄になり、二階の口より、長五郎、浴衣の形にて、濡れ手拭を持ち、件の一軸の包みを持つて、風呂より上りし體。跡より園菊、長五郎が袷小袖杏葉菊の紋付を抱へ、附いて出て來り

長五　わしが寢床はどこだの。

園菊　ハイ、此方でござります。ちつとマア爰でお涼みなされませ……モシ、お前樣、その包みは風呂場までお持ちなされまするは、どういふ譯でござりまするえ。

長五　これは至つて大切な品ゆゑ、ちよつとでも側は離されぬ……して、今一つの包みはどれにあるな

ト眞中の床へ入る。

園菊　アイ、枕許にござんすぞえ。

長五　アヽ、これか。

ト風呂敷包みを出し、内を明け、いろ／＼尋ねる思ひ入れあつて

ヤヽ、この包みの内へ、袱紗に包みし簪を置いたが、見えぬといふは、ハテ、合點の行かぬ。

トいろ／＼尋ねる事。

園菊　モシ、お客さん、何をお尋ねなされまするえ。

長五　イヤ、この包みの内に、女の簪を置いたが、若し外へ取置いたやら

園菊　見えませぬかえ。その包みは只今まで、下座敷の床の間に置いたが、もし下へ落ちは致しませぬか。わたしがちよつと見て參りませう。

長五　どうぞ尋ねて來て下され。早う頼む〳〵。

園菊　アイ〳〵、尋ねて來やんせう……モシ、召し物は爰へ懸けて置きますぞえ。モシ、お客さんへ。この御紋は、こりや杏葉菊でござんすかえ。

長五　いかにも杏葉菊ぢや〳〵……サ、早う尋ねて來てくりやれ。

園菊　アイ〳〵、合點ぢやわいな。

トとつかはと梯子口より下家へ行く。この時割床の長吉、そつと屛風を明け、長五郎が聲を聞き咎めて窺ふ。長五郎思ひ入れあつて

長五　アヽコレ、あの簪を失うては、今にも尋ぬる女房に、めぐり逢うても證據のあの品。これまで決して口外せねど、粗略にしたと申しては、心を盡せし甲斐がない。お照めは某を頼みしゆゑ、表向は女房と申して居る内、人でなしのあの長吉めと、いつの間にやら不義を働き、幼な子までを捨て

置いて、二人連れにて逃げたる事、第一家中の沙汰に及び、折角本地へ歸参の節に、又ぞろ改め浪人いたしした。それと申すも、コレ、この一軸を二幅揃へて差上げ、連れて逃げたる長吉も尋ね出し、女敵討つて二つの首を、朋輩に見せねば、長五郎の侍ひが立たぬ。その時あれは誠の女房ではござりませぬ、頼まれましたゆゑ、表向ばかりの女房ぢやと、云へば云ふ程刀の手前。あの女めに騙されて、女房でもなき女房に、これ程までに苦勞をするかと、思へば〳〵世間の人に、聞かすも白痴と蟄して居れば、不便ながらもあの女、首にするのが侍ひの常。

ト思ひ入れ。この臺詞の内屏風一重の長吉、これを聞いて大きに驚き、手拭にて顏を隱し、持つて來りし一軸の包みを腰にさし、二階を逃げんといろ〳〵思ひ入れ。流行り唄になり、梯子口より與五郎浴衣の形にて、系圖の一卷を頸に懸け、手拭を持ち上がり來り、忠八は與五郎が杏葉牡丹の紋付の小袖を持ち、附いて上がる。

忠八 旦那、お床は此方でござりまする。

ト下の方、床の敷きある所へ案内する。與五郎下の寢所へ入る。長吉下家へ逃げんとして梯子の口にて忠八これを見付けて

ヤ、こなさん、長吉どのだの。誰に斷つて上がつたのだ。コレ、こなたには云ひ分があるワ。

ト執へんとする。長吉振り切つて下家へ駈けて降りる。忠八執へんとして其處にある行燈を打覆し、暗やみになりし體。忠八追ひ駈けて下家へ入る。この立廻りに忠八、與五郎の杏葉牡丹の着物を其處へ捨て行く。この機會に屏風にかけたる長五郎の杏葉菊の着物下へ落ちる。與五郎それを知らず、長五郎は忠八が長吉と云ふを聞きしが、よその名と思ふこなし。

與五　これはしたり、眞暗になつた。わしが着る物は

ト探り見て、同じ手障りゆゑ長五郎が杏葉菊の紋のある袷小袖を取つて浴衣の上にはをる。長五郎も暗きゆゑ屏風へ懸けし着類を探り、無きゆゑ、さては下へ落ちしと手を伸し探り見て、同じ手障りゆゑ杏葉牡丹の紋ある與五郎が着物を探り取つて、浴衣の上へ引つかける事。

何ぢややら、今の男は、長吉々々とばかり云つて、行燈も何も押し倒し、眞暗にして行きをつた。分けて今夜は廿六夜、人さわがしき晩ぢや。大切な品などは、容易にそこらへ出しては置かれぬ

ト系圖の一卷を頸に懸け懷中する。この樣子を聞いて長五郎も、一軸を取つて懷中する事。

コレ〳〵、宿の衆、燈火が消えた。ちやつと灯して下され〳〵。

ト呼び立てる。この聲を合圖に、下家より仁右衞門、身拵へして一腰さし、與五郎を殺す心にて、探り〳〵出て窺ふ。

長五 モシ〳〵、さう仰しやるは、宵にお目にかゝつた、旅の御ようじ様かな。
與五 左様でござります。その節お目にかゝつた旅のお方かな。
長五 左様でござります。只今其許の云はれし通り、今晩は別して用心が悪うござりまするから、随分とお互ひに、氣を付けるがようござります。
與五 イヤモウ、込み合ひまする節は、得て間違ひが有りたがりまするもの。それにしても、暗うてならぬ。コレ、燈火をつけて下され〳〵。
ト云ひながら屏風を引廻す。長五郎も屏風を立てる。仁右衛門探り寄つて、與五郎が屏風をそつと明ける。内には與五郎、夏夜着を着て寝て居るを、探り見て、白刃にて突かうとする。與五郎心得たりと跳れ返つて
何者ぢや〳〵。
ト一腰持つて探り出る。この時仁右衛門切り付ける。與五郎その手を執へ、捻倒すはずみに件の密書を落す。與五郎探り見て、この状を取つて懐中して
こりや、枕探しぢやな。
ト仁右衛門又切り付ける。立廻つて仁右衛門が刀を捥ぎ取り切り、拂ふはずみに、仁右衛門急所を切り

下げられ、たち〳〵となつて正面の櫺子へ行き當る。これにて櫺子、めり〳〵と破れて、手負ひの仁右衛門、二階より門口の下へ落ちし心。與五郎續いて崩れより下を窺ふ事。長五郎もこの音に驚きて窺ふ思ひ入れ。與五郎密書を探り見て

與五　枕探しが落せし狀か。

長五　大事の一軸。

與五　この一卷も

兩人　こりや容易には

ト一度に思ひ入れ。與五郎は櫺子の崩れより下を窺ふ。長五郎身拵へする。時の鐘、兩人見得よろしく、道具廻る。

本舞臺、元の店先、大戸を締め、夜明けの前の景色。二階の櫺子破れて、爰より手負ひの仁右衛門下へ落ちて卽死の體にて、よき所に仁右衛門倒れ居る。長吉、頰冠りにて、潛り戸より內を窺ひ居る體。流行り唄にて道具とまる。

ト向うより四つ手駕籠を舁ぎ、裸身の駕籠舁二人走り來り

駕舁　長吉さんか。

ト聲かけるを長吉「コレ」を制す。思ひ入れにて駕籠舁二人に囁く。兩人呑み込み、駕籠を好き所へ置き、二人は下座へ入る。長吉、内を窺ふ。この時内より

忠八　これはもうお歸りでござりまするか。

トこの聲を聞き、狼狽へて駕籠の内へ入り隱れる。時の鐘にて客二人、高繩の箱ぶらを燈し、先に立ち、忠八送つて出て來り

客二　忠公、世話であつたの。

忠八　ハイ〳〵。又お近い内入らつしやりませ。

ト客二人捨ぜりふにて向うへ入る。忠八内へ入らうとする。

丹平　仁右衞門は居ぬか。亭主はどれへ參つた。

ト呼びながら出る。

忠八　これは旦那、もうお歸りでござりまするか。

丹平　コレ、忠八、歸らいでどう致さう、あのみやこめは、たうとう身が寢所へちよつとでも來をらぬ。それゆゑ歸ると云うたら、送つて出るかと思ひの外、矢張り送りもしをらぬ。エヽ、腹の立つ女

めが。

忠八　それはあなたのが御尤もでござりまする。私しがちやつと、みやこ様をお呼び申して、送らせませうて。

丹平　イヤ〳〵、捨てゝ置け〳〵。

ト忠八は奥へ入る。丹平殘つて

おれも度々ふられたが、今夜のやうにふられた事はない。イヤ、飛んだ廿六夜だ。

ト誂への合ひ方。呟き居る。内より長五郎出て來り、丹平を見て

長五　イヤナニ、憚りながら、お草履は變りませぬか。

丹平　イヤ〳〵、これは身が穿き物でござる。變りは致さぬて。

ト長五郎をいろ〳〵見て

ヤ、貴公は菊池家の御家來、南與兵衞の子息、長五郎どのではござらぬか。

トこれを聞き、駕籠の内の長吉さてはと思ひ入れ。

長五　ヤ、其許樣は、丹平どのではござらぬか。

丹平　いかにも、丹平でござる……コレ、長五郎どの、承れば貴公には、たしか女房を、あの長吉に盜

まれ、女敵を討つとお云やつて、出さつしやつたと聞きましたが、左様かな／＼。

長五　イヤ／＼、全くもちまして左様な儀は。そりや世上の雑説。拙者ことは龍虎の一軸、一對揃ふその懸け物の

丹平　イヤ／＼、隠さつしやるな、存じて居りまする。おてまへの妻女を、あの朋輩の放駒長吉、連れて駈落ち致したと聞きましたが、さすれば間男。今では貴公も、殿の御扶持人ではござらねど武士たる者が女房を盗まれ、こりや一分が立ちますまい。誠にこれが女敵でござるて。

長五　御存じの上は、隠しませうやうもござりませねど、その女房と申すのも、ちと譯ござつて、私し方のかゝり人同然。申さば女房と申すのでもござらねど

丹平　アヽ、左様か。道理で貴公には、その女を、この丸本へ遣はされて、その女に稼がせて、當時浪人の身分ゆゑ、女をかせに口過ぎなさるのか。道理こそ、その女を連れて逃げたる長吉も、折々爰へ尋ね參るを、知らぬ顔なさるゝは、當世と申すものか。成る程侍ひは、左様ありたきものでござるて。

ト けしかけて云ふを、長五郎きつとなつて

長五　イヤ／＼、丹平どの。してその、私し方を出奔仕つた、かゝり人の女が、この内に居りまする

かな、居りまするかな。
ト急いて云ふ。丹平思ひ入れあつて

丹平 これはしたり〳〵、其許爰の内へ、斯様にお出でなさるゝではないか。それで貴公は御存じござらぬか。イヤ〳〵、そりや僞りでござらう〳〵。

長五 イエ〳〵〳〵、今晩泊りましたるは、こりや少と別に、尋ねまする物がござるゆゑ。

丹平 みやこと申すは、貴公に隠るゝ駈落ちの女。客になつて參るのは、連れて逃げたる放駒長吉。

長五 ヤ。すりや兩人の者が
ト内を見てきつとなる。

丹平 それを誠に御存じないとは、成る程貴公は結構人。イヤ、丹平めも感心いたした。
ト此うち駕籠の内の長吉、聞き耳立てゝ思ひ入れ。

長五 毛頭存ぜぬその證據、今にも二人に逢ひますれば、刀の手前、首を並べてお目にかけよう。

丹平 こりやさうなうては叶ひますまい。
と思ひ入れ。この時奥にて

忠八 サア〳〵、みやこさん、丹平様を、ちやつと送つて上げなされませ。

みや　でも、持病が發つて
ト云ひ〳〵潜り戸より連れて出て來る。
忠八　モシ〳〵、旦那、みやこさんをお連れ申しましたよ。
みや　お前さん、もうお歸りなされまするかえ。
丹平　惡くするので、身共は歸るの。
ト思ひ入れにて云ふ。長五郎よく〳〵見定める。
長五　身共を僞り、幼な子までを捨て置いて、武士の一分捨てさせし、お照がその名は、今ではみやこか。
みや　エ。
ト悑りして
ヤ。長五郎さん。
長五　僞り者めが。
ト引付ける。
みや　アヽモシ、これには段々。
長五　云ひ譯聞かぬワ。

ト刀へ手をかける。忠八うろたへ

忠八　狼藉者だ。拔いたぞ〳〵。

ト長五郎が後へ廻り、組付く。丹平同じく支へる、みやこ、うろたへるを、駕籠の内より長吉飛んで出て、みやこを無理に駕籠の内へ突込み、用意の細引にて駕籠の垂れを結へる。忠八組付き居て、家内の手合、出逢へ〳〵〳〵。トわめくゆゑ、若い衆大勢棒を持ち、ばら〳〵と出て、長五郎を棒にて圍み、ばら〳〵とこの儘内へ押込み、白刃を捥ぎ取らんとする仕組み。長吉は駕籠を一人して擔ぎ行かうとする。丹平、駕籠へ寄つて

丹平　身共が屋敷へ連れて參れ〳〵。

ト駕籠を手傳はうとして居る。内より甚兵衞狼狽へて出て來り

甚兵　息子ぢやアないか。長吉は來ぬか〳〵。

ト呼び立てる。長吉、甚兵衞を見てちやつと囁く。

合點だ。跡棒へ廻れ。

丹平　コレサ、みやこは身共へ

ト寄るを甚兵衞引退け、丹平を上の方へ投げ退ける。丹平は仁右衞門が死骸の上へ轉けかゝる。この

隙に甚兵衛、長吉件の駕籠を擔ぎ、時の鐘になり、逸散に向うへ入る。丹引起上がるとて、仁右衛門が死骸を見つけ

ヤ、仁右衛門が切られて居るワ。ヤア、人殺しだ〳〵。

ト呼び立てる。これにて所々にて早拍子木。内より忠八若い衆大勢、弓張と棒を持ち出て來り

忠八　人殺しは何者でござります。

丹平　コリヤ〳〵、殺されたるは主の仁右衛門……アレ〳〵、あの櫺子の破れより、血が滴りてあるからは、二階で切つたと見えるわえ。

忠八　そんなら今のあの侍ひ、大勢寄つて棒づくめ。サア、來やれ〳〵。

ト又潜りの内へ大勢入る。

丹平　こゝの主が切られた樣子、倉岡どのへ、些とも早く。

ト逸散に向うへ走り入る。時の鐘、凄き合ひ方に變り、二階櫺子の破れより、長五郎、一軸を持ち、白刃を振つて窺ひ出る。此とたんに與五郎　潛り戸を蹴破り、一巻と密書を持つて出る。長五郎は樋戸竹より傳はり降りて來る。尤も暗き思ひ入れにて、互ひに思はず行當り、ちよつと立廻りあつて、仁右衛門が死骸をかせに使ひ、だんまり模樣宜しくあつて、兩人きつと見え。時の鐘のおくりにて、

幕

拍子

引付けると、双盤木魚の入りたる合ひ方、浪の音、つなぎにて引返す。

本舞臺、うしろ黑幕、上の方に大石塔、七文字の題目。下の方に石地藏堂、その前に妙貞、麻衣のつゆを取り、旅なりのそぎ尼にて、孫の捨松これも旅形、塔婆を立てゝ鐘打鳴らし、回向して居る。あたりに獄門臺、捨て札倒れし體。千ヶ寺葛籠下ろしある。すべて鈴ヶ森の道具よろしく、時の鐘、木魚の音にて幕明く。

ト妙貞よろしく回向の思ひ入れあつて、捨松を引寄せ

妙貞　これはマア、きつい蚊ではあるぞ。

捨松　祖母樣、眠たいわいの。

妙貞　オヽ、さうであらう〳〵。今に爰へ寢せまする。コレ〳〵、この卒塔婆は其方の父樣、三作が戒名。この仕置場へ情ない、獄門にかけてとの噂を聞いて、わざ〳〵尋ねて、孫と婆とが二人連れ、殊に品川とやらいふ所に、わがみの母樣お關どのがござるゆゑ、連れて行て逢はせませうが、三

め く ま 六　　め く ま ゑ



作が死んだ事を聞いたら、さぞや嘆かつしやらうと、思ひ過しが

捨松　眠たいわいなう。

妙貞　オヽ、寝かします〳〵。アヽコレ、どうぞ蚊を燻してやりたいが、火が無うて、アヽ、困つたものぢや。

ト あたりの枯れ枝を集め、蚊燻しの用意して居る。矢張り浪の音、捨て鐘。向うより丹平、小提灯を持つて、すた〳〵と出て、舞臺へ來り

丹平　さて〳〵、昨夜は飛んだ目に逢つた。それにしても丈左衛門どのは、市場の役所にござる由。逢うて何かの密談を……アヽコレ、早く廿六夜の月が上がればよいに、さて〳〵暗い事だ。

ト 行き過ぎるを、妙貞思ひ入れあつて

妙貞　モシ〳〵、お前様、どうぞ提灯の火を、お貸しなされて下さりませ。

丹平　ナニ、火を貸せ。女だな。アヽ、わりやアこの邊の、乞食か〳〵。

妙貞　イエ〳〵、私しはこのあたりの者ぢやござりませぬ。箱根の在から孫を連れ、參りました、旅の修行者でござります。

丹平　ソレ、見たか。修行者なら乞食だワ。身共に火を借り、何にする。

妙貞　ハイ、蚊を燻したうござりまする。
丹平　ハテ、樣々な事を云ふな。サア、早くつけろ〳〵。潮風で火が消えるワ。
妙貞　ハイ〳〵、有り難うござりまする。
ト思ひ入れあつて、提灯の火を用意の附木へ移す。この時丹平、葛籠に打つてある木札を見て
丹平　相州箱根地獄谷三作母妙貞、孫捨松。
ト讀み思ひ入れあつて
そんならこの頃獄門に、かゝつてあつた三作が
妙貞　エ。
ト思ひ入れ。
丹平　早くつけろ。風があたるワ。
ト時の鐘にてこの見得よろしく、道具廻ろ。
本舞臺　正面後黑幕、土手板矢來、すべて由留木橋のあたり。爰に甚兵衞、長吉、頰冠りにて、風呂敷包みを上へ付けし四つ手駕籠の垂れを下し、汗を拭いて居る。野伏り三人、火を焚いて居る。

禪のツトメにて道具とまる。

長吉 サア〳〵、大汗になつた。成る程、駕籠といふものは擔げねえもんだ。

甚兵 エヽ、埒の明かぬ。てまへも駕籠舁きの子ではないか。身に沁みて覺えろ。

長吉 エヽ、措かつしやいな。今にも一軸を揃へて、本地へ歸ればお侍ひ様だワ。駕籠を舁いて堪るものか。

甚兵 成な程、さうでもあらうかえ。この甚兵衛が子ながらも、養子の先は南方氏。殊に素性を糺したら、あの山崎の

長吉 エ。どうしたえ。

甚兵 サ、不思議に昨夜丸本で、逢つた悴と二人して

長吉 現在親に駕籠舁かせ、乘つた女はふみ玉に、どこを當途と廻つたが

甚兵 幸ひおれが內まで持込む。もう一息だ。やらかせ〳〵。

トこの時三人の野伏り立ちかゝつて

野一 モシ〳〵、提灯もつけねえで、爰へ舁込んだは、アヽ、聞えた、こりやア宿から玉を上げに來たのか。

野二　さうだ〳〵。好い仕事なら、おいらも手傳つて進ぜうが、その代りには只は通さぬよ。
野三　トヾは此方へあげ玉だ。二人の手合ひ、おいらも符牒に乘せてもらはう。
三人　半口乘つたよ〳〵。
甚兵　やかましいわえ。しら几帳面で頼まれた仕事だ。むだを云ふな。
長吉　親仁どの、待たつしやい。今道々も云ふ通り、わしを女敵々々と、追ひ駈けうせる長五郎。もし
　此方へうせうなら
甚兵　成る程、幸ひこいつ等に頼んで
三人　モシ〳〵、好い仕事があるかえ〳〵。
甚兵　仕事と云つて、高が斯うだヮ。

ト三人へ囁く事あつて

　どうだ、働くか。
野一　面白うごんす。そんなら年頃廿三四の侍ひを
長吉　成らう事なら、打ち殺してくれろ。
三人　呑み込みやした。

野二　併し、目印があるかえ。

長吉　その目印は着物の色が

野三　モシ、夜ぢやァ分りやせぬ。

長吉　そんなら、せめて紋なりと、コレ、覺えて置け、その來る奴は杏葉菊の紋所、暗くともそれを目當にして

甚兵　今にも六夜の月が上がれば

長吉　しつかり目當は

三人　杏葉菊だの。

甚兵　それが目印。

三人　呑み込みました。

甚兵　サア、もう一息だ。

長吉　こいつは弱るぞ。

ト舁かうとして

アヽソレ、上の包みが

甚兵 こりやァ何だ。
長吉 女が着替への浴衣一つサ。
甚兵 重荷に小づけだ。
ト禪のツトメになり、甚兵衞先棒、長吉跡肩を舁いて向うへ入る。
野一 サア〳〵、杏葉菊を忘れるな。
三人 杏葉菊だ〳〵。
ト火を焚き、蚊を燻して居る。矢張り件の鳴り物にて、東の口より長五郎、間違うたる杏葉牡丹の小袖を着て、窺ひ〳〵出て來り
長五 アヽコレ、折角逢うた長吉め、引ッ捕へんと思ふ内、大勢に支へられ、殘念ながら見失うたが
よもや遠くへは參るまい。慥かにこのあたりへ
ト行き過ぎるを、三人、そろ〳〵囁き合ひ、燃杭にて後より紋所を見る事よろしく
三人 杏葉菊だぞ〳〵。
野一 コレサ、よく見ろ〳〵。
ト目を着ける。長五郎惘りして

長五 うぬ等は野伏り。そんなら爰で追ひ落しか。うぬら一々

ト刀へ手を掛ける。三人「ワッ」と云つて花道の方へ逃げ行き、蹲まる。長五郎ためらひ見て

無益の隙入りせぬ内に、あの長吉めに逢ひたいものだが。

ト窺ひ〳〵下座へ入る。三人そつと起上がり

野一 今のは慥かに、菊だよ〳〵。

野二 馬鹿を云へ。今のは牡丹だ。

野三 それがしつかり暗がりで見えるものか。

野一 よし見えやうが、見えまいが、うつかりかゝると、やらかされるワ。

野二 それもさうかえ。

野三 併し、惜しい仕事を無駄にしたわえ。

ト三人こそり寄つて火を焚き居る。矢張り鳴り物にて、向うより與五郎走り來り

與五 思ひがけなき今宵の騷動。姉の行くへを尋ねんと、思うたばかりいたづらに。その上身共を狙ふ輩の、その節拾ひし何やら書き物。若し手がゝりに

ト件の密書と一卷を出し、思ひ入れ。

三人　來たぞや〳〵。

野一　よく見定めろ。

ト三人燃さしをかざし見る。

與五　此奴等は何をひろぐ。

三人　杏葉菊だワ。菊だぞ〳〵。

ト割り木を以て支度する。與五郎身構へして

與五　杏葉菊とは何の痴言。

三人　こなたの紋が杏葉菊ゆゑ。

與五　どうしたと。

ト袖の紋をよく〳〵見て

ヤ、こりやコレ、紋も違うてあるが、そんなら昨夜あの床で、着類が變つて

野一　ぶち殺せ。

二人　合點だ。

ト三人ぶつてかゝる。提灯消える。與五郎抜いて切り立てる。三人割り木でぶつてかゝろ立廻り。此

うち時の鐘。向うより甚兵衛、身拵へして窺ひ出て、與五郎が後へ廻り一刀浴びせる。與五郎、たぢたぢとなる。甚兵衛たゝみかけて切る。與五郎も三人の非人を切る。野伏り、手を負ひ倒れる。甚兵衛、與五郎が懐へ手を入れ、一軸と心得、系圖と守り袋を件の密書とも引出す。與五郎やらじと立寄る。甚兵衛は長五郎が持ちし一軸と心得、與五郎と立廻り、件の系圖を落す。この時、下座より長五郎窺ひ出てこの中へ交り、落ちてある系圖を拾ふ。甚兵衛は密書と守り袋を取つて探り見て

甚兵　濡髪ばらして一軸をと、思ふに相違の、慥かに守りと、こりや手紙か。

長五　何やら巻きし

ト探り見る。

甚兵　ヤ。

與五　おのれ盗賊。

ト追ひ駈けんとして、たぢたぢと廻り舞臺へ撞となり

エヽ、残念な。

甚長　危ない事の。

ト甚兵衛東の方、長五郎花道へ行き思ひ入れ。知らせにつき、兩人は向うへ入る。舞臺は與五郎乘つ

たる儘にて、どらの送り、道具廻る。

本舞臺、元の鈴ケ森の道具に戻る。爰に丹平、捨松を刺し殺し居る。妙貞深手を負ひ、丹平が足に執付き居る見得。一ツ鐘、蜩の聲、浪の音にて道具とまる。

妙貞　こりや情ない侍ひめ。孫を手に掛け、科もないわしまで殺すは、何の恨みで

丹平　恨みはうぬは知るまいが、身が兄三原有右衛門どのゝ仕置になつたのも、うぬが悴の三作め、直訴ひろいだばかりに、殊更その日に三作も、倉岡どのゝ手に掛り、首を曝したこの仕置場、敵は倉岡どのなりと、噂があると聞いたゆゑ、血筋のうぬ等に逢つたが幸ひ、云はゞ餓鬼でも老ぼれでも、助けて置かれぬ、くたばつてしまへ。

妙貞　そんならおのれも、丈左衛門身寄りの侍ひ。この儘死ぬとも老の念力、喰ひついてなと

ト側なる卒塔婆を取つて、よろめき／＼打つて行くを、丹平嫐り切りにさいなむ。この時向う揚幕にて大勢の聲にて、大念佛、双盤、木魚の音する。お關、前幕の形にて走り出て來り、直に舞臺へ來る。妙貞が唸く聲、丹平が白刃の光を見て大きに驚き

せき　ハイ、御免なされませ／＼。道通りの者でござります。御免なされませ。

丹平　アヽ〱、女の聲だな。われには構はぬ。早く通れ〳〵。
せき　ハイ〱、御免なされませ〱。
ト片脇へ寄つて怖々通る。妙貞聲を顫はせ
妙貞　申し、通りのお方へ。お助け下さりませ〱。旅の年寄りでござりまする。お助けなされて〱
ト唸き〱聲を立てる。
丹平　やかましいはえ。これと云ふも、三作めが因果の報い、丈左衛門どのゝ罰だわえ。
トこれを聞き、お關行き過ぎしが、ふつと聞き耳立てる思ひ入れあり。
せき　三作といひ、丈左衛門の罰なりと、心にかゝるその上に、唸くは慥かに女中の聲。
丹平　やかましい、早く行け。行かぬとうぬも
ト白刃を振り上げる。お關落ちてある卒塔婆を取つて少し立廻り。此うち矢張り揚幕にて、大念佛、双盤、木魚を打つ。立廻りの内、丹平、卒塔婆にて脾腹を突かれ、うんと倒れる。妙貞唸く。お關、妙貞が方へ駈寄り
せき　旅のお方か。コレ、心を慥かに。
妙貞　忝うござります。コレ、孫よ、捨松よ〱。

ト呼びたてゝ踠くを、お關星明りに透かし見て

せき　ヤア、母さんかいな〳〵。

ト大きに驚き、いろ〳〵介抱して、流れの水を掬ひ、口に含ませ

思ひがけない、どうして爰に……コレ、母さん、關ぢやはいな〳〵。三作どのゝ女房の、關ぢやはいの。

ト呼び生ける。妙貞心付いて

妙貞　お關どのか〳〵。

せき　アイ、關でござんす。心を慥かに。

妙貞　エヽ、口惜しい。悴が囘向と孫を連れ、爰に通夜して居る處へ、丈左衛門が身寄りの侍ひ、わしも可哀や捨松までも

せき　エヽ。

ト悑りするはずみに、捨松の上へ轉ける。妙貞うんと落入る。お關、捨松を探り見て

ヤ、そんならこれが我が子の捨松、コレ、母ぢやはいやい。どうぞ今一度

トいろ〳〵あつて

コレ、母さん、心を慥かに……ヤ、、、、死なしやんしたか。コレ、切めて様子を

ト押動かせど絶斷れし體。お關思ひ入れあつて

今云はしやんした悴が回向。孫を連れてと云つたばかり。若しや連れ添ふ三作どのが

ト件の卒塔婆を取つて戒名を讀まうとする。又ぞろ揚幕にて大念佛、双盤烈しく、向う正面霞の中より廿六夜の月段々と上がる。この月の光につれ、持つたる卒塔婆の文字段々と見える思ひ入れ。月は好き處まで上るを見定め、念佛双盤も共に打あげる。これより凄き合ひ方、蟲の音。お關、卒塔婆を見て

エヽ、そんなら夫は

ト此方へ倒るゝはずみに捨札の上へこけかゝり、この文字をきつと見て

相州箱根在百姓三作……ヤヽ、ヽ、ヽ、こりやお仕置に科なき人を

ト末の方を讀み

獄門にかけ置くものなり……エヽ、淺ましい夫の成行き。これと云ふのも倉岡が皆爲せる業。恨みはやがて、思ひ知らさん、丈左衛門。

ト卒塔婆を持つてきつとなる。丹平心付き

丹平　おのれ女め。

ト　かゝるを立廻つて、丹平が白刃を打落し、すぐにばつたり切り倒す。この時下座より順藏、野袴羽織、大小にて、出かゝつて窺ふ。お關、葛籠の札の文字を見て

せき　尼となつたる母さんの、その法名は妙貞尼。わしも今よりこの名を繼いで

ト　白刃を持つて髻を切り拂ふ。

順藏　山崎氏のお關どの。

せき　ヤ、さう仰しやるは

ト　振り返り

順藏　同じ家中の三宅順藏。

せき　樣子は篤と

順藏　承つた。道理至極夫の爲。

せき　尼となつても親夫、母も悴も倉岡ゆゑ。

ト　思ひ入れ。

順藏　丈左衞門は、來月中旬お國へ發足。

せき　當地に在る内

順藏　首尾よく敵を

せき　おのれ倉岡。

丹平　覺悟。

ト　かゝるを、卒塔婆にてあてる。丹平見事にかへる。お關乘りかゝつて

せき　有髪の尼が恨みの卒塔婆。

ト丹平が咽喉元を突く。

順藏　天晴れ手の内。

せき　モシ

ト木の頭。

お見遁がし下さりませう。

ト卒塔婆のとゞめ。これをキザミにて拍子

幕

松本町駕籠屋の場
品川敵討の場

大詰

役名――濡髪長五郎。放駒長吉。駕籠屋、甚兵衛。倉岡丈左衛門。山崎娘、お関。甚兵衛娘、お早。橋本娘、お照。倉岡下部、運八。大工、猪之松。小揚げ、佐渡七。判人、權九郎。駕籠舁庄六。呉服屋かつぎ、長八。

本舞臺、三間の間、平舞臺、眞中に仕切を入れ、上の方暖簾口、下の方駕籠棚、庇に窓付き誂への通りに飾り、上下の棲に二階を取付く。尤もこの二階にも好みあり。すべてこの道具、芝松本町駕籠屋甚兵衛の家のかゝり。綱八幡の祭りの鳴り物、屋體囃子にて幕明く。

ト爰に猪之松、大工の形、庄六、籠駕舁きの居候にて、兩人惡態を云ひながら立ちかゝつて居る。これを若黨運八、呉服屋の荷擔ぎ長八、留めて、わや／＼云うて居る見得。

運八　コレサ／＼、おとなしくもなえ。どうしたものだ。マア／＼、靜かにさつしやい／＼。

猪之　コレエヽ、この二才親仁め、おれを見損やアがつたか。大工仲間ぢやア腕こきの猪之松様たぞ。仕事の事でも、うぬ等に小みぞを云はれてつまるものか。このよい／＼め。

庄六　何だ、この野郎め。さう吐かす、うぬがよい〳〵だ。イケ埒の明かない。今日は月見なり、祭りだから、早く叩き上げてしまへと云つたが惡いか。

猪之　惡くなくつてどうするものか。此よい〳〵駕籠舁きめ。

庄六　何だ、この木片野郎め。

二人　うぬ、どうするか見やアがれ。

　ト兩人手斧と息杖を持つて打つてかゝるを

運八　コレサ〳〵、若いの、どうしたものだ。危ない〳〵。

長八　お前もマア、靜かにしなせえ〳〵。

二人　否だぞ〳〵。

　ト無暗に立騷ぐ。兩人留める。矢張り聖天の鳴り物にて、向うより長吉、月見の薄を買つて出て來り、花道にてこの體を見て、早足に內へ入り、この中へ分入つて

長吉　エヽ、この手合は何のざまだ。イケ騷々しい。何をふざけるのだ……マア、危ねえ、放さねえか。

　ト兩人の持ち物を引奪つて捨て

　コレ、てまへ達は、何でこんなに威張るのだよ。

猪之　コレ、兄貴、聞いてくんな。この庄六の野郎め、おれが仕事を、早いの遲いのと吐かすから

庄六　遲いから遲いと云つたのだ。僅か一日か半日で叩き上げられる仕事を、五日かゝると云ふのだワ。それに兄貴、聞かつしやい、おれが事を、よい／＼駕籠舁きと吐かすから、怒つてごたつきサ。

長吉　エヽ、箆坊め、舌も廻らねえ癖に、云ひ付口をする事はねえワ。コレ、てまへは札の辻や、赤羽根へ出て、よい駕籠／＼と呼んで居るから、よい／＼駕籠舁きと云はれるのだ。よし又さうでなくつても、よい／＼と餘まり退いた仲でもあるまいワ。

運八　イカサマ、さう見えるて。

庄六　こりやァ御念の入つた御挨拶サ。

長吉　又猪の坊も、癪にも障らうが、親仁がこの松本町へ引越して來たは、四五日跡の事。その時からかゝつた仕事だから、今日は月見なり、綱八幡の祭りだから、早くしまつてもらひたいと云つたのだらうから、なんぼよい／＼でも、こいつも一理屈ある。して見りやァ互ひに五分々々。こりやァ不請しておれに預けさつし。

猪之　兄貴がさう云はつしやれば、おれだといつて

庄六　不請しないでサ。

長吉　サ、それで、よし〱。一ツ〆めよう。
皆々　ヨイ〱〱〱。
　　ト手を打つ。
長吉　こりやアほんに仲人様、御苦勞でござり申した。
二人　アイ〱。
長吉　時に荒木の長八どの、誂へた祭りの揃ひは出來たかの。
長八　左樣でござります。御注文通り大島の袷と、女中物二品、共に持つて上がりました。
　　ト葛籠の中より紙包み一ッ出す。
長吉　ドレ、見せさつし……成る程、こりやァ素的に好く上がつたわえ。
庄吉　コレ〱、長八どの、おれが揃ひは持つて來ねえのか。
長八　お前のは慥か、紋所の上繪が上がりませぬとやら申しました。
庄六　エヽ、どうしてもおいらが物は跡棒へ廻すな。
運八　ヤ、その紋所と申せばこの間、袖ヶ崎で侍ひが殺されたといふ事。その切り手は杏葉牡丹の紋付の着物を着た男だと、その場に在り合せた非人どもの訴へで、その紋付を着た者を、嚴しいお尋

ねと申す事でござるて。

ト此うち長吉思ひ入れ。

庄六　成る程、さう云へば、大家さんから人殺しのお觸れが來て居るよ。

ト長吉に渡すを見て

長吉　ムウ、こりやァ今此お方の話しの通り、お觸れ書だ。そんならいよく

ト思ひ入れ。

皆々　心當りでもあるのかえ。

長吉　エヽ、何のつきに……時にお屋敷さん、お前、わざくその話しをしにお出でなされたのかえ。

運八　イヤノヽ、身共は、先達て甚兵衛にかけ合つて置いた、雇ひ人足の事について參つたが、甚兵衛は留守と見えるな。

長吉　ハイ、そこまで參りましたから、今に歸つて來ませう。斯うなされませ、彼方へいつて、親仁の歸るまで、一寢入りなされやし。

運八　それは何よりの御馳走。

猪之　そんならおれも、引窓の障子を直して、裏の板流しを張つてしまはう。

庄六　おらア貴様と連立つて、揃ひの催促をしにやアならねえ。

長八　そんなら御一緒に參りませう。

ト聖天になり、庄六、長八向うへ入る。猪之松、運八奥へ入る。長吉殘り、觸れ書を取つて

長吉　そんなら先度暗がりで、親仁がぐつすりやらかした、あの長五郎が

ト棚の駕籠の中にて物音する。長吉思ひ入れ。合ひ方になり、駕籠の側へ行き、小聲になり

コレ、みやこ、さぞ窮屈でもあらうが、今日は生憎と人出入りが多くて、呑氣をさせる間がなかつた。もうちつと辛抱してくれ……ウム〳〵、おれもさう思つて居るが、今は惡い……オヽ、よしよし。

ト駕籠に向つて囁き居る。向うにて

佐渡　コレ、判人の權九どのぢやないか。オヽイ〳〵。

トこの聲を聞き、思ひ入れあつて此方へ來る。聖天になり、向うより權九郎、判人の拵へ。跡より佐渡七、道中小揚げの形にて、赤子を抱き、權九を呼びながら出て來て、花道にて

權九　オヽ、小揚げの佐渡七どのか。おれを呼ぶは何ぞ用か。

佐渡　おらア貴樣の所へ行かうと思つたが、爰で逢つたは幸ひ。早速ながら、奉公人を一人賴みたい。

權九　そりやア隨分、おれが商賣だから世話もしようが、元方は誰で、玉はどうだ。

佐渡　そりやア玉は云ひ分無しの代物。マア〳〵、おれが姪のやうなもので、親判はおれがするが、有やうは、斯うだわナ。

ト囁く。

權九　ハヽア、さうか。なんぼ足を洗つて道中小揚げになつても、昔し取つた杵柄だな。

佐渡　その位な事は有うちサ。

權九　併し、そんな子のある女では、ちつと相談がむづかしいて。

佐渡　ハテ、この子はおれがどうともしてしまふから、早く胸倉とゆきたいな。

權九　ハテ、せはしない男だ。さういふ事なら

ト紙入れより金三兩出し

マア、胸倉の三兩も渡して置かう。

ト金を渡す。

佐渡　オイ、慥かに受取つた。

權九　そんなら斯うしよう。おらア向うの内へ、ちつと捜す物があつて行くから、貴樣はおれと一緒に

あよんで、門口にでも待つて居さつし。

佐渡 そんならさうしよう。コレ、必ず頼むよ。

權九 承知だよ。サア、行かう。

ト矢張り右の鳴り物にて門口へ來り、此うち長吉、机を出し、德利へ薄をさし、月見の支度して居る。權九郎、門口を明けて

御免なさい。駕籠屋の甚兵衞どん。

ト長吉を見て

ヤア、長吉どんが、好い處で逢つた。貴様を搜して居たよ。

長吉 オヽ、權九郎どん、何でおれを搜すのだ。

權九 コレ、何でどころぢやアねえ。こなたが親判をついた、品川の丸本のみやこを、あげ玉にした奴があるが、あの當人も大方……マア〳〵、何にしろ貴様の方から、譯を付けて貰はねばならない。

長吉 コレ〳〵、みやこがあげ玉になつたといふは、聞くも始めてだが、權九郎どの、譯を付けると云つて、どうするのだえ。

權九 どうと云つたら、マア、年割にしたら、殘金三兩も遣るがいゝのサ。

長吉　そりやァおれが貴樣に賴んで、親判をついた女だから、すべに依りやァ三兩が七兩でも出さうが元手はおれだよ。あげ玉にされたとばかりぢやァ筋道が分らねえ。これから貴樣と連立つて、先方も洗つて見た上で、三兩遣るか、又品に依りやァ、此方へ拾兩取るか、主人方も洗つてからの事にしようよ。

權九　コレサ〳〵、長吉どん、先刻からおれが、溫なしくかゝつて居ればいゝかと思つて、あんまりしらが切り過ぎるぜ。おれも判人の仲間ぢやァ、指きりの權九郎だ。蛇の道はじやとやら、何も彼も呑み込んで居るのだ。何奴があげ玉にして、どこへ埋めて置くといふ事は、大概勘を付けて來たのだよ。それともこなたが、三兩出す事は成らねえと云やァ、大家へ斷つて、この內を家搜しでもしにやァならねえワ。

長吉　どうしたと。

權九　何でも二階か裏の物置。まだそれよりも胡亂なは、あの駕籠棚が

ト立ちかゝる。長吉留めて

長吉　そりやァならねえよ。

權九　なぜならねえのだ。ならずば爰へ三兩出すか。

長吉　それだと云つて、小ッ耻かしいが

權九　コレ、長吉どの、こなたも放駒とまで異名を取つた男一疋、どうともして、三兩の工面をさつしやいな。

　トわめく。門口の赤子泣出す。佐渡七こなし。

佐渡　オヽ、たがよく〳〵。この餓鬼はよく泣きやアがる……エヽ、こりやアおれが手ぢやアいかない。エヽ、たがよく〳〵。

　ト長吉これを聞き付け

長吉　コレ、そこに赤子を抱いて居るのは、誰だ〳〵。

佐渡　ハイ、御免なされませ……わしやアその判人の權九郎どのゝ連れだが、ちつと譯があつて、女中の所から、この子を里にでも遣つてくれろと頼まれたが

　トまた泣出す。

オヽ、たがよく〳〵。誠にこの通りで困りやす……アヽ、又泣きやアがるか。エヽコレ、困つたものだ。いつその事、くれツきりでもいゝが、モシ、兄貴、お前この子を貰ふ氣は無しか。

長吉　こんたもいゝ事を云ふものだ。見る通り女きれは無し。そんなものを貰つてどうなるものか。

佐源　そりやアさうでもあらうが……エヽ、よく泣きやアがる。コレ、三兩附けようが、どうぞ貰つてくれ手があらば、お頼み申しやす。

ト長吉思ひ入れ。

長吉　ナニ、三兩附けると。ムウ。そんならカウと。

權九　コレサ、長吉どん、其方の三兩より、此方の三兩はどうするのだ。但し大家へ斷つて、家搜しをしようか。

長吉　エヽ、小うるさい。どうともするはえ……モシ、早速ながら、その子はおれが貰ひやせう。

佐渡　サ、貰つてさへ下されば、三兩附けやす。

長吉　そんなら貰はう。此方へ寄越さつし。

佐渡　それでわしも大きに苦を遁れやす。サ、叔父樣の子になるのだ。

ト長吉へ渡す。

長吉　そして、三兩の金は

佐渡　二三日の內に持つて來やせう。

長吉　馬鹿な事を云ふものだ。今爰で三兩いるから、何だか知れもしない赤子を、むざんこに貰ふのだ。

そんならいらないワ。

ト返さうとする。赤子泣出す。

佐渡　アヽコレ、仕方がない。そんならソレ、三兩……右から左へ胸倉の金を產み出すのだ。

ト三兩出す。

長吉　よし、三兩受取つた……サ、權九どん、仕方がない、親判の不請だ。みやこが方の三兩、サア、受取らつしやい。それで云ひ分はあるめいの。

ト三兩渡す。

權九　そりや云ひ分はあつても、これさへ取れば、そこは又大目サ……時に佐渡七どの、ちつとも早く其方の玉にかゝりたいの。

佐渡　おれも早く金にしたい。爰から直に伊皿子の、わしが內へ來さつせえ。

權九　そんならさうしよう。こりやァ兄貴、大きに慮外を云ひやした。

長吉　云つてもいゝが、コレ、權九郞どん、何か又金儲けだな。又おれが親判とゆかうか。

權九　イヤ、眞平御免だ。

佐渡　こりやァ兄さん、不思議な御緣で

長吉　飛んだものを押付けられた。

佐渡　よく似合つたね。ハヽヽヽ。

權九　サア、行かうよ。

ト屋體囃子になり。兩人向うへ入る。赤子泣く。

長吉　オヽ、たがよしよし……みやこが事を勘を付けられたばつかりに、うかうかと飛んだものを引受けた……エヽ、又よく吠える餓鬼だ。

ト云ひながら門口へ出て

何處の何奴が拵へた餓鬼だか知らねえが、壹分貳百附けて里に遣るも、國土の費へ、盗人に追錢だ……エヽ、忌々しい、泣きやァがるな……エヽ、小便をしやァがつた。薄汚ない。

ト花道の付際へ拋り出す。赤子頻りに泣く。

こいつはいつそ、日が暮れたなら、祭りのどさくさに、赤羽根橋からどんぶりと。イヤ、其うちもこんなに吠えちやァ……ムウ、よしよし、猿轡とくらはして置かう。

ト福牡丹を染めたる手拭にて、口をわるとて、過つて赤子の咽喉を緊める。これにて赤子落入る。この時赤子の上着の衣裳落ちて居る。

これで、うるさくなくつて、よしよし。

ト赤子を引立て見て

ヤア、こいつは口を割らうと思つたら、つい咽喉を緊たと見えて、往生したか。ハテ、脆いものだわえ。これも勿怪の幸ひだ。併し、此奴にも親はあるだらうに、おいらが手に渡るとは、よくよく死劫のついた餓鬼だ。

ト思ひ入れ。聖天になり、向うより甚兵衞、米かし桶へ蛤を入れて持つて出て來る。長吉、干してある飯櫃の中へ死骸を打込み、蓋をして内へ入る。此うち甚兵衞花道の付際にて赤子の衣裳を拾ひ

甚兵 こりやア何だ。小立の着物だな。大方どこのか乳母が落したのだらう。意氣地のない奴だ。

ト云ひながら内へ入る。

コレ、長吉、今夜は月見だから、歸りがけに蛤を一升買つて來た。マア、水へ漬けて置かう。

ト手桶の水を入れて置く。

長吉 ヤ、父さん、お前今歸つたか。

ト飯櫃をあちこちして居る。

甚兵 てめえ、何をそんなにまごつくのだ。コレ、長吉、今そこでこんな物を拾つた。

長吉　ヤ、そりやァたつた今

甚兵　誰ぞ子持でも來たか。

長吉　イヽエ、たつた今大家さんから、こんなお觸れを持つて來たよ。

　　ト紛らし、觸れ書を見せる。

甚兵　べら坊め、おれが物を書かない事は知つて居るぢやァないか……ムウ、そして、そりや如何いふお觸れだか、てまへ、讀んで聞かしてくれろ。

長吉　アイ……「當七月廿六日の夜袖ヶ崎に於て　侍體の者を殺し立退候者、年頃廿三四の男　卽ち杏葉牡丹の紋付の着類、色合の儀は夜中故確と相分り不申候由、其所に居合せ候野伏りども申上候、右體の男見當り次第早速搦取り差出すべき者也、月日、代官所。」

　　ト此うち甚兵衞思ひ入れあつて

甚兵　そんならアノ七月の、廿六夜に袖ヶ崎で

長吉　お前がぐつすり、やらかした

甚兵　コレ……併しそのお觸れには、殺した男は廿三四、杏葉牡丹の着物とあり。

長吉　殺された男も、侍ひ體とあるからは

甚兵　さうサ、マア、此方の肩は、抜けて居るといふものよ。

ト思ひ入れ。この時奥より運八出て來り

運八　イヤ、甚兵衞、歸つたか。

甚兵　あなたは倉岡樣の御家來運八樣、大分眠さうなお顏付でござりますね。

長吉　ほんに、お前の歸りを待つと云はしやつて、内で一寢入りやつて居さつしやりました。

甚兵　アヽ、そんならあなたは、いつぞや倉岡樣から私しへお頼みの、人足の事で、お出でなされましたか。

運八　いかにも左樣でござる。いよ／＼明日殿樣御入部に付、人足萬端、先達て懸合ひの通り頼むと、主人丈左衞門の口上でござるて。

甚兵　畏りました。お約束通り明日夜明方には、人足をお屋敷へ入れまするでござりませうと、憚りながら、左樣仰しやつて下さりませ。

運八　承知いたした。然らばお暇いたさう。

ト門口へ出る。

甚兵　ようお出でなされました。

ト屋體囃子になり、運八早足に向うへ入る。甚兵衞思ひ入れあつて

アヽコレ、大分腹が減つた。飯を一膳かつ込まうか。長吉、その飯櫃とおれの膳を出してくれろ

長吉　コレ〳〵、父さん、お前飛んだ事を云ふ。飯を食はれて堪るものか。

ト飯櫃を押へて居る。

甚兵　べらぼうめ、飯を食はねえ人間があるものか。なぜ又飯を食つちやァ悪いのだ。

長吉　悪い〳〵。お前は無筆だから分るまいが、コレ、このお觸れ書の終ひに、年寄りに餘まり飯を食はせるなと書いてあるから。

甚兵　ナニ、年寄りに飯を食はるせなといふお觸れだと。エヽ、そんなお觸れを守つて居ると、干物になるワ。

長吉　ナニ、さうばかりでもない。夕飯には未だ早し、いま半の間だ。そして今夜は月見の團子、祭りの强飯で、食傷でもしちやァ悪いから、いま飯を食ふ事はよしにしなさいよ。

ト飯櫃を苦勞にする。

甚兵　それもさうかい。コレ、てまへ、なぜそんなに飯櫃を厄介にするのだ。

長吉　夜食までに悪くはなるまいかと思つてよ。

甚兵　そんなら、その引窓の下の棚が日蔭だ、そこへ上げて置くがいゝ。
長吉　さうでもして置かう。
　　ト飯櫃を棚へ上げ
　コレ、父さん、必ずお前、飯を食つちやァ惡いよ。
甚兵　イヤ、長生をすれば、飛んだお觸れを聞くものだ。
　　トこの時奥より猪之松、引窓の障子を持つて出て來り
猪之　オイ、父さん、もう荒方雜作は叩き上げたが、庇を直したから、あの儘置いたら、屋根が洩りやせう。どうか降りさうな風だ。その引窓の障子も、早く切貼りにでもして置くがいゝよ。
甚兵　アヽ、その障子は、幸ひ腰貼りの反古を買つて置いたから、おれが今貼つて置かうが、庇は彼ればかりの事に、屋根屋を頼むでもない。コレ、長吉、てまへ、そこらに屋根板があつた筈だ。ちよつと叩きつけて置くがよからう。
長吉　アノ、おれに屋根を葺かせるのか。そいつはあやまるな。カウ猪之松、てまへ、ちよつと打付けて下つし。
猪之　なにサ、五六枚叩き付けりやァいゝわな。裏の道具箱に、釘も鐵槌もあるから、貸してやらう。

長吉　いまいましい、どうしてもおれに押付けるの。

猪之　おらアこれから揃ひでも着て、祭りへ行つて、思ひ入れ威張つてやらう。

甚兵　そんなら明日早く賴むよ。

猪之　サア、祭りに行くぞ行くぞ。

ト屋體囃子になり、向うへ駈けて入る。長吉奥へ入る。

甚兵　若い手合といふ者は、祭りで狂人の樣だ。

ト有合ふ紙色みを見付け

こりやア何だ。內の野郞が祭りの揃ひか。今一つは女物だな。そんならこりやア

ト駕籠へ思ひ入れして

なんでも面白い事のあるのは、若い內の事だ……ドリヤ、障子を貼つて置かうか。

ト合ひ方になり、そこらにある反古を取つて、盆の上に融いてある糊と刷毛を取つて、反古を出して見る。此うちに一軸の折紙、前幕の有右衞門が密書を出し、見物に見せて、無筆ゆゑ、何心なく貼つて居る。好き時分より屋體囃子になり、向うより古鐵買權七、荷を擔ぎ出て來り、門口へ來り。

權七　モシ、親方、何も御用はござりませぬか。

甚兵　アヽ、古鐵か。何も賣る物は無かつたが……オット有る〳〵。先刻拾つた小立の着物、不用な物だ……コレ、これを賣らう、値を好く買つて下さい。

ト小立を出す。權七取つて、よく〳〵見て

權七　アヽ、一つ身だね。親方、ぎり〳〵の所が、四百五十に買ひやせう。

甚兵　だりがれんか。コレ、めのじに買はつし。

權七　五百かえ。ちつと高いが、お貰ひ申しませう。

ト籠より錢を出して

モシ、親方、爰に錢が二百七十二文しかござりませぬ。晩に殘りを持つて來るまで、今朝山崎町で買つて來た、鬢盥、はんぞう、鏡臺、鏡、これを抵當に取つて置いて下さりませ。

ト右の品を出す。

甚兵　そんなに幾色も置かずといゝよ。

權七　ナニ、晩にどうで白金へ持つて行つて拂ひやすから、實はお預け申して置きたうございます。どうぞお邪魔ながら、そこらへ置いて下さりませ。

甚兵　そんならそこらへ置いて行かつし。

ト權七よき所へ置く。

權七　左樣なら、殘りを晩に持つて參りませう。

甚兵　よし〳〵。

權七　古鐵買はう〳〵。

ト權七荷を擔ぎ、向うへ入る。甚兵衞此うち障子を引窓へかけて居る。向うよりお早佐渡七、權九郎連れて出て來り

佐渡　コレ、お早、おれが物を云ふと、聞いた樣な聲と云ふが、そりやア世間に、似たものはいくらもあるはな。マア、そんな事より、てめえが尋ねるその長五郎は、永代の橋向うに居ると、ぬしが知らせてくれたから、それで其處へ連れて行くのよ。

はや　そりやモウ、お前といひ彼方といひ、御親切のお世話、有り難うはござりまするが、モシ、あの幼な子は、いよ〳〵乳の澤山な所へ、預けて下さんしたかえ。

佐渡　イヤモウ、澤山とも〳〵。そして又里親が、豪勢に子煩惱だから仕合せよ。

はや　どうぞその里親にも、逢ひたうござりますわいな。

佐渡　サ、逢ひたくば、ツイ向うの

はや　エ。

佐渡　逢ひたくば逢はせませうが、それは今日でなくつてもよいぢやァないか。

權九　さうサ。何でもお前は、早くあの長五郎に逢ふがいゝぢやァねえか。コレ、佐渡七どの、永代向うまでは餘程の道だ。幸ひ爰の内から、駕籠を賴んでやらうから、姐さん、駕籠にしなさい。

はや　それは有り難うござります。

權九　そんならそこらに待つて居なさい。

ト兩人は花道の付際に居り、權九郎門口を覗き

コレ、甚兵衞どの、內にか。深川まで一挺賴みたい。

甚兵　お前は判人の權九郎さん、また奉公人か。

權九　イヽエ。

ト表へ心遣ひして、小聲になつて

奉公人よ、そりやァ素的に掘出し物だ。仲町へでも遣らうものなら、羽が生えて飛ぶといふ代物よ。

甚兵　そいつは又お前金儲けだな。して、その奉公人は、連れて來なさつたか。

権九　コレ、表に居るが、當人にはだんまりだよ。

甚兵　承知サ。

　ト甚兵衛何心なく門口を覗き、お早を見て

ヤ、わりや娘のお早か。

はや　お前は父さん、マア、思ひがけない

　ト皆々惘り思ひ入れ。

甚兵　コレ、お早、うぬァそんなら男を拵へて、年寄つた親を捨てゝ逃げたのだな。ほんに今の今まで
おのれが行くへを探して居たわえ。

はや　いつぞや境木の地藏堂にて、ふとした事にてお前に別れ、云ふに云はれぬ何や彼で、父さん、お
前に御苦勞かけました。堪忍して下さんせ。

甚兵　マア、何にしろ、わりやァおれが娘だ。此方へ入れ。

　トお早を内へ入れ

親子の話しは跡へ廻して、コレ、二人ながら、ちよつとお目にかゝりたい。此方へ入らつしやい

　ト此うち兩人思ひ入れあつて、怖々内へ入る。

コレ、權九郎どの、貴樣はマアおれが娘を、誰に屆けて女郎に賣りに行くのだ。イヤサ、なんで金にするよ。こんたは女の誘拐し、この分では濟まさねえよ。

ト權九郎、ぶる〳〵して

權九 モシ〳〵、甚兵衞どの、わしはこなさんの娘とも何とも知らず、コレ〳〵、この小揚げの佐渡七が、この女はおれが姪だから親判をつく、氣遣ひの無い奉公人だと云つて、則ち賣り主はこの男だよ。おらア知らねえよ〳〵。

トお早思ひ入れあつて

はや そんならいつぞや、アノ六郷とやらで、わたしが尋ねる人に、逢はせてやらうと云はしやんすゆゑ、マア親切に賴もしい、お方ぢやと思うて居たに、恐ろしい、わたしを勸め奉公にやる心でかいな。佐渡七さん、御親切に忝うござんす。

トつんと思ひ入れ。佐渡七當惑のこなしあり、甚兵衞もこなしあつて

甚兵 エヽ、打ちやつて置け。おれが仕樣があるワ。佐渡七とやら、こんたはどこの牛の骨か、馬の骨か知らねえが、何の緣でおれが娘を賣るのだよ。うぬは正札付きの娘の誘拐し。これからおれが代官所へそびいて行つて、首でも足でも捩いで遣らなけりやア腹が癒ない。サア、おれと一緒に

歩びやァがれ。

ト引立てにかゝる。佐渡七、わな〳〵して居て

佐渡　アヽ、コレ〳〵頭、貴様にさう云はれては、誠に一言もない。お前の娘といふ事は知らず、ふとした慾で目論んだ仕事、どうぞ、不請して下さい〳〵。

甚兵　コレエヽ、うぬらにいゝやうにされて居る、甚兵衛だと思やァがるか。エヽ、おしの重たい禿頭め。サア、一緒に來やァがれ。

ト立ちかゝる。

佐渡　アヽ、御免なさい〳〵。コレ、權九郎どん、見て居る事はねえ。詫び言を頼む〳〵。

權九　おれだといつて、貴様に一杯かたられたもの、どう詫び言がなるものか。併し、甚兵衛どの、お前の娘に別條はなし、云はゞこんな事があつたから、娘御も内へ歸つたといふものだ。どうぞ不請してやつて下さいな。

はや　それいな。殊に父さん、今宵はわたしが母さんの、祥月の逮夜なり、あれ程までに詫びるなら、堪忍してやりなさんせいな。

甚兵　イカサマ、われが云ふ通り、心ざしの逮夜だから、料簡してやるぞ。きり〳〵出て歸りやァがれ。

ト佐渡七を門口に突飛ばす。はう〳〵起上がつて

佐渡　アイタヽヽ。併し好い逮夜で此方の仕合せ。頭、父命日に參じやせう。

ト云ひ捨て駈け出す。權九郎慌てゝ跡を追駈け、花道にて佐渡七を捕まへ

權九　コレ、佐渡七、おれにまで、てんじやうを見せたな。それは仕方がないが、胸倉の三兩は、どうしてくれる。

佐渡　どうと云つて、斯ういふはめだ、仕方がない。

ト帶を解き、裸になり

男は裸百貫の抵當に、これでも取つて下さい。

權九　そんなら三兩の抵當に、この下馬を寄越して、裸で道中小揚げの佐渡七か。飛んだ乞食の獨り相撲だ。

佐渡　東西〳〵。

トこれより佐渡七、思ひ付の名乘を上げて、乞食獨り相撲のこなしよろしく、權九郎、佐渡七の單物を持ち、花ぶれを云ひながら兩人向うへ入る。

甚兵　エヽ、業曝しめら。

ト合ひ方になり、お早思ひ入れあつて

はや　思ひがけなう父さんに、めぐり逢うたは嬉しいが、わたしが預かつたあの幼な子、あの佐渡七がどこへ里に遣つた事ぢやゝら、マア、心がゝりな事ではあるぞ。

甚兵　コレ、お早、久し振りで逢つたから、何から云はうか。去年てまへを連れて、箱根から出かけて來たも、品川の仁右衛門といふ親仁が、妾を尋ねるといふ事を聞いて、そこへてまへを遣らうと、戸塚まで來て、境木の地藏堂ではぐれた儘、今日が日まで影を隱したは、わりやァ云ひ交した男でもあつて、妾奉公が否だに依つて、親の云ふ事をもどいて、駈落ちしたのか。

はや　いかにもお前が云はしやんす通り、不思議な縁でいたづらな、ふとした男と云ひ交し、逢ふは逢うても暗き夜の、お顏もろく／＼所さへ、いづくの誰とも分らねど、お前が妾に遣ると云はしやんすが、しみ／″＼否さにその方と、駈落ちしようと思うて居る内、思ひがけなきその夜の騷動、怖さは怖し暗まぎれ、そのお方ぞと思うて連れられ、立退きし男、跡々にて詳しく様子を聞くに、わたしが云ひ交したお方とは違うた話し。恥かしいやら、面目ないやら、どうせう事も泣いてばつかり。これといふも、親の許さぬ不孝の罰。モシ、父さん、堪忍して下さんせ。

甚兵　そりやモウ、憎い奴と云つた所が返らぬ事。して、それからその云ひ交した男に、わりや逢つた

か。

はや　サ、それからぢつと辛抱して、云ひ交したるそのお方に逢ふまでは、男は持たぬと情だつて、月日を送る其うちも、女子の世渡り知らぬ身の、難儀を見兼ねて、連れて退いて下さんしたそのお方が、よう〳〵とわたしを、町家の夫婦暮らしの内へ、雇ひに遣つて下さんしてな。その内に子守り奉公して居る内、聞きなさんせ、わたしを世話して下さんしたその男が、奉公先のお内儀さんを連れて、駈落ちしたと思はんせ。それゆゑ御亭主様の云はしやんすには、其方を世話した男は、てまへの夫であらうと疑ひかゝり、わたしを見知り人にして、その男を尋ぬるとて、御主人に連れられ、殊にその家の幼な子を預かり、世話になつたるお方を尋ぬる内、又もやフトした事にて、その御主人にもはぐれ、云ふに云はれぬ、これまで苦勞を致しましたわいな。

甚兵　それもてまへが心から。して、その子を預かつて一緒に歩いた、主人の名は何と云つて、何を渡世にする人だ。

はや　今は町家の微かな暮し、以前はたしか南與兵衞樣といふお侍ひの御子息、長五郎樣といふお方の幼な子を預り、所々方々連れられまする其うちも、互ひに枕は交さねど、世間の手前は女夫のふり

甚兵　ヤ、その南與兵衞の忰長五郎といふは、菊池家の侍ひだが、そしててまへ、その長五郎といふ人

に、いつ頃別れた。
はや　サ、七月廿四日の頃、六鄕とやらの渡し場にて
甚兵　ムウ、そんならいよ〳〵廿六夜に、袖ケ崎にて人知れず
はや　エ。
甚兵　コレ、お早、おらァてめえに先刻から、聞かうと思つて居たが、てめえの顏の疵は、何で付けたのだ。
はや　これにも段々申し譯の有る事。かいつまんで申さうなら、主人の爲に、是非なう疵を付けましたいな。
甚兵　成る程、男でも女でも、この世へ生れて出て、苦勞をしない者はないものだ。コレ、今日逮夜の佛、てまへのお袋は、橋本治部右衞門といふ侍ひの家に、乳母奉公して居たが、橋本の家も退轉したといふ事。てめえ、その時の事を、ちつとは覺えて居るか。
はや　アイ、幼い時の事なり、お顏はろく〳〵覺えねど、母さんが乳を上げたお子の名は、お照樣と申しました。云はゞわたしは乳兄弟、どこにどうして居やしやんすやら。
甚兵　水の流れと人の身の、行末は知れないものよ。一體てまへを産んだ母は、後添ひの女よ。先妻の

はや　腹にも、男の餓鬼が一人あつたが、末の榮華と、主人の子と入替へ子。

甚兵　そんならわたしには、腹替りの兄さんがござんしたかえ。

はや　有りは有るが、これも今では浪人して、どこの何處に……ア、悔んで歸らぬ事ながら、惡の報いの二昔し。

甚兵　エ。

はや　コレ、明日は嚊アが祥月命日、その逮夜の今日といふ今日。

甚兵　久し振りにて父さんに、お目にかゝるも母さんの、お引合せでござんせう。

はや　それよ。おぬしも久し振りで、母の位牌に逢ふであらう。奥の佛間で香花を取つて

甚兵　回向をしやれよ。

はや　アイ。

ト兩人こなし。唄になり、お早思ひ入れあつて奥へ入る。甚兵衞殘る。聖天になり、向うより長五郎、前幕の形、一本差し、權七が襟髮を掴み、片手に小立の小袖を持ち引立て出て來り、花道にて

權七　アヽ、モシ〳〵、何も存じませぬ。御免なされませ〳〵。

長五　われには詮議があるぞ。サ、眞直に云へサ。この小立は、どこで買つて來た。
權七　アレ〳〵、あの駕籠屋の內で買ひました。
長五　懸り合ひだ。一緒に來い。
權七　これは迷惑な。
　　ト兩人門口へ來て
長五　サア、僞りなくば持つて入れ。
　　ト小立を渡す。
權七　アイ〳〵、ナニ嘘を云ひませう。
　　ト內へ入る。
　モシ〳〵、こりやア今お前の內から、買つて行きましたぞよ。
甚兵　さうサ。それがどうした。
權七　モシ〳〵、お聞きなさる通り、この小立は、爰の內から出ましたよ。
長五　モシ、御亭主、いよ〳〵左樣かな。
甚兵　アイ、違ひござりませぬ。

ト合點の行かぬ思ひ入れ。

權七　ヤレ〳〵、そんならわしは肩が拔けました。僅かな物で

ト跡をも見ず向うへ駈けて入る。長五郎思ひ入れあつて

長五　すりや、こなたがこの家の御亭主か。

甚兵　左樣でござります、駕籠屋の甚兵衞とは、わしでござりまするが、お前樣は何の御用で

長五　わざ〳〵參つた私しは、長五郎といふ者でござりまするが。

甚兵　エヽ、長五郎樣といふ。

ト　お早が話しの男、又は殺せし男と目を付ける思ひ入れ。

長五　イヤ、別儀でもござらぬ。話せば長い事ながら、かいつまんで申さうは、乳呑み子を一人連れまして、女に抱かせ、尋ねる者のござるゆゑ、所々方々と流浪の中、六鄕邊にてその女にはぐれました。その女の行くへをと、今日までも尋ねるこの邊。その幼な子が着て居つたこの小袖、古鐵買が持參ゆゑ、出所聞けばこの內と、申したゆゑに尋ねに參つた。幼な子御存じあるならば、定めて預けし女の行くへも知るゝ道理。それで參つた、甚兵衞とやら、御存じならば敎へて下さい。

ト甚兵衞思ひ入れあつて

甚兵　尤ものお尋ねだが、わしが内にもたつた今、拾つた小立と持つて來た、慥かな者がござるゆゑ、うか／＼とその小立、籠襤褸買に賣りましたが、それがどうしました。

長五　小兒を預けし女の詮議と

甚兵　イヽエ、そこまでは存じませぬが、それを詮議と仰しやれば、此方にも又聞きたいものが

ト長五郎が紋所へ、よく／＼目を付け、今讀ませしお觸れ書を取出し

コレ、お若いの、お恥かしいがわしは無筆だ、このお觸れを讀んで見て下さい。

長五　すりやアノこれが

ト披き、口の内にて讀み

この觸れ書は由留木橋にて、廿三四の男の横死、討つたる者は、これも年頃その通り、杏葉牡丹の紋と、野伏りどもが確かの訴へ……すりや、その相手の紋は牡丹の

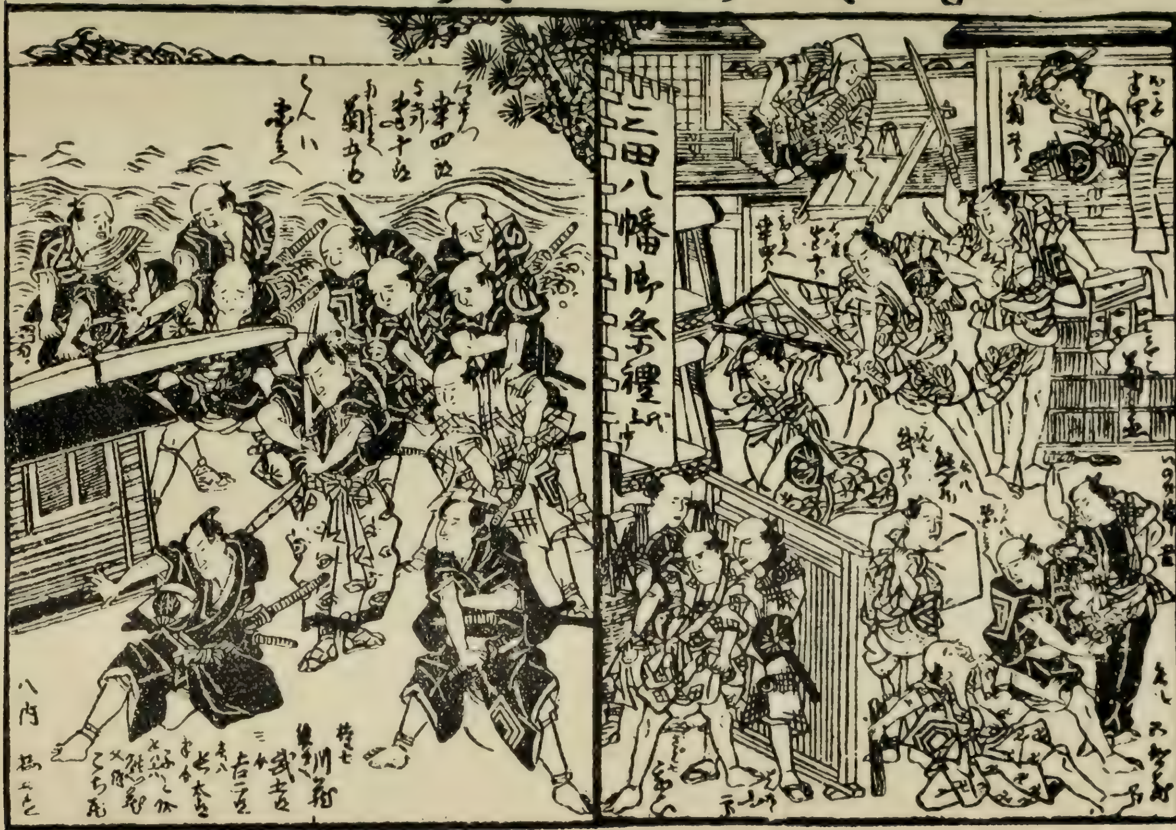
ト間違ひし手前の紋を見て

一宿泊りに替りし着類。

甚兵　杏葉牡丹の紋所、それを着て居るお若いの、廿三四の年の頃、割符も丁度

ト長五郎へ目を付け

七まくめ　大切



逃げたというて天の網、このお觸れでは
長五　ヤ。
甚兵　一服上がりませ。
ト莨盆を差付ける。長五郎思ひ入れ。合ひ方。奥よりお早、茶を汲んで來る。
はや　お客さうなに、お茶も上げいで。ハイ、召上がりませ。
長五　これは構はつしやるな。
ト茶を取らうとして顔見合せ
はや　ヤ、お前は
長五　どうして爰に
ト悔りするはずみ、お早茶碗を取落し
はや　よう尋ねてお出でなされました。お前にはぐれて、わたしや大抵、お尋ね申した事ぢやござりませぬに、ようお出でなされて下さりました。
長五　わしもそれからこなたの行くへ、所々方々と尋ね歩き、手がゝりあつて只今爰へ……こなたが爰に居るゆゑに、小立の小袖も……アヽ、それで分つた。

甚兵　ア丶コレ、お若いの、分つたと云はつしやるが、この女は、この小立を着た、小さいのは連れませぬよ。
長五　エ、アノ、乳呑み子は
　ト　お早小立を見付け
はや　ヤ、こりやあの子の小立が。
長五　コレ、こなたに預けた、彼の子はどうした。
はや　先程までも抱きかゝへ、わたしを世話して彼の子にも、乳も呑まさうと眞實に、云うたお人へ渡した儘、そのお方も彼の子を連れて
　ト　思ひ入れ。長五郎せいて
長五　コレ〳〵、あの幼な子は、おれが子なれば失うても、そりや濟まさぬとも云ふまいが、知つての通り譯ある小兒。今にも二人に逢うたりとも、存分云ふには肝心の、捨てゝ置いたを拾ひ取り、養育したも甲斐がない。して、預けたる男は何者。
はや　川崎宿の小揚げとやら
長五　それが分れば、その者を尋ね參つて

ト門口へ出ようとする。甚兵衛、ずつと立つて門口をしやんと締め

甚兵 イヽヤ、遣られぬ。

長五 尋ねに行くを、なんで遣らぬと。

甚兵 聟に取りたい。

長五 ヤ。

甚兵 こなたはこれなるお早が素性を、知つてござるか。

長五 只今參つて、未だ樣子も

はやお存じないも御尤も。かねぐ\お話し申したる、去年戸塚の境木で、はぐれたわたしが實の父さん。

長五 すりや、このお人が

甚兵 このお早とはわしが娘。まだ總領もござれども、樣子あつての他家への養子。妹娘のこの女。今日思はずも親の內、來たのが幸ひこの家の跡取り。娘が話しで詳しい樣子、聞けばいろ／＼込入つた譯ゆゑ、二人連れ立つて步けど、夫婦でないといふ、枕交さぬこなたでも、今まで恩を受けたるお早、娘が心に染まずとも、舅のわしがこなたに惚れた。親が戀聟、それといふのも道樂な、

息子の爲には好い片腕。片棒舁く氣でこなさんも、肩釣合はぬ身ながらも、お早が兄の棒組に、不請であらうが駕籠舁きの、聟になつてはくれまいか。

長五　折角主の頼みでも、數へて見れば二年越し、一所に居ても日の内は、女夫と見せて肝心の、夜は互ひの他人向。それを主が聞きながら、聟に欲しいと云はれても、外に枕を交した女、今にも廻り逢ふ時は、添はねば成らぬ女房がござる。さすればどうも、お早どのは

はや　わたしも同じ男の行くへ、尋ね逢ひなばその方と、女夫の結びを願ふ身で、外に男を持つ時は、操を捨てしいたづら女。親の詞もこればかりは

甚兵　ならぬとあれば娘は格別、緣が無ければ若い人、こなたはこの家に居られまい。併し表へ一寸でも、出たならお觸れの人殺し、杏葉牡丹の紋付では

はや　すりや、人殺しのお觸れがあつて

甚兵　こなたが見たる、コレこの觸れ狀

ト投げて遣る。お早取つて、よく／＼見て

はや　ほんに年頃似寄りのお前、殊には思はぬ定紋の、變つてあるも、何やら氣遣ひ

ト思ひ入れ。このあたりより小屋根へ長吉、筵と屋根板を持ち出て來り、引窓のあたりへ筵を敷き、

金槌を出して屋根にかゝる。

甚兵　それだに依つて、入り聟になるのがよからう。

長五　成る程、主の心遣ひ、さは存ずれどソレその小立、こなたが失ふあの子の行くへ。

甚兵　それも知れるは今の間に、小の虫より大の虫、そこを思つて勸める入り聟。

長五　娘御お早の得心ござらば

はや　それも常から云ふ通り、道を守つて一つ寢を、せぬ心なら詞を立てゝ

甚兵　おぬしが親の云ふ通り、得心すればこの人も、一つ寢をせぬきぼにして

長五　役に立たずと駕籠屋へ聟入り。

はや　夜のお間には合はねど花嫁。

甚兵　得心すれば幸ひ爰に

ト合ひ方になり、竹花生に入れし萩薄、小桶に洗ひかけし蛤、三寶の神酒を取出し、佛壇より位牌を持つて來り、三寶の上へ置いて茶碗を添へて

お早が爲の實の母、生きて居たなら悅ばう。恰度祥月逮夜といひ、祝言するには大吉日、月見の薄は島臺代り、砂をはませる蛤は、なくて叶はぬその夜の吸ひ物、冷酒の神酒をいたゞきて、

夫婦の固め三々九度。

はや　そんならわたしや母さんの、位牌の前で添ひ寢せぬ、その云ひ譯で持つ男。

長五　顏は知らねど契約の、女に立つる水臭い、聟と承知で杯を、女の方から

はや　わたしが飮んで

　　ト茶碗を取上げる。

甚兵　釋迦の開帳ならねども、三國一ぢや、聟取りすまいた。しやん〳〵のしやん。

　　ト甚兵衞手を打つ。長吉は引窓より覗き居る。棚の四つ手駕籠の内より、お照垂れを上げて窺ふ。この影、蛤を漬けたる桶の水へ映る。甚兵衞が手を打ち納りに、長吉、持つたる鐵槌を引窓より落す。長五郎取つて

長五　上から危ない

はや　女中の影が

　　ト桶の中を覗く。

長五　映るは慥か、

　　ト桶を見ようとする。

甚兵　砂をはませて

ト手早く蛤を摺り鉢へ明ける。これにてお照垂れを卸す。

長吉　慥かに濡髪。

長五　覗くは正しく

ト行かうとする。お早留めんとする。立廻りにて柱に結びし引窓の綱を思はず解いて留めんとする。これにて窓は、ぐはら／＼と締り、内は暗くなる樣子。この途端に駕籠の垂れ障り、柱に懸けし札守りの箱の内より一軸落ちる。

はや　こりやコレ慥かに

ト目を付ける。

甚兵　暗くて樣子が

ト綱を取つて引く。引窓明く。このはずみに長吉、屋根より辷り落ちし體にて、件の懸け物の上へどつさり坐る。

長五　さてこそ長吉

トお早を搔退けかゝるを

長吉　南無三。

ト卸してある四つ手駕籠の内へ駈けこむ。甚兵衞垂れを下す。長五郎行きにかゝるを、お早留める。

右の一軸落ちてある。

長五　慥かに尋ぬる

ト取りにかゝるを、お照駕籠の内より飛び下り、一軸の上へしやんと坐る。長五郎見て

假の女房か。

長五　ようも騙して

てる　僞り者とも

ト刀へ手を掛ける。長吉飛んで出て、お照を引廻し、落ちたる一軸を懐中して

長吉　間男同然。

長五　云はゞ女敵。

兩人　うぬ。

ト長吉は有合ふ出刃、長五郎は一腰へ手を掛け立ちかゝるを、お早、お照立廻つて二人を留める。甚兵衞この中へ入り、又ぞろ引窓をしやんと引く。窓締まり暗くなりし體、四人は左右へ別れて見得、

爰にて誂への合ひ方に變る。

長五　我れゐ僞るあのお照、小兒を捨てゝ長吉と、駈落ちしたるいたづら者。また長吉も侍ひの、道を忘れて濡髪が、心底づくにて頼まれし、枕交さぬ女房を、連れて逃げれば女敵同然。それを庇ふは舅どの、所存あつてか、サ、それ聞かう。

甚兵　わしが留めたは譯もなく、コレこの位牌の一周忌、しかも取分け逮夜ゆゑ、現在俄の花聟さん。他家で育てど、この長吉、わしが惣領。佛へ對して討たれまい。そこで親仁が留めたのサ。

はや　そんならいつぞやお世話になつて、長五郎さんのお宿から、行くへならしやんした、今日まで尋ねる長吉さんは、わたしが兄さん。よう／＼もお世話になつた内、主のあじやらをいろ／＼と、云ひ譯したが今の仕合せ。

長五　イヽヤ一旦亭主ぞと、世間へ云うてくれとある、それを頼みしこのお照、この長吉との駈落ちは

てる　わたしも尋ぬるそのお方に、廻り逢ふまで世間の聞え。夫となつて下さんせ、若しも尋ぬるそのお方に、廻り逢うたらその時は、それを亭主と打明けに、云うて頼みし長五郎さん、長吉どのゝ邪まから、口説くを聞かねど今更に、わたしが頼みしお前へどうも

長五　家出したので云ひ譯あるまい。内證事の譯は格別、世間の人は女房と、思うて居れば間男に、女

を盗まれ乳呑子まで、捨てゝ行きしと世上の嘲り。面が立たねば是非なくも、女敵なりと

長吉　討てば此方も女敵だ。女の頼み是非なくも、表向での假女房、近所の弘め人別も、女房と印形据ゑたるお早、現在おれがあの屋根から、聞くとも知らず祝言の、杯してはこれ間男。

はや　イエ〳〵、それもこなさんが、長五郎さんへ雇ひ女にわたしをやり、お照さんとの駈落ちゆゑ、思はぬわたしも疑ひ受け、乳呑みを抱いてお前の行くへ、尋ぬる爲にわたしは人質。生れもつかぬこの痣は、なんぼわたしが樣な者、よもやと思へど思案の外、そこを思つて此やうに、手づから顏へ付けた痣。

長吉　口賢く云ひ拔けても、それも大方男へ心中、顏へ付けたる痣であらうワ。

はや　エヽ、こなさんもそれ程までに

長五　おれに於てはこれ程も、曇り霞みはなけれども、長吉われがあの內に、お早を隱まひ置いた內、いたづらがましき事あれば、二人は畜生。

長吉　そりや又なんで畜生だ。

長五　聞けば二人は兄弟と、親の口からたつた今

はや　よし兄弟でも親子でも、誓ひを立つて長吉さんに

長吉　添臥しせねば、なんで畜生。
長五　畜生ならぬ長吉でも、假の女房のこのお照。
てる　わたしも主に何のマア
甚兵　兩方一ッ寢せぬならば、不義、女敵とも云はれまい。
長吉　でも女から頼みし夫。
長五　はや互ひに枕交さねど
てる
長五　武士と見込んで頼まれし
長吉　刀の手前。
長五　女敵を討つたる跡にて、手に入る一軸
長吉　龍虎の二幅は揃へておれが
長五　イヽヤ斯く云ふ長五郎。
長吉　イヤ長吉が歸參の種に
長五　われが一軸此方へ渡せ。
「トト兩人互ひに持つたる一軸を引合ひ争ふ。お早お照心遣ひ。甚兵衛この中へ入つて

甚兵　武士の意地づく尤もながら、云はゞ互ひに雇はれ亭主。二人の女が思ふ男は、どこにどうして居をるやら、知らぬが佛の今夜の逮夜に、産土祭り。どちらへ轉けても見遁しに、この甚兵衞が預かりました。長五郎さん、長吉、おれに任せて

長吉　こなたの挨拶。わしらはどうでも

長五　この長五郎も假初めの、舅と云うたこなたの頼み、今宵の所は

甚兵　それではわしも落付いた。かたの付くまで見苦くとも

長五　こなたの內に足を留め、それといふのも小立の行くへを

ト小立を見せる。

てる　そんならあの子の

はや　わたしが連れて

甚兵　來たと云うても迷ひ子に、ならぬ乳呑み子觸れ書の

長吉　杏葉牡丹の紋付は、人をあやめた

ト長五郎へ思ひ入れ。お早留めて

はや　思はぬ間違ひ疑ひを、受けぬその間に、ちよつと着換へて

ト風呂敷包みを差出す。長五郎取つて

長五　大方こなたの着換への浴衣。

はや　行丈揃はぬ女子の着替へ。

甚兵　われも今夜はお祭りだけに

長吉　お照が着替へのこの浴衣、似合はぬまでもこれなりと

ト駕籠に付けてある風呂敷包みを取る。

てる　派手な模様の菊蝶と

はや　扇蝶とのこの浴衣。

長吉
長五　着替へて後に

甚兵　アヽコレ、お客は二階の蚊帳の內、また長吉は今夜は店の、二階に吊つた紙帳で夜とともに

はや　云はゞ思はぬ間違ひも、わたしら二人が賴みし女夫。

てる　それが遺恨と龍虎の爭ひ。

長五　その一軸を取り得るか。

長吉　また女敵と討たるゝか。

甚兵 討ち討たるゝは武士の常。
はや たとへの通り討つ者も
長五 討たるゝ者も土器の
てる 砕けて元の土くれと
長吉 割れては後に
甚兵 コレ。

ト茶碗を二ツ差出す。長吉、長五郎取つて兩人一度に

長吉
長五 人も、茶碗も

ト打付けて割る。甚兵衞手早く割れた茶碗を取つて

甚兵 そこを一番、瀬戸物やきつぎ
はや
てる 割れた茶碗を
長吉
長五 ついで見せるは
甚兵 細工は流々。

ト引窓の綱を引く。戸は明く。皆々顏見合せ思ひ入れ。長吉、長五郎詰寄るを、甚兵衞また綱を引く

今度は引綱違うて反古で貼つたる障子を引く。思ひ入れあつて

仕上げを見さつしやりませ。

ト唄になり、長吉は風呂敷包みと一軸を持ち、下の二階へ上り、紙帳の内へ入る。長五郎も一軸と包みを持ち、上の二階へ上り、蚊帳の内へ入る。お照は暖簾口へ入る。跡合ひ方、お早、甚兵衛殘る。

二階の簾下りる。

ア丶、もう暮れたか。コレ、その二階に瓦燈があるから、それを灯すがいゝ。コレ、長吉、八幡様の提灯も灯してくれろよ。

はや 下へも行燈を灯しませう。

ト お早、行燈へ火を灯す。

甚兵 さうしてくれろ。

この中あの山留木橋にて、長五郎を

ト お早へ思ひ入れあつて

そんならあの時人違ひ、よもやと思つた長五郎が、蘇生して來たのか。何にしろその時の

ト此うち お早、卓の上に燈明をともし、萩薄、片脇より團子の盛りたる三寶を持ち來り備へる事。

甚兵衛手に入りし守り袋と莨入れを出す。その時莨入れの中より扇蝶の簪落ちる。

はや　長五郎さんより預つた、あの幼な子を見失うたはわたしが過り。殊に氣早な長五郎さん、お照さんの事につき、若し刄傷に及ぶ時は、討たるゝ男はわたしが兄さん、それを知りつゝその儘に

甚兵　コレ〳〵、何も苦勞にする事はない。これを讀んで見やれ。

ト守り袋を出す。お早取つて

はや　アイ。こりや守り袋でござんすな。

甚兵　ちよつと讀んで見やれ。

はや　相州箱根の住山崎與次兵衛倅與五郎。

甚兵　ヤ、ナニ與五郎、アノ、山崎氏の

はや　アイ、さう書いてあるわいな。

甚兵　ヤヽヽヽ、そんなら討つたる侍ひは、アノ山崎の與五郎なれば、入替へ置いた實の倅め。

はや　エ、入替へ置いたと云はしやんすは

甚兵　サ、入替へ置いたと云ふのは……アヽ、何よ、アノ山崎といふ質屋へ入替へて置いた、コレ〳〵この簪。

ト見せる。お早取上げ見て

はや　ヤ、こりやコレ、わたしが去年まで、差して居たこの簪。

甚兵　ドレ、見せろ。

トよく〳〵見て

成る程こりや、われが差して居た扇蝶の紋付きの簪。それが廻り〳〵て、あの品川の丸本で

ト思ひ入れ。お早猶々合點の行かぬ思ひ入れ。

はや　モシ、父さん、その簪はどうしてマア、お前持つて居なさんすえ〳〵。

ト甚兵衛思ひ入れあつて

甚兵　その簪の事はどうも滅多に……コレ〳〵娘、われも又この簪を、去年おれと道中した時まで差して居たが、それをどうして、今更其やうに

はや　サ、最前もお前にお話し申しました、云ひ交したるそのお方へ、後の證據と渡したは。モシ、その簪でござんすわいな。

甚兵　コレ、娘、誠にわりやこの簪を、その暗がりで知らぬ男に

はや　アイ、そのお方を尋ねんと、今に苦勞を

甚兵　逢はせてやらう。
はや　エヽ、尋ねる男に。
甚兵　逢はせて遣らうがその代り、おれが回向を
　　ト出刃を取つて
　南無阿彌陀佛。
　　ト死なうとする。お早執付き
はや　コレ、氣が違うてか。なんでお前は
甚兵　氣も違はいで、甚兵衛は、好い年をして畜生道へ。
はや　エヽ、そりや又なんで
甚兵　われと寢たゆゑ。
はや　エヽ。
　　ト大きに驚く。好みの合ひ方。
甚兵　馬鹿な話しも身の懺悔、去年てまへと連立つて、戸塚の宿の泊りぞと、思つたその夜は境木の、地藏祭りて旅人の込合ひ、宿を尋ねに短か夜を、彼處や此處と夜を更し、殊にてまへも見失ひ、

野宿の床と地藏堂、入つた所に臥したる女、小つ耻かしいが無理口說、その暗やみが因果の始り、女の方からくれたる簪、紋は似寄りと云ひながら、よもや娘のてまへとは、思はなんだが今の話し、それぢやァ違はぬ親子のどれ合ひ。必ず人に沙汰するな。南無阿彌陀佛。

ト死なうとする。お早留めて

はや　イエ〳〵、そりや違うた。よもやお前に其やうな、悪いたづらが。サ、なんぼ闇でも暗がりでも、お年の上の父さんと、若いお方と手の觸りも

甚兵　イヤ〳〵、そりや親と聞き、手前が庇ふ心でも、拔差しならぬこの簪。殊にその夜に耻かしい、どうしたはずみか若い女を、いたづらしたは

ト お早を見て

何たる因果だ。

はや　そんならどうでも簪の、證據があるゆゑ親と子が

甚兵　畜生同然、人間の、皮を被つた犬猫だ。娘、放して、殺してくれろ〳〵。

はや　イエ〳〵、滅多に殺されませぬ。お前にばかり畜生の悪名付けぬ。わたしも一緖に。どうで死なねばならぬ譯。あの預かりの幼な子を失ひ、殊に添臥しせぬけれど、長五郎さんのお心ざし。優

しいお方と心の迷ひ、亂れ心も有る時は、その簪を渡したる、お方へ立たぬ事ゆゑに、わたしもお前と冥途の道連れ。

甚兵　それでは却つて親子の心中。併し忰の長吉が、連れて歸つた彼の女、橋本氏の娘のお照、云はゞわれとは乳兄弟、彼の子の乳母は今夜逮夜の

はや　あの母さんの育てし娘御。さすればわたしがお主筋。

甚兵　以前は若黨竹右衞門、おれは山崎、女房は、橋本氏へ乳母奉公。今では六十近き身の、死恥無きやう幸ひ爰に

ト吳服葛籠の上にある四ッ手文庫に包みし品々を取つて

祭りの誂へ派手向の、これを着替へて黑油、いづくの誰が染めしやら、頭の雪も今よりは、墨黑黑と墨染め、法衣にあらぬ派手男。

ト最前權七が置いて行きし鬢盥の内より黑油の入りし蛤貝を出す。

はや　わたしも親と心中の、惡名立たぬ其やうに、眉毛落してこの髷も、老けた姿に見せるのは、丁度幸ひ誂への、帶も着類も年增風、今宵逮夜の母さんの、姿となつてお前と一緒に

甚兵　それで世間の口塞ぎ、若やぐ親に

はや　老けたる娘、顔を直して

ト件の紙包みの帯着類を出し、在合ふ鏡臺、鏡、剃刀、砥石を出し、鏡を見て

甚兵　生れも付かぬ顔の疵。

はや　長五郎さんに連れられて、女夫にあらぬこの身の潔白、それが却つて情ない、思はぬ親子の心中

と

甚兵　浮世の人の口の端に

はや　かゝりや繋がる

甚兵　娘と親の

ト兩人顔見合せ

はや　思はぬ惡縁

甚兵　コリヤ。

ト思ひ入れ。これより獨吟になり、お早剃刀を出し砥石にて合せ、甚兵衛鏡臺に向ひ行燈を照し、黒油を出し髪を塗る事。この時二階の簾上がる。長吉搔卷を着て、軒口に八幡宮といふ祭りの丸提灯吊しあり、長五郎これも古き搔卷を着て、瓦燈に火を燈し、蚊帳の前にて兩人とも下を窺ひ居て

長吉　ばらしたと聞く長五郎、思はず爰へ來たからは、そんなら正しく人違ひ、今宵の内に討つて捨て所持する一軸奪ひ取つて、二幅揃へて本領安堵、その時こそは養子親、家名も南方十次兵衞。

長五　あの長吉が所持する一軸、不義に事寄せ切つて捨て、一軸手に二幅對、龍虎揃へば本地へ歸參、その時こそは南與兵衞、改名なして先祖の名跡。併しこの程不思議にも、手に入る一卷、改むれば、山崎氏の、こりやこれ系圖。

ト系圖をちよつと出す。

長吉　實の親仁の甚兵衞が、聞かぬその間にばつさりと

長五　假の舅に知らさぬやうに

長吉　白刃と

長五　白刃の

兩人　互ひの勝負。

長吉　この一軸も目立たぬやうに

長五　隱す所は

ト長五郎一軸を蚊帳の内へ入れろ。長吉一軸を紙帳の内へ隱す。

はや　今宵限りの
甚兵　親子の心中。
はや　未來永々
甚兵　これが迷はで
長吉
長五　ヤ。

ト お早、行燈を吹消す。

はてなア。

ト思ひ入れ。チヨンと下家へ簾下りて二人を消す。又獨吟になり、左右の二階にて、両人一腰を取出し、提灯にて白刃をよく〳〵見る。此方も瓦燈にて見る事。唄切れる。両人一度に燈火を吹消す。時の鐘、凄き合ひ方。長吉、長五郎、窺ひ〳〵下りて來り、長五郎は下の二階へ窺ひ行き、長吉は上の二階へ窺ひ上がり、探り見て蚊帳の吊り手、紙帳の吊り手、双方一度に切つて落す。いつの間にか此うちに両方とも人在る様子。さてはと両人思ひ入れ。蚊帳と紙帳を突き通す。内にて苦しむ様子にて蚊帳と紙帳を被りし儘両方一度に、左右へ見事に飛び下りる。両人も續いて飛び下り、双方探り寄つて又ぞろ突く事。爰にて長吉、長五郎、たぢ〳〵として後合せに脊中當つて、悑りして

長吉　ヤ、手應へしたる蚊帳の內
長五　さう云ふ聲は長吉か。
長吉　濡髮、われも存命か。
長五　助け置かれぬ。
長吉　われも此世の

ト立廻り。兩人の搔卷脫げる。長吉は菊蝶を大きく染めたる派手なる浴衣。長五郎は扇蝶を染め出したる好みの浴衣。兩方とも女物にて派手なる裏襟、廣袖仕立にて、きつと見え。これより華やかなる鳴り物。兩人タテよろしく、トヾ奧よりお照、行燈を提げ、つか〳〵と出て、この體を見て

てる　お二人、待つた。
兩人　邪魔すな、女。

ト引退ける。お照在合ふ二枚折の屛風を取つて二人を留める。兩方より蝶鉸を切つて二枚に分けるお照屛風の片しを取つて二人を留める。尤もこの屛風に菜種に菊蝶の模樣ある扇の地紙、貼交ぜある

てる　マア〳〵、待つて下さりませ。

トきつと抑へる。この時蚊帳と紙帳の內にて

はや　手に入る一軸濡髪さんへ
甚兵　倅長吉、互ひに仲好う
二人　ヤ、さう云ふ聲は
ト蚊帳を破り甚兵衛、紙帳を破り、お早、倅の一軸を持ち、甚兵衛は大縞の浴衣、緋縮緬の襦袢、頭も黒く若やぎし體にて手負ひ、お早は髪も亂れ、眉毛を落し、歯を染めし體にて、衣裳を着替へ、前帯の女房の形、これも手を負ひ、一軸を持つて、よろぼひ出る、三人見て
てる　ヤヽヽ、お早さんは手を負うて
長五　甚兵衛とても深傷の様子。
長吉　さては長吉。
長五　この長五郎。
てる　お二人さんに代つて覺悟の
はや　死ぬる臨終にこれなる一軸。
甚兵　手柄は互ひに、めい〳〵分つて
トお早は持つたる一軸を長吉へ差出す。甚兵衛は長五郎へ一軸を差出す。兩人取つて

長吉　心盡しの

長五　二人に免じて

ト兩人白刃を納める。

甚兵　それでは割れた茶碗も元々。元の姿に若やぎしは、濡髪殺してこの一軸、取得んものと思ふ惡念報い來て、手に掛けたるは、主人の子息の與五郎どの。

はや　わたしが母は橋本の、お照樣に乳を上げし、乳母が夫はこの父さん、お照樣こそわたしがお主、若し女敵と過ちあらば、代つて死ぬる身の覺悟。以前の母さん、乳母の姿をその儘に

甚兵　親と娘が云ひ合せ、昔の夫婦の形をその儘、以前の幻竹右衛門。悴にあらぬ山崎の、與五郎樣とはこなたの事、證據の守り。

ト差出す、長吉取つて

長吉　この長吉を與五郎とは

甚兵　以前勤めた私しが、こなたの誕生なされた時、わしが悴と入れ替へ子。その天罰が廻り來て、あの宿屋にて着類の間違ひ。濡髪なりと思ひ詰め、殺したお方は與五郎どの、よく／＼思へば實の餓鬼。我が子を我が手に殺しても、その名は與五郎、主人の御子息。退引ならぬ主殺し。さはさりな

がらお家の系圖。
長吉　すりや、長吉は誠の與五郎。
長五　與五郎ならば六夜の夜、不思議に拾ひし山崎の、系圖はこなたに
　　　　ト出して渡す。長吉取つて
長吉　辭退に及ばず、然らば一卷。
甚兵　それさへあれば、お家の跡目。親は斯樣に若やぎて、この長吉が身に代り、長五郎どのに討たる
　　る覺悟。
はや　わたしが所持の簪の、譯を聞くほど
甚兵　その夜の男は慥かにこなた。覺えがござるか。
　　　　ト右の簪を差出す。長五郎見て
長五　それぞ戸塚のわざくれ事。その時女が渡せし品、紋は即ち扇蝶、今に行くへの知れざる女。
はや　ヤ、、その簪を御存じあらば、その夜にその品渡せしわたし。すりや此やうに戀ひ慕ひ、貞
　　女を立てし殿御といふは
長五　暗がり紛れに女の間違ひ、尋ね逢ひなば女房と、思ふ女は

はや　ほんにお前で

　　ト お早、長五郎悔りする。お照こなしあつて

てる　すりや、簪の證據より、顏の知れざるお方がどうやら

　　ト長吉投げちらしある屏風の張交を見付け

長吉　ヤ、この張交の地紙の模樣、菜種に狂ふ蝶々の、女扇は、慥かにいつぞや

　　ト よく〳〵見て

　コレ〳〵、これだ。菊を直して揚羽の蝶に

てる　エヽ、わたしが覺えの、扇がどこに

長吉　覺えがあるか。

　　ト屏風を見せる。お照見て

てる　こりやこれわたしが暗き夜に、殿御へ渡せし扇の模樣。

長吉　そんなら去年境木の、地藏祭りのその夜半に

　　ト お早長五郎もこなし。

長五　此方も境の地藏堂。

はや　お顔は見ねど心の誓ひ。
てる　證據に渡せし菊蝶の
長吉　女扇は失つても、廻り〳〵て張交に
長五　交かへしたる女夫と女夫。
はや　尋ねし殿御は矢ッ張りお前。
てる　嫌うた男はわたしが尋ぬる
甚兵　菊の扇の長五郎、長吉。
はや
てる　お前であつたか。
長吉
長五　こなたであつたか。
甚兵　知らぬ事とて女敵、間男。
はや
てる　危ない縁で
長吉
長五　あつたなア。
ト思ひ入れ。お照散ばりし小立を取上げ
てる　ヤヽヽ、殘し置きたる幼な子の、小袖が爰にあるからは

長五　その幼な子はお早が最前

はや見失うたはわたしが過り、その云ひ譯は命一ツを

長吉　して、幼な子とは其方の腹に

てる　一度契りし情のおどもり。お前の實子。

長吉　ヤヽヽヽ、さうとは知らず僅なる、金に目がくれ預かつて、殺した餓鬼は、ホヽヽホイ。

てる　すりや、その幼な子を、アノこなさんが

長吉　現在親が

ト思ひ入れ。この時隠し置きたる器の内にて幼な子頻りに泣く。長吉駈寄つて蓋を取る。息吹返せし體。長吉思ひ入れあつて

まだ死斷らぬも恩愛の、親子の情愛。コレ、この子であらう。

ト お照へ渡す。

てる　可哀や今まで

ト抱上げてこなし。この時佐渡七、權九郎、囁き〳〵出て來り　門口に窺ふ。

甚兵　互ひに知れた二女夫、逢うたる上は

はや　暇もらうてわたしは冥途へ。
長五　男やゝめの長五郎、今より家名も南與兵衞。
長吉　南方氏の　某も、今よりしては山崎與五郎。
てる　以前の馴染に兄弟同然。
長五　世話に碎けて長吉、今から
長吉　念頃あひの長五郎。
兩人　互ひに仲好う。
はや　睦し月の月魄も
甚兵　今宵の名月、めでたうこの上。
長吉　誠の親の敵は倉闇。
長五　こなたの腰押し、おれも助太刀。
甚兵　丈左衞門は未明の出立。
はや・てる　必ずともに
長五・長吉　合點だ。

ト裾をからげる。

權佐　先刻の女を

トかゝるを長五郎、長吉兩人が押へる。この時空へ滿月現れる。この月明りにて引窓の障子の文字、ありありと見える思ひ入れ。

長五　ヤ、月の光りにありありと、見ゆるは、慥かに一軸に

長吉　添へてあつたる正しく折紙。

てる　外にも怪しき反古の文字は

はや　丈左衞門と、アレアレアレ、ありあり見ゆるは

甚兵　綱を拂つて

長吉
長五　詮議の手がゝり。

權佐　それを

トかゝるを立廻つて兩人一度に拔くより早く綱を切る。この機みに件の障子ばつたり落ちる。兩人見て

長五　さてこそ折紙。

長吉　丈左衛門が悪事の密書。

ト　お照見て

てる　橋本氏を毒害とは、父さんまでを倉岡が

長吉　重なる遺恨は丈左衛門。

長五　片時も早く

ト両方へ行かうとする。お早思ひ入れあつて

はや　死ぬる臨終に、せめて女夫の

甚兵　娘が願ひ。

長五　未来で添はう、女房お早。

はや　嬉しうござんす。

甚兵　それを土産に

トお早と顔見合せ思ひ入れ。

てる　モシ。

ト寄るを

權佐　われを代りに

トかゝるを長吉、長五郎兩人を捕へ緊上げる。甚兵衞、お早「ムウ」と苦痛の思ひ入れ。これを木の頭。赤子泣く。お照いぶり付ける。これをきざみにて、よろしく拍子

引付けると捨て鐘、波の音にてツナギ。引返し。

幕

本舞臺、向う打拔き、遠目に見たる海面、よき所に大船大分、萱すゝきしげり、鈴ケ森の景色。爰に上の方へ卒塔婆をたて、お關、網代笠、黑の衣にて、後向きにて木魚を打ち居る。下手に旅乘り物を擔がせ、半天、股引、大小、旅形の若黨四人。紺の看板、柿の脚絆の旅中間四人、雲助五人、荷物その外持ち鎗、挾み箱、合羽籠、その他侍ひ大勢附添ひ、行列三重、時の鐘、波の音、鷄の聲、夜明の體にて幕あく。

若一　各々、もう何時でござるか。

若二　最早夜明に間もござるまい。

若三　隨分ともに道中筋を

若四　心付けて、御合點か。

皆々　心得ました。

若一　コリヤ〳〵、人足ども、荷物に遲躊なきやう、大切に持參いたせ。

人足　かしこまりました。

皆々　お立ち〳〵。

ト乘り物を舁上げ、上の方へ行かうとする。件のお關、卒塔婆を持ち、ひさくをふつて乘り物へさし寄り、物乞ふ體。

若一　慮外な乞食め。下がれ〳〵。下がらぬか〳〵。

ト引退けんとする。お關立廻りあつて

若二　エヽ、下がれといふに

皆々　慮外なやつの。

ト皆々圍ふ。乘り物の内にて

丈左　者ども、しづまれ。

皆々　ハアヽ。

ト駕籠を据ゑる。戸を開かせ丈左衞門、内より思ひ入れあつて

丈左　慮外ものとは、この修行者か。

若一　左樣でござりまする。お駕籠へ近よる乞食めゆゑ、引退けますれば

三人　手向ひ致す無禮者。

丈左　笠取捨てゝ、面あらためろ。

若黨　ハツ……乞食め、笠を

ト兩方よりかゝる。立廻つて笠は落ちろ。藁で束ねしそぎ尼のかづら。

彼奴めは女の

皆々　修行者だな。

ト丈左衞門、よく〳〵見て

丈左　女は正しく山崎氏の娘のお關、ハテ、變つた形で

せき　お目見得いたすも面ぶせ。倉岡樣、お恥かしう存じまする。

丈左　すりや、只今では尼となられて

せき　親と夫の菩提の爲、その上悴も姑も、非業の刃に是非もなう、髮もおろして墨染の、この修行

者に倉岡樣、一錢二錢のお手の內、合力なされて下さりませ。
丈左　すりや某に手の內願ふか。以前のよしみに合力は
皆々　とらしてやらうワ。
せき　倉岡樣が修行者へ
丈左　手のうち取らさう……その手の內は
　　ト近寄つて拔きかける。お關立廻りあつて、持つたる卒塔婆を丈左衞門が目先へ突出す。
皆々　こりや手向ひか。
せき　全く手向ひ致さねど、倉岡樣のお手の內、この戒名の佛へ何とぞ
　　ト卒塔婆を持て立ちかゝる。丈左衞門立廻つて、よく〱讀んで
丈左　俗名三作……すりや、仕置になつた
せき　夫の戒名、裏に記せし
　　ト引かへして見せる。丈左衞門見て。
丈左　劍消玉貌信女、應永三年八月中の六日……卽ち今日。この戒名は何者のだ。
せき　ハイ、卽ち私し。

丈左　ヤ。
せき　俗名即ちこの關が、お前のお手にかゝるは承知、お待ち申してこれまでの、親と夫が側杖に、共に死にたき身の願ひ。命を水の泡とのみ、刃に消ゆる草の露、蟲もあはれの貰ひ泣き、目には居花の野邊送り、あなめのむかし思ひやる、死なぬ先からこの卒塔婆、建て置きましてわたしがお願ひ、不便と思うて倉岡樣、勝負なされて下さりませ。
丈左　すりや某を、敵と存じて討つ心か。
せき　天下の成敗是非なくも、重ね〴〵の親夫、とてもの事に私しも、あなたのお手に
丈左　かゝる所存か。
せき　いかにもお手に
ト窺ひ寄つて、持つたる卒塔婆、仕込みにて、手早く引ぬき、倉岡が眉間を切り破る。
四人　曲者、やらぬ。
ト一度にかゝり、立廻りにて墨衣をひきぬく。下は白無垢の四天へ、南無阿彌陀佛と墨書して、淺黃のしごきにて腹帶して、白股引、りゝしき形になり、切り立て〳〵、丈左衞門へ立ちかゝる。兩人立廻りあつて

丈左　切り捨てろ。

皆々　ハッ。

ト双盤になり、丈左衞門はじめ皆々、ひとまくしに入る。若黨四人拔きつれてかゝる。お關よろしく切りちらす。これより段々お關へかゝり、立廻りあつて、皆々手を負ふ。丈左衞門鉢卷襷りゝしく、槍を持つて突いてかゝり、鳴り物變つて兩人よろしく大タテあつて、トゞお關危く見える。この時禪のツトメ、向うより長吉、長五郎、りゝしき形にて走り來り、丈左衞門を引退け、お關を圍ひ

長吉　姉者人か。

せき　さういふお前は

長吉　知らぬ事とて入替へ子、誠はこの長吉は山崎與五郎、親の敵の丈左衞門。

長五　その助太刀は長五郎、親の家名を南與兵衞。

兩人　天命のがれぬ、覺悟しろ。

丈左　小癪な奴の。

せき　親と夫の

ト切つてゆく。立廻りあつて丈左衞門を一太刀切り、立ち身にてお關ゑぐる。

長吉
長五　首尾よく本望。

せき　思ひ知つたか。

皆々　動くな。

ト旅侍ひ大勢取巻く。

先づ今日はこれぎり、めでだく。

打出し

大正十四年六月十五日印刷
大正十四年六月十八日發行

『大南北全集第八卷』

非賣品

校訂編纂者　坪内逍遙
　　　　　　渥美清太郎

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　上村新輔

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂

